

二宮俊博 遺稿

津阪東陽『杜律詳解』全釈

二宮俊博と彼の研究に携わったすべての人へ

前書きに代えて

二〇一八年新年、帰郷していた従兄の二宮俊博から仕事を依頼されました。

大学で発表した「津阪東陽『杜律詳解』訳注稿」を加筆修正し二冊から三冊にまとめて発刊するための元データを作ってほしいというもので原稿を見せてもらいましたが素人にはかなり難解なものでした。

子供をもたなかった自分が生きてきた証として、研究してきたことの集大成として、九州の有限会社中国書店から出版し世に残したいというようなことを聞かされました。スケジュールとしては四〇五年かかり、遅くても二宮俊博の七十歳の定年退職までに完成させるということになりました。

その締め切りの時期が私が印刷業を引退しようと考えている時期と奇しくも一致しており、この仕事私が手掛ける印刷の最後の仕事になるのだと思いました。そして、逆に言えばこの仕事が終わるまでは印刷業を辞めるわけにはいかないわけで「津阪東陽『杜律詳解』訳注稿」の発刊は私の目標にもなりました。

有限会社中国書店の川端社長と二宮俊博の後輩で社員の原さんにも挨拶をさせていただきデータの作り方を相談しさっそく仕事にとりかかりました。

普通のパソコンでは変換できない文字、例をあげると「宐」や「鄂」という異字体が大量にでてきて、それを一個一個作字していくという本当に困難な作業ですが、こんな大変な仕事を信頼してまかせてくれることが誇らしく嬉しくもありました。

ところが、一か月後に二宮俊博の身体を腎臓を原発とする癌の転移により下半身不随になるという病魔が襲いました。

二宮俊博の病氣を知ったときに私の脳裏には学生のときに読んだ庄司薫の小説「白鳥の歌なんか聞こえない」の一部分が蘇りました。その小説の中である女性が彼女の祖父の世話をするのだけど、祖父は病気で死に瀕していました。彼は博識で英独仏露西語などの西洋の主要言語はもちろんラテン語や漢文、パリ語などの本を原書で読み人類の英知をその頭脳の中に集大成として持っていましたでしたが彼そのものが作品であり知の集大成であるけれど彼が死ぬことにより全てが無に帰してしまう。彼の知識が後生に残らないことに孫娘の彼女はやりきれない思いをする。というものでした。

私の中でその小説の老人と二宮俊博が重なってみました。でも、二宮俊博は自分の研究を自分の頭脳の中だけに留めずに本の形で後生に残そうとしていました。形となって残るか無に帰してしまうのか。なんとか形に残して欲しいと思いました。ただそれは時間との勝負でしたが残された時間は限られ、しかも厳しい制約がついていました。

癌摘出手術後「自分の仕事は頭さえしっかりしていればやっていけるから」とベットの上で執筆活動が続けて本は予定どおり出版するつもりでしたが、手術後は座ることすらできなくなってしまう、思っていた以上に辛い生活を続けることになってしまいました。見舞いに行ったときに「この不自由な身体で五年生きるより余命一年で身体が普通に動く状態にいるほうがどれだけいいか」と悔しさを滲ませていました。

それでもなんとか出版までこぎつけようと頑張って「津阪東陽『杜律詳解』訳注稿」の校正を続けていたのですが、二〇一九年四月十二日力尽きてしまいました。

この本は、そんな二宮俊博の研究成果のほんの一部です。二宮俊博はこんな中途半端な形で本になることを望んでいなかったのは私も承知しているのですが、彼の研究成果が形を成さず無に帰してしまうことが悔しくてやりきれなく、どうしても本という形にしたいくて一周忌にあわせて最初の部分だけですが印刷製本をしました。

ほとんどの方には難解すぎる研究書だとは思いますが、二宮俊博が生前お世話になった方々にはぜひ手にとって彼を偲んでいただけたらと思います。

令和二年四月十二日

二宮 幸 夫

津阪東陽『杜律詳解』全釈

はじめに

津阪東陽（宝暦七年「一七五七」～文政八年「一八二五」）は、伊勢国三重郡平尾村（現在の四日市市平尾町）に郷土の子として生まれ、名を孝緯^{もとひろ}、字を君裕^{あきよ}といい、二十歳の頃、京に上つてほぼ独学で古学を究め、後に藤堂家に仕えて藩校有造館創設に尽力し、その初代督学となった儒者である。齋藤正和氏の労作『齋藤拙堂傳』（三重県良書出版会、一九九三年）に序文を寄せられた今鷹眞氏は、「津藩の学問の最大の特徴は文学に対する造詣の深さにある。それは研究業績と詩文創作の両面で充分に示されているといつてよいであろう」と述べておられるが、その礎を築いたのが東陽であった。

その著『杜律詳解』上中下三巻は、明・邵傳^{しょうふん}（字は夢弼^{ぼふひつ}）の『杜工部七言律詩集解』を底本とし、そこに挙げる盛唐の詩人杜甫（七一二～七七〇）の七言律詩百五十九首のうち百三十八首について、宇都宮由的（号は遯庵、寛永十年「一六三三」～宝永六年「一七〇九」）の増注を始め広く諸書を参考にしながら、漢文による注解を施したもので、天保六年（一八三五）に有造館から刊行された。現在では黄永武編「杜詩叢刊」第四輯（台湾大通書局印行、一九七四年）にも収められている。

訳詩集『鶯の卵』でも知られるように唐詩に造詣が深く、とりわけ杜甫を敬慕した歌人土岐善麿は、つとに

「儒家と日本語」(『ことは風土記』所収、光書房、一九五九年)や「日本で作られた杜甫文献」(岩波「文学」一九六二年十二月号、後に『杜甫への道』光風社、一九七三年に収録)において、この書の価値を広く世に紹介し、後者のなかで、「中国における各種の注解書とはまた別種な、著者の鑑賞や識見のじゅうぶんにみられる点、講話の筆録として説述の懇切を極めた点、そして中国に対しても恥かしくないほどすぐれた達意の漢文で書かれている点、また原作の語句にとりどころさえも国語的表現の適切で、かつおもしろい点等、なかなか興味があり、いわゆる巻を措くあたわざるものがあつて、中国の諸文献と併せ読めば、いつそう益を得るところが多い」と述べている。ちなみに、東陽が附した和訓については、土屋泰男氏に「津阪東陽著『杜律詳解』の和訓に関するメモ」(大修館「漢文教室」一三二号、一九七九年)があつて五十音別に並べられ、検索に便利である。更に、残念ながら全巻完結せずに終わったものの吉川幸次郎博士の大著『杜甫詩注』第二冊(筑摩書房、一九七九年)の「はしがき六」には「独自の資料と見解に富む」と述べられ、以降七律の注にその説が折々引かれており、黒川洋一氏も「その鑑賞のきめの細やかさにおいて、唐土の注釈書にはない独特の味わいを備え」た「江戸時代における杜律研究の精華」であるとして高く評価されている(『杜甫の研究』第五章「日本における杜詩」、創文社、一九七七年)。

この他、中国では鄭慶篤等編著『杜集書目提要』(齊魯書社、一九八六年)に採録され、そのなかで「この書は上・中・下三卷に分かれ、目録は無く、大体年代順に配列してある。詩題の下にひとしく題解があり、詩の作られた時期や場所を考証したり、史料や典故を引証したり、作詩の趣旨を明らかにしたりしている。詩句の間に注を挟み、詩末に多く考辨を附している。この書は題を〈詳解〉と称しているものの、その注釈は繁雑でなく、詳略が当を得ており、注解には多く他人の語を引いているが、著者の見解もまじえている。詩末の考辨は、前人の誤謬を駁し、ままた新見がある」とし、「この本は海外で作られたものだが、援引している注や評はとても豊富で、趙次公・邵宝・胡応麟・朱鶴齡・仇兆鰲・顧宸・袁枚といった人々の語には、どれもきちんと基づく所があ

る」という。

津阪東陽の数ある著作のうち、『杜律詳解』を読む上で是非とも参看すべきものとして、池田四郎次郎編『日本詩話叢書』第二卷所収の『夜航詩話』六卷（原本は文化十三年自序、天保七年刊）がある。また同じく『日本詩話叢書』第三卷所収の『夜航余話』二卷（原本は天保七年刊）については、『新日本古典文学大系65』『日本詩史 五山堂詩話』（岩波書店、一九九一年）のなかに揖斐高氏による校注が収められている。その他、漢詩文に関する著作として、『古詩大観』二卷（文政十三年刊。汲古書院『和刻本漢詩集成』総集篇所収）、『葛原詩話糾謬』（もと四卷。『日本詩話叢書』第五卷及び『日本藝林叢書』第二卷に二卷を収める）、『薈瓊録』（もと八卷。『日本藝林叢書』第一卷に二卷を収める。これは抄録したものらしい）があり、東陽の淵博な学識と詩文に対する深い造詣とに裏付けられた剴切な指摘は、唐詩のみならず中国歴代の詩や邦人の漢詩を読む上で参考になる点が多い。

東陽の伝記については、その手になる「寿壙誌銘」（国会図書館蔵『東陽先生詩文集』卷之六、五弓雪窓編『事実文編』卷五十二）が基本文献であるが、裔孫にあたる津坂治男氏によって『津坂東陽伝』（桜楓社、一九八八年）が刊行されており、東陽の生涯が細部にわたって明らかにされた。また揖斐高氏の前掲書解説も参考になる。本来は津坂姓であるらしいが、揖斐氏によれば「東陽は津坂と津阪を混用し、むしろ津阪の方を多用した」ようで、『杜律詳解』においても「津阪」と記しているのも、ここでは津阪の方を用いる。

かかる『杜律詳解』については、これまでも少しづつ眼を通して来たが、この度、上冊巻頭の石川之襲「杜律詳解序」及び津阪東陽「詩聖杜文貞公伝」から下冊巻末の嫡子津阪達之跋文、門人小谷薫の「東陽先生杜律詳解後序」に至るまで、逐一訳出しようと思ひ立つた次第である。

このうち、「詩聖文貞公伝」には返り点・送り仮名が施されているが、本稿では省略した。また本文の割注は、「〔 〕」に入れてこれを示した。なお、天理図書館に東陽の自筆本が所蔵されているが、今回は参照すること

ができなかった。言わずもがなのことながら、非才非力ゆえ、典拠がわからぬ箇所が幾つもあり、かつ自ら気づかぬところでもない誤読をしている場合が多いのではないかと恐れている。大方の御批正を賜われれば幸いである。

凡例

本書では、詩題の上に通し番号を附すとともに、下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』（講談社学問文庫）に拠って詩題の下に杜詩の作品番号を加えた。原文に句読点を加え、「メ」は「シテ」に、「」は「コト」に、「凡」は「トモ」にそれぞれ改めた。明らかに訓点脱落していると思われる箇所には、これを補った。また詩句の左傍にとりどころ附されている和訓は、※をつけて改行して示した。書き下し文は、紙幅の都合で省略する。なお、詩題の上には便宜的に通し番号を施した。

目次

| | | |
|---------------------------------|------|---|
| 津阪東陽『杜律詳解』全釈 | はじめに | 1 |
| 石川之襲『杜律詳解』序 | 7 | |
| 津阪東陽『詩聖杜文貞公傳』 | 18 | |
| 001 題張氏隱居(〇〇〇四) | 52 | |
| 002 鄭駙馬潛曜宴洞中(〇〇二六) | 61 | |
| 003 城西陂泛舟(〇〇九一) | 71 | |
| 004 贈獻納使起居田舍人澄(〇一〇二) | 78 | |
| 005 贈田九判官梁邕(〇〇九五) | 87 | |
| 006 送鄭十八虔貶台州司戸參軍(〇一九六) | 95 | |
| 007 臘日(〇一九七) | 106 | |
| 008 奉和賈至舍人早朝大明宮(〇一九八) | 112 | |
| 009 宣政殿退朝晚出左掖(〇一九九) | 124 | |
| 010 紫宸殿退朝口号(〇二〇〇) | 131 | |
| 011 題省中院壁(〇二〇二) | 137 | |
| 012 曲江二首(其一)(〇二〇七) | 147 | |
| 013 曲江二首(其二)(〇二〇八) | 156 | |
| 014 曲江對酒(〇二〇九) | 162 | |
| 015 曲江對雨(〇二一〇) | 171 | |
| 016 因許八奉寄江寧旻上人(〇二一四) | 177 | |
| 017 題鄭縣亭子(〇二二九) | 184 | |
| 018 望嶽 | 190 | |
| 019 早秋苦熱堆案相仍(〇二三一) | 199 | |
| 020 崔氏東山草堂(〇二三五) | 204 | |
| 021 九日藍田崔氏莊(〇三三四) | 212 | |
| 022 至日遣興奉寄北省旧閣老兩院故人二首(其一)(〇二四〇) | 224 | |
| 023 至日遣興奉寄北省旧閣老兩院故人二首(其二)(〇二四一) | 233 | |
| 024 恨別(〇四二〇) | 239 | |
| 025 卜居(〇三八五) | 248 | |
| 026 堂成(〇三九三) | 255 | |
| 027 賓至(〇三九八) | 263 | |
| 028 蜀相(〇三九四) | 270 | |
| 029 狂夫(〇三九九) | 278 | |
| 030 江村(〇四〇一) | 284 | |

杜律詳解序

褻成童好讀杜詩、玩復日久。得其流離之際、舟居病癖、遂致暴卒之狀、自喜以為創見。竊糾舊新唐書及先輩解釋之謬、作年譜補正。後自京師來、客於本藩、携以質之津阪東陽先生。先生莞爾連呼起予。遽取杜律詳解一編授褻曰、此予消遣游業、改潤未完、請與子商推焉。功竣更煩序言。褻唯受而繙之。其於晚年事迹所修補辨駁、多與鄙考合。而視其精粗迥絕、不覺目瞠口啞者久之。夫先生之於褻所謂丈人行也。乃一見辱知、忘年與形、臭味之相投、冥契如此。雖曰偶然、抑亦奇矣。先生學主經濟、著述拄梁。若斯編固屬緒餘、然折衷諸說、發揮言外微旨、詳明的確、卓為千古未曾有之快書。顧褻之淺陋、何敢贊一辭。但狂簡而無隱、苟有所疑、衝口妄陳。先生虛懷如海、不以為忤、有分毫可取、輒采錄之。宜乎博綜衆美、精粹無比也。逮國校之建、先生進為督學。褻以薦釋褐充教職、出入官私、無日不相見。反覆論難、愈久而愈細、歷六春秋而稿始定矣。學中子弟爭求鈔傳、先生因欲開雕以便講習、使褻覆校且序之。時齡已七十、適罹風患、辭職閑居。褻代服贊政、拮据三旬、未暇就業、而先生溘焉易簀。實文政乙酉八月也。既逐次研校至追諡條、引王世貞宛委餘編、王圻續文獻通考二書。餘編稱元紐憐為子美請諡曰文貞、虞集紀其事、見張雨詩跋。元史紐憐傳無載。褻試檢張雨集信矣。元史則有紐璘而無紐憐。璘國初武臣、不與虞張同時。寢疑王氏失考、尋閱錢大昕集、據史斷為別人、以駁王說、且以賜諡係文宗至順元年、亦與續通考不合。於是又爽然自失。嗟乎、當先生在日、獲此以報焉、則欣然首肯、必有所改定。奈何一朝千古、功虧半簣、豈非遺憾哉。令嗣有功、克繼先緒、終歲屹屹、校刊遺著若干種、遂及斯編。褻為申稟刻之學館、以濟先生素志。乃追叙往事、并揭所續得。亦所以終其治命也。

天保五年甲午八月望

津藩督學石川之褻撰并書

杜律詳解序

褻、成童にして好んで杜詩を読み、玩復すること日久し。其の流離の際、舟居^ひ痲を病み、遂に暴卒を致すの状を得て、自ら喜びて以て創見と爲す。窃^{ひそ}かに旧新唐書及び先輩の解^{あやまり}釈の謬^{ただ}を糾^{ただ}し、年譜補正を作る。後に京師^よ自^より来たり本藩に客たり、携へて以て之を津阪東陽先生に質^{ただ}す。先生莞爾として予を起こすと連呼す。遽^{には}かに杜律詳解一編を取りて褻に授けて曰く、此れ予が消遣の游業にして、改潤未だ完からず。請ふ子と商^{しょう}推^{かく}せん。功竣^をらば更に序言を煩はさん、と。褻唯々として受けて之を繕^{ひもと}く。其の晩年の事迹に於いて修補弁駁する所、多く鄙考と合ふ。而して其の精粗を視るに週絶、覺えず目^み瞠^はり口啞する者之を久しうす。夫れ先生の褻に於ける、所謂丈人の行なり。乃^{すなは}ち一見して知^{かん}辱^{じけ}うし、年と形とを忘れ、臭味の相投じ、冥契すること此^{かく}の如し。偶然と曰ふとも、亦た奇なり。先生の学は経済を主とし、著述は梁^{きやう}を柱^{はしら}ふ。斯^この編の若^{ごと}きは、固^{もと}より緒餘に属す。然れども諸説を折衷し、言外の微旨を發揮して、詳明的確、卓として千古未曾有の快書^{みだ}爲り。顧みて褻の浅陋、何ぞ敢へて一辞を贅せん。但だ狂簡にして隠^{かく}す無^くく、苟^{いやく}も疑^うふ所有^{すなは}らば、口を衝^ついて妄^{みだ}りに陳^のぶ。先生は虚懷海の如くして、以て忤^{さか}ふと爲さず、分毫の取る可きこと有らば、輒^{すなは}ち之を采録^{ひく}す。宜^{むか}なるかな衆美を博綜し、精粹無比なるや。国^{こく}校の建てらるるに逮^{およ}び、先生進められて督学と爲る。褻、薦を以て褐^とを積^とき教職に充てられ、官私に出入し、日として相見^{まみ}えざる無^し。反覆論難、愈^{いよ}いよ久しくして愈^{いよ}いよ細かく、六春秋を歴^へて稿始めて定まれり。学中の子弟争つて鈔^{さう}伝せんことを求め、先生因つて開離して以て誦習に便ならしめんと欲し、褻をして覆校し且つ之に序せしむ。時に齡^よ已に七十にして、適^{まさ}に風患に罹^かり、職を辞して閑居す。褻、先生に代り饗政に服し、拮据すること三旬、未だ業に就くに暇^{いとま}あらず。而して先生^{こう}湓^{えん}焉^んとして簪^{さく}を易^かふ。実に文政乙酉八月なり。既に逐次研校して追諡^{おくりな}の条に至るに、王世貞の宛委餘編、王圻^{おうき}の統文獻通考の二書を引き、餘編に称すらく、元の紐^{ちゅう}憐^{りん}、子美の爲に諡^{おくりな}を請ひて文貞と曰ふ。虞集、其の事を紀し、張雨詩の跋に見ゆ。元史紐憐伝には載無し、と。褻、試

みに張雨の集を撿するに信なり。元史は則ち紐璘有りて紐憐無し。璘は国初の武臣、虞張と時を同じくせず。漢王氏の失考かと疑ふ。尋いで錢大昕の集を閲するに、史に拠つて断じて別人と爲し、以て王説を駁す。且つ賜諡を以て文宗の至順元年に係く。亦た統通考と合はず。是に於いて又た爽然自失す。嗟乎、先生の在りし日に當たつて、此れを獲て以て焉を報ずれば、則ち欣然として首肯し、必ず改定する所有らん。奈何せん一朝千古にして、功を半簣に虧くを。豈に遺憾に非らずや。令嗣有功、克く先緒を續ぎ、終歲屹々として遺著若干種を校刊し、遂に斯の編に及ぶ。襲、爲に申稟して之を学館に刻し、以て先生の素志を済す。往事を追叙し、并せて続けて得る所を掲ぐ。亦た其の治命を終ふる所以なり。

(注1) 襲 石川竹厓(寛政六年「一七九四」～天保十五年「一八四四」)のこと。名は之襲、字は士尚、通称を貞一郎といい、竹厓はその号。近江膳所の人。石川丈山(天正十一年「一五八三」～寛文十二年「一六七二」)の七世の孫という。京都

で村瀬栲亭(延享元年「一七四四」～文政元年「一八一八」)に就いて学び、有造館の第二代督学となつた。第三代の督学、斎藤拙堂(寛政九年「一七九七」～慶応元年「一八六五」)に「津藩故督学兼侍読石川君墓表」(『拙堂文集』巻五、五弓雪窓編『事実文編』巻六十七)がある。それによれば「人と爲り勤恪、儀容修整。燕居独处と雖も、凝然として危坐し泥塑人の如し。未だ嘗て人を謾罵せず、人も亦た之を憚る」風があつた。なお、竹厓の詩文集に『果育精舍詩存』四巻と『果育精舍文存』二巻とがあり、三村竹清による筆写本が二松学舎大学附属図書館に所蔵されている。ちなみに前者は、巻一 考槃寤歌(古今體共一百十六首 詩餘二首)、巻二 講暇小業(古今體共八十首)、巻三 絃歌餘業(古今體共一百首)、巻四 春錦手裁(古今體共三十五首)よりなる。

(注2) 成童 八歳以上とする場合もあるが、『礼記』内則の鄭玄注に十五歳以上とするのに従うのがよい。

(注3) 病痺 中風に罹ること。

(注4) 暴卒 頓死すること。ちなみに、『旧唐書』巻一九〇下、文苑伝下、杜甫伝に「甫嘗て獄廟に遊び、暴水の阻む所と爲

り、旬日食を得ず。未陽らいようの聶令じやうれい之を知り、自ら舟を棹ささして甫はを迎へて還る。永泰二年（七六六）牛肉白酒を啗くひ、一夕にして未陽に卒す。時に年五十九」とあり、『新唐書』卷二〇一、文藝伝上、杜甫伝にも「因つて未陽に客たらんとして、嶽祠に遊ぶに、大水遽はかに至り、旬に渉りて食を得ず。県令舟を具して之を迎へ、乃ち還ることを得たり。令嘗て牛炙白酒を饋くるに、大いに酔ひ、一昔にして卒す。年五十九」と、ほぼ同様の記事。

(注5)

自京師来、客於本藩 本藩は伊勢の津藩のこと。拙堂の「石川君墓表」に「年甫はめて十六、来たりて我が津に遊ぶ。巨室藤堂深斎君及び東陽津阪学士見て之を奇とし、交こも先公に薦む。歳ごとに俸米を賜ひ、以て学資に充つ」云々とある。竹厓十六歳というのは文化六年（一八〇九）のことで、『齋藤拙堂伝』七一頁によれば、この時、津に来たのは心越禪師が明国からもたらした古琴の技法を伝承する当地の永田蘿道に就いて学ぶためであったという。当時、津阪東陽は五十三歳。深斎と号した津藩の家老藤堂光寛は五十五歳。この人は藩校創設の際に総督となった。拙堂に「津藩故国老兼国校総教藤堂君墓誌銘」（『拙堂文集』卷五）がある。また先公というのは、中興の英主とされる第十代主藤堂高兌たかみち、当時二十九歳のこと。

(注6)

起予 自分を啓発する。気が付かない点を思いつかせてくれる。『論語』八佾篇に「予を起とこす者は商なり。与ともに詩を言ふ可きのみ」と。商は、子夏の名。孔子より四十四歳年少の学問に秀でた弟子。

(注7)

消遣 暇つぶし。

(注8)

商推 はかり考える。

(注9)

丈人行 自分の父親にあたるような年輩。例えば、『史記』匈奴伝に「漢の天子は、我が丈人の行なり」、杜甫の「李潮八分小篆の歌」（詳註卷十八。以下、杜詩の巻数は清・仇兆鰲纂「二六三八―一七一七」『杜詩詳注』による。なお、『統国訳漢文大成』所収の鈴木虎雄訳注『杜少陵詩集』もこれに同じ）に「豈に吾が甥の流宕ならざるに如しかかんや、丞相中郎丈人の行」と。

(注10)

忘年与形 年齢の隔たりや地位身分の違いを忘れ、懇意につきあう。

(注11)

臭味 におい。同類を言う。『左伝』襄公八年に「今、草木に譬ふ、寡君の君に在るは、君の臭味なり」とあり、杜預の注に「同類を言ふ」と。

(注12)

冥契 語らずとも、気持ちちがびつたり合う。

(注13) 経済 経世済民。

(注14) 何敢贅一辞『史記』孔子世家に「春秋を為るに至つては、筆すべきは則ち筆し、削るべきは則ち削り、子夏の徒、一辞を贅する能はず」と。

(注15) 狂簡 向こう見ずで志ばかりが大きく実行がともなわない。『論語』公治長篇に「吾が党の小子、狂簡、斐然として章を成すも、裁つ所以を知らず」と。

(注16) 無隠 無遠慮に相手の過失をすばずばと指摘すること。『礼記』檀弓上に「親に事ふるには隠すこと有りて犯すこと無し。(中略) 君に事ふるには犯すこと有りて隠すこと無し」とあり、鄭玄の注に「隠は其の過失を称揚せざるなり」と。

(注17) 国校 津城丸之内に設けられた藩校有造館。文政三年(一八二〇)創立。『詩経』大雅・思齊に「肆に成人徳有り、小子造す有り」とあるのに基く命名。なお、有造館は本来、講堂の名称で、文学寮を時習館、兵学寮を整暇堂と称した。ちなみに、〈時習〉は『論語』学而篇に基づく語。また〈整暇〉は『左伝』成公十六年に「日に臣の楚に使ひしたるや、子重、晋国の勇を問ふ。臣対へて曰く、好みて衆を以て整ふ、と。曰く、又た何如。臣対へて曰く、好みて暇を以てす」とあるのに基づく語で、形が整然として精神的に余裕のあることをいう。

(注18) 督学 学長。

(注19) 积褐 褐(身分の低い者が着る粗末な衣服)を脱いで官服を着ること。初めて仕官することをいう。拙堂の「石川君墓表」に「文政三年、国校有造館建てられ、君首に辟に応じ、来りて講官に任ぜらる。時に年二十七」と。津藩の官費給付生となつて引き続き京で学んでいた竹屋が藩校の講師として招かれたのである。

(注20) 開雕 版木に彫ること。上梓。

(注21) 覆校 繰返し校正すること。

(注22) 時齡已七十『津坂東陽伝』によれば、病が再発し督学の職を辞したのが文政七年(一八二四)十月、東陽六十八歳のことである。「寿壙誌銘」には「是の歳(文政七年)冬、旧痾再発するも、既にして蘇するを得。是に於いて顧みるに身は頽齡、方に古希に迫り、且つ享福分を踰ゆ。宜しく適に致仕を請ふべし。仰冀して允さるるを得」という。

(注23) 饗政 教育行政や学校運営。竹屋の『果育精舍詩存』卷三、絃誦餘課に附された天保十年(一八三九)作の序に「文政八年乙酉(一八二五)三月、今公襲封す。七月、津坂東陽先生疾を移して職を辞す。余、乏しきを承け督学の務めを統

べ侍読を兼ね」とあり、拙堂の「石川君墓表」には「文政八年七月、津阪督学職を辞し、君代はりて真となり、文武学政を総督す」というが、前記のごとく『津坂東陽伝』では東陽が辞職したのを文政七年のこととする。

(注24) 拮据 手を動かすさま・忙しく働くさま。双声の語。『詩経』幽風・鴟鴞に「予が手拮据す」とあり、朱子の集伝に「拮据は、手口共に作すの貌」という。

(注25) 湔焉 たちまち。忽然。

(注26) 易簣 病床の敷物を取り替える意で、人の死をいう。孔子の弟子の曾参が死に臨んで、季孫氏より賜わった大夫用の簣を身分不相応だとして取り替えさせた故事（『礼記』檀弓上）による。

(注27) 文政乙酉 文政八年（一八〇五）。『津坂東陽伝』によれば、「八月二十三日、東陽は南堀端の賜邸で息を引きとった」。

(注28) 王世貞 字は元美、号は弇州山人。明、太倉（江蘇省太倉県）の人（一五二六―一五九〇）。嘉靖二十六年（一五四七）の進士。李攀龍（字は于鱗。一五一四―一五七〇）とともに「文は必ず西漢、詩は必ず盛唐」と唱えた。後七子の一人。

その集に『弇州山人四部稿』百七十四卷、『弇州山人統稿』二百七卷等がある（『明史』卷二八七）。『宛委餘編』は『四部稿』の卷一五六から一七四まで十九卷。その五（『四部稿』卷一六〇）に「偶たま張伯雨の納琳大監に贈る詩を閲するに跋に云ふ、曾て疏して蜀・文翁の石室、楊雄の墨池、杜甫の草堂を以て、皆祀典に列せんことを請ふ。又た甫の爲に諡を賜はるを得んことを請うて、文貞と曰ふ。虞奎章の集に其の事を紀す、と。按ずるに元史に納琳伝有るも其の事を載せず。又た杜甫の文貞と諡する、亦た奇聞に出づ」と見える。なお、『宛委餘編』のこの一節は、伊勢の渡会末茂（号は鶴溪。延宝三年「一六七五」）享保十八年「一七三三」撰『杜律評叢』卷二、「堂成」詩の条にも挙げる。ちなみに、北可昌（北村篤所）および伊藤長胤（東涯）の序を冠し正徳四年（一七一四）に刊行されたこの書は、吉川幸次郎編『杜詩又叢』（中文出版社、一九七六年刊行）にその影印が収められている。また東涯に「鶴溪子墓誌銘」（『紹述先生文集』卷十三）がある。虞奎章は、虞集のこと。文宗（在位一三一九―一三三二）が天暦三年（一二二九）に設けた学問所、奎章閣学士院に侍する奎章閣侍書学士となつたのでかく称する。（注30）参照。

(注29) 王圻 明、上海の人。字は元翰。嘉靖四十四年（一五六五）の進士（『明史』二八六）。その著『統文獻通考』卷一五二、異代追諡の条に「杜甫字は子美、襄陽の人。官は拾遺。元の至元二年（一二三三）文貞と追諡す」とある。

(注30) 虞集 元、撫州崇仁（江西省崇仁県）の出身だが、その先祖が仁寿（四川省仁寿县）の人なので、自らは蜀人と称した

(一二七二)―(一三四八)。字は伯世。号は道園。文宗の信任厚く、文学者として元代第一人者と目された。楊載(字は仲弘)・范梈(德機)・揭傒斯(曼碩)と共に四大家と称される。『元史』巻一八一に伝がある。四部叢刊に明刊本『道園学古録』五十巻の影印を収めるが、それに張雨詩の跋は見えない。

- (注31) 張雨 元、錢塘の人(一二七二―一三四八)。字は伯雨。別の字は天雨、句曲外史・貞居子と号した。茅山の道士となり、各地の名山に遊んだが、趙孟頫(子昂)・虞集・倪瓚(元鎮、号は雲林)・楊維禎(鉄崖)ら当時の文人たちと交友があつた。四部叢刊所収の景鈔元刊本『句曲外史貞居先生集』五巻に「贈納琳大監」詩は見えない。↓「補注二」参照。
- (注32) 紐璘 蒙古の武人(一二六三没)。憲宗の時、四川攻略に勲功があつた。『元史』巻二九に伝があり、姚燧(一二三八―一三二三)の「紐喇に蜀国忠武公を追封する制」(『牧庵集』巻二)に見える紐喇は、紐璘のこと。

- (注33) 紐璘 『元史』に伝は立てられていないが、仁宗紀の延祐四年(一二一七)四月の条に「己未、諸王紐璘薨す」と、その名が見える。

- (注34) 錢大昕 清朝の考証学者。嘉定(上海市嘉定県)の人(一二二八―一八〇四)。嘉慶十一年(一八〇六)刊の『潜研堂文集』五十巻がある。その巻三十、「宛委餘編に跋す」に「杜子美の文貞と諡するや、元の文宗至順元年(一二三三)に在り。史には何人の陳奏するかを言はず。張伯雨が詩の跋に拠つて、紐璘大監の請ふ所と為るを知る。紐璘は元史に伝無し。其の史に見ゆる者に紐璘有り。璘、憐は同声と雖も、然れども紐璘は武臣にして、且つ元初に仕へ、文宗の世に当たらす。王元美、元史紐憐伝に此の事を載せずと謂ふは、則ち誤つて以て一人と為せり。元に崇文大監・章佩大監有り。蓋し監官の長にして、少監に別して名づく。或は勿して宦官と為すは、尤も誤る」という。勿は、認の古字。↓「補注三」参照。

- (注35) 爽然自失 茫然自失。『史記』屈原賈生列伝賛に「服鳥の賦を讀むに、死生を同じうし、去就を軽んず。又た爽然自失す」と。

- (注36) 一朝千古 たちまち身罷ること。例えば、『新唐書』薛収伝に「豈に期さんや一朝千古と成るを」と。

- (注37) 功虧半簣 あと一息のところまで完成せずに終わる。簣は、土を運ぶもっこ。『尚書』旅獒に「山を為ること九仞、功一簣を虧く」と。

- (注38) 令嗣有功 令嗣は、りっぱな後継ぎ。有功は、東陽の長男、達の子。拙修と号した人である。『津坂東陽伝』に拠れば、

天保八年（一八三七）三月二十四日、五十余歳で没した。

〔注39〕 續先緒 先人の事業をつぐ。

〔注40〕 申稟 稟申と同じ。上司に申請する。

〔注41〕 治命 精神がしっかりしている時の遺言。正常な判断ができない病人の遺言を乱命という。『左伝』宣公十五年に見える。

〔注42〕 天保五年 一八三四年。東陽没後九年目。竹厓四十一歳。八月望は、八月十五日。

〔補注一〕 ちなみに、『東陽先生詩文集』第十一冊に「石川士尚に示す」と題する詩があり、「情話相邀ふ莫逆の飲、平生久要金蘭に比す。自ら能くす詩律工夫の細、復た書生の気味の酸たる無し。一鼎の松声 茶馥郁、満室の雲影 竹檀欒。君を功業に致す思ひ心に厚かるべし。説ふを休めよ宦游行路難し」と詠じられている。

これに対して、竹厓に「玉置街に宅を賜はる。園中に松桜梅竹を移植して鬱然として林を成す。津阪東陽先生来過して、詩有り示さる。次韻して答へ奉る」詩（『果育精舍詩存』巻二、講暇小業）があり、「脊を垂ること骨肉の飲に如同す、薰然我を誘ひ芝蘭に伴す。風収まりて窗竹 影初めて直く、雪圧して檐梅 香亦た酸たり。蠅附 多年引翼を煩はし、鳩居 今日困楽を得たり。青雲幸ひに遂ぐ懸弘の志、負重寧んぞ辞さん移歩の難」という。

〈玉置街〉は、玉置町（現在の津市丸之内養正町・中央）。津城北堀端の外側にあった武家屋敷町。〈如同〉は、同様の意。唐以来の俗語。〈芝蘭〉は、ともに香草で、優秀な子弟の喩え。〈蠅附〉は、青蠅のようにうるさく付き纏うこと。〈引翼〉は、指導眷顧の意。『詩経』大雅・行葦の「黄耆台背、以て引し以て翼す」というのに基づく語。〈鳩居〉は、自分の住まいを謙遜して言う。『詩経』召南・鵲巢の「維れ鵲巢有れば、維れ鳩之に居る」とあるのに基づく語。鳩はカウのこと。〈懸弘志〉は、はるか遠くて実現できとは思わずにいた志望の意か。〈負重〉は、重任を負うこと。

〔補注二〕 明・毛晋（一五九八～一六五九）輯『元人十種詩』に収める『句曲外史集三卷補遺三卷張伯雨集外詩一卷附一卷』の張伯雨集外詩に「贈紐憐大監」と題して次のごとく見える。

論卷聚書三十萬、錦江江上數連艘。追還教授文翁學、重歎徵徵求使者勞。石室談經修俎豆、草堂迎詔樹旂旄。也知後世楊雄在、獻賦爲郎愧爾曹。

請以蜀文翁之石室揚雄之墨池杜甫之草堂、皆列學宮。又爲甫得諡曰文貞。以私財作三書院、徧行東南、收書三十萬

卷及鑄禮器以歸。虞奎章記其事、邀予賦詩如上。

なお、この詩は清・顧嗣立（一六六五～一七二二）編『元詩選』壬集にも採録されている。

〔補注三〕 杜甫が追諡された年代については、ここに示された王圻の順宗・至元二年（一三三六）説および錢大昕の文宗・至順元年（一二三〇）説の他に、仇兆鰲の順宗・至正二年（一三四二）説がある（『杜詩詳註』凡例、少陵諡法）が、根拠は示されていない。

私は、成童の年頃から杜甫の詩を好み、長い間くり返し親んできた。その流離の際、舟住まいし中風を病み、かくしてそのまま急に亡くなることとなった実状を明らかにして、今までに無かった見方だと思つて喜び、ひそかに『旧唐書』や『新唐書』および先人の解釈の誤謬を糾正して、「年譜補正」を作つた。その後、京を離れて本藩に身を寄せることとなり、これを携えやつて来て津阪東陽先生に質した。先生、にっこりとなされて、これは気がつかなかった、いい勉強になると、しきりに声をあげられた。それから急遽、『杜律詳解』一編の草稿を取り出して、私に手渡されておっしゃるには、これはわしの暇つぶしの手遊びで、改訂潤色がまだ済んでいない途中の代物だ。どうか君と議論しながら直してゆきたい。出来上がったら、ひとつ序文を頼みたい、とのこと。私は、はい承知致しましたと言つて受け取りこれを繕ひてみるに、杜甫の晩年の事跡において従来の見方を修正補訂し反駁しているところは、ほとんど私の考えと合致していたが、その精密さを比べてみると格段の違いがある。思わずしばらく目をみはり口をあぐりと開けたままであつた。そもそも、先生は私にとっていわゆる丈人の行、つまり父の年配にあたる御方である。それがなんと一度お会いしただけで辱くも知遇を得、年齢や身分立場を忘れ、互いに気が合つて、このように深く言わず語らずとも胸の内がぴつたりと一致したのである。

偶然とはいえ、そもそもやはり不思議なことだ。先生の学問は経世済民を主旨としたもので、その著述は梁を支えんばかりの分量にのぼり、このような仕事はもとより全くの餘技に属するのだが、さりながら諸説を折衷し、言外の微旨を発揮して、詳細明快かつ的確、千古未曾有の快書である。ふりかえって浅学固陋の我が身、どうして敢えて一辞を贅することができようか。ただ向こう見ずで志ばかりが大きく、ぶしつけにすけすけとものを言い、疑問に思うことがあれば、すぐさま口に出してむやみに言い立てた。先生は大海の如くわだかまりのない広い心の持ち主で、楯突き逆らう奴だとはみなされず、ほんの少しでも取るべきことがあれば、そのたびに採録された。衆美を広く集め、精粹無比であるのは、もっともなことだ。藩校が創設されると、先生は督学に就任され、私は推挙されて仕官し教職に充てられた。公私に出入りし、お目にかからぬ日とてなかった。繰り返し議論し誤りを正すことが久しくなればなるほど、いよいよ細部にわたり、六年を経てやっと定稿が出来上がった。有造館の書生たちは書き写して伝えんことをきそつて求めたので、先生はそれで上梓して誦習に便ならしめようとされ、私に校正させた上で序文を書かせようとなされた。当時、よわ齡已に七十になられ、ちょうどそのころ風患に罹つて、公職を退いて閑居しておられた。私は代わつて学校運営に与り、多忙を極めること三十日、その仕事にかかる暇もないうちに、先生は溘焉として簣を易えられた。実に文政乙酉八月のことである。やがて逐次校訂し追諡の条に至ると、王世貞の『宛委餘篇』および王圻の『統文献通考』の二書を引き、『餘篇』には、元の紐憐が子美の為に諡を請うて文貞といい、虞集がその事を記しているのは張雨詩の跋に見えると称しているが、『元史』紐憐伝には記載がない、とあった。私が試しに張雨の集を調べてみると、その通りであった。『元史』の方とはというと、紐憐伝はあるが紐憐伝は無い。憐は元初の武臣で、虞集や張雨とは同時代の人ではない。それでしだいに王氏の失考ではないかと疑問に思ひ始めた。まもなくして錢大昕の集を見ると、史料に拠つて別人だと断定して、王世貞の説に反駁し、その上、諡を賜つたのを文宗の至順元年（一三三〇）であるとしているのだが、

これもやはり『統通考』と合致しない。ここにまた茫然自失することとなった。ああ、先生の御在世中に、このことをお知らせ致せば、にっこりと頷かれ、必ずや改訂なされることがあったであらうに、いかんせん一朝にして千古と成り、あとほんの僅かというところで完璧を期すことが叶わなかった。何とも残念なことだ。後嗣ぎの有功君がりっぱにその業を継ぎ、こつこつとたゆまず遺された著作若干種を校刊され、かくしてこの編を出す運びとなった。私は当局に上申してこれを有造館で版刻し、先生の素志を果たした。それで昔のことを思い出して述べるとともに、併せてその後得た知見を掲げ示した。これも先生がお元気なうちに遺囑なされた言い付けを成し遂げた所以である。

天保五年甲子八月望

津藩督学石川之襲撰ならびに書

詩聖杜文貞公傳

後學津阪孝綽撰

文貞公杜甫字子美、其先襄陽人。^(注1)晉征南大將軍預之苗裔也。^(注2)曾祖依藝、^(注3)唐初爲河南鞏縣令、因居鞏。祖審言膳部員外郎。^(注4)父閑奉天令、遂住杜陵。^(注5)故長安洛陽竝爲公故鄉（公生于杜陵。其田園則在洛陽）。公少不羈、弱冠遊吳越齊趙間、李邕奇其才、舉進士不第、^(注6)退居洛陽。天寶十載、^(注7)投匭進三大禮賦（三賦見本集）。明皇召試文章、侍制集賢院（爲宰相陳希烈所沮抑、沈滯四年矣）。十四載、授河西尉、不拜（嫌折腰郡庭奔走風塵也。見官定詩中）。改右衛率府胄曹參軍。^(注8)時公年四十有四矣。十五載、安祿山陷京師、公以家避亂于郾（音罕。州名）。聞肅宗卽位靈武、羸服赴之陷賊中、挺節無所污。明年夏宵、逕奔行在上謁、拜左拾遺。^(注9)詔許還鄜迎家。官軍收京、扈從還長安。房瑄以陳濤斜敗罷相、公與瑄舊交、上疏論瑄有才不宜廢免。肅宗怒爲阿黨、詔三司推問。^(注10)宰相張鎰力救獲免。自是不甚省錄。乾元元年、遂出爲華州司功參軍。公立朝財十五日耳。二年關輔饑亂、棄官去華、西度隴客秦州。尋寓成州同谷縣、自負薪拾橡栗自給。兒女饑殍者數人。是歲冬、遂攜家入蜀。時裴冕帥蜀、爲給祿米。明年夏、於成都浣花里、種竹植樹、枕江結廬、縱酒嘯詠、與田畯野老相狎。及嚴武尹成都、與公世舊、待遇尤厚。公傲誕、武過其宅、有時不冠而見。嘗憑醉登武牀、瞪視武曰、嚴挺之乃有此兒。武雖急暴、不以爲忤（新唐書曰、甫醉登武牀云云。武銜之、一日欲殺甫。冠鉤于簾者三。左右白其母、奔救得止。舊史初無此事、蓋唐小說所載而新書襲其謬耳。容齊隨筆辨之詳矣）。上元二年、暫如蜀州新津縣、尋還成都。寶應元年、武歸朝廷、公送武至巴西。徐知道反、蜀亂。因入梓州、冬回成都、迎家至梓。明年往漢州及閬州、冬復回梓。是歲召補京兆府功曹參軍、不赴（公雖窮甚、不屑橡栗、見別馬巴州詩。唐書以爲寓同谷時事、且云、道梗不能赴、謬矣）。廣德二年、復浮游梓閬間。遂欲下荆南、旣驕舟矣。武再鎮兩川、乃復歸成都。武奏爲節度參謀、授檢校工部員外郎（不在朝官之列曰試檢校官。蓋名官而實爵也）、賜緋魚袋（服緋袍佩銀

魚袋是五品以上章服。工部員外郎、從六品上。蓋特恩假之也。唐人重服章。公詩言之數矣。^(注55)永泰元年、武卒。公無所依。屬崔旰^(注56)作亂、蜀大擾。身世益窮^(唐書云、嚴武卒。乃遊東蜀、依高適。既至而適卒、誤甚。適自東川入朝、拜散騎常侍乃卒。公集有忠州聞高常侍亡詩)。公在蜀凡七年。於是卒東下、自戎州至渝州、尋赴忠州、遂入雲南居之^(夔州屬縣)。大曆元年、遷居夔府。二年遷赤甲及瀘西東屯^(皆夔屬邑)。三年春始出峽、暫居江陵、秋移次公安^(縣屬江陵。唐書云、扁舟下峽、未維舟而江陵亂、乃遊襄陽。亦非。公集有居江陵及公安詩、至多)。冬赴岳陽。四年春、遂入居潭州。夏泝湘流赴衡州、畏暑復回潭州。五年四月、值藏玠之亂、再入衡州、尋復還。公自離蜀漂泊六年。先是舟居染中風、偏身不遂^(峽中覽物詩云、舟中得病移衾枕。蓋至夔之前已得病也)。竟以寓卒^(月日不詳)。年五十有九。旅殯岳陽^(唐書及年譜並云、卒于耒陽、非)。子宗文早卒。次子宗武漂寓江陵而終。元和中、宗武子嗣業奉父遺命、遷柩歸葬於偃師首陽山^(元稹誌其墓、深致景仰之意〔文見本集〕)。元至元二年追諡曰文貞公、以浣花草堂崇祀云。公詩才天縱、少與李白齊名、時稱李杜。學識淹博、貫穿古今。風調清新、屬對律切、盡工盡善、非李所及。蓋其出處勞佚、喜樂悲憤、好賢惡惡、一見之於詩、而又以忠君憂國傷時念亂爲本旨。讀其詩可以知其世、故當時號爲詩史^(見本事詩)。有文集六十卷。韓昌黎稱、李杜文章在、光燄萬丈長、其見尙如此。蘓東坡謂、詩發於情、止於忠孝。古今詩人衆矣。而公爲首者、豈非以其流落饑寒、終身不用、而一飯未嘗忘君也歟。嗟呼、此其所以聖於詩爲萬世宗師也^(楊萬里曰、李神於詩、杜聖於詩。按後人稱詩聖、其由於斯耶。猶王右軍號書聖也)。

新舊唐書皆載、公客耒陽以啖牛炙白酒、一夕而卒。考之公年譜、竝無其事。元微之所撰墓誌曰、扁舟下荆楚、竟以寓卒、旅殯岳陽。呂汲公亦曰、夏還襄漢、卒於岳陽。足爲確證。劉斧摭異曰、公來耒陽、舟中飲醉。是夕江漲漂沒、其尸不知落於何處。朝廷詔求之。聶令乃積土江上、奏公牛酒飫死塋此、以應詔。史氏不察、沿其謬、載入本傳、誤矣。^(補注一)漂沒失尸、亦如太白捉月溺死之說耳。公嘗遊衡嶽、爲暴雨所阻、數日不得食、有聶耒陽以僕阻水書致酒肉療飢荒江至縣呈聶令詩。蓋小說家由是致誣妄耳。宋人題公祠詩云、自是風霜侵病骨、非干牛

酒澆詩腸，有見乎此也。公舟居病痼，年譜失載。集中有風疾舟中伏枕書懷三十六韻。(注95)又清明詩，此身漂泊苦西

東，右臂偏枯半耳聾，寂寂繫舟雙下淚，悠悠伏枕左書空，蓋在湖南時也。初在浣花草堂，賓至詩云，老病扶人

再拜難。雲南客居詩云，臥病憂腳廢。又云，舊疾廿載來，衰年得無足。杜鵑詩云，身病不能拜，淚下如迸泉。

則其患有年矣。故出峽以來，率舟居也。註家不詳此事，故其憂病詩句，皆泛然視爲套語，不能有所觀感焉。如

親朋無一字，老病有孤舟，(注96)以是想其臨湖情狀，所謂對此茫茫百端交集，其愁思之不勝，與眼界共無極，豈啻舟

車不能載哉。與吳楚東南坼，乾坤日夜浮，所以斤兩相稱也。徐氏筆精乃謂，杜詩岳陽樓，上半渾雄警策，至

于親朋無一字，殊覺無謂，而結句亦不稱矣。噫，談何容易。(注97)凡讀詩，不得作者實際，則詩之精神沈沒矣。豈不

深惜哉。公之卒，失月日。宋時成都太守自二月二日出遊，號爲遨頭。士女列牀觀之，羣然趁春行樂。至四月

十九日乃止。是日謂之浣花遨頭，宴於公草堂滄浪亭。傾城皆出，錦繡夾道，最盛于他時。見東坡詩註及老學

菴筆記。(注98)蓋本自蹈青來，始于乖崖張公帥蜀時。陳元觀歲時廣記言之詳矣。後學之瓣香，或以爲公之忌辰。是

因年譜云，四月入衡州，欲如柳州，至耒陽卒，而致此臆料耳。嘗見顧修遠說曰，公長沙送李衡詩，與子避地

南康州，洞庭相逢十二秋。末云，朔雲寒菊倍離憂。公自乾元己亥避地於同谷，至大曆庚戌，實十二秋矣。公是

年卒。朔雲寒菊，應是秋末冬初。公卒之月，不可考。據是詩，當卒于冬。此以詩爲斷最確。但恨其忌日終靡得

而詳焉。浣花遨頭，乃祐聖夫人任氏誕日。(注99)蜀記，浣花梵安寺，本杜甫舊宅。大曆中，節度使崔寧妻任氏居之，

奉佛甚篤。遂捨爲寺。人爲立廟于其中，四月十九日衆遊樂于此，是也。嘗聞溫州有杜拾遺廟，訛爲杜十姨，遂

更廟貌爲婦人像。今復以任氏生日爲公忌日，胡爲屢爲婦人所誤，不亦可歎哉。公謚號事，嘗閱續文獻通考曰，

元至元二年追謚文貞，但未審出處。後覽王弇州宛委餘編曰，偶閱張伯雨贈紐憐大監詩。跋云，曾疏請以浣花草

堂列祀典，又請得賜謚曰文貞，虞奎章集紀其事。閱元史有紐憐傳，而不載此事。公之謚文貞，後世罕知也。通

考蓋取諸此，或別有據見，俟博古者考之。孟子曰，誦其詩讀其書，不知其人可乎。不詳公身世遭遇之概，不知

其撫時感事之旨、負良工苦心多美。(注10)故爲參攷纂誌年譜新舊唐史、旁遍採諸書所錄文獻足徵者、謹修公傳、便於讀公詩者云。

皇和文化十二年乙亥臘前三日書於東陽書院之稽古精舍(注11)

詩聖杜文貞公伝

後学津阪孝綽撰

文貞公杜甫字子美、其の先、襄陽の人。晋の征南大將軍預の苗裔なり。曾祖依藝、唐の初、河南鞏県の令爲り。因つて鞏に居る。祖審言、膳部員外郎たり。父閑、奉天の令。遂に杜陵に住す。故に長安洛陽並に公の故郷爲り(注12)〔公、杜陵に生まる。其の田園は則ち洛陽に在り〕。公少くして不羈なり。弱冠、吳越齊趙の間に遊ぶ。李邕、其の才を奇とし、進士に挙げられ第せず、退きて洛陽に居る。天寶十載、甌に投じて三大礼の賦を進む(注13)〔三賦、本集に見ゆ〕。明皇召して文章を試み、制を集賢院に待せしむ〔宰相陳希烈の爲に沮抑せらる。沈滞すること四年〕。十四載、河西の尉を授けられて拝せず〔腰を郡庭に折り風塵に奔走するを嫌ふなり。官定まる詩中に見ゆ〕。右衛率府の胄曹参军に改めらる。時に公、年四十有四。十五載、安祿山、京師を陷る。公、家を以て乱を鄺〔音孚。州名〕に避く。肅宗位に靈武に即くを聞き、羸服して之に赴き賊中に陷る。節を挺て汚る所無し。明年夏宵、逡遑して行在に奔つて上謁す。左拾遺に拝せらる。詔して許して鄺に還つて家を迎へしむ。官軍、京を収む。扈從して長安に還る。房琯、陳濤斜の敗を以て相を罷めらる。公、琯と旧交、疏を上つて琯才有り宜しく廢免すべからざることを論ず。肅宗怒りて阿党と爲し、三司に詔して推問せしむ。宰相張鎰、力め救ひて免るることを獲。是れ自り甚だ省録せられず。乾元元年、遂に出されて華州の司功參軍と爲る。公、朝に立つこと財かに十五月のみ。二年、閔輔饑乱、官を棄て華を去る。西、隴を度りて秦州に客たり。尋いで成州の同谷県に寓す。自ら薪を負ひ橡栗を拾

ひて自給す。兒女饑殍する者數人。是の歳冬、遂に家を携へて蜀に入る。時に裴冕蜀に帥たり。為に禄米を給す。明年夏、成都の浣花里に於いて、竹を種ゑ、樹を植ゑ、江に枕んで廬を結び、縦酒嘯詠して、田畯野老と相狎る。嚴武、成都に尹たるに及びて、公と世旧、待遇最も厚し。公傲誕、武其の宅に過る。時有りて冠せずして見ゆ。嘗て酔に憑つて武が牀に登り、武を瞪視して曰く、嚴挺之乃ち此の兒有り、と。武、急暴と雖も、以て忤ふことを為さず〔新唐書曰く、甫酔ひて武が牀に登りて云云す。武、之を銜み、一日甫を殺さんと欲す。冠、簾に鉤する者三たび。左右其の母に白す。奔つて救ひ止むることを得、と。旧史初めより此の事無し。蓋し唐小説載する所にして新書其の謬りを襲ふのみ。容齋隨筆、之を弁ずること詳らかなり〕。上元二年、暫く蜀州の新津県に如く。尋いで成都に還る。宝応元年、武、朝廷に帰り、公、武を送つて巴西に至る。徐知道反し蜀乱る。因つて梓州に入る。冬、成都に回つて家を迎へて梓に至る。明年、漢州及び閬州に往き、冬、復た梓に回る。是の歳、召して京兆府の功曹參軍に補せらる。赴かず〔公、窮甚だしと雖も、掾吏を屑しとせず。馬巴州に別る詩に見ゆ。唐書以て同谷に寓する時の事と為し、且つ云ふ道梗して赴くこと能はず、と。謬れり〕。広徳二年、復た梓閬の間に浮游す。遂に荆南に下らんと欲す。既に舟を讎す。武再び両川を鎮す。乃ち復た成都に帰る。武奏して節度の參謀と為し、檢校工部員外郎を授けらる〔朝官の列に在らざるを試檢校官と曰ふ。蓋し名は官にして実は爵なり〕。緋魚袋を賜はる〔緋袍を服し銀魚袋を佩す、是れ五品以上の章服。工部員外郎は從六品の上。蓋し特恩之を仮すなり。唐人、章服を重んず。公の詩、之を言ふこと数しばなり〕。永泰元年、武卒す。公、依る所無し。属たま崔旰乱を作し、蜀大いに擾る。身世益ます窮す〔唐書云ふ、嚴武卒す。乃ち東蜀に遊んで高適に依る。既に至りて適卒す、と。誤甚だし。適は東川自り入朝し散騎常侍を拜して乃ち卒す。公の集、忠州にして高常侍が亡を聞く詩有り〕。公、蜀に在ること凡て七年、是に於いて卒に東に下り、戎州自り渝州に至り、尋いで忠州に赴き、遂に雲南に入りて之に居る〔夔州の属県〕。大暦元年、遷つて夔府に居る。二年、赤甲及び瀘西・東屯〔皆夔の属邑〕に遷る。三年春、始めて峽を出で、暫く江陵に居る。秋、移つて公安に次す〔県、江陵に属す。唐書

云ふ、扁舟峽を下り、未だ舟を維つながずして江陵乱る。乃ち襄衡に遊ぶ、と。亦た非なり。公の集、江陵及び公安に居る詩有り、至つて多し。冬、岳陽に赴く。四年春、遂に入りて潭州に居る。夏、湘流を沅さかつて衡州に赴く。暑を畏れて復た潭州に回る。五年四月、藏玠ぞうかいの乱に値あひ、再び衡州に入る。尋ついで復た還る。公、蜀を離れて自より漂泊六年。是れより先、舟居中風に染まり、偏身遂げず〔峡中物を覽る詩に云ふ、舟中病を得て衾枕を移す、と。蓋し變に至るの前、已に病を得るなり〕。竟つひに寓を以て卒す〔月日詳かならず〕。年五十有九。岳陽に旅殯りよひんす〔唐書及び年譜並に云ふ、未陽に卒す、と。非なり〕。子宗文早く卒す。次子宗武、江陵に漂寓して終る。元和中、宗武が子嗣業、父の遺命を奉じて柩を遷して、偃師えんしの首陽山に帰葬す。元稹げんしん其の墓に誌す。深く景仰の意を致す〔文、本集に見ゆ〕。元の至元二年、追諡して文貞公と曰ひ、浣花の草堂を以て崇祀すと云ふ。公、詩才天縱、少くして李白と名を齊ひしくす。時に李杜と称す。學識淹博、古今を貫鑿す。風調清新、属对律切、工を尽くし善を尽くす。李が及ぶ所に非ず。蓋し其の出処勞佚、喜樂悲憤、賢を好み惡を惡にくむ、一に之を詩に見あらはす。而して又た君に忠に國を憂ひ、時を傷み亂を念ふを以て本旨と為す。其の詩を読み、以て其の世を知る可し。故に當時号して詩史と為す〔本事詩に見ゆ〕。文集六十卷有り。韓昌黎かんしやうれい称す、李杜文章在り、光焰万丈長し、と。其の尚たふばるること此の如し。蘇東坡謂ふ、詩は情に発し、忠孝に止まる。古今詩人衆おほし。而して公を首と為す者は、豈に其の流落飢寒、終身用ひられずして、一飯未だ嘗て君を忘れざるを以てに非らずや、と。嗟呼ああ、此れ其の詩に聖にして万世の宗師た為る所以なり〔楊万里曰く、李は詩に神、杜は詩に聖、と。按ずるに後人、詩聖と称す、其れ斯これに由るか。猶ほ王右軍を書聖と号すがごときなり〕。新旧唐書、皆公未陽に客として牛炙白酒を啖くふを以て一夕にして卒すを載す。之を公の年譜に考ふるに、並に其の事無し。元微之が撰する所の墓誌に曰く、扁舟荆楚に下り、竟に寓を以て卒す。岳陽に旅殯す、と。呂汲公も亦た曰く、夏、襄漢に還り、岳陽に卒す、と。確證と為すに足る。劉斧りゆうふが摭異せきいに曰く、公、未陽に來たり、舟中飲みて酔ふ。是の夕、江漲みなぎつて其の尸を漂没す。何の処に落つるを知らず。朝廷詔して之を求む。

聶令乃ち土を江上に積み、公、牛酒飫きて死し此に葬ると奏して、以て詔に應ず、と。史氏察せずして、其の謬りを沿ひ、載せて本伝に入るるは誤れり。漂没尸を失ふ、亦た太白月を捉へて溺死するの説の如きのみ。公、嘗て衡嶽に遊び暴雨の為に阻まれ、数日食を得ず。聶耒陽、僕、水に阻まるを以て書をもて酒肉を致し飢を荒江に療す、県に至つて聶令に呈す詩有り。蓋し小説家はこれに由つて誣妄を致すのみ。宋人、公の祠に題す詩に云ふ、自らは是れ風霜病骨を侵す、牛酒詩腸を浼すに干かるに非ず、と。此に見ること有るなり。公、舟居癖を病む、年譜載することを失す。集中に風疾舟中枕に伏して懷を書す三十六韻有り。又た清明の詩に、此の身漂泊西東に苦しみ、右臂は偏枯半耳は聾、寂寂舟を繫いで双び下る涙、悠悠枕に伏して左空に書す、と。蓋し湖南に在る時なり。初め浣花の草堂に在り、賓至る詩に云ふ、老病人に扶けられて再拜難し、と。雲南客居の詩に云ふ、病に臥して脚の廢するを憂ふ、と。又た云ふ、旧疾甘載來、衰年足無きことを得んや、と。杜鵬の詩に云ふ、身病みて拜すること能はず、涙下りて迸泉の如し、と。則ち其の患ふこと年有り。故に峽を出て以來、率むね舟居するなり。註家此の事を詳らかにせず、故に其の病を憂ふ詩句、皆泛然として視て套語と爲し、觀感する所有ること能はず。親朋一字無く、老病孤舟有りの如き、是れを以て其の湖に臨む情狀を想へば、所謂此の茫茫に對して、百端交ごも集まる、其の愁思の勝へざる、眼界と共に極まり無し。豈に啻だ舟車も載すること能はざるのみならんや。吳楚東南に圻け、乾坤日夜浮かぶと斤兩相稱ふ所以なり。徐氏筆精乃ち謂ふ、杜詩岳陽樓、上半は渾雄警策、親朋一字無しに至つて、殊に謂れ無きを覺ゆ。而して結句も亦た稱はず、と。噫、談何ぞ容易ならん。凡て詩を読む、作者の實際を得ざれば、則ち詩の精神沈没す。豈に深く惜しまざらんや。公の卒、月日を失す。宋の時、成都の太守二月二日出でて遊んで自り、号して遨頭と爲す。士女牀を列ねて之を觀る。群然春を趁うて行樂す。四月十九日に至つて乃ち止む。是の日之を浣花の遨頭と謂ふ。公の草堂滄浪亭に宴す。城を傾けて皆出で、錦繡道を夾み、他時より甚だし。東坡詩の註及び老学庵筆記に見

ゆ。蓋し本と踏青自り來たる。乖崖張公、蜀に帥たる時に始まる。陳元靚が歲時広記に之を言ふこと詳らかなり。後学の瓣香、或いは以て公の忌辰と為す。是れ年譜に、四月衡州に入る。柳州に如かんと欲し、耒陽に至つて卒す、と云ふに因つて、此の臆料を致すのみ。嘗て顧修遠の説を見るに曰く、公の長沙にして李衡を送る詩に、子と地を南康州に避け、洞庭に相逢ふ十二秋。末に云ふ、朔雲寒菊離憂を倍す、と。公、乾元己亥、地を同谷に避けし自り、大曆庚戌に至る、実に十二秋なり。公、是の年卒す。朔雲寒菊は、応に是れ秋未冬初なるべし。公卒するの月、考ふ可からず。是の詩に拠れば、當に冬に卒すなるべし、と。此れ詩を以て断を為す、最も確かなり。但だ恨むらくは其の忌日は終に得て詳らかにすること靡し。浣花遨頭は、乃ち祐聖夫人任氏の誕日。蜀記に、浣花の梵安寺は、本と杜甫の旧宅。大曆中、節度使崔寧の妻任氏之に居る。仏を奉ずること甚だ篤し。遂に捨てて寺と為す。人為に廟を其の中に立つ。四月十九日、衆此に遨遊す、と。是れなり。嘗て聞く、温州に杜拾遺の廟有り、訛して杜十姨と為す。遂に廟貌を更めて婦人の像と為す、と。今復た任氏が生日を以て公の忌日と為す。胡為れぞ屢しば婦人の為に誤らる、亦た歎ず可からざらんや。公諡号の事、嘗て続文献通考を閲す。曰く、元の至元二年追つて文貞と諡す、と。但だ未だ出処を審らかにせず。後、王弇州が宛委餘編を覽る。曰く、偶たま張伯雨、紐憐大監に贈る詩を閲す。跋に云ふ、曾て疏して請ふて浣花草堂を以て祀典に列す。又た請ふて諡を賜ふことを得て文貞と曰ふ。虞奎章集、其の事を紀す、と。元史を閲するに紐憐が伝有り。而れども此の事を載せず。公の文貞と諡する、後世知ること罕なり。通考蓋し諸を此に取る、或いは別に拠見有るか、博古の者之を考するを俟つ。孟子曰く、其の詩を誦し其の書を読む、其の人を知らずして可ならんや、と。公の身世遭遇の概を詳らかにせざれば、其の時を撫し事に感ずるの旨を知らず、良工の苦心に負くこと多し。故に為に墓誌年譜新旧唐史を參攷し、旁ら遍く諸書の録する所、文献徴するに足る者を採り、謹んで公の伝を修す。公の詩を読む者に便すと云ふ。

皇和文化十二年乙亥臘前三日、東陽書院の稽古精舎に書す

(注1) 杜甫(七二〇七七〇)の伝記として基本となるのは、元和八年(八一三)に書かれた元稹(げんしん)の『唐檢校工部員外郎杜君墓系銘並びに序』、『旧唐書』卷一九〇下文苑伝下及び『新唐書』二〇一文藝伝上の杜甫伝であり、他に元・辛文房『唐才子伝』卷二にも伝がある。このうち、元稹の「杜君墓系銘」(一に杜甫墓誌銘に作る)は尾崎勤氏による訳注(京都大学中国文学研究室編『唐代の文論』所収、研文出版、二〇〇八年)がまた『新』杜甫伝は黒川洋一氏による訳注(小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』所収、大修館、一九七五年)があり、いずれも東陽の杜文貞公伝を読む上で参考になる。『唐才子伝』には、布目潮瀨・中村喬阿氏による口語訳がある他(『唐才子傳の研究』訂正重版、汲古書院、一九八二年)、傳璇琮主編の『唐才子傳校箋』五冊(中華書局、一九八七・九五五年)および周紹良『唐才子傳箋證』三冊(中華書局、二〇一〇年)がある。なお、杜甫に関する参考文献や研究書については、黒川氏の『鑑賞中国の古典』^⑪杜甫(角川書店、一九八九年)を参照。

(注2) 襄陽 今の湖北省襄樊市。杜甫の先祖を襄陽の人とするのは、『旧』伝による。杜氏の本籍地は、元来、京兆の杜陵とされるが、東晋末、劉裕(宋の武帝)が北征した際、それに随って南渡し襄陽に移り住んだとされる。吉川幸次郎『杜甫私記』(家系)(筑摩書房、一九八〇年。後に『吉川幸次郎全集』第十二卷所収)参照。

(注3) 晋征南大将军預 晋・杜預(字は元凱。二二二〜二八四)のこと。呉を平定するのに大功のあった武人であるとともに、『春秋左氏伝』の注『春秋経伝集解』三十卷を著した学者でもあった(『晋書』卷三四)。なお、津阪東陽は杜預の官銜を征南大将军とするが、これは『新唐書』杜審言伝によったものか。杜甫の開元二十九年(七四一)作「遠祖当陽君を祭る文」(詳註卷二十五)や『晋書』武帝紀および杜預伝では、鎮南大将军。

(注4) 杜依藝 河南鞏県(今の河南省鞏県)の令(県知事、従六品上)となったこと以外、事跡不明。

(注5) 杜審言 字は必簡(六四五?〜七〇八)。則天武后時代の宮廷詩人で、李嶠・崔融・蘇味道らとともに(文章四友)の一人であった。最高官位は膳部員外郎(従六品上)。死後、著作郎(従五品上)を追贈された。『旧唐書』卷一九〇、『新唐

書』卷二〇一に伝があり、『新』伝については興膳宏氏の訳注がある（『唐代の詩人―その傳記』所収）。また陳冠明「杜審言年譜」（『杜甫研究學刊』二〇〇一年第三期）がある。

（注6）

杜閑 武功県（今の陝西省武功県の西北）尉（正九品下）および奉天県（今の陝西省乾県）の令（従六品上）となったこと以外、事跡不明であったが、王輝斌「杜甫之父杜閑考略」（『首都師範大學學報』一九九七年二期）によれば、高宗の永淳元年（六八二）の生まれて開元二十九年（七四二）兗州司馬在任中に卒したという

（注7）

杜陵 長安の南郊。漢の宣帝の陵（杜陵）がある。東陽は024「別れを恨む」詩（詳註卷九、〇四二〇）に注して「公、曾祖以来洛陽に居り、墳墓田園有り。故に公、長安に生まると雖も、然れども常に洛陽を指して故郷と為す」という。なお、杜甫の出生地は、河南省鞏県の東にある瑤湾（南瑤湾村）だとされており（聞一多「少陵先生年譜会箋」、『聞一多全集』第三卷、上海開明書店、一九四八年／四川省文史研究館編『杜甫年譜』、四川人民出版社、一九五八年／馮至『杜甫伝』、北京人民出版社、一九五二年／蕭滌非「杜甫研究」修訂本、齊魯書社、一九八〇年／陳貽燦「杜甫評伝」上巻、上海古籍出版社、一九八二年／金啓華・胡問濤「杜甫評伝」、陝西人民出版社、一九八四年、現在この地には杜甫故里記念館が立てられ、杜甫が生まれたという窖洞が遺蹟として保存されているが、近年、洛陽だとする説が出された（王輝斌「杜甫出生地考実」、『首都師範大學學報』一九九八年第四期）。

（注8）

不羈 才能すぐれ、型にはまらず束縛をきらう。『新』伝にその人となりを「放曠にして自ら検せず」と評する。

（注9）

遊吳越齊趙間 黒川氏によれば、杜甫が吳越（今の浙江・江蘇）に遊んだのは二十歳の前半で、齊趙（今の山東・山西）に遊んだのは二十代後半と三十代前半である（『新』伝訳注。傅璇琮主編『唐五代文學編年史』【初盛唐卷】（遼海出版社、一九九八年）は、吳越の漫遊を開元二十年（七三二）に繫年し「本年前後、杜甫吳越に漫遊す」という。また開元二十六年（七三八）の条に「本年前後數年中に杜甫東のかた齊趙に遊ぶ」と。

（注10）

李邕 字は太和。江都（江蘇省揚州）の人（六七五〜七四七）。『文選』の注で知られる李善の子。若くして文名高く、天寶の初、北海太守となり、同六載（七四七）、罪を構えられ宰相李林甫（？〜七五二）の内意を受けた監察御史によって杖殺された。代宗の時、秘書監を追贈された（『旧唐書』卷一九〇中、『新唐書』卷二〇二）。李昂の大曆三年（七六八）作「唐故北海郡守贈秘書監江夏李公墓誌銘並序」（周紹良主編『唐代墓誌彙編』所収、上海古籍出版社、一九九二年）がある。寛文生氏の「李邕伝初探」（『太田進先生退休記念中国文學論集』、一九九五年）参照。杜甫が李

邕に会ったのは、天宝四載（七四五）濟州（山東省済南市）に於いてのこととされ、「李北海に陪して歷下の亭に宴す」（詳註卷一）、「李太守が歷下の古城の員外の新亭に登るに同ず」（同上）詩があり、「韋左丞丈に贈り奉る二十二韻」詩（同上）には「李邕は面を識らんことを求め、王翰は隣をトせんことを願ふ」と詠じられ、後年の「八哀詩」（詳註卷十六）にも「贈秘書監江夏の李公邕」と題する作（〇九四八）がある。

〔注11〕

挙進士不第 河南府から郷貢進士に推挙されたが尚書吏部での進士の試験に落第したことをいう。杜甫が初めて科挙を受けたのは、開元二十三年（七三三）二十四歳の時とされる。なお、この時は高適も同じく落第している。杜甫は後年「壯遊」詩（詳註卷十六、〇九五五）において「帰帆天姥を払い、中歳旧郷に貢せられる。（中略）忤^{またが}いて考功の第より下ち、独り辞す京尹の堂」と回想している。もともと、鄭健行「杜甫府試下題試説」（『唐代文学研究』第六輯、広西師範大学出版社、一九九六年）は、この「壯遊」詩の一節は河南府試に合格しなかったことをいうとする。

〔注12〕

匭 則天武后の垂拱元年（六八五）に設置された目安箱。当時四つの投書箱が置かれ、そのうち延恩匭は、仕官を陳情する者のために設けられていた（『大唐六典』卷九、匭使院）。

〔注13〕

三大礼賦 天宝十載（七五一）正月壬辰（八日）、玄宗が太清宮に朝献し、癸巳（九日）、太廟に朝享し、甲午（十日）、天地を南郊に合せ祀ったのを、それぞれ寿いた賦三篇。詳註卷二十四に見える。

〔注14〕

集賢院 玄宗の顧問応対に備えるために、開元十三年（七二五）に設置された。図書の遺逸を集め、隠れた賢才を発掘することなどを目的とした（『大唐六典』卷九、集賢殿書院。杜甫の天宝十三載作「西嶽を封ずるの賦を進むる表」（詳註卷二十四）に「頃歳、国家郊廟に事有り、幸ひに賦を奏するを得て、集賢院に待制せしめらる」と）。

〔注15〕

陳希烈 天宝五載（七四六）李林甫によって宰相職たる同中書門下平章事に拔擢された。李林甫を輔佐して政治を壟断した。後に安祿山の政府に仕え、至徳二載（七五七）肅宗から死を賜った（『旧唐書』卷九七、『新唐書』卷二三上）。

〔注16〕

河西尉 河西は地名だが、従来どこかはっきりしなかった。吉川幸次郎『杜甫詩注』第二冊（筑摩書房、一九七九年）五七六頁には、鈴木虎雄注の河西節度使管下の尉官という説、聞一多「少陵先生年譜会箋」の雲南省とする説、及び池田温「盛唐之集賢院」（『北海道大学文学部紀要』一九、一九七一年）の河中府蒲州（今の山西省永濟県）とする説を挙げ、池田説もつとも傾聴すべきであろうという。その他、郭沫若の四川省の宜賓県附近とする説（『李白与杜甫』北京人民出版社、一九七一年）もあったが、朱明倫「杜詩〈不作河西尉〉解」（『文学遺産』一九八一年四期）が今の陝西省合

陽県であることを考証して以来、それを支持する論者が多い。陳貽焮『杜甫評伝』第六章第六節、金啓華・胡問濤『杜甫評伝』陳文華『杜甫伝記唐宋資料考辨』（台湾・文史哲出版社、一九八七年）はいずれも朱説による。尉は県の属官で税の徴収及び警察を掌る。

(注17)

風塵 俗吏の職。郡県の官吏をいう。東陽『夜航詩話』卷三に「風塵も亦た数義有り」とあるのを参照。

(注18)

官定詩 「官定まりて後に戯れに贈る」詩（詳註卷三、〇一一九）に「河西の尉と作らざるは、淒涼腰を折るが為なり。老夫は趨走を怕る、率府に且つは逍遙せん。酒に耽るは微禄に須ち、狂歌して聖廟に託す。故山帰興尽き、首を回らして風塵に向ふ」という。ちなみに「折腰」は、東晋・陶淵明「帰去来の辞」序の「我豈に能く五斗米の為に腰を折り、郷里の小児に向はんや」というのを踏まえた表現。

(注19)

右衛率府胄曹參軍 これは「新」伝に拠る。「旧」伝は京兆府兵曹参軍とする。但し、杜甫の「官定まりて後に戯れに贈る」詩の原注には「時に河西の尉を免ぜられ、右衛率府の兵曹と為る」とあり、それに従うべきである。ちなみに右衛率府胄曹参軍は、東宮の儀仗を掌る太子右衛率府に属し、武器管理や役所の営繕を担当する。兵曹参軍は衛士の名簿を管理する人事担当。ともに正員一人、従八品下。杜甫が右衛率府兵曹参軍に任じられたのは、天宝十四載（七五五）十月のことである。

(注20)

鄜州 今の陝西省富県。

(注21)

肅宗即位靈武 肅宗、諱は亨。玄宗の第三子。天宝十五載七月、四十六歳にして靈武（今の寧夏ウイグル自治区靈武県）に於いて即位し至徳と改元した。

(注22)

行在 この時、鳳翔（今の陝西省鳳翔県）に行在所が置かれていた。杜甫に至徳二載（七五七）作の「京自り竄して鳳翔に至る。行在所に達するを喜ぶ」詩三首（詳註卷五、〇一六四～〇一六六）がある。

(注23)

左拾遺 門下省に属し、天子に供奉し諷諫することを掌る。正員二名、従八品上。杜甫が左拾遺に任じられたのは、至徳二載五月のこと。「述懐」詩（詳註卷五、〇一六九）に「涕淚拾遺を授けられ、流離主恩厚し」という。清・錢謙益（一五八二～一六六四）の箋注には、その時の辞令書が挙げてある。

(注24)

詔還鄜迎家 「北征」詩（詳註卷五、〇一八八）に「皇帝二載秋、閏八月初吉。杜子將に北征し、蒼茫として家室を問はんとす。維れ時は艱虞に遭ひ、朝野暇日少なし。顧つて慚づ恩私を被り、詔して蓬華に帰るを許すを」という。杜甫が

(注25) 房琯を弁護して肅宗の怒りを買ったのは、至徳二載（七五七）五月のこと、その歳の閏八月鄜州に家族を見舞った。
官軍取京 至徳二載九月、広平王（李俶）・郭子儀らが長安を回復した。

(注26) 扈從長安 肅宗が長安に戻ったのは、至徳二載十月のこと、この時、杜甫は鄜州の家族のもとにいた。杜甫が家族を連れて長安にもどるのは十一月以降。

(注27) 房琯 字は次律、河南（今の河南省洛陽市）の人（五九七～七六三）。初め陸渾山に隠遁していたが、開元十二年（七二四）、その「封禪書」が張説（六六七～七三三）に認められ、秘書省校書郎となった。その後、監察御史、主客員外郎・郎中、給事中等を歴任。一時地方に出されたこともあったが、天宝十四載には憲部侍郎となった。天宝十五載（七五六）、安祿山の乱により玄宗が蜀に蒙塵するや、玄宗のもとに馳せ参じ、宰相職たる文部尚書同門下平章事を拝命、やがて冊を奉じて靈武に赴き肅宗に拝謁し、その政權下で重きをなした。至徳元載（七五六）十月、上疏して自ら兵を率いて長安・洛陽を回復せんことを請うて出陣したが、古式に倣い無謀な車戦を試み長安西郊の陳濤斜で大敗を喫した。至徳二載五月、太子少師に貶せられた。その後、邠州刺史・太子賓客・礼部尚書・晋州刺史・漢州刺史を歴任、宝応二年（七六三）四月、刑部尚書となり、その年の八月（広徳元年八月）、六十七歳で卒した。『旧唐書』卷一一一、『新唐書』卷一三九に伝がある。なお、杜甫との関係については、『旧唐書』杜甫伝に「房琯は布衣の時、甫と善し」、『新唐書』杜甫伝に「房琯と布衣の交はりを為す」というのを、黒川氏は「はたして至徳二年以前に二人が交友関係を持っていたかといえ、それは甚だ疑わしい。二人の直接の関係は、至徳二年、杜甫が房琯の罪を弁護したときに始まるとみるべきである」（『新』伝訳注）のだが、陳冠明「房琯行年考」（『杜甫研究学刊』一九九八年第一期）のように〈布衣の交〉を肯定する向きもある。

(注28) 三司推問 尚書刑部・御史台・大理寺による合同審議。杜甫の「口勅もて三司推問より放たれしを謝し奉る状」（詳註卷二五）は、不起訴処分となったことを感謝する上奏文。吉川幸次郎『杜甫詩注』第四冊（筑摩書房、一九八〇年）（はしがき一）に詳しい解説がある。

(注29) 張鎰 字は從周、博州（山東省聊城市）の人（？～七六三）。房琯の後任として至徳二載五月から乾元元年（七五八）五月まで宰相職たる中書侍郎同中書門下平章事の任に在った。清廉でよく士を遇し天下の人望を集めたという。『旧唐書』卷一一一、『新唐書』卷一三九に伝がある。

(注30)

華州司功參軍 華州は、今の陝西省華県。州の等級は上輔（唐代の州県は、その重要性や戸数の多寡によって等級があり、その違いが地方官の品階や俸給に関係した）、首都長安と東都洛陽との間にある要衝である。司功參軍は、人事課長。品階は従七品下。

(注31)

関輔 関中および三輔。長安一帯の首都圏をいう。

(注32)

隴 隴州。今の陝西省隴県。

(注33)

秦州 今の甘肅省天成県。

(注34)

成州同谷県 今の甘肅省成県。

(注35)

自負薪拾橡栗 杜甫の「乾元中、同谷県に寓居して作れる歌七首」其一（詳註巻八、〇三六四）に「歳どし橡栗を拾ひて狙公に随ふ」と。橡栗は、ささぐりの実。狙公は、猿まわし。

(注36)

饑殍 飢えに苦しみ、ひどい場合は死に至る。この記述は、『旧唐書』杜甫伝に「甫、成州同谷県に寓居し、自ら薪を負ひ枵を採り、兒女餓殍する者数人」とあるのに基づく。枵は、稻と同じで、野生の雑穀のこと。杜甫の「同谷県に寓居して作れる歌」其二（詳註巻八、〇三六五）には「男呻女吟四壁静かなり」と、この当時子供たちが飢えに苦しみ叫んでいる様子が詠じられているものの、この時は黒川氏が指摘されるように子供が餓死した事実はない。ただし、天宝十四載（七五五）の「京自り奉先県に赴く詠懷五百字」詩（詳註巻四、〇一二九）には「門に入れば号咷を聞く、幼子餓えて已に卒せり」と詠ぜられており、かつて杜甫は幼子を栄養失調のため亡くしたことがあった。ちなみに、陳文華『杜甫傳記唐宋資料考辨』第一篇（家族資料之考訂）では、杜甫に三男三女があったとし、天宝九載（七五〇）に宗文が、十載十一載に二人の女が、十二載に宗文が生まれ、十三載に翌年餓死した（幼子）が生まれたと推定し、更に清・施鴻保『読杜詩説』に拠って大暦五年（七七〇）に一、二歳で夭死した女があったとする説を立てている。

(注37)

裴冕 字は章甫、河東の人（？）七六九。『旧唐書』巻一一三、『新唐書』巻一四〇に伝がある。郁賢皓『唐刺史考』（中華書局、一九八七年）によれば、乾元二年（七五九）から上元二年（七六一）まで、成都尹・劍南西川節度使の任に在った。

(注38)

田峻野老 田夫野老と同じ。いなか親爺。なお、この記述は『旧唐書』杜甫伝に「甫、成都の浣花里に於いて竹を種ゑ木を植ゑ、廬を結び江に枕み、酒を縦にして嘯詠し、田夫野老と相狎蕩し、拘檢すること無し」とあるのに基づく。ち

なみに、杜甫の浣花草堂が落成したのは、上元元年（七六〇）春のことである。025「居を卜す」（詳註卷九、〇三八五）、026「堂成る」一詩（同上、〇三九三）がある。

〔注39〕

嚴武 字は季鷹（七二六～七六五）。華州華陽（今の陝西省）の人。中書侍郎嚴挺之の子。『旧唐書』卷一一七、荊新唐書』卷一二九に伝がある。『唐刺史考』によれば、上元二年（七六一）から宝応元年（七六二）まで成都尹・劍南節度使を務め、その後、広徳二年（七六四）から永泰元年（七六五）の間も、再びその任に在った。嚴挺之の伝は、『旧唐書』卷九九、『新唐書』卷二一九。なお、杜甫の「八哀詩」其三（詳註卷十六、〇九四六）に嚴武を悼む詩がある。

〔注40〕

唐小説 雲溪子と号した晚唐・范攄『雲溪友議』卷二に「嚴」武年二十三、給事黃門侍郎と爲る。明年、旄を西蜀に擁し、累りに欽筵に於いて客に対して其の筆札を騁す。杜甫拾遺、酔ひに乗じて言ひて曰く、謂はざりき嚴挺之に此の兒有るや、と。武は目を悲らすこと之を久しうして曰く、杜審言の孫子、虎の髭を將らんと擬すや、と。合座皆笑ひ、以て之を弥縫す。武曰く、公等と飲饌して飲を謀るに、何ぞ祖考に至るや、と。房大尉紹も亦た微しく忤ふ所有り、憂怖して疾を成す。武の母、賢良を害損せんことを恐れ、遂に小舟を以て甫を送り峽に下らしむ」云々と見える。

〔注41〕

容齋隨筆 南宋・洪邁（一一二二～一二〇二）の著。容齋は、その号。もと五筆（隨筆十六卷・統筆十六卷。三筆十六卷・四筆十六卷・五筆十卷）に分かれ、このうち、初めの隨筆十六卷については、天保二年（一八三一）に和刻本（汲古書院刊『和刻本漢籍隨筆集』第三集に影印を収む）が出たが、もとより東陽歿後のことである。『容齋統筆』卷六「嚴武、杜甫を殺さず」の条に「新唐書嚴武伝に云ふ、房琯、故の宰相たるを以て巡内刺史と爲るも、武慢倨にして礼を爲さず。最も杜甫に厚し。然れども甫を殺さんと欲すること数しばなりき。李白、蜀道難を爲るは、房と杜との爲に之を危ぶむなり、と。甫の伝に云ふ、武、世旧を以て甫を待す。甫、之に見ゆるに、或いは時に巾せず。嘗て酔ひて武の牀に登り、瞪視して曰く、嚴挺之乃ち此の兒有り、と。武、之を銜み、一日甫を殺さんと欲す。冠、簾に鈎すること三たび。左右其の母に白し、奔り救ひて止むるを得、と。旧史但だ云ふ、甫、性褊躁、嘗て酔に憑つて武の牀に登り、其の父の名を斥すも、武以て忤ふことを爲さず、と。初めより所謂殺さんと欲するの説無し。蓋し唐小説の載せる所にして、新書以て然りと爲す」云々と見える。

〔注42〕

蜀州新津県 今の四川省新津県。杜甫が新津県に行ったのは上元二年（七六二）正月のこと。二月に成都に戻った。

〔注43〕

武歸朝廷 宝応元年（七六二）七月、嚴武が京兆尹に任命されて帰京する際、「嚴公の入朝するを送り奉る十韻」（詳註

卷十一、〇五五七「奉濟駅にて重ねて嚴公を送る四韻」詩（同上、〇五五九）がある。

(注44) 巴西 今の四川省綿陽県の東。

(注45) 徐知道 西川兵馬使の任にあり、宝応元年（七六二）に乱を起こした。

(注46) 梓州 今の四川省三台県。劍南東川節度使の治所がおかれた。

(注47) 漢州 今の四川省広漢県。

(注48) 閬州 今の四川省閬中県。

(注49) 京兆府功曹參軍 京兆府は首都長安を管轄する行政府で、功曹參軍はその人事課長のような職。品階は正七品下。

(注50) 別馬巴州詩「奉寄別馬巴州」（馬巴州に寄せ別れ奉る）詩（詳註巻十三、〇七二五）の原注に「時甫除京兆功曹、在東川」（時に甫、京兆功曹に除せられ、東川に在り）という。除は、もとの官職を取り除いて新たな官職を授けること。

(注51) 唐書 ここで東陽が言う『唐書』とは、『旧唐書』のこと。その杜甫伝に、「甫、成州同谷県に寓居し、自ら薪を負ひ枵を採り、兒女餓殍する者数人。之を久しうして、召されて京兆府功曹に補せらる」とある。但し、「道梗して赴くこと能はず」という表現は見えない。何に基づくか不明。あるいは、北宋・王洙（字は原叔、九九七～一〇五七）の「杜工部集の序」に「遂に蜀に入る。居を成都浣花里に卜す。復た東川に適く。之を久しうして、召されて京兆府の功曹に補せらるも、道阻なるを以て赴かず」云々というのと混同したのであろうか。なお、杜甫が京兆府功曹參軍に召されたのを、東陽は宇都宮遷庵の龍頭増広本「杜律集解」に載せる明・単復の年譜によつて宝応二年（七月に広徳と改元、七六三）のこととするが、聞一多『杜少陵年譜会箋』によれば広徳二年（七六四）の春のこと、『唐五代文学編年史【中唐巻】』では同年の二月に繫年する。

(注52) 荆南 今の湖北省江陵県。

(注53) 両川 劍南東川と劍南西川。今の四川省全域。至徳二載（七五七）劍南が東川と西川の二節度使に分けられ、広徳二年（七六四）再び統一された。

(注54) 檢校工部員外郎 節度使及びその僚佐は、元來令外の官であり、官品がなかったもので、中央政府の官職を帯びさせたが、檢校はこうした加官の一種である。工部員外郎は、土木を掌る尚書工部の三等官で、従六品上。

(注55) 章服 唐代、三品以上は紫衣を服し、五品以上は緋衣を着たが、その官位に及ばない者にも、しばしば賜紫・賜緋の挙

があり、紫衣・緋衣を賜った。『旧唐書』卷四五、輿服志に「恩制に緋紫を賜賞し、例ね魚袋を兼ねしむ。之を章服と謂ふ」と。銀魚袋は、銀製の魚形の袋。『容齋隨筆』卷一に「唐人章服を重んず。故に杜子美に〈銀章老翁に付す〉（朱紱平生に負く）〈病を扶けて朱紱を垂る〉の句有り」という。ちなみに、〈銀章〉云々は「春日江村」詩五首其三（詳註卷十四、〇八一〇）に、〈平生〉云々は「独坐」詩（同上、〇七八二）に、〈病を扶けて〉云々は「春日江村」詩其四（同上、〇八一二）に見える。

〔注56〕

崔旰 旰は旰かんの訛字。永泰元年（七六五）四月に嚴武が亡くなった後、誰を次の節度使に推すかをめぐって、成都尹の郭英乂と西山兵馬使の崔旰との間に争いが生じ、同年閏十月、郭英乂が崔旰派の普州刺史韓澄に殺害されたため、柏茂琳・楊子琳らが崔旰追討の兵を挙げ、蜀中が乱れた。後出の崔寧と同一人物。（注113）参照。

〔注57〕

高適 字は達夫（七〇〇？～七六五）・辺塞詩人として知られる。『旧唐書』卷一一一、『新唐書』卷一四三に伝が立てられ、『旧』伝については笈文生氏の訳注がある（『唐代の詩人―その傳記』）。また周勣初「高適年譜」（上海古籍出版社、一九八〇年）がある。乾元二年（七五九）彭州刺史となり、上元元年（七六〇）蜀州刺史に転じた。高適とは、杜甫がかつて齊趙に遊んだ時に親交を結んだ。そのことは「昔遊」（詳註卷十六、〇九五五）「懷を遣る」詩（同上、〇九五六）に追懷されている。また高適の死を悼んだ「高常侍が亡するを聞く」詩（詳註卷十四、〇八二四）がある。常侍は、散騎常侍のこと。門下省に属し天子に侍奉して顧問應對を掌る。高適は広徳二年（七六四）長安に召還され刑部侍郎に任命されたのち、散騎常侍に転じた。

〔注58〕

戎州 今の四川省宜賓市。

〔注59〕

渝州 今の四川省重慶市。

〔注60〕

忠州 今の四川省忠県。

〔注61〕

雲南 これは雲安（今の四川省雲陽県）の誤り。

〔注62〕

夔州 今の四川省忠節県。

〔注63〕

江陵 今の湖北省江陵県。

〔注64〕

公安 今の湖北省公安県の西。

〔注65〕

襄陽 襄陽（今の湖北省襄陽市）と衡州（今の湖南省衡陽市）。

(注66) 岳陽 今の湖南省岳陽市。

(注67) 潭州 今の湖南省潭州市。

(注68) 藏玠之乱 大暦五年(七七〇)四月、湖南兵馬使の藏玠が団練使を殺害して乱を起こした事件。

(注69) 峡中覽物詩 詳註卷十五、〇八八九。

(注70) 年譜 明・単復の年譜。(注51) 参照。

(注71) 未陽 今の湖南省耒陽県。

(注72) 偃師首陽山 今の河南省偃師県の西北。

(注73) 元稹 字は微之、河南洛陽の人(七七九〜八三二)。白居易(七七二〜八四六)とは無二の親友で、当時詩人としての名声も拮抗し、「元白」と称せられた。『旧唐書』卷一一六、『新唐書』卷一七四に伝があり、『旧』伝には山本和義氏の訳注がある(『唐代の詩人―その傳記』)。その詩文集に『元氏長慶集』六十卷があり、研究書および年譜に、花房英樹『元稹研究』(彙文堂、一九七七年)、卞孝萱『元稹年譜』(齊魯書社、一九八〇年)がある。元稹が杜甫の墓係銘を書いたのは、元和八年(八一三)江陵士曹參軍在任中のことである。

(注74) 天縱 天賦の卓絶した才能。子貢が孔子を評して「天之を縱^{ゆる}して、將^{ほとん}と聖ならんとす」(『論語』子罕篇)といった語に基づく。

(注75) 李白 字は太白(七〇一〜七六二)。『旧唐書』卷一九〇、『新唐書』卷二〇二に伝があり、『新』伝には寛久美子氏の訳注がある(『唐代の詩人―その傳記』)。参考文献等については、同氏の『鑑賞中国の古典①李白』(角川書店、一九八八年)参照。その伝記考証として松浦友久氏の『李白伝記論―客寓の詩想』(研文出版、一九九四年)がある。

(注76) 時称李杜 元稹の墓係銘に「是の時、山東の人李白、亦た奇文を以て称を取る。時人之を李杜と謂ふ」とあり、『新』杜甫伝に「少くして李白と名を齊しくし、時に李杜と号さる」というが、黒川氏の指摘されるが如く「杜甫がその生前に李白と並称されていたかどうかは大いに疑問」であり、杜甫を偉大な詩人であるとする認識は中唐の韓愈や元稹・白居易らによって生まれたものである。また、元稹が李白を山東の人とするのも、誤り。李白自身は隴西の李氏だと称したが、実は西域に生まれ少年時代を蜀で過ごした。

(注77) 風調清新、属对律切 詩の調べが清新で、对句がびたつと決まっている。元稹の墓係銘に見える評語。ただし、それに

は〈清新〉を〈精深〉に作る。

(注78)

尽工尽善 白居易の「元九に与ふる書」(『白氏文集』卷二十八に杜甫を李白と比較して「今古を貫穿し、格律を翺縷するに至っては、工を尽くし善を尽くし、又た李に過ぐ」という。〈尽工尽善〉は、『論語』八佾篇に「子、韶を謂ふ、美を尽くせり。又た善を尽くせり」とあるのを踏まえた表現。〈韶〉は、舜の音楽。

(注79)

好賢惡惡 『札記』緇衣篇に「子曰く、賢を好むこと緇衣の如く、惡を惡むこと巷伯の如くなれば、則ち爵漬れず、而して民愿に作り、刑試ひられず、而して民咸服す」と。〈緇衣〉は『詩經』鄭風、〈巷伯〉は小雅の篇名。

(注80)

読其詩可以知其世 『孟子』万章下に「天下の善士を友とするを以て未だ足らずと為し、又た古の人を尚論す。其の詩を頌し、其の書を読み、其の人を知らずして可ならんや。是を以て其の世を論するなり。是れ尚友するなり」とあるのを踏まえている。

(注81)

本事詩 晩唐・孟棻の著。詩人の逸話集。その高逸篇に「杜(甫) 禄山の難に逢ひ、隴蜀に流離す。畢く詩に陳べ、見(現と同じ)を推して隠に至り、殆ど遺事無し。故に当時号して詩史と為す」と。

(注82)

文集六十卷 杜甫の歿後もない頃、樊晃によつて書かれた「杜工部小集序」には「文集六十卷、江漢の間に行なはる」とあり、『旧』杜甫伝にも「甫には文集六十卷有り」というが、六十卷本は現在伝わっていない。北宋・王洙の「杜工部集の序」に「甫集初め六十卷、今秘府の旧蔵、通人家の有する所、大小集と称する者は、皆亡逸の餘にして、人自ら編摭し、当時の第叙に非ず。中外の書を蒐裒すること、凡て九十九卷。其の重複を除き、千四百有五篇を定取す。凡て古詩三百九十有九、近体千有六。太平の時より起こり、湖南にて作る所に終はる。居る所の次を視るに歳時先後を為すが若し。十八卷に分かつ。又た別録の賦筆雜著二十九篇を二卷と為し、合はせて二十卷」云々という。

(注83)

韓昌黎 中唐・韓愈(七六二〜八二四)のこと。字は退之。昌黎(河北省)がその郡望であつたため、韓昌黎と称する。六朝風の美文を否定し古文の復興に尽力し、詩人としても元稹・白居易らに対峙する一方の雄であつた。また後進の士を誘掖し、孟郊(七五一〜八一四)・張籍(七六六〜八三〇?)・李賀(七九〇〜八一六)・賈島(七七九〜八四三)といった個性的な詩人達がその周囲に集まつた。『旧唐書』卷一六〇、『新唐書』卷一七六に伝があり、『新』伝には小南一郎氏の訳注がある(『唐代の詩人―その傳記』)。その詩文集に『昌黎先生集』四十卷外集十卷があり、わが国でも、明・蔣之翘注本に拠つて、万治三年(一六六〇)に鵜飼石斎(元和元年「二六一五」寛文四年「二六六四」)訓点の『韓昌

黎集』が刊行されている（汲古書院『和刻本漢詩集成唐詩』第七・八輯に影印を収む）。なお、「李杜文章在り、光焰万丈長し」の句は、元和十一年（八一六）作の「張籍を調る」詩に見える。

〔注84〕

東坡 北宋・蘇軾（字は子瞻、一〇三六―一一〇一）のこと。東坡居士と号したのでかく称する。その「王定国詩集叙」〔東坡集〕卷二十四に「若し夫れ情に発し、忠孝に止まる者は、其の詩豈に同日にして語る可けんや。古今詩人衆し、而して杜子美を首と為す。豈に其の流落飢寒、終身用ひられずして一飯も未だ嘗て君を忘れざるを以てに非ずや」とある。なお、南宋・魏慶之『詩人玉屑』卷十四にも抄録する。

〔注85〕

楊万里 南宋の詩人（一一二七―一二〇六）。字は廷秀、誠齋と号した。陸游（一一二五―一二一〇）・范成大（一一二六―一二九三）・尤袤（一二二四―一二九四）とともに南宋四大詩人と称せられる。『宋史』卷四三三に伝がある。李白を「詩に神なる者」、杜甫を「詩に聖なる者」とするのは、「江西宗派詩序」（『誠齋集』卷七十九）に見える。

〔注86〕

王右軍 東晋・王羲之（三〇三―三六一、一説に三〇七―三六五）のこと。字は逸少。琅邪臨沂（山東省臨沂市）の人。右軍將軍・会稽内史となつたので、王右軍という（『晋書』卷八〇）。書法に巧みで、後世、書聖と称された。『晋書』王羲之伝には、興膳宏氏の訳注がある（『六朝詩人傳』所収、大修館、二〇〇〇年）。

〔注87〕

呂伋公 伋は汲の訛字。呂汲公は、北宋の呂大防（一〇二七―一〇九七）のこと。字を微仲といい、哲宗の時、汲郡公に封ぜられたので、呂汲公と称す。『宋史』卷三四〇に伝がある。その著「杜甫年譜」は『分門集註杜工部詩』巻首に載せる。

〔注88〕

劉斧 北宋の人。著に『青瑣高議』前集十巻後集十巻がある。『摭異』は現在、散逸して伝わらないが、清・翁方綱（一七三三―一八一八）の『蘇詩補注』巻一には、宋刊本『注東坡先生詩』に「杜子美、未陽の聶侯に依る。侯礼を以て之を遇せず。忽忽として怡ます。多く村落の間に遊ぶ。一日、江上の洲中に過り、飲酔して酒家に宿す。其の夕、江水暴かに漲り、驚湍の為に其の尸を漂泛せらる。元（玄）宗南内に還るに泊び、之を思ひ、天下に詔して之を求む。聶侯乃ち土を江上に積みて曰く、子美、白酒牛炙の為に厭飲して此に死せり、と。詩人皆之を憾み、其の祠に題す。皆感歎の意有り」と引くのを挙げる。なお、南宋・黄鶴の『杜工部年譜』（宋・徐居仁編、黄鶴補註『集千家註分類杜工部詩』に載せる）に「摭異謂ふ、玄宗南内に還つて、子美を思ひ、天下に詔して之を求む。聶侯乃ち空土を江上に積みて曰く、死して此に葬る」と見える。東陽は、清・王械『秋燈叢話』に拠つてこれを引くか。↓「補注一」参照。

(注89)

太白 李白(七〇一―七六二)の字。李白が水面に映った月を捉えようとして溺死したという伝説については、五代後周・王定保『唐摭言』に「李白、宮錦袍を着て采石江中に遊ぶ。傲然自得し、旁らに人無きが若し。酔ひに因って水中に入り月を捉へて死す」とある。『容齋隨筆』卷三、「李太白」の条に「世俗多く李太白当塗采石に在り、酔ひに因って舟を江に泛べ、月影を見て俯して之を取る、遂に溺死すと言ふ」のは、俗伝で実に信するに足らず、「蓋し杜子美、白酒牛炙を食らひて死す者と同じなり」という。李白の〈捉月〉説話については、松浦友久『李白伝記論』第十二章参照。なお、同章には杜甫の終焉説話についての考察も収められている。

(注90)

聶耒陽云々詩 詳註卷二十三、一四五。

(注91)

小説家 晩唐・鄭処晦『明皇雜錄』に「杜甫、後、湘潭の間に漂寓し、衡州耒陽県に旅す。頗る令長の厭ふ所と為る。甫、詩を宰に投じ、宰遂に牛炙白酒を致して以て遺る。甫、飲むこと過だ多く、一夕にして卒す。集中に猶ほ聶耒陽に贈る詩有るなり」という。

(注92)

宋人題公祠詩 『詩人玉屑』卷十九に引く、南宋・鄒定(字は応可、一一二―一一七〇)の「杜工部祠を過る」詩に「疇昔詩を哦し耒陽を憶ふ、茲に檣を捧ずるに因って祠堂を過る。一生忠義孤吟の裏、千載淒涼古道の傍。自らはれ風霜病骨を侵す、牛酒詩腸を浼すに干かるに非ず。明朝解纜す秋江の上、問訊す先生一瓣香」と見える。なお、鄒定については、楊万里に「鄒応可墓誌銘」(『誠齋集』卷二六)がある。また『詩人玉屑』には寛永十六年(一六三九)の和刻本がある(汲古書院刊『和刻本漢籍隨筆集』第十七集に影印を収む)。

(注93)

風疾云々詩 詳註卷二十三、一四五七。

(注94)

清明詩 詳註卷二十三、一四三一。

(注95)

賓至詩 詳註卷九、〇三九八。ちなみに、東陽の詳解027に「按ずるに〈客有り〉詩に云ふ、氣を患つて句を経て久し、江に臨んで宅を卜して新たななり、と。又た〈興を遣る〉に云ふ、衰疾那んぞ能く久しからん、と。疑ふらくは当時痲を患ふ、腰脚自由ならず。後、湖南に在つて半体偏枯なるは、蓋し再発するなり」という。

(注96)

客居詩 これは雲安での作。詳註卷十四、〇八六三。なお、〈臥病憂脚廢〉は、各本、〈臥愁病脚廢〉(臥して愁ふ病脚の廢するを)に作る。東陽の記憶違いであろう。

(注97)

旧疾云々 これは「客居」詩ではなく、「客堂」詩(詳註卷十五、〇八七二)に見える句。なお、詳注では〈廿〉を廿に

作る。

(注98) 杜鵑詩 詳註卷十四、〇八六一。

(注99) 親朋云々「岳陽樓に登る」詩(詳註卷二十二、一三六三)に「昔聞く洞庭の水、今上る岳陽樓。吳楚東南に坼け、乾坤

日夜浮かぶ。親朋一字無く、老病孤舟有り。戎馬関山の北、軒に憑つて涕泗流る」と。

(注100) 茫茫云々『世説新語』言語篇に「衛洗馬初めて江を渡らんと欲し、形影慘悴す。左右に語りて云ふ、此の茫茫たるを見れば、覺えず百端交こもりも集まる。苟も未だ有情を免れざれば、亦た復た誰か能く此を遣らん」と。衛洗馬は、晋・衛玠

のこと。《茫茫》は、水面の果てしなく広がるさま。

(注101) 斤両相称 三浦梅園(名は晋、享保八年「一二七三」)「寛政元年「二七八九」の『詩轍』卷六に「斤両ト云語ハ、衡ノ

カケ目ヨリ起リテ、ツリ合ノ輕重ナリ」という。

(注102) 徐氏筆精 明・徐炯(一五七〇～一六四五)撰の考証隨筆。全八卷。崇禎五年(一六三三)刊本がある。その卷三、《詩

評》に「杜甫の岳陽樓詩、大都浩然と伯仲す。杜の起首句、昔聞く洞庭の水、今上る岳陽樓、と。孟云ふ、八月湖水平らかに、虚を涵ひたして太清に混ず、と。杜の首聯、吳楚東南に坼け、乾坤日夜浮かぶ。孟云ふ、氣は蒸す雲夢沢、波は撼うごす岳陽城、と。皆渾雄警策。杜の次聯に親朋一字無し、孟の端居聖明に恥づと云ふに至つては、謂いはれ無きを覺ゆ。而して結句各おの相称はず」とある。孟浩然(六八九～七四〇)の作は「洞庭湖を望んで張丞相に贈る」と題する詩。古来、洞庭湖を詠じた作品のなかで、杜甫の「岳陽樓に登る」詩と並び称される。《警策》は、詩文の中で全体を引き立たせる重要な箇所、感動の中心。西晋・陸機「文の賦」(『文選』卷十七)に「片言を立て要に居る、乃ち一篇の警策」と。なお、『夜航余話』卷之下にも「徐氏筆精」を引く箇所がある。岩波・新日本古典文学大系本三四七頁参照。ちなみに、徐炯については市原亨吉「徐炯年譜稿略」(『小治政後退休記念中国文學論集』所収。筑摩書店、一九七四年)がある。

(注103) 談何容易 前漢・東方朔の「非有先生伝」(『漢書』卷六五、東方朔伝および『文選』卷五十一)に見える。

(注104) 東坡詩註「劉景文・周次元が寒食に同じく西湖に遊ぶに次韻す」詩に「藍尾忽ち驚く新火の後、遨頭及ばんことを要す

浣花の前」と見え、東坡の自注に「成都の太守、正月二日自り出遊す、之を遨頭と謂ふ。四月十九日の浣花に至つて乃ち止む」という。ちなみに、蘇東坡詩集の和刻本には、正保四年「一六四七」刊の王十朋編陳仁錫評『東坡先生詩集』三十二卷(汲古書院『和刻本漢詩集成宋詩第十三輯』に影印を収む)、また明暦二年(一六五五)刊の王十朋等注・劉辰

翁評『増刊校正王狀元集註分類東坡先生詩』（『和刻本漢詩集成宋詩第十一輯』・『同第十二輯』）があり、ここに示した「劉景文」云々の詩は、前者では卷二（遊覽）の部に、後者では卷八（湖）の部に見える。

（注105）

老学庵筆記 南宋・陸游の著。その卷八に「四月十九日、成都之を浣花の遨頭と謂ふ。杜子美の草堂滄浪亭に宴す。城を傾けて皆出で、錦繡道を夾み、開歲宴遊自り是に至って止む。故に最も他時より盛んなり。予蜀に客たること数年、屢しは此の集に赴く。未だ嘗て晴れずんばあらず。蜀人云ふ、戴白の老と雖も、未だ嘗て浣花日の雨を見ざるなり」とある。

（注106）

踏青 青草を踏む意で、春日郊外に出遊すること。その時期については、正月七日、二月二日、三月三日あるいは五月五日と地域や時代によって異なる。中村喬『中国歳時史の研究』（朋友書店、一九九三年）（上巳の風習と行事）参照。

（注107）

乖崖張公 北宋・張詠（九四六―一〇一五）のこと。字は復之。号は乖崖。濮州鄆城（山東省鄆城県）の人。太平興國五年（九八〇）の進士。益州の長官しして治績を挙げた（『宋史』卷二九三）。著に『乖崖先生文集』十二卷がある。

（注108）

陳元觀歳時広記 陳元觀は、南宋、理宗の時の人。伝記は不詳。その著『歳時広記』卷一、〈蜀江に遊ぶ〉の条に「杜氏壺中贅録」を引いて、蜀中の風俗、旧と二月二日を以て踏青節と為す。都人士女絡繹として遊賞す。縋幕歌酒、四郊に散在す。歴政の郡守、強暴の虞れ有るを慮り、乃ち戍兵を岡阜岐塚の上に分遣して、馬を立て旗を張りて之を望ましむ。後、乖崖公蜀に帥たり。廼ち曰く、他虞有るを慮るは、之を聚めて樂しみを為すに若かず、と。乃ち是の日に于いて万里橋自り錦繡器皿を以て綵舫十数隻を結び、郡僚属官と之に分乘し、妓樂の教船、歌吹して前導す。名づけて遊江と曰ふ。是に於いて都人士女、八九里の間に駢し、縦觀すること堵の如し。宝歴寺橋に抵つて出で、寺内に譙す。寺前に一蚕市を翹め、民の交易を縦す。嬉遊樂飲、住歳に倍す。薄暮方て回へる」という。

（注109）

瓣香 形が花卉に似た香。もと禪僧が人を祝福するのに焚いたもので、転じて人を敬仰する意。

（注110）

顧修遠 明末清初の顧宸のこと。修遠はその字（一六〇七―一六七四）。江蘇省無錫の人。近人錢仲聯主編『清詩紀事（二）明遺民卷』（江蘇古籍出版社、一九八七年）に拠れば、明・崇禎十二年（一六三九）の挙人。詩人結社「聽社」の同人で、吳梅村（名は偉業、一六〇九―一六七二）とも交遊があったという。孫微「顧宸及辟疆園杜詩注解」（『杜甫研究學刊』二〇〇二年第一期）がある。その著『辟疆園杜律註解』十七卷は、康熙二年（一六六三）に刊行され、元禄六年（一六九二）刊の和刻本がある（汲古書院刊『和刻本漢詩集成唐詩第二輯』に影印を収む）。138「長沙にて李十一銜を

送る」詩（詳註卷二十三、一四五六）の註解に、「詩に云ふ、〈朔雲寒菊〉と。応に是れ秋尽冬初なるべし。公卒するの月、考ふ可らず。是の詩に拠れば当に冬に卒するなるべし」とあり、更に「公、乾元二年の秋に于いて秦州に客たり。十月同谷県に往き、李と同じく地を此に避く。今、洞庭に在り復た相逢ふ。故に〈洞庭相逢ふ十二秋〉と云ふ。乾元二年己亥自り大曆五年庚戌に至る、凡て十二秋なり」云々という。顧修遠の説は、宇都宮遯菴の二つの注釈書、即ち元禄九年（一六九六）刊の漢文による鼈頭増注本『杜律集解』および元禄十年（一六九七）刊のカナ交じり文による『杜律集解詳説』にも、それぞれ引かれており、東陽も『杜律詳解』のなかでたびたび言及する。なお、東陽が〈南康州〉というのは、〈西康州〉の誤り。西康州は同谷県のこと。

（注111） 祐聖夫人 崔旰の妾、任氏の封号。↓「補注二」参照。

（注112） 蜀記 北宋・晁公武『郡齋讀書志』卷八には宋・張守約撰『蜀記』一卷を、南宋・陳振孫『直齋書錄解題』卷八には唐・鄭緯撰『蜀記』二巻を著録する。いずれも現在、散佚。東陽が何に拠って引いたか不明だが、例えば、南宋・扈仲

榮等輯『成都文類』卷七、葛琳の「浣花亭に和す」詩の注に「按ずるに蜀記に、梵安寺は乃ち杜甫の旧宅。浣花に在り、城を去ること十里。大曆中、節度使崔寧の妻任氏も亦た之に居り、後に捨して寺と為す。人為に廟を其の中に立つ。毎歲四月十九、凡て三日、衆此に邀樂す」と見える。但し梵安寺は本来、杜甫の草堂と無関係らしい。王文才「冀国夫人歌詞及浣花亭記」（『草堂』一九八一第二期）および李殿元・李紹先『杜甫懸案揭秘』（四川大学出版社、一九九六年）の〈成都杜甫草堂之謎〉参照。

（注113） 崔寧 もとの名は旰。大暦元年（七六六）四月、劍南西川節度使となり、大暦三年（七六八）に入朝して寧という名を賜った。『旧唐書』卷一一七、『新唐書』卷一四四に伝がある。（注56）参照。

（注114） 温州 今の浙江省温州市。

（注115） 杜十姨 ↓「補注三」参照。

（注116） 続文獻通考 石川竹厓「杜律詳解序」（注29）参照。

（注117） 王弼州宛委餘篇 石川竹厓「杜律詳解序」（注28）参照。

（注118） 孟子曰云々（注80）参照。

（注119） 良工苦心 杜甫の「李尊師が松樹障子に題する歌」詩（詳註卷六、〇二二五）に「已に知る仙客意相親しむを、更に覚

ゆ良工心独り苦しむを」とあるのに基づく。

(注120)

文献足徴『論語』八佾篇に「夏の礼は吾れ能く之を言へども、杞は徴するに足らざるなり。殷の礼は吾れ能く之を言へども、宋は徴するに足らざるなり。文献、足らざるが故なり。足らば則ち吾れ能く之を徴せん」とあるのに基づく。もと、文は典籍、献は賢人の意。

(注121)

文化十二年乙亥 西暦一八一五年。時に東陽五十八歳。ちなみに、「寿壙誌銘」によれば、この歳の夏、江戸から帰国する途中、無断で鎌倉を遊覧したのが弾劾の対象となり、俸禄を削られ組附に賭され、儒職はそのままであったが講義などは無論できようはずもなく、「是れ自り意を進取に断ち、専ら力を著述に肆す。孝経論語春秋諸経義註成るも、屯蹇日に甚だしく、家は徒だ四壁立つのみ。諸大夫の賑済に頼つて、溝壑に填めざるを得たり」という厳しい状況にあった。津阪治男『津坂東陽伝』七四頁～七六頁参照。臘は、中国では十二月八日の臘祭の日だが、ここではあるいは大晦日を指すか。

(注122)

稽古精舎 東陽の書斎の名。稽古は、古のことを調べ考える意。学問をいう。語は『尚書』堯典に見える。なお、東陽は「寿壙誌銘」のなかで、自身について「微身畎畝の中より起こり、頗る稽古の力を効すを得、草木と共に朽ちざるに庶幾し」というが、これは「後漢書」恒榮伝に「(恒)榮を以て太子少傅と為し、賜ふに輜車乘馬を以てす。榮大いに諸生を会し、其の車馬印綬を陳ねて曰く、今日の蒙る所、稽古の力なり」とあるのによる。精舎は、学舎・書斎の意。南宋・呉曾の『能改齋漫録』巻四、〈辯誤〉の条に王観国の『学林新編』を引いて「古の儒者は、生徒を教授し、其の居る所皆之を精舎と謂ふ」という。なお、稽古精舎は東陽の子拙脩に受け継がれ、齋藤拙堂に「稽古精舎記」(『拙堂文集』巻一)がある。『津坂東陽伝』二二頁参照。

〔補注一〕「新舊唐書」以下「載入本傳誤矣」まで、これは清・王楙『秋燈叢話』(乾隆五十六年「一七九二」刊)卷十三、〈李杜死狀訓傳〉の条に基づくものであろう。参考のために次に挙げておく。

新舊唐書皆載子美客耒陽、以啖牛炙白酒、一夕卒。考之杜氏年譜、並無其事。按元微之撰子美墓誌云、扁舟下荆楚、竟以寓卒、旅殯岳陽。而呂汲公亦云、夏還襄漢、卒於岳陽、足爲確証。劉斧摭遺小說謂子美來耒陽、醉宿酒家、江漲漂沒。元宗詔求之、聶令積土江上、奏子美牛酒飫死、葬此以應詔。史氏不察、沿其謬、載入本傳、誤矣。至太白卒於當塗李陽冰家、葬於謝家青山、史冊昭然。捉月騎鯨之說、不知何據。子美懷李白詩有應共冤魂語、投書贈汨羅。及夢

李白詩、水深波浪濤、無使蛟龍得句。疑當時必有妄傳太白墜水死者、故子美云云。後世或因公詩附會耳。夫李杜齊名、爲千古詞壇之冠。其歿也、誰傳亦復相同、誠足異已。

ちなみに、東陽は『杜律詳解』卷下「詠懷古跡」五首其三の注では「秋燈叢話」の書名を挙げている。なお、ここに示したのと全く同じ文章が、清・杭世駿（一六九六―一七七二）『訂訛類編』卷二にも見えており、それには出処を明らかにしていないものの、おそらくは『秋燈叢話』に拠ったものと思われる。

〔補注二〕このことに関連して、『夜航詩話』卷四に次の如く見える。

蕉中が遨頭の日には少陵を祭る詩の序に曰く、四月十九日、浣花遨頭日なり。譜を按ずるに、大曆五年、公年五十九。春、潭州に在り、夏四月、臧玠の乱を避け衡州に入り、柳州に如かんと欲し、未陽に至り暴かに卒す。則ち遨頭の日は、疑ふらくは是れ忌辰なり。余の院に公の画像を蔵す。是の日供を設け之を祭る、と。此の説臆度にして考を失す。按ずるに蜀記に、梵安寺は乃ち杜甫の旧宅、浣花に在り、城を去ること十里。大曆中、節度使崔寧の妻冀国夫人任氏も亦た之に居る。後捨てて寺と爲す。人爲に廟を其の中に立て、毎歳四月十九日、凡て三日、衆此に邀祭す、と。又た費著の歳華紀麗譜に、四月十九日浣花は、佑聖夫人の誕生日なり。太守、管橋門を出で、梵安寺に至り、夫人の祠に謁し、就ち寺の設庁に宴す。既に宴すれば舟に登り、諸軍の騎射を観る。倡樂前に導き、流れを浜り、百花潭に至り、水嬉競渡を観る。官舫民船、流れに乗じて上下し、或は水濱に幕帟し、以て遊賞を事とす。最も郊を出づるの勝と爲す、と。浣花遨頭、由縁此の如し。少陵の卒は、十月の交に在り。余、諸を杜律の解に詳らかにす。其の證尤も明らかなり。文海披沙に載す、陳子昂は閬州の人なり。州に陳拾遺の廟有り。訛りて十姨と爲し、遂に廟貌を更めて婦人の像と爲し、崇奉甚だ嚴なり。温州に杜拾遺の廟有り。亦た訛りて杜十姨と爲し、婦人の像を塑し、又た五髭鬚相公に婦無きを以て、移して之に配す。五髭鬚とは、即ち伍子胥なり。拾遺の官、人の身後を誤ること此の如し。子昂屈して婦人と爲る、猶ほ可なり。独り奈何んぞ子美をして鴟夷子皮の妾爲らしむるや。今、任夫人の誕生日を以て、公の忌辰と爲して之を祭る、亦た笑ふ可きにあらずや。

〈蕉中〉は、『詩語解』『文語解』や『詩家推敲』の著で知られる大典禪師（名は顯常、字は梅莊。享保四年〔一七一九〕〜享和元年〔一八〇二〕の別号。『杜律發揮』三卷が、その歿後、文化元年（一八〇四）に刊行された。「遨頭日に少陵を祭る」詩は、天明二年（一七八二）禪師六十四歳の作で、寛政五年（一七九三）刊の『北禪詩草』（汲

古書院刊『詩集日本漢詩』第六卷所収）巻二に見える。なお、東陽が大典と面識交際のあったことは、「夜、蕉中禪師を訪ふ」二首（『東陽先生詩文集』第十二冊）があることから窺えるが、『夜航詩話』巻二に、菊池五山（明和六年「二七六九」）嘉永二年「二八四九」が六如上人（享保十九年「一七三四」）享和元年「一八〇一」の詩才を高く評価しながらも、その人となりを聞いて会うのを欲しなかった話を取り上げ、「然れども此の弊は独り六如のみならず、率むね京僧の常態なり。若し生きて蕉中和尚に見えしめば、其れ必ず酸水三斗を嘔かん」といい、あまり好い印象を持っていなかったようである。（譜）は、宇都宮遯庵の龍頭増広本『杜律集解』に載せる明・単復の年譜。（費著）は、元、成都の人。泰定元年（一二三四）の進士。（歳華紀麗譜）は、成都の風俗行事を記した地誌。一卷。（文海披沙）は、明の謝肇淛（一五六七—一六二四）の著。全八巻。宝曆八年（一七五八）刊の和刻本がある（汲古書院刊『和刻本漢籍隨筆集』第五集に影印を収む）。（陳子昂）云々は、その巻七、拾遺の条に見える。陳子昂は、初唐の詩人（六五八—六九九）。梓州射洪（四川省射洪県）の人。官は右拾遺に終わったので、陳拾遺という。（伍子胥）は、春秋、楚の人。名は員。父と兄が楚の平王に殺されたので呉に奔り、呉の力を借りて楚を討ち仇を報じた。呉王夫差が越王句踐を助命しようとしたのを諫め、後に讒言に遭い死を命じられた（『史記』伍子胥列伝）。なお、五髭鬚のことが見えるのは、中唐・李肇の『国史補』巻下（祠廟の弊を叙す）に「毎歲有司の祀典を行なふ者、勝て紀す可からず。一郷一里、必ず祠廟有り。（中略）又た伍員の神像を為る者有り、其の髭を五分し、之を五髭鬚神と謂ふ。此の如きは皆靈有る者多しと言ふ」とあるのが、早い例であろう。（鷓鴣夷子皮）は、ここでは茫齋ではなく伍子胥のこと。伍子胥が死んだ後、その亡骸を鷓鴣夷（馬革で造った袋）に入れて江中に投じた。南宋・俞琰『席上腐談』巻上に「温州に土地有り。杜拾遺に夫無く、五撮鬚相公に婦無し。州人、杜拾遺を迎へて以て五撮鬚に配し、合はせて一廟と為す。杜十娘は誰と為す、乃ち杜拾遺なり。五撮鬚は誰と為す、乃ち伍子胥なり。少陵靈有らば、必ず子胥に笑ひて曰はん、爾尚は相公の称有り、我は乃ち十娘と為る、豈に我を雌にせざらんや」とある。『文海披沙』の記事はあるいはこれに基づくか。（土地）は土地神。

〔補注三〕 ちなみに、明・張鼎思編『琅邪代醉編』（延宝三年「二六七五」）の和刻本あり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集』第七集に影印を収む）の巻十九に〈浣花夫人〉の条があり、それには任氏の生日を三月三日とし、次のように云う。

成都の浣花溪に石刻の浣花夫人の像有り。三月三日、浣花夫人の生辰為り。城を傾けて出で遊ぶ。地志に云ふ、夫人

姓は任氏、崔寧が妾。按ずるに通鑑に、成都の節度使崔旰入朝す。楊子琳、虚に乗じて成都に突入す。旰が妾任氏、家財を出し兵を募つて数千人を得、自ら帥ひきめて以て之を撃つ。子琳敗れて走る。朝廷、旰に尚書を加へ、名を寧と賜ひ、任氏を夫人に封ず。

文貞公杜甫は、字を子美といい、その先祖は襄陽の人である。晋の征南大將軍杜預の遠い子孫にあたる。曾祖父の依藝は、唐の初め河南鞏県の令となり、それで鞏県に居住した。祖父の審言は膳部員外郎、父の閑は奉天県令であり、そのまま杜陵に住んだ。それゆえ長安・洛陽ともども故郷である〔公は杜陵で生まれた。その莊園は洛陽にある〕。公は才能すぐれ束縛をきらう質で、弱冠にして呉・越（江蘇・浙江）齊・趙（山東・河北）に遊んだ。李邕がその才を非凡だとし、進士に挙げられたが及第せず、洛陽に退居した。天宝十載（七五二）、匭（目安箱）に投じて「三大礼の賦」を奉った〔三賦は、本集に見える〕。明皇（玄宗）は召し出して文章を試験させ、集賢院に待機させた。〔宰相陳希烈に阻まれて、沈滞すること四年〕。河西の尉を授けられたが拝命しなかった。〔郡庁で上役にべこべこ頭を下げ俗務にあたふたと奔走するのを嫌ったためである。〕〔官定まる〕詩に見える。右衛率府胄曹參軍に改められた。時に公は四十四歳。十五載（七五六）、安祿山が首都長安を攻落し、公は戦乱を避けるため家族を連れて鄜（字音は孚・州の名）に疎開した。肅宗が即位したのを聞き、身を簞やうし変装して行在所に赴く途中、賊軍の捕虜となったが、節義を固く守つて身を汚すことはなかった。翌年の夏の夜、脱出して行在所にかけつけ天子に拝謁し、左拾遺を拜命した。詔が下されて鄜州に家族を迎えに行くことを許された。官軍が首都を回復し、天子に扈從して長安に戻った。房琯が陳濤斜（長安の西郊）の敗戦の責任をとつて宰相職を罷免されたが、公は房琯と仕官前からの交際があり、上奏文を奉つて、房琯には才幹あり廢免すべきでない旨を論じた。肅宗は激怒してその一

派だとみなし、命じて三司（尚書刑部・御史台・大理寺）合同で取り調べさせたが、宰相の張鎰が弁護につとめ不問に附された。それ以来、はかばかしく引立てられることはなかった。乾元元年（七五八）、とうとう地方に転出させられて華州の司功参軍となった。公が朝廷に立ったのはわずかに十五ヵ月のことである。二年（七五九）、首都圏一帯に飢饉や戦乱があり、官職を放棄して華州を去った。西のかた隴をわたり、秦州に客寓し、まもなく成州同谷県に身を寄せた。薪を背負い橡栗を拾って自活し、餓死したりその寸前の子供たちが数人あった。この歳の冬、ついに一家を引きつれて蜀に入った。当時、裴冕が節度使として蜀を治めており、公のために扶持米を支給してくれた。翌年の夏、成都の浣花里に竹や樹を植え、川を背にして仮の住まいをこしらえ、存分に酒を飲み詩を吟じ、田舎の農夫たちと親しくつき合った。嚴武が成都の尹（長官）として赴任して来ると、公とは代々のよしみがあり、その待遇ぶりはことのほか手厚かった。公は傲慢で大言壮語する質で、嚴武がその家を訪問しても、時には冠をかぶらぬまま会うことがあった。かつて酔っ払って嚴武の寝台に上がり込み、嚴武を睨みすえて、「嚴挺之どのにまさかかような息子がいようとは」と言った。嚴武もやはり気短で乱暴ものであったが、さからいはしなかった。『新唐書』に「杜甫が酔っ払って嚴武の寝台に上がり込み」云々とあり、「嚴武はこれを根に持ち、ある日、杜甫を殺そうとしたが、冠が三度すだれの留め金に引っ掛かった。そばのものが嚴武の母に報せたので、母堂が杜甫を救いにかけて思い止まらせることができた」という。『旧唐書』にはもとよりこの話はない。けれど、唐の小説に載っているもので、『新唐書』がその誤謬をそのまま踏襲したのであらう。『容齋隨筆』に詳しく弁じてある。上元二年（七六〇）、しばらく蜀州の新津県に赴き、まもなく成都にもどった。宝応元年（七六二）嚴武が朝廷に帰任することとなり、公は巴西まで見送りにいった。おりから徐知道が謀反をおこし蜀が乱れ、そこで梓州に入った。冬、成都に家族を迎えにゆき梓州に至った。翌年（七六三）、漢州および閬州に往き、冬、梓州にもどった。この歳、京兆府功曹参军に召されたが、赴かなかった。（公は、甚だ困窮していたが、下役人になることを潔しとしなかったのである。「馬巴州に別

る」詩に見える。『旧唐書』は、同谷に客寓した時の作とし、かつ「道梗して赴くこと能はず」というが、誤りである。広徳二年（七六四）、復た梓州・閬州の間にさまよった。かくして荆南に下ろうとし、舟を用意していた。嚴武が再び劍南東川。西川の節度使となり、そこで復た成都に帰った。嚴武が上奏して節度使の参謀とし、檢校工部員外郎を授けられ「朝廷の官に列ならないのを試官とか檢校官という。けだし名目は官位であるが実質は爵位である」、緋魚袋を賜わった（緋袍を着、銀魚袋を帯びる。品階五品以上の章服。工部員外郎は従六品上。けだし特恩によって仮に与えるもの。唐代の人は章服を重んじた。公の詩に、しばしば言及する）。永泰元年（七六五）、嚴武が亡くなり、公は頼るあてが無くなった。ちょうどその時、崔旰（旰）が乱をおこし、蜀地方は大いに乱れ、その身の上はますますゆきづまった（『旧唐書』に、「嚴武がなくなり、そこで東蜀に遊んで高適に頼ろうとした。（杜甫が梓州に）やってくると、高適は亡くなった」というが、誤りも甚だしい。高適は、東川節度使から入朝して散騎常侍を拜命し、そうして亡くなったのである。公の集に「忠州にて高常侍が亡するを聞く」詩がある）。公が蜀に滞在したのは都合七年、ここでついに東に（長江を）下り、戎州から渝州に至り、まもなく忠州に赴き、かくて雲南（安（夔州の属県）に入つてそこに居住した。大暦元年（七六六）、夔州の府内に遷った。二年（七六七）、赤甲及び瀼西・東屯（いずれも夔州の属邑）に遷った。三年（七六八）春、ようやく三峡を出て、しばらく江陵に居た。秋、移つて公安に留まった（公安県は江陵に属す。『旧唐書』にいう、扁舟にて三峡を下り、まだ舟を繋がないうちに江陵が乱れた。そこで襄陽・衡州のあたりをさまよった」と。これもやはり正しくない。公の集に、江陵および公安に居る詩が、はなはだ多い）。冬、岳陽に赴いた。四年（七六九）春、ついに潭州に入った。夏、湘水を遡つて衡州に赴いた。暑さに参つて復た潭州にもどった。五年（七七〇）四月、藏玠の乱に遭遇し、再び衡州に入った。公が蜀を離れてから漂泊すること六年、これ以前、船上生活を送るなかで中風にかかり、半身が不自由になった（『峡中物を覽る』詩にいう、「舟中病を得て衾枕を移す」と。けだし夔州に至る前に、すでに病を得ていたのであろう）。最後には旅先でなくなった。（月日は不詳）。享年五十九。岳陽に殯した（『旧唐書』および年譜

にいずれも「耒陽に卒す」というのは、正しくない。長子の宗文は早くに亡くなり、次子の宗武は江陵に漂泊したまま終わった。元和（八〇六～八二〇）年間に、宗武の子、嗣業が、父の遺命を受け柩を遷して、偃師県（河南省）の首陽山に埋葬した。元稹がその墓誌を作り、深く敬慕の意を表した（「文は、本集に見える」）。元の至元二年（一三三六）、諡を追贈して〈文貞〉といい、浣花草堂で崇祀した。公は天賦の詩才を有しており、若くして李白と名を齊しくし、当時〈李杜〉と称した。学識ひろく、古今に通じており、声律は清新で、対偶表現がびたりと決まり、表現の技巧をつくり内容のよさをつくりしている。とても李白が及ぶところではない。けだし、その出処進退の労苦、喜樂悲憤の情や賢を好み悪を憎む正義感をひたすら詩に表現したのである。そしてさらに君に真心を捧げ国を憂い、時世を傷み戦乱を気につけ、それが詩の主旨となっている。その詩を読めばその時代がわかる。それゆえ当時〈詩史〉とよばれた（『本事詩』に見える）。文集六十巻がある。韓昌黎が称えている、「李杜文章在、光焰万丈長」と。かかる具合にその詩は崇尚されたのである。蘇東坡はいう、「詩は個人的な感情から発して、結局は忠孝（君主や親を思う真心）に止まるものである。古今に詩人は数多くいる。だがそのなかで公を第一だとするのは、流落して飢えや寒さに苦しみ、生涯用いられることがなかったにもかかわらず、一椀の飯食う間でさえいまだかつて君恩を忘れることなかったためではなからうか」と。ああ、これこそ「詩に聖」であって万世の宗師たる所以である（楊万里がいう、「李白は詩に神であり、杜甫は詩に聖である」と。按ずるに、後世の人が〈詩聖〉と称するのは、これによるものか。王右軍を〈書聖〉というようなものである）。

新旧の『唐書』は、いずれも公が耒陽（湖南省）に身を寄せていた時、牛炙白酒をしこたまくらった挙句に一夕にして卒したという記事を載せている。これを公の年譜に突き合せて考えてみると決してこのような事実はない。元微之が撰した墓誌に「扁舟にて荆楚（湖北省・湖南省一帯）に下り、とうとうそのまま寄寓先で卒した。岳陽（湖南省）に旅殯した」といい、呂伋（汲）公も「夏、襄漢（湖北省）に還り、岳陽に卒した」といってお

り、確証となすに充分である。劉斧の『摭言』に「公は未陽にやつて来て、舟の中で酒を飲み酔っ払った。その夕べ、川が急に増水して舟ごと流され呑み込まれてしまい、どこに漂流したかわからなくなった。折しも朝廷では詔を下して彼を探していた。聶知事はそこで江の傍に土を積み上げ、公が牛肉や酒を食べ過ぎて死に、ここに葬ったと上奏して詔に応えた」とある。史官がよく調べもせずに、その謬伝にしたがい、記載して正史の本伝に入れたのは誤りである。漂流して行方不明となったというのは、李白が月を捉えようとして溺死したという伝説と同じようなものだ。公はかつて衡山に遊び暴雨に阻まれて、数日食物を得ることができなかった。それについては「聶耒陽、僕が水に阻まるを以て、書もて酒肉を致し、饑を荒江に療さしむ。県に至り、聶令に呈す」詩がある。けれど、小説家がこの詩によって事実無根のでっちあげをしたのだ。宋人が公の祠に題した詩に云う、「自らはれ風霜病骨を侵す、牛酒詩腸を浼すに干かるに非ず」と。ここに見識が示されている。公が舟住まいして中風を病んでいたことを、年譜には載せそこなっている。詩集の中に「風疾舟中枕に伏して懷を書す三十六韻」詩があり、また「清明」詩に「此の身漂泊西東に苦しみ、右臂は偏枯半耳は聾。寂寂舟を繋いで双び下る涙、悠悠枕に伏して左空に書す」という。けれど湖南に在る時の作であろう。当初、浣花の草堂にいた時、「賓至る」詩に「老病人に扶けられて再拝難し」という。雲南（安）での「客居」詩には「病に伏して脚の廢するを憂ふ」とあり、又た「衰疾廿載来、衰年足無きことを得んや」という。「杜鵑」詩には「身病みて拝すること能はず、涙下りて迸泉の如し」という。以上の詩例からすれば、その患いは年来のものであった。されば峽を出て以来、ほとんど舟住まいをしたのである。注釈家はこのことを詳らかにせず、それゆえ病を憂える詩句をどれも漠然とみて常套表現だとみなしており、じっくり考えたり何かを感じとったりすることができなかった。例えば、「親朋一字無く、老病孤舟有り」のような詩句は、ここからその洞庭湖に臨む心情を想像するならば、いわゆる「此の范范に対して、百端交こも集まる」（果てしなく広がる水面を前にす

ると、さまざまな思いが集まってくる」というものであつて、その愁思に耐えないのは、眼界に広がる湖面と同じく極まらない。ただたんに舟車も病軀を載せることができないというところではない。「呉楚東南に坼け、乾坤日夜浮かぶ」に匹敵する重みがある所以である。ところが、『徐氏筆精』には、こともあろうに「杜甫の岳陽樓の詩は、前半は雄渾で警策となつてゐるが、〈親朋一字無し〉に至つては、なんら謂れがないように思うし、結句もやはり不釣り合いだ」と言つてゐる。ああ、談ずるのはなんとも容易ではない。すべて詩を読む場合には、作者の實際を知らなければ、詩の生きた心は見えなくなつてしまふ。深く惜しまずにおれようか。公が卒した月日は分からなくなつてゐる。宋代、成都の太守は二月二日から出遊し、〈遨頭〉と号した。男も女も長椅子を列ねてこれを見物した。大勢で春を追つて行樂し、四月十九日になつてようやく終わる。この最後の日を〈浣腸花遨頭〉と言ひ、公の草堂の滄浪亭で宴が開かれた。成都中の者がこぞつて出かけ、綾錦を着飾つた人々が道の両側を埋めつくし、他の時よりも最も盛大であつた。蘇東坡詩の自注及び『老学菴筆記』に見える。けだし、もとは〈踏青〉の行事に由来し、乖崖張公が長官として蜀を治めた時に始まるものである。陳元靚の『歳時広記』に、このことを詳しく述べてゐる。後代の者には崇敬のあまり、この日を公の忌辰としたものがある。これは年譜に「四月、衡州に入る。柳州に如^ゆかんと欲し、耒陽に至つて卒す」というのによつてこのような臆測をしただけのことである。かつて顧修遠の説を見るに、次のように言う、「公の〈長沙にて李街を送る〉詩に、〈子と地を南（西）康州に避け、洞庭に相逢ふ十二秋〉とあり、末尾に〈朔雲寒菊離憂を倍す〉という。公は乾元己亥（二年）に同谷に避難し、大曆庚戌（五年）まで実に〈十二秋〉である。公は、この歳に卒した。〈朔雲寒菊〉というのは、きつとこの年の秋の末か冬の初めかであろう。公の卒した月は、比定することができないが、この詩に拠れば、冬に亡くなつたに違いない」と。これは、詩から判断して、最も確実である。ただ残念なのは、その忌日がついぞわからぬことだ。〈浣花遨頭〉というのは、なんと祐聖

夫人の誕生日なのである。『蜀記』に「浣花の梵安寺は、もと杜甫の旧宅。大曆中、節度使崔寧の妻任氏がここに居住した。仏を信奉することはなほ篤く、遂に喜捨して寺とした。その後、人々は彼女のために廟をその中に立て、四月十九日、ここに遨遊した」とあるのが、そうである。かつて聞いた話では、温州に杜拾遺の廟があったのだが、それが杜十姨と訛って、とうとう廟のたたずまいを改めて婦人の像を置いた、とのこと。今また任氏の誕生日を公の忌日としている、どうしてしばしば婦人に間違われるのか、どうにも嘆かずにはいられない。公の諡号については、かつて『統文獻通考』を読むと、「元の至元二年（一三三六）、文貞と追諡した」とあった。ただしその出処はわからずにいた。その後、王弇州の『宛委餘編』に目を通すと、「たまたま張伯雨の〈紐憐大監に贈る〉詩をみたところ、それに附された跋に云う、かつて上疏し請うて浣花草堂を祀典に列した。又た請うて諡を賜って文貞という。虞奎章の集に、そのことを記す」とある。『元史』に目を通すと、紐憐伝はあるが、この記事を載せていなかった。公が文貞と諡されたことは、後世ほとんど知られていない。『通考』は、けだしこれを取材するのに、あるいは別に拠るところがあったのだろうか。古のことに広く通じた人の考証に俟ちたい。孟子は「その詩を誦しその書を読む。その人を知らずして可ならんや」というが、公の一生に於いて遭遇した出来事の概要を詳しく知らなければ、その時世を念い事物に感ずる詩の趣旨がわからず、せつかくの良工の苦心に負くことが多い。それゆえ墓誌・年譜・新旧『唐書』を参考にし、その傍ら広く諸々の書物に載録する事柄で、文献の徴するに足るものを採用して、謹んで公の伝を記した。公の詩を読む者に便宜をはかったのである。

皇和文化十二年乙亥臘前三日、東陽書院の稽古精舎に書す

杜律詳解卷之上

伊勢津阪孝緯君裕著

男達有功校

001 題ス張氏ノ隱居^一（〇〇〇四）

魯中^一張叔明、與^二李白孔巢父等^一隱^二于徂徠山^一、號ス竹溪ノ六逸^一。見^二舊唐書李白^一傳^二。此蓋即其人^一也。

山^ハ在^二山東ノ兗州^一。開元三十五年、公遊^二齊趙^一時訪^レ之。時^二公年甫二十有六^一。詩律固^一不^レ待^二晚節^一而細^{ナリ}。眞^二天縱之聖也^一。

（注1）『旧唐書』卷一九〇、文苑伝、李白伝に「少^ホくして魯中の諸生孔巢父・韓準・裴政・張叔明・陶沔^{トウベン}と徂徠山に隠れ、酣歌

縱酒す。時に竹溪の六逸と号す」と。なお、〈竹溪の六逸〉とよばれた時期については、諸説がある。例えば、清・王琦の「李太白年譜」（『李太白全集』卷三十五）には「齊・魯に遊ぶ歲月詳考す可からず」としながらも、ひとまず開元二十三

年（七三五）の条に繫年しているが、寛文生「李白と〈竹溪の六逸〉」（『平野顯照教授退休記念特集中国文学論叢』所収、

一九九四年）では、その時期を、孔巢父が四十歳前後であると推定した上で、「李白が徂徠山に隠れたのは、玄宗に召しかえらるる天宝元年（七四二）もしくは二年の直前だった」とする。また傳璇琮主編『唐五代文学編年史【初盛唐卷】』

（遼海出版社、一九九八年）は、開元二十八年（七四〇）冬に繫年している。

（注2）張氏を張叔明とするのは、南宋・黃鶴以来の説。なお、この詩は『唐詩選』にも採られており、宇野明霞纂・宇野士朗

訂・釈大典集補の『唐詩集註』（安永三年「二七七四」刊）に黄鶴の注を挙げ、釈大典『唐詩解頤』（安永五年「二七七六」刊）は「張叔明与李白等隱^レ於^二徂徠山^一、号^二竹溪ノ六逸^一。盖即其人^一」という。これに対しては、否定的な見方がある

こと、吉川幸次郎『杜甫詩注』第二冊（筑摩書房、一九七九年）に紹介する。他に有力なのは、張建封の父、張玠とする説（四川省文史研究館編『杜甫年譜』）で、陳貽焮『杜甫評伝』上巻（上海古籍出版社、一九八二年）61頁には、張叔明・

張玠の両説ともに確証はないとしながらも、『旧唐書』張建封伝に載せる張玠の人となりや行状を挙げて、張玠説に傾く。

（注3）開元に三十五年はない。三は二の誤り。明・邵宝（字は国賢、号は二泉、一四六〇〜一五二七）の『杜少陵先生詩分類

集註』（鶴飼石斎点の明暦二年「一六五六」刊本あり、現在、汲古書院『和刻本漢詩集成唐詩第三輯』及び『第四輯』に影印を収む）卷二十二、宮室類にこの詩を載せ、張氏を張叔明として、「蓋し公、開元二十五年、齊趙に遊び、李白に従ふ。因つて張氏を訪ふ」という。明・薛益（字は虞卿）の『杜工部七言律詩分類集註』（慶安四年「一六五二」刊本あり、『和刻本漢詩集成第五輯』に影印を収む）卷一、隱逸も同じ。なお、以下、本稿ではそれぞれ邵宝『集註』、薛益『分類』と表記する。また清・徐增（一六一二〜？）の『而庵說唐詩』卷十八もその説に従う。前掲『杜甫年譜』は、開元二十八年（七四〇）杜甫二十九歳の作とする。

ちなみに、徐増は字を子能といい、而庵はその号。長洲（今の江蘇省蘇州）の人。錢謙益（字は受之、号は牧齋。一五八二〜一六六四）や金聖嘆（名は人瑞。一六〇八〜一六六二）と交遊があつた。錢謙益『初學集』卷三十二に「徐子能集の序」が、また『有學集』卷二十に「徐子能黃牡丹詩の序」が見える。『而庵說唐詩』は二十二卷首一卷。各体の詩三百五篇を収め、金聖嘆の分解説によつて評釈したもの。康熙五年（一六六六）刊本等がある。このうち、卷首の「同学に与へて詩を論ず」の部分抜き出し、後人によつて編輯されたのが『而庵詩話』一卷である。攀維網校注『說唐詩』（中州古籍出版社、一九九〇年）があり、わが国では上村亮剣主宰の声教社同人訳説『而庵說唐詩』（刊行年不明）がある。

（注4） 084 「悶を遣る、戯れに路十九曹長に呈す」詩（詳註卷十八、一〇七四）に「晩節漸く詩律に於いて細やかなり、誰が家にか数し^とば去つて酒盃寛ならん」とあり、東陽の詳解に「詩律細」とは、老練円熟、漸く精微に造る^とを言ふ」と。ちなみに、この「題張氏隱居」詩を東陽が高く評価するのに対して、吉川幸次郎『杜甫詩注』には、「何か習作的なもの、幼さを感ずる」とし、「時間を追つての叙述なのが、一因ではないか」と指摘する。

（注5） 子貢が孔子を評して「天之を縦^縦して、将^{はた}と聖ならんとす」（『論語』子罕篇）といった語に基づく。

魯中の張叔明は、李白や孔巢父らと徂徠山に隱遁し、竹溪の六逸と号した。そのことは『旧唐書』の李白伝に見える。けだしまさしくこの人であろう。徂徠山は、山東の兗州にある。開元三（二）十五年、公が齊趙に遊んだ時に訪ねたのである。当時、公は年わずかに二十六。それなのに詩律は晩年を待たずとも細やかである。真に天がゆるしたもうた詩の聖人だ。

春山無^レ伴獨相求^ム 伐木^{トシテ}丁^ニ丁^ニ 山^ニ更^ニ幽^{ナリ}

※伴：ツレ 求：タヅネル 丁丁：ティン／＼ 幽：サビシ

春山ノ二字、見^ニ乘^レシテ暖^ニ而出^ルヲ。爲^ニ第三句^一作^ス地。無^レ伴獨相求^ムハ謂^ニ特^ニ訪^ヲ也。見^ニ景慕之切^一ナルヲ。非^下

爲^ニ遊侶^一所^レ誘、偶然^{トシテ}往^上過^ルニ也。丁音竹耕反。伐木ノ聲相應^{スル}也。伐木^{トシテ}丁^ハ、詩ノ小雅ノ句。下^ニ有^ニ求^レ

友^ヲ語^一。與^ニ獨相求^ム、自有^ニ暗脈^一。夫^レ山^ハ固^{ヨリ}幽^{ナリ}而樵斧^{トシテ}丁^{トシテ}丁^{トシテ}響^ク谷^ニ。更^ニ覺^ニ一段幽靜^一ナルヲ也。梁ノ王

籍^カ詩^{ナリ}、鳥鳴^テ山更^ニ幽^ニ。以^ニ伐木^一代^レ鳥更^ニ妙^ニ。

(注6) 反切による字音表示。竹耕の反は、タウ。例えば、『大広益会玉篇』に「又た竹耕の切。丁丁は、伐木の声なり」と。

(注7) 『詩経』小雅・伐木の第一章に「木を伐ること丁丁、鳥鳴くこと嚶嚶。幽谷自り出でて、喬木に遷る。嚶として其れ鳴く、其の友を求むる声。彼の鳥を相るに、猶ほ友を求むる声あり。矧んや伊れ人、友生を求めざらんや。神の之を聴かば、

終に和し且つ平らかならん」と。

(注8) 『而庵説唐詩』に「山更に幽なりは、夫れ山は固より幽、伐木の声を聞きて而して山の更に幽なるを覺ゆ」云々という。

(注9) 梁・王籍の「若耶溪に入る」詩に「蟬噪しうして林逾いよ静かに、鳥鳴いて山更に幽なり」と。

《春山》の二字は、暖かさにつられて出かけるのをあらわす。第三句のために下地となつてゐる。《伴無くして独り相求む》は、わざわざ訪ねることをいう。遊び仲間誘われて偶々出かけて訪ねたのではない。《丁》、字音は竹耕の反。《伐木丁丁》は、『詩経』小雅の句。その下文に「友を求む」という語があり、《独り相求む》とは当然ながら暗脈（隠れたつながり）がある。そもそも山は本来ひっそりとしており、きこりの振るう斧の音が《丁丁》と谷に響き、更にいちだんと静寂を感じる。梁・王籍の詩に「鳥鳴いて山更に幽なり」とあるが、《伐木》でもって《鳥》に代えたのが、更に絶妙である。

澗道ノ餘寒歷^ニテ冰雪^一 石門ノ斜日到^ニ林樾^一

※歴：ワタリ

上ノ句、所^(注11)歴之境。入^(注12)コト山ニ漸ク深、澗道尙寒ク、冰雪未^(注13)融セ。下ノ句、所^(注14)到之候。山益^(注15)幽靜、林邨石門、夕景深宵。兩句串讀。然^(注16)トモ錯綜シテ成^(注17)ス句ヲ。倒装^(注18)ニシテ而流水、對法尤奇。蓋侵^(注19)ニ餘寒一、歷^(注20)ニ澗道之冰雪一、至^(注21)ニ斜日一、到林邨之石門一也。石門或^(注22)以爲^(注23)ニ山ノ名ト。見^(注24)下^(注25)レハ其與^(注26)ニ澗道一爲^(注27)上^(注28)レ對、不^(注29)三必^(注30)シモ實^(注31)ニ指^(注32)ニ其地一ヲ。已上統^(注33)テ來訪之由一、下乃美^(注34)主人一、致^(注35)ス其景慕之忱^(注36)一。

(注10) 邨は邱と同じ。底本は丘に作るが、清代、孔子の諱(丘)を避けて邱字を用いたことに基づき、東陽がこのように改めた。後出005「田九判官梁邨に贈る」詩の詳解で、東陽は孔子の諱を避けたのを康熙朝に始まるとしているが、太田辰夫「丘と邱」(汲古選書『中国語文論集文学篇』所収、一九九五年)に拠れば、『東華錄』雍正三年(一七二五)十二月庚寅の条に見える由。また王彦坤編著『歷代避諱匯典』(中州古籍出版社、一九九七年)には清・葉名澧『橋西雜記』の記事を挙げ、やはり雍正三年のこととする。

(注11) この〈所歴之境〉及び下文の〈所至之候〉という言い方は、『而庵說唐詩』に見える。

(注12) 対句の名。それぞれの句中の語の配列順序が顛倒錯綜しているもの。古田敬一『中国文学における対句と対句論』(風間書房、一九八二年)参照。なお、三浦梅園(一七三三―一七八九)の『詩輟』巻五にも、倒装の条がある。

(注13) 一聯のなかで意味の流れが上句から下句へ直線的につながるもの。東陽の『夜航詩話』巻六に「聯中兩句有り、一連流走直に下る者、之を流水対と謂ふ」とい、「老杜好んで此の法を用ふ」として、杜甫の詩から幾つか用例を挙げ、この一聯「澗道餘寒歷氷雪、石門斜日到林邨」について、「倒装にして流水、對法尤も妙」という。

(注14) 『唐詩解頤』に「餘寒^(注15)歷^(注16)ニ氷雪之澗道ヲ、斜日^(注17)到^(注18)ニ林丘之石門一。錯綜^(注19)シテ成^(注20)ス句ヲ」と。

(注15) 清・顧宸『辟疆園杜律註解』七言律詩卷一に「黃鶴が曰く、石門は齊州に属す。公、開元の間、李白・高適と共に齊趙に遊ぶ。故に石門に在りと。愚謂へらく石門は澗道と對を爲す。必ずしも實に其の地を指さず。只だ隱居の処、石を門と爲すを言ふのみ」と。ここに挙げた顧宸の説は、宇都宮遯庵(一六三三―一七〇九)頭注の『鼇頭増広本杜律集解』(元禄九年「一六九五」刊)や『杜律集解詳説』(元禄十年刊)にも引かれている。

なお、顧宸については、「詩聖杜文貞公伝」の(注110)参照。

(注16) 『而庵說唐詩』に次の頸聯について説く中で「一句は是れ子美其の景慕の忱を致す」という。

上の句は、通つて来た道筋のありさま。しだいに深く山中に入るにつれ、《澗道》（谷ぞいの道）はまだ寒く、《氷雪》もとけずに残っている。下の句は、やつてきた頃おい。山はますます静寂で、《林邱》《石門》は、夕日に包まれ、しんと静まりかえっている。この二句は一続きに読むが、しかしながら語の配列が錯綜して句を成しており、倒装対でしかも流水対となっており、対句の表現方法がとりわけ奇抜である。けれど《餘寒》を侵して《澗道》の《氷雪》をへ、《斜日》に至つて《林邱》の《石門》についたのだ。《石門》を山の名とする説もあるが、《澗道》と対偶をなしていることからすれば、必ずしも実際に地名を指すものではない。以上、来訪の理由を記し、以下では主人をほめ、心からの景慕の念を表している。

不_レ貪_二夜識_二金銀ノ氣_一遠_レ害_二朝_二看_二麋鹿ノ遊_一

※不貪…ムヨク 識…ミツケル 遠害…セカイヲハナレ

不_レ貪_二謂_二其識之清_一夜識_二金銀ノ氣_一境寂夜清_二可_レ想_一大抵名山_{ニハ}必有_二金銀ノ藏伏_一中庸_{ニ云}今

夫_レ山_ハ寶藏興_ル焉。唯其不_レ貪_一是_レ以_レ識_二其氣_一豈凡_ニ夫肉眼_ノ所_レナラン及哉。蓋張氏清眞寡欲_ニ故_ニ能識_二寶氣_一。

晴夜望_二山_一指_二點_二其處_一以_レ示_二客_一也。東坡謂深山大澤_{ニハ}有_二天地之寶_一唯無_レ意者識_レ之_一即此句之

義_{ナリ}諸註家引_二天官書_一泥_メ矣。遠_レ害_ニ謂_二其識之曠_一夫_レ朝市_ハ爲_二名利之藪_一皆害_レ人機_一張氏

隱_二居_二深山_一與_レ物無_レ競_二又何_レ害_一之侵_二也。朝_ニ看_二麋鹿ノ遊_一謂_二山之深_一孟子所_レ謂舜之居_二深山之

中_ニ與_二鹿豕_一遊_二意_{ナリ}以_二豕ノ字_ハ礙_二眼_一以_二麋ノ字_ハ替_レ之_一見_二其無_二機心_一有_二海翁馴_レ鷗_一意_一。

蓋人自遠_レ害_ニ而伴_二麋鹿之羣_一彼恆_ニ來_二馴_レ者_一亦無_二害_一之憂_一也。案_二スル_二夜ノ字承_二上ノ斜日_一來_一。

朝ノ字又從_二夜ノ字_一帶出_一初斜日ノ時、到_二張氏ノ居_一遂_ニ留宿_ス焉。其境入_レ夜_ニ轉_レ寂、山中寶藏之氣、

堪_レ可_二辨識_一矣。既_ニシテ而天曉_一推_レ窓_ヲ以望_ハ則麋鹿之羣、夜中所_ニ來_二遊_一猶且未_ニ歸_一去_一也。信_ニ出_二

塵寰之表_一殆爲_二遊仙之想_一其所_ニ以獨相求_一果_ニ不_レ負_一也。此聯、上二字成_レ句、下五字即解_二上ノ二

字^マ、
是折腰^(注30)法。

(注17) 清・沈德潜(字は確士、号は帰愚。一六七三―一七六九)の『杜詩偶評』巻四に「貪らずは其の識の清を謂ふ」と。ちなみに、『杜詩偶評』には享和三年(一八〇三)刊の官版がある。

(注18) 『中庸章句』第二十六章に「今夫れ山は、一卷石の多きなり。其の広大なるに及んでは、草木之に生じ、禽獸之に居り、宝蔵興る」と。一卷石は、一個の石。『中庸』は『而庵説唐詩』にも挙げる。

(注19) 肉眼は、仏教語で五眼(肉眼、天眼、慧眼、法眼、仏眼)の一。『翻訳名義集』巻六に「肉眼は近きを見るも遠きを見ず。前を見るも後を見ず。外を見るも内を見ず。昼を見るも夜を見ず。上を見るも下を見ず」とあり、玄奘の「讃弥勒四礼文」(『法苑珠林』巻二十四)に「凡夫の肉眼未だ曾て識らず、為に現す千尺一金軀」と。

(注20) 『世説新語』賞誉篇に「山公(濤)、阮咸を挙げて吏部郎と為さんとし、目して曰く、清真寡欲、万物移す能はずなり」と。清真は、俗を離れてさかしらがなく、ありのままであること。

なお、『而庵説唐詩』では「不貪夜識、又た張氏の身上に在いて説くは、大謬大謬」とし、「此の金銀の氣を識るは、夜の字従り來たる、此れ子美己れの身上に在いて説く」と解し、吉川幸次郎『杜甫詩注』は、「主客」両方とする。

(注21) 東坡は、北宋・蘇軾(一〇三六―一一〇一)の号。「深山大沢」云々は、その「孫武論」上(『東坡集』巻三)に見える。清・朱鶴齡(字は長孺、号は愚庵。一六〇六―一六八三)輯註『杜工部詩集』(巻一)にこれを挙げ、宇都宮遯庵の両著に輯註を引く。

(注22) 『史記』天官書に「大水の処、敗軍の場、破国の墟は、下に積錢有れば、金宝の上に皆氣有り、察せざる可からず」と。

(注23) 『杜詩偶評』に「害に遠ざかるは其の識の曠を謂ふ」と。

(注24) 『而庵説唐詩』に「遠害の二字、當に読み住むべし。何為ぞ害に遠ざかる。蓋し市朝は名利の藪^たなり、皆人を害する機^も。張氏深山に隱居して、世と競ふ無し。是れ害に遠ざかる人、害に遠ざかる地に処るなり」とあるのに拠る。読住は、口語的表現で留意して読む意。

(注25) 『孟子』尽心章句上に「舜の深山の中に居る、木石と居り、鹿豕と遊ぶ。其れ深山の野人に異なる所以の者幾んど希なり」と。豕は、ぶた。

〔注26〕『而庵説唐詩』に「麋鹿遊ぶは、山の深きを言ふ。孟子曰く、舜深山の中に居り、鹿豕と遊ぶと。子美の意は張氏を称美するに在り、豕字眼に得するを以て、故に麋字を以て豕字に替ふるなり」と指摘する。

〔注27〕機心は、巧詐の心。『莊子』天地篇に「吾れ之を吾が師に聞く、機械有る者は必ず機事有り。機事有る者は必ず機心有り。機心胸中に存せば、則ち純白備はらず」と。

〔注28〕『列子』黃帝篇に「海上の人、滬鳥を好む者有り。毎旦海上に之^ゆき、滬鳥に従ひて遊ぶ。滬鳥の至る者百住にして止まず。其の父曰く、吾れ聞く滬鳥皆汝に従ひて遊ぶ。汝取り來たれ。吾れ之を玩せん。明日海上に之^ゆく。滬鳥舞ひて下らず」とあるのに基づく。滬鳥は鷗。

〔注29〕これも『而庵説唐詩』に見える。

〔注30〕『唐詩集註』に明・蔣一葵（字は仲舒）の説を引いて「又云、五六上二字成^レ句^ヲ、下五字即解^ス上二字^ヲ、是折腰ノ體」と述べ『唐詩解頤』に「上二下五、作^{シテ}二句^ト看。意味太深。細玩^{シテ}始^テ知^ン」という。七言句はふつう上四字下三字で切れるが、それ以外の切れ方をするものを折腰法という。三浦梅園の『詩轍』にも見える。

但し、顧宸は「兩句須らく七字一氣に読み下すべし。若し上二字下五字の句法を作^ナさば、便ち文義梗碍す」と注意する。

〈貪らず〉は、その識見の清らかなことをいう。〈夜金銀の氣を識る〉のは、周圀が靜寂であり夜の清らかなことが想像できよう。たいてい名山には必ず金銀が埋まっているものだ。『中庸』に云う、「今天^それ山は宝藏興る」と。ただ〈貪らず〉してこそ、その發する氣を見つけられる。だが、どうして凡夫肉眼の及ぶところであろうか。けだし張氏は清真寡欲なるがゆえに宝氣を見つけることができたのであらう、晴れた日の夜、山を望んでその場所を指さして客に示すのである。蘇東坡が「深山大沢には天地の宝がある。ただ利欲の意無き者のみがそれを見つる」といっているが、これぞまさしくこの句の意味に他ならない。注釈家たちが『史記』の天官書を引いているのは、拘泥しすぎだ。〈害に遠ざかる〉は、その識見の曠達であることをいう。そもそも朝廷や市場は人々が名利を追い求める場所で、みな人を害する陷穽である。張氏は深山に隱遁し、外物と競うことがない。何の害が及ぶうか。〈朝に麋鹿の遊ぶを見る〉は、山が深いことをいう。『孟子』のいわゆる「舜の深山の中

に居る、鹿豕と遊ぶ」という意味である。〈豕〉字が目障りなので〈麋〉字でこれに代えた。機心がないのをあらわし、海辺に住む翁が鷗と馴れ親しんだという故事の趣意が含まれている。けだしその人自身が〈害に遠ざかり〉、〈麋鹿〉の群れと一緒にいるのだろう。いつもやって来て馴れているのは、やはり危害に罹る心配がないためである。案ずるに〈夜〉の字は、上の〈斜日〉を承け、〈朝〉の字は更に〈夜〉の字から導きだされている。初め〈斜日〉の時に張氏の居に到り、そのまま宿泊した。その場所は夜になるとますます静寂で、山中に埋まっている宝の発する気を、充分見つけることができる。やがて夜が明け、窓を推し開いて外を眺めると、〈麋鹿〉の群れが夜中に遊びに来ていた所にまだ帰らずにとどまっている。まことに世俗の外に出て、ほとんどもう仙境に遊んでいるかのような思いがして来る。これこそわざわざ〈独り相求〉めてやって来た理由で、案の定、期待に背かない。この二聯は、上の二字が句を成し、下の五字がびたつと上二字を解説している。これは折腰法である。

乗^レ興^ニ杳然迷^ニ出處^ニ 對^{シテ}君疑^フ是^ニ泛^ニ虛舟^一

※乗興……ウカレテ

乗^レ興^ニ二字、結^レ上^ヲ起^ス下^ヲ、關係尤要ナリ。杳然^ハ猶^レ言^ニ悠然^一。迷^ハ言^ニ疑^テ而不^一決^セ也。出處^ハ用^ニ易^一或出或處^一。公固志存^ス用世^ニ。今見^ニ張氏ノ恬退^一如此^ノ、心竊^ニ有^レ感^スルコト。故^ニ偶發^ニ此言^一耳。結句極^ニ言^ニ心醉^{シテ}而神服^一之^ニ。虛舟^ハ譬^ニ人^一之虛懷^一ナルニ。莊子^ニ方^テ舟^ヲ而濟^ニ於河^一、有^ニ虛舟^一來^テ觸^ル。雖^ハ有^ニ偏心^一之人^ト、不^レ怒^ヲ。人能虛^{シテ}己^ヲ以遊^ハ、世^ニ、其孰能害^セ之^ヲ。其乗^レ興^ニ相忘^{コト}、如^レ泛^ニタルカ^一虛舟^一也。一結深^ク致^ス其景慕之忱^ヲ。蓋昨夕以來、因^レ對^ニ主人清曠^一襟懷^ニ、而吾^モ亦萬慮消盡^{シテ}、胸中如^レ洗^カ、非^ニ復塵寰中ノ人^一、殆與^レ之俱^ニ化^一也。嗟呼、叔明眞^ニ所^レ謂^ニ眞人^一者歟。此篇分^テ爲^ニ二解^一。公ノ七律多^ニ此格^一。下篇^ハ玄^ニ著^レ意^ヲ看^一。

〔注31〕『易』繫辭下伝に「君子の道は、或いは出で或いは処り、或いは黙し或いは語る」と。出は出仕、処は仕官せず野に在ること。『唐詩集註』にもこれを挙げる。ちなみに、明・邵傳『杜律集解』は、「出処に迷ふは、其の來たる所の路を失するなり」と解す。

〔注32〕心酔云々、薛益『分類』に見える。宇都宮遷庵増広本にも引く。

〔注33〕『莊子』山木篇に「舟を方べて河を済るに、虚船有つて來りて舟に触る。偏心有るの人と雖も怒らず。一人有つて其の上在れば、則ち呼んで之を張歛せしむ。一たび呼んで聞かず、再び呼んで聞かず。是に於いて三たび呼ぶときは、則ち必ず惡声を以て之に随ふ。向に怒らず、而して今や怒る。向に虚にして、而して今や実なればなり。人能く己れを虚にして以て世に遊ばば、其れ孰れか能く之を害せん」と。偏心は、偏狹で性急。偏心も同じ。張歛は、舟をどかすこと。なお、「雖有偏心之人」の句、「雖有偏心之人」と訓ずる場合もある。

〔注34〕邵宝『集註』に「其の人に対するに及んでは、則ち疑ふらくは是れ虚舟の泛ぶかと。張君無心にして己れ之と俱に化することを言ふ」と。薛益『分類』も同じ。宇都宮遷庵増広本にも引く。

〔注35〕真人は、道家の語で、道と一体となつた何ものにもとらわれない真に自由な人間をいう。『莊子』大宗師篇に見える。

〔注36〕『而庵說唐詩』卷十七、七言律二に「子美の律詩必ず二解を作す」と。

《興に乗ず》の二字は、上に述べたことをまとめ以下のことを言い起こしており、詩の脈絡上とりわけ重要である。《杳然》は、悠然と言うのとはほぼ同じ。《迷》は、疑つて決しないことを言う。《出処》は、『易』の「或いは出で或いは処る」を用いる。公の志はもとより世に用いられることに在るのだが、今、張氏がこのように恬淡として榮利を慕わない高潔な人柄であるのを見て、心ひそかに感ずることがあった。されば偶々この言を発したのだ。結びの句は、心酔してすっかり敬服していることを言う。《虚舟》は、人の虚心坦懐なるに喩える。『莊子』に「舟を並べて河を渡っているとき、《虚舟》がやって来て接觸したところで、いくら氣短で怒りっぽい人だとしても、仕方のないこととして腹を立てない。人は己れを虚しくしてゆつたりと世に遊べば、いったい誰が害することができようか」とある。《興に乗》って俗世を忘れること、《虚舟を泛べ》るようなものだ。結びは、心か

らの敬慕の念を深く表している。けだし昨夕以来、主人の清々しくからつとした心ばえに接して、自分もくさぐさの憂いがすっかり消え去り、胸中はすっきり洗い流したように思われ、もはや塵俗の人ではなく、ほとんど彼とともに新たに生まれ変わったのである。ああ、張叔明こそ、本当にいわゆる真人なる御仁であることよ。この篇は前半四句と後半四句との二解に分けられる。公の七律では、このスタイルが多い。以下の詩篇で、よく注意して看るがよい。

002 鄭駙馬潜曜宴洞中^(注1) (〇〇二六)

駙馬都尉^(注2)、漢ノ時掌^(注3)御馬^(注4)官ノ名。魏晉以來、凡尙^(注5)公主^(注6)拜^(注7)之^(注8)。潜曜^(注9)見^(注10)孝友傳^(注11)、睿宗之甥。父萬鈞、母^(注12)代國長公主^(注13)。潜曜又尙^(注14)明皇ノ女臨晉公主^(注15)。二代ノ國壻、富貴可^(注16)知。以^(注17)詩ノ意^(注18)案^(注19)之^(注20)、是山莊中ノ洞室、以避^(注21)暑^(注22)者。長安志^(注23)鄭駙馬ノ蓮華洞、在^(注24)神禾原^(注25)是也。公與^(注26)廣文學士鄭虔^(注27)一友^(注28)トシ善。潜曜^(注29)爲^(注30)二虔ノ姪^(注31)、故^(注32)與^(注33)公亦親^(注34)。設^(注35)宴^(注36)洞室^(注37)、延^(注38)公^(注39)俱^(注40)避^(注41)暑^(注42)也。或曰^(注43)、四方山邊^(注44)曰^(注45)洞^(注46)。蓋谷邃^(注47)シテ如^(注48)洞^(注49)ノ非^(注50)必^(注51)巖穴^(注52)也。

(注1) 錢謙益箋注本(卷九) および朱鶴齡輯註本(卷二) は「鄭駙馬宅宴洞中」(鄭駙馬宅にて洞中に宴す)に作る。仇兆鰲註(卷一) も同じ。

(注2) 『初學記』卷十、帝戚部、駙馬の条に「魏晉の後、公主に尚する者皆駙馬都尉に拜せらる。初め、駙馬都尉は、漢武置くなり。御馬を掌る。而漢を歴して、多く宗室及び外戚と諸公の子孫とを之に任ず。魏に至つて何晏、大將軍何進の孫にして、主壻を以て駙馬都尉に拜せらる。(中略)後代、魏晉に因つて以て恒と爲し、公主を尚する毎に則ち駙馬都尉に拜せらる」と。

(注3) 『新唐書』卷一九五、孝友伝に「鄭潜曜は、父万鈞、駙馬都尉、榮陽郡公。母、代国長公主。開元中、主疾に寝ね、潜曜左右に侍し、造次去らず、累ぬること三月面を嚙^(注4)はず。主疾侵^(注5)み、血を刺して書を爲^(注6)り諸神に請ひ、身を以て代はら

んことを^くふ。書を火すれば、^{すなは}而ち神許の二字独り化せず。翌日主癒え、左右に戒めて敢えて語る無し。後、臨晋長公主に尚し、太僕光祿卿を歴す」と。ちなみに、鄭万鈞の「代国長公主碑」（『全唐文』卷二七九）によれば、代国公主は開元二十二年（七三四）六月二十九日に歿した。享年四十八。独孤及（七二五〜七七七）の『毘陵集』卷十七に「鄭駙馬孝行記」があり、それによれば、鄭潜曜は睿宗の外孫で玄宗の甥。

（注4）『新唐書』卷八十三、諸帝公主伝に「代国公主、名は華、字は華婉、劉皇后の生む所、鄭万鈞に下嫁す」と。長公主は、天子の姉妹。公主は女。

（注5）独孤及の「鄭駙馬孝行記」に「公、開元二十八年（七四〇）元「玄」宗の第十二女臨晋公主に尚す」と。なお、『新唐書』諸帝公主伝には「臨晋公主は、皇甫淑妃の生む所、郭潜曜に下嫁す。大曆間に薨す」とあるが、〈郭〉は〈鄭〉の誤り。

（注6）これは元・李好文『長安志図』のこと。その巻中に「蓮花洞は神禾原に在り。即ち鄭駙馬の居・所謂主家の陰洞なる者なり」とある。錢謙益の箋注にこれを挙げ、朱鶴齡の輯註にも引く。ちなみに、李浩『唐代園林別業考論（修訂版）』（西北大学出版社、一九九八年）に拠れば、遺趾が陝西省長安縣樊川小江村鄭谷莊にあるという。

（注7）鄭虔については、後出006「鄭十八虔の台州司戸參軍に貶せらるるを送る」詩（詳註卷五、〇一九六）に見える。なお、鄭虔の官銜（肩書）は広文館學士ではなく、広文館博士とすべきこと、その（注5）参照。顧宸『辟疆園杜律註解』に、「按するに鄭駙馬潜曜は、広文博士鄭虔が姪なり。公、鄭虔と交最も善し。故に皇甫淑の神道碑を作つて云ふ、甫、鄭莊の賓客を忝くし、寶主の園林に遊ぶ」云々と。「皇甫淑の神道碑」は杜甫「唐の故の德儀贈淑妃皇甫氏の神道碑」（詳註卷二十五）のこと。また錢謙益の箋注や朱鶴齡の輯註にも「広文博士鄭虔の姪なり」とする。鄭駙馬については、この他、杜甫に「鄭駙馬に韋曲に陪し奉る」二首（詳註卷三、〇〇八一・〇〇八二）「鄭駙馬の池台にて鄭広文に遇ひ同じく飲むを喜ぶ」詩（詳註卷五、〇一六三）がある。

（注8）何に見えるか不明。

〈駙馬都尉〉は、漢の時代、天子の御馬を掌る官職の名。魏晉以降、公主を娶れば、この官に拝命された。〈潜曜〉は、『新唐書』孝友伝に見え、睿宗の甥で、父は万鈞、母は代国長公主である。〈潜曜〉がさらに明皇（玄

宗むすめの女、臨晋公主を娶った。父子二代にわたって天子の娘婿であり、その富貴の程が分かる。この詩の意味から考えると、ここは山莊中の洞室で、避暑のためのものである。『長安志』に「鄭駙馬の蓮華洞は、神禾原にある」というのが、それである。公は、広文学士の鄭虔と友人で仲がよかったが、〈潜曜〉は虔の甥で、そのため公とも親しかった。洞室に宴を催し、公を招いてともども暑さを避けたのである。或る説に、四方を山がとりまいてゐるのを洞という、とある。けだし谷が深く洞のようになってゐるのである。必ずしも岩窟とは限らない。

主家ノ陰洞細ニ煙霧一 留客夏簾青琅玕(注9)

※細：チラ／＼

陰洞之境、係ル公主ノ賜第二。故ニ曰「主家ノ陰洞ト。爲ニ結句ノ張本ヲ。細ハ謂ニ霏微ヲ。洞中幽陰、臨レ口ニ望レ氣ヲ、其霏如レ霧ノ。極ニ言其涼冷ヲ也。琅玕ハ玉之美ナル者。洞中設ニ珍簾ヲ、碧色清涼如レ玉ノ也。

(注9) 〈青〉字、錢注は〈清〉に作り、「一に青に作る」と注する。

(注10) 伏線となること。『左伝』隱公五年の杜預の注に「後の晋の事の為に本を張る」と。

(注11) ちなみに、014「曲江酒に對す」詩(詳註卷六、〇二〇九)の第二句に〈霏微〉の語が見え、その左傍に「チラツク」という訓が施されている。

〈陰洞〉のあるところは、公主が賜った邸第の敷地内である。それゆえ、〈主家〉の〈陰洞〉という。結句のために伏線を張っている。〈細〉は、ちらちらしているのという。洞中はほのぐらく、入口から望めば霧のような気が立ちこめている。そのひんやりと涼しいことを極言しているのである。〈琅玕〉は、玉の美なるもの。洞中に珍奇な〈簾たかひしろ〉を設けているが、碧色をしていて清涼感溢れること玉のようである。

春酒杯濃ニシテ琥珀薄ク 氷漿盃碧ニシテ瑤瑤寒シ

※薄…ヒハク 氷漿…サタウミヅ 碧…キレイ 寒…ヒイヤリ

春酒謂ニ美酒ヲ。非ニ必^{シモ}春釀^{スニ}。取^三春ノ字有^二富貴ノ意^一耳。琥珀瑤瑤、竝玉ノ類。琥珀ハ色黄、瑤瑤ハ色紅ナリ。

杯濃ハ謂ニ杯中ノ酒濃ヲ。薄ハ言ニ杯色ノ透徹^{スルヲ}。蓋醇酒色濃ニシテ、凝ニ琥珀之光ヲ、而所^レ盛^ル琥珀杯、亦同一色、

玲瓏映透シテ、覺^レ若^二薄シテ而不^レ勝^二其危^ニ也。盃碧亦稱ニ盃中之物^ヲ。碧ハ謂ニ鮮明之貌^ヲ、非^レ稱^{スルニ}色也。

東坡詩ニ一朶ノ妖紅翠欲^レ流^{ント}、亦謂ニ鮮明^ヲ爾。不^レ然、既^ニ曰^レ紅矣、又曰^レ翠ト、可^{ナラ}ン乎。寒ハ謂ニ清冷

甚^{キヲ}。氷漿亦與ニ瑤瑤盃ニ競^レ色ヲ、冷然^{トシテ}若^レ不^レ勝^レ寒ニ也。此聯殆不^レ免^ニ癡肥^ヲ、因^テ薄寒二字ノ調劑^ニ、便

得^二骨肉停勻^ヲ。然^ニ終^ニ非^ニ其至^{レル者ニ}也。

(注12) 宇都宮遷庵の詳説に「春酒ハ春作タル酒ヲ云。夏秋冬イツニテモ春酒ト云テ不^レ苦。文選東京ノ賦ノ註春酒ハ謂ニ春時作^テ至^レ冬ニ始^テ熟^ヲ也トアリ」と。『文選』云々は卷二、張衡「東京の賦」の李善注に見える。

(注13) 釈大典『杜律發揮』に「曰^レ薄ト者ハ、言^ニ其透徹^ヲ尔」と。

(注14) 『夜航詩話』卷四に「詩に碧の字を用ふ、多く鮮明の貌を称す。色を謂ふに非ざるなり。杜詩の〈氷漿盃碧にして瑤瑤寒

し〉〈竹寒く沙碧なり浣花溪〉〈清江碧石心を傷ましむる麗、皆其の清麗を謂ふのみ。白雲白桃を碧雲碧桃と曰ふも、亦た此の義なり。東坡の牡丹の詩に〈一朶の妖紅翠流れんと欲す〉と。亦た其の鮮麗を謂ふのみ。然らずんば既に紅と曰ひ、又た翠と曰ふ、可ならんや」とある。〈竹寒〉云々は、059「將に成都の草堂に赴かんとし途中作有り。先づ嚴鄭公に寄す」

詩五首其三（詳註卷十三、〇七三四）の起句。東陽は碧字にキレイと左訓を施す。〈清江〉云々は、052「滕王の亭子」詩（詳註卷十三、〇七一八）の第五句。蘇東坡の牡丹詩は「述古の冬日の牡丹に和す」四首其一。なお、明末清初の李夷『蜀語』には「凡て顔色鮮明なるを翠と曰ふ」云々と見え、例として蘇東坡の牡丹詩を挙げて、「既に紅と曰ひ、又た翠と曰ふ、皆鮮明の貌を謂ふ」と。他に明・楊慎『升庵全集』卷六十三、鮮明曰翠の条や清・翟顥（？一七八八）の『通俗編』

卷三十四、状貌の条にも指摘。

(注15) ぶくぶく肥って不格好であること。例えば、明・謝肇淛の『五雜俎』人部三に「顔（真卿）が書は莊重なりと雖も、癡

肥なり。復た俊宕の致無し」と。なお、『五雜俎』には、寛文元年（一六六二）の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集』第一集に影印を収む。また平凡社、東洋文庫に岩城秀夫氏による訳注がある。

(注16) ちなみに、『夜航余話』巻上に「唐詩貫珠」中間有「力量」、所以「起処可「鬆ナル」、又云ク五六警振起シテ、以濟三四之平淡」ナド、此類ノ評説毎ミアリ、コレハ詩法ニ虚実調劑シテ、骨肉停勻セシムル要訣ニシテ、一張一弛ノ手段ナリ」という。「唐詩貫珠」は、清・胡以梅撰。以梅、字は燮亭^{しやうてい}。吳郡（江蘇省蘇州）の人。唐人の七言律詩の四分の一にあたる約二千四百首を収録し、八十類に分けて箋釈を加えたもので、全六十卷。完成したのは七十歳の時という。康熙五十四年（二七一五）序刊。岩波新日本古典文学大系本二八七―八頁、揖斐高氏の語釈参照。

〈春酒〉は、美酒をいう。必ずしも春醸したというわけではない。〈春〉の字に富貴の意があるのを取ったに過ぎぬのだ。〈琥珀〉〈瑪瑙〉は、いずれも玉の一種。〈琥珀〉は黄色、〈瑪瑙〉は紅色である。〈杯濃〉は、杯中の酒が濃いことをいう。〈薄〉は、杯の色が透き徹っていることをいう。けだし醇酒の色は濃く、〈琥珀〉色の光を凝らし、その酒を盛った〈琥珀〉の杯も同じ色で、玲瓏と透き徹り、薄くて今にも破れそうな感じがする。〈盃碧〉もやはり〈盃〉中のものを称す。〈碧〉は、くつきりと鮮明なさまをいい、色を称するのではない。蘇東坡の詩に「一朵の妖紅 翠流れんと欲す」というのも、やはり鮮明なことをいう。そうでなければ紅といつてから翠というのは、おかしくはないだろうか。〈寒〉は、清冷の甚だしきをいう。〈冰漿〉も同じく〈瑪瑙〉の〈盃〉と色を競い、ひんやりとして冷たさにたえられないほどである。この一聯は、どうにもごてごてした缺点をまぬがれぬ。〈薄〉〈寒〉の二字で按配して調えているため、なんとか均整はとれているのだが、結局のところ最上のものではない。

誤疑^テ茅堂過^フ江麓^ニ 已^ニ入^レ風磴^ニ 雲端^ニ

※茅堂：サイゴイヘ 江麓：カタイナカ 磴：コサ

此追^テ說^ニ莊中所^ノ歷^レ之境^一。見^ニ莊廣大^ニ 赴^レ洞遠^一。茅堂^ハ莊中所^レ設^ル、寫^ス田舎^ノ野趣^一者。江麓^ハ江頭之

山麓、南州幽僻之境也。宋ノ張禮遊ニ城南^(註17)ニ記ミ、鄭駙馬之居、直^テ樊川之上^ニ、倚^ニ神禾原^ニ。是其所^ニ以疑^レ

過^{カト}江麓^ニ也。已^ニ入^ハ言^三往^テ及^ラ洞^ノ所^レ在^ニ之境^ニ也。磴^ハ石阪也。磴高^{シテ}風飄飄^{トシテ}吹^レ衣^ヲ、故^ニ曰^ニ風磴^ト。

涼已^ニ甚^シ矣。霾音埋。風雨^{スラ}土^ヲ曰^レ霾^ト。雲端^ハ謂^ニ山高^{キヲ}。此言^ニ洞憑^リ高^{キニ}、入^{コト}山^ニ深^ク、陰嵐已^ニ甚^ク、

濛濛^{トシテ}望迷^ラ也。想^{フニ}是日天陰^リ風霏^如塵^ノ。因^テ謂^ニ之^ヲ霾^ト耳^一。蓋莊中幽邃^ハ窅渺^ハ、若^レ非^ニ動纖^ハ旬^ノ之居^ニ。

未^レ見^ニ洞室^ノ之幽^ヲ、先驚^ニ景境^ノ之異^{ナルニ}、極^テ贊^ニ歎^{スル}之^ヲ也。然^{ドモ}語^ヲ稷^リ意^ヲ晦^シ。殊^ニ不^レ見^レ工^ヲ。霾ノ字尤殺

風景。雖^ニ比興^ノ之詞^ト、抑不^ニ亦甚^{シカラ}乎。且與^ニ起句^一犯^シ複^ル。

(注17) 北宋、元祐元年(一〇八六)の作。その中に「張」思道の居^ヨ自^リ、東行すること五六里、樊川の上^{ハナ}に直^{メタ}つて、神禾原

に倚^ヨる。洞有り蓮華と曰ふ。旧と村人鄭氏の業(別荘の意)為^リ。鄭氏の遠祖乾曜、明皇の女臨晉公主に尚^ス。杜甫詩

に(鄭馬の洞中に宴す)有りて云ふ、主家の陰洞煙霧細なりと。即ち此地なり」とある。顧宸の註解、錢謙益の箋注に

これを挙げ、朱鶴齡の輯註にも引く。なお、「遊城南記」には愛宕元沢注『遊城南記・訪古遊記』(京都大学学術出版会、

二〇〇四年)がある。

(注18) 晋・陶潜の「婦去來の辭」に「舟は揺揺として輕く颺^{あそ}り、風は飄飄として衣を吹く」と。

(注19) 『爾雅』釈天に「風、土を雨^{ふち}すを霾と為す」と。

(注20) 『義山雜纂』に「殺風景」の条がある。宝曆十二年(一七六二)刊の龍洲先生閱・河子龍小引『雜纂訳解』には「キヤ

ウノサメル」と訓を施す。ちなみに、龍洲は岡田白駒(一六九二〜一七六七)の号。河子龍は、白駒の子で子龍と号した

河野恕斎(一七四三〜一七七九)のこと。なお、津坂治男『津坂東陽伝』によれば、東陽にも文化二年(一八〇五)著の

『義山訳解』がある由だが、未見。

(注21) 比興は、詩の六義の比と興とをいう。《比興の詞》で『詩経』の語という意。《霾》は、『詩経』邶風・終風に見える。

これは、前にさかのぼり、通つてきた別荘の敷地内の様子を説いている。別荘が広大で《洞》に向かうのにずい

ぶん距離があるのがわかる。《茅堂》は、別荘内に設えられているもので、田舎家の野趣をそっくりかたどった

もの。〈江麓〉は、長江沿いの山麓で、南方のひっそりとした場所である。宋・張礼の「城南に遊ぶ記」に「鄭駙馬の居は、樊川のほとりに在り、神禾原によりそつてゐる」と。このため〈江麓を過る〉かと〈疑ふ〉わけである。〈已に入る〉は、〈洞〉の在るあたりに往くことを言う。〈磴〉は、石段の坂である。〈磴〉は高く風がひゅうひゅうと衣に吹きつけるので、〈風磴〉という。すでに涼味満点である。〈靈〉、字音は埋^{ほい}。風が土埃を舞い降らせることを〈靈〉という。〈雲端〉は、山が高いことをいう。これは〈洞〉が高い所にあつて深く山にわけ入り、もやがひどく、濛々として視界がきかないことを言うのである。想像するに、この日は空が曇り、もやが土埃が降るように濃くかかつていたのである、それで〈靈〉というのだ。けだし別荘の敷地内は奥深くひっそりとし、とても首都圏内にある住まいだとは思われない。まだ洞室の幽邃なるを見ぬうちに、まづ周囲の景色が全く異なっているのに吃驚し、きわめてこれを賛嘆しているのである。しかし語はごくしゃくとして滞り意味は晦渋で、ちつとも巧さがみえない。〈靈〉字がとりわけ興醒めで、『詩経』に見える言葉だとはいえ、なんともひどいものだ。それに起句と意味の上で重複している。

自是秦樓壓^ス鄭谷^ヲ 時^ニ聞^ニ雜^ニ佩^ニ聲^ニ珊^ニ珊^ニ

秦樓^ハ言^ニ賜^ニ第^ニ之^ニ宏麗^一ナルヲ。列仙傳^(注22)秦ノ穆公ノ女弄玉、與^ニ夫簫史^一吹^ニ簫^ヲ於^ニ樓^ニ、善^ク作^ニ鳳皇^ノ鳴^ヲ。遂^ニ乘^レ鳳^ニ升^ス仙^ス。後世因^テ稱^{シテ}公主ノ第^ヲ比^ス之^ニ。鄭谷^ハ因^レ姓^ニ用^レ之^ヲ。漢ノ鄭子真、名^ハ朴、谷口縣ノ人。修^レ身^ヲ自保^ス。王鳳聘^レ之^ヲ不^レ屈^セ。楊子法言^(注23)谷口ノ鄭子真、不^レ屈^ニ其志^ヲ而耕^ニ乎巖石之下^ニ。名震^ニ于京師^ニ。谷口^ハ地名。雍錄^(注24)ニ在^ニ雲陽縣ノ西^ニ。谷ノ字與^ニ洞通^ス氣^ヲ。言^ニ洞中清虛ノ雅趣^一、如^ニ子真^ニ谷口隱居^ノ、而主家富貴之風流、乃^ニ受^ニ壓^ニ倒^シ之^ヲ、殆^ハ若^ク神仙之境^上也。雜佩^ハ婦人腰間佩^レ玉^ヲ、行^ニ則^ニ珊珊^{シテ}鳴^ル。詩ノ鄭風^(注25)雜佩以問^レ之^ニ。葛稚川^(注27)詩^ニ陰洞冷^{シテ}風佩清^{シテ}。此其所^レ本^{ツク}、故^ニ切^ニ于洞^ニ。蓋洞中宴酣^{ニシテ}、將^ニ受^ニ出^ニ女侍^ヲ佐^ニ酒^ヲ。先聞^ニ佩聲珊珊^{シテ}而來^ヲ。是秦樓ノ仙趣、壓^ニ倒^シ鄭谷^ヲ、乘^レ歡^ニ殊^ニ盛^ニ也。五六極^テ言^ニ境之

幽^ヲ、頗^ニ渉^ル索^ニ莫^ニ。因^テ重^テ振^テ起^{シテ}叙^ス極風流ノ盛歎^ヲ、亦調劑之法也。○朱注^(注20)此歸^ニ長安^ニ後所^レ作。杜律
選本^(注30)、蓋有^ニ數種^一、而邵注專行^ス。講席所^レ齋^ス皆是^{ナリ}。故^ニ不^レ能^レ不^レ從^ニ其敘次^一。

(注22) 前漢・劉向(前七七〜前六)の撰と伝えられるが、魏晉の頃に偽託されたものという。その卷上に「蕭史は、秦の穆公
の時の人なり。能く簫を吹き、能く孔雀白鶴を庭に致す。穆公に女あり、字は弄玉、之を好む。公遂に女を以て妻す。日
び弄玉に教へて鳳鳴を作さしむ。居ること数年、吹きて鳳声に似さしむれば、鳳凰来りて其の屋に止まる。公為に鳳台を
作る。夫婦其の上に止まり、下らざること数年、一旦皆鳳凰に随ひて飛び去る。故に秦人鳳女祠を雍宮中に作る」と。

(注23) 『漢書』卷七二、王貢兩龔爽鮑伝序に「谷口に鄭子真有り、蜀に嚴君平有り。皆身を修め自ら保ち、其の服に非ざれば服
さず、其の食に非ざれば食せず。成帝の時、元舅大將軍王鳳、礼を以て子真を聘す、子真遂に詘せずして終はる」と。詘
は屈と同じ。

(注24) 後漢・揚雄(字は子雲。前五三〜後一八)の『法言』問神篇。

(注25) 南宋・程大昌(字は泰之。一一二三〜一一九五)撰。関中の古蹟を考訂した地誌。十卷。その卷七に「谷口、雲陽県の
西四十里に在り。鄭朴、字は子真、此に隱る。楊子曰く、谷口の鄭子真、嚴石の下に耕して、名京師に震ふ」と。雲陽県
は、今の陝西省淳化県の西北。

(注26) 『詩經』鄭風・女曰鷄鳴に「子之之に順^{したが}ふを知らば、雜佩以て之を問^{たづ}らん」と。毛伝及び集伝に「問は、遺なり」と。

(注27) 葛稚川は、晋・葛洪(字は稚川、抱朴子と号す。二八三〜三六三)のこと。その「洗藥池」詩(明・馮惟訥「古詩紀」
卷四十二／明・張之象撰「古詩類苑」卷十四)に「洞陰は冷冷、風佩は清清。仙居永劫、花木長榮す」と。吉川幸次郎
『杜甫詩注』第二冊に「諸家の引かぬ文献」とするが、『唐詩貫珠』(卷五十、夏の部)に、この詩を載せ、葛稚川「洗藥
詩」の両句を挙げる。ちなみに、近人遼欽立は葛洪の作ではなく後人の偽託かと疑っている(『先秦漢魏晉南北朝詩』晋詩
卷二十二、中華書局)。

(注28) 邵宝『集註』卷二十三、燕飲類にこの詩を載せ「雜佩は、公主の佩玉」。吉川『杜甫詩注』は同じく公主のこととし、
「宴席にはべるべくやって来る侍女の佩声が珊珊ときこえて来る」とする東陽の説に「賛成しない」。

(注29) 朱鶴齡の輯註に、杜甫が斉趙の漫遊を終えて長安に帰ったのを天宝五載とし、「此の詩乃ち長安に帰りて後の作。黄鶴、

駙馬洞中と鄭氏東亭とを以て一処と為す、大謬なり」という。(鄭氏東亭)とは「重ねて鄭氏の東亭に題す」詩(詳註巻一)のこと。ちなみに本詩を『杜甫年譜』は天宝五載(七四六)、杜甫三十五歳の作とし、『唐五代文学編年史』は天宝六載夏に繫年する。

(注30)

杜律選本の和刻されたものについて、主なものを挙げれば

元・虞集撰『杜律虞註』二卷(杜工部七言律詩註)

寛文八年「一六六八」の和刻本がある(現在、汲古書院刊『和刻本漢詩集成唐詩第二輯』に収む)。もつとも、これは虞集に仮託した偽書とされる。

明・邵傳撰『杜律集解』(杜律五七言集解)

寛永二十年(一六四三)刊本以来、たびたび刊行されているが、翻刻のみならず集解をもとに諸注を集めたものも出ている。

寛文四年、五年(一六六四、六五)の中野道也刊『杜律集解大全』七言四卷五言八卷 *これは『集解』のあとに邵宝『集註』等の説を附したものの。

元禄九年(一六九五)刊、宇都宮遯庵頭注『龍頭増広本杜律集解』五言四卷七言二卷(『和刻本漢詩集成唐詩第三輯』に収む)

元禄十年(一六九六)刊、宇都宮遯庵『杜律集解詳説』
明・薛益撰『杜工部七言律詩分類集註』二卷

慶安四年(一六五一)刊本がある(『和刻本漢詩集成唐詩第五輯』に収む)。

清・顧宸撰『辟疆園杜律註解』

元禄六年(一六九二)の和刻本がある(『和刻本漢詩集成唐詩第二輯』に収む)。

この他に、

大典禪師(一七一九～一八〇二)文化元年(一八〇四)刊

『杜律発揮』三卷

皆川淇園(一七三四～一八〇七)

『杜律評註』六卷（『近世漢學者著述目錄』による）

等がある。江戸期における杜集の出版とその意義については、黒川洋一「日本における杜詩」（『杜甫の研究』収録）に詳しい。なお、杜詩の版本・注釈書の解題については、次の二書がある。

鄭慶篤他編著『杜詩書目提要』（齊魯書社、一九八六年）

周采泉著『杜詩書録』上下（上海古籍出版社、一九八六年）

〈秦樓〉は、天子から賜った邸第の宏壮佳麗なるを言う。『列仙伝』に「秦の穆公の女、弄玉は、夫の蕭史と樓上で簫を吹いて、鳳凰の鳴声を真似ることが上手であった。しまいに鳳に乗って昇仙した」とある。後世、それに因んで公主の邸第のことを称するのにこれに擬えた。〈鄭谷〉は、鄭駙馬の姓に因んで用いる。漢の鄭子真は、名は朴といい、谷口県の人である。わが身を修めてよくこれを保った。王鳳が召し出そうとしたが、屈しなかった。楊雄の『法言』に「谷口の鄭子真は、その志をまげることなく嚴谷のもとで躬耕した。名声は都になりびびいた」と。谷口は、地名。『雍録』に「雲陽県の西に在り」と。〈谷〉の字は、〈洞〉と気味相通ずる。〈洞〉中が清虚で雅趣に富むのは、鄭子真の谷口の隱居みたいであるが、〈主家〉の富貴による風流よりは、かえってこれを压倒し、ほとんどまるで華やかな神仙境のようであるのを言う。〈雜佩〉は、婦人が腰におびる佩玉。歩めばサンサンと鳴る。『詩経』の鄭風に「雜佩以て之に問らん」、葛稚川の詩に「陰洞は冷冷、風佩は清清」とあり、これが杜詩の基づくところである。だから〈洞〉にびったりだ。けだし〈洞〉中は宴たけなわで、これから更に侍女を来させて酒興を盛り上げさせようとするところで、まづ佩玉のサンサンと響く音が聞こえてくる。これぞ〈秦樓〉の仙趣であって、〈鄭谷〉を压倒しており、浮かれてぐっと盛り上がっている。五・六句は、きわめて境の幽静なることを言い、いささか索漠の気味がある。それで再び振起して雅びやかで盛大な宴のさまを叙述しているのだが、これもやはり調剤の法である。○朱鶴齡の輯註に、これは長安に帰って以後の作とある。杜律の

選本は、けだし数種類あるものの、邵傳の注が専ら流布しており、講席に持つて来ているのは皆この本だから、その叙次に従わざるを得ない。

003 城西ノ陂ニ泛舟ヲ

陂音碑、池也。^(注1) 漢陂在^(注2)長安鄠縣ノ西、終南山之陰^ニ。陂魚甚美、因^テ名^{ツク}。源出^ニ終南ノ諸谷^{ヨリ}、合^ニ胡公泉^ニ爲^レ陂^ト。周^(注3)一十四里。蓋一小湖水、京師勝遊ノ處也。公有^ニ七言古詩漢陂行^一、又有^下登^ニ漢陂臺^ニ宴^ニ漢陂^ニ諸詩^上、秋興第八首亦追^(注4)憶^ス漢陂ノ壯遊^ヲ。皆其浩瀚可^レ想。元ノ末、遊兵決^レ陂^ヲ取^レ魚^ヲ、遂^ニ涸^ニ爲^レ田^ト。見^ニ明ノ劉士龍^ノ遊記^一。^(注5)

(注1) 例えば、『集韻』に「陂・波は班糜の切。説文に阪なり。一に曰く池なり」と。

(注2) 北宋・宋敏求(一〇一九―一〇七九)の『長安志』卷十五、鄠^ル縣の条に「漢陂は鄠縣の西五里に在り。終南山の諸谷より出で、胡公泉に合して陂と爲る。十道志に曰く、五味の陂有り、陂魚甚だ美なり。因つて誤つて之に名づく」とある。

(注3) 「鄠縣の源大少府と漢陂に宴す。寒字を得たり」詩の朱鶴齡輯註(卷二)に「説文」の「漢陂、周^(注4)一十四里、北のかた流れて澇水に入る」というのを挙げるが、これは先に挙げた『長安志』卷十五に引くもので、通行本の『説文解字』に漢字は見あたらない。なお、輯註は、宇都宮遯庵の増広本にも引く。

(注4) 詳註卷三、〇〇九二。

(注5) これは、「漢陂西南台」詩(詳註卷三、〇〇九三)のこと。

(注6) 「予鄠縣源大少府宴漢陂得寒字」詩(詳註卷三、〇〇九四)。

(注7) 100 「秋興」八首其八(詳註卷十七、〇九九二)。その首聯に「昆吾御宿自づから逶迤^いたり、紫閣の峯陰漢陂に入る」とある。
(注8) 劉士龍およびその遊記について、清・胡以梅『唐詩貫珠』(卷五十、秋)の「秋興八首」其八の箋釈に「予、明・富平(今の陝西省富平県)の劉士龍が「漢陂に遊ぶ記」を読むに、此の陂は元の時已に陂を決して田と爲し、稻を種うと。一時の小利を貪りて、千古の名勝を壊す、殺風景甚だし矣。是の詩を読む者をして、又た知らず如何に感ぜしむるや焉」と見

える。なお、「漢陂行」の錢注（卷二）に『通志』の「元末、游兵水を決して魚を取る。水去りて陂涸れて田と爲る」というのを挙げるが、この『通志』は、明・趙廷瑞編修『陝西通志』のこと。その卷二十一、土地、鄠県の条に漢陂について「元末、遊兵水を決して魚を取る。水去りて陂落ちて田と爲る」と。錢注は、宇都宮遯庵の増広本にも引く。ちなみに、陳從周主編『中国園林鑑賞辞典』（華東師範大学出版社、二〇〇一年）に拠れば、現在の漢陂湖は東西四百米、南北七千米にわたり、その周辺一帯は、一大公園として整備されているという。

〈陂〉、字音は碑^ひ、池である。〈漢陂〉は、長安鄠県の西、終南山の北にある。その魚がとても美味であることから名づけられた。源は終南山の谷々から発し、胡氏泉に合流して〈陂〉となる。周囲は十四里。けだし、ちょっとした湖で、首都圏内の名勝地である。公の七言古詩に「漢陂行」があり、さらに「漢陂台に登る」「漢陂に宴す」といった詩がある。「秋興」第八首にもやはり漢陂の壮遊を追憶している。いずれもその広々とした様子が想像できよう。元末、兵隊くずれのやからが堤を壊して魚を取ったため、そのまま涸れて畑となった。明・劉士龍の遊記に見える。

青娥皓齒在樓船^(注9) 横笛短簫悲遠天^二

娥ハ謂^ハ眉^ヲ。蠶蛾之眉、宛轉シテ細シテ而曲^ル。因^テ比^ニ美人之眉^ニ。以^ニ青黛^ヲ染^レ之^ヲ、故^ニ曰^ク青娥^ト。樓船ハ架^{スル}樓^ヲ之船。悲ハ謂^ニ清韻微妙之極^一。蓋調方^ニ高揚^リ、至^ニレハ細^{シテ}而欲^{スル}絶^{ント}、則清切哀怨、殆令^ニ人^ヲラシテ不^レ勝。喝采^{スル}者稱^ス殺^ス人^ヲ、是也。悲^ニ遠天^ニ、言^ニ其聲嘹亮、直^ニ徹^{スル}雲霄^ニ也。首稱^ニ歌舞之美^ヲ、次贊^ニ管樂之妙^一。豪舉盛歡、可^レ謂^ニ仙遊^ト矣。起手上四字、各自爲^レ對^ヲ。唐詩聞^ク有^ニ此格^一。亦才調之所^レ弄^{スル}巧^ヲ也。

（注9）〈娥〉字、錢注（卷九）および輯註（卷二）は〈蛾〉に作り、輯註に「一に娥に作るは非なり」と。詳註（卷三）も同じ。輯註は宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

（注10）『而庵說唐詩』卷十八にこの詩を戦せ、その中に『其の声嘹亮、直ちに天に徹す』と見える。

(注11)

『夜航詩話』 卷二に「七言の起手、上の四字、各おの自ら対を為す、亦た才調の巧を弄する所なり」として、

沈佺期 七律「遙同杜員外審言過嶺」(遙かに杜員外審言の嶺を過るに同ず) 詩(『全唐詩』 卷九六／『唐詩選』 卷五)

天長地潤嶺頭分、去國離家見白雲(天は長く地は潤く嶺頭分かれ、国を去り家を離れて白雲を見る)

李嶠 七絶「送司馬先生」(司馬先生を送る) 詩(『全唐詩』 卷六一)

蓬閣桃源兩地分、人間海上不相聞(蓬閣桃源 兩地分かれ、人間海上 相聞せず)

* 地字、『全唐詩』は處に作る。

賈至 七絶「送李侍郎赴常州」(李侍郎の常州に赴くを送る) 詩(『全唐詩』 卷二三五／『唐詩選』 卷七)。

雪晴雲散北風寒、楚水吳山道路難(雪晴れ雲散じて北風寒く、楚水吳山道路難し)

岑參 七律「暮春虢州東亭送李司馬歸扶風別廬」(暮春虢州の東亭にて李司馬の扶風の別廬に帰るを送る) 詩(『全唐詩』

卷二〇一／『唐詩選』 卷五)

柳彈鶯嬌花復殷、紅亭綠酒送君還(柳彈れ鶯嬌り花復た殷、紅亭綠酒君の還るを送る)

同右 七絶「山房春事」二首其一(『全唐詩』 卷二〇一)

風恬日暖蕩春光、戲蝶狂蜂亂入房(風は恬に日は暖かく春光を蕩し、戲蝶狂蜂乱れて房に入る)

* 狂字、『全唐詩』は遊に作る。岑參の集も同じ。

杜甫 七律「將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公」(將に成都の草堂に赴かんとし途中作有り、先づ嚴鄭公に寄す) 詩五首

其三(『全唐詩』 卷二二八／詳註卷十三／詳解 059)

竹寒沙碧浣花溪、橘刺藤梢咫尺迷(竹寒く沙碧なり浣花溪、橘刺藤梢咫尺に迷ふ)

* 橘字、『全唐詩』は菱に作り、「一に橘に作る」と注す。

張謂 七律「杜侍御送貢物戲贈」(杜侍御貢物を送る、戯れに贈る) 詩(『全唐詩』 卷一九七／『唐詩選』 卷五)

銅柱珠崖道路遠、伏波橫海舊登壇(銅柱珠崖 道路遠く、伏波橫海 旧登壇)

* 珠字、『全唐詩』は朱に作る。

張繼 七絶「楓橋夜泊」(『全唐詩』 卷二四二／『唐詩選』 卷七)

月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠(月落ち烏啼いて霜天に満ち、江楓漁火愁眠に對す)

* 火字、『全唐詩』は父に作り、「二に火に作る」と注す。

という詩例を挙げ、「此れ皆自然に出づ。故に工にして痕無し。強ひて意を着けて之を做せば、破碎に失す」という。

《娥》は、眉のこと。蚕蛾の眉は宛転として細く曲がつている。それで美人の眉に擬えた。青黛で染めているので、《青娥》という。《楼船》は、楼を架した船。《悲》は、澄んだ響きがこの上なく妙なることを言う。けだし調べは今まさに高らかに揚がり、かほそく途切れんとするに至つては、清切哀怨極まりなく、聴く人に感に堪えないようにさせる。喝采する者は感極まつて人殺しと称するというのが、それである。《遠天に悲しむ》は、その声嘹々として、ただちに雲霄にとどくことを言う。まず始めに歌舞の美しさを称え、次に管弦の妙を讃えており、豪華盛大な宴は、仙遊というべきものである。始まりの二句は、上の四字がそれぞれ対をなしており、唐詩にはままこの格がある。やはり才気すぐれたものが用いる技巧である。

春風自信^ニ牙檣^ノ動^ニ 遲日徐看^ル錦纜^ノ牽^ヲ

※自信：ユキナリニスル 徐：ソロ／＼ト 牽：キシヘヨセル

起手不^レ用^ニ序引^ノ、直^ニ敘^ス歡酣^{ナル}之狀^ヲ。語意俱^ニ緊、故^ニ此二句便一放寬、轉^{シテ}述^ニ優游悠然之況^ヲ。是一張一弛之道也。信^ハ任^也也。言^ハ不^レ煩^ニ人力^ヲ也。檣^ハ帆柱^也也。蓋船卸^{シテ}帆^ヲ而任^セ其所^ニ之、隨^テ波^ニ漂漾、只有^三

牙檣之動^ニ春風^ニ而已。纜^ハ維^レ舟^ノ之繩也。春風自信^ニ遲日徐看^ル、寫^シ盡^ス優游之神^ヲ。牙檣錦纜、稱^ニ其華潔^一

耳。不^下必^{シモ}以^ニ象牙^ヲ飾^レ檣^ヲ、錦絨^ヲ爲^レ上^レ纜^ト也。

(注12) もとは、『礼記』雜記下に「一張一弛は、文武の道なり」と見える語。東陽の『夜航余話』卷上に「徐増説唐詩ニ、歌行

排律ハ最尚^ニト^一氣格^ヲ。不^レ可^ニ緩弱^一。然^{ドモ}至^{レバ}其文勢甚緊^{ナル}、便須^三一放^{シテ}方^ニ得^ニ寬轉^一、一張一弛、何道不^レ然^一」云々という。但し、『説唐詩』には、その卷五、李白「蜀道難」の注に「文勢此に至つて甚だ緊、必ず須^ヤらく一放して、方に寬転を得べし。所謂一張一弛、文武の道なり」というものの、東陽が引くそのままの形では見あたらない。

(注13) 邵宝『集註』卷二十三、舟橋類に「信、猶任也」と。薛益『分類』卷二、舟楫も同じ。『集註』は、宇都宮遯庵の両著にも引く。

(注14) 薛益『分類』に見える。

(注15) 『詩経』幽風・七月に「春日遲遲たり」とあるのに基づく語。

(注16) 邵宝『集註』に「牙櫓は、象牙を以て帆櫓を飾るなり」という。なお、宇都宮遯庵の両著にもこれを引く。

始めに導入部を用いず、いきなり歎たけなわの様子を叙している。語も意もともにぴんと張っているから、この二句はすぐさま緩めて、ゆったりとのんびりしたありさまを述べている。これぞ一張一弛のやり方だ。〈信〉は、任である。人の力を煩わさないことを言うのである。〈櫓〉は、帆柱である。けだし船は帆を卸して、その行くのにまかせ、波に随ってゆらゆら進む。ただ〈牙櫓〉が〈春風〉に〈動〉くばかりだ。〈纜〉は、舟を繋ぐロープ。〈春風自ら信す〉(遅日徐に看る)は、ゆったりとした心持ちをあますところなく写している。〈牙櫓〉〈錦纜〉は、その華やかですっきりしていることをいうだけで、必ずしも象牙で帆柱を飾ったり、錦の綱でとまづなとしているわけではない。

魚吹ニ細浪ニ揺シ歌扇一 燕蹴ニ飛花ニ落ニ舞筵ニ

上句極見ニ日暖ニシテ 浪恬一 下句極見ニ花盛ニシテ 風静一 蓋歌姫倚レ舷ニ扇影在レ水ニ 乃遊魚吹テ浪ヲ而金

彩撩亂。舞筵已ニ豔ニシテ、紅裙翩翩タリ。而燕復蹴ニ岸頭ノ花枝ヲ、落英粉然點綴ス。似レ若ニ禽魚亦皆有レ意

者一也。列子ニ鮑巴鼓テ琴ヲ而鳥舞魚躍ル。暗ニ用ニ此事ヲ。

(注17) 『列子』湯問篇に「瓠巴、琴を鼓せば、鳥舞ひ魚躍る」と。瓠巴は、古の琴の名人。〈瓠〉は〈匏〉にも作る。『韓詩外伝』卷六に「瓠巴、琴を鼓せば、鳥舞ひ魚躍る」と。ちなみに宇都宮遯庵の両著には、『荀子』勸学篇の「瓠巴、琴を鼓すれば游魚出でて聴く」を挙げる。

上句は、日暖かく浪穏やかな様子が極めてよくわかる。下句は、花が満開で風静かな様子が極めてよくわかる。

けだし歌妓が船ばたによりかかつていて、扇の影が水面にうつっており、そこへ泳ぎ回る魚が波を吹き動かし、黄金色の光彩がきらきらと入り乱れる。《舞筵》はすでに艶やかで、紅の裙がひらひらと翻り、それに《燕》が岸辺の枝を蹴つて飛び立ち、花びらが乱れ舞いあちこちに散り敷いている。禽や魚もやはりいずれも意あるものようである。『列子』に「匏巴、琴を鼓して鳥舞ひ魚躍る」とあるが、暗にこの故事を用いる。

不^レ有^二小舟能^レ蕩^一 百壺^二那^レ送^一酒如^レ泉

※小舟：コバヤ 蕩：ギイ 如泉：クメドモツキズ

大^ニ嘉^{シテ}小舟之^ヲ勞^ヲ、以^レ形^ニ豪興之^ヲ甚^{キヲ}。能^ス蕩^ス漿^ヲ、贊^{スル}其^ノ迅快^ヲ也。百壺^ハ謂^ニ買^{コト}酒^ヲ之^ノ類^{ナルヲ}。如^{キハ}

泉^ノ言^ニ不^レ竭^{キヲ}湧^ル也。古詩^ニ有^レ肉如^レ耶^ノ、有^レ酒如^レ泉^ノ。又隴右^ニ有^二酒泉郡^一。蓋船中大^ニ排^ニ筵宴^一、杯

盤狼藉^ニ、歌吹盛歡^ニ、豪飲殊^ニ劇^シ。船中所^ハ貯^ル、傾^レ樽^ヲ既^ニ罄^ス、輒遣^ニ輕舸^ヲ沽來^{コト}、亦已^ニ數^{ナリ}矣。其搬運

之^ノ輕便^{ナルコト}、迅快如^レ飛^カ、未^ニ嘗^テ使^二杯中^ヲ空^{カラ}。隨^レ飲^ニ便給^ス、如^二泉之湧^カ也。案^{スルニ}上六句皆專就^ニ

船中^ニ言^レ事^ヲ。至^レ此^ニ一轉^{シテ}添^ニ出^ス船外之事^ヲ。且再^タ緊^{シク}跟^ニ起手^一、文勢頓挫^ニ、與^ニ中聯^ノ樓船悠悠^{タル}

反襯^{シテ}收住。眞^ニ千鈞^ノ筆力^{ナリ}矣。若^シ用^ニ酩酊^{等ノ}語^ヲ爲^レ結^ヲ、則緩弱不^ニ相稱^ハ焉。百壺^ノ二字、尤見^ニ餘豪

之盛^{ナルヲ}。徐子能^ニ說唐詩^一、以爲^レ傍觀^ニ貴遊^ノ豪舉^ヲ識^ニ其奢靡^ノ流連^ノ之作^上。殊^ニ不^レ知起^ニ不用^レ引^ヲ、直^ニ

敘^{スル}盛歡^{者ハ}、以^ニ興劇^ク快絕^{ナルヲ}也。如^ニ葡萄^ノ美酒^ノ夜光^杯、蘭陵^ノ美酒^ノ鬱金香^一、亦皆突如^{トシテ}而來^ル、不^レ

遑^{アラ}敘^{スルニ}其端緒^一也。

(注18) 晋・裴秀の「大蜡の詩」(『古詩紀』卷三十三／『古詩類苑』卷七)に「肉有りて丘の如く、酒有りて泉の如し」と。輯註に挙げ、宇都宮遷庵の増広本に輯註を引く。

(注19) 『漢書』卷二十八下、地理志下に酒泉郡あり、応邵の注に『其の水甘きこと泉の如し、故に酒泉と曰ふ』と。

(注20) さかずきや皿が入り乱れて散らばっている様子。蘇軾「前赤壁の賦」(『古文真宝』後集卷一)に見える。

(注21) 東陽の『蒼瓊録』(『日本藝林叢書』第一卷)に「文法ニ頓挫ト云フコトハ、文選陸機文ニ出タリ。ムツカシク入組タル

コトヲ、一撮ニトリコナシテ更ニ多言ヲ須ヒズ、端的ニ書キホドクヲ謂ナリ。五臣注ニ、銑云、頓挫猶「抑折」也、トアリ、ヒツベサエル、ヘシオルト云フコトナリ。(中略)サレバ頓挫トハ一ヒシギニ事ヲ取コナスノ文勢ナリ。故ニ文勢一頓ナド云ヘル評語モアリ。一シマリ落着セシムルコトナリ」といふ。陸機文は、西晋・陸機「文の賦」のこと。『文選』巻十七に見える。

(注22) 文章法の名。襯は裏地のことで、対比して際立たせる方法。

(注23) 『而庵説唐詩』巻十八に「題は是れ公城西の陂に在りて舟を泛ぶ、而して詩は則ち貴遊の樓船を咏看す。起初、樓船は前に在り、公の舟は後に在り。繼いで公の舟は樓船の辺に従つて經過す。故に前に其の簫笛の声を聞き、後に其の歌舞の状態を見る。並びに尾に小舟有るなり。詩は純ら^{もつぱ}是れ譏諷し、末に慨嘆を兼ね。讀者審らかにせざる可からず」云々とあるのを東陽がその意を要約して述べている。

(注24) 王翰「涼州詞」(『唐詩選』巻六)に

葡萄美酒夜光杯 葡萄の美酒 夜光の杯

欲飲琵琶馬上催 飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す

醉臥沙場君莫笑 酔うて沙場に臥す 君笑ふこと莫かれ

古來征戰幾人回 古來 征戰 幾人か^{かへ}回る

(注25) 李白「客中の作」(『唐詩選』巻六)

蘭陵美酒鬱金香 蘭陵の美酒 鬱金香

玉碗盛來琥珀光 玉碗盛り來る琥珀の光

但使主人能醉客 但だ主人をして能く客を酔はしむれば

不知何處是他鄉 知らず何處か是れ他郷なるを

大いに〈小舟〉の働きを嘉して、豪興の甚だしきを形容している。〈能く漿^{かい}を蕩^{うご}かす〉は、その迅速軽快なるのを讃えているのである。〈百壺〉は、酒を買うのが頻繁であることをいう。〈泉の如き〉は、次々に湧いて来るよ

うに尽きぬことをいう。古詩に「肉有り邱の如し、酒有り泉の如し」と。また隴右には酒泉郡がある。ただし船上では大いに酒宴を張つて、盃や皿が入り乱れ、歌声や吹奏が盛んにおこり、とりわけ豪飲ぶりは甚だしい。船中に貯えてあつた酒樽がすっかり空になつてしまつと、そのつど猪牙ちよきをやつて買つて来させる、そんなこともこれまでしばしばあつた。酒を運んで飛ぶように軽快迅速に行き来し、杯を空にさせることはなかつた。飲むそばから酒が注がれ、泉が湧き出るようである。思うに上六句はいずれも専ら船中についてその様子をいうが、ここに至つて一転して船外の様子を言い添え、かつ再びびたつと起句を受けて文勢頓挫し、中二聯の《樓船》の悠々としたありさまと対比して収めている。真に千鈞の筆力である。もし酩酊等の語を用いて結びとすれば、しまりなくなつたんで釣り合わない。《百壺》の二字にとりわけ豪勢ぶりがあらわれている。徐子能の『說唐詩』は貴族の派手な遊興ぶりを傍らからながめて、その奢侈流連を譏そしる作だとみなしているが、起句に導入部を用いず、ただちに盛飲のさまを叙しているのは、興趣はなはだしく痛快この上ないためである。「葡萄の美酒夜光の杯」、「蘭陵の美酒鬱金香」のような例も、やはりいきなり言い出されており、その端緒を叙するいとまがないのである。

004 贈^ニ獻納使起居田舎人澄^一

唐書百官志^ニ、武后^ノ時、置^テ匭^ヲ以受^ニ四方之書^一。不^ニ唯論^シ政^ヲ訴^レ事^ヲ者^一ノミナラ、進^ニ獻^{スル}賦頌^一者亦得^レ投^レスルコトヲ之^ヲ。設^ニ理^ニ匭^ニ使^ヲ、以^ニ諫議大夫^一充^レ之^ニ。玄宗改^テ爲^ニ獻納使^一。起居舎人^ハ屬^ニ中書省^一。掌^ニ注^シ起居^一錄^{スル}スルコトヲ制^シ誥^ヲ。田澄^ハ蓋^ニ以^ニ起居舎人^一攝^ニ獻納使^一也。一人^ニシテ而任^ニ兩職^一、故^ニ篇中穿插^一言^シ之^ヲ。贈、舊本^ニ作^レ送^ニ。今從^ニ千家註及輯註本^一改^レ之^ヲ。天寶十三載、公進^下封^{スル}西岳^一賦^上。此篇專爲^ニ是^一作^レ之^ヲ。

(注1) 『新唐書』 卷四七、百官志二、門下省、左諫議大夫の条に「武后の垂拱二年（六八六）、魚宗保なる者有り上書して匭を置

き以て四方の書を受けんことを請ふ。乃ち銅匭四を鑄、塗るに四方の色を以てし、朝堂に列す。青匭を延恩と曰ひ、東に在り、人を養ひ農を勧むるの事を告ぐる者之を役す。丹匭を招諫と曰ひ、南に在り、時政の得失を論ずる者之を役す。白匭を申冤と曰ひ、西に在り、抑屈を陳ぶる者之を役す。黒匭を通玄と曰ひ、北に在り、天文秘謀を告ぐる者之を役す。諫議大夫・補闕・拾遺一人を以て使に充て、匭事を知せしむ。御史中丞・侍御史一人を理匭使と為す。其の後、同一匭と為す。天寶九載（七五〇）、玄宗、匭の声、鬼に近きを以て、理匭使を改めて獻納使と為す。至德元年（七五六）、旧に復す」とある。なお『資治通鑑』 卷二百三、唐紀十九、則天后垂拱二年三月の条に拠れば、延恩匭には「賦頌を獻じ、仕進を求むる者」がこれを投じた。

(注2) 正員二名。従六品上。『大唐六典』 卷九、中書省、起居舍人の条に、その沿革について「起居舍人は、起居注に因つて官

に名づく。古は人君言へば則ち右史之を書す。即ち其の任なり」云々とあり、職掌について「起居舍人は、記言の史を修し、天子の制誥德音を録し、記事の制の如く、以て時政の損益を記するを掌る。季の終りに則ち之を国史に授く」という。

(注3) 田澄については、伝記不詳。宋・計有功『唐詩紀事』 卷二十九に、「成都に客と為りて作る」詩一首を挙げる。ちなみに、明・楊慎（号は升庵。一四八八―一五五九）『升庵詩話』 卷九、魚米の条には、これを「蜀城」詩として挙げ、曹学佺

（号は石倉。一五七四―一六四七）『蜀中広記』 卷一〇一、詩話一には、「成都旅次」詩として引く。

(注4) 『唐詩貫珠』 卷七、投贈清華一に、この詩を載せ、「田舎人、又た獻納使と為り、一人にして両職に任ず。故に篇中穿插して之を言ふ」と。

(注5) 東陽が底本とした明・邵傳『杜律集解』を指すのであろう。

(注6) 千家註と称されるものに、

宋・劉辰翁批点、元・高楚方輯注『集千家註批点杜工部詩集』

宋・徐居仁編、黄鶴補注『集千家註分類杜工部集』

等があるが、ここは前者のことであろう。

なお、宇都宮邀庵の鼈頭増広本に「千家集註輯註等、皆送字、贈に作る。尤も可なり」という。また『詳説』には「送ノ字諸本多作レ贈。獻納ハ獻納使ヲ云。輯註作「獻納使」、其下二本無「使字」トアリ。註解集註等ニハ使字不レ入」とい

う。〈輯註〉は朱鶴齡の輯註（卷二）、〈註解〉は顧宸『辟疆園杜律註解』（七言律詩卷二）、〈集註〉は明・邵宝『杜少陵先生分類集註』（卷二十三）のこと。

（注7） 詳註卷二十四。この時書かれたものに「西岳に封ずる賦を進むるの表」がある。

『新唐書』百官志に、「武后の時、匭（目安箱）を設置して各地からの陳情を受け付けた。ただ政治を論じたり訴訟する者ばかりでなく、賦頌を献上する者もやはり投書することができた。理匭使を設け諫議大夫をこれに充てた。玄宗は改めて献納使とした」とある。〈起居舍人〉は、中書省に属し、天子の起居を注し制詰を記録することを掌る。〈田澄〉は、けだし起居舍人の身分のまま〈献納使〉を兼任したものであろう。一人で二つの職に任じられたので、この篇のなかにそのことを言及している。〈贈〉字、旧本には〈送〉に作る。今、千家註および輯註本に従って改める。天宝十三載（七四五）、公は「西岳を封ずるの賦」を進呈献上した。この篇は、専らそのために作ったのである。

献納ノ司存雨露ノ邊 地分ニ清切ニ任ニ才賢ニ

※司…カン 雨露…メグミフカキ 才賢…キリヤウ

論語ニ邊豆之事ハ則有ニ司存一。沈約（注9）恩倖（注10）階闥之任、各有ニ司存一。猶レ云ニ所隸一也。雨露ハ喻ニ君澤ニ。言下献納之司、在ニ雲霄之上ニ、其承ルコト恩澤（注11）優渥（注12）ナルヲ也。此暗ニ胚ニ胎ス結句ノ所ニ翼。邊一ニ作レ偏ニ、於レ義ニ似レ是ニ。清切ハ指ニ中書省（注13）ヲ。清ハ言ニ其不ニ誼濁（注14）ナラ也。切ハ近密也。中書舍人、其地位親近、爲ニ清貴之職ニ、故ニ必選ニ才賢一用レ之。蓋非レハ如ニ田澄其人一、不レ得レ任（注15）此ニ也。

（注8） 吉川幸次郎『杜甫詩註』第二冊に「地分の語、連文である可能性なくはない」との指摘があり、一九八八年刊の『漢語大詞典』第二卷には、〈地分〉の語を挙げ「猶ニ地位」と説明し、この句を用例として挙げる。

（注9） 『論語』泰伯篇に「邊豆之事則有司存」とあり、ふつうは「邊豆の事は則ち有司存す」と訓ずる。

(注10) 梁・沈約(四四一〜五一三)の「恩倖伝論」(『文選』卷五十)に「増闡の任、宜しく司存有るべし」とあり、李善注に先に示した『論語』泰伯篇の一節を挙げる。堦は階と同じ。なお、東陽は宜字を各に作るが、これは宇都宮遯庵の増広本に引く清・張遠(字は邇可)の『杜詩會粹』(康熙二十七年「二六八八」の自序あり。遯庵は『杜律會粹』に作る)に拠ったものであるうか。

(注11) 甚だ厚い。『詩経』小雅・信南山に「上天雲同^{あつ}まり、雪を雨^ふすこと雰雰たり。之を益^けすに霰霰^{げんげん}を以てし、既に優^{ゆた}かに既に渥^{あつ}し。既に霑^{うるは}ひ既に足り、我が百穀を生ず」とあるのに基づく語。

(注12) 錢注(卷九)および輯註に「邊、一に偏に作る」と。詳註(卷三)も同じ。輯註は宇都宮遯庵もこれを引く。

(注13) 邵宝『集註』卷二十三、簡寄類に「清切謂^二中書省^一」と。薛益『分類』卷二、簡寄も同じ。『集註』は宇都宮遯庵もこれを挙げる。

(注14) 『夜航詩話』卷二に、「朝廷の貴官多く清を以て称せらる。其の居の清高にして誼濁ならざるを言ふなり」云々と指摘する。

(注15) ここは「中書省の舍人」という意であろう。起居舍人を指して言う。中書省には起居舍人とは別に、「侍奉進奏、章表を参議するを掌る」中書舍人(正五品上、六人)の職(『大唐六典』卷九)があり、紛らわしい。

『論語』に「籩豆の事は則ち司存有り」、沈約の「恩幸論」に「階闥の任は、各おの司存有り」と。所隸というのと同義。『雨露』は、君主の恩沢に喩える。『猷納』の司は、雲居の上にあり、恩沢を受けることが甚だ厚いのを言う。これは暗に結句の願望を胚胎している。『邊』は、一に偏に作る。意味上はその方がいいようだ。『清切』は、中書省を指す。『清』は、騒しく汚れていないことを言う。『切』は、近密。中書舍人は、その地位は天子に親近する清貴の職である。されば必ず才能すぐれた賢明な人材を選んで登用する。けだし田澄のような人であれば、この職に任ずることはできないのだ。

舍人退^レ食^二收^二封事^一 宮女開^レ函^二近^二御筵^一

※退食…シタクサガリ

退食ハ、退^レ朝^ヲ而食^ニ於^ニ家^ニ也。詩ノ羔羊^(注17)ニ退食自^レ公、委蛇委蛇^{タリ}。密奏ノ書疏ハ、封^{シテ}以^テ上^ル之^ヲ、故^ニ曰^ニ封事^ト。此謂^ニ獻納之章奏^ニ也。唐書^(注17)内宮有^ニ掌書三人^一、掌^ニ符契經籍ノ宣傳啓奏^ヲ。所謂宮女ハ、指^レ此^ヲ。見^ニ其密邇^ニ宮禁^ニ。上ノ句兼^ニ起居獻納^ヲ言^レ之^ヲ、下ノ句足^ニ獻納ノ事^ヲ。二句一氣^ニ説^下ス。舍人要職、夙^ニ出^テ待^レ

朝^ニ、退食^{シテ}而後、收^ニ投^レ匭^ニ之文^ヲ、以^ニ交^ニ掌書ノ宮女^ニ。宮女乃開^ニ其函^ヲ、以^ニ呈^ニ御覽^ニ也。蓋其侍^レ朝^ニ以^ニ舍人之職^ヲ也。故^ニ特^ニ稱^ニ舍人^ヲ。二字太重^シ。與^ニ盧照隣^カ長安古意^(注18)漢帝ノ金莖^一一式ナリ。退食之後、乃收^ニ獻納之章奏^ヲ、不^{シテ}自^ニ交^セ前^ニ而付^ニ宮女^ニ進呈^ス。是構句輕重之法。輯註^ニ近^ニ一^ニ作^レ捧^ニ、似^レ是^ニ。

(注16) 『詩經』召南・羔羊。委蛇は、しずしずとの意。朱子の集伝に「退食は、朝より退きて家に食するなり」という。

(注17) 『新唐書』卷四十七、百官志二、太子内官に「掌書三人、符契・經籍・宣伝・啓奏・教學・稟賜・紙筆を掌る」とあるが、これは皇太子附きの宮女のことである。

(注18) 盧照鄰は、初唐の詩人。王勃・楊炯・駱賓王とともに「初唐の四傑」の一人。その「長安古意」は七言六十八句の長編でその第十三・十四句に、

梁家畫閣天中起 梁家の画閣 天中に起こり
漢帝金莖雲外直 漢帝の金莖 雲外に直し

とある(『唐詩選』卷二)。

(注19) 文章法の名。上の句と下の句とに輕重があることを言うのであるうか。輕重法については、例えば情・李重華『貞一齋詩説』に「凡て対属の運用は、或いは史に子を対し、或いは子に史を対す、大段懸絶するを得ず。此れ亦た銖両輕重法、拳偶類を以て推す可し」と見える。

(注20) 宇都宮遯庵の増広本にも輯註を挙げる。錢注も同じ。詳註は捧に作り、「一に近に作る」と。

《退食》は、朝より退いて家で食事をとることである。『詩經』の羔羊に「退食公自^レりす、委蛇委蛇^{タリ}とある。密奏の書は封してたてまつるので、《封事》という。これは《獻納》の章奏のことである。『唐書』に「内宮に掌書三人有り。符契經籍の宣伝啓奏を掌る」とあり、いわゆる《宮女》はこれを指す。その禁裏に近侍して

いることを表わしている。上の句は、〈起居〉〈献納〉を兼ねて言い、下の句は〈献納〉のことを補足し、一気に説き下している。〈舍人〉は要職で、早朝参内して朝廷に侍し、〈退食〉した後、匭に投ぜられた文書を取り収めて、掌書の〈宮女〉に渡す。〈宮女〉はそこでその〈函〉を〈開〉いて、御覧に呈するのである。けだし彼が朝に侍するのは、〈舍人〉の職としてであらう、だからわざわざ〈舍人〉と称している。この二字はとても重い。盧照鄰の「長安古意」に「漢帝の金茎」というのと同じ手法である。〈退食〉の後はじめて〈献納〉された章奏を取り収め、自ら直接、御前にお渡しするのでなく〈宮女〉に渡して進呈する。これは構句軽重の法である。輯註に、〈近〉字、一に捧に作るとあるが、その方がいいようだ。

曉漏追趨青瑣闥 晴窓點檢白雲篇

※追趨：トシヤオソシトカケユク 點：シラベギンミスル

上句謂^二起居舍人^一。見^二其務勿劇^一ナルヲ。促^レ趾^ヲ疾歩^{スルヲ}。曰^レ趨^ト。上^レ朝^ニ之禮也。追趨^ハ言^下隨^テ宰相^ニ早^ニ

朝^{スルヲ}。石林燕語^ニ曰、唐ノ起居舍人^ハ、隨^ニ宰相^ニ入^レ殿^ニ、預^ニ聞奏^{スルヲ}事^ヲ、是也。闥^ハ宮門也。青瑣見^二漢書

元后傳^ニ。註^ニ宮門之扉、刻^ニ鏤^{シテ}連環文^ヲ而青^ニ塗^ス之^一也。下句謂^ニ獻納使^ヲ。見^二其業清閑^{ナルヲ}。點檢^ハ料

理^{スル}也。白雲篇未^レ考。或^ハ稱^ニ陶弘景^ノ白雲怡悅^{詩ヲ}。此借^指所^レ收之封事^ヲ。按^{スルニ}所^レ置匭^凡四。進^ニ

獻^{スルヲ}。賦頌^ヲ曰^ニ通玄^ト。蓋其中所^レ投^{スル}、率^{ムネ}多^ニ山林草茅之書^一、故^ニ借用^ス。上與^ニ雨露上天^一通^シ氣^ヲ、下

引^ニ河東^ノ賦^ヲ、亦良工^ノ苦心^ト。

(註21) 東陽の『蒼瓊録』に「趨ノ字ワシルト訓スレドモ、奔走ノ義トハ異ナリ、礼記ニ、趨而不走トアリ、趾ヲ狭メテ疾歩スルコトナリ。世ニ所謂公家アユミナリ。(中略) 朝謁ニハ趨リ進ムコト礼ナリ。故ニ趨朝ト称ス。ノサノサト闊歩舒行スルハ緩怠不敬ナル故ナリ」と指摘する。ただし『礼記』には玉藻篇に「走而不趨」とあるものの、「趨而不走」というのは見えない。

(注22) 宋・葉夢得(号は石林居士。一〇七七―一一四六)の著。全十卷。その巻三に「唐の起居郎舎人は、皆宰相に随つて殿に入り、奏事を預かり聞く」と。「唐詩貫珠」に既にこれを挙げる。

(注23) 『漢書』卷九十八。唐・顔師古の注に「青瑱は、刻して連環文を爲し、之を青塗するなり」と。

(注24) 六朝、齊梁の道士(四五六―五三六)。字は通明、号は華陽隱居。諡は貞白先生。茅山に帰隱したが、梁・武帝に国政の大事について諮問されることあり、当時「山中の宰相」と号された(『梁書』卷五十一、『南史』卷七十五)。その「詔して問ふ、山中何の有る所ぞと。詩を賦して以て答ふ」詩に、次のごとく詠じられている。

山中何所有 山中何の有する所ぞ

嶺上多白雲 嶺上 白雲多し

只可自怡悅 只だ自ら怡悦す可し

不堪持寄君 持して君に寄せるに堪えず

(注25) 邵宝『集註』に「白雲篇とは山林の士、草茅の言なり。疑ふらくは即ち章奏の属ならん」といい、顧宸の『辟疆園杜律註解』に「白雲の篇は、山林の士、草茅の言、即ち賦頌の属」という。草茅は、在野、民間の意。

(注26) 杜甫の「李尊師が松樹の障子に題するの歌」(『詳註卷六、〇二一五』に「已に知る仙客意相親しむを、更に覚ゆ良工心独り苦しむを」とあるのに基づく語。

上の句は、〈起居舎人〉のこと。その任務が繁忙な劇職であることを示す。せわしく足をそばめて疾歩するのを〈趨〉という。朝廷に上がる礼法である。〈追趨〉は、宰相に随つて早朝に天子に拝謁することをいう。『石林燕語』に「唐の起居舎人は宰相に随つて殿中に入り、事を奏するを預り聞く」とあるのが、それである。〈闥〉は、宮門である。〈青瑱〉は、『漢書』元后伝に見える。その注に「宮門の扉に連環文を刻鏤して、これを青く塗る」とあるのが、それである。下の句は、献納使をいう。その業務が清閑であることを示す。〈点檢〉は、吟味することである。〈白雲篇〉は、未詳。あるいは陶弘景の「白雲怡悦」の詩を称し、それを借りて取り収めた封事を指す。按ずるに設置された甌は全部で四つあり、賦頌を進献するのは通玄甌という。けだしその中に投ぜられ

たのは、おおむね山林草茅（民間在野の士）の書が多かったのであるう、だから借用したのである。上は〈雨露〉（上天）と気脈を通じ、下は〈河東の賦〉を引く、これもやはり良工の苦心した表現である。

楊雄更^ニ有^ニ河東ノ賦^一 惟待^三吹噓^{シテ}送^ン上天^ニ

※惟：ヒトヘニ 吹噓：トリモチテ

漢書楊雄傳、成帝ノ時^下有^三雄^カ文似^ニ相如^ニ者^上。上召^テ雄^ヲ待^ニ詔^ヲ承明之廬^ニ。從^レ祭^ル后土^ヲ、上廼率^ニ

羣臣^一陟^ニ西岳^ニ。雄以爲^ラ臨^ニ川^ニ羨^ハ魚^ヲ、不^レ如^ニ歸^テ而結^ニ網^一。還^テ上^ニ河東^ノ賦^ヲ以勸^ム。時公作^下封^ニ西

岳^一賦^上、故^ニ自比^レ之^ニ也。覺^レ唇^ヲ吐^テ氣^ヲ曰^ク吹^ト、張^口出^テ氣^ヲ曰^ク噓^ト。北史盧思道傳^ニ剪拂吹噓、增^ニ其光

價^一。謂^ニ推樊^一也。此公待^ニ集賢^一時^{（注30）}作^{（注30）}。公既^ニ獻^ニ三大禮^一賦^ヲ、明皇奇^レ之。今又有^下封^ニ西岳^一賦^上、

亦欲^ニ進呈^一而^上達無^レ階。賴^{リテ}田舍人爲^ニ獻納^一之職^一、故^ニ望^ニ之^ニ吹噓^一也。主^{トシテ}稱^ニ獻納^一爲^レ

是^カ故也。不^ハ然專稱^シ舍人^一可也。公少^{シテ}以^レ文^ヲ自負^ス。願^ニ以效^ニ朝廷之用^一。見^下上^ニ明皇^一書^上。此詩

以^ニ楊雄^一自況^{（注32）}、冀^ニ望^ム乙夜^一之覽^{（注32）}、亦豪氣未^レ除也^{（注30）}。

（注27）『漢書』卷八十七。相如是、前漢の武帝に仕えた辞賦の大家、司馬相如（字は長卿。前一七九〜前二七）。

（注28）例えば、明・梅賾祚の『字彙』に「嘘は吹なり。又た氣を出すこと急なるを吹と曰ひ、緩やかなるを嘘と曰ふ。又た唇を覺めてめて氣を吐くを吹と曰ひ、口を虚にして氣を吹くを嘘と曰ふ」とある。

（注29）『北史』卷三十。盧思道は北齊の人（五三五〜五八六）。その「孤鴻の賦」の序に「剪払吹噓、其の光価を長くす」と。

（注30）集賢は集賢院のこと。「詩聖杜文貞公伝」の（注14）参照。

（注31）天宝十載（七五二）正月八日に玄宗が太清宮に朝献し、九日に太廟に朝享し、十日に南郊で天地を合せ祀つたのを、それぞれ寿いだ賦三篇。詳註卷二十四に見える。

（注32）杜甫に「明皇に上る書」というのではないが、己れの文才を自負していたことは、「鵬の賦を進むるの表」（詳註卷二十四）に「臣幸ひに先臣の緒業に頼り、七歳自り綴る所の詩業、四十載に向んとして、約千有餘篇。（中略）儼使先祖の故事を

執り、泥塗の久辱を抜かしむれば、則ち臣の述作は、六経を鼓吹する能はずと雖も、数子に先鳴し、沈鬱頓挫、時に随つて敏捷なるに至つては、楊雄・枚皋ばいこうの徒も、企及す可きに庶ちかし」と述べていることから知られる。ちなみに、枚皋は、漢・枚乗の子で、父子ともども辞賦の作家として有名。

〔注33〕「韋左丞丈に贈り奉る二十二韻」詩（詳註卷一、〇〇三五）「賦は料る揚雄の敵なり」と。

〔注34〕天子の御書見。夜を甲乙丙丁戊の五つの時間帯に分けたうち、午後十時から十二時の間を乙夜といい、その時に政務を終えた天子が書見することから、かくいう。『夜航詩話』卷三に、「人、乙夜の故実を質す。按ずるに、段文昌の淮西碑に、大禹の櫛風の志に遵したがひ、光武の乙夜の勤有りと。是れ其の出なり。然れども光武紀に云ふ、經理を講論し夜分乃ち寐ぬと。乙夜の字無し。漢魏已来、甲乙丙丁戊を以て夜を紀し、文を五夜と謂ひ、亦た五更と曰ふ。乙夜は即ち二更なり」云々と。

〔注35〕「三国志」魏書・陳登伝に「陳元龍は湖海の士、豪氣除せず」と。

『漢書』楊雄伝に、成帝の時、楊雄の文章が司馬相如に似ていると推挙する者がおり、御上は楊雄を召し出して承明廬で待詔させた。后土を祭るのに扈從した時、御上は群臣を率いて西岳（華山）に登られた。楊雄は川に臨んで魚を欲しがるより、帰つて網を結ぶほうがよいのにと考え、もどられると〈河東の賦〉を奉つて天子を勧戒した、とある。当時、公は「西岳に封ずるの賦」を作つたので、自らを比しているのだ。唇をすばめて息を吐くのを〈吹〉といい、口を大きく開けて息を出すのを〈嘘〉という。『北史』慮思道伝に「剪払吹嘘、光価を増す」とみえ、推奨する意である。これは公が集賢院で詔が下るのを待っていた時の作。公はすでに「三大礼の賦」を献上しており、明皇（玄宗）がこれを奇とした。今また「西岳に封ずるの賦」を同様に進呈したいと思っているのだが、その手立てがない。田舎人が献納使の職にあることから、〈吹嘘〉を望んでいるのである。主として〈献納〉のことを称しているのは、このためである。そうでなければ専ら〈舍人〉のことを称していいはずだ。公は若くして文才を自負し、朝廷の役に立つことを願っていた。そのことは「明皇に上る書たてまつ」に見える。この詩は、自らを〈楊雄〉に比し、天子が御覧になるのを切に望むもので、やはり豪氣がまだ消え失せていない。

005 贈田九判官梁止

田梁止爲^(注1)隴右^(注2)節度使哥舒翰^(注3)判官^(注4)。時^(注5)奉^(注6)使^(注7)入朝也。因^(注8)案^(注9)舊唐書^(注10)哥舒翰討^(注11)安祿山^(注12)。以^(注13)田梁止^(注14)爲^(注15)御史中丞^(注16)、充^(注17)行軍司馬^(注18)、軍政皆委^(注19)焉。其爲^(注20)二英俊^(注21)一可^(注22)知矣。九^(注23)行第也。唐^(注24)俗以^(注25)行第^(注26)相呼。東^(注27)厓^(注28)釋親孝作^(注29)圖說^(注30)詳^(注31)レニス^(注32)之ヲ。江談抄^(注33)載^(注34)二唐人ノ話^(注35)「杜撰耳。唐制、節度使有^(注36)二判官一人^(注37)、掌^(注38)三裁^(注39)二判^(注40)軍^(注41)事^(注42)。止^(注43)ノ本字^(注44)ハ宣聖^(注45)ノ尊諱^(注46)。清人謹^(注47)テ避^(注48)之ヲ。康熙^(注49)朝始^(注50)有^(注51)レ命^(注52)。見^(注53)二九經補注^(注54)。於^(注55)義^(注56)三宜^(注57)然^(注58)爾^(注59)」。

(注1) 于邵に「田司馬伝」(『文苑英華』卷七九三、『全唐文』卷四二九)があり、それに拠れば、京兆茂陵の人。このこと輯註に指摘する。但し、吉川幸次郎『杜甫詩注』には「名は『某』とのみいうその文、同じく哥舒の部下であるが、必ずしも同一人物とは見えない」とする。

(注2) 哥舒翰は、トルコ系の部族トルギッシュの末裔。天宝六載(七四七)、隴右節度使となり、吐蕃との戦いで勲功があった。天宝十四載、安祿山の乱が起きると首都長安防衛の生命線である潼関を守り、二十万の大軍を擁して持久戦の構えをとったが、宰相楊国忠の無理な出兵要求に抗しきれず、やむなく関を出て平原での会戦に及び、大敗を喫した。禄山に捕らえられ後に殺された。『旧唐書』卷一〇四、『新唐書』卷一三五に伝があり、杜甫に「哥舒開府翰に投贈す二十韻」詩(詳註卷三、〇〇九六)がある。なお、原文には爲字の下に「二」点を缺く。今、これを補う。

(注3) 『旧唐書』哥舒翰伝に「安祿山反するに及び、上(玄宗)封常清・高仙芝喪敗するを以て、翰を召して入らしめ、扨して皇太子先鋒兵馬元帥と爲し、田良丘を以て御史中丞と爲し、行軍司馬に充つ」とあり、潼関に至った後、かねてより風疾のあった哥舒翰は「軍中の務め、復た躬ら親しくせず、政を行軍司馬の田良丘に委ぬ」という。この田良丘と杜詩に云う田梁丘とは同一人物。そのことについて、顧宸『辟疆園杜律註解』に「公の此の詩、応に天宝十三載贈る所なるべし。但だ史に云ふ良丘、詩に云ふ梁丘、未だ孰れか是なるを知らず」と。

(注4) 伊藤東涯(名は長胤、寛文十年「二六七〇」)「元文元年「二七三六」」の『釈親考附輩行説』(元文元年刊)のこと。行第は輩行(排行)と同じで、一族の同世代の者の兄弟順をいう。近人岑仲勉に『唐人行第録』がある。

(注5) 大江匡房(長久二年「二〇四一」)「天永二年「二一一一」」談・藤原実兼筆録『江談抄』古集并本朝諸家集等事に「(江

以言、唐人に對ひて此の事を問ふに、答へて云はく、人の子孫を立つる處、譬へば一人有り。件の人、三人有り。始め嫡子より次第に一二三と稱す。次に嫡子五人有り。嫡孫より次第に四五六七八と稱す。次に二男に子四人有り。其の嫡子より次第に九十一一二と稱す。次に三男に子三人有り。其の嫡子より十三十四五と稱す。次に嫡孫に子二人有り。十六十七と稱す。次に庶子の子を稱す。此の如く次第に稱して、限るに四十九を以てして、五十に及ばず」と。なお、宇都宮遷庵の両書にも『江談抄』を挙げ、『杜律詳説』には「九八行第ナリ。或ハ及第ノ次第ト云。或ハ其氏ノ元祖ヨリ数エテ某二某三某五ナトト次第シテ云ト云。或ハ兄弟ノ次第ト云。皆彷彿ノ説ニシテ不_レ慥。正説ハ江談抄ニ所_レ載ヲ可_レ用及第ノ次第ト云ハ不可ナリ」という。

(注6) 何に拠ったか不明。『通典』卷三十二、職官十四、都督の条には節度使の僚左について述べ、「判官二人、倉兵騎胄の事を分判す」という。また『資治通鑑』卷二二六、天宝六載の胡注に「唐諸使の属、判官、位は副使に次ぎ、ことごと尽く府事を総_すぶ」と。

(注7) 宣聖は孔子の称。唐の開元二十七年(七三九)、孔子に追諡して文宣王といい、宋代、その上に玄聖、至聖の字を加えたことから、宣聖と称する。

(注8) 清・姜兆錫(字は上均)撰。雍正元年(一七二三)〜乾隆五年(一七四〇)刊。その内容は、周易述蘊四卷・書經蔡伝參義六卷・詩伝述蘊四卷・周礼輯義十二卷・儀礼経伝内編參義二十三卷外編參義五卷・礼記章義十卷・春秋公羊穀梁二伝彙纂十二卷・春秋胡伝參義十卷・爾雅參義六卷・孝經本義一卷。但し、東陽が言うような指摘は見い出せずにいる。

(注9) なお、このことに関連して『薈瓊録』に次のようにいう。

焦中答_レ人書牘二名ヲ諱ムコトヲ論辯シテ、近時舶来書、丘多作_レ邱、避_二孔子名_一。夫諱者国則君、家則父母、古之法也。除_レ之無_二諱理_一、況諱者繁_レ音非_レ繁_レ形、彼今以_レ胡變_レ夏、乃有_二斯陋_一、可_レ嘆哉ト云ヘリ。イカニモ昔ハ諱ミヲ避クルコト言語ノ上ニテ憚ルノミ。後世イヨ_レ、重_二ンジ憚リテ其文マデモ猥リニ用キザルハ至敬ヲ尽スノ志ナリ。宣聖ノ尊名ヲ避クモ、重ク崇敬スルノ至ニテ、多クハ並ノ字ニ作ル。或ハ邱ノ字ヲ替用ユ。康熙帝ノ旨ニ始マルト九経補注ニ云ヘリ。蕉中ハ誠ニ方外ノ人ナリ。君親ナラデ諱ムベキ理ナシトハ夢中ノ喟嘆ニ似タリ。且ツ何ノ嘆クコト有ランヤ。

〔蕉中〕は、大典禪師の号(蕉は蕉の訛字)。東陽が引く箇所は、安永四年(一七七五)刊の『小雲棲稿』卷十一に見え

る。

〈田梁止〉は、隴右の節度使哥舒翰の〈判官〉である。当時、使いを奉じて入朝していた。そこで調べてみると、『旧唐書』に「哥舒翰が安祿山を討つことになり、田梁止を御史中丞とし行軍司馬に充て、軍政をすべて委任した」とあり、その英俊ぶりがわかる。〈九〉は、行第である。唐代の習慣として行第で呼び合った。東涯の『釈親考』に図説を作り、そのことを詳らかにしている。『江談抄』に唐人の話を載せているのは、杜撰きわまりない。唐代の制度では、節度使の下に判官が一名おり、軍事の裁判を掌った。〈止〉の本字は宣聖（孔子）の尊諱で、清人は謹んでこれを避けた。康熙帝の時に始めて下命があった。そのことは『九經補注』に見える。道義上かくあるべきだ。

崆峒^(注10)ノ使節上^ニ青霄^ニ 河隴ノ降王款^ニ聖朝^ニ

※上青霄…サンダイ 款…キフク 聖朝…ゴトウダイ

崆峒^ハ山ノ名。在^ニ隴石^ニ、當^ニ吐蕃^ニ出入之路^ニ。以^ニ其名雄壯^ナ、特^ニ用^テ以稱^ス之^ヲ。使節^ハ使臣持^レ節者^也。青

霄^ハ嶺^ニ朝廷^ニ。河隴、黃河隴山。皆接^ニ蕃戎之境^ニ。降王^ハ蕃王來降^{スル}者。款、苦管反、誠也^(注13)。此謂^ニ輪^ニ誠歸

服^{スル}也。天寶十二載、哥舒翰以^ニ隴石節度使^ニ擊^ニ吐蕃^ニ、拔^ニ洪濟大漠門等ノ城^ニ、悉收^ム河北九曲ノ部落^ヲ。

十三載、吐谷渾ノ麹毗王款^ク塞^ヲ。詔^{シテ}哥舒翰^ニ至^テ磨環州^ニ應^セ接^{セム}之^ヲ。蓋是ノ時^ニ翰遣^ニ梁止^ニ報^ニ命^{セシム}天

朝^ニ。言^ニ蕃王納^レ款^ヲ事竣^テ而判官奉^{シテ}使^ヲ入朝^{スル}也。或^ハ謂^ニ使節指^ト翰^ヲ。非也。

(注10) 崆峒は、甘肅省平涼県の西にある山の名。

(注11) 七世紀初めから九世紀中頃にかけてチベットにあつた国の名。『旧唐書』卷一九六、『新唐書』卷二二六に吐蕃伝がある。

(注12) 持節について、『舊唐書』に「持^レ節建^レ節ト云フコト人多ク名義ヲ詳ニセズ、節ハ符節ノ義ニシテ、シルシト云フコトナリ」云々という。

〔注13〕『広韻』に「款は、誠なり、叩なり、至なり、重なり、愛なり。苦管の反」と。

〔注14〕『資治通鑑』卷二六、玄宗の天宝十二載（七五三）の条に「隴西節度使哥舒翰、吐蕃を撃ち、洪濟・大漠門等の城を抜き、悉く九曲の部落を収む」とある。なお、同書卷二一〇、睿宗の景雲元年（七一〇）の条、胡三省の注に「九曲は、積石軍を去ること三百里、水甘く草良く、畜牧に宜し。蓋し即ち漠の大小榆谷の地ならん。吐蕃、洪濟・大漠門等の城を置き以て之を守る」と。洪濟は、今の青海省貴徳県の西。大漠（莫）門は、青海省共和県の東南。

〔注15〕錢注（卷九）に「十三の載、吐谷渾の蘇毗王塞を叩く。翰に詔して磨環州に至って応接せしむ」と。この記事は、『旧唐書』卷一〇及び『新唐書』卷一四七の王思礼伝に拠るが、『旧』伝には吐蕃蘇毘王とする。吐谷渾は、四〇七世紀に青海省のコノール地方にあった鮮卑系の遊牧国で、唐の龍朔三年（六六三）吐蕃に滅ばされた（『旧唐書』卷一九八、『新唐書』卷二二上）。それ以来、蘇毗は吐蕃に属していたのであろう。なお、『資治通鑑』卷二二七、天宝十四載の条に「春正月、蘇毗の王子悉諾邏、吐蕃を去って来降す」とあり、胡注に「新書に曰く、蘇毗は、吐蕃の強部なり」という。『新書』は『新唐書』吐蕃伝上。

〔注16〕邵宝『集註』卷二十三、簡寄類に「使節は哥舒翰を指す」とあり、薛益『分類』卷二、簡寄も同じ。宇都宮遯庵『杜律詳説』に「使節ハ節度使所持ノ旌節ヲ云フ。爰ニテハ節度使ヲ指スナリ。（中略）言ハ崆峒山ノ使節哥舒翰撃吐蕃」テ入朝ス。因レ茲ニテ河隴ノ地ノ降王聖朝へ納款スルナリ」という。

《崆峒》は、山の名。隴西にあり、吐蕃が出入する道筋にあたる。その名が雄壮であるので、わざわざ用いてこれを称した。《使節》は、使臣で節を持する者。《青霄》は、朝廷に喩える。《河隴》は、黄河・隴山で、いずれも吐蕃との境に接する。《降王》は、蕃王の来降する者。《款》は、苦管の反で、誠の意。ここでは誠を致して帰服することをいう。天宝十二載、哥舒翰は隴右の節度使として吐蕃を撃ち、洪濟・大漠門等の城塞を陥落させ、河北九曲の地を取り戻した。十三載、吐谷渾の蘇毗王が来降し、朝廷は哥舒翰に詔して、磨環州で応接させた。けだしこの時、哥舒翰が梁止を派遣して朝廷に報告させたのであろう。蕃王が好を通じ一件落着してから判官が使いを奉じて入朝したことを言う。或る説に《使節》が哥舒翰を指すというのは、間違いだ。

宛馬總テ肥春ノ苜蓿 將軍只數フ漢ノ嫖姚

※肥：タクマシ 苜蓿：ムマコヤシ 只數：アナタバカリ

(注17) 大宛、西域ノ國名。出二駿馬一。馬嗜二苜蓿草一。漢ノ武帝遣二李廣利一伐二大宛一、取二馬并二苜蓿種一而歸ル。此因二其爲二西戎ノ故事一、借テ稱二吐谷渾ノ貢獻一。言二時方ニ陽春、苜蓿油油、所レ貢スル蕃馬、以レ此飼レ之ヲ、尤肥テ而壯ナル也。此句贊ス哥舒之功一。蓋因二其威武ニ而外夷款附シテ、致二此盛事一也。將軍ハ即謂二哥舒一。隴右節度使ハ爲下鎮ニ吐蕃一之將軍也。嫖姚ハ勁疾之貌。漢用テ爲二官名一。霍去病爲二嫖姚校尉一、數レ伐二匈奴一、尤稱二名將一ト。今哥舒武勳、吐蕃風靡、一時邊將盛名、無レ有下過二哥舒一者上。猶漢ノ時獨推二霍嫖姚一。故二日二只數一。餘ハ不レ足數ニ矣。一聯見二判官得レ所依。意フニ亦將軍之功、判官與リテ有レ力焉。乾隆帝詩醇御評ニ云、此詩本望二田薦一己ヲ、故ニ宛馬ノ句、以レ比爲二賦ト、微カニ領ニ此意一。雖レ似二穿鑿一、不レ爲レ無レ見。

(注17) 漢魏の頃、中央アジアのフェルガナ地方にあったイラン系民族の国家。『漢書』卷九十六、西域伝上。

(注18) 李広利は、武帝の寵姫李夫人の兄。太初元年（前104）貳師將軍に任じられ、太初三年大宛を破った。『漢書』卷六十一に伝がある。

(注19) 油油は、つややかに伸びるさま。春秋、宋・微子の「麦秀の歌」に「麦秀漸漸たり、禾秀油油たり」（『史記』宋世家）と。

(注20) 『唐詩貫珠』卷十、投贈幕佐にこの詩を載せ、「次に其の威武に因つて外夷款附すること有るを言ふ」と。

(注21) 『漢書』卷五十五の霍去病伝に「去病、皇后の姉たるを以て、年十八にして侍中と爲る。騎射を善くし、再び大將軍（衛青）に従ふ。大將軍詔を受け、壯士を予へ、票姚校尉と爲す」とあり、唐・顏師古の注に「票、音は頻妙の反。姚、音は羊召の反。票姚は、勁疾の貌なり」という。それに拠れば、票（嫖）姚の二字はいずれも去声で仄字になるが、服虔は「音は飄揺」と注し、平声に読む。杜甫は服虔に従い平字に用いる。このこと、胡仔『茗溪漁隱叢話』前集卷九、邵博『邵氏聞見後録』卷十八、王楙『野客叢書』卷二などに指摘する。

(注22) 校尉について、『舊唐書』に「軍校ハ今ノ与力ナリ、校尉ハ組大將ナリ。(中略) 校尉ハ組ノ番頭トシテ、一組ヅツ預リテ支配スルコト闌格ヲ設ケテ分チタル如クナリ」云々という。

(注23) 薛益『分類』に「当時辺將の盛名、哥に過ぐる者無し。漢独り霍を推すが如し」と。

(注24) 『御製唐宋詩醇』のこと。清・乾隆十五年(二七五〇)の勅撰。乾隆帝が唐の李白・杜甫・韓愈・白居易、宋の蘇軾・陸游の詩を選び、各詩人に総評を附し、詩ごとに短評を施した選集。その卷十三にこの詩を収め、「風格適上、所謂神理縱横にして準繩最も密なり。此の種の体製、惟だ老杜長を擅にす。詩は本と田の己れを薦めんことを望む。故に宛馬の句、比を以て賦と爲し、微に此の意を領す。五六の語勢、丸珠を転ずるが如し。仇兆鰲謂ふならく阮瑤は高適を指すと。見無しと爲さず。徒に蔡都尉を送る詩の阮を以て高に比するのみならざるなり」という。適上は、雄勁で群を抜いていること。神理云々の句、清・盧世淮「紫房餘論」(仇兆鰲「詳註」附編、諸家論杜に挙げる)に見える。神理は、人力を超えた自然の妙をいうか。準繩は、詩の規則。「蔡都尉を送る詩」は(注30)参照。

(注25) 比・賦は、『詩経』の六義の一。比は、直喻。賦は、直叙。

大〈宛〉は、西域の国名。駿馬を産出した。馬は〈苜蓿〉草を好む。漢の武帝は李広利を派遣して大宛を伐ち、馬と苜蓿の種とを取って帰らせた。これは西域の故事であるので、それを借りて吐谷渾の貢ぎ物や献上品のことをいう。時はまさに陽春で、苜蓿がつややかに伸び、朝貢された胡馬は、この草で飼育され、よく〈肥〉えて元気であることをいう。この句は、哥舒翰の功績を讃えている。けだしその威武によって外夷が好を納れて帰属し、かかる盛事を致したのである。〈將軍〉は、すなわち哥舒翰のこと。隴右節度使は、吐蕃を鎮めるための將軍である。〈嫫姚〉は、勁疾のさま。漢は官名に用いた。霍去病が嫫姚將軍となつてしばしば吐蕃を攻撃し、とりわけ名將だと称えられた。現在、哥舒翰の武勲は吐蕃が風靡し、一時辺將としての盛名は哥舒翰に過ぐる者はいなかったほどで、あたかも漢代に霍去病ひとりが推称されたようなものであった。それゆえ〈只だ数ふ〉という。他は数えるに足りないことになる。この一聯は、〈判官〉が依拠すべき人を得たことを表わしている。思う

に、やはり將軍の功績には〈判官〉の力が大きく与つていたのである。乾隆帝の『詩醇』御評に云う、「この詩はもとより田判官が自分を推薦してくれることを望んだもので、そのため〈宛馬〉の句は比喻を用いながらも直叙しており、ひそかにこの意図を込めている」と。穿ちすぎのように思えるが、見るべきところが無いわけではない。

陳留ノ阮瑀誰カ争ヘン長ヲ 京兆ノ田郎早ニ見レ招カ

此聯專稱^ニ判官^ヲ。後漢^{（注26）}ノ阮瑀、陳留縣ノ人。博學^{ニシテ}能^ス文^ヲ、爲^ニ曹操^ノ記室^ト。此比^ニ其文學之美^ヲ。誰争^{レハ}長^ヲ言^レ莫^ニ之^ニ先^{コト}也。田鳳爲^レ郎、容儀端正、入^テ奏^ス事^ヲ。靈帝目^ニ送^{シテ}之^ヲ曰、堂堂乎張、京兆ノ田郎。此用^ニ本姓ノ故事^ヲ、以美^ニ其容儀^ヲ也。早^ニ見^レ招言^ニ入^レ幕^ニ之早^ヲ。蓋少^{ヨリ}有^ニ才名^一也。

（注26） 字は元瑜。陳留尉氏の人（？）（二二二）。なお、東陽は陳留を県名とするが、これは郡名。阮籍（字は嗣宗、二一〇）（二六三）はその子。「建安の七子」の一人で、檄文の名手。『三国志』魏書卷二一に伝があり、興膳宏編『六朝詩人伝』（大修館、二〇〇〇年）にその訳注（林香奈担当）がある。記室は、書記役。なお、鈴木

（注27） これは、邵宝『集註』に見える表現。薛益『分類』も同じ。

（注28） 田鳳云々は、『三輔決録』に見える。郎は、尚書郎。「堂堂乎張也」は、『論語』子張篇の「曾子曰く、堂堂たるかな張や、与に並んで仁を為し難し」に基づく表現。

この聯は、専ら〈判官〉のことを称賛している。後漢の〈阮瑀〉は、陳留県の人で、文章を能くし、曹操の記室となった。ここではその文章学問のりつばなことに擬えている。〈誰か長を争はん〉は、これに先んずる者がないことをいう。田鳳は郎となり、容儀端正であつた。入朝して奏上した時、靈帝はその退出するのをじつと見まもりながら、一言おせられた、「実に堂堂たるものだ、〈京兆の田郎〉は」。これは同姓の故事を用いて、その容儀をほめているのである。〈早に招かる〉は、幕府に入るのが早かつたことをいう。けだし若い頃から才名があつたのであろう。

麾下頼^レ君才竝^ニ入 獨能無^レ意^ニ向^ニ漁樵^ニ

漁樵^ハ謙辭^ニ。自比^ニ野人^ニ。將軍麾下之士、頼^ニ判官^ニ引薦^ニ、人材多得^レ入^{コトヲ}幕^ニ。如^ニ蔡希魯^ニ高適^ニ、其尤著^ル

者也。如^ハ余^カ江湖ノ散人耳。亦獨^ニ有^レ意^ニ於拾收^ニ乎。蓋欽慕^{シテ}而囑望^{スル}也。容齋隨筆^ニ云、唐ノ世士人初^テ

登^レ科^ニ或^ハ未^レ仕者^ハ、多以^レ從^ニ諸藩府ノ辟置^ニ爲^レ重^{シト}。觀^ニ韓文公送^ニ石洪溫造^ニ二處士^ニ赴^ニ河陽^ニ幕^ニ序^上、可^レ

見^ニ禮節^ヲ。按^{スルニ}此時公猶爲^ニ布衣^ニ、待^ニ制^ヲ集賢院^ニ、爲^ニ宰相陳希烈^ニ所^レ忌、沈滯^{スルコト}四年^{ナリ}矣。蓋當時

待^レ詔^ヲ者、猶未^レ解^レ褐^ヲ、或^ハ有^ニ出身十年、不^レ獲^レ祿^ヲ者^一也。

(注29) 『唐詩貫珠』に既に同様の指摘がある。

(注30) 杜甫に「蔡希魯都尉の隴西に還るを送り、因つて高三十五書記に寄す」詩（詳註卷三、〇一一六）がある。蔡希魯は伝記不詳。なお、錢注では蔡希曾とし「曾、一に魯に作る」と。高三十五は高適のこと。高適の年譜に周勛初『高適年譜』

（上海古籍出版社、一九八〇年）があり、天宝十二載（七五三）隴右節度使の幕に入り、翌十三載掌書記に充てられ、その際、杜甫に「高三十五書記を送る十五韻」詩があるとするが、川口喜治「杜甫『送高三十五書記』詩の制作をめぐって―

高適研究の一端として―」（山口県立大学国際文化学部紀要）第九号、二〇〇三年）に拠れば、「高適が哥舒翰幕府に初めて入幕したのが天宝十一載の秋から冬にかけての時期、同年冬哥舒翰に随つて長安に戻り、翌十二載夏に再び河隴の地に

赴いた。そして、この時、杜甫によつて『送高』詩が作られた」という。

(注31) 朝廷に仕えずにいる役立たずの無用者。晩唐・陸龜蒙に「江湖散人伝」（甫里先生文集）卷十六）がある。

(注32) 南宋・洪邁（一一二二―一二〇二）の著。その『容齋隨筆』巻一に見える。韓文公は、中唐・韓愈（字は退之。七六八―八二四。文公はその諡。「石洪溫造二處士河陽の幕に赴くを送るの序」は、「石處士を送るの序」（『昌黎先生集』巻

二十一）および「溫處士の河陽軍に赴くを送るの序」（同上）のこと。

(注33) 東陽の「詩聖杜文貞公伝」に「宰相陳希烈の為に沮抑せらる。沈滯すること四年」と。

(注34) 郷貢進士（州府の推薦を受けた者）で礼部の試験（資格試験）に合格し吏部に登録された官僚候補生。韓愈の貞元十年

（七九四）作「張童子を送る序」（『昌黎先生集』巻二十一）に「有司たる者、州府の升^あぐる所を総べて、之を考試すること加^ま

ます詳察す。其の進む可き者を第^{ついで}でて、名を以て天子に上^{たまつ}つて之を藏め、之を吏部^{しとく}に属す。歳とし二百人に及ばず。之を出身と謂ふ」と。なお、童子は、科擧の童子科に合格した者。

〈漁樵〉（漁夫やきこり）は、謙遜の辞で、自ら野人（在野のしがない者）に比している。將軍（麾下）の士は、〈判官〉の推薦によつて人材が多く幕府に入ることができた。蔡希魯や高適のような人は、その中でもとりわけ顕著な例である。自分ごときは、「江湖の散人」に過ぎないのだが、それでもやはり拾い挙げて下さるつもりはないでしょうか。けだし欽慕して囑望しているのである。『容齋隨筆』に「唐代、士人で科擧に及第したばかりであるとか、まだ仕官していない者は、多くの場合、各地の幕府の招請に従うことを重要だとみなしていた。韓文公の『石洪・温造二処士の河陽の幕府に赴くを送る序』をみれば、そのしきたりがわかる」と。按ずるに、この時、公はまだ布衣（無位無官）の身で、集賢院において天子の御下命を待っていたが、宰相陳希烈のために阻まれ、四年もの間、沈滞していたのである。けだし当時、詔を待つ者には、まだ褐（粗末な服）を脱がず仕官できずにいたり、吏部に登録されたものの十年たつても禄にありつけぬ場合があつたのである。

006 送^(注1)鄭^(注2)十八虔^(注3)貶^(注4)台州^(注5)ノ司^(注6)戸^(注7)參^(注8)軍^(注9)

虔博^(注10)學^(注11)ニシテ善^(注12)ス詩書畫ヲ。爲^(注13)コト人放蕩^(注14)ニシテ嗜^(注15)ム酒ヲ。與^(注16)ニ公及李白^(注17)一爲^(注18)ニ詩酒友^(注19)。明皇愛^(注20)シテ其才^(注21)ヲ稱^(注22)ニ鄭虔^(注23)三絶^(注24)ト。爲^(注25)ニ廣文館^(注26)ノ學士^(注27)ト、遷^(注28)ニ著作郎^(注29)ト。安祿山反^(注30)ス。却^(注31)ニシテ百官^(注32)ヲ置^(注33)ニ東都^(注34)ト、僞^(注35)ニ授^(注36)ス虔^(注37)ニ水部郎中^(注38)ト。虔稱^(注39)ニ風緩^(注40)ト、求^(注41)レ攝^(注42)ニ市令^(注43)ト、潛^(注44)ニ以^(注45)ニ密章^(注46)ヲ達^(注47)ニ靈武^(注48)ト。賊平^(注49)テ免^(注50)シテ死^(注51)ヲ謫^(注52)ニ台州^(注53)ト。後數年^(注54)ニシテ卒^(注55)ス。其顛末詳^(注56)ニ八哀詩^(注57)中^(注58)ト。

傷^(注59)ニ其臨^(注60)レ老^(注61)ニ陷^(注62)レ賊^(注63)ニ之故^(注64)ト關^(注65)コトヲ爲^(注66)ニ面別^(注67)ト、情^(注68)見^(注69)ニハル于詩^(注70)ト。傷^(注71)ノ字被^(注72)ニ二句^(注73)ト。深^(注74)ク傷^(注75)ニ其窮^(注76)ニ之故^(注77)ト與^(注78)ニ欲^(注79)ニ面別^(注80)ト而失^(注81)上^(注82)レ之^(注83)ヲ、因^(注84)テ追送^(注85)スルニ此詩^(注86)ヲ、見^(注87)ニ其情^(注88)於詞^(注89)ト也。初鄭^(注90)在^(注91)ニ園圍^(注92)ト、不^(注93)レ得^(注94)ニ往^(注95)テ見^(注96)コトヲ。及^(注97)ニ其見^(注98)ニ貶^(注99)セ、欲^(注100)レ錢^(注101)ニ諸途^(注102)ト而公出^(注103)ルコト後^(注104)レテ、鄭既^(注105)ニ往^(注106)ク矣。

其或ハ以爲_下自_二同_{シテ}路人_ニ欠_中窮交之誼_上乎、是負_二良友_ニ見_レ懷_二遺恨_一ヲ、所_三以有_二此寄_一也。世説_注ニ載_ス、楊憑
貶_ニ臨賀_ノ尉_一。及_テ行_ニ姻友無_レ敢_テ送_ル者_一。獨所_レ善_{スル}友徐晦送_テ至_ニ藍田_一。人謂_レ徐_ニ君誠_ニ厚_シ楊臨賀_一。
無_ニ乃爲_{コト}累_ヲ乎。徐曰、晦自_ニ布衣_ノ時_一、楊知_{コト}我_ヲ厚_シ。方_ニ此流播_一、寧_ソ忍_ニ無_レ言而別_一乎。蓋公之志亦
如_レ是_ノ也。詩中所_レ叙_{スル}、上半傷_ニ其臨_テ老陷_レ賊_ニ之故_一ヲ、下半傷_レ闕_レ爲_ニ面別_一ヲ。字字皆堪_ニ滴_レ血_ヲ鎖_一
骨_ヲ。何_ソ其至情之切_{ナル}也。

(注1) 鄭虔 字は若齊(六八五?七六四?)。『新唐書』卷二〇二、文藝伝中に伝がある。十八は輩行(排行)。杜甫との交友に
ついては、吉川幸次郎「杜甫と鄭虔」(筑摩叢書「杜甫私記」、後に『全集』第十二巻収録)に詳しい。中国で出たものに、
王晚霞主編『鄭虔研究』(浙江古籍出版社、一九九〇年)、『鄭虔研究統集』(同上、一九九三年)があるが、後者は未見。

(注2) 台州は、今の江蘇省臨海県。州の等級は上(唐代の州県は、その重要度や戸数の多寡によって七つの等級に分けられて
おり、その等級が地方官の品階や俸給にも関係した)。司戸參軍は、戸籍を掌る。台州司戸參軍の品階は、従八品下。

(注3) 晩唐・張彦遠の『歴代名画記』巻九、唐朝上、鄭虔の条に「李白杜甫と詩酒の友_た爲り」というが、李白との交遊につい
ては、これを裏付ける資料が見あたらない。なお、『歴代名画記』には、岡村繁・谷口鉄雄訳(中国古典文学大系『文学芸
術論集』所収)および長廣敏雄訳(東洋文庫)がある。

(注4) 『新唐書』鄭虔伝。

(注5) 広文館は玄宗が特別に設置した機関で、国子監(唐代の最高学府)の学生で進士科をめざす者を管轄指導する。但し、
ここで広文館学士というのは誤り。広文館博士とすべきである。『歴代名画記』に「開元二十五年、広文館学士と爲る」と
見えるが、広文館が置かれたのは、天寶九載(七五〇)のこと、この時、鄭虔は広文館博士(正六品上)に任じられた
のである(『唐会要』巻六十六)。このこと、傅璇琮主編『唐才子傳校箋』(巻二)および前掲『鄭虔研究』参照。

(注6) 宮中の圖書を掌る秘書省に属し、国史の修撰を掌る。品階は従五品上。なお、鄭虔が著作郎となつたのは、天寶十四載
(七五五)、安祿山の乱が起こる直前のことである。

(注7) 尚書工部に属し、河川や水路を掌る。品階は従五品上。

(注8) 「八哀詩」其七(詳註卷十六、〇九五〇)に「故の著作郎貶台州司戸參軍榮陽の鄭公虔」と題する詩がある。

(注9) ここに云う「世説」は、『李卓吾批点世説新語補』のこと。元禄七年(一六九四)刊の和刻本があり、その巻二、德行下に見える。なお、楊憑については『旧唐書』巻一四六、『新唐書』巻一六〇に伝があり、徐晦については『旧唐書』巻一六五、『新唐書』一六〇に伝がある。臨賀は、今の広西省賀県の西南。県の等級は下。その尉は従九品下。

鄭虔は博学で、詩書画をよくした。人となりは気ままな質で酒が好きであつた。公や李白とは詩を作り酒を飲む友人である。明皇(玄宗)はその才を愛し、「鄭虔三絶」と称えた。広文館学士となり、著作郎に遷つた。安祿山が反すると、百官を脅迫して東都(洛陽)に連れて行き、鄭虔に水部郎中を偽授した。鄭虔は中風だと申し立てて、市令(市場の管理官)代行となることを求め、ひそかに密書を肅宗の行在所のある靈武(陝西省)に届けた。賊が平定されると死を免じられ、台州に貶謫され、その後数年にして卒した。その顛末は「八哀詩」中に詳しく詠じられている。

其の老いに臨んで賊に陥るの故と面別を為すをか闕くことを傷む。情は詩に見あらはる。

《傷》の字は、二句にかかる。窮地に陥つてどうにもならなくなつたわけときちんと会つて別れの挨拶をしようと思ひながらその機会を失してしまつたことを深く傷み、そこで後からこの詩を送つて、その思ひを言葉に表したのである。当初、鄭虔は囚われて獄中に在り、面会に行くことがかなわない。貶謫されることになって、彼を見送りたいと思つたが、公は出かけるのが遅れてしまい、鄭虔はもう出立した後だつた。もしかすると自分は路傍の人と同じように困つた時に手を差し伸べないで見て見ぬ振りをしているのだと思われはしないか、さすれば良友に背き、遺恨を抱かれてしまふだろう、そう考へてこの詩を寄せたのである。『世説新語』に次のような話を載せている。楊憑が臨賀県(今の広西省賀県の西南)の尉に貶謫された時、その旅立ちに際して、身内や友人にあえて見送る者はなかつた中で、ただ日頃親しかつた徐晦だけが藍田(長安の東南)まで見送りに行つ

た。ある人が徐晦に、あなたは楊憑に対してまことに情が厚いが、かえって累が及ぶのではないですか、と言ったところ、徐晦は、私がまだ布衣（無位無官）の時から、楊憑さんは私を認めてくださいました。このたびの貶謫にあたって、どうして一言の挨拶もしないでお別れすることができましよう、と答えたという。けだし公の思ひも、やはりこのようなものであつたのだらう。詩中に述べられているのは、前半では年老いてから賊軍の手におちいるはめになったことを傷み、後半ではきちんと会つて別れの挨拶をすることができなかったのを傷んでいる。一字一字がどれも血を滴らせ骨を鎖かすに充分で哀痛の極みである。なんとその至情の切なることか。

鄭公樗散餐如絲^(注10) 酒後嘗稱^(注11)老畫師

※樗散：ヤクニタ、ズ 餐如糸：オヒボレタリ 酒後：エヒマキレニ

樗散、莊子^(注11)語。樗、丑居反、不材之木。故^(注12)稱^(注13)散木^(注14)。散、無^(注15)用也。此若^(注16)調謔^(注17)而實^(注18)憫^(注19)其才不^(注20)合^(注21)世用^(注22)、徒^(注23)如^(注24)樗散^(注25)而老^(注26)也。夫^(注27)爲^(注28)士大夫^(注29)而以^(注30)畫^(注31)行^(注32)已^(注33)可^(注34)恥也。乃自稱^(注35)老畫師^(注36)、以^(注37)其不^(注38)得^(注39)意^(注40)、玩^(注41)世^(注42)自嘲^(注43)也。舊唐書^(注44)閻立本傳^(注45)、太宗嘗^(注46)與^(注47)侍臣學士^(注48)泛^(注49)舟^(注50)於春苑池中^(注51)。有^(注52)異鳥^(注53)隨^(注54)波容與^(注55)。召^(注56)立本^(注57)令^(注58)寫^(注59)焉。閻外傳^(注60)呼^(注61)曰、畫師閻立本^(注62)。是^(注63)時立本已^(注64)爲^(注65)主爵都尉^(注66)、羞^(注67)恨^(注68)流^(注69)汗^(注70)。歸^(注71)戒^(注72)其子^(注73)曰、吾少^(注74)讀^(注75)書^(注76)、文辭不^(注77)減^(注78)儕輩^(注79)。今濁^(注80)以^(注81)畫^(注82)見^(注83)名^(注84)、與^(注85)廡役^(注86)等^(注87)。若^(注88)曹愼^(注89)母^(注90)習^(注91)。前輩恥^(注92)之^(注93)如^(注94)是^(注95)。以^(注96)鄭公之才學^(注97)、此豈足^(注98)自命^(注99)乎^(注100)。加^(注101)一^(注102)老^(注103)字^(注104)尤卑^(注105)。蓋其不^(注106)合^(注107)世用^(注108)、從容^(注109)任^(注110)運^(注111)安^(注112)分^(注113)、小技自娛^(注114)而已^(注115)。二句卽臨^(注116)老^(注117)陷^(注118)賊^(注119)之故^(注120)、胡燮^(注121)亭^(注122)說^(注123)得^(注124)之^(注125)。曰、鄭廣文、爲^(注126)戎羯^(注127)所^(注128)汚^(注129)、臨^(注130)老^(注131)陷^(注132)貶謫^(注133)。蓋其爲^(注134)人落拓不羈^(注135)、惟風雅自怡^(注136)、天真疎散^(注137)、不下^(注138)立^(注139)氣節^(注140)一激昂自奮^(注141)上^(注142)。其履^(注143)法網^(注144)、雖^(注145)三國有^(注146)常刑^(注147)、而在^(注148)知^(注149)已^(注150)、實^(注151)諒^(注152)其心迹^(注153)。夫^(注154)樗散之身^(注155)、衰老之齒^(注156)、而一醉之餘^(注157)、以^(注158)老畫師自甘^(注159)、豈復溺^(注160)于功名利祿^(注161)者^(注162)。何^(注163)以不^(注164)原^(注165)其^(注166)人^(注167)、槩^(注168)繩^(注169)嚴譴^(注170)、眞^(注171)可^(注172)傷^(注173)心^(注174)已^(注175)。故^(注176)此詩起手直^(注177)寫^(注178)。其丰神逸致^(注179)、正^(注180)爲^(注181)之^(注182)表白^(注183)、而傷心已^(注184)在^(注185)言外^(注186)一矣。

〔注10〕〈如〉字、錢注（卷十）および輯註（卷四）は〈成〉に作り、「一に如に作る」と。詳註（卷五）も同じ。輯註は宇都宮遯庵の増広本に引く。

〔注11〕『莊子』逍遙遊篇に「恵子、莊子に謂ひて曰く、吾れに大樹有り、人之を樗と謂ふ」云々と。同じく人間篇では櫟について「散木なり。是れ不材の木なり。用ふる所無し」という。

〔注12〕例えば、『康熙字典』に「唐韻、丑居切」と。『唐韻』は『広韻』のことで、それには樗を櫟に作る。

〔注13〕邵傳『杜律集解』に「其の才、世用に合はず又た老いたることを憫れむ」と。

〔注14〕世事を輕視すること。『漢書』東方朔伝贊に「隱に依りて世を遊び、時に詭ひて逢はず」と。ちなみに、薛益『分類』卷二、別送に「自ら老画師と称する者は、自ら譽むるが若くにして自ら嘲る、亦た世を玩ぶの辞なり」という。宇都宮遯庵の増広本にもこれを挙げる。

〔注15〕『旧唐書』卷七七。なお、閻立本の伝は『新唐書』卷一〇〇にも見える。『旧』伝は、清・顧炎武（号は亭林。一六一三～一六八二）『日知録』卷二十七、杜子美詩注の条に挙げる。

〔注16〕主爵郎中のこと。尚書吏部に属し、正員一名、従五品上。後に司封郎中と改称された（『大唐六典』卷二）。

〔注17〕『唐詩貫珠』卷三三、傷感一。

〈樗散〉は、『莊子』の語。〈樗〉は、丑居の反（字音はチヨ）で、材木にならない木。だから散木と称する。〈散〉は、役に立たないこと。この言い方は、こつぴどくからかっているようにみえるが、実はその才能が世間と合わず、いたずらに〈樗散〉のようであって年老いているのを憐れんでいるのだ。そもそも士大夫でありながら画人として知られるのは恥ずべきことである。それがなんと自ら〈老画師〉（老いばれ絵描き）と称するのは、我が意を得ないために世間に背を向けて自嘲しているのである。『旧唐書』閻立本伝に次のようにある。太宗がかつて侍従の臣や学士たちと春苑池に舟を浮かべて遊んだ時、見慣れない鳥が波間にゆらゆらと漂っており、閻立本を召し出して写生させることにした。その際、閻外に次々に「画師閻立本」と伝呼された。この時、閻立本は主爵都尉となっており、羞ずかしいやら情けないやらで冷汗を流した。帰宅して息子たちを戒めて言

うよう、わしは若い頃から書物を読み、文章は同輩連中に劣らないのに、今、ただ画師としてしか名を呼ばれず、下僕並みの扱いだ。お前達くれぐれもこのわしを見習うではないぞと。前代の人が〈画師〉であることを恥じるのは、このようであつた。鄭公の才能學問を以てすれば、どうしてただの〈画師〉だと自任するだけで終ろうか。〈老〉の一字を加えているのは、もつとも卑下した言い方である。けだし世間の役に立たず、ゆつたりと運に任せ身の程に安んじ、つまらぬ技を自ら楽しむばかりだ。この二句は〈老いて賊に陥る故〉を述べたものに他ならない。胡燮亭の説が当を得ている。曰く、「鄭広文は戎羯（えびす）のために身を汚され、年老いてから貶謫された。思うに、その人柄は気ままな質で物事にこだわらず、ただ風雅の道をたのしむばかりで、天真爛漫な上にしまりがなく、氣概をもつて自ら奮い立つようなタイプではない。法の網にかかるはめになったのは、国家に定法があるとはいへ、鄭虔の真価を知っている者には、まことによくその心ばえや行動が納得できるのである。そもそも〈樗散〉の身にして年老いた体ですっかり酔ったあげく、〈老画師〉だといつてそれに甘んじている。どうして功名利祿に心奪われるような者であろうか。何故によく実情を調べた上でその人を許さないで、一括りにして厳しい譴責処分を行なうのか。ほんとうに心を傷ませることだ。この詩は冒頭、ストレートに写し出し、その風采やすぐれた趣きを、まさに鄭虔のために言い表わしており、彼を傷む気持ちが言外に籠められている」。

萬里傷^{シム}心^ヲ嚴譴^ノ日 百年垂^{トス}死^ニ中興^ノ時

※傷心：イタハシヤ 百年：イチダイ 垂死：シニギハ

譴^ハ罪責也。百年^ハ謂^ニ人ノ生涯^ヲ。垂^ハ將^レ及^ニ也。^(注18) 中去聲。中興^ハ言^ニ中^コ。衰^テ而復興^ル也。^(注19) 夫^レ萬里遠謫、已^ニ

不^レ勝^ニ傷心^一、矧^ヤ垂死之身^{ニシテ}而蒙^ニ此嚴譴^一。^(注20) 方^ニ今中興恢復之際、萬物回^レ春^ヲ、晉天同慶、而^{シテ}鄭濁

不^レ與^{カラ}焉。尤可^レ傷也。

(注18) 釈大典の『詩語解』巻上に「韻会ニ垂ハ將レス及ント也」と。

(注19) 宇都宮遜庵の詳説に「中興ノ時ハ中字去声ナリ」とあり、増広本や詳説に南宋・胡仔『茗溪漁隱叢話』後集巻五に引く
 嚴有翼『藝苑雌黃』の「凡て王室中^{オベ}ころ否にして復た興る、之を中興と謂ふ」とあるのを挙げ、『歷朝捷録』巻一の注に見
 える『宋史筆断』の「中興とは理に中つて復興するを謂ふなり。今皆平声に作るは誤れり」というのを引く。ちなみに輯
 註には「張仲の切」と注する。

(注20) 『世説新語』排調篇に「皇子の誕生、普天同慶なり」と。

(注21) 『唐詩貫珠』に「転は中興の時、尤も万物同春を見るに、而して公独り与らざるを出す」と。

《謹》は、罪し責めること。《百年》は、人の生涯をいう。《垂》は、今にもそうならうとすることである。《中》
 は、去声。《中興》は、中ごろ衰えて再び盛んになることをいう。そもそも《万里》の彼方に流謫されるのは傷
 心にあたえないことであるのに、ましてや《垂死》の身でかかる厳しい譴責を受けたのでは、なおさらである。ち
 ょうど今、唐朝は中興恢復の時にあたり、すべてのものに春がめぐって来、天下一同喜びに溢れているのに、鄭
 虔ひとりだけがそれに与らない。もっとも傷むべきことである。

倉皇已ニ就^テ長塗ニ往^ク 邂逅無^レ端出^{カリシ}錢遲

※倉皇：アハタバシク 長塗：ナガタビ 邂逅：デアヒ 無端：オモヒガケナク

倉皇ハ急遽ナル貌。邂逅ハ言ニ相遇^{注22}也。忽然遇^ヲ事ニ曰^レ無^レ端。言^下其無^{シテ}端緒^{注23}而來^ヲ。猶^{注24}云ニ不意^ト也。蓋公尙
 可^ニ與^レ鄭相逢^一。而出^レ錢之遲、不^レ能^ニ面別^{コト}、出^ニ於無^ニ端也。錢ハ送^{レテ}行^ヲ設^レ宴也。二句須^ニ串讀^ス。惟嚴
 謹故ニ倉皇^{注25}就^レ道^ニ之速^{ニシテ}而公往^テ錢不^レ及[、]苦^ハ欲^{シテ}面別^{セント}而無^レ端相失^ス。吾出^ル之遲緩ナリシ、
 自悔恨耳。

(注22) 宇都宮遜庵の詳説に「倉皇ハ急遽ノ貌ト註ス。邂逅ハ相遇也ト註ス」という。これは薛益『分類』に拠る。

(注23) 例えば、『文選』巻二十八、陸機「君子行」に「禍集まるは端無きに非ず」とあり、李善注に「端緒無きを言ふなり」と。

(注24) 『大広益会玉篇』に見える。遷庵の増広本にも『玉篇』としてこれを挙げる。

《倉皇》は、急遽なるさま。《邂逅》は、偶然出会うことをいう。突然事に遇うのを《端無し》という。その端緒がなくてやってくるのをいう。ちょうど不意というのと同様の意味である。けだし、公はまだ鄭虔と逢うことができたはずだ。それなのにしかけるのが遅くなつてしまい、顔を合わせて別れの挨拶をすることができなかつた。それは《端無き》に出たものである。《餞》は、旅立ちを見送り酒宴を設けることである。この二句は、必ず一続きに読まねばならない。厳しく譴責されて貶謫されるのであるから、《倉皇》として出立して、公は饒別するの間に間に合わない。一目顔を見て別れようと切に願つたけれども、《端無く》もその機会を逃してしまつた。自分の出かけるのが遅かつたのを、がっくりとして自ら悔やむばかりだ。

便與先生應永訣ニ 九重ノ泉路盡ニ 交期一

※便：モハヤ 永訣：シニワカレ 泉路：メイドニテ

應ハ料度之辭。(注25) 與ニ當字一義異ナリ、讀者須レ詳ニス之ヲ。訣ハ別也。永訣ハ謂ニ死別一、出ニ江淹カ別賦ニ。自ニシテ
絲一而垂死而永訣、是語脈之序。若シ突然言ハ、永訣ヲ、鄙諺ニ所レ云自藪出ス棒(注26)也。九重ハ謂ニ地下之深一。泉ハ
謂ニ地中水脈ノ所レ在。因稱ニ墓穴之底一。左傳ニ不ハ及ニ黃泉一無シ相見コト也。是言ニ死ヲ稱スル泉下一之始也。此
結直承ニ上ノ邂逅ノ句而下ス。既ニ往餞シテ不レ及、無レ端失ス面別一。以後無レ由ニ再會ニ。恐ハ終ニ爲ニ死別ト。冀ハ
泉下ニ邂逅シテ以盡サン交誼一爾。然ドモ此期渺茫、實ハ不レ可レ知。益ク可レ悲哉。當ニ此飄零ニ、稱シ公ト稱ニ先生ト、
尤見ニ其重スル之ヲ。若徒ニ老畫師耳、不レ足ニ如是深惜ニ矣。句句至情哀痛、一字一淚、結尤淋漓沈著、不レ
可レ卒レ讀ヲ。交道筆力、俱ニ臻ニ其極(注27)ニ。眞ニ是詩家ノ聖人、可三以泣シム鬼神(注28)一矣。顧修遠曰、李供奉之從ニ永王
璘一、鄭司戸之汚ニ祿山偽命一、皆文人敗名事、使ハ在ニ礧礧自好悻悻(注29)タル小丈夫ニ處セ此ニ、割レ席ヲ絶レ交ヲ、
不レ知レ作ニ幾許ノ雨雲翻覆(注30)一矣。少陵當ニ公貶謫ノ時ニ、深ク極テ痛ム。其詞從ニ至性絶スル人ニ處一、激昂慷

慨、悲憤淋漓シテ而出。不_レ難_{ニカラ}以_レ身_ヲ與_レ之俱_ニ死_{センヲ}。蓋古人下_ニ以_ニ成敗_ヲ論_セ人_ヲ、不_下以_ニ急難_ヲ負_{上レ}友_ニ、其交誼眞_ニ可_レ泣_{シム}鬼神也。嗟呼、世或ハ夾_ニ枝梧_ヲ、或_ハ俱_レ得_ニ罪_ヲ時貴_ニ、有_ニ負_レ心_ニ賣_レ友_ヲ乘_レ危_ニ下_ス石_者者_一。讀_ニ公_ノ此詩_ヲ、能無_シ慙汗_{シテ}入_{コト}地_ニ哉。沈疇愚云、通首屈折_{シテ}赴_レ題_ニ。清空如_レ話_一。公ノ集中有_ニ此一格_一。

(注25) 釈大典の『詩家推敲』に「応ハ当ナリ。又、料度之辭」と。

(注26) 『文選』卷十六、梁・江淹「別れの賦」に「誰か能く暫離の状を摸し、永訣の情を写す者ならんや」と。もつとも、「永訣」の語は、既に西晋・潘岳の「楊仲武の誄」(『文選』卷五十六)や「夏常侍の誄」(『文選』卷五十七)に見える。

(注27) 俚言の「藪から棒を出す」を漢訳したもの。

(注28) 『春秋左氏伝』隱公元年。なお、『薈瓊錄』には次のように指摘する。

「地下ニテ相見ルト云フコト、左伝ニ、不_レ及_ニ黄泉_一、無_ニ相見_一也トアルハ居ヲ別ニシテ一生対面セザルヲ云ヘリ。死スレバ同ジ墓域ニ葬ラルルニ就キテ地下ニテハ逢フコトモ有ルベシトナリ。是其故実ノ始ナルベシ。コレヨリ遂ニ墓域ヲ同クセザルニモ云フコトニナリ、又史記呂后紀ニ、何面目見_ニ高帝地下_一トアリ、此後史伝ニ多ク見ハル。黄泉ノ義ハ正義ニ服虔ヲ引キテ、天地玄黄、泉在_ニ地中_一、故言_ニ黄泉_一トアリ、泉ハ地ノ中ノ水脈ナリ、土地ノ本色ハ黄ナリ、故ニ地底ヲ指シテ語ヲ雅ニシテ黄泉ト称ス。又九地九泉トモ称ス。九ハ極数ナル地底ノ深キヲ甚シク言フノミ。九天ト同義ナリ。李善海賦注ニ、地有_ニ九重_一、故曰_ニ九泉_一トアルハ附会ノ鑿説ナリ」。

(注29) 『唐詩貫珠』に「結は則ち淋漓沈着、読を卒ふる可からず。交道筆力、各おの其の極に臻_{いた}る」と。

(注30) 杜甫の「李十二白に寄す二十韻」詩(詳註卷八、〇三四八)に「筆落つれば風雨驚き、詩成れば鬼神泣く」と。

(注31) 顧宸『辟疆園杜律註解』七言律詩卷一。

(注32) 李白(七〇一〜七六二)のこと。翰林供奉となつたので、かく称する。李白は安祿山の乱が起ると、永王璘(玄宗の第十六子で、肅宗の異母弟)の水軍に幕僚として加わつたが、永王は肅宗の詔に従わなかつたため、叛軍とみなされて殺された。李白は罪一等を減ぜられて夜郎(貴州省)に流されることになった。

(注33) 蹉蹉は、石のぶつかる音の形容。転じて融通のない喩え。『論語』子路篇に「曰く、言へば必ず信に、行へば必ず果。

碌碌然として小人なるかな」と。

(注34) 悻悻は、怒るさま。『孟子』公孫丑下に「其の君を諫めて受けざれば、則ち怒り、悻然として其の面に見はる」と。

(注35) 敷物を別々にする。絶交すること。『世説新語』德行篇に「(管)寧、席を割き坐を分かちて曰く、子は吾が友に非ざるなり」と。

(注36) 杜甫の「貧交行」(詳註卷二、〇〇六〇)に、

翻手作雲覆手雨 手を翻せば雲と作り手を覆へば雨

紛紛輕薄何須數 紛紛たる輕薄 何ぞ數ふるを須ひん

君不見管鮑貧時交 君見ずや 管鮑貧時の交はりを

此道今人棄如土 此の道 今人棄てて土の如し

とある。なお、この詩は『唐詩選』にも収められている。

(注37) 原文には處字の下に「一」点を缺く。今、これを補う。

(注38) 伎帽は、嫉みや恨み。

(注39) 韓愈の「柳子厚墓誌銘」(『昌黎先生集』卷三十二)に「陷穽に落つれども、一たび手を引いて救はず、反つて之を擠して、又た石を下す者、皆是れなり」と。

(注40) 満・沈德潜の「杜詩偶評」卷四に「屈曲して題に赴く。清空一氣、官軍の河南河北を収むと同じく是れ一律」と評する。また『唐詩別裁集』卷十四にもこの詩を載せるが、一律を一格とするだけで、後は偶評と同じ。〈清空〉は、あるがままに詠じて句法や字法に彫琢の痕がなく、晦渋に陥らずにすっきりとしていること。

〈応〉は、推量の辞。当の字とは意味が異なる。読者はこの点をはっきり知っておかねばならない。〈訣〉は、別である。〈永訣〉は、死別をいう。江淹の「別れの賦」から出た語。〈鬢糸〉から〈垂死〉そして〈永訣〉というのは、語のつながりの順序である。もし突然〈永訣〉と言えば、俗諺にいう「藪から棒」だ。〈九重〉は、地下の深いところをいう。〈泉〉は、地中の水脈があるところをいう。それで墓穴の底をかく称する。『左伝』に「黄泉に及ばずんば、相見ること無きなり」とある。これが死をいうのに泉下と称した始まりである。この結び

は、直ちに上の〈邂逅〉の句を受けて書かれている。見送りに行ったけれども間に合わず、〈端無く〉も面別の機会を失ってしまった。これから後は会うすべとてなく、おそらくはついに死別することになるだろう、どうか泉下で〈邂逅〉して友情を全うしたいと思うばかりだ。さりながら、それが何時になるのかはあてどなく、さっぱりわからない。ますます悲しいことである。この零落^{おちふ}れた時にあたって、〈公〉と称し〈先生〉と称しているのは、もつとも彼のことを重んじていたことがわかる。もしもただの〈老画師〉というだけなら、このように深く惜しむには足りない。一句一句、心の底から鄭虔のことを哀しみ傷み、一字一字が涙の粒であって、とりわけ結びは感情が迸り思いが溢れているが浮つかず、最後まで読みおえることができない。交友の道、筆力ともにその極致に達しており、まさしく詩家の聖人であって、鬼神をも泣かせるほどだ。顧修遠曰く、「李供奉が永王璘の軍に従い、鄭司戸が安祿山の偽命を受け節を汚したのは、いずれも文人がその名誉を傷つける行為であって、がちがちの正義感を振りかざし、些細なことですぐかつとなる小人物であつたなら、きつと席を別にし絶交してしまふだろう。どれほど手のひらをかえすような態度をとるか知れたものではない。杜少陵は、二人が貶謫された時に、深く悲しみ極度に心痛めた。その言葉は真心から出たもので、常人のそれとは異なりありきたりのものではなく、感情が激しく昂ぶり憤り、嘆き悲しみ、思いの丈が迸り出ている。我が身を挺してともに死ぬことをもはばからない。けだし古人は事の成功失敗という結果によって人を論断しないし、差し迫った危難にあつても友に背かない。その交誼は、まことに鬼神を泣かすほどである。ああ、世間には嫉みや恨みを抱いたり、時の権力者から罪せられるのを惧れたりして、良心に背き友を売り、危難に乗じて石を落したりする者もいるが、公のこの詩を読んで、羞じ入って冷汗を流し、穴があつたら入りたいという思いを抱かないであろうか」。沈帰愚が云う、「この詩は全体が屈折して題に応じている。彫琢の痕がなくすつきりとして話すように書かれている。公の詩にはこういうスタイルのものがあつた」。

臘^ハ、歳終祭^ノ名。古用^ニ冬至^ノ後第三戌之日^一ヲ。唐朝^{（注2）}以^ニ大寒後辰ノ日^一ヲ爲^レ臘^ト。漢舊儀^{（注3）}曰、臘^ハ者報^下諸鬼神古聖賢有^レ功^ニ於民^ニ者^上也。肅宗^ノ至德二載四月、公拜^ニ左拾遺^一。此是冬之作。拾遺^ハ掌^ニ供奉諷諫^一ヲ。當^ル本朝侍從^{（注5）}云。已下四首、所^ニ以清華^{（注6）ナル}也。

（注1）『說文解字』四篇下に「臘、冬至の後三戌。臘は百神を祭る」と。

（注2）『唐詩貫珠』卷五十一、冬至附臘日除夕に、この詩を載せ、「杜詩釈義に曰く、唐は大寒の後の辰の日を以て臘と為す」と。なお、『杜詩釈義』については、鄭慶篤他編『杜集書目提要』や周采泉『杜集書録』に著録しておらず、未詳。ちなみに、仇兆鰲の詳註（卷六）に引く明・趙大綱『杜詩測旨』にも、同様の指摘がある。

（注3）後漢・衛宏の撰、『藝文類聚』卷五、歳時部下や『太平御覽』卷三十三、時序部に引く。なお、『漢旧儀』は、『唐詩貫珠』に挙げる。

（注4）左拾遺は、門下省に属し、正員二名、従八品上。『大唐六典』卷八、門下省の条に「左補闕拾遺は、供奉諷諫、乗輿に扈從するを掌る」云々と。杜甫が左拾遺の官を授けられた時期について、宇都宮遯庵の増広本に挙げる明・単復の年譜に至徳二載（七五七）四月とし、おそらく東陽もこれに拠るが、五月のことである。杜文貞公伝の（注23）参照。

（注5）伊藤東涯『唐官鈔』（宝暦三年（一七五三）刊）巻上、門下省、左拾遺の条に「本朝二在リテハ侍從是ニ当ル」と。

（注6）清華は、清貴の官職にふさわしく、詩が品よく華やかなこと。

〔臘〕は、歳の終りに行う祭りの名。古代には冬至後三回目^{（注4）}の戌^{いぬ}の日に行なわれた。唐朝では、大寒後の辰の日を臘とした。『漢旧儀』に云う、「臘は、もろもろの鬼神や古の聖賢、民に功勞のあつた者に報いるものである」と。肅宗の至徳二載四月、公は左拾遺に拝せられた。これは、その冬の作。拾遺は、天子の供奉諷諫を掌る。わが国の侍從に相当するという。以下の四首が清華なるゆえんである。

臘日常年暖尚遙^{（注7）ナリ} 今年臘日凍全消^ス

※凍：イデ

常年得^レ暖^ヲ、自^レ臘後數十^日、今年^ハ凍已^ニ全^ク融^シ、日氣暖然^{トシテ}如^レ春^ノ也。

(注7) 〈常年〉、朱鶴齡の輯註(卷四)は〈長年〉に作り、「一に年年に作る」と注する。宇都宮遯庵の増広本にも輯註を挙げ

る。
 〈常年〉だと暖かくなるのは、〈臘〉から数十日たった頃なのだが、〈今年〉は〈凍^い凍〉がもうすっかりとけ、陽氣がぽかぽかとして春のようである。

侵^ニ陵^{シテ}雪色^ヲ還^リ萱草^一 漏^ニ洩^{シテ}春光^ヲ有^ニ柳條^一

※還^ニヨミガヘル

還^ハ猶^レ蘓^也也。^(注9)言^ニ秋來所^レ失^{ヒシヲ}再^{タヒ}復^{スルヲ}舊色^ニ也。萱^ハ於^ニ諸草^ニ最早^ク枯^ル、而^ニ春氣纔^ニ動^ハ、便^ニ一番^ス茁^ス土^ヲ。

今年陽和早^ク催^シ、雖^ニ殘雪猶埋^ト、然^{トモ}能^レ侵^ニ陵^{シテ}之^ヲ、先已^ニ發生^{スル}也。^(注11)洩^ニ音薛、亦漏也。有^{トハ}者、他日所^レ無^{リシ}、今見^レ有^之也。先時^ニ漏^{シテ}春^ヲ含^レ芽^ヲ、亦已^ニ見^レ有^ニ柳條之動^一也。^(注12)蓋天地^ニ氣^ヲ含^レ春^ヲ、就^レ中^ニ二物尤得^ニ氣之先^一、故^ニ只舉^ニ二物^ヲ、而一切景象在^ニ其中^一矣。

(注8) 〈陵〉字、輯註は〈凌〉に作る。東陽が底本とした邵傳『集解』も同じ。

(注9) 基づくところがあるのか、不明。なお、還字について、鈴木虎雄『杜少陵詩集』第一卷(『統国訳漢文大成』所収)は、マタと訓じ、吉川幸次郎『杜甫詩注』第五冊(筑摩書房、一九八三年)には「還萱草」の「還」は、ほれ、あの、やはり、例の、という程の軽い助字。旧來の和訓、マタあるいはナオ」と指摘。

(注10) 一番の語、唐代から見える口語で、ひとたび、一回の意だが、ここでは「最初に」の意に用いるか。輯註に「侵凌雪色は、萱草初めて土を茁^{もじつ}る時を言ふ」とある。宇都宮遯庵の増広本にも、これを引く。なお、〈萱草〉は、『詩経』衛風・伯兮に見える「諼草」のことで、和名はワスレグサ、カンゾウ。東陽が何に基づいているのか不明だが、その説く内容は、萱草よりも、款冬花(フキノトウ)に該当するように思われる。例えば、明・李時珍の『本草綱目』卷十六、款冬花の条に「宗奭曰く、百草中、惟だ此れ氷雪を顧みず、最も春に先んずるなり。故に世之を鑽凍と謂ふ」とある。

〔注11〕 例えは、明・梅膺祚『字彙』には「先結の切、音屑。漏洩なり」と。

〔注12〕 ちなみに、後世「漏春和尚」と言えは、柳の別称。

〔注13〕 氤氲は、陰陽の気が和合して盛んなるさま。『易』繫辭下伝に「天地絪縕、万物化醇す」と。絪縕は氤氲と同じ。なお、

022 「至日興を遺る。北省の旧閣老・兩院の故人に奉寄す」詩二首其一に、氤氲の語が見え、東陽は「ハルメキタル」と左訓を施す。

《還》は、蘇とほほ同じ。秋以来失われていたのが再びもとの色に戻ることを言うのである。《萱》は、草のなかでは最も早くに枯れ、春になるといちばん先に土の中から出て来る。《今年》はうらかな陽和の気が早くも兆し、残雪がまだ積もっているとはいえ、それを押し退けて、もう生えて来ているのである。《洩》、字音は薛^{せつ}、やはり漏の意。《有》とは、昨日までなかったのが今日有るのを見ることである。季節に先んじて春気を漏らし芽吹くのは、これもやはりすでに《柳条》の動くことに表われている。けだし天地氤氲の氣に包まれ、万物が春を含み、なかでもこの二つの物が春の氣配をまっさきに感じるができる。それゆえ、ただ二つの物を挙げているのだが、すべての景象は、そのなかに存在しているのだ。

縦^レニシテ酒欲^レ謀^ニ良夜^ノ醉^一 還^テ家^ニ初^テ散^ス紫宸^ノ朝

※縦酒…オホノミ 謀…クメンスル

縦酒^ハ謂^ニ劇飲^ヲ。蔡邕^ハ獨斷^ニ臘日^ハ縦^ニ吏民^ニ宴飲^{セシム}。蓋^ニ因^テ祭^ニ夜宴^ス、故^ニ曰^ニ良夜^ノ醉^ト。紫宸^ハ本謂^ニ天帝

之^ノ居^ヲ。唐^ハ比^{シテ}以^ニ爲^ニ殿^ノ名^ト。日^ニ視^ニ朝^ノ之所^ヲ。散^スハ朝^ヲ、臘日^ノ朝賀禮畢^テ退散^セ也。此聯錯綜^{シテ}成^レ句^ヲ、

且^ハ欲^スハ謀^ニ夜飲^ヲ、正^ニ在^ニ散^レ朝^ノ之後^ニ、是倒句^ノ法^也。言始^テ散^{シテ}紫宸^ノ之朝^ニ而還^レ家^ニ、欲^テ謀^ニ良夜^ノ之宴^ヲ而

縦飲^{セント也}。

〔注14〕 『唐詩貫珠』に挙げる。蔡邕は後漢の学者（二三三―一九二）。秦漢の文物制度などを記した『独断』は上下二巻。その巻下に見える。なお、『独断』には寛文九年（一六六九）刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集第十集』に影印

を収む。また訳注に福井重雅編『訳注西京雜記・独断』（東方書店、二〇〇〇年）がある。

〔注15〕 紫は、天帝の居とされた紫微星をいう。宸は、帝居の意。紫宸殿については、次の008「賈至舍人早に大明宮に朝するを奉和す」詩の詳解に見える。

〔注16〕 001「張氏の隠居に題す」詩の（注12）参照。ちなみに、宇都宮遷庵の詳説に「此一聯六句ヨリ五句ヘツツケテ、其義ヲ可レ取。此レ倒句ノ法ナリ」と。なお、三浦梅園『詩輟』巻上、倒装の条に「良夜の酔を謀つて酒を縦にせんと欲して、紫宸の朝を散じて初めて家に還ると言はんと欲すれば、則ち言ふ〈縦酒欲謀 良夜ノ酔、還家初テ散ス紫宸ノ朝〉と」と。

〈縦酒〉は、劇飲のこと。蔡邕の『独断』に「臘日には、官吏と民衆とに好き放題、宴飲するのを許した」と。けだし祭にちなんで夜宴するので、〈良夜の酔〉という。〈紫宸〉は、もともと天帝の住居のこと。唐では擬えて宮殿の名とした。日々政務を執るところである。〈朝を散ず〉は、〈臘日〉の朝賀の儀式が終わって退散することである。この一聯は、錯綜して句を成している。それに夜飲もうと思うのは、ちょうど朝会がはててから後のことである。これは倒句の法だ。その意味は、やつと紫宸殿の朝会がはて、これから還つて、〈良夜〉の宴を〈謀〉つて存分に飲もうと思うというのである。

口脂面藥テ隨ニ恩澤ニ 翠管銀罌下九霄ヨリ

※口脂…カンノベニ 面藥…トウヤク

唐ノ制、臘日宣賜ス近臣ニ口脂面藥ヲ。口脂ハ、臘脂也。面藥ハ、蓋鉛粉ニ合ニ香藥一者也。公爲リ拾遺一、得レ預コトヲ恩賜一。不シテ曰レ蒙ルト而曰レ隨ト、謙辭也。翠管銀罌ハ、所レ盛ル之器也。管ハ、筒也。酉陽雜俎ニ臘日賜ニ北門ノ學士ニ口脂蠟脂一、盛ルニ以ニ碧縷ノ牙角一。按スルニ劉禹錫有下謝レ賜ニ口脂面藥ヲ表上云、宣ニ奉ス聖旨ヲ賜ニ臣ニ臘日ノ口脂面脂紫雪紅雪一。雕奩既ニ開ハ、珍藥斯ニ見ハル。膏凝リ雪瑩ヤキ、合レ液ヲ騰レ芳ヲ。又王建ニ宮詞ニ黃金合裏ニ盛ニテ紅雪一、重結ス香羅四出ノ花、一一傍邊書シ勅ノ字ヲ、中使送與ス大臣ノ家。蓋口脂面藥以禦ニ寒凍一也。或曰、漢

惠帝時、黃門侍中、皆傳^レ脂粉^一。魏晉ノ習俗、尤多效^レ之^二。疑^{クハ}唐ノ朝亦復若^レ此^一。蓋潔^{シテ}身以進^ム、出^ニ於^一敬^{スルニ}君^ヲ。故^ニ遂^ニ有^ニ是賜^一也。九霄、九重之天。謂^ニ其深遠^一、比^{シテ}稱^ス禁中^一ヲ。九^ハ爲^ニ陽數之極^一。筭盤計^二物數^一、亦究^ル于九^ニ。至^{レハ}十二則爲^レ一矣。故^ニ書傳^ニ凡^ソ言^九者^ハ、皆指^ニ其極^一爾。如^ニ九淵九垓之類^一、不^ニ必^{シモ}一^ニ數^一當^一。時^ニ公爲^ニ拾遺^一、春遇^ニ此日喜^レ逢^ニ臘祭令節^一、天氣如^レ春、草木發生^ス。欲^ス置酒

縱飲^{シテ}盡^ニ良夜之歡^一。既^ニ退朝^一還^ル家^ニ、中使尋^テ至、節物之賜、自^レ天而下^ル。翠管銀罍、恩榮輝光、是公一生得意^一時、不^レ可^ニ多得^一者也。

(注17) 邵宝『集註』卷二十三、時序類に見える。薛益『分類』卷二、節序も同じ。いずれも、宇都宮遯庵の増広本に引く。『唐詩貫珠』は『杜律虞註』を挙げる。

(注18) 晩唐・段成式(字は柯古、?、八六三)の撰。ここに挙げる箇所は、その卷一、忠志に見える。なお、『酉陽雜俎』には、元祿十年(一六九七)刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集第六集』に影印を収む。また平凡社東洋文庫に今村与志雄氏による訳注がある。ちなみに、北門の学士は高宗の時に置かれた。牙箏は象牙製の筒。なお、『酉陽雜俎』は、輯註に引き、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。また『唐詩貫珠』にも抄録して、これを引く。

(注19) 字は夢得(七七二、八四二)。貞元十七年(八〇一)、淮南節度使の杜祐に代わって作った『曆日の面脂口脂を謝するの表』(『劉賓客文集』卷十二)に「臣某言す。中使霍子璘至り、聖旨を奉宣して臣及び將左・官吏・僧道・耆寿の百姓等を存問し、兼ねて臣に墨詔及び貞元十七年の新曆一軸、臘日の面脂・口脂・紅雪・紫雪並びに金花銀合二、合綾合二を賜ふ。(中略)雕奩既に開けば、珍葉斯^{こゝ}に見はる。膏凝り雪^{かたや}登き、液を含み芳を騰^あぐ」云々と。中使は宮中の使者。宦官が充てられる。紅雪、紫雪は薬の名。なお、宇都宮遯庵の詳説には、明・楊慎『丹鉛總錄』卷二十一、詩話類、口脂の条に、李嶠(六七五?、七二四?)の「口脂を賜る表」、令狐楚(七六六、八三七)の表それに劉禹錫の表を挙げて「杜詩註の遺を補ふ可し」というのを引く。『升庵全集』卷六十、口脂面薬の条もこれと同じ。また同集卷五十八、紅雪紫雪の条には、劉禹錫の表と王建の宮詞の例を挙げる。なお、『丹鉛總錄』は、度会末茂『杜律評叢』(卷一)にも挙げる。

(注20) 原文には謝字の下に「レ」点を缺く。今、これを補う。

(注21) 王建(七七〇～八二九)の「宮詞」百首其六十七(『全唐詩』卷三〇二)。なお、尾張の恩田仲壬(号は蕙樓。一七四三～一八一三) 調点による文化七年(一八一〇) 刊の『唐王建詩集』がある(汲古書院、『和刻本漢詩集成唐詩第八輯』に影印を収む)。また伊勢の東襲(号は夢亭。一七九六～一八四九)に『王建宮詞百首箋注』があるが、未見。

(注22) 『史記』卷一二五、佞幸列伝に「孝惠の時、郎・侍中、皆鵠鵲を冠し、貝帶し、脂粉を傳す」と。傳は附の意。『漢書』卷九十三、佞幸伝にも同様の記事。

(注23) 明・謝肇淛『五雜俎』卷一、天部に「数は二に起つて九に成る。九は陽の数なり。故に九天・九霄・九垓・九垓・九閔・九有・九野・九閔・九位・九域と曰ふの類は、必ずしも実に九有るに非ず」と。

(注24) 『唐詩貫珠』に「此れ是れ公拾遺^た爲りし時、臘日の令節に逢ふを喜ぶの作。通篇天氣和暖、草木生發し、良夜酒を飲み、朝參^と早に帰り、更に恩賜を受く。此れ公が一生得意の時、多く見る可からざる者なり」と指摘する。

唐代の制度では、臘日、近臣に〈口脂〉や〈面藥〉を下賜された。〈口脂〉は、臙脂である。〈面藥〉は、けだし鉛粉に香藥を混ぜ合わせものであらう。公は拾遺となつて恩賜に与かることができた。蒙ると言わず、〈隨ふ〉と言うのは謙遜の辞である。〈翠管〉(銀罌)は、それを盛る器。〈管〉は、筒である。『西陽雜俎』に「臘日、北門の学士に、口脂・蠟脂を碧縷の牙筩に盛つて下賜された」とある。按ずるに劉禹錫に「口脂面藥を賜ふを謝する表」があり、「聖旨を承り、臘日に口脂・面脂・紅雪・紫雪を賜りました。浮かし彫りが施された盒^{はこ}の蓋を開けると、膏がねつとりと雪のように輝き、とろりとした液からとてもよい香が立ち上つて来ました」といい、さらに王建の「宮詞」に「黃金合裏紅雪を盛る、重ねて結ぶ香羅四出の花。一一傍辺に勅の字を書し、中使送与す大臣の家」という。けだし〈口脂〉や〈面藥〉は、それで寒さや凍てを禦ぐのであらう。或いはいう、漢の恵帝の時、黃門や侍中はみな脂粉をつけ、魏晉の習俗もほとんどそれに倣つたと。唐朝でもやはりこのようであつたのだらう。けだし身を清潔にして進見するのは、君を敬する気持ちから出ることであつて、さればかくてこのように下賜されるようになったのである。〈九霄〉は、九重の天。深遠の意で、比して禁中を称す。〈九〉は陽数の

極で、算盤で計算する時も九できわまり、十に至ると一にくりあがる。されば、古典にすべて〈九〉という場合は、いずれもその極数を指しているだけのことだ。九淵・九垓といった類で、いちいち数えるまでもない。時に公は拾遺となつて眷遇を受けており、この日、臘祭の節日にゆきあったのを喜んだ。天気は春のようで草木は芽生え、酒を用意して存分に飲み、〈良夜〉の歡を尽くしたいと思つていた。朝廷を退き家に戻つて来ると、まもなく中使がやつて来て、季節の品をかしこきあたりより賜つた。〈翠管〉や〈銀罍〉は、恩榮に輝いている。これは公が一生のうち得意の時で、多くは得られなかつたものである。

008 奉^(注1)和^(注2)實至舍人早^(注3)朝^(注4)大明宮^(注5) (〇一九八)

奉猶^(注1)恭^(注2)也。和^(注3)者同賦^(注4)其事^(注5)、以答^(注6)來意^(注7)。猶^(注8)有^(注9)下^(注10)首^(注11)唱^(注12)歌^(注13)者^(注14)隨^(注15)而和^(注16)之^(注17)也。中書省^(注18)起居舍人^(注19)見^(注20)于前^(注21)。此蓋朝^(注22)大明宮^(注23)之宣政殿^(注24)也。唐^(注25)禁城大內^(注26)爲^(注27)太極宮^(注28)、東內^(注29)爲^(注30)大明宮^(注31)、在^(注32)龍首山^(注33)上^(注34)、此地^(注35)本太極宮^(注36)之後苑^(注37)、在^(注38)其東北^(注39)。故^(注40)謂^(注41)之^(注42)東內^(注43)、而謂^(注44)大內^(注45)爲^(注46)西內^(注47)。高宗厭^(注48)西內^(注49)湫隘^(注50)、修^(注51)東內^(注52)移^(注53)仗^(注54)。自^(注55)是天子多在^(注56)東內^(注57)、制度尤爲^(注58)華備^(注59)。正南^(注60)爲^(注61)丹鳳門^(注62)。門內第一^(注63)正殿^(注64)曰^(注65)含元殿^(注66)。謂^(注67)之^(注68)大朝^(注69)。在^(注70)周^(注71)爲^(注72)外朝^(注73)。元旦冬至^(注74)大朝會^(注75)御^(注76)之^(注77)。其後^(注78)曰^(注79)宣政殿^(注80)。謂^(注81)之^(注82)前殿^(注83)、亦曰^(注84)正衙^(注85)。卽周^(注86)內朝^(注87)。凡^(注88)朔望^(注89)起居及大冊拜^(注90)、對^(注91)四夷^(注92)君長^(注93)御^(注94)之^(注95)。又北^(注96)而爲^(注97)紫宸殿^(注98)。乃內便殿^(注99)、謂^(注100)之^(注101)內衙^(注102)。卽周^(注103)燕朝^(注104)。亦謂^(注105)之^(注106)閣^(注107)。猶^(注108)古之言^(注109)寢^(注110)。隻日^(注111)常朝^(注112)御^(注113)之^(注114)。雙日^(注115)不^(注116)視^(注117)朝^(注118)。宰相當^(注119)之^(注120)奏上^(注121)事^(注122)、卽時特^(注123)御^(注124)延英殿^(注125)召對^(注126)也。此篇^(注127)是三月^(注128)詩^(注129)、則非^(注130)含元殿^(注131)矣。衙^(注132)朝見^(注133)、其禮尊^(注134)。閣^(注135)宴見^(注136)、其事殺^(注137)。詩中所^(注138)敘^(注139)尊儼廣大^(注140)、故^(注141)知^(注142)宣政之朝會^(注143)ナル^(注144)也。

(注1) 《奉和》の二字、ふつう「和し奉る」と訓じ「奉^(注1)和^(注2)三^(注3)」と訓点を施すが、東陽がそうしないことに関連して、『夜航餘話』巻上に「奉^(注4)ノ字ハ恭敬ノ義ナリ。奉獻奉寿ト讀ヘシ。廻還シテ讀ハ非ナリ」という。

(注2) 賈至、字は幼機。洛陽の人(七一八〜七七二)。開元の末もしくは天宝の初めに明経科に及第し、校書郎・單父(ぜんは)県尉

などを経て、天宝末、起居舍人となる。安祿山の乱が起こると、玄宗に扈從して蜀に行き、中書舍人に遷り、至徳元載(七五六)八月、肅宗へ位を伝える冊文を撰して、これを奉じて靈武の肅宗のもとへと赴いた。乾元元年(七五八)、房琯の一派だとして汝州刺史に出され、さらに岳州司馬に貶謫されたこともあったが、次の代宗の時、中央に復帰し、中書舍人・尚書右丞・礼部侍郎・兵部侍郎・京兆尹・右散騎常侍などを歴任し、大暦七年(七七二)卒した。『旧唐書』卷一九〇、『新唐書』卷一九九。『唐才子伝』卷三。独孤及「賈尚書を祭る文」(『毘陵集』卷二十、『全唐文』卷三九三)。その事跡については、傳璇琮「賈至考」(『唐代詩人叢考』所収、中華書局、一九八〇年)に詳しい。松浦友久編『続校注唐詩解釈辞典(付) 歷代詩』(大修館、二〇〇一年) 詩人小伝、賈至の条(植木久行執筆) 参照。

ちなみに、杜甫には「賈嚴の二閣老兩院の補闕に留別す」(詳註卷五、〇一七九)、「賈閣老の汝州に出さるを送る」(詳註卷六、〇二〇四)、「岳州の賈司馬六丈、巴州の嚴八使君兩閣老に寄す五十韻」(詳註卷八、〇三四六)、「唐十五誠に別る、因って礼部の賈侍郎に寄す」(詳註卷十四、〇七九六)等の作がある。

(注3) 004 「献納使起居田舎人澄に贈る」詩参照。

(注4) 龍首については、後漢・班固「西都の賦」(『文選』卷一)に「濃瀟を挟み、龍首に抱る」、後漢・張衡「西京の賦」(同上卷二)に「龍首を疏して以て殿を抗げ、状巍峩として以て岌業たり」と見え、南宋・程大昌(一一三〜一一九五)の『雍録』卷一、龍首山龍首原の条に「高宗に至って已に風痺に染まり、太極宮の下湿なるを惡み、遂に遷る。東北角龍首山上に抱つて別に大明一宮を為る」という。高宗は、唐第三代の天子(李治、在位六四九〜六八三)。

(注5) 『雍録』卷三、唐宮総説に「唐の都城、三大内有り。(中略)太極宮、西に在り、故に西内と名づく。大明宮、東に在り、故に東内と名づく。別に興慶宮なる者有り、(中略)南内と号す。此の三内嘗て更も迭ひに朝を受け、大明、朝を視ること最も数しばなり」と。

(注6) 湫隘は、手狭な上に低湿地であること。『左伝』昭公三年に齊の景公が晏子に「子の宅、市に近し。湫隘囂塵、以て居る可からず」といった言葉がみえ、杜預の注に「湫は下、隘は小」と。

(注7) 移仗は、天子の出行をいう。ここは、居を移すこと。『雍録』卷三、唐東内大明宮の条に「龍朔二年(六六二)、高宗風痺に染まり、太極宮の卑下を惡み、故に就いて大明宮を修め、名を蓬萊宮と改む」と。

(注8)

例えば、『宋史』卷二八四、宋庠伝に「唐に大内有り。又大明宮有り。宮は大内の東北に在り、高宗以後、天子多く在り。大明宮の正南門を丹鳳門と曰ふ。門内の第一殿を含元殿と曰ひ、大朝会のとき則ち之に御す。第二殿を宣政殿と曰ひ、之を正衙と謂ふ。朔望の大冊拜のとき則ち之に御す。第三殿を紫宸殿と曰ひ、之を上閣と謂ふ。亦た内衙と曰ふ。隻日の常朝のとき則ち之に御す」云々とある。

なお、伊藤東涯の『制度通』(寛政九年「一七九七」刊)卷二、内朝外朝並三朝会ノ事に、「漢ヨリ以来、大朝会ノ礼有り、又是ヲ大享ト云ヒ、朝賀ト云、本朝ノ節会ノコトナリ」といい、また「唐ノ時、百官朝見ノ次第、三所アリ。正衙、便殿、含元殿ナリ。古ヘノ三朝ニナゾラフ。正衙トイフハ、宣政殿ノ事ニテ、古ヘノ治朝ナリ。便殿トイフハ、紫宸殿ノコトニテ、イニシヘノ燕朝ナリ。正衙コレヲ常参ト云、便殿コレヲ入閣ト云。コノ外ニ又含元殿アリ、下ニ詳ニス。衍義補ニ云、唐以宣政殿^ア為^ス前殿^ト、謂^ニ之^ヲ正衙^ト、即古之治朝也。以紫宸殿^ヲ為^ス便殿^ト、謂^ニ之^ヲ入閣^ト、即古之燕朝也。而外別ニ有^ニ含元殿^一。含元^ハ非^ニ正至大朝会^三不^レ御^セ、正衙^ハ則日^ニ見^ル群臣^ヲ百官皆在、謂^ニ之^ヲ常参^ト、是ニテソノ大略シルベシ」という。ちなみに、『衍義補』は、明・丘濬(一四二一—一四九五)『大学衍義補』のこと。その卷四十五、王朝之礼上に見える。

(注9)

例えば、『歴代名臣奏議』卷九および『統資治通鑑』卷十六、宋・太宗淳化二年(九九一)の条、張洎の上疏に、「今の乾元殿は、即ち唐の含元殿なり。周に在つては外朝と為し、唐に在つては大朝と為す。冬至元旦、全仗を立て、万国を朝するは、此の殿に在るなり。今の文德殿は、即ち唐の宣政殿なり。周に在つては中朝と為し、漢に在つては前殿と為し、唐に在つては正衙と為す。凡そ朔望の起居及び妃后・皇子・王公・大臣を冊拜し、四夷の君長に対し、制策の拳人を試みるは、此の殿に在るなり。今の崇徳殿は、即ち唐の紫宸殿なり。周に在つては内朝と為し、漢に在つては宣室と為し、唐に在つては上閣と為す。即ち隻日常朝の殿なり」とある。

(注10)

もっとも、『雍録』卷四、延英殿の条には「高宗初め蓬萊宮を^ア翫^ルりしとき、諸門殿亭皆已に名を立つ。上元二年(七六一)に至つて、延英殿御座に当たり玉芝(瑞草の名)生ず、則ち是れ初め大明有りしとき即ち延英殿有り。顧召して宰臣に対するは則ち代宗に始まるのみ。代宗、苗晋卿の年老い蹇甚だしきを以て閣に入りて趨せざるを聴し、為に延英に御す。此れ優礼なり」という。また、その場所については、『大唐六典』(卷七、工部尚書の条)に拠つて「宣政殿前の西、上閣門の西、即ち延英門為り。門の左、即ち延英殿」とする。

〔注11〕 ちなみに、傳璇琮主編『唐代文学編年史【中唐卷】』では、乾元元年（七五八）二月に繫年する。
 〔注12〕 『公羊伝』僖公二十二年、「辞繁にして殺せざる者は正なり」の条、何休の注に「殺は省なり」と。

〈奉〉は、恭とほぼ同義。〈和〉は、ともにその事を賦して、来意に答えること。ちよūdははじめに歌う者がいて、それに続けて唱和するようなものである。中書省の起居舎人のことは、前に見える。ここでは、けだし〈大明宮〉の宣政殿に朝するのであろう。唐の禁城は、大内を太極宮とし、東内を大明宮として、龍首山の上にあった。この地は本末、太極宮の後苑であつて、その東北に位置していた。それで東内といい、大内を西内とした。高宗は西内が手狭で低湿地にあるのを厭い、東内を修築して移られた。それ以来、天子は多く東内におわしまし、設えや調度品はとりわけ豪華で完備しているとされていた。その真南が丹鳳門で、門内にある第一の正殿を含元殿といい、大朝のことである。周代では外朝にあたる。元旦や冬至の大朝会の時、天子がここにお出ましになる。そのうしろを宣政殿といい、前殿のことで、正衙ともいう。すなわち周の内朝である。すべて月の朔（一日）と望（十五日）の起居および皇后や太子を冊立したり大臣を任命する大冊拜の時、さらに夷狄の君長に対面なされる場合には、ここにお出ましになる。それから北にゆくと紫宸殿。これぞ内便殿で、内衙のこと。すなわち周代の燕朝で、闇ともいう。ちよūd古代に寝といわれるものである。隻日（奇数日）の常朝（一般的政務）には、こちらにお出ましになる。双日（偶数日）には政務を執られない。宰相が至急奏上する必要がある場合には、ただちにわざわざ延英殿にお出ましになり、そこに召されて奉答する。この篇は三月の詩。だとすれば含元殿ではない。衙で行なわれるのは朝見で、その礼式は尊厳であるが、闇のは宴見で、その次第は略式である。この詩に述べられているのは尊厳廣大であり、されば宣政殿での朝会だと知られるのである。

五夜ノ漏聲催シ曉箭ヲ 九重ノ春色醉ニ仙桃一

※五夜漏声：アケナ、ツノトケイ 曉箭：ジコクノカズトリ 醉：トロリ

五夜ハ寅時也。漢魏以來、紀スルニ夜ヲ以レ五爲レ節ト、以ニ甲乙丙丁戊ヲ稱ス之^(注13)。故ニ曰ニ五夜ト。又謂ニ之ヲ五更一漏^(注14)貯レ水定ニ時刻一之器^(注15)。以ニ銅壺一受レ水刻スレ節ヲ。晝夜其ニ百節謂ニ之ヲ漏刻ト。古無ニ自鳴鐘一^(注16)、故ニ三漏下^(注17)量レ時ヲ。箭ハ更籌也。此先言ニ夜嚮^(注18)ヲ晨ニ。凡朔望、朝禮、百官侵曉^(注19)詣テ闕ニ待レ漏^(注20)、五更ノ三點^(注21)、候ニ青鎖^(注22)開^(注23)、隨^(注24)班ニ雁行^(注25)シテ而入也。九重ハ稱^(注26)禁中ノ穆穆^(注27)。楚詞^(注28)ニ君之門以九重。九義見^(注29)于前^(注30)。醉ハ謂^(注31)春色ノ氤氲^(注32)タルヲ。唐殿庭ノ間、多植^(注33)花柳^(注34)、爲^(注35)三朝會之時百官依^(注36)其蔭^(注37)也。禁内ノ名花、非^(注38)人間之種^(注39)、故ニ稱^(注40)爲^(注41)二仙桃一。非^(注42)必^(注43)シモ用^(注44)ニ西王母^(注45)事^(注46)。蓋曉景漸^(注47)分^(注48)レテ、桃花紅艷映^(注49)レ天^(注50)、殿庭ノ氣色、爛漫如^(注51)醉^(注52)ルカ也。或ハ以爲^(注53)二桃花若^(注54)一^(注55)シト含^(注56)醉^(注57)ヲ淺^(注58)矣。按スルニ禮ノ玉藻^(注59)ニ朝^(注60)辨^(注61)シテ色^(注62)始^(注63)テ入^(注64)ル、君^(注65)日出^(注66)テ而視^(注67)レ之^(注68)。此言^(注69)二辨^(注70)色^(注71)始^(注72)入^(注73)之景^(注74)也。

(注13) 明・徐師曾『文体明弁』卷十五に「漢魏以來、甲乙丙丁戊を以て夜を紀す。又た之を五更と謂ふ」と。『文体明弁』には寛文六年（一六六六）刊の和刻本がある。輯註（卷四）に錢注（卷十）に拠つて衛宏『漢書儀』の「五夜は、甲夜乙夜丙夜丁夜戊夜」というのを引く。また『顏氏家訓』卷六、書證第十七に「漢魏以來、謂ひて甲夜・乙夜・丙夜・丁夜・戊夜と爲す。又た一鼓・二鼓・三鼓・四鼓・五鼓と云ひ、亦た一更・二更・三更・四更・五更と云ふ。皆五を以て節と爲す」と。いずれも宇都宮遯庵の増広本にこれを挙げる。なお、『顏氏家訓』には、寛文二年（一六六二）刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集第十集』に影印を収む。また平凡社東洋文庫に宇都宮清吉氏による訳注がある。

(注14) 『文体明弁』に見える。

(注15) 『大唐六典』卷十、秘書省太史局、挈壺生の条に「冬は夜漏六十刻、昼漏四十刻、春分秋分は夜漏五十刻、昼漏五十刻、夏至は夜漏四十刻、昼漏六十刻」とある。

(注16) 明・謝肇淛『五雜俎』卷二、天部二に「西僧珞瑪寶、自鳴鐘有り。中に機関を設く。一時に遇ふ毎に輒チ鳴る。是の如くにして歳を経て頃刻の差訛無きや、亦た神なり」と見える。珞瑪寶は、イタリヤの宣教師マテオ・リッチのこと。

(注17) 022 「至日興を遣る。北省の旧閣老・両院の故人に奉寄す」詩二首其一首の首聯に「去年茲^(注18)の辰御牀を捧ぐ、五更三点鵲行に入る」とあり、詳解に「更は、歴なり、経なり。故に夜時を五分して之を更と謂ふ。漏刻、更毎に五点を分つ。点は漏

を下る滴水を以て名と為す。五更三点は、寅の刻の六分なり」と。

(注18) 青瑱と同じ。宮門をいう。ちなみに、青瑱については、訳注稿(二)、004「猷納使起居田舎人澄に贈る」詩参照。

(注19) 例えば『礼記』曲礼上に「天子穆穆」とあり、唐・賈公彦の疏に「穆穆は、威儀多き貌」と。

(注20) 『楚辞』九辨。『文選』卷三十三にも収む。

(注21) 007「臘日」詩。

(注22) 邵傳『集解』に「唐の殿中、花柳を種う」、「唐詩貫珠」卷二、帝京二に、賈至の「早に大明宮に朝し兩省の僚友に呈す」詩を載せ、「唐時殿庭、皆花柳を植え、遂に風雅の助と為す」と。唐の宮廷に花柳が植えられていたこと、南宋・朱熹

(二二〇) (二二〇) にも指摘がある(『朱子語類』卷二二八、本朝二、法制)。

(注23) 輯註に「仙桃醉ふは、春色の穠、桃花醉ふが如きを言ふ。禁内に在るを以ての故に仙桃と曰ふ。王母の事を用ふるに非ず」と。また顧宸『辟疆園杜律註解』七言律詩卷一に「諸註皆他桃を以て西王母が漢の武帝に五桃を与ふる故事と為し、

謂へらく天子九重の上に御し、其の容顔春色の桃に酔へるが如しと。此れ陋説なり」と指摘する。宇都宮遯庵の増広本に輯註および顧註を引き、詳説には顧註を挙げる。なお、西王母の故事は『漢武故事』に見える。

(注24) 顧宸『註解』に「禁内の春色欄漫として其の桃盛んに開くこと酔ひを含むが若きなり」と。宇都宮遯庵の両著に引く。

(注25) 『礼記』玉藻篇。

〈五夜〉は、寅の刻である。漢魏以来、夜を記するのに五つに分けて甲乙丙丁戊でこれを称した。それで〈五夜〉といい、また五更という。〈漏〉は、水を貯めて時刻を定める器械。銅壺で水を受け節を刻んだ。昼夜で百節があり、これを漏刻といった。古代には自鳴鐘がなかったので、〈漏〉が下がることで時間を計った。〈箭〉は、更籌(時刻の数とり)である。ここではまず夜から明け方になろうとするのを言う。すべて月の朔ならびに望の朝礼では、百官は暁について宮闕に至り、〈漏〉が五更三点を示し、宮門が開くのを待って班列に随い、雁行して入るのである。〈九重〉は、禁裏のうるわしくりっぱなことを称する。『楚辞』に「君の門以て九重」と。〈九〉の意味は前に見える。〈醉〉は、春色の立ちこめていること。唐では殿庭の間に多く花樹や柳を植えた。

朝会の時、百官がその蔭に依るためである。禁裏の名花は、この世のものではなく、されば〈仙桃〉と称するのである。必ずしも西王母の故事を用いたものではない。けだし、しだいにあやめを分かつようになると、桃の紅く艶やかな花が天に映え、殿堂の景色は爛漫と酔うがごとくである。桃花が酔いを含んでいるのだとみなす説もあるが、理解が浅い。按ずるに『礼記』玉藻に「朝するは色を辨じて始めて入り、君は日出でて之を視る」とあるが、これはあやめを分かつようになってから、ようやく入朝する情景を言うのである。

旌旗日暖^(注26)ニシテ龍蛇動^キ 宮殿風微^{ニシテ} 燕雀高^シ

※暖…ホツコリ 動…ユラメク 微…ソヨ／＼

濁舉^ニ旌旗^一、諸^{／＼}儀仗^ニ在其中^ニ矣。讀者須^ニ想像^{シテ}而得^一也。日暖^ハ言^ニ旭日始^テ升^テ曉寒全^ク融^{スル}也。龍蛇^ハ畫^ニ於旌旗^一者。動^ハ言^ニ映^レ日^ニ活動^一也。此即君出^テ而臨^レ朝^ニ之時也。風微^ハ朝氣太^タ靜^{ニシテ}細風徐^ニ來也。燕雀^ハ即殿廡^ニ所^ノ棲^ム者。高^ハ言^ニ颺^レ風^ニ高^ク翔^ル也。一聯極^テ寫^ス春朝和暄ノ光景^ヲ。見^ニ時和^シ物育^ス泰平氣象^一。龍蛇燕雀^ハ真假取^レ對^ヲ、謂^ニ之^ヲ借對^一。宮殿燕雀^ハ暗^ニ用^ニ大厦成^テ而燕雀賀^ス之意^ヲ。時祿山^カ亂後、殿閣新^ニ修^{スル}也。不^レ然^ラ和^{スル}人^ニ用^ニ燕雀^一、不^レ免^ニ唐突^ヲ矣。風微^ニ二字、言^ニ朝景之靜^{ナル}ヲ、而形^ニ容^ス燕雀ノ輕態^一。宛然^{トシテ}如^レ見^ルカ。劉須溪^(注31)云、壯麗自是、若非^ニ微^ノ字^一、清酒^ニ、不^レ免^ニ癡肥^ヲ矣。

(注26) 〈旗〉字、輯註には〈旂〉に作り、「俗に旗に作るは非」と注する。詳註(卷五)も同じ。輯註は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注27) 原文は、見字の下に「二」点を「一」点に誤まる。

(注28) 後漢・張衡「埤田の賦」(「文選」卷十五)に「仲春の令月、時和し氣清^スむ」、同じく「東京の賦」(同上卷三)に「陰陽交和し、庶物時に育す」と。

(注29) 『夜航詩話』卷四に「真假對を取る、之を借對と曰ふ。亦た活對と曰ふ」といい、唐詩のみならず宋元詩からも多くの例を挙げている。

〔注30〕『淮南子』説林訓に「湯沐具はりて蟻蝨相弔し、大厦成りて燕雀相賀す。憂樂別るればなり」と。このこと、顧宸『註解』に既に指摘する。

〔注31〕劉須溪は、宋末元初の文人（名は辰翁、字は会孟。一二三二―一二九七）。東陽が引く箇所は、劉辰翁批点・高楚芳編『集千家註批点杜工部集』（巻四）に見える。ちなみに、この書はわが国でも室町以降流布した。『天理図書館善本叢書』（八木書店、一九八七年）に影印本が収められている。黒川洋一氏の解題参照。

ただ〈旌旗〉を挙げているだけだが、各種儀仗の類はそのなかに含まれている。読者は想像して分からねばならぬ。〈日暖〉は、旭日がようやく昇って、明け方の寒さがすっかり消えたのを言うのである。〈龍蛇〉は、〈旌旗〉に描かれたもの。〈動〉は、日光にきらめいて動く様子。これは君がお出ましになり、朝廷に臨御される時の様子にはかならない。〈風微〉は、朝廷のしんと静まりかえった気配のなか微風そよかぜがおもむろに吹いて来ることである。〈燕雀〉は、宮殿の軒端に棲んでいるもの。〈高〉は、風に乗って高く翔ぶことを言う。この一聯は、春の朝廷のおだやかな情景を描写している。時は和やかで万物がすくすくと育つ太平の氣象をあらわしている。〈龍蛇〉〈燕雀〉は、本物（真）と偽物（仮）とが対偶になっている。これを借対という。〈宮殿〉〈燕雀〉は、暗に「大厦成りて燕雀相賀す」の意を用いている。当時、安祿山の乱が終熄した後で、殿閣が新たに修築されたばかりなのである。そうでなければ、人に和するのに〈燕雀〉の語を用いるのは、唐突の感を免れない。〈風微〉の二字は、朝廷の景色の静寂なるを言い、〈燕雀〉の軽やかな様子を形容している。ありありとまるで目に浮かぶようだ。劉須溪が云う、「壮麗なのはそれでけっこうだが、もし〈微〉字のさっぱりとした感じがなければ、ごてごてとした缺点を免れぬ」。

朝罷^テ香煙攜^ニ滿袖^ニ 詩成^テ珠玉在^ニ揮毫^ニ

※滿袖…タモトニアマル

香煙^ハ御鑪^ノ香氣。搗^ニ滿袖^ニ言^下以^ニ近臣^ヲ密^中邇^{スル}御前^上。唐書儀衛志^(注32)、朝ノ日宰相兩省ノ官^ハ對^ニ班^ス於香案^ノ前^ニ、百官^ハ班^ス殿廷^ニ、是中書舍人^ハ班^近香案^ニ。即其詩^(注33)所^レ云衣冠^ノ身^ハ惹^ニ御鑪^ノ香^ヲ也。詩^ハ指^ニ賈^ノ所^レ作^ヲ。珠玉^ハ比^ニ詞藻之美^ヲ。在^ト者言^下珠玉自^ニ毫端^一湧出^上也。

(注32)『新唐書』卷二十三上、儀衛志上に「朝の日、殿上に黼^ふ辰^い・躡^ふ席^い・熏^ふ爐^い・香案を設く。御史大夫、属官を領して殿の西廡に至り、從官朱衣呼し、百官を促して班に就かしむ。文武、兩^ふ觀^いに列す。監察御史二人、東西朝堂の軼道に立ちて以て之に泄^{のぞ}む。平明、伝呼^{でんこ}畢^はり、内門開く。監察御史、百官を領して入る。階を夾^{くわ}み、監門校尉二人、門籍を執りて曰く、籍を唱せよと。既に籍を視れば曰く、在りと。入り畢^はりて止む。次の門も亦た之^{かく}の如し。班を通乾^{くわん}・觀象門の南に序し、武班は文班の次に居る。宣政門に入るに、文班は東門自^{より}りして入り、武班は西門自^{より}りして入り、閤門に至るも亦た之^{かく}の如し。夾階校尉十人同唱し、入り畢^はりて止む。宰相兩省の官は香案の前に対班し、百官は殿庭の左右に班す」云々と。

(注33) 賈至の「早に大明宮に朝し兩省の僚友に呈す」詩のこと。この詩は、(注41)(注42)にそれぞれ挙げる王維や岑參の詩とともに『唐詩選』巻五にも収められている。賈至の原作は次のとおり。

銀燭朝天紫陌長 銀燭 天に朝して 紫陌長し

禁城春色曉蒼蒼 禁城の春色 曉蒼蒼

千條弱柳垂青瑣 千条の弱柳 青瑣に垂れ

百轉流鶯繞建章 百轉の流鶯 建章を繞る

劍佩聲隨玉墀步 劍佩 声は玉墀の歩みに随ひ

衣冠身惹御鑪香 衣冠 身は御鑪の香を惹く

共沐恩波鳳池上 共^{ども}に恩波に沐す 鳳池の上^{はより}

朝朝^{あさあさ}染翰侍君王 朝朝 翰を染めて君王に侍す

〈香煙〉は、御炉の香氣。〈滿袖に携ふ〉は、近從の臣であるので御前近くに侍っていることを言う。『新唐書』儀衛志に「朝見の日、宰相および中書門下兩省の官僚は、香炉の置かれた案几の前に左右に整列し、百官は殿廷

に整列する」とある。中書舍人は、その位置が香炉のある案几に近い。賈至の詩に云う「衣冠の身は御鑪の香を惹く」にほかならない。《詩》は、賈至の作を指す。《珠玉》は、詞藻の美に喩える。《在》とは、《珠玉》が筆端より湧き出るのを言うのである。

欲^{セハ}知^{ント}世^ノ掌^ニ絲綸^ヲ美^上 池上^レ于^レ今有^ニ鳳毛^一

※世：ダイノ 糸綸：ミコトノリ 池上：ヤゴトナキ 鳳毛：チ、ニオトラヌ

絲綸ハ謂^ニ制誥^一。禮記ニ王言如^レ絲^一、其出^{コト}如^レ綸^一。美ハ謂^ニ父子繼^レ美^一。左傳ニ世ノ濟ニ其美^一。世美ノ字

本^ニ此^一。池ハ鳳皇池、謂^ニ中書省^一。晉書ニ荀勗自^ニ中書監^一爲^ニ尚書令^一。人賀^ス之^一。勗曰、奪^ニ我鳳皇池^一、

何^ソ賀^{スル}也。蓋中書ハ凝遠、故^ニ以^ニ比^ニ天上ノ鳳皇池^一也。南史ニ宋ノ謝鳳、子超宗有^ニ文辭^一。孝武見^ニ其文^一、嗟

賞曰、超宗殊^ニ有^ニ鳳毛^一。謂^ニ其得^ニ父之文采^一、因^ニ父ノ名^一以^ニ比^ニ鳳之羽毛^一也。公自註ニ舍人先世嘗^ニ掌^ニ

絲綸^一。按^ニ唐書^一、賈曾景雲中擢^ニ中書舍人^一。子至天寶ノ末又拜^ニ中書舍人^一。父子繼^レ美^一、明皇嘗^ニ

稱^ス之^一。此更^ニ推開^ニ泛^ニ向^ニ世人^一稱^ス之^一。欲^{セハ}知^{ント}賈氏掌^ニ詔誥^一、世ノ濟^ニ其美^一之盛^一。須^レ見^ニ鳳皇

池上、貴要之地、于^レ今^ニ有^ニ鳳毛之相繼^一、不^ル中^ニ唯其父而已^一也。此篇前四句早朝大明宮、後四句美^ニ賈

舍人^一世。第五句言^ニ退朝之事^一、結^ニ上生^一下^一。第六句言^ニ舍人有^一詩、就^ニ讚^ニ美^一之^一。結更推本^ニ贊^ニ父

子繼^レ美^一之盛^一。施^ニ及^ニ先世^一、厚^キ之至也。顧修遠註ニ云、因^ニ賈原唱^ニ有^ニ鳳池ノ二字^一、公遂^ニ折^ニ用^一

之^一、以^ニ贊^ニ父子繼^レ美^一。蓋世ノ掌^ニ絲綸^一、惟賈氏ノ爲^レ然^一。王維岑參之和亦皆用^ニ鳳池^一。俱不^レ過^ニ

泛^ニ言^ニ中書^一、未^レ免^ニ雷同^一、而公^ハ則用^ニ以稱^ニ父子^一。不^レ可^ニ移易^一以和^ニ他人^一。是公詩所^ニ以獨步^一也。

(注34)『礼記』緇衣篇。天子の言葉は絹糸のように細くとも、臣下はそれを編(官印を身に結ぶ組紐)のように心得るとい

意。

(注35)『左伝』文公十八年に「世よ其の美を濟し、其の名を隕さず」。

(注36) 『晋書』卷三十九、荀勗伝に「(荀) 勗久しく中書に在り、機事を專管す。之を失ふに及び、甚だ罔罔悵悵す。或いは之を賀する者有り。勗曰く、我が鳳凰池を奪ふに、諸君我を賀するや」とある。

(注37) 『南史』卷十九、謝靈運伝に附された謝超宗の伝に「(謝) 鳳の子超宗、(中略) 好學にして文辭有り。盛んに名譽を得。新安王(劉) 子鸞の国常侍に選補せらる。王の母、殷淑儀卒す。超宗、誄を作り之を奏す。帝大いに嗟賞し、謝莊に謂ひて曰く、超宗殊に鳳毛有り、靈運復た出づ」と見える。ちなみに、超宗は、劉宋・謝靈運(三八五〜四三三)の孫にあたる。

(注38) 原文には有字の下に「二」点を缺く。今、これを補う。

(注39) 『新唐書』卷一一九、賈曾伝に「賈曾、河南洛陽の人。(中略) 曾少くして名有り、景雲中、吏部員外郎と爲る。玄宗太子と爲り、宮僚を遴選し、曾を以て舍人と爲す。(中略) 俄かに中書舍人に擢んでらるるも、父の嫌名(父の名、言忠の忠が中書舍人の中と音通)を以て拝さず、諫議大夫・知制誥に徙る」とある。景雲は、睿宗の年号(七一〇〜七一二)。また賈曾伝に附された賈至の伝に「至、字は幼鄰。明經の第に擢んでられ、褐を單父の尉に解く。玄宗、蜀に幸するに従ひ、起居舍人・知制誥を拝す。帝、位を伝へ、至、冊を讓するに当たり、既に臺を進む。帝曰く、昔、先天の誥命は、乃の父之が辭を爲る。今茲の命冊は、又た爾之を爲る。兩朝の盛典、卿が家の父子の手に出づ。美を継ぐと謂ふ可しと。至、頓首し、流涕鳴咽す。中書舍人を歴す」云々とある。

(注40) 顧宸『註解』に「賈が詩に鳳池の二字有るに因つて、公遂に云ふ、池上今に于いて鳳毛有りと。蓋し世よ糸綸を掌るは、賈氏のみ然りと爲す。賈が鳳池は、泛く鳳凰池を言ふに過ぎず。而して公の属和、遂に賈氏父子を鑒定し、移し易へて以て他人に和す可からず。公の詩独歩する所以なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注41) 王維(字は摩詰、六九九〜七六二)が唱和した詩は、次の如くである。当時、王維は中書舍人(正五品上)であった。

絳幘鶏人報曉籌 絳幘の鶏人 曉籌を報じ

尚衣方進翠雲裘 尚衣 方に進む翠雲裘

九天閭闔開宮殿 九天の閭闔 宮殿開き

萬國衣冠拜冕旒 萬國の衣冠 冕旒を拜す

日色纔臨仙掌動 日色纔に仙掌に臨んで動き

(注42)

岑参(七一五～七六九)が唱和した詩は、次の如くである。当時、岑参も同じく中書省に属する右補闕(従七品上)の任にあった。なお、これは杜甫らの推薦によるもの。011「省中の院壁に題す」詩の(注3)参照。

香煙欲傍衰龍浮

香煙衰龍に傍うて浮ばんと欲す

朝罷須裁五色詔

朝罷みて須らく五色の詔を裁すべし

珮聲歸向鳳池頭

珮声歸り向ふ鳳池の頭

鷄鳴紫陌曙光寒

鷄は紫陌に鳴いて曙光寒く

鶯囀皇州春色闌

鶯は皇州に鳴いて春色闌なり

金闕曉鐘開萬戶

金闕の曉鐘 万戸を開き

玉階仙仗擁千官

玉階の仙仗 千官を擁す

花迎劍佩星初落

花は劍佩を迎へて星初めて落ち

柳拂旌旗露未乾

柳は旌旗を払ひて露未だ乾かず

獨有鳳凰池上客

独り鳳凰池上の客有り

陽春一曲和皆難

陽春一曲 和すること皆難し

《糸綸》は、制誥のこと。『礼記』に「王言は糸の如し、其の出づること綸の如し」と。《美》は、父子で美を継ぐこと。『左伝』に「世よ其の美を済す」とあり、《世》《美》の字は、これに基づく。《池》は鳳凰池、中書省のこと。『晋書』に「荀勗が中書監から尚書令に昇進した。人がおめでとうと言うと、荀勗曰く、わしの鳳凰池を奪われて、何のめでたいことがあるものかと」。けだし中書省は幽邃の地にあるので、天上の鳳凰池に比するのである。『南史』に「宋の謝鳳の子、超宗には文辞の才があった。孝武帝がその文章を見て、嘆賞して言った。超宗には特別に鳳毛があると」。その父の文才を受け継いだことをいい、父の名に因んで鳳の羽毛に比したのである。公の自注に「舎人の先世、嘗て糸綸を掌る」と。『唐書』を按ずるに、「賈曾は景雲年間に中書舎人に拔擢された。子の至が天宝末にまた中書舎人を拝命し、父子で美を継いだのを明皇がかつてこれを称えた」とある。こ

ここではさらに押し広げてあまねく世人に向つて推称しているのである。賈氏が詔語を掌り、代々その〈美〉を済すことの盛んなるを知ろうとすれば、鳳凰池の上、貴要の地において、〈今〉も〈鳳毛〉がちゃんと受け継がれており、ただその父だけではないことをとくと見なければならぬ。この篇の前半四句は〈早に大明宮に朝すること〉で、後半四句は〈賈舍人〉を称えたものである。第五句は、朝廷より退出することを言い、上に述べたことをまとめ以下を導き出している。第六句は、〈舍人〉に詩が有ることを言い、それについて讚美している。結びでは、さらに拡げて父子が〈美〉を継ぐことの盛んであるのを讀えており、先代にまで説き及ぼしているのは、手厚いかぎりである。顧修遠の註に云う、「賈至の原作に〈鳳池〉の二字があることから、公はこれをふたつに分けて用い、父子が美を継ぐことを讀えている。けだし代々〈糸綸〉を掌ったのは、ただ賈氏だけがそうであつた。王維と岑參の唱和した作に同じくどちらも〈鳳池〉の語を用いているが、いずれも一般的に中書省を指して言うに過ぎず、雷同を免れぬ。しかるに公はそれで父子を称し、移し易えて他人に唱和することはできない。これぞ公の詩が独歩して世に並ぶ者のないわけだ」。

009 宣政殿退朝晩出^ニ左掖^ヲ

掖音奕、正門旁下ノ小門也。^(注一)漢書^(注二)注ニ掖門在^ニ兩旁^ニ、若^ニ人之臂腋^ノ也。唐中書門下ノ兩省在^ニ宣政殿門ノ左右^ニ。門下省在^レ左^ニ、故^ニ謂^ニ之^ヲ左掖^ト。公爲^ニ拾遺^一、屬^ス門下省^ニ。此詩朔或^ハ望[、]早^ニ朝^ニ宣政殿^ニ、朝罷^テ歸^テ入^ニ左省^ニ、與^ニ同僚^一其^ニ修職^ヲ、及^レ晩^ニ退出^{シテ}而還^ニ私第^ニ也。

(注一) 例えは、『広韻』に掖字に注して「一に曰く、正門の旁の小門なり」と。

(注二) 輯註(卷四)に挙げ、宇都宮遷庵の増広本に引く。『漢書』卷十、成帝紀、建始三年の条、唐・顔師古の注に「掖門は兩旁に在り、人の臂腋の如くなるを言ふなり」と。

〈掖〉、字音は奕、正門わきの小門である。『漢書』の注に「掖門は、兩脇にあり、人体でいえば腋のようなものである」と。唐代、中書・門下の両省は、〈宣政殿〉門の左右にあり、門下省は左側にあったので、これを〈左掖〉という。公は、拾遺となり、門下省に属した。この詩は、月の朔もしくは望に、朝早く〈宣政殿〉に参内し、朝儀が終わってから左省たる門下省に入り、同僚とともに職務を執り、〈晩〉になって退出して私邸にもどるのである。

天門日射^ル黄金榜^ス 春殿晴^レ暕^ス 赤羽旗

※射：テラス 暕：カ、ヤク

射謂^ニ斜^ニ照^スス。黄金榜^ハ謂^ニ金装^ノ門扁^ヲ。蓋殿門掲^レ額^ヲ以^レ金^ヲ塗^レ字^ヲ。朝日纔^ニ上[、]便先映射也。暕^ハ日入^ル餘光^也。此猶^レ言^レ耀^{クト}也。一^ニ作^レ熏^ニ。言^ニ若^レ發^レ香^ヲ然^ル也。赤羽旗^ハ卽^ニ朱雀之畫旗^也。諸旌旗中、此尤燦爛^{タリ}。

故^ニ特^ニ言^レ之^ヲ。一聯言^ニ殿廷文物、朝景目瞻^ヲ也。

(注3) 『集韻』平声二、文韻に「暕は、日入る餘光」と。『古今韻會舉要』卷五も同じ。『韻會』は、宇都宮遷庵の増広本に引く。

(注4) 錢注(卷十) および輯註に「二に熏に作る」と。詳註(卷六) も同じ。輯註は、宇都宮遷庵の増広本もこれを挙げる。

(注5) 『唐詩解頤』に見える。

(注6) 暕は、『集韻』に「大目なり」とあるが、それでは意味が通じにくい。目にみちることを言うのであろうか。

〈射〉は、斜めに照らすこと。〈黄金榜〉は、黄金で裝飾された門匾のこと。けだし殿門には額を掲げ金で文字を塗つてあるのだらう。朝日が少しでも昇ると、すぐにまず光にきらめくのである。〈暕〉は、日が沈む時の餘光。ここは、耀くと言うのとはほぼ同義。一に熏に作る。匂いたつようであるの言う。〈赤羽旗〉は、朱雀の描かれた旗。さまざまな旗のなかで、これがとりわけきらきらと輝いている。それで特に言う。この一聯は、殿廷の文物で朝の景色の目に映つたものと言う。

宮草霏承^(注7)ケ委佩^一 爐烟細駐^二遊絲^一

※宮草：カラシバ 霏霏：ヒラ／＼ 細細：チラ／＼

霏當^(注8)作^レ菲^二。菲菲^ハ嫩草盛^{ナル}貌^一。承^(注9)受也。委佩^ハ謂^二佩王之垂下^一也。曲禮^(注10)主ノ佩垂^ルレハ則臣ノ佩^ハ委^ス。蓋

朝禮所ノ立庭上、細草鋪^テ地^ニ如^レ氈^一。其向^テ殿^ニ拜伏^ス、佩隨^テ委^シテ地^ニ、而草便受^レ之^ヲ、如^二相待者^一也。爐

烟^ハ御爐ノ香烟。唐書儀衛志^(注11)朝日ハ殿上設^二熏爐香案^一。遊絲^ハ一名陽焰。春空搖曳之氣乍簇^リ乍散^{スル}者。此則

長ク在、故^ニ曰^レ駐^ト。言庭上御爐ノ香烟、裊裊如^ニシテ縷^ノ而上^リ、繫^ニ住^{シテ}遊絲^一而令^レ不^レ散^セ也。其實^ハ爐烟

上^{リテ}而不^レ絶、停^駐空中^ニ如^二遊絲一爾。蓋御爐在^二階前之庭^一也。一聯以^二俯仰^一爲^レ對^ヲ、見^二晴景和暄、天

靜^{ニシテ}無^一風^一。

(注7) 〈霏霏〉、錢注は〈微微〉に作り、「二に霏霏と云ふ」と。輯註も同様。

(注8) 釈大典『唐詩解頤』に霏字の下に注して「通^レ菲^ニ」と。なお、明・万曆四十六年（一六一八）刊の坊刻本『新刻李袁二

先生精選唐詩訓解』（卷五）は〈霏霏〉を〈菲菲〉に作る。この『唐詩訓解』には、寛文年間（一六六一―一六七二）以前

に刊行された和刻本がある。ちなみに、李は李攀龍（字は于鱗、号は滄溟。一五一四―一五七〇）、袁は袁宏道（字は中

郎。一五六八―一六一〇）のことで、その名に偽託したもの。江戸初期における『唐詩訓解』の受容については、日野龍

夫校注『唐詩選国字解1』（平凡社東洋文庫、一九八二年）解説参照。

(注9) 何か基づく所あるのか、不明。

(注10) 『礼記』曲礼下に「主の佩倚^よれば、則ち臣の佩垂れ、主の佩垂るれば、則ち臣の佩委す」と。倚は身体につき、委は地面

につくこと。

(注11) 008 「賈至舍人早に大明宮に朝するを奉和す」詩の（注30）参照。

(注12) 『唐詩解頤』に初唐・盧照鄰の「長安古意」に見える〈遊糸〉の語に注して、「春日晴^ル時、空中搖曳之氣」という。しかし実際は、「くもや小虫などが始めてかえったときについた細い糸が無数に空中に飛びただようもので、春の景物になっている。日本では比較的すくないので、よく陽炎（水蒸気的作用で生ずる現象）のこととまちがえられている」（集英社漢詩

大系6『唐詩選』、斎藤响訳注。このこと、川口久雄「『かげろふ日記』の書名について―〈かげろふ〉の語義とその変遷―」（『西域の虎―平安朝比較文学論集』収録、吉川弘文館、一九七四年）に指摘。なお、顧宸の『註解』には「蛛糸の遊散する者」という。

《霏》号は、当然《菲》に作るべきだ。《菲菲》は、若草がやわらかに萌えるさま。《承》は、受である。《委佩》は、佩玉が垂れ下ることである。「曲礼」に「主の佩垂るれば則ち臣の佩委す」と。けだし朝礼で立つ庭には、細い《草》がびっしりと地面を敷きつめ、毛氈のようであったのだろう。宮殿に向かつて拝伏すると、佩玉がそれにつれて地面に《委》し、《草》がこれを受けて、待ち構えているようである。《爐烟》は、御炉の香烟。『唐書』儀衛志に「朝の日には殿上に熏爐・香案を設ける」とある。《遊糸》は、一名陽炎。春空にただよう気で、むらがったかと思うとあつという間に散ずるもの。ここでは長くとどまっているので《駐》という。その意味は、殿庭の上にある御炉の香烟がゆらゆらと細い糸のように立ち上り、《遊糸》を繋ぎとめて散らさないようにしているということである。実際は、《爐烟》が絶え間なく上がり、空中にとどまって《遊糸》みたいであるのだ。けだし御炉は、階前の庭にあるのであろう。この一聯は、俯して見たものと仰いで見たものとを対偶にしている。晴れわたった景色はのどかで暖かく、穏やかで風ひとつないことがみてとれる。

雲近^{ニテ}蓬萊^ニ常^ニ五色^{（注13）} 雪殘^ニ鵲^ニ鵲^ニ亦多時^{ナランヤ}

※多時：ホドナカラン

蓬萊^ハ即大明宮。高宗ノ時改^テ蓬萊宮^ト。取^テ殿後ノ蓬萊池^ヲ爲^レ名^ト。以^テ擬^ニ海上ノ仙山^ニ。後^ニ復爲^ニ大明宮^ト。此^ニ仰^テ見^ニ朝霞映^{スルヲ}宮^ニ、因^テ言^フ。雲成^ニ五色^一、仙實^ニ瑞氣^一、以^テ其^ニ近^ニ蓬萊^ニ、故^ニ常^ニ然^ル也。常^ニ者不^ニ獨^ニ今朝^一也。沈約^カ宋書^ニ慶雲五色^ハ者、太平之應也。暗^ニ用^ニ此意^ヲ以^テ寓^レ祝。鵲^ハ漢ノ宮觀ノ名。借用^テ以^テ對^ニ蓬萊^一。謂^ニ深宮ノ殿閣^ヲ。亦多時^ハ加^ニ豈^ニ字^一看。言^レ當^ニ不^レ日^{ナラ}消融^ス也。二聯皆自^ニ春晴^ノ二字^一來^ル。

朝廷閒暇、瑞日熙熙、泰平ノ氣象、寫^シ出^シ盡^{セリ}矣。

(注13) 〈五色〉、錢注および輯註は〈好色〉に作る。

(注14) 008 「賈至舍人早に大明宮朝するを奉和す」詩の(注6) 参照。

(注15) 『史記』秦始皇本紀および封禪書に、渤海にあるという三神山の一つとして蓬萊の名を挙げる。

(注16) 梁・沈約(四一―五一三)の『宋書』卷二十九下、符瑞志下に「雲に五色有る、太平の応なり。慶雲と曰ふ。雲の若くして雲に非ず、煙の若くして煙に非ず、五色紛緇、之を慶雲と謂ふ」と。

(注17) 前漢・司馬相如「上林の賦」(『文選』卷八)に「石闕を歷し封禪を歴し、鳩鵲を過ぎり露寒を望む」とあり、張揖の注に「此の四觀(石闕・封禪・鳩鵲・露寒を指す)は、武帝建元中に作る。雲陽甘泉宮外に在り」と。

(注18) 『夜航詩話』卷五に同様の指摘がある。

(注19) 『唐詩集註』卷五に、この詩を載せ、「中ノ四句、応^ス春晴」と。

〈蓬萊〉は、即ち大明宮のこと。高宗の時、改めて蓬萊宮といった。宮殿の背後にある蓬萊池から取って名づけられたのである。東海上にある仙山の名に擬えた。後に再び大明宮とした。これは仰いで朝がたの赤い雲気が宮殿に映じているのを見て、それで言う。〈雲〉が〈五色〉をなしているのは、仙界の瑞兆の気で、〈蓬萊〉に近いことから、いつもそうなのである。〈常に〉とは、今朝のみに限ったことではないのである。沈約の『宋書』に「慶雲が五色であるのは、太平の応徴である」と。暗にこの意を用いて祝意を寓している。〈鳩鵲〉は、漢の宮殿の名。借用して〈蓬萊〉と対にしている。深宮の殿閣のこと。〈亦多時〉には、豈の字を加えて看よ。きつと日ならずして消え溶けてしまふに違いないことを言う。以上の二聯は、いずれも〈春〉〈晴〉の二字から来たものである。朝廷はのんびりとして何事もなく、めでたき陽光がうらうらと照らす。泰平の氣象をすっかり描き尽している。

侍臣緩歩^{シテ} 歸^リ青瑣^{ヨリ} 一 退食從容^{トシテ} 出^ルコト 毎^ニ遲^シ

※緩歩…シヅ／＼ト 從容…ユツタリ 毎…イツノヒモ

侍臣、公自謂。^(注20) 青瑣、既見。^(注21) 歸ルハ青瑣ヨリ言下出ニ殿門一而歸上レラ省ニ也。退食亦既見。^(注22) 從容ハハ任セテ其容止ニ

不急遽一也。^(注23) 不シテ日ニ退食委蛇一ト而易以ニ從容一者ハ、天台山ノ賦ニ任ニ緩歩之從容ニ、分ニ用之ヲ二句ニ也。

出ハ出ニ左掖一也。毎ハ毎日也。遲ハ及晚ニ也。蓋朝罷退テ入ニ左省ニ、遲日悠悠、在省ニ修職ヲ、及晚ニ出ニ掖

門一而還ニ私第ニ。竝ニ緩歩從容一シテ、無ニ復忽遽之忙一。時適ニ天下泰平、朝廷無事、有ニ羔羊之風一也。^(注27) 虞伯玉云、

前六句、皆賦ニ宣政朝會之時所一見、第七句方ニ言ニ退朝帰一省ニ。結句乃言ニ晚ニ出テ還一レ家ニ而全題完具ス

矣。^(注29) 郭彥深云、妙在ニ緩歩從容ニ。前六句已ニ有此意況一。微吟、自知。冰川詩式ニ云、此詩ハ藏頭格也。首

聯與ニ中ニ聯ニ六句皆具ニ言ニ所遇之景ト與一レ情、而不レ言ニ題意一。至ニ結聯ニ方ニ說ニ題之意一、是ヲ謂ニ藏頭一

案スルニ非ニ初ヨリ有ニ是格一、此詩自然ニ如是ノ爾。

(注20) 『詩經』邵宝『集註』卷二十二、宮室類および薛益『分類』卷一、宮殿などに指摘。

(注21) 004 「獻納使起居田舍人澄に贈る」詩の詳解に見える。その(注23) 参照。

(注22) 004 「獻納使起居田舍人澄に贈る」詩の詳解に見える。その(注16) 参照。

(注23) 『史記』留侯世家に「張」良嘗て間に從容として下邳の圯上を歩游す」とあり、唐・司馬貞の索隱に「從容は、其の容止に從任して、矜莊ならざるを謂ふなり」と注す。

(注24) 『詩經』召南・羔羊に「退食公自りす、委蛇委蛇たり」と。

(注25) 東晉・孫綽「天台山に遊ぶ賦」(『文選』卷十一)に「心目の寥朗を恣にし、緩歩の從容に任す」と。

(注26) 『詩經』幽風・七月に「春日遲遲たり」とあるのに基づく語。

(注27) (注24) 参照。『唐詩訓解』に「朝を罷め省に帰り、晩にして食に退く。從容此の如し。信に羔羊の遺風有り矣」と。

(注28) 玉は生の誤り。虞伯生は、元・虞集(字は伯生、一二七二〜一三四八)のこと。その名を冠した『杜律虞註』は、後世の偽託。寛文八年(一六六八)刊の和刻本があり、『唐詩集註』にも引く。

(注29) 明・郭濬(字は彦深)のこと。明・高棟(字は廷礼、一三五〇〜一四二三)輯選『唐詩正声』に評点を加えた『増訂評

註唐詩正声』十二卷がある。その説は、『唐詩集註』に引く。

(注30) 明・梁橋(字は済甫、号は冰川子)撰。全十卷。嘉靖二十四年(一五四五)の自序を附す。万治三年(一六六〇)刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集第十七集』に影印を収む。その藏頭格の条に、「藏頭は、首聯と中二聯と六句皆具に寓する所の景と情とを言ひて題意を言はず。結聯に至つて方に題の意を説く。是れを藏頭と謂ふ。此れ帰題と同じからず。帰題は、結聯に明らかに題の字を用ふるなり。藏頭は、結聯に暗に題の事を用ふるなり」とした上で、五律「晩に左掖を出づ」詩とこの詩とを例に挙げる。前者については、後出010「紫宸殿退朝の口号」詩の(注8)参照。なお、『冰川詩式』は、度会末茂の『杜律評叢』(卷一)にも挙げる。

〈侍臣〉は、公自らの謂。〈青瑣〉は、既に前に見える。〈青瑣より帰る〉は、〈宣政殿〉の門を出て門下省に帰ることを言うのである。〈退食〉も、やはり既に見える。〈従容〉は、自然な身のこなしに任せてあわただしくしないことである。「退食委蛇」と言わずに、〈従容〉と言ひ換えているのは、「天台山の賦」に「緩歩の従容に任す」とあるのを、二句に分けて用いたのである。〈出〉は、〈左掖〉を出るのである。〈毎〉は、毎日である。〈遲〉は、晩に及ぶことである。けだし朝会がおわり退出して左省に入り、のどやかな春の日をのんびりと、省内で職務を執る。時に天下泰平で、朝廷には何事もなく、『詩経』羔羊の遺風がある。虞伯玉「生」が云う、「前の六句はいずれも〈宣政殿〉での朝会の時に見たことを直叙し、第七句でちょうど〈朝より退き〉て門下省に帰ることを言い、結句でやっと〈晩に出て〉家にもどることを言っており、詩題に述べられていることが全部すっかり具わったことになる」。郭彦深が云う、「妙は〈緩歩〉〈従容〉にあるが、前の六句にもうこの趣意が含まれており、微吟すると自ずと分かる」。『冰川詩式』に云う、「この詩は藏頭格である。首聯と中間の二聯との六句は、いずれもつぶさに景と情とを言うが、題意を言わない。結びの聯に至つてやっと題意を説いている。これを藏頭という」。案ずるに初めからこのスタイルがあるわけではなく、この詩は自然にそつたのである。

010 紫宸殿退朝ノ口號

紫宸殿ハ在ニ宣政殿ノ後ニ。常日御シテ之ニ見ニ羣臣一。古之燕朝也。故ニ所ノ詠スル景境、與ニ宣政殿一自別。讀者詳ニセヨ之ヲ。號平聲、呼也。口號謂ニ隨テ口ニ競吟一也。

(注1) 号は下平声豪韻。顧宸『註解』に「説文に曰く、号は呼なり。口号は口に随つて号吟するを言ふなり」と。宇都宮遯庵の両者にも引く。

〈紫宸殿〉は、宣政殿のうしろにある。常の日には、ここにお出ましになり、群臣を引見される。古の燕朝である。されば詠じられている景境は、前詩の宣政殿とは自ずと異なる。読者は、この点をしっかりとみておくことだ。〈号〉は平声、呼である。〈口号〉は、口から出るままに号吟することである。

戸外ノ昭容紫袖垂ル 雙瞻御座ヲ引ニ朝儀一

※袖：フリソデ 御座：タカミクラ

昭容ハ女官位、正ニ二品。爲ニ九嬪之第二一。唐ノ制、天子臨レ朝ニ、宮人引テ至ニ殿上ニ、左右相竝テ、面シテ内御卻行シ、以ニ雉尾扇一障ニ翳ス天顔一。陛座之後乃開去ル。不レ欲セ使コトヲ衆人ヲシテ見ニ宸儀升降之容ヲ也。垂ハ謂ニ彈袖一也。百官列ニ立シテ庭上ニ、刮テ目ヲ以待ニ朝儀一。既ニシテ而天子出御、便先ツ認下昭容垂ニ紫袖一而出上。先見ニ於戸外ニ者ハ、以ニ其先ニ于天子一也。引ハ導引也。朝儀謂ニ天子臨レ朝ニ儀容一。宸儀既ニ臨ニ殿上ニ、兩昭容引導ニ以赴ニ御座一也。

(注2) 『新唐書』卷四十七、百官志、内宮の条に「唐、隋制に因り、貴妃・淑妃・德妃・賢妃有り。各々一人、夫人と爲す。正一品。昭儀・昭容・昭媛・修儀・修容・修媛・充儀・充容・充媛、各おの一人、九嬪と爲す。正二品。婕妤九人、正三品。美人四人、正四品。才人五人、正五品。宝林二十七人、正六品。御女二十七人、正七品。采女二十七人、正八品」と。

(注3) 『唐詩訓解』に「御座を双瞻すとは、兩昭容、内に面して却行するなり」と。『唐詩集註』も同じ。

(注4) ちなみに、023「至日興を遣る。北省の旧閣老・両院の故人に奉寄す」二首其二の頷聯に「麒麟動かずして爐烟上がり、

孔雀くわんぐ徐く開いて扇影還る」とあり、東陽の詳解に「孔雀は文禽。其の尾をあつめて扇と為す。天子殿に升る、両昭容、扇を以て擁障す。詳らかに前に見ゆ。旧、雉尾扇を用ふ。開元の初め、改めて繡孔雀を用ふ。〔孔雀徐く開いて扇影還る〕は、宸儀坐定まつて、乃ち徐くに聞き分かれ、是に於いて竝に捧げて退き還つて内に入るなり」という。

また097「秋興」八首其五の頸聯に、「雲移りて雉尾宮扇を開き、日繞りて龍鱗聖顔を識る」とあり、詳解に「雉尾を織つて扇と為す。出御の儀衛、詳らかに前に見ゆ。宸儀坐定まつて、乃ち開き去る。許渾が早朝に云ふ所の雉尾才あづかに分かれて玉旒を見る。朝班殿陛の下に在つて之を仰望す、彩雲の移り動くが如し」云々という。許渾（七八八―八六〇）の作は「秋日早に朝す」詩（『全唐詩』卷五三三）の第六句。『唐詩貫珠』卷二、帝京二にも載せる。

〔昭容〕は、女官の位で正二品。九嬪の第二位である。唐の制度では、天子が朝に臨まれる際、女官が先導して殿上に登る。左右に相並んで内に向つて却き、雉尾扇で天顔を蔽い隠す。玉座にのぼられた後ようやく開く。衆人に昇降するお姿を見せたくないものである。〔垂〕は、たれさがった袖のこと。百官は庭上に整列して、目をこすり注意深く〔朝儀〕を待つ。やがて天子が出御なされると、さつそくまず〔昭容〕が〔紫袖〕を〔垂〕れて出てくるのが認められる。まず〔戸外〕にあらわれるのは、天子に先立つて出てくるからである。〔引〕は、導き引くことである。〔朝儀〕は、天子が朝廷に臨まれる儀容のこと。天子が殿上に臨まれると、二人の〔昭容〕が先導して御座に赴くのである。

香飄テ合殿ニ春風轉シ 花覆テ千官ヲ淑景移ル

※合殿：ゴテンヂウ 転：メグリマハル 淑景：ヒアシ

香ハ言フ御爐ノ香氣ヲ。合ハ滿（注6）也。合殿、即合座合家之義。御香之氣飄リ二度殿中ニ、春風吹轉シテ無レ所不レ至也。顧（注6）註云、前詩爐煙細細駐ニ遊絲ヲ、善ク寫ス無レ風之妙ヲ、此ハ則善ク寫ス有レ風之妙ヲ、各極ニ精工ヲ矣。覆去聲（注7）。言（注8）庭花掩ニ映スルヲ衣冠ニ也。公又有退朝花庭散之句（注9）。殿庭花枝之盛ナル、可ニ以想見一已。淑和也（注10）。春天和氣、以レ淑稱レ之ヲ。日光曰（注11）景。與レ影不レ同。移ハ言フ待（注12）朝良久シク日晷漸ク移一。蓋日既ニ高ク昇也。

(注5) 『唐詩解頤』に合字の下に注して、「猶^レ言^カ満^ト」と。また六如の『葛原詩話』後編卷三にも「杜詩香飄合殿春風転、蕉中師注、合殿猶満殿ト。畢竟俗言ノ御殿中ト云ト同シ」云々との指摘がある。但し、吉川幸次郎『杜甫詩注』第五冊には「〔合殿〕とは、奥深い内殿の意」とし、「南朝の史書にもその語見え、『資治通鑑』宋紀、元嘉三年また三十年の胡三省注は、李延寿の説によつて、その意味を説く」との指摘がある。

(注6) 顧宸『註解』。字都宮遯庵もこれを挙げる。

(注7) 去声のときは、蓋う意。字音はフ。

(注8) 『唐詩訓解』に「宮花日に向て朝班に掩映す」と。

(注9) 「晩に左掖を出づ」詩(詳註卷六)に、次のように見える。

| | | |
|-------|-------|---------------------|
| 晝刻傳呼淺 | 昼刻 | 伝呼淺く |
| 春旗簇仗齊 | 春旗 | 簇仗齊し |
| 退朝花底散 | 退朝 | 花底に散じ |
| 歸院柳邊迷 | 歸院 | 柳辺に迷ふ |
| 樓雪融城濕 | 樓雪 | 融けて城湿り |
| 宮雲去殿低 | 宮雲 | 去つて殿低し |
| 避人焚諫草 | 人を避けて | 諫草を焚 ^ヤ く |
| 騎馬欲鷄棲 | 馬に騎れば | 鷄棲ならんと欲す |

(注10) 例えば、『字彙』に「善なり、和なり」と。

(注11) 『唐詩訓解』に「纂要に日光を景と曰ふ」と。『唐詩集注』も同じ。ちなみに、『說文解字』七篇上に「景、日光なり」とあり、段注に「後人、陽に名づけて光と曰ひ、光中の陰に名づけて影と曰ふ。別に一字を製して、義を異にし音を異にす」と。但し、仇兆鰲は、「景」字の下に「影と同じ」と注する(詳註卷六)。

〈香〉は、御爐の香氣をいう。〈合〉は、満である。〈合殿〉は、即ち合座・合家の意。御香の気が殿中に〈飄^{ひろがえ}〉りただよいわたる。〈春風〉が吹き〈転〉じて、至らぬところがないのである。顧註に云う、「前詩の〈爐煙細

遊糸を駐むは、風のない状態をみごとに写し出し、ここでは風の有る状態をみごとに写し出して、それぞれ精巧を極めてゐる」と。〈覆〉は、去声。殿堂の花が衣冠に掩いかぶさっているのを言う。公にはさらに「退朝花庭に散ず」の句がある。殿堂の花枝の盛んなさまを想像できようというものだ。〈淑〉は、和である。春の和やかな気を〈淑〉の語で称する。日光を〈景〉という。影と同じではない。〈移〉は、朝廷に侍することやや久しく、日影がしだいに移ることを言う。けだし、日がもうすでに高く昇っているのであらう。

晝漏稀聞^ニ高閣^{ヨリ}報^シ 天顔有^テ喜近臣知^ル

※晝漏…トキノタイコ 報…シラセ

高閣^ハ謂^ニ鼓樓^ヲ。高閣^{ヨリ}報^スハ言^下漏鼓之聲自^ニ高閣^一響^キ聞^ル上^ヲ。時春日遲遲^(注12)、故^ニ漏聲稀疎^(注13)、久^{シテ}而後聞^ル也。

内廷深邃^(注14)、朝儀肅靜、言外可^レ想也。近臣知^ハ言^下在^ニ末班^ニ者^ハ不^ラ上^レ能^レ知^{コト}也。此蓋吾王庶幾^ハ無^ニ疾病^一與^(注15)之

意。公爲^ニ拾遺^一、咫^ニ尺^ス天顔^ニ、見^テ其有^ニ喜色^一、心竊^ニ悅而慶^{スル}也。

(注12) 009 「宣政殿退朝晩に左掖を出づ」詩の(注26)参照。

(注13) 『唐詩解頤』に「晝漏稀聞」の句に注して「言^ニ日永^{シテ}漏声之稀疎^{ナルヲ}也」と。

(注14) 邵宝『集註』卷二十二、宮室類に、この詩を載せ、「聞くこと稀とは、紫宸の内衛晝漏の時刻、必ず外廷高閣の報を待つことを謂ふ。以て内廷の深邃なるを見^スなり」と。

(注15) 『孟子』梁惠王下に見える。わが王には、つつがなくいらつしやるらしいの意。

〈高閣〉は、鼓樓のこと。〈高閣より報ず〉は、漏鼓の音が高閣より響き聞こえて来るのを言う。時に春の日あしはのどかで、漏声は間遠にして、しばらくたつてから聞こえてくるのである。内廷の奥深く幽邃なことや、朝廷の儀式の静肅なること、言外に想像できよう。〈近臣知る〉は、末班にある者は知ることができないことを言うのである。これは、けだし「吾が王庶幾^ハは疾病無からんか」の意であらう。公は拾遺となつて天子のごくお側

近くにゐる。その喜色あるを見て、心ひそかに悦んで慶賀するのである。

宮中^{ヨリ} 毎^ニ出^テ歸^ル東省^ニ 會^ニ送^{シテ} 夔龍^一集^ニ鳳池^ニ

※夔龍：オモヤクシユウ

門下省^ニ宣政殿門ノ左^ニ、故^ニ謂^ニ之^ヲ左省^ト、亦曰^ニ東省^ト。會送^ハ會合^{シテ}相送也。會訓^{スルハ}時適^ト謬^ル矣。^(注16) 夔龍ハ舜^ノ二臣ノ名。借^テ稱^ス宰執之賢^ヲ。書^ノ舜典^ニ夔^ハ典^リ樂^ヲ、龍^ハ作^レ納言^ト。事物紀原^ニ舜ノ納言ハ中書令之任也。然^{レハ}則雖^ニ夔龍連稱^一、然^{トモ}龍ノ字所^レ指爲^レ重^{シト}。送^ノ字亦專係^ニ中書令^ニ。鳳池ハ卽中書省、既^ニ見^ニ于前^ニ。稱^{スル}省地之貴^ヲ也。唐ノ制、尙書中書門下謂^ニ之^ヲ三省^ト。三省ノ長官爲^ニ宰相^ト。而中書ハ乃政事堂^ニ集^ニ議^シ朝政^一最尊^{シト}、故^ニ每^ニ退^ニ出^ニ宮中^一而還^上、輒必與^ニ三省ノ羣僚^一俱^ニ從^ニ相公^ニ至^ニ中書^ニ、就^ニ政事堂^ニ集^ニ議^シ朝政^一然^{シテ}後乃始^ニ歸^ル東省^ニ。其得^ニ參^ニ預^{スル}コト^一大政^ニ、自喜^ニ榮幸之盛^一也。用^ニ龍鳳ノ字^一對映^{シテ}弄^レ巧^ヲ、壯麗^{ニシテ}體裁^一、勻^ニ稱^ス章法^一。且龍ノ字與^ニ池通^ス氣^ヲ、作者心細^{ナル}如^レ髮^ノ、不^レ可^ニ皮膚視^ス。前六句言^ニ朝會之景^ト與^ニ事^ト、結方^ニ言^ニ退朝^一、亦藏頭格也。通篇敘^ニ遇^ニ時^ニ得^ニ意^ニ之趣^一、或^ハ以爲^ニ下^ニ嘆^ニ倦遊^一之辭^ト、味^ニ乎詩^ニ之甚也。宮嬪女職、本備^ニ內任^ニ、乃人主坐朝^ニ、引^テ至^ニ殿上^ニ、尤失^ニ於風流^ニ矣。至^ニ昭宗ノ天祐^一間^ニ、詔^{シテ}罷^レ之。只令^ニ小黃門^一祗候引從^セ、宮人不^レ得^ニ擅^ニ出^ニ內^一。於^レ是禮始正也。○大明宮以下三首、典雅重大、何等ノ筆力。唐廷全盛景象、宛然^{トシテ}在^ニ目中^ニ矣。

(注16) 『唐詩解頤』に〈會〉字を「たまたま」と訓じ、「時適」と注する。

(注17) 『尚書』舜典に「帝曰く、夔、汝に命じ樂を典らしむ。胄子を教へよ。(中略) 帝曰く、龍、朕讒説行を殄ち、朕が師を震驚するを望む。汝に命じて納言と爲す。夙夜朕が命を出納し、惟れ允なれ」と。

(注18) 北宋・高承撰。全十卷。鶴飼石齋点による明暦二年(一六五六)刊の和刻本がある(汲古書院『和刻本類書集成』第二輯に影印を収む)。その巻五、中書令の条に「舜の納言、周の内史は皆中書の任なり」と。宇都宮瀧庵の増広本にもこれを引く。

(注19) 009 「宣政殿退朝晩に左掖を出づ」詩。

(注20) 『唐詩解頤』に「中書、政事堂、所^レ在、故^二時^一從^二諸官^一而集^二議^一、朝政^ヲ也」と。盛唐・李華(七一五～七六六)の「中書

政事堂の記」(『全唐文』卷三一六)に拠れば、政事堂は唐初の武徳以来、門下省にあつたのを、高宗の光宅元年(六八四)、裴炎が中書令に除せられて後、これを中書省に遷したという。なお、結句について、鈴木虎雄『杜少陵詩集』には、「会送す夔龍の鳳池に集まるを」と訓じ、「このとき唐の政事堂は中書省にあり、故に宰相等そこに集まるなり、而して作者等自己の本省にかへらんとしてその人人を会送するなり」と説く。吉川幸次郎『杜甫詩注』も同様の解釈。

(注21) 細心この上ないこと。明清の成語。ちなみに、清・易本煥『常語授』(汲古書院『明清俗語辭書集成』第一輯所収)巻二、雅類に、この語を載せ、「六韜に、飛將の才、心細なること髮の如く、肝大なること斗の如し」と注するが、『六韜』にこの語は見えない。

(注22) 『唐詩集註』に引く明・蔣一葵の説に「前^ノ六句言^二入朝之景^一ト與^二事^一、結言^二退朝ノ事^一」と。ちなみに、蔣一葵は、字は仲舒。万曆二十二年(一五九四)の舉人で、著に『堯山堂外記』『長安客話』等がある。

(注23) 例えば、『唐詩訓解』には「蓋し公、拾遺と爲り、本と宜しく君に親しむべきに位卑しく分疎なるを以て、近づくことを得ず。故に建明する所無く而して班に随つて碌碌たり。良に嘆ず可し。豈に帝寵^{まじ}浸^{やうや}く衰ふるの時ならんか」という。この箇所、宇都宮遯庵の詳説にも引く。

(注24) 『唐会要』巻三に「其の年(天祐二年「九〇五」)勅す、宮嬪女職、本と内任に備ふるに、近年以来、稍や礼儀を失す。今後延英殿坐朝の日に遇ふ毎に、只だ小黃門をして祇候引從せしめ、宮人擅^{はし}に内を出ることを得ざらしむ」と。

なお、『夜航詩話』巻二に、清・王阮亭(名は士禎、別号漁洋山人。一六三四～一七一一)『香祖筆記』巻六の「杜詩、戸外の昭容紫袖垂ると。蓋し唐の制に、天子朝に臨む、則ち宮人を用ひ引いて殿上に至る。天祐二年に至り、始めて詔して之を罷む。是れ全盛の時、反つて衰乱の朝の礼に合ふと爲すに如かざるなり」云々というのを挙げた。

門下省は宣政殿門の左側にあり、それでこれを左省といい、(東省)ともいう。(会送)は、会合して送ることである。(会)を「時適」と訓ずるのは誤っている。(夔龍)は、舜の臣下二人の名。借用して宰相の賢なるを称する。『尚書』舜典に「夔は楽を典り、龍は納言と作る^な」、『事物紀原』に「舜の納言は中書令の任である」と。そ

うすると〈夔龍〉と連称してはいるけれども、〈龍〉字の指す意味の方が重い。〈送〉字もやはり専ら中書省にかかるとは、ほかならぬ中書省のこと。既に前に見える。省の所在地が尊貴なことを称するのである。唐代の制度では、尚書・中書・門下を三省という。三省の長官を宰相とし、そうして中書省は政事堂のある場所、最も尊ばれた。されば〈宮中〉を退〈出〉しでもどる〈毎〉に、三省の属僚たちと一緒に相公について中書省に赴き、政事堂で朝政を審議し、その後やつと〈東省〉に〈帰〉るのだ。大政に参与することができ、自ら榮幸の盛んなることを喜んでいたのである。〈龍〉〈鳳〉の字を用い、互いに照応させて技巧を凝らし、体裁を壮麗にして、章法に按配よく適合している。その上〈龍〉字は〈池〉と氣脈を通じており、作者の心配りは毛髪ほどの細密さであつて、上つ面だけを見てはならない。前六句は朝会的情景と事柄とをいい、結びでやつと〈退朝〉をいう。やはり藏頭格である。一篇全体は、時に遇い我が意を得た旨を述べている。或いは倦遊を嘆いた言葉だとする説があるが、詩に味いこと甚だしい。宮女の職は本来後宮内の任務に備えるもの、これがなんと君主が朝に坐すのに殿上に先導するというのは、ことのほか風流に失してしまうことになる。昭宗の天祐年間に至つて、詔してこれを廃め、ただ小黃門（宦官）に祇候引從させることにし、宮人は勝手に後宮を出ることができなくなった。かくして儀礼はやつと正しくなったのである。○「大明宮」以下の三首は、典雅重大で、何という筆力であらう。唐朝全盛の景象が、ありありと目に浮かぶようである。

011 題三省中ノ院壁二

題二門下省中諫院之壁二也。拾遺補闕ノ兩職掌二供奉諷諫ヲ。大事ハ廷爭シ、小事ハ封事。故ニ其直署曰三諫院ト。此詩乃漢二倦遊二之作。蓋公忠言不レ用ヲレ、悠悠不レ得レ意ヲ、無聊之餘、有ニ是作一也。此時岑參以ニ公ノ薦ヲ爲ニ補闕一。其詩嘆一不遇一、亦數數一矣。言路之塞可レ知也。此詩變格、不レ拘ニ聲律一。

(注1) 『大唐六典』巻八、門下省の条に「左補闕拾遺は、供奉諷諫、乘輿に扈從するを掌る。凡そ令を発し事を挙ぐるに、時に

便ならず、道に合せざる有れば、大なるは則ち廷議し、小なるは則ち上封す。若し賢良の下に遺滞し、忠孝の上に聞せざれば、則ち其の事状を条して、之を薦言す」と。

(注2) 邵傳『集解』に「此れ公、志を得ず、院壁に題す」と。

(注3) 至徳二載（七五六）六月十二日に左拾遺の裴薦らと連名で出された「補遺の為に岑参を薦むるの状」（詳註巻二十五）に、次のようにある。

宣議郎試大理評事撰監察御史賜緋魚袋岑参。右臣等、窃かに見るに、岑参は識度清遠、議論雅正にして、佳名蚤に立ち、時輩の仰ぐ所なり。今諫諍の路大いに開くも、献替の官未だ備はらず。恭して惟ふに近侍は、実に茂材に藉る。臣等謹んで閣門に詣り、状を奉り薦を陳べて以聞す。伏して進止を聴かん。

岑参の伝記や参考文献については、小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』（大修館、一九七五年）岑参の条（笈文生執筆）および松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（同上、一九八七年）『統校注唐詩解釈辞典（付）歴代詩』（同上、二〇〇一年）詩人小伝、岑参の条（いずれも増子和男執筆）参照。

(注4) 例えば、『唐詩選』巻三にも収める「左省の杜拾遺に寄す」詩に、

聯步趨丹陛 歩を聯ねて丹陛に趨り

分曹限紫微 曹を分かちて紫微に限らる

曉隨天仗入 曉には天仗に随ひて入り

暮惹御香歸 暮には御香を惹きて帰る

白髮悲花落 白髮 花の落つるを悲しみ

青雲羨鳥飛 青雲 鳥の飛ぶを羨む

聖朝無闕事 聖朝 闕事無し

自覺諫書稀 自ら覺ゆ諫書の稀なるを

とあり、同じく巻五にも収める「西掖省即事」に、

西掖重雲開曙輝 西掖の重雲 曙輝を開き

| | |
|---------|----------------------------------|
| 北山疎雨點朝衣 | 北山の疎雨 朝衣に点す |
| 千門柳色連青瑣 | 千門の柳色 青瑣に連なり |
| 三殿花香入紫微 | 三殿の花香 紫微に入る |
| 平明端笏陪鸞列 | 平明 笏を端 ^{ただ} して鸞列に陪し |
| 薄暮垂鞭信馬歸 | 薄暮 鞭を垂れて馬に信 ^{まか} せて帰る |
| 宮拙自悲頭白盡 | 宮拙くして自ら悲しむ頭の白尽 ^{まか} するを |
| 不如巖下偃荆扉 | 如かず巖下 荆扉に偃するに |

という。※假字、『唐詩選』は掩に作る。

なお、岑参の集については、寛保元年（一七四一）刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢詩集成唐詩第五輯』に影印を収む。また注釈書として陳鉄民・侯忠義校注『岑参集校注』（上海古籍出版社、一九八一年）、劉開揚箋註『岑参詩集編年箋註』（巴蜀書社、一九九五年）が刊行されている。

（注5） 南宋・胡仔『茗溪漁隱叢話』前集卷四十七に「茗溪漁隱曰く、古詩声律に拘せず、唐自り今に至る詩人皆然り。初めより声律を破棄するを待たず。詩に声律を破棄する、老杜自づから此の体有り」とし、この「省中の院壁に題す」詩ほか、「岳を望む」（評註卷六）、「江雨鄭典設を懷ふ有り」（評註卷十八）、「昼夢」（同上）、「愁、強ひて戯れに具体を為す」（同上）、「十二月一日」三首（評註卷十四）を例に挙げる。なお、杜甫の拗体七律について論じたものに、加藤國安「杜甫の『拗格七律』」（『日本中国学会報』第三十二集、一九八〇年）、金啓華「論杜甫的拗体七律」（『杜甫研究學刊』一九九八年第一期）があるが、後者は未見。

門下省内の諫院の壁に題するのである。拾遺・補闕の両職は、供奉諷諫を掌る。重大案件は朝廷で諫争し、小さな案件は封事する。さればその当直の部署を諫院という。この詩こそ倦遊を嘆ずる作だ。けだし公は忠言が用いられず、鬱々として意を得ないまま、無聊のあまりこの詩ができた。この時、岑参は公の推薦で補闕となったものの、その詩に不遇を嘆ずること、やはりしばしばである。意見具申の用途が塞がれていたことがわかる。この詩は変格で、声律に縛られていない。

掖垣竹埤梧十尋 洞門對^{シテ}雷^ニ常^ニ陰陰

※雷^ニシタ^リ

掖垣^ハ掖省^ハ之垣墻。埤^{注7}音皮、城上之埤^{注8}睨也。編^レ竹^ヲ爲^ニ儲胥^ト、施^ニ之^ヲ掖垣^{ノ上ニ}、若^ニ城埤^{ノ然}。故^ニ曰^ニ竹埤^ト。王褒^{注9}《山家》詩^ニ圍^レ竹^ヲ成^レ埤^ヲ、是竹埤^{ノ所}レ本^{ツク}也。八尺^ヲ曰^レ尋^ト。公送^ニ賈閣老^{注10}一詩^ニ西掖^ノ梧桐樹空^ク留^ム一院^ノ陰、則兩省其^ニ植^ニ梧桐^ヲ也。洞^ハ深^也。洞門^ハ謂^ニ門深^{シテ}如^レ洞^ノ也。一說^ニ謂^ニ重門^一也。雷^一一作^ルハ雪、誤也。下^ニ云落花遊絲乳燕春深^ト、安^ソ得^レ有^{コトヲ}雪耶。吳都^{注11}賦^ニ玉堂封^レ雷^ニ。說文^{注12}雷^ハ屋^ノ水流也。蓋牆陰洞門深^ト而梧桐^ノ大樹森^ニ鬱其傍^ニ、故^ニ院中常^ニ陰陰、殆畫欲^レ暗^{ラント}也。言外隱然^{トシテ}見^ニ不得^レ意^ヲ之人獨^ニ坐^{スルヲ}其中^一矣。

(注6) 錢注(卷十)は、〈竹埤〉を〈埤竹〉に作る。

(注7) 輯註(卷四)に埤字の下に「音皮」と注する。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注8) 顧宸『註解』に「竹埤は掖垣の上に竹檜を以て累ねて儲胥を為す。城上の埤睨の若きなり」と。これは、宇都宮遯庵の両著に引く。また釈大典『社律發揮』に「竹埤^ハ謂^ニ編^テ竹^ヲ爲^ニ儲胥^ヲ施^中之^ヲ掖垣^{ノ上ニ}也」と。儲胥は、防御のための柵。前漢・楊雄「長楊の賦」(『文選』卷九)に見える。埤睨は、ひめがき。

(注9) 北周・王褒(字は子淵、五一三?~五七六?)の「從弟祐の山家詩に和す」二首其二(『古詩紀』卷二二三、『漢魏六朝百三名家集』第九十八冊「王司空集」)に「衆林積爲籟、圉竹茂成埤」(衆林積みて籟を為し、圉竹茂りて埤を成す)と。これは、輯註に挙げる。宇都宮遯庵の増広本に輯註を引くが、竹字の下に茂字を脱す。東陽は増広本に拠ったのであろう。なお、王褒の伝記については、興膳宏編『六朝詩人傳』(原田直枝執筆)参照。

(注10) 「賈閣老の汝州に出ださるを送る」詩(詳注卷六、〇二〇四)。

西掖梧桐樹 西掖の梧桐樹

空留一院陰 空しく留む一院の陰

艱難歸故里 艱難 故里に帰り

去住損春心 去住 春心を損ふ

宮殿青門隔 宮殿 青門隔て

雲山紫邏深 雲山 紫邏深し

人生五馬貴 人生五馬貴し

莫受二毛侵 二毛の侵すを受くる莫かれ

(注11) 例えば、『大広益会玉篇』に「洞、又た深遠なり」と。

(注12) 邵宝『集註』卷二十二、宮室類に、この詩を載せ、「洞門は、門の相い当たることを謂ふ。洞、深なり」と。薛益『分類』卷一、省字も同じ。東陽は、この「門相い当たる」意で重門と表現したのであろうか。なお、『漢書』佞幸伝、董賢伝に「重殿洞門」の語が見え、顔師古の注に「門と門と相い当るを謂ふなり」と。『分類』は、宇都宮遯庵の増広本にも引く。

(注13) 東陽が底本とした邵傳『集解』は〈霰〉字を〈雪〉に作る。邵宝『集註』、薛益『分類』も同じ。輯註に「此の詩、雪に對すは、當に霰に對すに作るべし。下に鳴鳩乳燕落花遊糸と云ふ、雪有るに宜しからず」と。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも引く。

(注14) 西晋・左思「呉都の賦」(『文選』卷五)。輯註に挙げる。

(注15) 『說文解字』十一篇下。『輯註』に挙げる。〈霰〉は、雨樋。あまどけ

〈掖垣〉は、掖省の垣牆。〈埤〉、字音は皮。城壁の上の睥睨〈ひめがき〉である。竹を編んで儲胥とし、〈掖垣〉の上に施してあり、城埤のごとくである。それで〈竹埤〉という。王褒の「山家」詩に「竹を囲みて埤を成す」と。これが〈竹埤〉の基づくところである。八尺を〈尋〉という。公の「賈閣老を送る」詩に「西掖の梧桐樹、空しく留む一院の陰」とあることからすれば、中書・門下両省ともに梧桐を植えていたのである。〈洞〉は、深である。〈洞門〉は、門が奥深く洞のようであること。一説に重門をいう。〈霰〉、一に〈雪〉に作るのは誤りだ。下文に〈落花遊糸〉〈乳燕春深〉と云うのに、どうして雪などあろうか。「呉都の賦」に「玉堂霰に對す」と

あり、『説文』に「雷は、屋の水流なり」という。けだし牆陰・潤門は奥深く梧桐の大樹がその傍らに鬱蒼と茂っており、それゆえ院中は〈常に陰陰〉として、ほとんど昼でも暗いのであろう。そのなかに我が意を得ぬ人がぼつねんと坐しているのが言外に分かろうというものだ。

落花遊絲白日靜ナリ 鳴鳩乳燕青春深シ

鳥生レ^(注1)乳。燕乳ス^(注2)子ヲ、正ニ暮春之事。公在^(注3)二^(注4)院中ニ、無レ所^(注5)事^(注6)ヲ、只對^(注7)二^(注8)庭院ノ開景ニ、見^(注9)二^(注10)畫

永ク春深一、優遊^(注11)銷ス^(注12)日ヲ而已。公以^(注13)二^(注14)有^(注15)爲^(注16)之志ヲ、居^(注17)二^(注18)可^(注19)爲^(注20)之地ニ、而徒然閒散、悠悠涉^(注21)日ヲ、不^(注22)勝^(注23)

慙懼慨歎^(注24)一、便喚^(注25)二^(注26)起^(注27)下ノ四句ヲ。顧註^(注28)ニ云、對^(注29)二^(注30)畫靜ナル之境ニ、而憐^(注31)二^(注32)官ノ閑^(注33)ヲ、見^(注34)二^(注35)春深之景ヲ、而惜^(注36)二^(注37)時ノ遇^(注38)一、

故^(注39)二^(注40)下緊接^(注41)シテ云謬^(注42)通^(注43)籍違^(注44)二寸心一。后山詩話^(注45)ニ山谷云、樂天笙歌歸^(注46)二^(注47)院落ニ、燈火下^(注48)二^(注49)樓臺ヲ、非^(注50)富貴ノ語^(注51)一、

看^(注52)二^(注53)富貴^(注54)者耳。不^(注55)如^(注56)二^(注57)老杜ノ此聯一也。風月堂詩話^(注58)ニ晁季一云、老杜ノ此聯、雖^(注59)當^(注60)二^(注61)隆冬沍寒ノ時^(注62)一誦^(注63)レ之ヲ、便

覺^(注64)融和之氣生^(注65)二^(注66)于衣裾ニ、而韶光美景、宛然在^(注67)レ目ニ、動盪^(注68)人思^(注69)上。眞^(注70)幹^(注71)ニ元造^(注72)一妙語也。

(注16) 『説文解字』十二篇上に「人及び鳥の子を生むを乳と曰ふ。獸は産と曰ふ」と。

(注17) 顧宸『註解』に「鳴鳩羽を払うは仲春^(注18)為り、燕来りて子を乳するは暮春^(注19)為り、故に漸く深きなり」と。宇都宮遯庵の両著にも引く。

(注18) 顧宸『註解』に「公自ら嘆ずらく、為す可きの地に居り、為す可きの職有り、宜しく如何ぞ知を君に受くべき、乃ち一片の閑況を写し出す」と。

(注19) 顧宸『註解』に、(注18)に引いた箇所に続いて、「張が曰く、白日靜なるは素食^(注20)を慨^(注21)くなり。青春深しは時の邁^(注22)くを惜しむなり。故に下に緊く接して云ふ、謬^(注23)つて籍を通じ寸心に違ふと」と。宇都宮遯庵の両著にも引く。張は張絰、字は世文(一四八七―一五四三)のこと。明・正徳八年(一五二三)の挙人。『杜工部詩通』十六卷、『杜詩本義』四卷がある(大通書局刊『杜詩叢刊』に影印を収む)。食は食(餐)の缺誤。

(注20) 北宋・陳師道(字は無已、号は後山居士。一〇五三―一一〇一)撰。『後山詩話』は、度会末茂『杜律評叢』(卷一)に

も挙げる。白楽天云ふ「笙歌院落に帰し、燈火楼台を下る」、又た云ふ「帰り来たれば未だ笙歌を散ぜ放めず、画戟門前蠟燭紅なり」と。富貴の語に非ず、人の富貴を看る者なり。黄魯直い謂ふならく白楽天の「笙歌院落に帰し、燈火楼台を下る」と云ふは、杜子美の「落花遊糸白日静かなり、鳴鳩乳燕青春深し」と云ふに如かざるなり。

山谷は、北宋・黄庭堅（字は魯直。一〇四五―一一〇五）の号。白楽天の詩は「宴散す」（『白氏文集』卷五十五）および「夜婦」（同上卷二十）。なお、『文集』では門前を門前に作る。

（注21） 宋・朱弁（字は少章。一〇八五―一二四四）撰。全二卷。その卷下に、次のようにある。

季一曰く、韓退之云ふ、語妙元造を幹すと。老杜の落絮游糸白日静かに、鳴鳩乳燕青春深しの如きは、隆冬沍寒の時に当たると雖も之を誦せば、便ち融恰すなはの氣長裾に生じ、而して韶光美景、宛然目に在り、人思を動盪せしむるを覚ゆ。豈に是れ元造を幹し造化を奪はざらんやと。

季一は晁貫之（字は季一）のこと。韓愈（字は退之、七六八―八二四）の語というのは、孟郊（字は東野、七五一―八一四）との「城南聯句」に見える孟郊の句「大句玄造を幹す」のことであろう。なお、『風月堂詩話』は、度会末茂『杜律詳叢』（卷一）にも挙げる。

鳥が子を生むのを〈乳〉という。〈燕〉が子を〈乳〉するのは、暮春のことである。公は諫院の中にいても、職務に精励しようがなく、ただ庭の閑かな景色に向き合い、昼永く春深けるのを見て、ぶらぶらと日を過すごしてゐるのだ。公は実現したい志をもち、それが実現可能な地位に居りながら、いたづらに暇を持てあまし、悠悠うゆうと日を過すごしており、慚懼慨嘆にたえず、ただちに以下の四句を呼び起こしている。顧註に云う、「昼の静まりかえったありさまを前にして職務が暇なのを悲しみ、春深き景色を見て時の過ぎ行くのを惜しんでいる。それゆえ以下びたつと続けて〈謬まちがって籍を通ず〉〈寸心に違ふ〉というのだ」。『后山詩話』に「山谷云う、白楽天の『笙歌院落に帰る、燈火楼台を下る』は、富貴の語ではなく、富貴をみているにすぎないのだ。老杜のこの聯には及ばない」。『風月堂詩話』に「晁季一云う、老杜のこの聯は、冬の寒い時でもくちずさんでいると、とたんに融和の氣が衣裾に生じ、のどかな春の美しい景色がありありと目に浮かんで、心を動かすのを覚える。まことに造化を

廻らせる妙語である」。

腐儒衰晩謬^テ通^ス籍^ヲ 退食遲同違^ニ寸心^ニ

※衰晩…オヒボレテ 謬通籍…マチガフテメシイダサレ 遲回…タチモトホル

腐儒出^ニ漢書黥布傳^ニ。愚味ノ陋儒、喩^ニ壞敗無用之物^ニ。公自謂也。謬ハ謙辭也。如^レ蒙^カ人ノ取録^ヲ、謙シテ言^ニ

謬^テ取^テ謬^セ録^ト也。通^ス籍^ヲ謂^レ登^ラ仕籍^ニ。孟^ノ康^カ漢書ノ註^ニ通^ス籍^ヲ謂^レ禁門之中皆有^ニ名籍^ニ不^レ上^レ禁^セ出入^ヲ也。

公年四十六、始^テ拜^ニ拾遺^ニ、故^ニ曰^ニ衰晩^{通^ス籍^ヲ}。遲回猶^ニ躊躇^ノ。蓋^ニ心^ニ有^レ所^ニ思^ニ而足^レ不^レ進^マ也。寸心猶^ニ云^ニカ

微志^一也。違^ト者事與^レ志違、不^レ能^レ成^レ功^ヲ也。一聯貫^テ身^ヲ自謙^{シテ}而慷慨溢^ル乎言外^ニ。公爲^ニ諫臣^一必欲^レ致^レ

君^ヲ、而碌碌充^レ貲^ニ而已。所^ニ以不^レ勝^ニ慷慨^ニ也。顧^ニ註^ニ云、公或有^レ所^ニ欲^ニ奏^セ於上^ニ、故^ニ遲回^{シテ}不^レ忍^レ

退^ニ。然^{トモ}正^ニ恐^ハ奏亦無^シ益^ニ耳。故^ニ下接^{シテ}云無^ニ一字^ノ補^一。此亦或^ハ然^{ラン}也。

(注22) 『漢書』卷三十四、英布伝。「史記」は黥布に作る。邵傳『集注』、薛益『分類』なども『漢書』黥布伝とする。

(注23) 薛益『分類』に「腐とは壊敗して用無きなり」、宇都宮遯庵の詳説に「腐儒ハ公自言。壊敗^{シテ}無^レ用曰^ニ腐儒^ト。漢書黥布

伝ニアル字ナリ」と。

(注24) 022「至日興を遺る。北省の旧閣老・両院の故人に奉寄す」詩二首其一の邵傳『集解』に「人の取録を蒙るが如きを謙し

て謬取謬録と言ふなり」と。

(注25) 顧宸『註解』にこれを挙げる。但し、『漢書』卷七十四、魏相伝に顔師古は「通籍は禁門の中に名籍有り、出入を恣にす

るを謂ふ」と注するが、同書卷七十、陳湯伝の孟康注には「通籍は、禁止せず、出入するを得さしむるなり」というのみ

で、顧宸の引くような形では見あたらない。なお、『註解』は宇都宮遯庵の両著に挙げる。(注26)、(注27)も同様。

(注26) 顧宸『註解』に「公年四十六、始めて拾遺に拝す。故に衰晩と云ふ」と。

(注27) 顧宸『註解』に「公遲回して退くに忍びず。必ず上に奏せんと欲する所有り。正に奏も亦た益無からんことを恐る。徒

《腐儒》は、『漢書』黠布伝に出てくる。愚昧の陋儒。くずで役に立たないものに喩える。公自らの謂。《謬》は、謙遜の辞。人から取り立てられた場合に、謙遜して「謬って取らる」、「謬って録せらる」と言うのである。《籍を通ず》は、官僚名簿に登録されること。孟康の『漢書』注に「籍を通ずとは、禁門の中に名簿があつて、出入りを禁じられていないことである」と。公は年四十六にして、やつと拾遺を拝命した。それで《衰晩籍を通ず》という。《遅回》は、躊躇とほぼ同じ。けだし心に思うことがあつて足が進まないものである。《寸心》は、微志とほぼ同じ。《違ふ》とは、事、志と違い、功を成すことができないのである。この一聯は我が身を責め謙遜し、慷慨が言外に溢れている。公は諫臣となりきつと君をすすめまいらせようとしたものの、碌々と員数に充てられているに過ぎないのだ。慷慨にたえないわけである。顧註に云う、「公には御上に奏請しようと思うことがあつて、それで《遅回》して退出するに忍びない。さりながら恐らくは奏上してもやはり無益だろうと心配するのだ。それで以下続けて《一字の補無し》という」と。この場合もやはりそうかも知れない。

衰職曾無一字補^ラ許^{シテ}身愧^ヲ比^{セシ}雙南金^ニ

※曾：ミカラ

衰職^ハ謂^ニ帝業^ヲ。詩^ノ大雅^ニ衰職有^{レハ}闕^{ルコト}、維仲山甫補^ラ之^ヲ。天子ノ御衣ハ龍袞、故^ニ曰^ニ衰職^ト。補^ハ其闕^ヲ也。古詩^ニ美人贈^ニ我^ニ綠綺琴^ヲ、何^ヲ以報^シ之^ニ雙南金^ニ。荆陽之金尤所^ニ重^{ニスル}也。公平生自許^{スコト}甚重^シ、竊^ニ懷^ニ稷契之志^ヲ。今雖^レ備^{ルト}拾遺之貢^ニ、不^レ能^下上^ニ諫書^ヲ論^{シテ}政事^ヲ以^中輔^{コト}吾君之德^ヲ。宿志蹉跎^{トシテ}無^レ由^ニ報効^ニ。當初感^{レテ}恩^ニ許^シ身^ヲ、欲^三以効^ニサント國家之用^ヲ、故^ニ自重^{ニスルコト}比^ニ雙南金^ニ。以^レ今^ヲ思^ハ之^ヲ、則吾過^テ矣。即湓^{マチ}先^ニ朝露^ニ、亦何^ソ足^レ惜^ニ耶。追^テ悔^レ不^シ知^ニ其量^ヲ而竊^ニ自慙愧^{ニスル}也。公嘗^テ有^レ詩云致^{シテ}君^ヲ堯舜^ノ上^ニ、再^ヒ使^ニ風俗^ヲ淳^{カラ}。又云^ニ許^{シテ}身^ヲ一^ニ何^ソ愚^{ナル}、竊^ニ比^ス稷^ト與^ニ契^ト。其比^{セシ}雙南金^ニ者^ハ、亦唯爲^ニ國家^ノ自重^{セシ}也。

(注28) 『詩経』大雅・蒸民に「衰職か闕くわくること有れば、維いれ仲山甫之を補ふ」と。朱子の集伝に「衰職は、王織なり。天子龍衰、敢へて王闕を斥言せず、故に衰職闕有ればと曰ふ」。

(注29) 薛益『分類』に見える。宇都宮遯庵の増広本にも引く。「古詩」は、西晋・張載の「擬四愁詩」(『文選』卷三十)のこ
と。『文選』では、美人を佳人に作る。

(注30) 『詩経』魯頌・泮水に「懌おほたる彼の淮夷、来たりて其の琛を獻ず。元龜象齒、大に南金を賂おくる」とあり、毛伝に「南は荆揚を謂ふなり」と。揚州及び荊州で金を産したこと、『尚書』禹貢に見える。本文で「荊陽」とするのは誤り。東陽は、宇都宮遯庵の増広本に『分類』を挙げて荊陽に作るのを襲ったのであらう。

(注31) 稷契は、堯舜に仕えた二人の名臣。「京よ自り奉先県に赴く詠懷五百字」(詳註卷四、〇一二九)に「身を許して一に何ぞ愚おろなる、窃ひそに稷と契せつとに比す」と。

(注32) 梁・江淹「恨みの賦」(『文選』卷十六)に「朝露たつゆ湫しよくち至り、手を握りて何をか言はん」と。李善注は『漢書』蘇武伝に「李陵、蘇武に謂ひて曰く、人生は朝露の如し。何ぞ久しく自ら苦しむること此の如くなるや」とあるのを挙げる。

(注33) 「韋左丞丈に贈り奉る二十二韻」(詳註卷一、〇〇三五)。

(注34) 注(31) 参照。

《衰職》は、帝業のこと。『詩経』大雅に「衰職闕くること有れば、維いれ仲山甫之を補ふ」と。天子の御衣は龍衰であるから、《衰職》という。《補》は、その闕を補うこと。古詩に「美人我に緑綺琴を贈る、何を以て之に報いん双南金」と。荊陽「揚」産の金がとりわけ重んじられたのである。公は平生から自ら任ずることはなはだ重く、唐虞の名臣たる稷や契のごとくありたいとの志望を抱いていた。今、拾遺の員数には入っているものの、諫書を奉り政事を論じて吾が君の徳を輔佐することができず、かねて抱いていた志は実現できないまま虚しく時を過すごし、恩に報い功を效す手立てがない。当初は君恩に感じて《身を許し》、国家の役に立ちたいと念じており、それゆえ自らを《双南金》に比するほどに重んじていた。今にして思えば、自分は間違っていたことになる。たちまち朝露に先んじて消え失せても、どうして惜しむに足ろうか。後から自らの力量を知らずにいたのを

悔やみ、ひそかに慚愧するのである。公はかつて詩を作つて「君を堯舜の上に致して、再び風俗をして淳からしめん」といい、また「身を許して一に何ぞ愚なる、窃に稷と契とに比す」ともいう。〈双南金〉に比したのは、やはり国家のために自らを重んじたのである。

012 曲江二首（其一）

曲江在_二長安_一東南隅、社陵ノ西北五里_二。漢ノ武帝所_レ造_ル。其水曲折、有_レ似_二タルコト_一。蜀中ノ嘉陵江_一、故名_ニツク曲

江_一ト。開元中_{（注1）}疏鑿_{シテ}益_レ爲_二勝境_一ト。南有_二紫雲樓芙蓉苑_一。西有_二杏園慈恩寺_一。花卉環周、煙水明媚、都人

遊春、繁華_{（注2）}撲_レ地_一ヲ。故_ニ公亦數_レ遊_レ焉。此詩以_二仕不_レ得_レ志_一ヲ、有感_ニ於暮春_一而作。蓋強_テ自排_ス悶_ラ、

放浪_{（注3）}拚_{シテ}醉_ニ消_ニ其壘塊_一ヲ。楊升菴_{（注4）}所_レ謂_{シテ}耗_ニ壯心_一而遣_ニ餘年_一者。讀者以_レ意_ヲ逆_{ヘテ}志_{（注5）}可也。

（注1） 晩唐・康駢『劇談録』に「開元中疏鑿して、遂に勝境と爲る。其の東南に紫雲樓・芙蓉苑有り、其の西に杏園・慈恩寺

有り。花卉環周、煙水明媚。都人の遊賞、上巳・中和の二節に盛んなり」とあるのに基づく。なお、『劇談録』の記事は、朱鶴齡の輯注や顧宸『註解』に引く。宇都宮遷庵の増広本にも、これらを挙げる。

（注2） 東陽の『蒼瓊録』に「王勃勝王閣序ニ閭閻撲_レ地ト云ヘルハ、ヒシト建ツマリタル勢ヲ謂ヘリ。鮑照蕪城賦ニ塵閭撲_レ地、歌吹沸_レ天トアリ、是其本ヅク所ナリ。撲ハ挨也撃也ノ訓アリ、オシツケテ来ル意アリ。岑參詩ニ花撲_ニ玉紅_一春酒香、

バツバト飄来リテ酒氣ヲ压倒スル意アリ。張説ノ渭橋南渡花如_レ撲モ押合テ簇ガルヲ謂ナリ。然レバ閭閻撲_レ地モ地ヲ打押ヘル意ヨリシテ地面ヲ尽セル義トナル。市廛繁華ノ盛ナル押合テ透間ナキ様ナリ。沈佺期詩、行樂婦恒晩、香塵撲_レ地遙、杜牧詩、謳歌人撲_レ地、鶏犬樹連_レ天、白楽天詩、青苔撲_レ地連_ニ春雨_一、白浪掀_レ天尽_ニ日風_一、元稹詩、人烟撲_レ地桑柘稠ナド、スベテ地ヲ尽シテ押合ヘルナリ。満地ト云フヨリハ義重シ、圧地ト云フニ近シ。頗ル勢ヲ持チタル字面ナリ。李善文選註ニハ、揚子方言、撲、尽也。郭璞曰、今江東種_レ物皆生云_ニ撲地生_一トアリ、未ダ義ヲ尽サヌ解ナリ」と指摘。

なお、鮑照「蕪城賦」は『文選』卷十一。岑參の詩は「韋員外家花樹の歌」。張説は「聖製初めて秦川の路に入るに和し奉る寒食応制」詩。沈佺期は「洛陽道」詩。杜牧は「往年故府吳興公に随ひ夜、蕪湖口に泊す。今、官に赴き西去し、

再び蕪湖に宿す。感旧傷懷して因つて十六韻を成す」詩。*但し各本、歌を謠に作る。白樂天は「風雨晚泊」詩。元稹は「西涼伎」。

(注3) 〈拚〉は〈拚〉に同じ。唐代の俗語で、万事を放擲してそのことをなす意。拚醉は、ひたすら酔つ払う。014「曲江酒に對す」詩の詳解に「拚、俗に拚に作る。自ら放棄するなり」と。

(注4) 『世說新語』任誕篇に「王大(王忱)曰く、阮籍は胸中に罌塊あり、故に酒を須^{もち}ひて之を澆^{そそ}ぐ」と。

(注5) 楊升庵は、明・楊慎(字は用修、升庵は号。一四八八―一五五九)のこと。「壯心を耗して餘年を遣る」は、「重慶の大守劉嵩陽に答ふる書」(『升庵全集』卷六)に見える語。

(注6) 『孟子』万章上に「詩を説く者、文を以て意を害せず、辭を以て志を害せず、意を以て志を逆^{ひか}ふ、是れ之を得たりと爲す」(およそ詩を説くには、一つ一つの文字にとらわれて一句の意味をとり損ねてはいけなしい、また一句の意味にとらわれて作者の真意をとり損ねてはいけなしい。自分の心で作者の真意をよく汲み取つて説いてこそ、詩がわかるというものだ)とある。ここである「詩」とは、『詩経』の作品を指す。

〈曲江〉は、長安の東南隅にあつて、杜陵の西北五里のところにある。漢の武帝が造つたものである。その流れは曲折しており、蜀の嘉陵江に似ているところから、〈曲江〉と名づけられた。玄宗の開元年間、開鑿されてますます景勝の地となつた。南には紫雲樓や芙蓉苑があり、西には杏園や慈恩寺がある。花や木々がぐるりと周囲に植えられ、かすみ煙る水面は明媚で、春ともなれば都の人々が遊樂し、あたり一面押し合い圧し合い群がって賑わい榮える。されば、公もしばしば彼の地に遊んだのである。この詩は、仕官したものの我が意を得ず、暮春に感ずることがあつて作られた。けだし、強いて憂晴らしをしようと、あちこちをぶらぶらと歩き回り、酔つ払つて胸中のわだかまりを消そうとしたのであろう。楊升庵のいわゆる「壯心を耗して餘年を遣る」というものだ。読者は自分なりに作者の真意を斟酌してかまわない。

一片花飛^テ減^ニ卻^ス春^ヲ 風飄^{ニシテ}萬點^ヲ正^ニ愁^{シム}人^ヲ

※飄：フキトバス 愁：ナゲカセル

起句ハ爲レ客、次ノ句ハ是レ主。一片花飛且不可、而況^(注7)於^(注8)萬點^(注9)乎。通篇勸^レ酒^ヲ之辭。以^二惜^レ花^ヲ傷^ムレ^一春^ヲ起^ス之^ヲ、與^二岑參^カ韋員外家ノ花樹ノ歌^ニ同一趣向。起^シ得^テ突兀^(注9)、句法奇橫、大家ノ氣象、妙不^レ可^レ及。正^(注10)一^ニ作^レ更^ニ、似是^ニ而非。蓋此日之遊、適^レ值^二落花欲^レ盡^シト^ノ之候^ニ。狂風吹散、紛然大^ニ亂。安^ソ得^レ不^{コト}ヲ愁^{シメ}人^ヲ。正ノ字、當^ニ如^レ是^ノ觀^一、便見^二旨深^ヲ。愁字領^ニ全首^ノ詩神^(注11)。句句皆從^レ此生。註家或ハ引^二北豫^カ語^ヲ、僞^(注12)蘓^ノ杜撰也。

(注7) 宋末元初の方回(号は虚谷。一二二七―一三〇七)『瀛奎律髓』卷十、春日類に、この詩を載せ、その評に「第一句、第二句絶妙。一片花飛ぶ且つ不可なるに、況んや万点なるをや」という。ちなみに、『瀛奎律髓』には寛文十一年(一六七二)刊の和刻本がある。

(注8) 岑参の「韋員外家の花樹の歌」(『唐詩選』卷二所収)は、次の如くである。

| | | |
|---------|-------------------|--------------|
| 去年人到今年好 | 今年花似去年好 | 去年の花は去年に似て好し |
| 始知人老不如花 | 去年の人は今年に到りて老ゆ | |
| 可惜落花君莫掃 | 始めて知る 人老い花に如かざるを | |
| 君家兄弟不可當 | 惜しむ可し 落花 君掃ふこと莫かれ | |
| | 君が家の兄弟 当たる可からず | |

| | |
|---------|--------------------------------|
| 列卿御史尚書郎 | 列卿 御史 尚書郎 |
| 朝回花底恒曾客 | 朝より回 ^{かへ} りて花底 恒に客に会す |
| 花撲玉缸春酒香 | 花は玉缸を撲ちて春酒香し |

(注9) 『唐詩貫珠』(卷四十九、春の部)に「起こし得て突兀、旨深く句法縱横。大家の氣象、妙言ふ可からず」と。

なお、文学批評用語としての「氣象」については、南宋・嚴羽『滄浪詩話』に見え、『中国文明選 文学論集』(朝日新聞社刊、一九七二年)に、荒井健氏による解説がある。

〔注10〕 例えば、先に挙げた『瀛奎律髓』では、〈風〉字を〈花〉に作り、〈正〉字を〈更〉に作る。

〔注11〕 『夜航詩話』 卷一に、「七律の首句は宜しく突然として起り、勢い遏む可からざるべし。工なり難き所以なり。然れども此れ猶ほ能くす可し。第二句の好は尤も得難し。蓋し是の句全首の詩神を領し、句句皆此れ従り生ず。一篇勝を争ふ、此に在り。画竜点睛の要処にして、其の力を用ふる所、人をして覺らざらしむるに在り。尤も難き所以なり」と。

〔注12〕 例えば、宋・徐居仁編、黄鶴補註『集千家註分類杜工部詩』卷十一に「蘇曰く、丘豫、庭中の落花を見て友人に謂ひて曰く、此の一片を飛ばすさへ青春の色を滅却す。行楽を趁はずんば、復た何れの時を待たんや、と」。なお、『集千家註分類杜工部詩』には、五山版（永和二年「一三六七」覆刻）がある。

〔注13〕 033「裴迪蜀州の東亭に登って客を送り早梅に逢って相憶うて寄せらるるを和す」詩の詳解に次のように云う。

偽蘇とは、南宋の時、閩越の鄭昂といふ者、東坡（蘇軾のこと）の名を仮りて老杜事實一編を作る。其の引く所の事皆根拠無し。反って杜甫の見句を用ひて増減して文を為って託して古人の語と為す。之を偽蘇註と謂ふ。今、千家註に蘇曰くといふ者は是れなり。朱子文集・洪容斎隨筆に詳らかに其の妄を辨す。

『夜航詩話』 卷四にも偽蘇注に言及する箇所がある。なお、偽蘇注について考究した論文に、程千帆「杜詩偽書考」（『古詩考索』所収、上海古籍出版社、一九八四年）、莫砺鋒「杜詩《偽蘇注》研究」（『文学遺産』一九九九年第一期）がある。

起句は客で、次の句が主である。〈一片花飛び〉てさえよくないのに、ましてや〈万点〉であればなおさらのことだ。一篇全体が酒を勧める詞であるが、花を惜しみ春を傷むことから説き起こしているのは、岑参の「韋員外家の花樹の歌」と同じ趣向である。始まり方は唐突で、句法が奇抜であり、大家の気象は、その妙なること及びもつかない。〈正〉字を一に〈更〉に作るのは、よさそうに見えるが誤りだ。けだし、この日、曲江に遊んで、おりしも落花が〈尽きんと欲する〉のに出逢った。狂風が花びらを吹き散らし、はらはらと大いに舞い散っている。どうして〈人を愁〉えさせずにおられようか。〈正〉字は、当然このように見なければならず、それでこそただちに深い味わいが分かる。〈愁〉の字は、一首全体の精神や気分を支配しており、一句一句皆これから生じている。注釈家のなかには丘豫の言とやらを引く者があるが、これは偽蘇註の杜撰なものである。

且看^ヨ欲^{スル}盡^{ント}花^ル經^ル眼^ヲ 莫^レ厭^{コト}傷^ルコト多^キ酒^ヲ入^レ臂^ニ

※経眼…ミスく 傷…アタル 入唇…ツギコム

上二下五ノ句法。始言^二一片^一ヲ、次言^二萬點^一ヲ、終言^レ欲^ス盡^{ント}。三句相承^テ由^レ淺^ニ而入^レ深^ニ也。^(注14) 經^ハ眼^ニ言^二空中之

花^ヲ瞥然過去^ヲ。此緊^{シク}承^レ上^ヲ。卽風所^ノ飄^ス者、非^レ言^二在^レ樹^ニ殘花^一也。聊嘗^ル日^レ沾^{スト}唇^ヲ、則入^レ唇^ニ言^レ

灌^ク也。蓋一片花飛、雖未^三必^{シモ}足^二深^ク惜^ム一^ニ、而傷^レ春之情、已^ニ覺^レ減^{スル}風光^ヲ矣。何況今日多^レ風、萬

點爭飄^リ、正^ニ爾愁^{シム}人^ヲ、感可^レ勝^{ンヤ}耶。須^レ看^レ欲^ス盡之花、過^レ眼^ニ便空^シ。當^テ此無聊^ニ、第宜^ニ痛飲^ス。豈

可^ン以^二酒之傷^{コト}多^一ヲ、厭^テ而不^レ入^レ唇^ニ哉。公志不^レ行、拚醉^{シテ}遣^レ愁^ヲ。非^下復比^{スル}雙南金^ニ之身^ニ也。^(注15) 二

句看^下他^ノ用^二虛字^一之妙^ヲ。語勢圓轉、如^二珠走^レ盤^一。然^{トモ}學者好^テ放^レ此^ニ、則鄰女^ノ效顰^{ナリ}矣。^(注16)

(注14) 明・徐師曾『文体明弁』卷十五にこの詩を載せ、「始めに一片と言ひ、次に万点と言ひ、終に尽きんと欲すと言ふ。三句

相承けて浅より深に入るなり」と。

(注15) 011「省中の院壁に題す」詩に「袞職曾て一字の補ふ無く、身を許して愧づらくは双南金に比せし」と言うのに基づく。

(注16) 本来、「他」は軽く添えられただけで意味はない。唐代の口語的表現。但し江戸時代には、他のゝを見ると訓じる。例え

ば、『三体詩』巻一や『唐詩選』巻七に載せる王維「盧員外象と崔処士興宗の林亭を過る」詩の「白眼看他世上人」などが、それ。

(注17) 自分の醜さを顧みず、人の真似をすること。学ぶことのよくない喩え。古の美女、西施が胸を病んで眉を顰めた姿を美

しいと思った隣りの醜女がまねた故事(『莊子』天運篇)による。胡仔『茗溪漁隱叢話』前集卷九、杜少陵四に引く北宋・范温の『詩眼(潜溪詩眼)』に「今人の詩を学ぶ、多く杜甫の平慢處を得。乃ち隣女の效顰する者なり」とある。

なお、『夜航詩話』巻六には「杜詩に且つ看よ尽きんと欲するの花眼を経るを、厭ふ莫かれ傷ること多き酒唇に入るを、と。虚字幹旋の妙、円転として珠の盤に走るが如し。然れども学者好んで此に倣へば、則ち破碎に勝へず。蓋し詩の虚字を用ふるは、猶ほ舍を構へて梶子を用ふるがごときなり。若し善く用ひざれば、動揺して頼れんと欲す。豈に浪りに用ふ可けんや」という。

(七言の句は、ふつう上四字、下三字で切れるが、ここは) 上二字下五字の句法。始めに〈一片〉と言ひ、次に〈万点〉と言ひ、終りに〈尽きんと欲す〉と言う。三句は相承け、だんだん深まってゆくのである。〈眼を経る〉は、空中に舞う〈花〉がちらちらと目の前を過ぎ去ることを言う。これはびたつと上を承けている。〈風の飄〉すものにほかならず、樹に残っている花を言うのではない。ちよつと嘗めるのは、唇を沾す^{うるお}という。されば〈唇に入る〉とは、そそぎ込むことを言うのである。けだし、〈一片花飛ぶ〉のはさほど深く惜しむに足りないとはいへ、春を傷む心情からすれば風光を減ずることのように感じられるのである。ましてや今日は風つく、〈万点〉争つて〈飄〉り、まさにこのように〈人を愁〉えさせる、まったく感に堪えない。よくよく見ておかねばならぬのは、〈尽きんと欲する花〉は、眼前を過ぎればたちまちなくなってしまうことだ。このどうにもやるせない時には、ただ思い切り飲むのがよい。どうして〈酒〉が〈傷ること多〉く体によくないからといって、〈厭〉いて〈唇に入〉れずにおれようか。公は志が実行されず、ひたすら酔つ払つて愁を忘れようとしたのである。もはやかつての〈双南金〉に喩えた身の上ではない。この二句は、虚字の使い方の妙を看よ。語勢は円滑で、盤の上を真珠が転がるようだ。されど初学の者が好んでこれを真似すれば、隣家の醜女が西施の譽みに倣うようなみつももないものになってしまう。

江上ノ小堂集^ニ翡翠^一 苑邊^(注18)ノ高塚^ニ臥^ス麒麟^一

※巢^ニスミカトナル 臥^ニタラレテアリ

江上ノ小堂^ハ、蓋貴遊所^ノ設^ル亭館。處處傍^テ岸^ニ有^レ之也。巢^ニ翡翠^一、以^ニ其荒涼無^レ人、竟^ニ視^テ爲^ニ棲息之所^一也。苑^ハ卽芙蓉苑。塚知隴^(注19)反。高塚^ハ尊貴^ノ所^レ葬。臥^ハ傾倒也。秦漢ノ間、公卿ノ墓以^ニ石麒麟^一鎮^ス之^ヲ。蓋唐時亦或^ハ設^レ此^ヲ也。上半首已^ニ暢^ニ寫^ス傷^{コトヲ}春^ヲ。於^レ是^ニ更^ニ感^ス人世無^レ常^ヲ。曲江之境、風景佳麗、遊宴繁華、

祿山^カ亂後、頽敗未^レ修^セ、無^二復向時之勝^一。空堂無^{シテ}人而水鳥來巢^ヒ、荒塚無^{シテ}主而石獸毀臥^ス。皆昔日滿眼^ノ繁盛、今乃淒涼如^レ此^ノ。其傷^レ目^ヲ愴^レ情^ヲ、不^二啻^一落花欲^ノ盡^シ也。翡翠麒麟、眞假取^レ對^フ。

(注18) 錢注(卷十)は、〈苑〉字を〈花〉に作り、「一に苑に作る」と。

(注19) 反切による字音表示。例えば、『字彙』に「知隴の切。音腫。平らなるを墓と曰ひ、封ずるを塚と曰ひ、高きを墳と曰ふ」と。

(注20) 『唐詩貫珠』に見える言い方。(注26) 参照。

(注21) 『文体明弁』に「翡翠麒麟、眞仮相對す」と。翡翠は本物「真」であるのに対し、麒麟は石像で本物ではないから仮である。(注27) 参照。

〈江上の小堂〉は、けだし高官や貴族が設けた亭館であろう。ここかしこと岸にそって至る所にある。〈翡翠巢くふ〉は、それが荒れはて寂れ人氣^{ひとけ}がないので、とうとう住みかとみなしたのである。〈苑〉は、芙蓉苑のこと。〈塚〉は、知隴の反。〈高塚〉は、尊貴なお方が葬られている場所。〈臥〉は、傾き倒れることである。秦漢の頃、公卿の墓には麒麟の石像を置いて鎮めとした。けだし唐の時代もやはりこれを設けることがあったのだろう。前半四句では行く春を傷む心情をあますところなく述べ、ここではさらに人世の常無きことを感じている。曲江のあたりは、風景が美しく、遊宴がくりひろげられる繁華な場所であったが、安祿山の乱以後は、すっかり荒れ廢れて修復もされず、もはや以前のすばらしさはない。空堂には人がおらず水鳥が巢を作り、荒塚には主^{ぬし}なく石獸が毀たれ倒れたままで、どこもついでこの間までは、見渡すかぎり繁榮を極めていたのに、今ではかくも淒涼としている。目を傷め心を悲しませるのは、ただ落花が〈尽きんと欲する〉ためだけではないのだ。〈翡翠〉と〈麒麟〉は、眞仮対となっている。

細^ニ推^ハ物理^一須^ニ行樂^ス 何^ソ用^シ浮名^ハ絆^ニ此身^一

※細推：ツラ／＼カンガフ 行樂：ユサン 絆：ツナガルハ

推者以^レ此^ラ料^ル彼^ヲ之^ヲ謂^フ。行樂^ハ遊觀^{シテ}爲^レ樂^也也。漢書楊惲傳^(注23)、人生行樂^{セン}耳。須^ニ富貴^ヲ何^ノ時^ゾ。浮名^ハ

虚譽也。謂^下非^ニ其才^ニ而謬^テ忝^ラ祿^也也。絆^ハ馬繫也。此緊承^上二句^ヲ、恍然大悟^シ、信^ニ浮名之眞^ニ

無用^一、而悲^ム人生區區^{トシテ}困^ム於塵俗中^ニ。夫眼前見^下空堂之棲^ニ野鳥^ヲ、荒塚之倒^中石獸^上、人世榮

枯代謝、其不^レ常^{ナラ}皆然^リ。富貴權力、豈足^シ恃^ム耶。故^ニ詳^ニ推^ハ此理^ヲ、則惟須^ニ及時^ニ行樂^シ酣飲^{シテ}忘^レ

憂^ヲ而已。何^ソ可^下爲^ニ虚名^ノ所牽^{而以}官爵^ヲ羈^ニ絆^一。此身^一爲^上乎。蓋亦玩^レ世^之辭、出^ニ於無聊之餘^ニ、

不^レ得^レ已^{コトヲ}耳。房相公瑄陳濤斜^之敗、賀蘭進明讒^ニ於肅宗^ニ。公惜^ニ其賢^一上疏^{シテ}救^レ之^ヲ。肅宗大^ニ怒、

殆^ニ陷^ニ於危^ニ。公自^レ是悠悠不^レ得意^ヲ。此蓋其時ノ作也。

(注22) 基づくところあるのか、不明。

(注23) 『漢書』卷六十六、楊敞伝附。なお、「孫会宗に報ずる書」として『文選』卷四十一にも収録。

(注24) 例えば、『字彙』に「絆、博漫の切。音は半。馬繫也」と。

(注25) 顧宸『註解』に「公、細かに推す中從^リ、恍然として大悟す。浮名の真に無用なることを信じ、亦た惟だ酒を飲みて行樂するのみ」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。

(注26) 『唐詩貫珠』に「上半首已に春を傷むことを暢写す。榮枯代謝に感悟する所以。華堂の野鳥を巢くはせ高塚の石麟を倒臥するを見れば、人世の廢興皆然り」と。

(注27) この一節、「何ぞ虚名の為に牽かれて官爵を以て此の身を羈絆することを為さんや」と訓ずるが、文末の「為乎」は、反問を強調する語気を示す助字。例えば、「漁父の辞」の「何故深思高举、自令放為」の「為」も同じ。清・王引之

(二七六六〜一八三四)『経伝釈詞』に指摘。

(注28) 玩世は、一切の世事を輕視すること。『漢書』東方朔伝賛に「隱に依つて世を玩ぶ」と。

(注29) 房瑄の陳濤斜での敗戦は、肅宗の至徳元載(七五七)十月のこと。賀蘭進明が房瑄を讒言したことについては、『旧唐書』卷一一一、房瑄伝に「会たま北海太守賀蘭進明、河南自り至り、詔して南海太守を授け、御史大夫を摂せしめ、嶺南

節度使に充つ。中謝す。肅宗之に謂ひて曰く、朕処分して房琯をして卿に正大夫を与へしむるに、何為れぞ損なるや、と。進明対へて曰く、琯、臣と隙有り、と。上以て然りと為す。進明因つて奏して曰く、(中略) 上、是れ由り琯を惡む」と。また宋・計有功『唐詩紀事』卷十七にも、「肅宗の時、進明、北海太守と為り、行在に詣る。上、房琯に命じて進明を以て南海太守兼御史大夫・嶺南節度使と為さしむ。琯、以て撰御史大夫と為す。進明、入りて謝す。遂に之を讃す。上、是れ由り琯を疏んず」とある。ちなみに、(中謝)は任官の命を受けた時、宮中に入つてその御礼を言上すること。(撰)は代行。(処分)は適宜処置すること。

(注30) 杜甫が房琯を弁護して、肅宗の怒りに触れ、三司に推問されたことをいう。「詩聖杜文貞公伝」参照。

《推》は、こちらでもつてあちらをはかる意味。《行楽》は、遊観して楽しむこと。『漢書』楊惲伝に「人生行楽せんのみ。富貴を須^またんは何れの時ぞ」とある。《浮名》は、実体が伴わない虚誉である。その任にあたる才がないのに俸禄をもらっていることである。《絆》は、馬の足をつなぐつな。ここは上二句をびたつと承け、はつと気づいて、《浮名》がまことに無用のものであると信じるようになり、人と生まれてこせこせと塵俗のなかで困しむのを悲しんでいる。そもそも、人氣のない堂には野鳥が棲みつき、荒れはてた塚では石獸が倒れているのを眼前に見れば、人の世の榮枯移り変りは、その常ならざること、すべてがそうである。富貴や權力は、いったい恃^{たの}むに足りようか。されば、つぶさにこの道理を推せば、ただ今のうちに《行楽》し存分に酒を飲み憂^{うれ}を忘れねばならぬ。どうして虚名に引つ張られ官爵でこの身をがんじがらめに縛るようなまねができれば。けだし、これもやはり世事を軽んじた詞だが、無聊のあまり吐かれたもので、やむにやまれずどうしようもないのだ。宰相の房琯が陳濤斜で敗れ、賀蘭進明が肅宗に讒言した。公はその賢明なるを惜しみ意見書を上申して救おうとしたが、肅宗は激怒して、あやうく危難に瀕しかけた。公はこれ以後、鬱々として心樂しまず官界で意を得なくなつた。これは、けだしその時の作であらう。

朝^{ヨリ}同^{シテ}日^ニ典^{シテ}春^ニ衣^ヲ 毎^ニ日^ニ江^ニ頭^ニ盡^{シテ}醉^ヲ歸^ル

※典：シチニオク 尽醉：ノミキル

以^レ物^ヲ質^ス金^ニ謂^ニ之^ヲ典^ト。^(注1)時已^ニ春^ニ暖^ニ、故^ニ得^レ典^{コトヲ}衣^ヲ也。見^ニ貧^ニ窶^ニ甚^ク亦^レ嗜^{コトヲ}酒^ヲ甚^ク。公家^ニ少^ニ陵^ニ、與^ニ曲^ニ江^ニ近^シ。故^ニ退^ニ朝^ニ之^ニ暇^ニ、以^ニ典^ニ衣^ヲ之^ニ錢^ヲ、毎^ニ日^ニ江^ニ頭^ニ玩^ニ春^ヲ、酩^ニ酩^ニ遣^テ興^ヲ而^レ歸^ル。蓋^ニ春^ニ已^ニ欲^ニ暮^ニ、玩^ニ花^ヲ暫^ニ時^ニ之^ニ事^ニ、急^ニ宜^ニ相^ニ賞^ニ。^(注2)興不^ニ自^ニ禁^ニ、所^ニ以^ニ典^ニ衣^ヲ往^ニ遊^ニ。此直^ニ承^ニ前^ニ首^ニ須^ニ行^ニ樂^ニ來^ニ、醉^ニ遊^ニ以^ニ慰^ニ無^ニ聊^ニ。出^ニ於^ニ不^ニ得^ニ已^ニ。^(注3)耳。

(注1) 『而庵説唐詩』(卷十八)に見える。

(注2) 『唐詩貫珠』に「言ふところは風光水の如く流転し、暫時の事、相違ふ可からず。急に宜しく相賞すべきなり」と。

(注3) 『唐詩貫珠』に「前首の須らく行樂すべしより承け下す」と。

品物を質入して金銭を借りることを〈典〉という。季節はもうすっかり春となり暖かくなっているので、衣服を質入できるのである。その窮乏ぶりが甚だしいのと同時に酒を好むことが甚だしいのを表わしている。公は少陵に居住しており、〈曲江〉とは近い。だから朝廷から退出して暇になると、衣服を質入した錢で、毎日、〈江頭〉で春景色を愛で、酩酊し憂晴らしをしてから帰るのだ。けだし、春はすでに過ぎんとし、〈花〉を愛でるのは後わずかのことなれば、急ぎ賞玩せねばならず、内に起くる感情を押さえきれずに、衣服を質入して遊びに行くわけだ。これは前首の「須らく行樂すべし」を直接承け、酔遊して無聊を慰めているのであって、やむにやまれぬどうしようもない気持ちから出たことなのだ。

酒債尋常行^ク處^ニ有^ニ 人生七十古來稀

※行處：ユクサキ〈 古來：イマハカリカハ

債音酒、賒^テ物^ヲ未^レ償^レ曰^レ債^{（注4）}。吳志^{（注5）}孫權ノ叔濟嗜^レ酒不^レ治^二生^一產^ヲ。常^ニ欠^二人^一ノ酒^{（注6）}。人皆笑^レ之^ヲ。濟恰

然^{トシテ}自若^{タリ}。謂^テ人曰、尋常行坐ノ處、欠^二人^一ノ酒^{（注7）}。欲^テ貨^テ此^{（注8）}縑袍^一償^上之^ヲ。尋常^ハ謂^二平^一生^ヲ也。本見^二

賈誼長沙ノ賦^{（注9）}。八尺^ヲ曰^レ尋^ト、倍^レ尋曰^レ常^ト。見^レ非^ニ奇特^一（注10）。因^テ爲^二平^一生^ノ之^ヲ謂^ト。本度ノ名。故^ニ以^二對^ス七

十^一。此與^二起^二二句^一一氣^一說^下ス。不^レ唯典^{スル}衣^ヲ而已^{ナラ}、平常遊行之處、酒債往^ニ往^ニ而^レ有^{（注11）}。抑^{（注12）}不^レ亦甚^一

乎。正^ニ以^二人^一生七十古來希^一有^{コト}、不^レ可^レ不^レ三^レ及^テ時^ニ行樂^{シテ}以^二慰^二餘年^一耳。亦暗^ニ照^二應^二前首^一高塚麒麟^{（注13）}、

此則直^ニ就^レ身^ニ而^レ言、不^レ姐^レ翅^レ咄^レ咄^レ逼^レ人^{（注14）}也。

（注4） 基づくところがあるのか、不明。なお、『漢書』卷八十、淮陽王劉欽伝の顔師古注に「責は、人に財物を仮貸して未だ償

はざる者なり。責、音は側解の反」とある。責は、債の古字。

（注5） 宇都宮遯庵の詳説に引く清・張遠『杜詩会粹』（巻五）に挙げるが（但し、叔を姪に、貸を貰に作る）、『三国志』吳志

には見えず、仇兆鰲は「吳志を考ふるに、初めより此の事無し」と指摘する（詳注巻六）。なお、この孫済の話は、もとは

『分門集註杜工部詩』（巻三）に載せる北宋・王洙（字は原叔、九九七―一〇五七）に仮託したいわゆる偽王洙注に見え、

宋・胡理撰『蒼梧雜志』（『說郛』所収）酒債の条にも載せられている。偽王洙注のことは、012「曲江」二首其一の（注13）

に挙げた程千帆および莫砺鋒論文参照。

（注6） 『漢書』卷四十八、賈誼伝。但し、「長沙の賦」という題名ではない。『文選』巻六十にも「屈原を弔ふ文」として収録。

『漢書』応劭の注に「八尺を尋と曰ひ、尋に倍するを常と曰ふ」と。

（注7） 『而庵說唐詩』に「八尺を尋と曰ひ、尋に倍するを常と曰ふ、奇特に非ざるを見^あはす」と。

（注8） 『唐詩貫珠』に「第四も亦た高塚麒麟の処と照応するなり」と。

（注9） 「咄咄人に逼る」は『世說新語』排調篇に見える殷仲堪の言葉。痛い所を突いてくる、の意。

（債）の字音は酒^{さい}。品物を付けて買ってまだ代金を支払っていないのを（債）という。『吳志』に「孫權の叔父の

孫済は酒好きで生業に励まず、いつも他人から酒代を借りていた。人に笑われても、にこにこして平気な風で

あった。人には、常日頃行く先々で酒代を借りているから、このどてらを売って支払いいたいと思う、と言って

いた」とある。〈尋常〉は平生をいう。もとは賈誼の「長沙の賦」に見え、八尺を〈尋〉といい、〈尋〉の倍を〈常〉という。格別変わったことではないのを表わし、それで平生の意味になった。本来は長さの単位であるので、〈七十〉の対偶表現となっている。これと初めの二句とは一氣に言い下している。ただ衣服を質入するばかりではなく、日頃遊びにゆく先々に、酒代の付けがここかしこにあるのだ。それにしてもまあ何ともひどいものではないか。まさしく〈人生七十〉まで達した者は昔からめつたにいなかったのを理由にして、今のうちにせいぜい遊んで残りの人生、心慰めようとするのだ。ここも同じく前の詩の〈高塚麒麟〉と暗に照応しているが、この場合はじかに自分自身について言っており、ただぐさ々と人の痛い所を突いてくるだけではないのである。

穿花 蛺蝶深深 見 點スル水ニ蜻蜒款款トテ飛

※穿：クバル 深深：ミヘツガクレニ 款款：ユタ／＼ト

穿花言^下翩翩穿^二花際^一而往來^上スルヲ。深深トシテ見ハ言ニ隱見^一スルヲ。欸欸ハ緩ク飛貌^{注10}。時時乍低テ掠^テ水ヲ而欸欸トシテ

嬉翔^ス。彼ノ其微物皆優遊得^二其所^一ヲ。而大丈夫處ル世ニ、宦況局促、悶悶涉^レ日ヲ、獨何ノ心哉。無限感慨在^二

言表^ニ矣。凡因^テ物ニ寓スル意ヲ、非^レ下^ニ深^ニ於^二詩^一者^上不^レ能^レ識^{コト}其趣^一耳。程伊川嘗^テ舉^ニ此聯^一詆^レ之^ヲ曰、如^キ此ノ

間言語道^出シテ做^ニ甚^{ナニ}。與^二吹皺^ム一池^一春水^ニ干^ニ卿^一何事^ニ同一沒趣人、誠^ニ面貌可^レ憎哉^一。石林詩話^{注13}ニ云、杜

詩緣^レ情^ニ體^ス物^ヲ、自有^二天然^一工巧^一。深深ノ字若シ無^ハ點^ノ字^一、欸欸ノ字若シ無^ハ點^ノ字^一、皆無^ニ以^レ見^{コト}其精

微^一。然^{トモ}讀^テ之^ヲ渾然全^ク似^レ未^ニ嘗^一用^レ力^ヲ。此所^ニ以^レ不^レ礙^ニ其氣格^一ノ超勝^ヲ、使^ハ晚唐^ノ諸子^ニ爲^レ之^ヲ、便

當^レ入^下魚躍^ニ練波^ニ拋^ニ玉尺^一、鶯穿^ニ絲柳^一織^ニ金梭^一之體^上矣。

(注10) 顧宸『註解』に見える。字都宮遯庵の両著にも引く。

(注11) 程伊川は、北宋・程頤(一〇三三―一一〇七)のこと。伊川先生とよばれ、明道先生と称せられた兄の程顥(一〇三二―

一〇八五)と、あわせて二程子という。ここに挙げる伊川の言葉は、『二程全書』卷十九や『二程先生類語』卷七に見え

る。ちなみに、後者には明暦三年（一六五五）の、また前者には寛文十年（一六七〇）以前に刊行された和刻本がある。

なお、『夜航詩話』巻四にも「程伊川云ふ、某、素より詩を作らず。亦た是れ禁止して作らざるに非ず。但だ此の閑言語を為すを欲せず。且つ如今詩を能くすと称するは、杜甫に如くは無し。花を穿つ蛺蝶深深として見へ、水に点する蜻蛉款款として飛ぶと云ふが如きは、此の如き閑言語、道ひ出して甚々做すや。某、曾て詩を作らざる所以なり」と。此れ吹き皺む一池の春水、卿が何事に干かると同一の没趣人、頭巾の氣極まれり」とあり、こと同様の指摘。そして以下続けて「朱子は則ち然らず」として、朱熹（一一三〇―一二〇〇）が詩を愛好し、その効用を認めていた具体例を幾つか挙げ、「真に伊川と氷炭なり」という。「頭巾の氣」については、『蒼瓊録』に「道学家ヲ頭巾氣ト言ハ俗ニシヤラクサイト言フコトナリ。モノくシゲニ子細ラシキヲ謂フナリ」云々とあるのを参照。

〔注12〕 「吹き皺む一池の春水」は五代・南唐、馮延巳（約九〇三―九六〇）「謁金門」詞の一節。宋・馬令『南唐書』馮延巳伝に「元帝嘗て延巳に戯れて曰く、吹き皺む一池の春水、卿の何事に干す」とある。

〔注13〕 韓愈の「窮を送る文」（『昌黎先生集』巻三十六）に「凡そ吾をして面目憎む可く、語言味無からしむる所以の者は、皆子が志なり」と。

〔注14〕 南宋・葉夢得（一〇七七―一一四八）『石林詩話』巻下。なお、『苕溪漁隱叢話』前集巻四にも、これを挙げ、『辟疆園杜律註解』には、葉夢得詩話として「深深の字若し穿字無く」云々以下を引く。

〔注15〕 西晋・陸機（二六―一三〇三）「文の賦」（『文選』巻十七）に「詩は情に縁つて綺麗、賦は物を体して瀏亮」とある。

〔注16〕 この句、何に見えるか不明。なお、宋・朱淑真的「春日即時」詩の頸聯に「藻を躍す白魚玉尺を翻し、林を穿つ黄鳥金梭を渡る」の句あり、南宋・鄭元佐の注に「天宝遺事に載せし古詩に、鶯糸柳を穿ち金梭を擲つ」というが、『天宝遺事』には見えない。

〈花を穿つ〉は、ひらひらと花のあたりを出入りすることを言う。〈深深として見へ〉は、見え隠れすることを言う。〈款款〉は、ゆったりと飛ぶさま。時々ちらつと水面を掠めてはゆったりと楽しげに飛んでいる。あれこれの微細な生き物がのんびりとそれぞれ思い通りにしているのに、大丈夫たる一人前の男が世にあって、官界ではゆきづまり、悶々として日を過ごしている。いったいどんな心持ちだろうか。無限の感慨が言葉の上にあらわ

れている。すべて外界の事物に託けてそこに意を寓しているのは、詩に造詣が深い者でなくては、その趣旨を理解できないのだ。程伊川がかつてこの詩を取り上げ、「このような下らぬことを言つて何になるのか」と譏つたが、「吹き皺む一池の春水」の句について、それがそなたと何の關係があるのかと質したのと、全く同じく詩の興趣を解することの出来ない野暮な人間で、その面つきたるや憎たらしい。『石林詩話』に云う、「杜甫の詩は情をもとにして万物をうつし出し、おのずと天然の巧みさがある。《深深》の字にもし《穿》の字がなく、《款款》の字にもし《点》の字がなかったら、いずれもその精微さを見ることができない。されど詩を読むと渾然としており、全く力を用いていないかのようなうだ。これは、技巧がそのなみなみならぬ氣韻風格を妨げていないためである。晩唐の詩人達に作らせれば、ただちに『魚練波に躍つて玉尺を抛ち、鶯絲柳を穿つて金梭を織る』といったふうになつてしまふ」。

傳語風光共流轉 暫時相賞莫相違^{コト}

※流轉：ズル^一く

傳語管^{（注17）}到結尾^ニ。此在^ニ江上^ニ所感^{スル}、故用^ニ流轉^ノ字^ヲ。承^ニ人生ノ句^ヲ來、故^ニ曰^レ其^ニト。莫^ニ相違^{コト}留^レ春^ヲ之辭。欲^ニ花之不二^一（^{注18}）驟^ニ盡^一、與^ニ前詩ノ上半首^一相應^{シテ}而總^ニ結ス^一之^ヲ也。蓋^ニ人生與^ニ風光^一其^ニ如^ニ水ノ流轉^{スル}カ、滔滔逝^テ而不^レ息、則^レ我^モ亦相隨^テ而往^ク。今三春已^ニ暮、相賞^{スル}亦須臾耳。故^ニ傳^ニ語^{シテ}風光^ニ道^フ、冀^{クハ}爲^レ我^カ暫時相留^{リテ}莫^レ違^{コト}此賞心^一也。夫^レ風光之去^ル、豈^ニ可^ニ傳語^{シテ}以留^ム乎。典^レ衣^ヲ沽^テ酒^ヲ以賞^{ニス}風光^ヲ、其情亦已^ニ切^{ナリ}矣。乃對^ニ殘花^一惜^レ春^ヲ之甚、所^ニ以癡情至^ニ此^ニ也。二首皆強^テ自消遣^ス、非^レ教^ル人^ニ流蕩^{（注19）}。語極^テ曠達、意殊^ニ悽愴。所^レ謂甚^ニ于痛哭^{（注20）}也。

（注17） ちなみに、伊藤東涯の『秉燭譚』（宝曆十三年〔一七六三〕刊）卷三に、「文字管到ノコト」として「凡文字ニ上ニ一字アリテ下ノ何字マデカ、ルト云コトアリ。文章ノ書ニコレヲ管到ト云」云々という。また三浦梅園『詩轍』卷五にも「句

法」の条に管到の項があり、「句法ハ能ク管到不管頭ノ所ヲ察スベシ。管ハ領ト云ガ如シ。上ニ置キタル字ノ領スル字ト領セザル字アリ」と見える。

〔注18〕『論語』子罕篇に「子、川の上に在りて曰く、逝く者は斯の如きか。昼や夜を舍めず」とある。

〔注19〕『而庵説唐詩』に「曲江は君父の憂ひを憂へ、方に作者の意に合す。否らざれば則ち是れ人に流蕩を教ふるなり。子美豈に人に流蕩を教ふる者ならんや」という。

〔注20〕『而庵説唐詩』に「詩は景光に流連するの語を作すも、其の意は痛哭よりも甚し」という。もつとも、徐増は「曲江」二首について、杜甫が「三賦を献ぜし後、胄曹參軍と為る前」の「年四十を踰え、其の志氣を展ぶるを得」ざりし時の作とみて、「若し天寶喪乱の後、拾遺に官たりし時ならば、当に此の詩を作らざるべし」とし、「朝士の国家の急を顧みず、日び宴賞を事とす」るのを苦々しく思つての作だとみなした上で、かく言う。

〈伝語〉は、結尾までかかる。これは曲江のほとりで心に感じたことであるから〈流転〉の字を用い、〈人生〉の句を承けているから〈共に〉という。〈相違ふこと莫かれ〉は、行く春を引き止める言葉。〈花〉のにわかには散り尽きぬことを願い、前の詩の前半四句と対応して総括しているのだ。けだし、〈人生〉は〈風光〉と〈共に川の水が〉〈流転〉するがごとく、滔滔と逝きてやむことがないとすれば、私も同じくそれに随つて往くのである。今や三月の春はすでに暮れ、〈相賞〉するものほんのつかの間の間だけだ。それゆえ春の〈風光〉に〈伝語〉して言う、どうか私のためにしばし留まつて、そなたを〈賞〉でる心を裏切らないでくれ、と。そもそも春の〈風光〉が去りゆくのに、どうして〈伝語〉して引き止めることができるか。衣服を質入して酒を買い、そうして〈風光〉を〈賞〉でる。その心情はせつぱつまっている。そこで残っている〈花〉に対して春を惜しむ気持ち^{うさ}が甚だしく、痴情のここに至つたゆえンである。「曲江」二首はいずれも無理やり憂を晴らそうとしたもので、他人に遊び回ることを唆すものではない。言葉は極めて闊達だが、その心持ちはとても悽愴で、いわゆる「痛哭よりも甚だしい」というものである。

014 曲江對_レ酒_二（〇二〇九）

此詩、上半界_ハ對_レ酒之景、下半界_ハ對_レ酒之懷_{（注一）}、亦遣_ヲ閑放浪_{スル}也。

（注一）張遠『会粹』（卷五）に「前四は酒に対するの景、後は則ち酒に対するの懷」と。宇都宮遯庵の両著に挙げる。また『唐詩貫珠』（卷四十九、春）に「上界は曲江、下界は酒に対するの情」と。

この詩、前半部は酒を前にしての景色、後半部は酒を前にしての感懷で、やはり憂さ晴らしをしてぶらつくのである。

苑外江頭坐_{シテ}不_レ歸 水晶宮殿轉_{（注二）}霏微

※霏微：チラツク

苑_ハ即芙蓉苑_{（注三）}。在_二曲江ノ西南岸_一、故_ニ亦曰_二南苑_一。明皇_ノ離宮。公_ノ詩_ニ江頭宮殿鎖_二千門_一、其盛_{ナル}コト可_レ見也。

名苑清江、勝景映帶而對_{シテ}酒_ニ坐_二其中_一。故_ニ乘_{シテ}興_ニ留連_{シテ}、不_レ能_二歸去_一也。次句醉中望_二苑中ノ宮殿映_二江上之波_一。述異記_{（注四）}吳王闔閭構_二水晶宮_一。南苑ノ宮殿臨_レ江_ニ、與_レ波相映_{シテ}而似_二水晶之光_一。故_ニ借_テ稱_ス之_ヲ。極_テ言_二其明麗_一也。霏微_ハ本雨雪雰_{タル}貌。因_テ言_二望迷之狀_一。水殿ノ光影動搖_{シテ}而迷離_{タル}也。

轉_ノ字句眼。蓋殿影水光玲瓏_{（注五）}耀_レ日_ニ、而醉眼望_レ之_ヲ、不_レ勝_二眩惑_一。故_ニ轉_{（注六）}霏微_{タル}也。舊說或_ハ爲_二暮色_一、或_ハ爲_二煙靄之狀_一、水晶ノ字死了_ス。坐_{スル}不_レ審_二題意_一也。

（注二）〈晶〉字、錢注（卷十）および輯註（卷四）は〈精〉に作る。『唐詩訓解』『唐詩集註』『唐詩解頤』および『唐詩貫珠』も同じ。また〈宮〉字、錢注および輯註は〈春〉に作り、「一に宮に作る」と。『唐詩貫珠』も同じく〈春〉に作る。

（注三）『唐詩解頤』に〈苑外〉の下に「即芙蓉苑」と注する。

（注四）「哀江頭」（詳註卷四、〇一五五）の冒頭。

（注五）梁・任昉（四六〇～五〇八）撰とされる『述異記』卷上。但し、〈晶〉を〈精〉に作る。錢注および輯註に挙げ、輯註は宇都宮遯庵の増広本に引く。また『唐詩訓解』および『唐詩集註』にも挙げる。

〔注6〕『唐詩解頤』に「水精」の下に「言其明麗」と注する。

〔注7〕『唐詩貫珠』に「霏微は、動搖して迷離たるなり」と。〈迷離〉は疊韻の語で、ちらつくさま。

〔注8〕南宋・魏慶之『詩人玉屑』巻八に「句中有眼」として「蓋し五字詩は第三字を以て眼と為し、七字詩は第五字を以て眼と為す」と。

ちなみに、三浦梅園の『詩輟』巻五、字法に「詩二字眼ト云アリ。句中意味ノ最関カル字ノコトナリ。律ニ限ルコトニ非サレトモ、字眼トイヘバ、對聯ニテイフコト也。古人虚字実字ヲ分チ用ヒタレトモ、分ツニモ及バズ。肝心トナル字也。響字トモイヘリ。上下ニ応スルニヨリテイフト見エタリ。先五言ノ第三字、七言ノ第五字トイヘリ。然レバ各腰ノ字也」云々とある。

〔注9〕『唐詩解頤』に「霏微」の下に「暮色」と注する。『唐詩集註』では「暮景」。

〔注10〕邵宝『集注』（卷二十二、時序類）に「霏微は、煙霧の貌」と。薛益『分類』（卷一、四時）も同じ。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

〈苑〉は、芙蓉苑のこと。〈曲江〉の西南岸にある。それで〈南苑〉ともいう。明皇の離宮。公の詩に「江頭宮殿千門を鎖す」とあり、その盛大な様子が見てとれる。名だたる御苑と曲江の清らかな水面と、すばらしい景色が照り映えているなか、〈酒に對し〉て〈坐〉りこんでいる。されば、興に乗ったままいつづけて、いつまでも〈帰〉ることができずにいるのである。次句は、酔って御苑の宮殿が曲江の波にきらめいているのを眺めている。『述異記』に「吳王闔閭、水晶宮を構る」と。南苑の宮殿が曲江に臨み、波と照り映えきらめいて〈水晶〉の光のようである。それで借りてこれを称した。そのきららかで麗しいことを極言するのである。〈霏微〉は、本来、雨や雪が盛んに降るさま。それではつきり見分けられない様子を言う。水面の光やそこに映る宮殿の影が揺らめいて目にちらちらするのである。〈軋〉の字は、句眼。けだし、宮殿の影や水面の光が、きらきらと日に輝いており、酔った眼にはまばゆくてしかたないのであろう。それゆえ〈軋た霏微〉たるわけだ。旧説に夕暮の

景色だとみなしたり、煙靄のさまだとしたりするのは、《水晶》の字が死んでしまうことになる。題意を審かにしていないせいである。

桃花細^(注11) 逐^(注11) 楊花^(注11) 落 黃鳥時^(注12) 兼^(注12) 白鳥^(注12) 飛

※細：チラ／＼ト 時：オリフシ

句中各自爲^(注13) 對偶^(注13)、謂^(注13) 之^(注13) 當句對^(注13)。亦曰^(注13) 自對體^(注13)。細^(注13) ハ謂^(注13) 片片相次^(注13) 間^(注13) 落^(注13)。形容^(注13) ス微風徐^(注13) 來^(注13)、輕ク

拂^(注15) 苑外^(注15) 花枝^(注15)、與^(注15) 江頭^(注15) 落絮^(注15) 霏霏相逐^(注15)、紅白錯亂^(注15) シテ 而飄^(注15) 落^(注15) スル 水面^(注15) 上^(注15) 也。黃鳥^(注15) ハ謂^(注15) レ鶯^(注15)、白鳥^(注15) ハ鷗鷺^(注15)

之類^(注15)。陸機^(注16) 詩^(注16) ノ疏^(注16)ニ 鶯謂^(注16) 之^(注16) 白鳥^(注16)ト。兼^(注16) 猶^(注16) 與^(注16) ノ也。言^(注16) 有^(注16) テ時苑外^(注16)、黃鶯與^(注16) 江頭^(注16) 白鷺^(注16) 相映^(注16) シテ 而飛^(注16) 中度^(注16) ル 波

上^(注16) 也。一聯併^(注16) セテ 寫^(注16) 苑外^(注16) 江頭^(注16)、申^(注16) 說^(注16) 醉中^(注16) 霏微^(注16)。蓋^(注16) 曲江^(注16) 勝境、時屬^(注16) シ盛春^(注16)、落花飛鳥、光彩繡錯、而

乘^(注16) レ 醉^(注16)ニ 賞玩^(注16)、霏微^(注16)ト シテ 望迷^(注16)、眞^(注16)ニ 是身在^(注16) 畫中^(注16)、所^(注16)ニ 以坐^(注16) シテ 不^(注16)レ 歸也。已上^(注16) 四句、俱^(注16)、藏^(注16) 醉^(注16)ノ字^(注16) 在^(注16) レ 内^(注16)、

宜^(注16) 細^(注16) 玩^(注16)。

(注11) 《楊》字、詳註(卷六)は《柳》に作る。

(注12) 《兼》字、原文では缺画して《兼》に作る。以下同じ。

(注13) 『唐詩集註』に引く明・蔣一葵の説に「楊自^(注13)から桃に對し、白自^(注13)から黃に對す、之を自對格と謂ふ」と。また『夜航詩

話』卷二に「一句中本自^(注13)ら對偶を爲す、之を自對體と謂ひ、亦た當句對、就句對と曰ふ。方板中に活を用ふる時に之を用

ふ」として、多くの句例を挙げる。方板は、平板と同じ。この方板云々は、清・沈德潛『說詩晬語』卷下、属對の条に見

える。

ちなみに、『詩轍』卷五には「句中已^(注13)自^(注13)對ス、故^(注13) 下句ノ字、上句ニ對セザレトモ、能^(注13)對ヲ成ス。白狗黃牛峽、朝雲

暮雨ノ時。桃花細^(注13) 逐^(注13) 楊花^(注13) 落、黃鳥時^(注13) 兼^(注13) 白鳥^(注13) 飛。コレヲ胡越同舟^(注13) 體トモ謂ヘリ。(中略) 滄浪詩話ニ、杜甫、小院回

廊春寂寂、浴鳧飛鷺晚^(注13) 悠悠。李嘉祐、孤雲獨鳥川光暮、万井千山海氣秋ナリ。是ヲ就句對トモイヒ、當句對トモ云ヒ、又

就對トモ云。當句ニ就テ對ヲトルノ意ナルベシ」と。

なお「白狗」云々は杜甫の「崔都水翁の峽を下るを送り奉る」詩(詳註卷十二、〇六一二)。「小院」云々は同じく杜甫

の048「涪城県香積寺官閣」詩（同上、〇六一七）。李嘉祐は「皇甫冉^ととに重玄閣に登る」詩（『全唐詩』卷二〇七）。

〔注14〕 釈大典『詩語解』卷下、細の条「桃花細^ニ逐^テ楊花^ヲ落^ツ、言^ニ桃片楊片相次^テ閑落^ル也」^一と。

〔注15〕 顧宸『註解』に見える。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

〔注16〕 『詩經』陳風・宛丘の疏および「爾雅」釈鳥の疏に引く陸機『毛詩草木鳥獸疏』に「鶯は水鳥なり。好にして潔白、故に之を白鳥と謂ふ」と。〈機〉は、〈璣〉の訛字。

〔注17〕 『夜航詩話』卷三に「兼は与と訓ず。然れども本義は併なり。故に相反する者を指して言ふ可からざるなり。須らく本義に照らして之を用ふべし」という。

句中それぞれに対偶をなしており、これを当句対といい、また自対体ともいう。〈細〉は、一ひら一ひら相次いで静かに落ちること。微風がおもむろに吹いて来て、さつと苑外の花枝を払い、江畔の柳絮と霏霏（ひらひら）として後から後から次々と紅白入り乱れて、水面に舞い落ちてゆくのを形容している。〈黄鳥〉は、鶯のこと。〈白鳥〉は、鷗鷺の類。陸機「璣」の疏に「鶯、之を白鳥と謂ふ」と。〈兼〉は、与とほぼ同じ。〈時〉に〈苑外〉の黄鶯と〈江頭〉の白鷺とが相映じて波の上を飛んでゆくのをいう。この聯は、〈苑外〉と〈江頭〉との様子を併せて描写し、酔中の〈霏微〉を重ねて説いている。けだし、〈曲江〉の景勝は、時に春の盛りで、舞い散る花や飛びゆく鳥が彩なすごとくに美しく、酔って愛すれば、〈霏微〉としてはつきり見えない。まことに身は画中に在り、〈坐して帰ら〉ぬわけである。以上の四句はいずれも〈酔〉字を内に蔵しており、細かに玩味するがよい。

縦^{ニシテ}飲^ヲ久^{シテ}拌^{シテ}人共^ニ棄^レ 懶^レ朝^{スルニ}眞^ニ與^レ世^ニ相違^フ

※拌…ウチヤリテ 違…クヒチガフ

飲^ニ一^ニ作^レ酒^ニ。拌^{俗ニ}俗^ニ作^レ拵^ニ。自放棄也。眞ノ字感慨甚^シ。違^ハ背馳也。至^レ此^ニ方^ニ言^ニ出^ス酒事^ヲ。蓋^シ縦^{ニシテ}酒^ヲ痛飲、以遣^ニ憂悶^ヲ、身自放棄^{シテ}、不^レ拘^ニ禮俗^ニ。人竟^ニ視^テ爲^{シテ}狂^ト而不^ニ復顧眄^セ。才不^ニ與^レ時合^一、無^レ

意^三于競^二仕進^一。壯志灰盡^{シテ}、懶^シ朝參之勞^ニ、則逾^レ爲^レ世^ノ所^テ擯^セ、至^ニ眞^ニ相違^{フニ}也。

(注18) 『唐詩集註』および『唐詩解頤』に〈飲〉字の下に「一^ニ作^レ酒^ニ」と。東陽が底本とした邵傳『集解』は〈酒〉に作る。

(注19) 『唐詩訓解』は本文の〈拚〉字を〈拚〉に作る。『字彙』に拚字に注して「俗に拚字に作るは是に非ず」と。

(注20) 『唐詩解頤』に〈拚〉字の下に「自放棄^{スル}也」と注する。

ちなみに、伊藤東涯『秉燭譚』巻四に「判字拚字ノコト」として「拚ノ字或ハ判ニ作ル。又拚ニ作ル。正字通、拚ノ字ノ註ニ棄也、方言^ニ楚人凡揮^ニ棄物^ヲ謂^ニ之^ヲ拚^ト通^{シテ}作^レ判^ニト云々。唐人ノ詩ニ多コレヲ用ユ。杜詩ニ縱飲久拚^二人共^ニ棄^一ト。コノ意ハ世ニ用ラレテ人ニモ知ラレタナラハ酒ヲモヒカヘ人カラモタシナムヘキニ世人ニ棄ラルニ因テ酒ヲ思マ、ニノミテ一向ニステ、ノケルト云コトナリ」という。

なお、『詩轍』巻六、雜記にも、拚字の条があり、「打捨^{カサ}テ管ハヌ意也」とし、『秉燭譚』を挙げる。

〈飲〉、一に酒に作る。〈拚〉は、俗に拚に作る。自らをうち棄てることである。〈眞〉の字は、感慨が甚だしい。〈違〉は、背馳することである。ここに至つてやつと〈酒〉のことを言い出している。けだし酒を〈縱^{はしいまま}〉にして痛飲して憂悶を晴らし、身自らうち棄てて礼俗にとらわれない。他人はついに狂とみなして、もう見向きもしくなる。才は時と合わず、仕進(官界での出世)を競う意欲もなくなり、壯志はすっかり消えて灰となり、朝廷に参内する気苦勞に〈懶^{もの}〉い。そうなれば、いよいよ〈世〉間から爪弾きされて、〈眞〉に〈相違ふ〉ことになるのである。

吏情^二覺滄洲ノ遠^一 老大徒^ニ悲^ニ未^レ拂^レ衣^一

※吏情^二ヤクニンギ 遠^二ユルヤカ

吏情^ハ猶^レ言^カ宦況^ト。言^ニ其不^レ勝^レ俗^{ナルニ}也。滄洲^ハ謂^ニ江湖隱逸之境^ヲ。或^ハ以爲^ニ海中ノ仙境^ト、謬^ル矣。陸雲^カ泰伯^ノ碑^ニ滄洲^ニ寄^レ跡^ヲ、箕山辭^ス位^ヲ。南史張充^カ傳^ニ飛^シ竿^ヲ釣渚^ニ、濯^ニ足^ヲ滄洲^ニ。袁粲詩^ニ訪^レ迹^ヲ雖^ニ中字^一、循^レ寄^ニ是滄洲。謝朓詩^ニ既^ニ懽懷^レ祿^ヲ情、復協滄洲ノ趣。皆言^ニ汗漫之境^ヲ已。未^ニ嘗^テ涉^ニ仙境ノ事^ニ也。

此特^ニ用^ル滄洲^一、以^ニ江上之遊^一也。遠^ハ謂^ル其境之曠遠^{ナル}也。夫^レ仕宦棲隱、境界固^{ヨリ}別^{ナリ}。乃宦況局促之
不^レ勝^ル俗^ニ、逾^レ更^ニ覺^ル滄洲汗漫之好^一也。極^テ是厭^レ此羨^レ彼之辭。於^ニ更遠二字^ニ見^レ之^一。古詩長歌行^(注20)
少壯不^ニ努力^セ、老大徒^ニ悲傷^ス。後漢楊彪傳^(注30)孔融^ハ魯國ノ男子、明日便當^ニ拂^テ衣^ヲ而去^一、不^ニ復朝^セ矣。謝靈
運詩^(注31)拂^テ衣^ヲ五湖ノ東。拂^ハ衣^ヲ急^ニ起^テ去^之狀。蓋曲江之遊、勝地美景、春水綠波、宮殿玲瓏、花鳥娛^{シメ}人^ヲ、
煙霞欺^レ畫^ヲ。於^レ是^ニ縱飲逸興、幾^{ント}乎物外之樂^{ナリ}矣。因感^{シテ}傷^テ宦況之無聊^一、而戀^ニ嘉遯之考^一。樂^(注35)
然^{トモ}未^レ能^ニ決然勇退^一スルコト、而聊亦爲^ニ君ノ守^ル官^ヲ、老大之身、餘命幾何^{クソ}。而^{シテ}陵^ニ此艱苦^一、徒^ニ自悲傷^ス
耳。徐子彰^(注36)云、或^{ヒト}疑公是^ノ時救^ニ二房瑄^一論^ニ徒^{セラル}、故^ニ有^ニ此作^一。然^{トモ}論^ニ徒^ノ時、安^ソ得^ニ從容對^{コト}酒^一。
意^フ公別^ニ有^レ所^レ指^ス。蓋詩甚大息、故^ニ有^ニ是論^一。余考^ニ公ノ年譜^一、至德^ニ二載、公上疏^{シテ}救^ニ二房瑄^一、肅
宗怒^テ詔^{シテ}三司^ニ推問^{セシム}。宰相張鎰救^テ之^ヲ、獲^レ免^{コト}ヲ。明年六月、遂^ニ出^{サレテ}爲^ニ華州ノ司功參軍^一。此必
是春之作。蓋自^ニ瑄ノ事^一以來、公快快^{トシテ}不^レ得^レ志^也。黃漢臣曰、此與^ニ前ノ曲江二首^一、流便真率、已^ニ爲^ニ
長慶集^一開^ニ一法門^一。但氣和^シ神遠、層折轉回、意味深長、視^{レハ}彼與^ニ竈嫗^一作^レ緣^ヲ、務^テ取^ニ平易^一者^ニ、相
去^{コト}天淵耳。

(注21) 〈徒悲〉、錢注および輯註は〈悲傷〉に作り、輯註に「一に徒悲に作る」と注する。なお、詳註は〈徒傷〉に作る。

(注22) 邵傳『集解』に見える。邵宝『集註』および薛益『分類』にも「更情は宦況なり」と。宦況は、官界での境遇およびそ
の情味。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注23) 滄洲の解釈について、『夜航詩話』巻二に「詩家毎に滄洲を用ふ。蓋し滄浪を取り名と爲す。只だ江海の境を称す、朝市
に対して言ふのみ。必ずしも仙島を指さざるなり」と注意し、ここに挙げた句を含む多くの用例を示した上で、「皆^{タラ}泛^{タラ}く汗
漫の境を称す。未だ嘗て仙島を指さず。歴歴見る可きなり」という。ちなみに、『唐詩集註』巻二に、李白「江上の吟」の
「興酣にして筆を落として五嶽を揺るがし、詩成つて笑傲して滄洲を凌ぐ」の句に注して「滄洲は必ずしも仙境を謂はず」
と。

(注24) 邵宝『集註』に「滄洲は神仙の境なり」と。なお、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(巻六)も「仙境をいふ」とする。

(注25) 『藝文類聚』巻二十一、人部、讓に梁・陸雲「太伯碑」として引く。但し、清・嚴可欽輯『全梁文』(巻五十三)は、陸雲公に作り、その方がよい。

(注26) 『南史』巻三十一。

(注27) 『南史』巻二十六、袁粲伝。但し、〈是〉字を〈乃〉に作る。

(注28) 『文選』巻二十七、「宣城に之^カかんとして新林浦に出で版橋に向ふ」詩の第七、八句。輯註に挙げ、宇都宮遯庵の増広本に引く。五臣注には「滄洲は、洲の名。隱者の居る所」という。なお、謝朓詩の全訳に森野繁夫訳注『謝宣城詩集』(白帝社、一九九一年)がある。

(注29) 『文選』巻二十七、樂府、長歌行の第九、十句。李善注本では、〈徒〉字を〈乃〉に作る。また李善注本・五臣注本ともに〈悲傷〉を〈傷悲〉に作る。なお、『唐詩集註』には樂府長歌行として第十句挙げる。

(注30) 『後漢書』巻五十四。『唐詩集註』は後漢孔融伝として挙げる。これは『唐詩訓解』に「後漢」孔融聞^テ曹操殺^ス楊修^ヲ曰、孔融ハ魯国ノ男子、便当^ニ三弘^ニ衣^ヲ去^ル矣」云々とあるのを孔融伝としたものであろうか。但し、『唐詩集註』は楊修を楊彪とする。

(注31) 輯註に挙げ、宇都宮遯庵の増広本にも引く。但し、〈東〉字を〈裏〉に作る。〈東〉とするのは、形近による誤り。謝靈運の句は、『文選』巻十九、「祖徳を述ぶる詩」二首其二の第十六句。なお、謝靈運詩の全訳に森野繁夫訳注『謝康樂詩集』(白帝社、一九九四年)がある。

(注32) 『唐詩解頤』に見える。

(注33) 梁・江淹「別れの賦」(『文選』巻十六)に「春草は碧色にして、春水は緑波」と。

(注34) 『易』遯卦に「嘉遯す。貞^んければ吉」と。

(注35) 『詩経』衛風・考槃に「槃を考^なして澗に在り、碩人之れ寛」とあり、毛伝には「考は成なり。槃は楽なり」、集伝には「考は成なり。槃は盤桓の意。言ふところは其の隠処の室を成すなり」と。いずれにしても、隠逸生活の楽しみをいうとする。

(注36) 明・徐常吉(字は士彰)のことであろう。周采泉『杜詩書録』に拠れば、万曆十一年(一五八三)の進士で、『杜詩註』

二卷がある。『唐詩集註』に「徐子彰曰く、或いは疑ふ、公、是の時、房琯を救ひて論徙せらる、故に是の作有りと。然れども論徙の時、安んぞ從容酒に對することを得ん。意ふに公、別に謂ふ所有らん。又た曰く、公、方に一官を得。而して曲江の諸作、暫時と曰はずんば即ち暫醉と曰ひ、懶朝と曰はずんば即ち扞衣と曰ふ、亦た以て公、人に合はずして朝に安んぜざるの意を見る可し」とある。

(注37) 明・単復の年譜。宇都宮遜庵の増広本に載せる。房琯の一件については、「杜文貞公伝」参照。

(注38) 明末清初の黄家舒(字は漢臣、一六〇〇―一六六九)のこと。無錫の人で、明の滅亡後、斗室に坐臥し交遊を謝絶したという。著に『焉文堂集』がある(『国朝耆献類徵』卷四六七)。その生卒年は張慧劍『明清江蘇文人年表』(上海古籍出版社、一九八六年)に拠る。この評は、顧宸『註解』に挙げる。但し、それには(意味深長、層折転回)を(一句之中、意味深長、一首之中、層折回映)に作り、(彼)字を(元白)の二字に作る。

(注39) 中唐・白居易(字は樂天、七二二―八四六)の『白氏長慶集』のこと。ちなみに、長慶は穆宗の年号(八二一―八二四)。

(注40) 宋・釈惠洪『冷齋夜話』卷一に「白樂天詩を作る毎に、一老嫗をして之を解せしむ。問いて曰く、解するや否やと。嫗解すと曰はば、則ち之を録し、解せずんば、則ち之を易ふ。故に唐末の詩、鄙俚に近し」と。

《吏情》は、宦況というのとはほぼ同じ。その俗悪に堪えないことを言うのである。《滄洲》は、江湖隱逸の地をいう。海中の仙境とみなすのは、誤りだ。陸雲の「泰伯の碑」に「滄洲に跡を寄せ、箕山に位を辞す」、《南史》張充伝に「竿を釣渚に飛ばし、足を滄洲に濯ふ」、謝朓の詩に「既に懽ぶ禄を懷ふ情、復た協ふ滄洲の理」とあり、いずれもひろびろとした場所を言うだけなのだ。ついで仙境の事には関係しない。ここでわざわざ《滄洲》の語を用いているのは、江辺に遊んだからである。《遠》は、その場所が曠遠なること。そもそも、仕宦と隱棲とは、その境遇や世界が元来異なるものだ。官界で行き詰まって俗悪さに堪えかねている状態では、いよいよ一層広々とした《滄洲》がすばらしく思えるのである。今いる場所を厭い、向うの世界を羨む言葉で、《更》《遠》の二字にとってもよくあらわれている。「古詩長歌行」に「少壯努力せずんば、老大徒に悲傷す」と。『後漢

書』楊彪伝に「孔融は魯国の男子、明日便ち衣を払って去り、復た朝せざらん」、謝靈運の詩に「衣を払ふは五湖の東」とあり、〈衣を払ふ〉は、急に立ち上がってその場を去るさま。けだし、今遊んでいる〈曲江〉は、美しい景勝の地で、春の水面に緑の波たち、〈宮殿〉はきらめき、〈花〉や〈鳥〉が心楽しませてくれ、霽にけむって、まるで画かと思うばかり。そこでほしいままに酒を飲みすっかり興に乗る、ほとんど世俗を離れた楽しみである。それで心を感じるものがあつて官界での無聊を傷み、俗世を遁れ思うさま楽しむことを切に慕うわけである。さりながら、きつぱりと潔く退くことができず、いささか主上のために職務を守っている。年老いた身とて、餘命はいかほどか。それなのに、この艱難辛苦をしのいでおり、〈徒〉に自ら〈悲〉しみ傷むばかりだ。徐子「士」彰が云う、「ある人は、公がこの時、房琯を救おうとして左遷の沙汰が下った。それゆえ、この作があるのではないかと思っている。されど左遷の沙汰があつた時、どうしてゆつたりと酒を前にすることができようか。思うに公には別に指すところがあるのだろう」と。けだし、この詩はひどく嘆息している。だからこのような議論があるのだろう。公の年譜を調べてみると、「至徳二載、公、上疏して房琯を救ひ、肅宗怒りて三司に詔して推問せしむ。宰相張鎰^{（こゑ）}之を救ひて免るることを獲。明年六月、遂に出されて華州の司功參軍と為る」とある。この詩は、きつとこの年の春の作に違いない。けだし、房琯の一件があつてからというものの、公は快々として意を得なかつたのだろう。黄漢臣が云う、「この詩と曲江二首とは、すらすらと率直に思ひの丈を述べており、早くも『長慶集』のために法門を開いている。しかし、詩に表現されている気分はおだやかで精神は深く、幾重にも曲折転回し、意味深長であつて、あの飯炊き婆さんと縁を生じて、極めて平易な表現に務めようとした者と比べてみると、雲泥の差がある」。

015 曲江對雨^ス雨^ニ ○二〇〇

對^レ一^注作^レ値^一。前半寫^ス雨景之寂靜^ヲ、後半懷^ニ南内之淒涼^ヲ。不^レ忘^ニ上皇^一也。

(注1) 錢注(卷十)および輯註(卷四)は、〈對〉字の下に注して「晋は値に作る」と。詳註(卷六)も同じ。〈晋〉は、北宋・開運二年(一〇三四)刊の官書をいう(南宋・吳若「杜工部集後記」)。なお、『唐詩貫珠』(卷四十九、春)は〈値〉に作る。

(注2) 〈前半〉より〈上皇也〉まで、清・沈德潜『杜詩偶評』卷四に見える。

(注3) 興慶宮のこと。大明宮の南にあつたので、かく称する。『新唐書』卷三十七、地理志に「興慶宮は皇城の東南に在り。(中略)開元の初め置き、十四年に至つて又た之を増広し、之を南内と謂ふ。二十年、夾城を築いて芙蓉園に入る」と。

(注4) 玄宗(李隆基)のこと。安祿山の乱により成都に蒙塵する途中で別れた皇太子(李亨、後の肅宗)が靈武の地で即位し、玄宗を上皇とした。至徳二載(七五七)十月、肅宗が入京、ついで十二月、玄宗が還御した。

〈對〉は、一に値に作る。前半は雨景の寂靜を写し、後半は南内の淒涼を懷う。上皇を忘れずにいるのである。

城上ノ春雲覆^ニ苑牆^一 江亭ノ晩色靜^ニ年芳^一

※靜…シメヤカ 年芳…ハルゲシキ

城ハ謂^ニ芙蓉苑^一。王維詩^注小苑城邊獵騎回^ル、亦謂^ニ芙蓉苑^一也。覆ハ謂^ニ雲下リ垂^ヲ。將^レ雨^シト之景。此字暗^ニ胎^ス後聯ノ感慨^一。江亭ハ即公ノ所^レ坐^ス。年芳ハ猶^レ言^ニ春光^一ト。一年ノ芳景在^レ春^ニ、故^ニ曰^ニ年芳^一ト。沈約詩^注麗日屬^ニ元巳^一、年芳俱^ニ在^レ斯^ニ。靜ノ字見^ニ細雨如^一。天晚^テ且雨^{フリ}、芳景霑濕^ス、所^ニ以幽靜^{ナル}也。此句雨景如^レ畫^クカ、妙不^レ可^レ言。靜ノ字領^ニ全首ノ詩神^一。

(注5) 王維の七律「太常韋主簿五郎の温泉寓目に和す」詩(『唐詩選』卷五)に、次のように見える。

漢王離宮接露臺 漢王の離宮 露台に接し

秦川一半夕陽開 秦川一半 夕陽開く

青山盡是朱旗繞 青山 尽く是れ朱旗繞り

碧澗翻從玉殿來

碧澗翻つて玉殿たまどの従り來たる

新豐樹裏行人度

新豐樹裏 行人わた度り

小苑城邊獵騎回

小苑城邊 獵騎か回る

聞説甘泉能獻詩

聞説く甘泉能く詩を獻ずと

懸知獨有子雲才

懸はるかに知る獨り子雲の才有るを

ここに云う〈小苑〉については、芙蓉苑を指すとする説以外にも諸説がある。例えば、『唐詩訓解』や『唐詩集註』は宜春苑（秦代に作られたもので、曲江にあった）とし、近人陳鉄民『王維集校注』（中華書局、一九九七年）は華清宮をいうとしている。

ちなみに、王維「丁寓が田家贈る有り」詩に「陰は尽く小苑の城、微明なり渭水の樹」とあり、清・趙殿成（二六八三—一七五六）の『王右丞集箋注』（卷三）には、「小苑の字、始めて漢書蕭望之伝に見ゆ。昔賢は地は何処にあるかを注せず。六朝及び唐人の詩中に多く之を用ふ。或いは謂ふ、唐人称する所の小苑は、即ち宜春苑是れなりと。成按ずるに、右丞の長樂青門外、宜春小苑東の句は、則ち宜春即ち小苑と謂ふを得ず矣。当に是れ曲江の芙蓉園を指すべきなり。唐の大内に西内苑有り、東内苑有り、禁苑有り、凡て三苑。芙蓉園は三苑の闊遠なるに及ばず、故に之を小苑と謂ふ。一時の称谓此の如し。宜春苑は其の地に有りと雖も、然れども混じ指して一と為すを得ず」と指摘し、〈小苑〉が芙蓉苑であると断じている。「長樂」云々は「聖製、上巳望春亭に於いて禊飲を觀るに和し奉る、応制」詩に見える。

〔注6〕 梁・沈約「三月三日率爾篇を成す」詩（『文選』卷三十一）の冒頭二句。元巳は、三月三日の上巳節のこと。輯注および張遠『会粹』（卷五）に、これを挙げ、宇都宮遷庵の詳説には『会粹』を、また増広本には輯注を引く。なお、『文選』では〈俱〉字を〈具〉に作る。

〈城〉は、芙蓉苑のこと。王維の詩に「小苑城邊獵騎回る」とあるのも、やはり芙蓉苑をいうのである。〈覆〉は、雲が低く垂れこめていること。今にも雨が降りだしそうな景色。この字は、暗に後聯の感慨をはらんでいゝる。〈江亭〉は、公の坐している場所。〈年芳〉は、春光というのとほぼ同じ。一年の芳景は春にあるので、〈年芳〉という。沈約の詩に、「麗日元巳に属し、年芳俱ともに斯ここに在り」と。〈静〉の字は、雨が篩ふるいにかけたように細や

かに降るのをあらわす。日が暮れてそのうえ雨が降り、春の景色がしめやかに潤っている。幽静なるゆえんである。この句は、雨の情景を画に描いたようであり、その絶妙さはえも言われない。〈静〉の字は、一首全体の精神気分を支配している。

林花著^レ雨^ラ 臙脂^{（注7）}溼^ヒ 水荇^{（注8）}牽^レ風^ニ 翠帶^{（注9）}長^シ

燕脂^ハ以^ニ紅藍花汁^ヲ凝^テ作^レ之^ヲ。燕國ノ所^{スル}生^{スル}、故^ニ曰^フ「燕脂^{（注8）}」。紅花著^レ雨^ヲ潤澤如^ニ「燕脂之欲^{（注9）}」滴^{シト}、青萍牽^レ風連綿似^ニ「翠帶之引^{（注10）}」長^{キヲ}、是細雨輕風之景、所^レ謂^フ靜^ニ「年芳^{（注10）}」也。濕^{（注10）}一^ニ作^{（注10）}落^{（注10）}。不^レ若^{（注10）}「濕^{（注10）}」字出^{（注10）}於^{（注10）}自^{（注10）}然^{（注10）}。燕脂翠帶想^{（注10）}像^{（注10）}昔遊^{（注10）}。佳人琴瑟胚^{（注10）}胎^{（注10）}於^{（注10）}此^{（注10）}。與^{（注10）}大白^{（注10）}「蘊臺覽古^{（注10）}」楊柳新^{（注10）}同一手段。

〔注7〕〈臙脂〉の二字、錢注および輯註は〈燕脂〉に作り、〈脂〉の下に「二に支に作る」と。詳註は〈燕支〉に作る。『唐詩貫珠』も、〈燕支〉とする。

〔注8〕南宋・祝穆『新編古今事文類聚』別集卷六、文章部、字義の条に燕脂の項があり、「雜錄」を引いて「紂^{（注10）}自^{（注10）}起^{（注10）}、紅藍花の汁を凝らして脂を作り、以て桃花粧と為す。蓋し燕國の出る所、故に燕脂と名づく」と。宇都宮逖庵の両著にも、これを挙げる。紅藍花は、べにばな。なお、『事文類聚』には、寛文六年（一六六六）刊の和刻本がある。

〔注9〕錢注および輯註は〈濕〉字を〈落〉に作り、輯註に「一に隰に作る」と。宇都宮逖庵の増広本に輯註を挙げる。

〔注10〕〈大〉は太の訛字。李白（字は太白）の「蘇台覽古」詩は、『唐詩選』巻七にも収められている。

舊苑荒臺楊柳新 旧苑荒台 楊柳新たなり
菱歌清唱不勝春 菱歌清唱 春に勝へず
只今惟有西江月 只今惟^{（注10）}だ西江の月有るのみ
曾照吳王宮裏人 曾て照らす吳王宮裏の人

〈燕脂〉は、紅藍花の汁を凝縮して作る。燕國に産するので、〈燕脂〉という。紅い花は〈雨〉を〈著〉け、つやつやとして〈燕脂〉が今にも滴り落ちんとするがごとくであるし、青い水草は〈風〉に〈牽〉かれて、ながなが

として「翠帶」をひっぱったようである。これは「雨」が細やかに降り「風」がそよぐ情景で、いわゆる「年芳静かなり」である。「湿」は、一に落を作るが、「湿」字の自然に出たものには及ばない。「燕脂」「翠帶」に、かつて華やかなりし頃の行楽を想像している。後の「佳人琴瑟」は、ここに胚胎している。李太白の「蘇台覽古」詩に「楊柳新たなり」というのと同じ手法である。

龍武ノ新軍深ク駐_レ輦_ヲ 芙蓉ノ別殿謾_ニ焚_レ香_ヲ

※新軍：シンゴバングミ 別殿：オナリゴテン 謾：ムダニ

此似_レ賦_ニ雨色之阻_ヲ、而其實嘆_ニ南内ノ淒涼_ヲ。上皇開元中改_ニ萬騎軍_ヲ爲_ニ左右龍武軍_ト。故_ニ曰_ニ新軍_ト。唐以_レ避_ヲ世祖ノ諱_ヲ、改_ニ席_ヲ爲_レ武。神虎門_ヲ爲_ニ神武門_ト、虎溪_ヲ爲_ニ武溪_ト、皆是也。龍武軍皆用_ニ功臣ノ子弟_ヲ爲_ニ親近ノ宿衛_ト。輦出_テ遊、則軍從_レ行、今ハ則獨在_ニ深宮之中_ト、駐_レ輦_ヲ而不_レ出也。別殿ハ卽離宮。上皇在_レ位_ニ時、從_ニ南内_ト築_ニ夾城_ヲ、達_ニ曲江ノ離宮_ト。謾_ハ猶_レ徒_ト也。芙蓉園ノ離宮亦有_ニ宮女_ト焚_レ香_ヲ以_レ望_ニ幸_ヲ、而駕竟_ニ不_ニ出_テ遊_ト。故_ニ曰_ニ徒_ト焚_ト。想像_{シテ}言_レ之_ヲ也。祿山亂平_テ、上皇歸_レ自_ニ蜀_ト、居_ニ南内ノ興慶宮_ト、與_ニ肅宗_ト有_ニ隙_ト、不_ニ復有_ニ出幸_ト。故_ニ感_{シテ}曲江雨景ノ寂寥_ニ、懷_ニ南内閑居之恨_ヲ、竊_ニ悲_ニ其鬱悒_ヲ也。

(注11) 『新唐書』卷五十、兵志に「玄宗、万騎軍を以て韋氏を平らぐるに及んで、改めて左右龍武軍と爲し、皆唐元功臣の子弟を用ひ、制は宿衛の兵の如し」と。なお、薛益『分類』(卷一、四時)には「新軍は、至徳二載、左右龍武の両軍、名を天騎と賜ふ。詩、次の年に作る。故に新軍と曰ふ」とする。これは、『集千家注』に挙げる黄鶴の説。顧宸『註解』も黄鶴を踏まえ「按ずるに新軍と曰ふは、則ち玄宗の軍に非ず矣」とし、『唐詩貫珠』にも「詩に新軍と称するは、則ち肅宗の新軍なり矣」という。さらに吉川幸次郎『杜甫詩注』第五冊も、肅宗が至徳二載に再編成した近衛軍をかく称するとし、「〔新軍〕という表現、かつて幾度か目にしてきた近衛軍とは違うという、杜甫の違和感を含意しよう」と説く。

(注12) 高祖(李淵)の祖父李虎のこと。世祖は帝王の廟号で、一世の祖の意。但し、『旧唐書』卷一、高祖紀には「皇祖諱は虎、(中略)武徳の初め、景皇帝と追尊し、廟号は太祖。陵を永康と曰ふ。皇考諱は昞、(中略)武徳の初め、元皇帝と追

尊し、廟号は世祖。陵を興寧と曰ふ」とある。なお、明・郎瑛『七修類稿』巻二十二、避諱の条に「唐祖諱は虎、武を以て虎と為す已矣」と。

(注13) 例えば、『梁書』巻六、敬帝紀の太平元年十一月の条に「乙卯、雲龍、神虎門を起す」とあるが、『南史』巻八、梁本紀下・敬帝紀には神武門に作る。

(注14) 例えば、中唐・郎士元の七律「錢起の秋夜靈台寺に宿して寄せらるるに贈る」(『唐詩選』巻五)の首聯に「石林精舍武溪の東、夜禪扉を叩いて遠公に謁す」とあり、『唐詩訓解』に「武溪当に虎に作るべし。唐太祖の諱を避く。故に武と改む」と注する。『唐詩集註』も同様の注。なお、『全唐詩』巻二四八には詩題を「精舍寺に題す」とし、「二に〈王季友の秋夜露台寺に宿して寄せらるるに酬ゆ〉に作る」と注する。虎溪は、廬山(江西省九江市)の東林寺にある。

(注15) 098「秋興八首」其六の詳解に「夾城は複道なり。天子其の中を往来して外人見ること莫し」云々と。

(注16) 東陽が底本とした邵傳『集解』に見える。

これは雨景色が邪魔になってゐるのを詠じているようであるが、その実、南内が凄凉としてゐるのを嘆じてゐる。上皇は開元年間に、万騎軍を改編して左右龍武軍としたので、〈新軍〉という。唐代には、世祖の諱を忌避して、虎字を改めて武とした。神虎門を神武門とし、虎溪を武溪としたのは、いずれもこの例である。龍武軍は、左右どちらも功臣の子弟を採用して天子近従の宿衛とした。天子の〈輦〉が出遊するときは、龍武軍の護衛が随行した。今は奥深い御殿の中に〈輦〉を〈駐〉めたまま、お出かけになることはないのだ。〈別殿〉は、離宮のこと。上皇が御在位の時、南内より夾城を築いて、曲江の離宮に至らせた。〈謾〉は、徒とほぼ同じ。芙蓉園の離宮にも、やはり宮女がおり香を焚いて行幸を待ち望んでいるのだが、御車はついぞ外に出ることはなかった。それゆえ、徒に〈焚く〉というのだ。想像して言うのである。安祿山の乱が平定されて、上皇は蜀から還御し、南内の興慶宮に住まわれた。肅宗と溝ができて、二度と出幸されることはなかった。それゆえ、物寂しい雨の情景に心感じ、南内に閑居なされている恨みを懐い、ひそかにその鬱悒を悲しんでいるのである。

何^レノ時^一カ^{シテ}此金錢ノ會^ニ 暫^{クモ}醉^シ佳人錦瑟ノ傍

此ノ字ハ指^ニ曲江^一ヲ。金錢只是錢。漢^{注17}紀^ニ註^ニ凡言^ニ黃金^一ト者眞ノ金。止^ニ言^ニ金^一ト者ハ錢也。唐時ノ貨專用^レ錢^ヲ、如^ニ

後用^レ銀^ヲ也。佳人^ハ妓也。^{注18}瑟^ハ二十五絃。飾^{ルニ}以^ニ寶玉^一ヲ者^ヲ曰^ニ寶瑟^一ト、繪文加^レ錦^ヲ者^ヲ曰^ニ錦瑟^一ト。開元ノ間^{注19}

中和^{注20}節給^ニ二百官^一宴錢^ヲ、於^ニ曲江^一ニ合宴ス。并^ニ賜^ニ教坊ノ女樂^一ヲ、每歲傾^ニ動^{シテ}京師^一ヲ、以爲^ニ盛觀^一ト。^{注21}今ハ則無^ニ

復開元之盛ナル矣。故^ニ公追^ニ憶^{シテ}往時^一ヲ、慕^ニ其霑^ニ恩^一之渥^一也。中^ニ二聯皆自^ニ靜^一ノ字^一來^ル。七八一轉^{シテ}

舉^ニ昔年ノ盛事^一ヲ、反襯^{シテ}以^レ結^レ之^ヲ。暫^ノ字意太切ナリ。不^ニ敢望^ニ其盡^一ト^{注22}。歡^ヲ、只得^ニ暫如^一ト^{注23}。昔日^一、亦可^ニ

以慰^レ懷^ヲ已。邵夢弼云、曰^ニ何ノ時ト、恐^ニ難^一再見^一也。曰^ニ暫醉^一ト、欲^ニ須臾^一不^レ可^レ得^レ也。

〔注17〕『集千家註杜工部詩集』(卷四)に引く黃鶴の注に見え、宇都宮遯庵の増広本にも『千家註』を引く。これは、『漢書』卷

二、惠帝紀の晋灼の注に「凡て黃金と言ふは、真金なり。黃と言はざるは錢を謂ふなり」とあるのに拠る。なお、輯註に

は「漢紀注」として「諸もろの黄金を賜ふ者、皆之に金を与ふ。黃と言はざる者は一金に万錢を与ふるなり」といふ。輯

註が基づくのは、顔師古の注である。

〔注18〕 ちなみに、清・顧炎武(一六一三―一六八二)の『日知録』卷十一、銀の条に「唐宋以前、上下通行の貨、一に皆な錢

を以てするのみ。未だ嘗て銀を用ひず」といふ、「(南宋) 袁宗の正大(一二二四―一二三二) この間、民間但だ銀を以て

市易す。此れ上下銀を用ふるの始めなり」とする。

〔注19〕 邵宝『集註』(卷二十二、時序類)、薛益『分類』に見える。

〔注20〕 輯註や張遠『会粹』に挙げる『周礼楽器図』に「雅瑟は二十三絃。頌瑟は二十五絃。飾るに宝玉を以てする者を宝瑟と

曰ひ、絵文錦の如くなる者を錦瑟と曰ふ」と。宇都宮遯庵の増広本には輯註を、また詳説には『会粹』を引く。本文中の

〈加は〉(如)の訛字。

〔注21〕 邵宝『集註』に「金錢の会は、開元の間、中和の節に於いて、百官に宴錢を賜ひ、曲江に於いて合宴せしむ。並びに太

常教坊の樂を賜ふ」と。但し、鵜飼石斎訓点による明暦二年(一六五六)刊本では「金錢ノ会ハ開元ノ間^ニ於^ニ中和ノ節^一ニ

陽^ニ二百官^一宴錢^ヲ於^ニ曲江^一ニ合宴^{セシム}」。宇都宮遯庵の詳説にも『集註』を引き同様の読み方。これに対して慶安四年

(二六五) 刊の薛益『分類』は「金錢ノ会、開元ノ間於中和ノ節ニ賜ニ百官ニ宴錢ヲ於テ曲江ニ合宴」云々と訓じる。なお、中和節は、當時、陰曆正月晦日。德宗の貞元五年(七八九)以後は二月一日。『旧唐書』卷十三、德宗紀下、貞元五年正月乙卯の詔に「今自_よ宜しく二月一日を以て中和節と爲し、以て正月晦日に代ふべし」と。

(注22) 『劇談錄』卷下、曲江の条に「開元中、上巳には宴を臣僚に_{あつ}ふ。曲江の山亭に会し、恩もて教坊の声乐を賜ひ、池中には綵舟數隻を備ふ。唯だ宰相、三使、北省の官と翰林学士の登るのみ焉。毎歲皇州を傾動し、以て盛観と爲す」と。錢注や輯註に挙げる。

(注23) 邵夢弼は邵傳(字は夢弼)のこと。『集解』に見える。

〈此〉の字は、曲江を指す。〈金錢〉は、ただの錢のこと。『漢書』本紀の注に「すべて黄金という場合は真金で、ただ金という場合は錢である」と。唐代の貨幣が専ら錢を用いたのは、後世、銀を用いるがごとくである。〈佳人〉は、妓である。〈瑟〉は、二十五絃。宝玉で飾つたのものを宝瑟といい、錦のような絵模様が施されたのを〈錦瑟〉という。開元年間、中和節には、百官に宴錢を下賜され、曲江で合同の宴会を開いた。その際、教坊の歌妓を賜つたが、毎年都中の耳目を傾けさせるほどの盛大な見物であつた。今となつては、もはや開元の頃の盛大さはない。それで公は往時を追憶して、皇恩に浴_{あつ}することの渥_{あつ}かりしを慕っているのだ。中間の二聯は、いずれも〈静〉の字から来ている。七八句は、一転して昔年の盛事を挙げて、対比して結んでいる。〈暫〉の字は、思いがはなはだ切実である。あえて飲を尽くすことを望まず、ただ〈暫く〉昔日のようであり得たなら、やはり懷いを慰めることができるのだ。邵夢弼が云う、「〈何れの時〉」というが、おそらく再び見るのは難しいだろう。〈暫らくも酔はん〉というが、ほんの僅かの間でもそうしたく思つてもできないのである」と。

016 因_ニ許_ハ八_ニ奉_ニ寄_ス江寧ノ晏上人_ニ (〇二四)

許_ハ八_ハ許拾遺恩也。公有_下送_三許恩歸_ニ江東_一詩_上。江寧_ハ縣ノ名。於_レ明_ニ屬_ス應天府_ニ。公開元中嘗_テ遊_ニ吳越_ノ

開^ニ。故^ニ與^ニ江寧ノ詩僧^一有^レ舊。至^ニ乾元ノ間^一、遡^テ而計^レハ之^ヲ、則^ニ已^ニ三十年矣。偶^ニ因^テ同寮許恩歸^ニ江東^一、幸便寄^テ此^ヲ問^レ之^ヲ也。

(注1) 顧宸『註解』に「許八は、許拾遺恩なり。許恩が江寧に帰るを送る詩有り」と。宇都宮遯庵の両著にも、これを挙げる。許恩が江寧に帰るを送る詩というのは、「許八拾遺の江寧に帰って観省するを送る。甫は昔時嘗て此の県に客遊し、許生の処に於いて瓦棺寺の維摩図様を乞ひき。諸を篇末に志す」と題する詩(詳註巻六、〇二二三)。岑参に「送許拾遺恩歸江寧拜親」詩および「送許子擢第歸江寧拜親因寄王大昌齡」詩があり、おそらく顧宸は前者に拠つて許拾遺の名を恩としたものであろうが、陳鉄民・侯忠義『岑参集校注』(上海古籍出版社、一九八一年)や劉開揚『岑参詩集編年箋註』(巴蜀書社、一九九五年)に〈恩婦〉を皇恩を受け休暇を賜つて帰省する意と解するのに従うべきである。ちなみに寛保元年(一七四二)刊の『岑嘉州詩』巻一には「送^下許拾遺^ヲ恩^{シテ}歸^{シテ}江寧^ニ拜^上親^ヲ」と訓点を施す。陶敏『全唐詩人名考証』(陝西人民出版社、一九九六年)に拠れば、〈許八〉の名は、登。賈至の「韋少遊に祠部員外郎を授くる等制」(『全唐文』卷三六六)に許登が右監門衛胄曹參軍から右拾遺を授けられたことが見える。傅璇琮主編『唐五代文学編年史』(『中唐卷』)は、杜甫の「許八に因つて江寧の旻上人に奉寄す」詩および「許八拾遺が江寧に帰るを送る」詩、岑参の「許拾遺が江寧に恩歸して親を拝すを送る」詩を至德三載(二月に乾元と改元)正月に繫年する。また孟二冬『登科記考補正』(北京燕山出版社、二〇〇三年)に拠れば天宝元年(七四二)の進士。なお、胡可先『杜甫詩學引論』(安徽大学出版社、二〇〇三年)の第六節「杜甫交游補考」には、清代に編纂された『江南通志』選舉志や『江寧府志』貢舉志に「許恩、江寧の人」というのに拠つて〈許八〉を許恩と断じているが、その実、『江南通志』なども、顧宸と同様の誤りを犯しているものとみられる。

(注2) 邵宝『集註』(卷二十二、釈老類)および薛益『分類』(卷一、釈老)に「江寧県は、今の応天府に在り」と。応天府は、現在の南京市。

(注3) 顧宸『註解』に「詩は乾元戊戌(七五八)に作る。而して云ふ、見^ルること三十年と。遡^{ツテ}之を計るに、^当に開元十七年己巳(七二九)に在るべし。然れども公大札を進むる表に云ふ、跡を陛下の長林豊草に浪す、実に弱冠の年自^ラりすと。則ち其の呉越に遊ぶこと乃ち開元十九年(七三二)に在り。是の時、公の年二十歳。當に表を以て是とすべし」と。

〈許八〉は、許拾遺恩のことである。公に「許恩の江東に帰るを送る」詩がある。〈江寧〉は、県の名。明では応天府に属す。公は開元中に、かつて呉越の地に遊んだことがある。それで〈江寧〉の詩僧と旧交があった。乾元年間に至って、逆算すると、もう已に〈三十年〉にもなる。たまたま同僚の許恩が帰省するのを幸い、この詩を寄せて安否を問うたのである。

不_レ見_ニ旻公_ヲ三十年 封書寄與_ス淚潺湲

封書_ハ封_レ之書。潺湲_ハ涙_ニ流_ル貌。楚辭_ハ横_ニ流_{シテ}涙_ヲ兮潺湲_{タリ}。旻公蓋公方外ノ知己、故_ニ臨_テ書_ニ灑_レ淚_ヲ。蓋

因_レ悲_ニ屯蹇_一益_ク自傷_ヲ老憊_ヲ不_レ勝_ニ感慨之至_ニ也。

(注4) ちなみに、王昌齡の「李浦の京に之_ニく_ニ別る」詩(『三體詩』卷二)に「小弟隣莊に尚ほ漁獵す、一封の書は寄す数行の啼を」とある。

(注5) 『楚辭』九歌・湘君。『文選』卷三十二にも収む。顧宸『註解』に挙げ、宇都宮遯庵の増広本にも引く。なお、〈潺湲_{せんぜん}〉は疊韻の語で、後漢・王逸の注に「流るる貌なり」と。

(注6) 官界で行き悩むこと。〈屯_{ちん}〉〈蹇_{けん}〉は、ともに『易』の卦。

〈封書〉は、一通の手紙。〈潺湲〉は、〈涙〉がしとど流れるさま。『楚辭』に「横_{よこしま}に涙を流して潺湲たり」と。旻公は、けだし方外の知己であつたのだらう、それゆえ〈書〉を前にして〈涙〉を流すのである。けだし官界で行き悩みうましくゆかぬのを悲しむにつけ、ますます己れの衰老困憊_{くわいゐ}ぶりを傷み、感慨がぐっとこみあげてくるのを押さえきれないのであろう。

舊來_ノ好事今能_{スルヤ}否_ヤ 老去_テ新詩誰_ト與_ニ傳_{フル}

※好事…モノズキ

此寄_ニ問三十年後_ノ事_ヲ也。好事_ハ謂_ニ風流雅好之事_ヲ。卽下_ノ句及後聯所_レ言、是也。旻上人與_レ公遊_シ時壯年已_ニ

能^レ詩ヲ、恆^ニ爲^ニ公ノ傳示ス。今相別^テ三十年、上人老^ン矣。意^{フニ}其詩必更^ニ進マシ、或ハ無^レ倦^{コト}於衰年^ニ乎。不^レ知誰^ト與^ニ傳誦スル、有^下其^上ニスル其樂^一者^上否ヤ。此皆感^レシテ懷^レ之ヲ、所^ニ以^ニ淚潺湲^{タル}也。舊^注說以^ニ新詩^一指^レ公ヲ、言^下我有^モ新詩^一、誰^カ與^ニ傳誦^{セン}、無^中如^ニ旻公其人^ノ者^上、誤矣。是^ノ時王維岑參高適賈至^{（八）}輩皆在^ニ掖省^ニ、可^レ謂^レ乏^ト友^ニ乎。

(注7) 顧宸『註解』に「旧註、新詩を以て公を指す。甚^{（い）}だ謂^{（は）}れ無し。公の詩、豈に旻^{（びん）}に頼^{（よ）}つて以て伝はらんや。此れ旻、公と遊びし時、已に詩を能くす。今相別^{（わ）}れること三十年、旻老^{（い）}いたり。其の新詩必ず更に多きを謂ふ」と。ここに旧註というのは、邵宝『集註』や薛益『分類』のことで、それには「我今新詩有りと雖も、誰か^{（た）}爲に伝誦せん。旻公が好事の如くなこと無き故なり」という。『註解』は宇都宮遯庵の増広本にも引く。ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（巻六）は〈老去〉について「作者が老ゆるをいふ」とし、〈新詩〉を「作者の近作」と解する。

(注8) 掖省は、中書・門下の両省を指す。王維・岑參・賈至については、008「賈至舍人早に大明宮に朝するを奉和す」詩参照。杜甫が左拾遺であつた至徳二載（七五七）から乾元元年（至徳三載二月に改元。七五八）当時、高適は当初淮南節度使として揚州に在り、乾元元年の春に李輔国の讒言によつて洛陽勤務の太子少詹事に左遷され、長安にはいなかった。周助初『高適年譜』参照。なお、杜甫には、太子少詹事の高適に寄せた「高三十五詹事に寄す」詩（詳註巻六、〇二二七）がある。

これは、〈三十年〉後のことを遠くから尋ねるのである。〈好事〉は、風流雅好の事柄をいう。下句および後聯に言う内容がそれにほかならない。旻上人が公と交遊していた時は壮年で、すでに詩をよくし、いつも公のためには伝え示していた。今、別れてから〈三十年〉、上人は〈老〉いたことだろう。思うに、その詩はきつと進境があるに違いない。もしかして年老いて倦^{（う）}んだりしてはいないだろうか。いったい誰に見せてくちずさんでいるのやら、楽しみを共にする者がいるのだろうか。これらはいずれも〈旧〉に感じて懷^{（な）}うことで、〈淚潺湲〉たるゆえんである。旧説に〈新詩〉をば公のそれを指すとし、わたしに新作の詩があるけれども、誰が己れのために伝

誦してくれようか、旻公のような人はいないと言うのは、誤りだ。この当時、王維・岑參・高適・賈至といった錚々たる連中がみな中書・門下の両省におり、友に乏しいといえようか。

棋局動^{モスレハ} 隨幽澗^(注9)ノ竹 袈裟憶上^{リシコトヲ} 泛湖^ニ船^ニ

※動：マタシテモ 憶：オモヒダサル、

此追^ニ懷^{スル} 三十年前ノ事^一也。圍^レ棋^ヲ 泛^レ湖^ニ、亦是風流ノ好事。動^ハ謂^ニ毎^ニ動^ク必然^一^(注10)ルヲ。猶^レ言^ニ毎^ニ屢^ト也。蓋旻公所^レ居有^ニ臨^レ澗^ニ對^レ竹^ニ之亭^一、尤爲^ニ清幽之境^一。公屢^ク圍^ニ棋^ヲ 於此^ニ也。伴^テ旻^ニ泛^レ湖^ニ、最是當時ノ雅興、故^ニ特^ニ憶^レ之^ヲ。而今皆爲^ル一夢^ト。亦所^ニ以^テ淚潺湲^一也。特^ニ曰^ニ袈裟^ト、見^ニ其上船^ニ態度^一^(注9)。蓋公想^ニ像^{シテ}當時^一、尙依^レ依^{トシテ}在^レ目^ニ也。若無^ハ此^ニ字^一、憶上^ニ泛^レ湖^ニ船^ニ、道得^テ有^ニ何事^一。

(注9) 〈幽〉字、錢注(卷十)は〈尋〉に作り、「一に幽に作る」と。輯註(卷四)および詳註(卷六)は〈幽〉に作り、「一に尋に作る」とする。

(注10) ちなみに、積大典の『文語解』には、「コノ字事必ノ辞ナリ。動発スルゴトニト云フ意ナリ」という。なお、吉川幸次郎『杜甫詩注 第五冊に「(動) 和調ヤヤモスレバは、必ずしも妥当でない。すなわち動不動。スナワチ和調する輒^{ちよう}と同義であり、より頻繁なツネニでもある」と説く。

これは、〈三十年〉前の事を追懷しているのである。〈棋〉を囲み〈湖〉に〈泛^{うか}〉べるのも、やはり風流の〈好事〉である。〈動〉は、動くたびにきつとそうなるという意で、毎^{つね}に、しばしばというのとほぼ同じ。けだし旻上人の住まいには〈澗〉に臨み〈竹〉を前にした亭があり、とりわけ清幽の境であつたのだらう。公は、しばしばこの場所〈棋〉を囲んだのである。旻上人に連れだつて〈湖〉に〈泛〉んだのは、もつとも当時の風雅な趣向で、それゆえ特にこれを出すのだ。されど今ではすべて一場の夢となつてしまった。やはり〈潺湲〉たるゆえんである。特にわざわざ〈袈裟〉といっているのは、船に乗り込む様子を表している。けだし公は當時を

思ひ出すと、今でもありありと懐かしく目に浮かんでくるのだ。もしこの二字がなければ、〈憶ふ湖に泛ぶ船上る〉とだけでは、いったい何事を言い得るであろうか。

聞^三君^カ話^ニ我^レ爲^レ官^ト在^一 頭^{シテ}白^ク 昏^{トシテ} 只^テ醉^ル眠^ル

※爲官：シユツセシテ 在：イキテオル 醉眠：タワイナシ

聞^ハ言^下 旻公應^中 因^テ許^ハ八^ニ聞^上レ之^ヲ也。君^ハ指^二許^ハ八^一ヲ。否^{サレハ} 則^レ題首ノ三字屬スス疣贅ニ矣。在^ハ 謂^レ未^レ死^セ。蓋^ニ旻

與^レ公一別三十年、消息茫然、莫^ニ審^ニスルコト 其出處存歟。許^ハ乃旻^カ同郷之人^ニシテ 而與^レ公同官。故^ニ旻^ハ因^テ許^ハ之

歸^一、得^レ聞^二其話^一ヲ。知^下公今爲^テ官人^ト無^レ恙存在^上也。頭^ハ白^ハ照^ニ顧^ス上^ノ老去^一ヲ。昏^ハ昏^ハ酣^ハ醉^ハノ貌^ニ。此自

道^ニ近^レ況^一ヲ。或^ハ謂^二公代^レ許^一話^ト、非^レ是^ニ。蓋^ニ公更^ニ嘆^{シテ}而^レ言^一、吾^モ亦^ハ已^ニ白^ク頭^一、非^ニ復^ニ昔^ニ日^ニ杜^ニ子^ニ美^一。雖^ニ

爲^レ官^ト存在^一、只^ハ昏^ハ昏^ハ醉^ハ眠^{シテ}、無^レ有^{コト}所^ニ發^ハ明^一スル。想^ニ上^ノ人聞^テ許^ハ話^一、爲^ニ故^ニ人^ノ喜^ハン。然^{トモ} 竟^ニ未^レ如^三

當時爲^ニ江^ニ湖^ノ浪^一人^一耳。慨^キ其不^レ得^レ行^{コト}志^一、特^ニ爲^ニ知^レ己^一者^ノ道^一。尤^ニ所^ニ以^レ淚^ハ潺^ハ湲^一。通^ハ篇^ハ開^ハ潤^ハ飄^ハ逸^一、

不^レ涉^ニ典^ノ故^一、而^レ不^レ覺^ニ空^ノ疎^一。氣^ハ有^ニ以^レ運^{スル}コト^一之^ヲ也。

(注11) 〈聞〉字、詳註〈問〉に作る。

(注12) 顧宸『註解』に「君は許八を指す。言ふところは、許と公と官を同じくす。茲に許に因つて詩を寄す。旻必ず公を許に

問ふ。許話して旻聞くなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

なお、吉川幸次郎『杜甫詩注』には、「君」すなわち許八が、我れの官と爲りて在るのを、旻公よ、あなたは聞くであろうが」と解する東陽の『杜律詳解』の説は、なお牽強を免れぬとし、「〔聞君〕を『問君』に改め、上人が君すなわち許八に問ワバ我レハ官ト爲リテ在リト話セヨ」とする明・王嗣夷^{わうしせき}『杜臆』の説を挙げ、「たとい字をそう改めても、この七字の語勢に叶わないと感ずる。もし字を改めるならば、詳注に引く張遠が、〔聞〕字を憑^{じよう}に改めるのに、傾聴してよい。〔君〕はむろん許八であり、君ニ憑^ヨツテ、どうかあなたの口から、私の現況を上人に話してくれの意となる。私自身は、字を改めなくとも、ここの〔聞君〕はすなわち『憑君』と同じ用法でないかと考えている」。

(注13) 顧宸『註解』に(注12)に挙げた箇所が続けて「官と為つて現に在ると雖も、然れども頭白くして昏昏として只だ醉眠す矣。公、許が語るに代はる此の如し」と。

(注14) 邵宝『集注』に「我今新詩有り」と雖も、誰か為に伝誦せん。旻公が好事の如くなること無き故なり。是に於いて旧遊を追述して以て旻公を忘れざるの意を見はす。又た託すらく其の我が官職に尚ほ在りと言ふことを聞くと、知らず老倦して終日醉眠して、発明する所無きことを」と。発明は、天子の耳目を明らかにすること。薛益『分類』もほぼ同じ。

(注15) ちなみに、中唐・柳宗元(七七三―八一九)の「李赤伝」に「李赤は、江湖の浪人なり」と。

〈聞く〉は、旻公が許八によつてきつと聞くはずであることを言う。〈君〉は、許八を指す。そうでなければ、題首の三字は疣や瘤のようにいらぬものになってしまう。〈在〉は、まだ死なずにいること。けだし旻公は、公と一別して〈三十年〉、消息がはつきりせず、公が官職に就いているやらないやら、生死すら定かに知らずにいた。許は旻公と同郷の人で、公とは同僚である。よつて旻公は許の帰省を機に、その話が聞けて、公が今ではりっぱに官人となつて恙なく生きていることがわかるだろう。〈頭白〉は、前の〈老去〉に照応している。〈昏昏〉は、酣酔のさま。これは自ら近況を言う。或る説で、公が許に代わつて〈語る〉というのは、正しくない。けだし公は更に嘆じて言う、自分もやはりすでに白髪頭となり、もはや昔日の杜子美ではない。官人となつてどうにか生きてはいるが、ただ〈昏昏〉と〈酔つて眠る〉ばかりで、建言して天子の耳目を開き明らかにすることができずにいる。想像するに、上人は許の話を聞いて、旧友のために喜んでくれるだろう。しかしながら結局は、その昔、江湖を放浪していた自由人であつた頃には及ばないのだ。志を実行できないのを慨嘆し、自分のことを本当に分かつてくれる者のために特に言う。とりわけ〈涙潺湲〉たるゆえんである。一首全体が朗潤飄逸(しっとりしているがさっぱりとくどくなく、すっきりと垢抜けている)であり、典故表現を用いていないものの、空疎な感じがしないのは、氣力を運らせているからである。

017 題ス鄭縣ノ亭子ニ (〇二二九)

鄭縣ハ屬ス長安ノ華州ニ。亭ハ即遊春亭^(注2)。在ニ華州城ノ西南五里西溪之上ニ。一名清溪亭。此レ公貶セラル華州ノ功曹ニ

時ノ作。故ニ有ニ結句之感ニ。老學菴筆記ニ云、鄭縣ノ清溪、在ニ官道ノ旁七八十歩ニ。澄深可愛。亭掲ニ此詩ヲ。

(注1) 鄭県は、華州に治所が置かれ、県の等級は望(唐代の州県は、その重要度や戸数の多寡によって、州は輔・雄・望・辺・大・中・小・下、県は赤・畿・望・緊・上・中・下)に格付けされており、その等級が地方官の品秩や俸給にも関係した。今の陝西省華県。なお、ここで「長安の華州に属す」というのは、邵宝『集註』(卷二十三、樓閣類)や薛益『分類』(卷二、亭樹)に「鄭県は即ち長安の華州なり」とあるのに従うが、適切ではない。

(注2) 『大明一統志』卷三十二、西安府上、宮室の部に「遊春亭」の項があり、「華州城の西南五里西溪の上に有り。即ち杜甫詩の所謂鄭県亭子澗の演なり」と注す。『一統志』は、輯註(卷五)にも引く。

(注3) 功曹は、司功参軍事。官吏の勤務評定や文教行政を掌る。華州司功参軍事の品階は従七品上。杜甫が華州に出されたのは、乾元元年(七五八)六月のことである。ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷六)は仇兆鰲の説に従って「作者華州へ赴任せんとする時の作ならん」という。陳胎燾『杜甫評伝』上巻も同様の見解。また鈴木注は次の018「望嶽」詩についても「華州に赴任するとき、途^{みち}にて華山をのぞんで作れるなり」とする。

(注4) 南宋・陸游(号は放翁。一一二五―一二二〇)の著。その巻六に、「先君、蜀に入る時、華の鄭県に至り、西溪を過^よぎる。唐の昭宗、兵を避けて嘗て之に幸す。其の地、官道の旁ら七八十歩に在り。澄深愛す可し。亭を西溪亭と曰ふ。蓋し杜工部詩の所謂亭子澗の濱なる者なり」と。輯註や顧宸『註解』に「陸游筆記」として挙げ、宇都宮逕庵の増広本にもこれを引く。

〈鄭県〉は、長安の華州に属した。〈亭〉は、遊春亭のこと。華州の州城から西南五里のところ、西溪のほとりにある。一名、清溪亭。これは、公が華州の功曹に貶せられた時の作である。だから結句の感慨があるのだ。『老学庵筆記』に云う、「鄭県の清溪は、官道の傍ら七八十歩入ったところにある。水は深く澄んでいてすばらしい。亭にこの詩が掲げられている」。

鄭縣ノ亭子澗之濱

戸牖憑^レ高^ニ發^ル興^ヲ新ナリ起句言^下亭臨^ニ清溪^ニ、景境清幽^上也。詩ノ召南^ニ于^ニ以采^レ蘋^ヲ、南澗之濱。曹子建應^レ詔^ニ涉^ニ澗之濱^一、緣^ニ山之隈^ニ。韻脚用^ニ斯語^ヲ。牖音酉、窓也。憑^レ高^ニ發^ル興^ヲ言^ニ心目恍然^一。下皆望中所^レ見之景。

(注5) 『詩經』 召南・采蘋。ちなみに、蘋は水草。和名デンジソウ。

(注6) 『文選』 卷二十。曹子建は、魏・曹植(字は子建。諡は陳思王。一九二〜二三二)のこと。『三国志』 魏書卷一九に伝があり、興膳宏編『六朝詩人伝』に訳注(林香奈執筆)を収む。

起句は、〈亭〉が清溪に臨んでおり、その辺りが静かで清らかなことを言うのである。『詩經』 召南に「于^ニに蘋を采る、南澗の濱」、曹子建の「詔に応ず」詩に「澗の濱を涉り、山の隈に縁る」とあり、脚韻にかかる語を用いている。〈牖〉、字音は西^{ゆう}、窓である。〈高きに憑って興を発す〉は、見惚れてうっとりしていることを言う。以下、すべて眺めて目に入った景色である。雲斷^テ嶽蓮臨^ニ大路^ニ 天晴^テ宮柳暗^シ長春^ニ※臨^ニフシノゾク雲斷^ハ、雲開也。西嶽華山、峰如^ニ蓮花^ノ、故曰^ニ嶽蓮^ト。華山^ニ記^ニ山頂有^レ池、生^ニ千葉ノ蓮花^ヲ、因^テ名^ト曰^ト華山^ト、安ナリ矣。明ノ王履華山玉女峰ノ記^ニ西峰ノ東面窅隆如^ニ蓮花^ノ。此所^レ謂蓮花峰也。安ソ有^ニ峰頭玉井之產^一。臨^ハ謂^ニ兀然孤高之狀、若^ニ向^レ下^ニ窺視者^ノ。與^ニ崔顥^ノ詩^ニ崑崙^ノ太華俯^ニ咸京^ニ同^シ。大路^ハ地名、非^ニ泛稱^ニ也。(注1) 晉書^ニ檀道濟從^ニ劉裕^ノ伐^ニ姚泓^ヲ、至^ニ潼關^ニ、姚鸞屯^ニ大路^ニ以^ニ絶^ニ道濟^ノ糧道^ヲ。通鑑^ノ註^ニ自^ニ澠池^ノ西入^レ關^ニ有^ニ兩路^一。南路^ハ由^ニ回谿阪^ニ。曹操惡^ニ其檢^ヲ、更^ニ開^ニ北路^ヲ。是^ニ爲^ニ大路^ト、是也。蓋登^レ亭^ニ之初、華山爲^レ雲ノ所^レ藏^サ、既^ニシテ而雲開、蓮峰兀然現^シ乎天表、峻峰崑崙之勢、若^ニ直^ニ向^ニ大路^ニ俯^シ臨^ム者^ノ然也。暗^ハ謂^ニ鬱鬱^{タルヲ}。長春^ハ宮ノ名。後周ノ武帝所^レ築、在^ニ強梁原^ノ上^ニ。去^レルコト亭^ヲ頗近^シ。蓋天氣快晴^{シテ}、各處明朗^ニ、

獨長春宮ノ故址、楊柳鬱茂^{シテ}而暗^ク、物色渾然^{タル}也。蓮柳眞假對。^(注1)

(注7) 薛益『分類』に挙げ、宇都宮遷庵の増広本に引く。『初學記』卷五、華山の条に「華山記に云ふ、山頂池有り、千葉の蓮花を生ず。之を服せば羽化す。因つて華山と曰ふ」と。

(注8) 明・屠本峻編『山林經濟籍』第十一冊に、元・王履「華山三記」を収録し、そのうちの「宿玉女峰記」に見える。ちなみに、王履(字は安道)は元末明初の医家。『明史』卷二九、方伎伝に「詩文に工^{たう}にして、兼^{また}絵事を善くす。嘗て華山の絶頂に遊び、図四十幅、記四篇、詩一百五十首を為り、時の称する所と為る」とある。

(注9) 盛唐・崔顥(?、七五四)の「行きて華陰を経」詩に、

崑崙太華俯咸京 崑崙たる太華 咸京に俯す

天外三峰削不成 天外の三峰 削れども成らず

武帝祠前雲欲散 武帝の祠前 雲散せんと欲し

仙人掌上雨初晴 仙人の掌上 雨初めて晴る

河山北枕秦關險 河山 北のかた秦関に枕して險しく

驛路西連漢時平 驛路 西のかた漢時に連なつて平らかなり

借問路傍名利客 借問^{しやもん}路傍名利の客

無如此處學長生 此処に長生を学ぶに如く無し

とある。この詩は、『唐詩選』卷五にも収む。崔顥は、開元十一年(七二三)の進士。最終の官位は司勳員外郎。その「黃鶴樓」詩は、李白がそのすばらしさに脱帽した作品として知られる(『唐才子伝』卷一)。

(注10) 『唐詩貫珠』(卷三十六、郊野)に「陝華の間、地有り大路と名づく。泛称に非ざるなり」と。ちなみに鈴木虎雄『杜少陵詩集』は「街道をさす」とする。

(注11) 『晋書』卷一一九、姚泓伝。錢注および輯註に挙げ、宇都宮遷庵の増広本に輯註を引く。

(注12) 『資治通鑑』卷一一八、晋紀四十、安帝義熙十三年(四一七)三月の条、胡三省の注。輯註に挙げ、宇都宮遷庵の増広本に引く。

〔注13〕 錢注および輯註に『太平實字記』（卷二十八）を挙げて「長春宮は強梁原の上に在り。周の字文護の築く所」、また『唐詩貫珠』に『大明一統志』を挙げて「長春宮は、同州朝邑県治の西北に在り、後周武帝の時築く所」と。

〔注14〕 『唐詩貫珠』に「天晴れて各処明朗、独り柳茂盛して暗く、長春宮を見ず」と。

〔注15〕 真仮対については、008の〔注28〕参照。

《雲断》は、雲の開けることである。西岳の華山は、峰が蓮華のことであることから、《岳蓮》という。「華山記」に「山頂に池があつて、千葉の蓮花を生ずる。それで名づけて華山という」とあるが、でたらめだ。明・王履の「華山玉女峰の記」に「西峰の東面は、でこぼこして蓮華のようだ。これがいわゆる蓮華峰である。どうして峰頭に玉井の産することがあろうか」と。《臨》は、兀然として聳え立つ山容が、下の方を窺い見ているかのようなのであるをいう。崔顥の「岧峴たる太華咸京に俯す」と同じ。《大路》は地名で、泛称ではない。『晋書』に「檀道濟が劉裕に従つて姚泓を伐たんとして潼関に至ったが、姚鸞が大路に駐屯して道濟の糧道を絶った」とあり、『資治通鑑』の注に「澠池べんちより西のかた関に入るのに二つの路がある。南路は回谿阪を経由するが、曹操がその險なるを嫌い、北路を開かせた。これが大路である」というのが、それである。けだし亭に登った当初は、華山は雲に隠れていたが、やがて雲が開け蓮峰が天表に兀然と姿をあらわしたのだろう。峻しく聳え立つ山勢は、《大路》に迫り見下ろしているかのようなのである。《暗》は、鬱蒼たること。《長春》は、宮殿の名。後周の武帝が築いたもの。強梁原にあり、亭からはとても近い。けだし天氣は快晴で、どこもくつきりと見えているのに、長春宮の遺址だけは、楊柳が鬱蒼と茂つて仄暗く、定かには見分けられないのである。《華》と《柳》とは、真仮対。

巢邊ノ野雀羣カリテ欺レ燕ヲ
花底ノ山峰遠ク趁レ人ヲ

※欺：アナドル

巢ハ即雀ノ巢^(注16)。欺ハ謂^レ陵^キ侮^ルヲ。野雀侮^レ燕^ヲ羣噪^{シテ}而逐^レ之^ヲ也。蓋恃^レ衆^ヲ侮^ル寡^ヲ、野雀ノ常態。小人ノ狀態、亦類^{スル}此^レ者多^シ矣。花間ノ遊蜂、動^{モスレハ}欲^{シテ}螫^{ント}人^ヲ、走^テ而避^{レハ}之^ヲ、乘^{シテ}勢^ニ趁^ル來^ル、亦小人ノ態^{ナル}哉。此皆即景^(注17)所^レ見^ル、公適^ノ觸^{レテ}感^ニ、直^ニ詠^{シテ}以^テ託^{スル}意^ヲ也。胡燮亭云、此雖^(注18)眼前之事^ト、然^{トモ}亦以嘆^ス小人^ヲ、否^{サレハ}則是^ノ聯非^ニ勝槩^ノ可^レ取^ル、何必^{シモ}用^シ也。況^ヤ下有^ニ幽獨傷^レ神^ヲ之語^一。蓋野望ノ間起^ニ幾許ノ閒情^ヲ。自^三其貶^{レテ}華州^ニ、小官趨走^(注19)之際、與^ニ俗吏^一爲^レ伍^ヲ、以^ニ謫宦^ヲ見^レ侮^ル、或^ハ腐鼠嚇^ス鳳^ヲ、所^ニ以觸^{レテ}境^ニ感嘆^一也。

(注16) 鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷六)は、燕の巢をいうとする。

(注17) 顧宸『註解』に「雀の燕を欺^{あだ}り蜂の人を趁^おふは、亦た即景の見る所」と。但し顧宸は「諸註、群小の讒譖に喩ふ。詩必ずしも此の解を著けず」と注意する。宇都宮遷庵の両著にも、これを引く。

(注18) 『唐詩貫珠』に「五六は眼前の事と雖も、然れども亦た小人を足らずとするの意有り。否^{しか}らざれば則ち此の聯、勝概の取る可きに非ず、何ぞ必ずしも用ひんや。況んや下に幽独神を傷むの語有り。蓋し野望の間、幾許の間情を起こす。大都華州司功に謫せられ、時に顛倒して衣裳を着するの際、俗人と伍を爲し、腐鼠鳳を嚇^{おど}す有り。豈に少陵の眼界中着得せんや。終に之を棄てて去るのみ」と。〈顛倒して衣裳を着する〉は、022「至日興を遣る。北省の田閣老、兩院の故人に奉寄す」二首其一に見える語。『詩經』齊風、東方未明に「東方未だ明けず、衣裳を顛倒す。之を顛し之を倒す、公自^レ之を召す」とあるのに基づく。慌てて衣服を逆さまに着る意で、公務の多忙なことをいう。

(注19) 趨走は、公務のために奔走すること。「官定まりて後、戯れに作る」詩(詳註卷三、〇一一九)に「老夫趨走を怕れ、率府且く逍遙せん」と。また022にも、この語が見え、東陽は「トチカサスル」と左訓を施し、「趨走は、身、掾吏と爲つて郡將に趨調し、折腰の勞に勝^かへざるを言ふなり」と注する。

(注20) 下劣の輩が尊貴な者に対して、己れの劣情で判断し、自分のものをとられはしないかと恐れて威嚇すること。『莊子』秋水篇に、「恵子、梁に相たり。莊子往きて之に見^まゆ。或るひと恵子に謂ひて曰く、莊子來たり。子に代はりて相たらんと欲す。是に於いて恵子恐れ、国中を搜すこと三日三夜なり。莊子往きて之に見えて曰く、南方に鳥有り、其の名は鷓鴣也。

子之を知るや。夫の鵲雛、南海を發して北海に飛ぶ。梧桐に非ざれば止まらず、練（棟）実に非ざれば食らはず、醴泉に非ざれば飲まず。是に於いて鵲は腐鼠を得て、鵲雛の之を過るに、仰いで之を視て曰く、嚇と。今、子は子の梁国を以てして我を嚇せんとするか」と。

《巢》は即ち雀の巢。《欺》は、凌ぎ侮ること。《野雀》が《燕》を侮り、群れ噪いで追い払うのである。けだし衆を恃み寡を侮るは、《野雀》の常態。小人のありさまも、同じくこれに類することが多い。《花》の間を飛び回る《蜂》は、いつも人を刺そうとし、走り去って避けようとすれば、かさにかかつて追いかけて来る。これもやはり小人の姿であることよ。これはすべて見たままの情景で、公はそのおり心に感じて、そのまま詠じて思いを託したのである。胡燮亭が云う、「これは眼前の光景ではあるが、それとともに小人を嘆じている。さもないれば、この聯は格別取り上げるような絶景ではなし、どうして用いる必要があるうか。ましてや下句に《幽独》《神を傷む》といった語があるのだ。けだし野外を遠望しているあいだに、とりとめもない思いが湧き起こったのであろう」と。華州に貶せられてから、小役人として駆けずり回り、俗吏と肩をならべ、左遷の身を侮られ、あるいは腐鼠鳳を嚇すようなことがあったのかも知れない。境遇に触発されて心感じ嘆いているわけだ。

憂^ニ欲^ニ題^{シテ}詩^ヲ滿^{シテ}青竹^ニ 晚來幽獨恐^{クハ}傷^{シメ}神^ヲ

溪上多^ニ美竹^ニ故^ニ云^ニ。蓋亭之勝槩。發^レ興^ヲ之新ナル、以^ニ一詩未^レ足^ス盡^ス、故^ニ更^ニ欲^ニ多題^一。適^ニ日已^ニ迫^レ暮^ニ、又無^{シテ}人而已獨留^{マル}、恐^ハ徒^ニ致^{サツ}傷^{コトヲ}神^ヲ、且一吟^{ニシテ}而止^ミ、草草^ニ歸去也。晚來幽獨四字、見^ニ謫宦淒涼之況^ヲ。始^ニ之發^{スル}興^ヲ、終^ニ致^ス傷^{コトヲ}神^ヲ、所謂興盡^テ而還^ル也。

〔注21〕 薛益『分類』に「望む所の形勝に即けば、一詩未だ足らざると為るすを以て、故に更に多く題せんと欲す。又た衆皆散じて己れ独り留まる。恐らくは徒に己が神を傷まんことを。且つ一吟して止む」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。

〔注22〕 顧宸『註解』に「晚來幽獨の四字、謫宦淒涼の況を見る」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。

〔注23〕 『世說新語』任誕篇に「王子猷（徽之）山陰（今の浙江省紹興市）に居りしとき、夜大いに雪ふる。眠り覚めて、室を開

き、命じて酒を酌ましむるに、四望皎然たり。因つて起ちて彷徨し、左思の招隱詩を詠じ、忽ち戴安道（逵）を憶ふ。時に戴は刻に在り。即便ち夜小舟に乗りて之に就き、経宿して方に至る。門に造りて前まずして返る。人、其の故を問ふに、曰く、吾れ本と興に乗じて行き、興尽きて返る。何ぞ必ずしも戴を見んや」とある。

溪のほとりに美竹が多いのでかくいう。けだし〈亭〉のすぐれた景色であらう。詩興を新たに催し、一首では言い尽せないで、さらに多く書きつけようとしたが、おりしも日は暮れ方に迫り、そのうえ他に人もおらず、自分ひとり留まれば、おそらくいたずらに〈神（こころ）を傷め〉ることになるだろうと心配し、まずは一吟してやめ、慌しく帰るのである。〈晚来幽独〉の四字に、左遷された身の物寂しい様子が見てとれる。始めの〈興を発す〉るのが、終に〈神を傷め〉る結果となっているのは、いわゆる「興尽きて還る」というものである。

018 望嶽^ヲ

公在^テ華州^ニ望^ミ太華山^ヲ、欲^ニ登覽^{セント}、因^テ所^レ賦^ス也。太華高七千丈、周廻二千里、三峰壁立、突兀^{トシテ}插^レ天^ニ、在^ニ華州華陰縣^ノ南^一。

（注1）『大明一統志』卷三十二、西安府上、山川の部に太華山の条あり、「華陰県の南二十里に在り、即ち西嶽なり。西に小華山有るを以て、故に此れを太華と曰ふ」と。

（注2）何に拠ったか、不明。『山海経』西山経には、太華山について「其の高さ五千仞、其の広さ十里」という。ちなみに、中唐・李賀（七九一〜八一七）の「陳商に贈る」詩にも「太華五千仞」と。一仞は七尺もしくは八尺。一丈は十尺。

公が華州にあって太華山を望み、一度登ってみたいと思ひ、それで作った詩である。太華は高さ七千丈、周廻二千里、三つの峰が壁のように立ち、高く突き出て天に刺さっており、華州華陰県の南にある。

西嶽峻嶒^{トシテ}竦^ル處尊^シ、諸峯羅立^{シテ}似^ニ兒孫^ト。

華山^ハ五嶽之西嶽也。峻嶺^{（注6）}登反。峻嶺^ハ山重疊^{スル}貌。竦^ハ峻峭也。竦處尊^ハ指^ニ中央^ノ三峰^ヲ。次^ノ句承^ニ尊^ノ字^ヲ、諸峰羅^ニ列^{スル}。其下^ニ、無^ニ敢^テ比^レ肩^ヲ者^一。如^ニ羣子孫侍^ニ立父祖^ノ膝下^ニ。明^ノ李之椿遊^ニ華山^ニ記^{（注7）}云、環^ニ潼津京兆^ノ間^ヲ、億青萬碧、兒孫羅^ス列、皆太華之別址也。此可^レ作^ニ注解^ト。

〔注3〕《竦處尊》の三字、東陽は「竦^{（注5）}ゆる處尊^{（注6）}し」と訓じており、その場合《處》は去声となるが、元禄九年（一六九五）刊の宇都宮遯庵増広本および元禄十年刊の詳説は、「竦^{（注7）}へテ處^{（注8）}尊^{（注9）}し」と訓点を施す。この《處》は上声。なお、遯庵や東陽が底本とした邵傳『集解』の原文には《處》字の下に上声と注している。東陽と同様の訓点を附したものに慶安四年（一六五二）刊の薛益『分類』（巻二、地理）や万治二年（一六五九）刊の『杜律七言鈔』があり、これに対して明暦二年（一六五六）刊の邵宝『集註』（巻二十三、地理類）および元禄六年（一六九二）刊の顧宸『註解』は遯庵のそれと同じである。ちなみに鈴木虎雄『杜少陵詩集』（巻六）は「竦處すること尊し」と訓じ、「處は居ること。上声によむ」と注する。これは詳註が上声とするのに従ったもの。

〔注4〕《立》字、輯註（巻五）に「一に列に作る」と注し、『唐詩貫珠』（巻三十九、名山）や『而庵說唐詩』（巻十八）は《列》に作る。

〔注5〕《似》字、錢注（巻十）および輯註（巻五）は《如》に作り、「一に似に作る」と。輯註は、宇都宮遯庵の増広本に挙げ

る。〔注6〕『文選』巻二十二、梁・沈約の「鍾山詩、西陽王の教に応ず」詩に「鬱律として丹巘を構へたり、峻嶺として青嶂を起こす」とあり、慶安五年（一六五二）刊の和刻本は《峻》字の下に、「盧登」と注記する。反切による字音表示。また五臣注に「峻嶺は重疊の貌」と。

〔注7〕『唐詩貫珠』に「明の李之椿が太華山の記に云ふ、潼津京兆の間を環して、億青萬碧、兒孫羅列す、皆太華の別址なり。三峯の影、函関を度り、積翠飛び来たり、衣袂俱に五色の雲と成る矣。此れ注脚と為す可し」と。

なお、李之椿（字は大生、一六四九年歿）は、天啓二年（一六二二）の進士。『指樹園集』があるという。清・朱彝尊『明詩綜』巻七十五に小伝がある他、張慧劍『明清江蘇文人年表』にも見える。

華山は、五岳のうちの《西岳》である。《峻》は、盧登の反。《峻嶺》は山の重疊するさま。けわしく高いことで

ある。〈疎る処尊し〉は、中央の三つの峰を指す。次句は〈尊〉の字を承け、峰々がその下に列なつて、あえて肩を並べるものではなく、子や孫たちが父祖の膝下に侍り立っているかのようである。明・李之椿の「華山に遊ぶ記」に云う、「潼津・京兆の間をぐるりと取り巻いて、ずっと青や碧の山々が子や孫のように列なっている。どれも太華山の別址である」と。これを注解とすることができよう。

安^レ得^テ仙人ノ九節杖^一 拄^テ到^{ラン}玉女ノ洗頭盆^一

※安^ニドウシテカ 拄^ニチカラニシテ

諸註謂^ニ、列仙傳王烈受^ニ赤城老人九節ノ蒼藤竹杖^一ヲ、行^{コト}地^ヲ如^レ飛^カ、馬不^レ能^レ追^{コト}。列仙全傳無^ニ此事^一。費

長房傳有^ニ仙人授^ニ九節杖^一之事^上。雖^下與^ニ華山^一沒交涉^上、只用^テ謂^ニ仙遊之輕健^一ヲ耳。華山絶頂之險、殆非^ニ人

力ノ易^ニ到^一、故^ニ思^レ得^レ之^ヲ也。錢箋引^ニ劉根外傳^一、鑿^{ナリ}矣。玉女^ハ峰ノ名。卽三峰之一頂、有^ニ玉女ノ祠^一。

集仙錄^ニ明星玉女居^ニ華山^一ニ、服^{シテ}玉漿^ヲ、白日升^レ天^ニ。祠前^ニ有^ニ石白^一、容^ニ水數斛^一、明瑩如^レ玉ノ、俗呼^テ

爲^ニ玉女ノ洗頭盆^一。明ノ王履登^ニ玉女峰^一ニ記^ニ洗頭盆在^ニ玉女殿ノ前^一。蓋石上ノ一石坎ノミ爾。水紺碧^ニ不^レ乾。

此詩夏日之作、故^ニ特^ニ望^レ之^ヲ、想^ニ其清涼^一也。

(注8) 宇都宮遯庵の詳説に「諸註、王烈力故事ヲ引。赤城老人ト云者王烈ニ九節ノ蒼藤竹ヲ授ク。此杖ヲ拄ヘテ行トキンバ、

馬モ不^レ能^レ追ト云。此事列仙伝王烈字長休ガ伝ニ不^レ見」という。増広本にも既に同様の指摘がある。なお、『列仙伝』は、漢・劉向の撰と伝えられるが、魏晉の頃に作られたものらしい。平凡社・中国古典文学大系8『抱朴子列仙伝・神仙

伝山海経』の解説(沢田瑞穂執筆)参照。

(注9) 明・王世貞編の『有象列仙全伝』のこと。慶安三年(一六五〇)刊本、竺常すなわち釈大典の序を附した寛政三年

(一七九一)刊本などがある。

(注10) 宇都宮遯庵の増広本に九節杖の事は『列仙全伝』に見えぬとした後に「九節杖を授くるの事は纔かに費長房が伝の中に
出づるのみ」というが、『後漢書』卷八十二下、方術伝下の費長房伝には見えない。

(注11) 邵傳『集解』に「洗頭盆は華山雲台の上に在り。乃ち峰の絶頂。疑ふらくは人力の到り易きに非ず。故に仙人の杖を得んことを思ふ」と。

(注12) 錢注に「劉根外伝に、漢の武帝、少室に登る。一女子を見る。九節の杖を以て仰いで日を指す」と。輯註に引き、宇都宮遯庵の増広本に輯註を挙げる。『劉根外伝』は、『太平御覽』卷七一〇、服用部十二、杖の項に見える。なお、劉根は後漢の人で、嵩山に隠居した(『後漢書』卷一二二)。

(注13) 輯註および張遠『会粹』(卷六)に「集仙録に、明星玉女は華山に居り、玉漿を服し、白日に天に升る。王女祠前に石臼有り、号して玉女洗頭盆と曰ふ。其の中の水色碧綠澄徹、雨にも溢るることを加へず、卑「旱」にも減耗せず。祠内に玉女馬一匹有り焉」と。これは『太平広記』卷五十九、明星玉女の条に「集仙録に出づ」として挙げる。〈卑〉は旱の訛字。輯註は宇都宮遯庵の増広本に、また『会粹』は詳説にこれを引く。なお、『唐詩貫珠』には「三峰記に曰く、華山雲台上に石盆有り。水数斛を容る可し。明瑩玉の如く、俗に呼びて玉女洗頭盆と為す」と。

(注14) 『唐詩貫珠』に挙げる。但し、〈一石坎〉を〈一圓坎〉に作る。王履については、前詩017の(注8)参照。

諸注にいう、『列仙伝』に「王烈が赤城老人から九節の蒼藤竹杖を授かり、地を行くこと飛ぶがごとく、馬でも追いつけなかった」と。『列仙全伝』には、この記事がない。費長房の伝に、仙人が九節の杖を授ける話がある。華山とは無関係だが、用いて仙遊の軽捷なることをいっただけなのだ。華山の絶頂の険しさは、ほとんど人の力では容易に到達できるものではない。さればこの杖を得たいと思うのである。錢箋に『劉根外伝』を引いているのは、穿ちすぎである。〈玉女〉は峰の名。すなわち三峰のひとつで、玉女祠がある。『集仙録』に「明星玉女は華山にいて、玉漿を服し、白日天に昇った。祠の前に石臼があり、水数斛を容れ、明るく輝いて玉のようである。俗に呼んで玉女の洗頭盆という」と。明・王履の「玉女峰に登る記」に「洗頭盆は玉女殿の前にある。けだし石上のくぼみに過ぎない。水は紺碧で乾くことはない」と。この詩は夏日の作であるから、特にこれを望み、その清涼なるのを想像しているのである。

車箱入^レ谷^ニ無^ニ多路^一 箭栝通^レ天^ニ有^ニ一門^一

※無多路…ワキミチナシ

車内容^レ物^ヲ虚爲^レ箱^ト。^(注15)言^レ似^ニ箱篋^ノ之形^ニ。實^(注16)字記^ニ車箱谷^ニ在^ニ華陰^ノ西南^ニ。深^{コト}不^レ可^レ測。祈^レ雨^ヲ者^ヲ以^レ石^ヲ

投^レ之^ニ、中^ニ有^ニ一鳥^一飛出、應^シ時^ニ獲^レ雨^ヲ。蓋^ニ幽壑^ノ無^レ底、絕壁^四圍、狀如^ニ車箱^ノ、傍^レ崖^ニ僅^ニ有^ニ一逕^一耳。故^ニ曰^レ無^ニ多路^一。是登^レ嶽^ニ背後^ノ一條^ノ徑也。多^ニ作^レ歸^ニ、或^ハ作^レ廻^ニ、竝^ニ非^{ナリ}。栝^一作^レ筈^ニ、或^ハ作^レ括^ニ。韻會^ニ栝^一與^ニ筈^一俱^ニ通^ス。箭端受^レ弦^ヲ處。蓋^ニ峰雙時^ノ似^レ之^ニ、故^ニ名^{ツク}爾^歟。舊^(注20)說^ニ箭筈峰^ノ上有^レ穴、

纔^ニ見^レ天^ヲ、攀緣^シ自^ニ穴中^一而上^ル、有^ニ至^ニ絕頂^ノ者^一上^ル。一門^一即謂^レ穴^ヲ也。然^トモ^セ箭筈嶺^ハ自在^ニ岐山^ニ。^(注17)按^ニ地理^ノ諸書^ヲ、竝^ニ不^レ云^ニ華山^ニ有^ニ箭栝^一。韓^(注22)非^子秦^ノ昭王^ノ令^テ工^ヲ施^シ鉤梯^ヲ而上^ニ華山^ニ、以^ニ松栢^ノ之心^ヲ爲^ニ博箭^ト、與^ニ天神^一博^ス。水經^ノ註^ニ自^ニ下廟^一歷^ニ列栢^ヲ、南^ニ行^{コト}十一里、東^ニ廻^{コト}三里^ニシテ、至^ニ中祠^一。又西

南^ニ出^{コト}五里、至^ニ南祠^一。從^レ此南^{シテ}入^レ谷^ニ八里、至^ニ天井^一。井^ニ纔^ニ容^レ人^ヲ。迂回^{シテ}而上^ル可^ニ長^サ六丈餘^一。上^ル者皆所^ニ由^テ涉^ル、更^ニ無^ニ別路^一。出^テ、井^ヲ望^レ空、視^ル明^ヲ如^ニ在^レ室^ニ窺^カ窗^ヲ矣。此與^ニ通^レ天^一一

門^ノ語^一甚合^ス。所^レ云^ニ列栢^ハ、豈^ニ即^ニ箭栝^カ耶。初^(注24)學^記ノ事類^ニ亦^ニ以^ニ蓮峰^一對^ニ栢箭^一、則^ニ箭栝^ハ乃^ニ栢字^ノ之訛^耳。李

攀龍遊^ニ華山^一記^ニ又云、自^ニ昭王^一施^{セシ}鉤梯^ヲ處^一、西南^ニ上^{コト}三里^ニ許、得^ニ一峽^一、如^レ栝^ノ。曰^ニ天門^一。豈復後

人^ヲ因^テ公^ノ詩^ニ附會^{スル}乎。右朱鶴齡^(注26)輯註^カ姚寬^カ所^レ考附識^{シテ}以^ニ資^ニ考證^一。

(注15) 『詩經』小雅・大東の疏に「車内物を容るる処を謂ひて箱と為す」と。

(注16) 『太平實字記』のこと。北宋・樂史撰。その卷二十九、関西道・華州華陰県の条に「車箱谷、一名車水渦。県の西南二十五里に在り。敷水谷を去ること七里。深さ測る可からず。雨を祈る者石を以て之に投すれば、中に一鳥有り飛び出づ。時に応じて雨を獲」と。錢注に挙げるのを、輯註に引く。また顧宸『註解』にもこれを挙げる。宇都宮遷庵の増広本には輯註を、詳説には顧註を引く。

(注17) 〈多〉字、錢注および輯註は〈歸〉に作り、「一に回に作る」と。この他、『而庵說唐詩』も〈歸〉に作る。

(注18) 輯註に「一に括に作る」と。

(注19) 輯註に、(注18)に挙げた箇所が続けて「按ずるに韻会に筈は通じて括に作る。亦た括に作る」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。《韻会》は『古今韻会举要』のこと。その巻二十七、入声七、筈字の注に「広韻に筈は弦を受くる処。通じて括に作る。説文に矢括は築弦の処、亦た通じて括に作る」と見える。

(注20) 例えば、薛益『分類』に「華山記に箭筈峰の上に穴有り、纔に天を見る。攀縁して穴中自りして上れば、絶頂に至る者有り」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注21) 輯註に「姚寛云ふ、箭筈嶺は自から岐山に在り」と。(注26) 参照。以下の按語を含めて、宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

(注22) 『韓非子』外儲説左上。

(注23) 北魏・酈道元『水経注』巻四、河水、「又た南して華陰の潼関に至る。渭水西從り來たり之に注ぐ」の条。なお、『水経注』には、森鹿三他による抄訳がある(平凡社『中国古典文学大系21』)。

(注24) 『初学記』巻五、地部上、華山の条。

(注25) 明・李攀龍(字は子鱗、号は滄溟。一五一四―一五七〇)の「太華山の記」(『滄溟先生集』巻十九)。但し、集では「自」を此即の二字に作る。また《昭》字の上に秦の字があり、《王》の下に使人の二字がある。

(注26) 南宋・姚寛(一一〇五―一一六二)の『西溪叢語』巻下に「老杜望岳詩に云ふ、車箱谷に入りて帰路無し、箭括天に通じて一門有り、と。述征記に云ふ、栢谷、谷の名なり。漢の武帝微行し、至る所の谷中、車を回らず地無し。夾むに高原を以てし、栢林陰鬱、窮日幽暗、殆ど陽景を覩ず、と。鳳翔の岐山、禹貢に云ふ、梁及び岐を治むと。又た曰く、荆岐既に旅すと。其の山本と両岐有るを以て、故に呼びて歧路の歧と為す。今俗に呼びて箭筈嶺と為す」と。なお、『述征記』は郭縁生撰。もと二卷(『隋書』経籍志)あったが、散逸。姚寛が引く箇所は、『太平御覧』巻九五四、木部三、栢の条にも見える。禹貢は『尚書』の篇名。

車内の人や物をいれる場所を《箱》という。長方形の箱のかたちに似ているのを言う。『寰宇記』に「車箱谷は華陰県の西南にある。深さは測り知れない。雨を祈願する者が石を投げいれると、なかに一羽の鳥がいて飛び

出してくる。すると時に応じて雨を獲る」と。けだし奥深い谿は底なしで、絶壁が四方をとりまき、そのありさまが《車箱》に似ており、崖づたいに一本の小路が通じているだけであるので、《多路無し》と言うのである。これは嶽に登る背後の一条の徑である。《多》字は、一に歸に作り、或いは廻に作るが、どちらもよくない。《栝》字は、一に筈に作り、或いは栝に作る。『韻会』に「栝と筈、栝とは、俱に通ず。箭端の弦を受けるところ」と。けだし二つの峰がならび聳えているのがこれに似ているので、名づけたのだろうか。旧説には、箭筈峰の上に穴があり、わずかに天が見える。穴の中を攀じ登ってあがると絶頂に至る。《一門》は、その穴のことにほかならない、とする。しかしながら、箭筈嶺はそもそも岐山にある。按ずるにいろんな地理書にも、どれも華山に《箭栝》があるとは言わない。『韓非子』に「秦の昭王が工人に命じて鈎のついた縄はしごをかけさせて華山に登り、松柏の芯で双六を作り、天の神と勝負を競った」と。『水経注』に「下廟から柏の林（列栢）をへて、南に行くこと十一里、東にめぐること三里にして、中祠に至る。また西南に出づること五里にして、南祠に至る。ここから南に進んで谷に入ること八里にして、天井に至る。天井はやつと人が入れる広さ。くねくねと上ること、その高さほぼ六丈餘。登る者はみなここを通り、まったく別の路はない。天井を抜け出て空を望むと、ぱつと明るくなるのは室内にいて窓をのぞくようなものである」と。これは《通天》や《一門》の語とぴったり合う。ここに云う「列栢」は、すなわち《箭栝》なのであろうか。『初学記』の事類にも、やはり「蓮峰」を「栢箭」と対語にしている。だとすれば《箭栝》（の栝）は、なんと栢字の訛まりなのだ。李攀龍の「華山に遊ぶ記」にさらに云う、「昭王が鈎のついた縄はしごをかけさせた場所から、西南に登ること三里ばかりで、一つの峽につく。栝のごとくして天門という」と。後人が公の詩によって附会したのであろうか。右の「按ずるに」以下は、朱鶴齡が輯註で姚寛の考察に附け加えて考證に資したものである。

稍待^{ニテ}秋風涼冷^ノ後^一

高^ク尋^{ニテ}白帝^ヲ問^ニ眞源^一

※稍：チクト

稍待^ハ言^ニ纔^ニ涼^クハ、即登^シ、不^レ致^ニ曠^久ヲ也。高尋^ニ白帝^ヲ言^レ凌^ニ絶^頂ヲ。白帝^ハ金神司^{レル}秋^ヲ。此借^テ謂^ニ嶽神^ヲ。
 周禮^(注27)五帝、白帝^ハ西方之帝。華山^ハ西嶽、且待^テ秋^ヲ欲^レ登^シト、故^ニ曰^レ尋^ニ白帝^ヲ。洞天記^(注28)華山^ハ名^ニ太極總仙^ノ之
 天^ト。即少昊^ヲ爲^ニ白帝^ト治^ニ西嶽^ヲ、則直^ニ謂^ニ華山神^ノ名^一也。眞源^(注29)道眞之源。梁^(注30)劉孝儀鍾山ノ詩^ニ廻^シレ^テ與^ニ下
 リ重閣^ヲ、降^レテ道^ヲ訪^ニ眞源^ヲ。蓋謂^ニ神仙之奧祕^ヲ也。華山^ハ多^ニ仙靈^ノ事^一、故^ニ言^レ欲^レ登^シ陟^シテ謁^シ嶽神^ニ得^ニ上^レト
 問^ニコトヲ^一仙術ノ要訣^一、慕^ニ物外^ヲ之辭。亦出^ニ於厭^ニ世^ヲ。是^ニ時公貶^ニセラレ^ニ華州^ニ、薄宦不^レ得^レ意^ヲ、故^ニ有^ニ隱遁之
 志^一也。白帝應^ニ起^ニ句^ノ尊字^ニ。又與^ニ兒孫仙人玉女^ノ隱映^シテ用^レ之^ヲ。胡燮亭^(注31)云、此詩上半首是望^ニ而羨^ニ其勝^ヲ、
 下半首想^ニ山中ノ奇境^ヲ。尊^ノ字鄭重、振^ニ起^シテ全句^ヲ、領^ニ出^ニ全首ノ精神^ヲ。次ノ句奇情、與^ニ尊字^ニ更^ニ飛舞^ス。
 兩句將^テ西嶽ノ形勢^ヲ全舉^シ、戲笑^シテ而出^レ之^ヲ。下用^ニ仙人玉女^ヲ、皆於^ニ兒孫中^ニ牽出^ス。五六亦鼓^ニ舞^ヲ登覽之
 興^ヲ、結得^テ莊重、與^レ起相稱^ヲ。

(注27) 『周礼』云々は、『唐詩貫珠』に見える。『周礼』天官、大宰に「五帝を祀る」の語が見え、唐・賈公彦の疏に「西方白帝」と。

(注28) 『洞天記』は、錢注および輯註に挙げる。輯註は、宇都宮遯庵の増広本に引く。但し、『洞天記』がもともと何に見えるか、不明。ちなみに、唐・杜光庭『洞天福地記』（『說郛』弓六十六所収）には「第四洞、西嶽華山。周廻二百里。綏仙の天と名づく。華州に在り」と。なお、少昊は太古の伝説上の皇帝。黄帝の子で、金天氏と号したという。

(注29) 『唐詩貫珠』に見える。

(注30) 梁・劉孝儀の「昭明太子の鍾山解講詩に和し奉る」詩（『古詩紀』卷八十七／『古詩類苑』卷一〇一、釈部、講解）。輯註に梁劉孝儀詩として「降道訪眞源」の句を挙げ、宇都宮遯庵の増広本にも引くが、東陽は『唐詩貫珠』に拠ったのであろう。但し、それには〈下〉字を誤って〈不〉に作る。

(注31) 『唐詩貫珠』に「此の詩、上半首は是れ望みて其の勝を羨む。下半首は山に上る路を言ふ。将来秋金の至るに乗じて、以

て登臨して金神の真源を問はん耳。^{のみ}尊字鄭重、全句を振起し、全首の精神を領出す。第二句は奇情、尊字より更に飛舞す。兩句、西岳の形勢を將て全舉し、戲笑して之を出す。下、仙人玉女を用ふ、^{みな}皆兒孫中に於いて牽出す。一氣雄麗妙絶。五六相串の辞。公原より未だ山を涉り、危を履み險を蹈まず。故に易易の語を作す。^な《多路無し》《一門有り》と謂ふは、亦た登覽の興を鼓舞する耳。結び得て莊重、起と相稱ふ」と。

《稍や待つ》は、いくらか涼しくなればさっそく登ろう、いつまでもぐずぐずしていいことを言う。《高く白帝を尋ぬ》は、絶頂を凌ぐことを言う。《白帝》は、五行の金神で秋を司る。ここは借りて岳神のこと。《周礼》に五帝の語があり、《白帝》は、西方の帝。華山は《西岳》で、それに秋を待つて登ろうとするので、《白帝を尋ぬ》という。《洞天記》に『華山は太極総仙の天と名づく。即ち少昊を白帝として西岳を治めさせた』とあることからすれば、じかに華山の神の名をいうのである。《真源》は、道真の源。梁・劉孝儀の「鍾山詩」に「興を廻らして重閣を下り、道を降つて真源を訪ふ」と。けだし神仙の秘奥のことであらう。華山には仙靈の事跡が多く、それゆえ言う。山に登つて岳神に拝謁し仙術の要訣を問いたいとは、世俗の外を慕う辞。やはり世を厭う心持ちから出たものである。この時、公は華州に貶せられ、地位の低い小役人でわが意を得ず、それゆえ隱遁の志があつたのである。《白帝》は、起句の《尊》字に対応している。また《兒孫》《仙人》《玉女》の語と隱映してこれを用いる。胡燮亭が云う、「この詩の前半部は華山を望んでその景勝を羨み、後半部は山中の奇境を想像している。《尊》字は鄭重で、全句を振起し、一首全体の精神を支配している。次の句は奇抜な情趣、《尊》字より更に飛舞している。兩句は《西岳》の形勢を全て挙げ、ユーモラスにこれを説き出している。以下に《仙人》《玉女》を用いるのは、いずれも《兒孫》から牽き出されたもの。五六句はやはり登覽の興を鼓舞し、最後は莊重に結び、起句とつりあっている」。

019 早秋苦^レ熱^ラ堆案相^レ仍^ル (〇二三)

公自註^ニ時^ニ爲^ニ華州ノ司功^一。按^{スルニ}年譜^一、公六月始^テ至^ニ華^ニ、此其翌月也。堆案ハ謂^ニ案上ノ文書成^ラ堆^ラ。嵇康與^ニ山濤^ニ絶交書^ニ素不^レ便^ナ書^ニ、又不^レ喜^レ作^{コトヲ}書^ヲ。而人間多事、堆^レ案^ニ盈^レ几^一。不^レ相酬答^セ、則犯^レ教^ヲ傷^レ義^ヲ。欲^{コトハ}自勉強^{セント}、則不^レ能^ス矣。此用^ニ其語^ヲ。仍^ハ重疊^{スル}也。蓋直置苦熱^ニ、復畏^ニ於簿書^一、尤不^レ可^レ堪也。

(注1) 宇都宮遯庵の増広本に挙げる明・単復の年譜。

(注2) 『文選』卷四十三、「山巨源に与へて交はりを絶つ書」。嵇康(二三―二六二)は、三国・魏の人。字は叔夜。魏の王室の女を娶り、中散大夫となったが、後に鍾会に憎まれ、司馬昭(晋の文帝)に殺された。竹林の七賢の一人。『晋書』卷四十九に伝があり、興膳宏編『六朝詩人傳』に訳注を収む(中純子執筆)。なお、山濤(字は巨源。二〇五―二八三)も竹林の七賢の一人。山濤が自分の代わりに嵇康を選曹郎に推挙しようとしたのに対し、これを断るために書かれたのが、この手紙である。なお、『文選』では「不能矣」を「不能久」に作る。

(注3) 邵宝『集註』(卷二十二、時序類)、薛益『分類』(卷二、四時)に見える。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注4) ちなみに、积大典の『詩家推敲』に「直置ノ語有り。タダ一条ニシテ多事ニ涉ラザルライフ」とし、その用例に『文選』卷三十一、江淹の雜体詩三十首其二十を挙げ、「俚語ノタダサヘト云フ意アリ」という。

公の自注に「時に華州の司功^た為^り」と。年譜を調べると、公は六月によく華州についた。これは、その翌月の作である。(堆案)は、机上に書類が山と積まれていること。嵇康の「山濤に与ふ絶交書」に「もともと手紙を書くのは得手ではありませんし、それに手紙を書くこと自体が好きではありません。しかも世間には俗務多く、手紙の山が机案に堆^{つくえ}積^{うずたか}まれ、いっばいになっております。お答えしなければ、礼の教えに違反し義理を破ることになります。されど無理に務めることは、かなわぬことなのです」とある。ここはその語を用いる。(仍)は、重なることである。けだしただでさえ暑くてかなわないのに、帳簿の山に恐れをなして、もつともや

りきれないことである。

七月六日苦^ム炎蒸^ニ 對^{シテ}食^ニ暫^ク餐^{シテ}還不^レ能^ハ

蒸^ニ作^レ熱^ニ非^{ナリ}。不^レ能^ハ不^レ能^レ餐^{スルコト}也。言入^レ秋^ニ已^ニ六日、明辰^ハ是七夕、而^{シテ}炎蒸苦^{シメ}人^ヲ甚^ニ於

盛夏^{ヨリ}。暫時執^レ箸^ヲ、猶不^レ勝^レ汗^ニ、故^ニ對^{シテ}食^ニ欲^{シテ}餐^{セント}、還廢^{シテ}而不^レ終也。

(注5) 東陽が底本とした邵傳『集解』は、(熱)に作る。錢注(卷二)および輯註(卷五)は(蒸)に作り、「一に熱に作る」と。詳註(卷六)も同じ。

なお、錢注では、この詩を古体に分類しているが、陳貽焮『杜甫評伝』上卷第十章第四節には、「鄭鼎の亭子に題す」「岳を望む」「早秋熱に苦しむ堆案相仍る」の三首を拗体だとし、杜甫はよくこの体によって失意憤懣の情を抒^のぶと指摘している。

〈蒸〉字、一に熱に作るが、よくない。〈能はず〉は、〈餐〉することができないのである。その意味は、秋になつてもう六日、明日は七夕だというのに、〈炎蒸〉に苦しめられること盛夏よりも甚だしく、しばし箸をとつてはみるものの、それでもしたたる汗にたえられず、それゆえ食膳を前して〈餐〉せんとしてまたやめ、食べおえることができないのである。

每^ニ愁^ム夜中自足^ル 蝸^ハ 況^ヤ乃秋後轉^ク多^シ 蠅^ハ

※足：アリアマル 況乃：マシテソノウヘニ 転：イヤマシニ

足^ハ謂^ニ十分^ヲ。因^テ訓^ニ太饒^{シト}。蝸^ハ蝮蛇也。夜出^テ當^ル路^ニ。螫^ハ人^ヲ大^ニ痛^ム。山郷是物太饒^シ。夜不^レ可^レ行。

至^テ秋^ニ毒尤烈^シ、殊^ニ可^レ畏也。多^レ蠅亦田舎^ノ所^レ患。誠^ニ可^レ憎哉。公居^ニ州廨^ニ、不^レ勝^ニ抑鬱^ニ、私^ニ自煩懣^ス。

又值^ニ秋暑^ノ毒熱^ニ、對^{シテ}食^ニ不^レ能^レ餐^{スルコト}、夜^ハ則畏^レ蝸^ヲ、晝^ハ則苦^ム蠅^ヲ、殆無^レ處^レ措^ニ身^ヲ也。

(注6) 〈每〉字、詳註は〈常〉に作り、「一に毎に作る、非なり」と。

〔注7〕 〈中〉字、詳註は〈來〉に作り、「一に中に作る」と。また〈自足〉の二字、詳註は〈皆是〉に作り、「趙注に従ふ。旧本
は自足に作る」と。

〔注8〕 何か基づくところあるのか、不明。

〔注9〕 蝸は蠍の本字で、さそり。蝮蛇は、まむし。東陽が、どうしてこのような注をつけたのか、理解に苦しむ。わが国の本
土にはいないためか。

〔注10〕 邵宝『集註』に「公、拾遺にして房琯を論じて官を華州に貶せられし自り、掾曹に任じられて省掖を去つて州廨に居り、
本と其の抑鬱に勝へず。又た蚤秋の苦熱に値ふ、故に食するに当たつて喰せん^よと欲して還つて能はず」と。薛益『分類』
もほぼ同じ。『分類』は宇都宮逸庵の増広本に挙げる。

〈足〉は、十分なこと。それで「はなはだおほし」と訓ずる。〈蝸〉は、まむしである。夜、道路に出てくる。螫^さ
されると、とても痛い。山村にはこいつが多くいて、夜は出歩けない。秋になると毒がことのほか強烈になる。
とりわけおそるべきである。〈蠅〉の〈多〉いこともやはり田舎住まいの悩みの種で、ほんとに憎たらしいこ
とだ。公は州の官舎に居住し、氣鬱ぎ心が晴れず、人知れず煩悶困憊していた。そのうえ秋になつても酷暑に見
舞われ、膳を前にしても食べる氣がせず、夜は〈蠍〉をおそれ、昼は〈蠅〉に悩まされ、ほとんど身の置きどこ
ろがなかったのである。

束帶發^{シテ}狂欲^ニ大叫^シ 簿書何急^ニ來^テ相仍^ル

※発狂：キガチガフテ 急：セツロシク

此聯言二期會之勞、簿書之煩、不堪^レ俗吏之務^ニ也。束帶ハ謂^レ裝束^{スル}官服^一。暗^ニ用^下陶淵明見^ニ督郵^一事^ヲ。
夫^レ炎熱之苦、單衫尙不^レ勝^キ重^キ、況^ヤ乃束^ニ帶^{シテ}官服^一、而勞^ニ於折腰^ニ耶。簿書ハ帳簿文書也。何^ハ者怪^テ
而嘆^レ之^ヲ也。急^ハ、促迫也。公以^ニ近侍^一出^テ爲^二外掾^一。簿書瑣屑、固^{ヨリ}非^ニ其長^ニ。而^ル乃苦熱中堆^{シテ}案^ニ相仍^ル。
其何以堪^シ耶。顧修遠云、韓昌黎言^フ、人各^レ有^レ能^ニ有^ニ不能^一、抑^テ而行^レ之^ヲ、必發^ニ狂疾^一。公之欲^ニ

大ニ叫^{コトヲ}ント、正ニ此意也。後ニ遂ニ弃^レ官^ヲ而去、誠ニ不^レ得^レ已^{コトヲ}哉。

(注11) 彭沢県の令となつた陶淵明(潜、三六五―四二七)のもとへ郡から督郵(行政監察官。郵は尤と同じ。過失の意)が派遣されることとなり、県の役人が「応に束帶して見ゆべし」と言上したところ、潜は嘆じて「我五斗米の為に腰を折りて郷里の小児に向かふ能はず」といつて、即日印綬を解き職を去つたという(『宋書』卷九十三、隱逸伝)。ちなみに、『宋書』の陶潜伝は、興膳宏編『六朝詩人傳』に訳注がある(釜谷武志執筆)。

(注12) 顧宸『註解』に「公、近侍を以て出て外掾と爲る。簿書瑣屑、固に其の長に非ず。誠に嵇康が云ふ所の人間多事、案に堆く几に盈つといふが如し」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注13) 顧宸『註解』に「韓昌黎曰く、人各おの能有り不能有り。抑へて之を行へば、必ず狂疾を發せん、と。公の大叫せんと欲する、正に此の意なり」と。韓昌黎は、中唐・韓愈(七六八―八二四)のこと。その「張僕射に上る書」(『韓昌黎集』卷十七)に「古人言へること有り、曰く、人各おの能有り不能有り。此の若きは、愈が能くする所に非ず。抑へて之を行なへば、必ず狂疾を發す」云々と。なお、古人の言とは、『左伝』定公五年に見える楚の王孫由于の語。『註解』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

この一聯は、会計処理の苦労や帳簿類の煩雜さなど、俗吏の職務にがまんがならぬことを言うのである。〈束帶〉は、官服に身を固めること。暗に陶淵明が督郵(行政監察官)にまみえた故事を用いている。そもそも炎熱の苦しきは、単衣のシャツでさえ暑さで重苦しくてかなわないのに、ましてや官服を〈束帶〉して、ぺこぺこ頭を下げることに骨を折るのである。〈簿書〉は、帳簿や公文書である。〈何〉は、訝しんで嘆ずることである。〈急〉は、差し迫ることである。公は天子に近侍する身で地方に出されて華州の下僚となつた。〈簿書〉は煩瑣で、それを処理するのは、もとより得手ではないのに、暑さに参っているなか、机の上には山のように積み重なっている。いったいどうしてがまんできようか。顧修遠が云う、「韓昌黎は、人にはそれぞれできることできないことがあり、むりに抑えつけて実行しようとすれば、きつと氣が変になつてしまふ、と言っているが、公が大

声で叫び出しそうになるというのは、まさしくこの意味である」と。その後、官を棄てて去ってしまうのは、まことにやむを得ないことであるかな。

南望^三青松^ム架^{スル}絶壑^ニ 安^ソ得^三赤脚踏^ニ層冰^一

※赤脚：スアシ

架ハ謂^二松横^ニ生^{スル}也。蓋奇絶ノ景境。遙^ニ當^三州廨^ノ南^一、故^ニ望^テ羨^レ之^ヲ也。絶^一ニ作^レ短^ニ、非^{ナリ}。赤ハ即赤輅。言^レ無^レ所^レ裹^ム。赤脚反^ニ對^ス束帶^ニ。言^ニ快活^ノ之^ヲ極^一。此不^三但冀^ニノミナラ^一タヒ往遊^シコトヲ、直^チニ欲^三奔^レ官^ヲ入^レ山^ニ、長^ク通^シコトヲ、此苦惱^一也。華山ノ深谷、經夏有^レ冰、故^ニ曰^ニ踏^ニ層冰^一ヲ。欲^ニ冷然徹^セシコトヲ^一骨^ニ也。千家註^ニ載^ス韓融夏夜直^ス史館^ニ、蒸煥如^レ坐^{スル}甌中^ニ、謂^ニ同舍^一曰、安^ソ得^下赤脚踏^ニ陰山之層冰^一ヲ、洗^中滌^上塵熱^ヲ耶。偽蘇所^ニ捏造^{スル}也。

(注14) 輯註に「江淹の詩に、風散じ松陰に架かる。注に、松横に生ゆるを架と曰ふ」と。梁・江淹（字は文通。四四四～五〇五）の詩は、「雜体詩三十首」其二十八「謝光祿」（『文選』卷三十一）。注は、五臣注のこと。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注15) 錢注および輯註は〈短〉字に作り、「一に絶に作る」と。詳註も同じ。また東陽が底本とした邵傳『集解』は〈短〉に作り、宇都宮遯庵の両著もこれに同じ。なお、顧宸『註解』も〈短〉に作り、「青松短壑に架すは、青松を以て壑上に架するを謂ふなり。壑長ければ則ち架すること能はず」という。但し、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（巻六）は「壑は『たに』なれば短の字おちつきなし、一に絶に作るといへば字誤りならんか」と指摘する。

(注16) 全く対照的な正反対の意味の対偶となっていること。なお、〈反对〉の名称は『文心彫龍』麗辭篇に見え、『文鏡秘府論』北卷、論対属の条にも挙げる。古田敬一『中国文学における対句と対句論』参照。

(注17) 『集千家註分類杜工部詩』（巻十、四時）に「蘇曰く、馬融夏夜館に直す。蒸煥常に倍し、甌中に坐するが如し。同舍に謂ひて曰く、安んぞ襟を披き赤脚陰山の層氷を踏むを得て、塵熱を洗滌するを得ん已」とある。

(注18) 偽蘇註については、012「曲江」二首其二の（注13）参照。

《架》は、松が横ざまに生えていること。けだし奇絶の景勝で、はるか州庁の南にある。さればこれを眺めて憧れるのである。《絶》字は、一に短に作るが、よくない。《赤》は、赤裸。裹つつまずにむきだしになっていること。《赤脚》は、《束帶》の反対はんたいとなっている。快活のきわみを言う。これは一度遊んでみたいと願うのみならず、すぐさま官を棄て山に入つてずっとこの苦悩から逃れたいと思うのである。華山の奥深い谷には、夏を経ても氷が残っている。それゆえ《層氷を踏ふむ》という。冷たさがひんやり骨までしみとおることを願うのである。『千家註』に載せる「韓「馬」融が、夜、国史編纂館に宿直した。蒸し暑く、甑こしきのなかに坐っているかのようにである。同室の者に向かつて言うに、裸足で陰山の層氷を踏みこの世俗の暑さをきれいさっぱり洗い流したいものだ」というのは、偽蘇註のでっちあげである。

020 崔氏東山草堂（〇二三五）

崔氏未詳。^(注1) 東山^(注2) 卽詩中ノ玉山、謂^(注3) 藍田山^(注4)。蓋在^(注5) 藍田縣ノ東^(注6)。故^(注7) 稱^(注8) 東山^(注9)。草堂^(注10) 崔氏別莊ノ稱號。此及下九日ノ詩^(注11) 竝^(注12) 在^(注13) 華州^(注14) 一時遊^(注15) 藍田^(注16) 而作也。藍田縣^(注17) 屬^(注18) 京兆府^(注19)、在^(注20) 長安^(注21) 東南七十里^(注22)。去^(注23) 華州^(注24) 八十里^(注25)。
(注1) 崔氏については、聞一多「少陵先生年譜會箋」に崔興宗のこととし、李浩『唐代園林別業論考（修訂版）』（西北大学出版社、一九九六年）などもそれを踏襲するが、崔季重のこととするのが通説である。王維に「崔瀼陽兄季重の前山の興」と題する詩（『王右丞集』卷三）があり、「山西去りて亦た維の門に對す」と注を附して、次のように詠じられている。

秋色有佳境 秋色に佳境有り

況君池上閑 況んや君が池上の閑なるをや

悠然西林下 悠然たり西山の下

自識門前山 自づから識る門前の山

千里橫黛色 千里 黛色横たはり

數峰出雲間 數峰 雲間に出づ

嵯峨對秦國 嵯峨として秦國に対し

合沓藏荆關 合沓して荆関を蔵す

殘雨斜日照 殘雨 斜日照り

夕嵐飛鳥還 夕嵐 飛鳥還る

故人今尙爾 故人 今尚ほ爾り

歎息此頽顏 此の頽顔を歎息す

小林太市郎『王維の生涯と藝術』（全国書房、一九四四年。後に淡交社『小林太市郎著作集』第四卷収載）に「杜甫のいう」崔氏の草堂は即ち崔季重のそれで、藍田山に在り、王維が輞川莊の西に對していたのである。また黒川洋一「崔氏草堂詩の作詩について」（『杜甫の研究』第一章第一節。創文社、一九七七年）参照。

（注2） 輯註（卷五）に「東山は即ち玉山」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注3） 但し、この詩の作られた時期については、異説がある。吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊は、呉若本に「王維は時に張通

儒に禁せられて京城東山の北寺に在り。歎惜する所有り、故に云ふ」と附注が施されているのを、杜甫の自注だとみなし、錢謙益の説に拠つて、王維が安祿山の政府に出仕を強要され、洛陽に護送される前に長安附近の山寺に監禁されていた頃の作とする。なお、輯註は「九日藍田崔氏の莊」詩に注して、「此れと下の崔氏東山草堂詩と、梁權道、諸本は至徳元載賊中に陥るの作に編す。魯冒の年譜も亦た然り。公是の年秋鄆州自り行在に赴き賊の得る所と爲る。応に更に能く遠く藍田に至るべからざるべし。又た其の時両宮（玄宗・肅宗）奔蔵す。豈に興來たつて歎を尽くすの理有らんや。当に是れ華州司功と爲り藍田に至つて此の作有るなるべし。華より藍田に至る八十里なるのみ。更に後篇を觀るに云ふ、何為れぞ西莊の王給事、柴門空しく閉じ松筠を鎖すと。旧注、時に王維、張通儒の爲に禁せられて東京に在り。故に之を歎ずと。旧書を考するに維賊に陥る以前、尚ほ未だ藍田の別墅有らず。皆乾元元年華州の作なり」という黄鶴の説を挙げる。旧書は、『旧唐書』王維伝。顧宸『註解』は、黄鶴の名を挙げぬものの、ほぼ同じ。宇都宮遯庵の増広本には輯註および顧註を、詳説には顧註を引く。ちなみに、聞一多「少陵先生年譜會箋」、陳貽焮『杜甫評伝』上巻及び傅璇琮主編『唐五代文学編年史【中唐卷】』は、いずれも乾元元年、華州司功參軍たりし時の作とする。

(注4) 輯註「九日藍田崔氏の莊」詩の題下の注に「唐書に藍田県は京兆府に属す。長安の東南七十里に在り」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

《崔氏》は、未詳。《東山》は、詩中に見える《玉山》にほかならない。藍田山のこと。けだし藍田県の東にあり、それで《東山》と称したのである。《草堂》は、《崔氏》の別荘の称号。この詩と次の「九日」の詩はともに華州にある時、藍田に遊んで作ったのである。藍田は、京兆府に属し、長安の東南七十里にある。華州からは八十里。

愛^ス汝^カ玉山草堂ノ静^{ナルヲ} 高秋ノ爽氣相鮮新

※爽：スンガリ 鮮新：ウツキリ

述^(注5)征記ニ藍田山、又名^ニ玉山^ト。蓋山出^ニ美玉^一、故^ニ爲^レ名^ト。静^ノ字領^ニ全篇之神^一。次ノ句言^ニ山氣快^{スルヲ}人^ヲ。

正與^下杜牧^上詩^(注6)ニ南山^ト與^ニ秋色^一氣勢兩^{ナカラ}相高^上同意。相或^ハ作^レ多^ニ、非^{ナリ}。

(注5) 「述征記」については、018の(注25)参照。北宋・宋敏求『長安志』卷十六、藍田県の条に「藍田山は県の東南三十里に在り。(中略)郭縁生述征記に曰く、山の形は覆車の如し。其の山、玉を出だす。亦た玉山と名づく」と。

(注6) 顧宸『註解』に「東山の爽氣と秋氣と相鮮新。正に杜牧が詩に南山と秋氣と氣勢兩つながら相高しと同意」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。杜牧(八〇三〜八五二)の詩は、「長安秋望」と題する作(『樊川詩集』卷二)。

樓倚霜樹外 樓は霜樹の外に倚^{ヨリ}

鏡天無一毫 鏡天 一毫無し

南山與秋色 南山と秋色と

氣勢兩相高 氣勢兩つながら相高し

(注7) 錢注(卷九)および輯註(卷五)に、相字の下に「一に多に作る」と。詳註(卷六)も同じ。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

『述征記』に「藍田山、また玉山と名づく」と。けだし山から美玉が出るので、名としたものであろう。〈静〉の字は、一首全体の精神を支配している。次句は、山気が人を爽快にしてくれることを言い、まさしく杜牧の詩に「南山と秋色と、氣勢両つながり相高し」というのと同じ趣意である。〈相〉字、あるいは〈多〉に作るが、よくない。

有^レ時自發^ス鐘磬ノ響 落日更^ニ見^ル漁樵ノ人

※有時：オリフシニハ 発：キコヘル 落日：クレカタニモナレハ

言有^レ時所^レ聞惟鐘磬之響。及^レ晚^ニ所^レ見亦漁樵之人耳。何等ノ幽靜^ノ。所^ニ以愛^{スル}也。顧修遠云、鐘磬、諸註謂堂中所^レ設^ル、誤矣。此必山寺ノ鐘磬也。草堂甚靜、不^レ知^ニ鐘磬何^ク自^{シテ}而來^ル。故^ニ曰有^レ時自發^ス。所^レ見者、唯漁樵之人。又當^テ落日之際^ニ而纔^ニ見^ル。總^テ寫^ス山境靜極之況^ヲ。說得^テ甚好。

(注8) 顧宸『註解』に「諸註咸謂ふ、草堂の中、編鐘石磬有り、崔氏時に自ら之を撃つと。愚謂へらく此れ必ず山寺の鐘磬なり。草堂甚だ静かにして、知らず磬何く自りして発するを。故に時有りてと曰ふ。見る所の者は惟だ漁樵の人。又た落日の際に当たつて纔に見る。総べて山境の静極の況を写す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

ここの意味は、おりふし聞こえるのは、ただ〈鐘磬の響〉ばかりだし、暮れ方になって〈見〉えるのは、やはり〈漁樵の人〉の姿だけである。なんと幽寂で静謐なことか。この場所を〈愛す〉るわけである。顧修遠が云う、「鐘磬」を、諸家の注釈では草堂のなかに設けられたものだというが、誤りである。これはぜったい山寺の〈鐘磬〉である。草堂はとても静かで、〈鐘磬〉がいづこともなくどこからか聞こえてくる。それで〈時有りて自づと発す〉というのである。〈見〉えるのは、ただ〈漁樵の人〉の姿だけで、それも〈落日〉のときになってやっと〈見〉えるのだ。すべて一帯の静寂このうえない様子を描写している」と。みごとに説いている。

盤^ニ剥^ス白鴉谷口ノ栗 飯^ハ煮^ル青泥坊底ノ芹

※剝：ムク

剝^ハ削^レ皮^ヲ也。長安志^(注9)白鴉谷^ニ在^ハ藍田縣ノ東南二十里^ニ。其地宜^シ栗^ニ。青泥驛在^ニ藍田縣ノ南七里^ニ。坊^ハ隄也^(注10)。此地ノ芹、意^ニ亦名産。秋末ノ芹、尤^ニ不^レ易^{カラ}者。飯煮^ハ芹^ヲ、芹雜^レ米^ニ爲^レ飯^ト也^(注11)。地既^ニ幽靜ノ佳境、供給皆用^ニ當地ノ名産^ヲ、亦山莊ノ風味、尤^ニ所^ニ以^テ愛^{スル}也。芹韻走^テ入^ニ十二文^ニ。蓋一時趁^レ筆^ヲ之誤耳。或謂當^レ作^レ蓴^ニ。然蓴豈可^レ作^レ飯^ト耶。且非^ニ蓴之時^ニ也。蓋出韻之失、當時ノ諸家亦動^{モスレハ}有^レ之。夫通韻^ハ古詩ノ所^レ用。唐詩韻法極^テ嚴^{ナリ}、何^ソ敢^テ於^ニ近體^ニ用^ニ古韻^ヲ乎。猶^三王右軍ノ書帖多^ニ誤字^一、皆玉瑕錦類、不^レ可^レ效^レ尤^ニ也。學者或^ハ近體^ニ押^ニ通韻^ヲ、藉^テ爲^ニ口實^ト、是壽陵學^ニ邯鄲之步^ヲ、故^ニ爲^ニ詳^ニ辨^ス之^(注16)。

(注9) 輯註に『長安志』を引いて、「白鴉谷は藍田縣の東南二十里に在り。谷中に翠微寺有り、其の地栗に宜し」、「青泥驛は藍田縣の南七里に在り」と。但し、北宋・宋敏求の『長安志』卷十六、藍田縣の条には見えない。輯注は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注10) 邵宝『集註』（卷二十二、宮室類）に「坊は防と同じ。即ち限なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注11) 邵宝『集註』に「芹は、米を雜へて飯と爲るなり」と。薛益『分類』（卷一、題人屋壁）も同じ。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注12) 顧宸『註解』に「按ずるに芹の字、文韻に出づ。少陵が詩間ま出韻の者有り。應に是れ筆を趁^おふの誤りなるべし」という。この詩の韻字、新・人・芹・筠のうち、平水韻では芹字が上平声十二文韻に属するのを除いて、あとは上平声十一真韻であることから、かくいう。なお、『広韻』では芹字は二十一欣韻に属し、その他は十七真韻。『註解』は宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

ちなみに、王力『漢語詩律学』（香港中華書局版、一九七三年）第一章第一節、近体詩の用韻に、「中唐以前、詩人は欣韻の文字が少なく、またその発音が真韻と近いため、しばしば真韻と同用した」と指摘して、その例として「崔氏東山草堂」詩を挙げる。さらに、李立信「王力《漢語詩律学》商榷」（國立中正大学中国文学系主編『山鳥下聽事、簷花落酒中』——唐代文学論叢）所収、一九九八年）では、真・文両韻を合用した具体例を挙げ、これは唐人用韻の常軌で、出韻と

はみなせない旨を論じている。

(注13) 輯註は芹字の下に「一に云ふ、当に蓴ますに作るべし」と注する。また沈德潜『杜詩偶評』(巻四)に「芹韻は十二文に在り。応まさに是れ蓴字なるべし」と。蓴は、ぬなわ、じゅんさい。若芽、若葉を食用とする。なお、蓴字は、『広韻』では上平声十八諄韻に属するが、その場合、真韻と同用。平水韻では真韻に属する。

(注14) ちなみに、三浦梅園の『詩輟』巻四、韻法の条に次のように云う。

通韻トハ、東冬也、支微齊也、魚虞也、佳灰也、真文元也、元寒刪先也、蕭肴豪也、歌麻也、庚青蒸也、覃塩咸也。六朝アタリ迄ハ、通押シタルコト多シ。唐人ハ、古詩ニモ大概イム。近体ニ稀ニアルモ、失韻病ニ属ス。傍韻モ通韻ナリ。但起句ニ限リテ、通韻ノ字ヲ押スルナリ。支微ハ多シ、齊ニワタルコトハ少シ。真文、又文元ハアリ、真元ニワタルコトハ少シ。寒山「刪」ハ多シ。元仙「先」ハ少シ。肴豪ハ多シ、蕭ニワタルコトハ少シ。庚青ハ多シ、蒸ニワタルコトハ少シ。覃塩咸ハ、狭韻ナレバ例稀ナリ。

(注15) 明・楊慎『丹鉛總錄』巻十八、玉瑕錦類の条に「杜詩七言律詩の『玉台觀』の第三句〈遂に憑夷来りて鼓を撃つ有り〉、第七句〈更に紅顔羽翼を生ずる有らん〉、『馬巴州に寄す』の首句〈勲業終に馬伏波に帰す〉、第五句〈独り漁竿を把りて終に遠く去る〉の如き、猶ほ王右軍の書帖に悞字多きがごとし。皆玉瑕錦類、尤に効なまふ可からざるなり。今の文に臨むに荒率なる者、動に二公を以て口実と爲す。是れ寿陵の邯鄲の歩みを学ぶ、良に笑ふ可き哉」と。

「玉台觀」詩は、詳解では053。「馬巴州に寄す」詩は、057。王右軍は、東晋・王羲之(字は逸少)のこと。『晋書』巻八〇に伝があり、興膳宏編『六朝詩人傳』に訳注を収む(興膳宏執筆)。玉瑕錦類の語、『顔氏家訓』巻四、文章篇に「明珠の類、美玉の瑕」と見える。寿陵云々は、人の真似をして本来の姿を見失うこと。『莊子』秋水篇に「夫の寿陵の餘子の行を邯鄲に学ぶや、未だ国能を得る能はずして、又た故行を忘る」と。

(注16) 『夜航詩話』巻六に「杜詩の崔氏の東山草堂に、真の韻を用ふ。内に芹の字を押す。蓋し出韻の失なり。当時諸家往往之有り。皆一時筆を趁ふの誤りのみ。随園詩話に云ふ、余、人を祝する詩に七虞の内に誤つて餘の字を用ふ。意之を改めんと欲す。後、唐人の律詩を見るに通韻極めて多しと。因つて唐詩を歴挙し、以て一法と爲す。予、竟に以て然りと爲さざるなり。夫れ通韻は古詩の用ふる所、唐人韻法極めて嚴なり。何ぞ敢へて近体に於いて古韻を用ひん。此れ猶ほ王右軍の書帖に悞字多きがごとし。豈に以て典要と爲す可けんや。後学是れを以て口実と爲し、尤に効なまひ過かぎを文るは、思はざ

るの甚だしきなり」との指摘がある。『隨園詩話』（十六卷補遺十卷）は、清・袁枚（字は子才、号は隨園。一七一六—一七九七）の著。その卷十二に見える。

《剝》は、皮を削ぐことである。『長安志』に「白鴉谷は、藍田県の東南二十里にある。その地は《栗》に適している。青泥駅は、藍田県の南七里にある」と。《坊》は、隄である。この地の《芹》は、思うにやはり名産であつたのだろう。晩秋の《芹》は、とりわけ手に入れにくいものだ。《飯芹を煮る》とは、芹を米に混ぜて飯とするのである。別荘のあるあたりはひっそりとした静かな佳い所である上に、供されるのはどれも地元の名産を使つた料理であつて、このことも山荘の風情がことのほか氣に入り《愛》するゆえんである。《芹》字は、上平声十二文韻に入る。けだし、あまり深く考えずに筆を走らせた結果生じた誤りだろう。あるいは蕁とすべきだという説があるが、蕁ならどうして飯にすることができよう。それに、蕁の採れる時期ではない。けだし韻を踏みはずすのは、当時の詩人たちにもちよくあることだ。そもそも通韻というのは古詩に用いられるもの、唐詩の韻の踏み方は嚴格である。どうして近体に古韻を用いることがあろうか。王右軍の書帖に誤字が多いのと似たようなものだ。いずれも玉の瑕や錦の類であつて、その欠点をまねてはいけない。学ぶ者が近体に通韻を押して、これを口実にするのは、寿陵の餘子が邯鄲の歩みをまねるようなものである。それゆえ詳しく弁ずるのである。

何^(注17)ソ謂^(注17)西莊ノ王給事 柴門空^(注17)閑鎖^(注17)ス松筠^(注17)

※何謂：オモヒノホカナルハ

何^(注17)ソ謂^(注17)ハ言^(注17)ニ意外^(注17)ナルヲ也。王給事ハ王維也。時^(注17)ニ仕^(注17)レテ朝^(注17)ニ爲^(注17)ニ給事中^(注17)、與^(注17)レ公友トシ善^(注17)。王有^(注17)ニ輞川ノ別業^(注17)、亦在^(注17)ニ藍田^(注17)。必與^(注17)ニ崔^(注17)莊^(注17)東西相近^(注17)、故^(注17)ニ稱^(注17)ニ西莊^(注17)。筠音^(注17)緝、竹也。王詩畫絶世、極風流ノ雅人、而輞川ノ別業、尤稱^(注17)ニ名勝^(注17)ト。乃爲^(注17)ニ塵纓^(注17)ノ所^(注17)レ絆^(注17)、而莊門空^(注17)鎖^(注17)、徒^(注17)ニ掩^(注17)ニ松筠^(注17)、不^(注17)レ能^(注17)遂^(注17)ニ其樂^(注17)ト、愧^(注17)ニ崔氏^(注17)ニ多^(注17)シ矣。故^(注17)ニ

曰^二何^ソ謂^{ント}。怪^テ而嘆^レ之^ヲ也。一結逸致橫飛、仰^ル彼^ハ所^ヲ以^二揚^ル此^ヲ、是詩家樞點^ノ法。^(注23)

〔注17〕〈謂〉字、錢注(卷九 および輯註は〈為〉に作る。『唐詩貫珠』(卷三十六、幽居一)や『會粹』(卷六)・詳註も同じ。

〔注18〕給事中は、門下省に属し、制勅の駁正を掌る。正員四人。品階は正四品上。王維が中書舍人から再び給事中となったのは、乾元元年(七五八)の八月かあるいはそのやや前のことである(傅璇琮主編『唐五代文学編年史』【中唐卷】)。

〔注19〕杜甫には、太子中允であった王維に贈った乾元元年作の「王中允維に贈り奉る」詩(詳註卷六)があり、大暦元年(七六六)の作「解悶」十二首其八(詳註卷十七)の中でも、「見ず高人王右丞、藍田の丘壑寒藤蔓る。最も秀句を伝えて

寶地に満つ、未だ絶えず風流相国の能」と詠じている。なお、相国は、王維の弟、王縉(七〇〇〜七八二)を指す。

〔注20〕『旧唐書』卷一九〇下、文苑伝下、王維伝に「晩年は長齋し、文綵を衣ず。宋之間が藍田の別墅を得たり。墅は輞口に在り、輞水を舍下に周らせ、別に竹洲花塢に漲る。道友裴迪と、舟を浮かべて往来し、琴を弾じ詩を賦し、嘯詠して日を終ふ。嘗て其の田園に為る所の詩を聚め、輞川集と号す」と。宋之間(六六五?〜七二二?)は、武后や中宗に仕えた宮廷

詩人。その伝は『旧唐書』卷一四〇中、文芸伝中および『新唐書』卷二〇二、文芸伝中に見える。なお、『旧』王維伝及び『新』宋之間伝には、小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』に訳注がある(入谷仙介、福島吉彦執筆)。

〔注21〕何か基づくところがあるのか、不明。

〔注22〕『唐詩貫珠』に「結びは逸致横飛し、彼を抑へ此を揚ぐ。所謂之を左し之を右し、之に宜しからざる無きなり」と。

〔注23〕邵宝『集註』に「末に言ふ給事朝に仕ふる者にして、則ち門閉さして賓客を入れず、何ぞ崔氏が草堂の放曠に如かんや。彼を抑ふるは此を揚ぐる所以なり」と。薛益『分類』もほぼ同じ。宇都宮遯庵の増広本には『分類』を挙げる。

〈何ぞ謂はん〉は、意外であることを言う。〈王給事〉は、王維のことである。当時、朝廷に出仕して給事中であった。公とは友人で仲がよかった。王維は輞川の別荘を所有しており、やはり藍田にあった。きつと〈崔氏〉の別荘と近くで、それで〈西荘〉と称しているのだ。〈筠〉、字音は韻、竹である。王維は詩画の才が世に並びなく、きわめて風流な粹人であつて、輞川の別荘は、とりわけ名勝と称されていた。それがなんと宮仕えのために、別荘の門は〈空しく閉ぢ〉、いたづらに〈松〉や竹に掩われて、その楽しみを全うすることができず、〈崔

氏》に対してうら恥ずかしく思うことが多かった。されば《何ぞ謂はん》というのだ。結びは超俗の趣が横溢し、あちらを抑えるのはこちらを揚げるためであつて、これぞ詩人の修辭法なのだ。

021 九日藍田崔氏莊（〇三三四）

每月有^ニ九日^一、獨九月九日、以^ニ佳節^一專^ニ其稱^一。故^ニ不^レ書^一月。三日五日七夕皆然。莊^ハ田舍^也。唐人呼^テ別業^ヲ爲^レ莊^ト。以^ニ其在^一郊^ニ也。此卽東山草堂。公再^タ見^レ邀也。

（注1）例えば、『字彙』に「又た田舎なり」と。

（注2）前詩020の宇都宮遯庵詳説に「三体詩註云、莊^ハ猶^レ村^ニ。唐人呼^テ別業^ヲ爲^レ莊^ト」という。『三体詩』は、南宋・周弼撰。その卷一、王昌齡「李浦の京に之くを送る」詩の元・釈田至（号は天隱）注に見える。ちなみに、遯庵には元祿十三年（二七〇〇）刊の『増注唐賢絶句三体詩法』（三体詩詳解）二十三卷がある。

毎月九日があるのに、九月九日だけが佳節であることから、その名称を独占している。それで月を書かない。三日、五日、七夕いづれもそうである。《莊》は、田間の屋舎である。唐代の人は別業のことを《莊》と呼んだ。郊外に在るからである。ここは他ならぬ《東山草堂》のこと。公は再び招かれたのである。

老去^テ悲秋強^テ自寬^ス 興來^テ今日盡^ス君歡^ヲ

※去^ニハテ、強^ニムリニ 寬^ニクツロケル 尽^ニジフブン 歡^ニキサンジ

宋玉九辨^{（注3）}悲哉秋之爲^レ氣也。言^ニ秋氣淒慘、令^ニ人^一悲傷^一也。列子^{（注4）}榮啓期鼓^レ琴^ヲ而歌^フ、能自寬^ス者也。言^ニ自慰^一遣^レ情^ヲ、使^ニ胸襟^一開豁^セ也。今日^ハ指^ニ題^一九日^ヲ、爲^ニ下明年^一張^レ本^ヲ。此對起以^レ自對^レ君^ニ、自^ハ者我也。上句歎^ニ平生不^レ勝^一鬱悶^ニ、下句謝^ニ主人殷勤乘^レ興^一忘^レ憂^ヲ。盡^ニ君^一歡^ヲ、終日畱連^ス也。公老身謫宦、悲秋増^レ感^ヲ、而勉強^テ自慰^テ、悠悠涉^レ日^ヲ耳。今日重陽ノ佳節、幸^ニ遇^ニ崔氏^一邀宴^ニ、強超^テ赴^レ

席^ニ、亦正^ニ是自寬^{スル}處^{（注7）}。因^テ主人情重^{キニ}、便興發^{シテ}乘^レ歡^ニ、陶然酣暢之樂、令^ニ平生鬱懷^{ラシテ}蕩然^{タラ}、遂^ニ忘^{下テ}君子不^レ盡^{人ノ}歡^{（注8）}之戒^上、而竟日淹留不^レ知^レ回^ワ也。老去^ノ二字、一篇樞軸、而以^ニ悲歡^ノ二字^ヲ錯綜^ス。宜^ニ注意^ヲ細^ニ玩^一。

（注3） 宋玉は、戦国末期、楚の文人。その「九弁」は、『楚辞』及び『文選』卷三十三に収められている。その冒頭、「悲しい哉秋の氣^た為るや、蕭瑟として草木揺落して変衰す」とあり、秋を悲しい季節とするのは、これに始まる。宇都宮遯庵の増広本は薛益『分類』（卷二、節序）に挙げるのを、また詳説は張遠『会粹』（卷六）に挙げるのを引く。

（注4） 『列子』天瑞篇に「孔子、太（泰）山に遊び、榮啓期の邨の野を行くを見る。鹿裘帶索して、琴を鼓して歌ふ。孔子問うて曰く、先生の樂しむ所以は何ぞや。対へて曰く、吾が樂しみ甚だ多し。天の万物を生ずる、唯だ人を貴しと爲す。而して吾れ人^た為るを得たり。此れ一の樂しみなり。男女の別、男は尊く女は卑し。故に男を以て尊しと爲す。吾れ既に男^た為るを得たり。是れ二の樂しみなり。人生まれて日月を見ず、襁褓を免れざる者有るに、吾れ既に行年九十なり。是れ三の樂しみなり。貧は士の常なり。死は人の終りなり。常に処り終りを待たば、当に何をか憂ふべきと。孔子曰く、善い哉。能く自ら寛する者なりと」。宇都宮遯庵の増広本は『集千家註』の蔡夢弼注に挙げるのを、また詳説には『会粹』に挙げるのを引く。

（注5） 002 「鄭馬潜曜洞中に宴す」詩の（注10）参照。

（注6） 南宋・楊万里（字は廷秀、号は誠齋。一一二七―一二〇六）の『誠齋詩話』に、この詩を取り上げて「自を以て君に對す甚だ切、君は君なり。自は我なり」と。南宋・魏慶之『詩人玉屑』卷一、詩法の条および宋末元初・蔡正孫『詩林広記』前集卷二にも載せる。

（注7） 『而庵説唐詩』（卷十九）に「強いて自ら寛うすは、則ち自己は是れ悲秋、好き懷抱無しと雖も、然れども毎毎強いて歎笑を爲し、以て自ら寛うするを説く。人の席に赴くは、正に是れ自ら寛うする處」と。

（注8） 君子たるもの、人から飲食のもてなしを受けるとき、相手の財布をすつからかんにさせるようなことはしない。『礼記』曲礼上に「君子は人の歎を尽さず、人の忠を竭さず、以て交わりを全うするなり」とあり、鄭玄の注に「歎は飲食を謂ひ、忠は衣服の物を謂ふ」と。吉川幸次郎『杜甫詩注』第五冊に「尽君歎」の三字、『礼記』をひっきりかえして、今日はあ

えて『君子』ぶるまいというのであるが、わが津阪東陽『杜律詳解』以外、従来の注、あまり指摘しない」というが、既に『会粹』に挙げ、宇都宮遯庵の詳説にこれを引く。

宋玉の「九弁」に「悲しい哉秋の氣爲るや」と。秋の氣はものさびしくいたましく、心悲しませ傷ませるものだ。『列子』に「榮啓期、琴を鼓して歌ふ、能く自ら寛うする者なり」と。自ら慰めて気持ちをはげ散させ、胸のうちをすっきりとのびやかにさせることを言う。〈今日〉は、詩題の〈九日〉を指す。下の〈明年〉のために伏線を張っている。この対偶表現は、〈自ら〉のことから言い起こし〈君〉に對している。〈自〉は、我である。上の句は日頃くさくさして憂悶にたえぬことを言い、下の句は主人が真心を尽くしてもてなしてくれ、〈興〉に乗じて憂いを忘れたことを感謝している。〈君が歎を尽くす〉は、一日中居続けることである。公は年老いた身で官位を貶せられ、〈悲秋〉に感慨がひとしおであつて、無理やり自分の心を慰めて、鬱々として毎日を過ごしていたのだ。今日は重陽の節句、有り難いことに〈崔氏〉から宴に招かれるという幸運に遇い、心を奮い立たせて宴席に赴いたのだが、これもやはり〈自ら寛うす〉ることである。主人の厚い情誼によつて、すぐさま打ち興じて〈歎〉に乗り、すっかり良い氣分に酔い、日頃の鬱懷をさっぱりとなくし、かくして「君子は人の歎を尽くさず」という戒めを忘れて、一日中留まつて、帰ることも氣がつかかなかつたのである。〈老去〉の二字は、この一篇の枢軸であり、〈悲〉〈歎〉の二字を錯綜させている。よくよく注意して細かに味読するがよい。

差將^下短髮^二還^テ吹^レ帽^ヲ 笑^テ傍人^ヲ爲^ニ正^ス冠^ヲ

※短髮：ハケアタマ 吹：フキトバサル 正：ナホス

晉ノ桓溫^{（注）}九日遊^ニ宴^ス龍山^一、參軍孟嘉^{（注）}從^レ之^ニ。風吹^テ嘉帽^一落^ス、而^レ酩酊^{シテ}不^レ知。溫命^ニ孫盛^一爲^テ文^ヲ嘲^ル之^ヲ。短髮^ハ禿^{（注）}顙^{（注）}也。正^ニ承^ニ老^ノ字^一來^ル。此將^テ一^ニ事^ヲ、翻騰^{シテ}作^ニ一^ニ聯^ト。十四字一氣^ニ讀^ス、謂^ニ之^ヲ流水對^一。意

紫^{シク}承^ニ上^ニ盡^ス一^ニ歡^ヲ來^リ、見^ニ風流盛歡^一、曠達快活、乘^{コト}興^ニ尤^ニ劇^ヲ。蓋公隤然酩酊、同^ニ諸少年^一酣醉歡呼^{シテ}、

不^レ知^二身之老^一タルヲ、遂^ニ乘^{シテ}醉^ニ起^テ舞、踉蹌^{トシテ}徊翔^ス。幞頭爲^ニ傾^キ、因^テ恐^ル被^{レハ}風^ニ吹落^一、則頭顱兀然、醜態露^シ、爲^ニ人^ノ調笑^{セラレテ}、不^レ勝^ニ羞澀^ニ。索然興盡、悲傷復生^{セン}。於^レ是^ニ滑稽劇笑^{シテ}、請^ニ傍人^ニ正^ス之^ヲ。是雖^ニ大^ニ醉^ト、不^レ及^ニ亂^ニ也^一。細^ニ味^{フニ}詩意^一、蓋崔氏年少之人也。大抵老人與^ニ後生^ニ最^ニ不^レ相入^一、而崔氏善^ク待^シ公^ヲ、風流侑^ム歡^ヲ、故^ニ公亦不^レ作^ニ老態^ヲ、能盡^ス主人之歡^ヲ。庾公^ノ所^レ謂^ニ老子^ニ於^テ此處^ニ興不^レ淺^{カラ}也^一。孟嘉落帽^ハ、前世以爲^ニ風流^ト。公乃恐^{レテ}露^ニ衰鬢^ヲ爲^レ羞^ト、故^ニ用^ニ還^ニ字^ヲ言^レ之^ヲ。活^ニ用^{シテ}舊事^ヲ、筆端欲^レ舞^{ント}、絕妙^ノ翻案也。抑^レ二句雖^ニ一氣^ト、然^{トモ}上^ノ句承^テ老去^ヲ言^レ悲^ヲ、下^ノ句承^テ來^ヲ言^レ歡^ヲ。線索尤細^{ナリ}。微吟^{シテ}自知^ル。不^レ得^ニ隨^ニ口^ニ念^{シテ}過^{コトヲ}。宇士朗云、帽與^ニ冠^ニ似^ニ重^{ナリ}犯^{スニ}。但吹帽^ノ字假^ニ三故事^ヲ爾。余按^ニ吹帽^ニ既^ニ用^ニ典故^ヲ、若^シ正^ニ冠^ヲ無^ハ出處^一、則偏枯^{ナリ}矣。蓋亦用^ニ家語^ニ子路^ノ語^一、正^ニ得^ニ斤兩相稱^一。此^レ良工心獨苦^ム處、讀者崑崙^ニ吞^レ棗^ヲ、良^ニ可^レ歎^ス也。

(注9) 『晋書』卷九十八、桓溫伝附孟嘉伝。また『世說新語』識鑒篇の注に引く『孟嘉別伝』も同様の記事。もとは陶淵明「晋の故の征西大將軍の長吏孟府君の伝」に見える。なお、『蒙求』にも「孟嘉落帽」の条がある。龍山は、今の湖北省江陵県の西北。宇都宮遯庵の増広本は『分類』に挙げるのを、また詳説は顧宸『註解』に挙げるのをそれぞれ引く。

(注10) ちなみに、『夜航餘話』巻上には「年老ヌレハ髪ハ断^{きれ}テ短クナル、故ニ老鬢ヲ短鬢ト称ス」という箇所がある。

(注11) 『唐詩貫珠』(巻五十一、九日)に「短髪は正に老の字を承け來たる」と。

(注12) 『誠齋詩話』に「短髪を將^もつて還つて帽を吹かれんことを羞ちて、笑ふて傍人を倩^{やと}うて爲に冠を正すは、一事を將つて翻騰して一聯と作す」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注13) 『夜航詩話』巻六に「聯中、两句一連流走直下する者有り、之を流水対と謂ふ。老杜好んで此の法を用ふ」という。

(注14) 『論語』郷党篇に「唯だ酒は量無けれども、乱に及ばず」と。

(注15) 『而庵說唐詩』に「大抵老人と後生と最も相入れず。子美若し^{いふまでも}一些^{いさ}の老態を露出せば、便ち^{すなは}君の飲を尽さずと爲す。豈に一老人の鼠を以て諸少年の羹を壊さんや」と。

(注16) 『世說新語』容止篇に「庾太尉武昌に在り。秋夜氣佳く景清し。佐吏殷浩・王胡之の徒、南樓に登りて理詠す。音調始め

て適なるとき、函道の中に屐声の甚だ厲しき^{はげ}しきを聞く。定めて是れ庾公なり。俄にして左右十許人を率ゐて歩き来る。諸賢起ちて之を避けんと欲す。公徐ろに云ふ、諸君少しく住まれ。老子此の処に於いて興復た浅からず、と。因つて便ち胡牀に抛り、諸人と詠諠して、坐を畢ふるまで甚だ楽しみに任ずることを得たり」と。庾大尉は、庾亮のこと。

(注17) 北宋・陳師道(字は無已、一〇五三―一〇一〇)の『後山詩話』に『孟嘉落帽、前世以て勝絶と為す』云々と。宇都宮遜庵の増広本に挙げ、『唐詩集註』には「陳無已曰く」として引く。

(注18) 明・鍾惺(一五七四―一六二三)譚元春(一五八六―一六三七)撰評『唐詩歸』(卷二十二)に「鍾云ふ、二句一氣と雖も、然れども上語は悲、下語は諠。微吟して自ら知る。口に随つて念じ過ぐすことを得ず」と。

(注19) 宇野士朗(一七〇一―一七三一)のこと。名は鑒。士朗は、その字。近江の人。江戸に出て荻生徂徠(一六六六―一七二八)に師事、兄の明霞(字は士新。一六九八―一七四五)と並んで、平安の二字先生と称された。『宇士朗遺稿』の稿本五冊が現在、関西大学図書館の中村幸彦文庫に収められている(但し、未見)。『唐詩集註』の欄外の注に、宇野士朗の名をそれと明記しているわけではないものの、ここに挙げるのと同じ語が見え、釈大典『唐詩解頤』にも引く。

(注20) 『夜航詩話』卷六に「対偶の語、一に本づく所有り、一に来処無ければ、則ち偏枯と為る。猶ほ癖を病む者、半身遂げざるがごとし」と。《癖》は、中風。ちなみに、明・胡應麟『詩薮』内篇卷五に「七言律、対偶せざれば則ち偏枯」という。

(注21) 『孔子家語』には見えない。『史記』衛康叔世家および仲尼弟子列伝によれば、子路は衛の内乱に巻き込まれて戦死したが、その際、冠の纓を切られたとき、「君子は死しても冠を免がず」といつて纓を結んで死んだという。なお、『夜航詩話』卷六にも、この二句について「人只だ帽を吹くは孟嘉の事たるを知りて、冠を正すも亦た家語の子路の語を用ふるを知らず」という。もっとも、吉川幸次郎『杜甫詩注』は、子路の故事とするのを「大げさにすぎる」とし、「もし強いて杜の意識をかすめたか、意識の下にあった古典、それを求めるとすれば、『莊子』の『讓王篇』、やはり孔子の弟子曾參^{そうしん}の貧乏を説いて、『冠を正せば纓絶つ』であろう。杜の冠も、ほろぼろの纓であったかも知れぬ」という。なお、『唐詩集註』には『論語』堯曰篇の「君子は其の衣冠を正しくす」を挙げる。

(注22) 「杜文貞公伝」の(注102) 参照。

(注23) 004 「献納使起居田舎人澄に贈る」詩の(注26) 参照。

(注24) 崑崙吞棗は、丸呑みにすること。宋代からの俗語。崑崙は鵲崙、渾淪、渾圌などとも表記し、棗子渾淪呑ともいう。例

えば、『朱子語類』卷二二四に「今の学ぶ者、幾箇か章句を理会し得る有れども、也只是れ渾淪吞棗にして終に成らず」とあり、『碧巖錄』第三十則にも「渾淪に箇の棗を吞む」という言い方が見える。入矢義高監修、古賀英彦編『禪語辞典』（思文閣出版、一九九一年）参照。

なお餘談ながら、明治の思想家大江兆民の『一年有半』巻一に、日本に哲学なしとした上で、自ら標榜して哲學家と称する加藤弘之・井上哲次郎は「その実は己れが学習せし所の泰西某々の論説をそのままに輸入し、いわゆる崑崙に棗を吞めるもの、哲學者と称するに足らず」とあり、幸徳秋水からの質問に答えて「『崑崙に箇の棗を吞む』は、甘艸丸吞と同じ。崑崙とは正に『丸るで』『囁まずに』の義、『論語読みの論語知らず』も同義也。御推察の如く禪語なるも、唐宋の俗語に御座候」（岩波書店『中江兆民全集』第十六巻）と述べている。このこと井田進也校注『一年有半・統一年有半』（岩波文庫、一九九五年）の語釈参照。

晋の桓温が、九日、龍山に遊び酒宴を開いたおり、参軍の孟嘉がこれに付き従った。風が孟嘉の帽子を吹き落としたが、すっかり酔っていて気がつかなかった。桓温は孫盛に命じて文章を書かせてこのことをからかった。〈短髪〉は、禿げ頭である。まさに〈老〉の字を承け、この故事を引き伸ばして一聯としており、十四字は一気に読み下す。これを流水対という。その意味内容は上の〈飲を尽くす〉をぴったり承けて、風流で盛大な集いの下、のびやかに思のまま楽しみ、ことのほか打ち興じている様子をあらわしている。けだし公はぐでんぐでんに酩酊して、若い者たちと一緒に歌をうたい歓声をあげ、我が身の老いなど忘れてしまったのだろう、かくして酔いにまかせて立ち上がりよろよろふらふら舞いはじめたが、そのため頭巾が傾いてしまった。それで風に吹き飛ばされると、禿げ頭がむきだしとなり、醜態をさらけだして、人にかかわれるはめになつては、羞かしさに身の置きどころもないと心配して、急に興も冷め、悲しみが再び生じたのであろう。そこで戯けて笑いながら、〈傍らの人〉に頼んで〈正〉してもらった。これは大酔しても、「乱には及ばず」ということである。詩意を細かに味わうに、けだし〈崔氏〉は年若い人であらう。たいてい老人は若い者とうまくゆかないものだが、

《崔氏》はよく公をもてなし、風流酒脱でその《興》を助けた。それゆえ、公もやはり老態をさらけださず、存分に主人の《歎》を《尽》くしたのである。庾公のいわゆる「老子此の処に於いて興浅からず」というものである。孟嘉落帽の話は、前代には風流なことだとみなされていた。公はかえって衰髪をあらわにするのを《羞》かしいことだとみなした。されば《還》の字を用いてそのことを言うのである。故事を活用して、筆先が舞い出しそうで、絶妙の翻案である。そもそもこの二句は、一氣につながっているとはいえ、上の句は《老去》を承けて《悲》を言い、下の句は《興来》を承けて《歎》を言う。脈絡がとりわけ細やかで、微吟しておのづと分かるもので、口の動くままに読み過ぎしてはならない。宇士朗が云うのに、「《帽》と《冠》とは、律詩においては同義の文字を重ねて用いないという原則を犯しているようだが、《吹帽》の字は故事を借りているだけだ」と。思うに《吹帽》が故事を用いているのに、もしも《正冠》に出処がなければ、偏枯つまり半身不随になってしまう。けだし、こども『孔子家語』の子路の語を用いたのであろう。それでこそまさしく均衡がとれる。これぞ「良工独り苦しむ」ところだ。読者はそこに気がつかず、よく噛みしめもしないで丸呑みにしてしまうが、嘆かわしいことだ。

藍水遠^ク從^リ千澗^一落^テ 玉山高^ク竝^テ兩峯寒^シ

藍水ハ即藍田川^(注20)。又名^ニ藍谷水ト^一。遠從^ニ千澗^一落^ハ言^ニ衆壑爭流^テ皆落^ニ于此^ニ也。蓋秋水分明、歷^ニ歷^{タル}目下^ニ也。玉山見^ニ前詩^ニ。蓋有^ニ兩高峰^一、屹然對峙^ス也。寒^ハ謂^ニ秋景^一悲壯^{ナルヲ}。杜牧^カ詩^ニ南山與^ニ秋色^一氣勢兩^{ナカラ}相高^シ、可^レ作^ニ此句^一注脚ト。兩句言^ニ莊前山水之勝^一、寫^ニ深秋之氣象^一、因^ニ上聯流走^ニ、此聯嚴正養^ニ局^一。楊誠齋^云、詩人至^ニ此^一筆力多^ク衰。今方^ニ且雄傑挺拔、喚^ニ起^ス一篇^一精神^ヲ、非^ハ筆力拔^ニ山^ヲ、不^レ至^ニ於此^ニ矣。蓋借^テ山水無^レ恙^ニ以襯^ニ人事難^一知、須^ニ言外^一見^ニ之^一。

(注25) 輯註(卷五)に「水経注に、霸とは水上の地名。水は藍田県の藍田谷に出づ。所謂玉多き者なり。北のかた藍田川を歴

し、藍田県の左を巡り瀝水に合す。又た北して渭水に入る」と。『水経注』は卷十九、渭水の条。輯註は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注26) 020 「崔氏東山草堂」詩。

(注27) ちなみに、邵傳『集解』に「兩峰は泰山華山なり」とするが、秦は秦の訛字。邵宝『集註』（卷二十三、時序類）に「兩峰は玉山、秦山華山と峙ち立つ。故に高く兩峰に並んで寒しと云ふ」とあり、薛益『分類』及び顧宸『註解』もほぼ同じ。これに対して、輯註は『華山志』に「岳の東北に靈台山有り。兩峰崢嶸として四面懸絶す。上は景雲を冠し、下は地脈に通ず」というのを挙げ、「按ずるに藍田山は華山を去ること近し。故に高く兩峰に並んで寒しと曰ふ。旧注に秦山華山を指すと、是に非ず」とする。秦山・華山の兩峰ではなく靈台山の兩峰が藍田山と並んでいると解するのである。いずれにしろ、兩峰を玉山とは別のものとする点では同じ。ここに挙げた諸注はおおむね宇都宮遯庵の増広本に引く。この外、『而庵說唐詩』は秦山・華山の兩峰とする。なお、この句をめぐる解釈の異同については、松浦友久編『校注唐詩解釈辭典』（宇野直人執筆）参照。

(注28) 020の(注6)参照。

(注29) 顧宸『註解』に「此の二句は莊前山水の勝を言ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注30) 『唐詩貫珠』に「五六は眼前の景を言ふと雖も、上聯の流走に因つて、此の聯は平正に局を養ふ」と。

(注31) 『誠齋詩話』に見える。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。〈拔山〉は、項羽の「力山を抜き氣世を蓋ふ」に基づく語（『史記』項羽本紀）。

〈藍水〉は、藍田川のこと。また藍谷水と名づく。〈遠く千澗従り落つ〉は、多くの谷から流れて出てここで落ち合うことをいう。けだし秋の川面がくつきりとして、眼下にありありと見えるのである。〈玉山〉は、前の詩に見える。けだし〈兩〉つの高い〈峰〉が向かい合つて聳えたっているのである。〈寒〉は、秋景の悲壮なるさま。杜牧の詩に「南山と秋色と氣勢兩つながら相高し」とあるのを、この句の注脚としてよい。この二句は、別荘の前にひろがる山水のすばらしさをいい、晩秋のおもむきを写し出している。上の聯では筆が走っているの

で、この聯では厳正に布置している。楊誠齋が云う、「ふつう詩人の筆力はここで衰えてしまうことが多いものだ。ところがこの場面でまさに雄勁傑出しており、一篇の精気活力を喚起している。山を抜くほどの筆力でなければ、こうはゆかない」と。けだし、山水の常変わらぬ姿を借りて、人の世の知り難いことを際立たせている。言外にこれを見なければならぬ。

明年此會知誰^カ健^{ナラン} 醉^テ把^テ茱萸^ヲ子細^ニ看^ル

※健：ブジ 子細：シミ／＼ト

明年反^ニ照^ス起^ス今日^ニ。知誰健應^ス老去^ニ。醉^テ把^ニ茱萸^ヲ應^ス興來盡^ニ歡^ヲ。何^ソ其律之細^也也^(注33)。茱萸^ハ酒^ノ名^也也^(注34)。古稱^ス九日折^テ茱萸^ヲ插^レ頭^ニ辟^ニ邪惡^ノ氣^ヲ。後人遂^ニ以^テ泛^レ酒^ニ謂^ニ之^ヲ茱萸酒^ト。亦曰^ニ萸杯^ト。權德輿詩^ニ酒泛^テ茱萸^ヲ晚^ニ易^レ醺[、]是也。子細^ハ俗語、精^{スル}意^ヲ之辭^也也^(注35)。猶^レ云^ニ丁寧^ト也。子細^ニ看^ハ綰^{シテ}上^ノ藍水玉山^ヲ言^レ之^ヲ。蓋山水^ハ恆^ニ在^テ人^ハ難^ニ常^ニ健^{ナリ}、不^レ知明年今日再^タ開^シ此會^ヲ、人人皆得^レ無^レ恙^乎。座中公最老大、尤不^レ可^レ期^ス。故^ニ戀^{シテ}勝槩^ニ、賞心殊^ニ切^{ナリ}。醉餘復把^テ萸杯^ヲ、滿引激灑、且未^ニ卽^レ嚼^一、悠然對^{シテ}山水^ニ、殷勤^ニ注^レ目^ヲ、而惜^ニ其風景^ヲ也。此結^ニ老去^ノ意^ヲ、悲歡併^ニ至^リ、意味深長、悠然無^レ窮^矣也^(注36)。失放^ノ絕句殷勤^{ニス}竹林寺、能得^シ幾回過^{コトヲ}、亦子細^ニ看^ル意也。若云^ハ看^ニ茱萸^ヲ、有^ニ何^ノ趣味^也也^(注37)。宋人劉浚重陽^ノ詩^ニ不^レ用茱萸子細^ニ看^ヲ、管取^ス明年各強健、是翻^ニ案^{シテ}此詩^ヲ、誤^テ以^ニ子細^ニ看^ヲ爲^レ看^ニ茱萸^ヲ、良可^レ笑^ハ已。當時乃稱^ニ名作^ト、何^ソ耶。明年此會、焦氏筆乘引^ニ阮瞻^カ語^ヲ、亦僞蘇^ノ杜撰^耳也^(注38)。

(注32) 〈子〉字、輯註および詳註(卷六)は〈仔〉に作る。東陽が底本とした『集解』も同じ。

(注33) この言い方、『而庵說唐詩』に見える。

(注34) 清・沈德潛『杜詩偶評』(卷五)に「茱萸は酒の名」と。茱萸について東陽は注記せぬが、宇都宮遯庵の詳説は「茱萸ハグミ也」とする。もともと、これはグミではなくカワハジカミのことである。なお、吉川幸次郎『杜甫詩注』は「津阪氏

が〔把〕るのは茱萸の実そのものでなく、それをうかべた盃とするのも「従いがたいとする。

(注35) 九日以下、『唐詩解頤』に見える。

(注36) 中唐・權德輿（七六一〜八一八）の「九日北樓宴集」詩（『權載之文集』卷六／『全唐詩』卷三三五）に、次のようにい

う。
蕭颯秋聲樓上聞 蕭颯たる秋声 樓上に聞こゆ

霜風漠漠起陰雲 霜風漠漠として陰雲起こる

不見攜觴王太守 觴を携へし王太守を見ず

空思落帽孟參軍 空しく帽を落せし孟參軍を思ふ

風吟蟋蟀寒偏急 風 蟋蟀を吟じて寒さ偏へに急に

酒泛茱萸晚易醺 酒 茱萸を泛べ晩に醺ひ易し

心憶舊山何日見 心に旧山を憶ふ 何れの日にか見ん

併將愁淚共紛紛 併せて愁涙を將つて共に紛紛たり

王太守とは、晋・王弘のこと。九日に陶淵明のもとへ酒を届けたという話が六朝宋・檀道鸞『続晋陽秋』（『藝文類聚』卷四、歳時中、九月九日の条及び卷八十一、葉草部上、菊の条に引く）や梁・蕭統「陶淵明伝」、『宋書』隱逸伝などに見える。

(注37) 釈大典の『詩語解』に「子細、精スル意、之辞」と。「仔細」とも表記する。塩見邦彦『唐代口語の研究』（中国書店一九九五年）に拠れば、盛唐頃から詩中に現われる語。

(注38) 輯註に「仔細に看るは、上の藍水玉山を結して之を言ふ」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

但し、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（卷六）に看字に注して「蓋し茱萸の枝をみつめるなり。古来多くこの義にとけり」とし、吉川幸次郎『杜甫詩注』は「朱鶴齡、顧宸、津阪孝綽が、〔看〕る対象を茱萸でなく、前聯にいう山水の風景とするのは、従いがたい」とする。ちなみに、顧宸の『註解』には「張成倩が曰く、末句、解する者皆謂ふ茱萸を看ると。殊に謂れ無し。疑ふらくは上聯を承け来る、と。余、此の解を得て大いに快し。蓋し藍水樽に当たり、玉山望に在り、其の遠落高寒、正に是れ之を看て尽きず。故に手に茱萸を把つて、目に山水を看る。美景に対して以て留連し、時物を攪りて矚を

寄す。酣酔の餘と雖も、未だ嘗て仔細ならずんばあらず。正に肯へて草草に看過せざるなり」という。張成倩は、明・張玉成（字は成倩、一六三四年歿）のこと。『七言律準』四十七卷を輯したという。清・陳田『明詩紀事』辛籤卷三十および張慧劍『明清江蘇文人年表』に見える。なお、沈德潛も朱鶴齡らの説と同じく藍水玉山を見ると解していること、（注41）参照。

（注39）『誠齋詩話』に「明年此の会知んぬ誰か健なる、酔つて茱萸を把つて仔細に看るは、則ち意味深長、悠然窮まり無し矣」と。

（注40）中唐・朱放の「竹林寺に題す」詩（『全唐詩』卷三二五）に、次のように見える。

歲月人間促　歲月人間促
煙霞此地多　煙霞此地多
殷勤竹林寺　殷勤にす竹林寺
能得幾迴過　能く幾迴過ぎるを得ん

ちなみに、『夜航餘話』卷上に「殷勤ハ、ネンゴロニト訳ス。委曲ニ心ヲ尽スノ謂ナリ」とし、「殷勤ニス竹林寺、態得ニ幾度過^{カコトラ}」ハ、ナゴリ惜ク戀ニ恋スルナリ」と説く。

なお、朱放には「九日、楊凝・崔淑と江上の山に登るを期す。会^{タビ}たま故有り、往くを得ず。因つて之を贈る」と題する作（同右）があり、

欲從攜手登高去　手を携へて登高し去くに従はんと欲するも
一到門前意已盡　一たび門前に到れば意已に尽く
那得更將頭上髮　那^なんぞ更に頭上の髮を將^{もち}て
學他年少插茱萸　年少を学他して茱萸を挿すを得んや

と詠じているが、これは耿漳の「九日」詩（『全唐詩』卷二六九）に「髮稀にして那んぞ茱萸を挿さん」と言うのと同じく、若い者とは違つて髮が薄くなった身では、茱萸を挿すのが憚られるという意。

（注41）清・沈德潛『杜詩偶評』に、さきに挙げた箇所が続けて「言ふところは酒を把つて藍水玉山を看る。遽^{にはか}に去るに忍びざるなり。若し茱萸を看ると云はば、何の意味か有らん」と。

〔注42〕『誠齋詩話』に「予が友人安福の劉浚、字は景明の重陽詩に云ふ」として、この二句を引く。なお、管取は当時の俗語で、きつと、必ずの意。

〔注43〕明・焦竑（字は弱侯。一五四〇～一六二〇）撰『焦氏筆乘』（慶安二年「一六四九」刊の和刻本あり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集』第四集に影印を収む）の巻四に「山谷謂ふならく杜詩一字として来処無きは無しと。今、試みに一二を拈せん」として、「明年此會知誰健、阮瞻が語を用ふ」という。『王狀元集百家注編年杜少陵詩史』（巻五）、『集千家註分類杜工部詩』（巻十一、節序）に「蘇曰く、阮瞻、元日親友に会して曰く、人生は風中の燭の如し、樽酒何ぞ必ずしも其の満つるを拒まんや。知らず明年の今日再び此の会を開かんに、誰か是れ強健なる」とある。ちなみに、阮瞻は西晋の人で、字は千里（二八二～三一二）。阮籍（二一〇～二六三）の甥にあたる阮咸の子。偽蘇注のことは、訳注稿③、012の〔注13〕参照。

〈明年〉は、起句の〈今日〉に照応している。〈知んぬ誰か健ならん〉は〈老去〉に対応し、〈酔ひて茱萸を把る〉は〈興来〉〈歎を尽くす〉に対応している。なんと詩律の細やかなことか。〈茱萸〉は、酒の名。古には〈九日〉に〈茱萸〉を手折って頭に挿し邪気を払ったが、後世の人は酒に〈茱萸〉をうかべるようになって、これを「茱萸酒」といい、「萸杯」ともいった。権徳輿の詩に「酒茱萸を泛べ、晩に醺ひ易し」というのが、そうである。〈子細〉は、俗語。意を凝らす辞。丁寧とほぼ同じ。〈子細に看る〉は、上の〈藍水〉〈玉山〉をもひつくるめていう。けだし山水はつね変わらずに存在するが、人がずっと健やかでいることは難しい。〈明年〉の〈今日〉、再び〈此の会〉を開いても、〈誰〉もが皆そろってつつがなく出席できるか、分らない。座に列した者のなかで、公が最も年老い、いちばんあてにならない。されば、すばらしい景色に恋々として、それを愛でようとする思いがひとしおなのだ。酔った後、ふたたび〈茱萸〉の入った杯を手にし、なみなみとつがれたのを、しばしぐっと飲み干さず、じつくりと山水に対してねんごろに目を注いで、その風景をいとおしむのである。これは〈老去〉の意を結んで、〈悲〉〈歎〉あわせ至り、意味深長で、はるかきわまらない。朱放の絶句に「殷勤に

す竹林寺、能く幾回過ぎるを得ん」とあるが、やはり「子細に看る」という意である。もし「茱萸を看る」といえば、なんの味わいがあるう。宋人劉浚の「重陽」詩に「用ひず茱萸子細に看るを、管取す明年各おの強健」とあるのは、この詩を翻案して、「子細に看る」のを茱萸を看るとしたもので、全くのお笑い草だ。当時なんと名作だと称せられたのは、どうしてだろうか。「明年此の会」について、『焦氏筆乘』は阮瞻の語なるものを引いているが、やはり偽蘇注の杜撰なやつだ。

022 至日遣興^ラ奉^ス北省ノ舊閣老兩院ノ故人^ニ二首^一（其一）

至日^{（注3）}ハ即冬至。是ノ日、日行^{コト}南^ニ至^テ而極^ル、故^ニ謂^フ之^ヲ至^一。^{（注1）}遣^ハ猶^レ解^セ也。^{（注2）}遣興^ヲ猶^レ云^レ述^レ懷^ヲ。興^ハ起也。公感^{シテ}至日^{（注3）}而悲興^ル、故詠^{シテ}以自解慰^ス也。北省^ハ謂^フ中書門下ノ兩省^ヲ。杜氏通典^{（注4）}ニ唐人謂^フ中書省^ヲ爲^ス南省^ト、中書門下^ヲ爲^ス北省^ト。李肇^{（注5）}カ國史補^ニ宰相^ハ呼^テ爲^ス堂老^ト、兩省相呼^テ爲^ス閣老^ト。蓋中書門下兩省ノ官人互^ニ以^テ閣老^ヲ相呼^フ也。武后ノ時改^テ門下省^ヲ爲^ス鸞臺^{（注6）}、中書省^ヲ爲^ス鳳閣^{（注7）}、故^ニ以^テ閣^ヲ稱^レ之^ヲ也。舊閣老^ハ指^フ嚴武賈至ノ輩^ヲ。時^{（注8）}武^ハ爲^ス給事中^ト、屬^ス門下省^ニ。至^ハ爲^ス起居舍人^ト、屬^ス中書省^ニ。公有^{（注9）}下畱^ニ別^ニ賈嚴^ニ閣老兩院ノ遺補^{（注10）}詩^上、又有^{（注11）}下寄^ニ賈嚴兩閣老^ニ五十韻^上。公往^{（注12）}在^ニ掖省^ニ相呼^フ稱^ス閣老^ト。今^ハ則^ル爲^ス舊事^ト。故^ニ以^テ舊^ヲ稱^レ之^ヲ。兩院^ハ謂^フ拾遺補闕^ヲ、說見^{（注13）}于前^ニ。即公同僚ノ故人。蓋指^フ岑參輩^ヲ也。冬至ノ朝賀^ハ、天子御^{（注14）}含元殿^ニ、盛禮亞^{（注15）}元旦^ニ。公在^{（注16）}華州^ニ、追^シ憶^シ去歲ノ朝儀^ヲ、不^レ勝^ニ感慨^ニ、因^{（注17）}賦^{シテ}以^テ寄^フ懷^ヲ也。

（注1）『唐詩貫珠』（卷五十一、冬至附臘日餘夕）に「孝經緯に曰く、至に三義有り。一は陰極の至り。二は陽氣始めて生ず。三は日行南に至る」と注する。これは、『太平御覽』卷二十八、時序部十三、冬至の条に挙げる『孝經說』に見えるもの。また宇都宮遼庵の両著には南宋・祝穆『事文類聚』前集卷十二に、天時部、冬至の条に「斗、子を指すを冬至と爲す。至に三義有り。一は陰極の至り。二は陽氣始めて至る。三は日行南に至る、故に之を至と謂ふ」とあるのを挙げるが、これ

も、基つくのは『孝経説』であらう。

(注2) 何か基つくところあるのか、不明。

(注3) 例えば、『字彙』に「興は、虚陵の切。音馨。作なり、起なり」云々と。

(注4) 中庸・杜佑(七三三〜八一二)の『通典』卷二十一、中書省の条に「時に尚書省を謂ひて南省と為し、門下中書を北省と為す。亦た門下省を謂ひて左省と為し、中書省を右省と為す」と。輯註(卷五)に挙げ、宇都宮遯庵の両著にも輯註を引く。

(注5) 晩唐・李肇『国史補』卷下に「宰相は相呼びて元老と為し、或いは堂老と為す。両省は相呼びて閣老と為し、尚書丞郎中は相呼びて曹長と為す」と。『唐詩貫珠』に挙げる。

(注6) 『旧唐書』卷四十三、職官志、門下省の条に「龍朔(六六一〜六六四)改めて東台と為し、光宅(六八四)改めて鸞臺と為す。神龍(七〇五〜七〇六)復す」と。

(注7) 『旧唐書』職官志、中書省の条に「龍朔改めて西台と為し、光宅改めて鳳閣と為す。神龍復た中書省と為す。開元元年(七一二)改めて紫微省と為し、五年旧に復す」と。

(注8) 給事中は、正五品上。門下省に属し、制勅駁正の大事を掌る。『新唐書』卷一二九、嚴武伝に「至徳の初め、肅宗の行在に赴き、房琯、其の名臣の子為るを以て、薦めて給事中と為す。已に長安を収め、京兆少尹に拝せらる」とあり、至徳元載(七五六)から至徳三載(七五八)三月に京兆少尹となるまで、その任にあった。給事中の嚴武に対しては「嚴八閤老に贈り奉る」詩(詳註卷五、〇一七七)がある。

(注9) 起居舍人は、従六品上。中書省に属し、天子の言葉を記録することを掌る。但し、ここに起居舍人というのは、中書舍人の誤り。訳注稿(三)、008「賈至舍人早に大明宮に朝するに奉和す」詩の(注1)参照。

(注10) 詳註卷五、〇一七九。

(注11) 乾元二年(七五九)作の「岳州の賈司馬六丈、巴州の嚴八使君の両閣老に寄す五十韻」詩(詳註卷八、〇三四六)。

(注12) 011「省中の院壁に題す」詩の詳解に「門下省中の諫院の壁に題するなり。拾遺補闕の両職、供奉諷諫を掌る。(中略)故に其の直署を諫院と曰ふ」と。

(注13) 008「賈至舍人早に大明宮に朝するに奉和す」詩の詳解に「丹鳳」門内の第一の正殿を含元殿と曰ふ。之を大朝と謂ふ。

(中略) 元旦冬至の大朝会には之に御す」と。

〈至日〉は、冬至にはかならない。この日、太陽が最も南に行く、それゆえ〈至〉というのだ。〈遣〉は、解とほぼ同じ。〈興を遣る〉は、懷を述ぶというのとほぼ同じ。〈興〉は、起である。公は〈至日〉に心感じて悲しみが〈興〉った。されば詠じて自ら解きほぐすのである。〈北省〉は、中書・門下の兩省のこと。杜氏『通典』に「唐人は尚書省を南省とし、中書省を北省とした」、李肇の『国史補』に「宰相は堂老と呼び、兩省では閣老と呼び合った」とある。ただし中書・門下兩省の官人は互いに〈閣老〉と呼び合ったのであろう。武后の時、門下省を鸞台と改称し、中書省を鳳閣とした。それゆえ〈閣〉字でこれを称する。〈旧閣老〉は、嚴武や賈至の輩を指す。当時、嚴武は給事中として門下省に属し、賈至は起居舍人として中書省に属していた。公に「賈嚴二閣老、兩院の遺補に留別す」詩、また「賈嚴兩閣老に寄す五十韻」詩がある。公は先に掖省にありしとき、〈閣老〉と呼んでいたが、今は昔のことになってしまった。それゆえ〈旧〉字でこれを称している。〈兩院〉は、拾遺・補闕のこと。説は前に見える。即ち公の同僚の友人で、けだし岑参の輩を指すのであろう。冬至の朝賀では、天子は含元殿に出御なさる。典礼の盛大さは、元旦につぐ。公は華州で去年の朝儀を追憶し、感慨にたえず、それで賦して懷いを寄せたのである。

去歲茲辰捧^(注14)玉牀^一 五更三點入^ル鵷行^二

※玉牀：タカミクラ 鵷行：レツ

辰^ハ日也。玉牀^ハ謂^二御牀^一。拾遺^ハ掌^ル供奉^一、則大朝會ノ御牀^ハ、蓋其所^レ設也。更^ハ歷也、經也。^(注15)故^ニ五^二分^一シテ夜時^ヲ謂^二之^一更^一ト。漏刻毎^ニ更^一分^二五點^一。點^ハ者以^二下^一漏^ヲ滴水^ヲ爲^レ名。^(注16)五更三點^ハ寅ノ刻ノ六分也。鵷^ハ鸞屬。^(注17)其飛^{コト}有^二次序^一、小不^レ踰^レ大^一。故^ニ以^レ喻^二朝班^一、謂^二之^一鵷鸞行^一ト。入^ニ鵷行^一言^下隨^二舊閣老故人^一、得^上レ班^二於^一同列^一也。^(注18)

〔注14〕〈玉〉字、錢注（卷十）および輯註（卷五）は、〈御〉に作る。詳註（卷六）も同じ。

〔注15〕008「賈舍人早に大明宮に朝するに奉和す」詩、〔注12〕に挙げた『顔氏家訓』卷六、書證第十七の記述の後に「更は、歴なり、経なり。故に五更と曰ふ爾」と。

〔注16〕南宋・程大昌（一一二三―一一九五）の『演繁露』卷四、更点の条に「点とは則ち漏を下る滴水を以て名と為し、一更毎に又た分けて五点と為すなり」と。

〔注17〕初唐・李嶠（六四五―七一四）の「長寧公主の東莊にて宴に侍す」詩に「長筵鵲鷺集まり、仙管鳳凰調ふ」の句があり、『唐詩集註』（卷三）は、『禽經』の注に「鷺は白鷺なり。小は大を踰えず。飛ぶに次序有り。百官縉紳の象なり」とあるのを挙げる。

〔注18〕邵傳『集解』に「言ふところは去年至日、朝に侍して同列に班することを得たり」と。

〈辰〉は、日である。〈玉牀〉は、御牀のこと。拾遺は、供奉を掌る。とすれば、大朝会の御牀は、けだし拾遺の設えたものであろう。〈更〉は、歴、経の意である。されば夜を五等分して〈更〉という。漏刻は、〈更〉ごとに五点にわけける。〈点〉は、漏を下る水の滴りから名づけた。〈五更三点〉は、寅の刻六分である。〈鵲〉は、鷺の類。飛ぶのに序列があり、小さなやつが大きなものを追い越さない。それで朝廷の班列に喩え、これを「鵲鷺行」という。〈鵲行に入る〉は、〈旧閣老〉の〈故人〉に随つて、同列に並ぶことができたの言う。

欲^セ知^{ント}趨走傷心^ノ地^ヲ 正^ニ想^フ氤氲滿眼^ノ香

※趨走…トチクサスル 傷心…アハレカナシキ 氤氲…ハルメキタル 滿眼…ニギくシキ

趨走^ハ言^下身爲^テ掾吏^ト、趨^ニ謁^{シテ}郡將^ニ、不上^レ勝^ニ折腰^ノ之^ノ勞^ニ也。地^ハ者猶^レ處^ニ。一本作^レ處^ニ。氤氲ハ香煙飄揚之

貌。香^ハ謂^ニ御爐之香^ヲ。公爲^ニ拾遺^一、班近^シ香案^ニ、説見^ニ于前^ニ。滿眼ハ雙夾、言^ニ昔日咫尺滿^レ眼^ニ、又言^ニ

懷想依依^ニ、如^レ在^ニ眼前^ニ。正想^ハ蒙^レ欲^セ知^{ント}來^ル。四字緊ク相呼應ス。與^ニ羞將笑^一同一對法。蓋兩省ノ舊侶、

若憐^ニ謫宦之況^ヲ、欲^セ知^{ント}傷心何如^ヲ、郡廳趨走之際、正^ニ爾^ク想^ニ像^{シテ}朝儀^ヲ、猶宛在^ニ眼前^一、尤難^レ爲^レ

懷^(注26)也。嗚呼、去年何等ノ清華^ソ、今ハ則何等ノ卑陋^(注27)。所^ニ以觸感^{シテ}傷^レ心^ヲ也。

(注19) 薛益『分類』(卷二、時序)に「趨走心を傷ましむる地とは、華州の掾と為つて、趨走して郡將に參調するを言ふ」と。
《郡將》は、州の長官のこと。『分類』は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。但し、顧宸『註解』や張遠『会粹』(卷六)は左拾遺として宮中に趨走したことをかく言うと解する。(注31) 参照。

(注20) 019 「早秋熱を苦しむ、堆案相仍る」詩の(注9) 参照。

(注21) 例えば、『草堂詩箋』(卷十三)は《地》を《處》に作る。

(注22) 009 「宣政殿退朝、晩に左掖を出づ」詩の詳解。

(注23) 『文選』卷四十一に漢・李陵の作として載せる「蘇武に答ふる書」に、「風を望み想いを懷^{いだ}いて、能く依依たらざらんや」と。

(注24) 顧宸『註解』に「正に想ふ」は、《知らんと欲せば》を蒙り来る」と。宇都宮遷庵の両著に挙げる。なお、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷六)は、この一聯を「知らむことを欲す傷心の地に趨走し、正に氤氳たる滿眼の香を想ふことを」と訓じている。

(注25) 021 「九日崔氏藍田莊」詩の第三、四句「羞將短髮還吹帽、笑倩傍人為正冠」(短髮を將^もつて還^{かへ}つて帽を吹かれんを羞^ぢちて、笑つて傍人を倩^{やと}うて為に冠を正さしむ)を指す。

(注26) この言い方、『世說新語』言語篇に「王子敬(猷之)云ふ、山陰道上從^より行けば、山川自ら相映發し、応接に暇^{いとま}あらざるなし。秋冬の若^{ごと}きは、尤も懷^もを為し難し」と。

(注27) 『唐詩貫珠』に「所以^{ゆゑ}に感觸す、上年は何等の清華ぞ、今は則ち何等の卑下^{ひげ}なる耳」と。

《趨走》は、わが身は下役人となつて、長官に小走りで拝謁し、ぺこぺこ頭を下げる苦勞にたえられないの言う。
《地》は、処とほぼ同じ。一に《處》に作る。《氤氳》は、香煙がゆらゆらとたちのぼるさま。《香》は、御爐の《香》のこと。公は拾遺となつて、その班列は香案に近かつた。説は前に見える。《滿眼》は、二つのことをかけて、昔日はごくお側近くで《眼に滿ち》ていたの言い、またずっと懷^もかしく思い出され、眼前にあるか

のようだと云う。〈正に想ふ〉は、〈知らんと欲せば〉を受けている。四字はぴつたりと呼応しており、前詩の〈羞将〉と〈笑〉とが呼応しているのと、全く同じ対句法である。けだし中書・門下の両省にいる昔の仲間が、もしも貶謫された今の状況を気の毒に思つて、〈傷心〉のほど如何ばかりかと〈知らんと欲せば〉郡の役所をかけずりまわっているとき、朝廷での儀礼の様子をこのように想像して、まだありありと眼前に思い浮かべており、とりわけいたたまれない思いをしているのである。ああ、去年は何と清華であつたことか、今では何と卑陋の身の上であることか。時節柄、感慨が生じて〈心〉を〈傷〉ましめるゆえンである。

無^レ路^ニ從^ニ容^{スル}陪^ニ語^ス笑^ニ

有^レ時^ニ顛^倒シテ^ニ著^ニ衣^ス裳^一

※從容：ユツタリトシテ 顛倒：トチレマチガヘテ

無^レ路^ハ言^ニ官^守懸^隔一^ニ公^前所^ニ云^レ侍^臣緩^歩、退^食從^容、今^憶二^ヘ其^事一^ヲ、邈^トシテ^ニ隔^ニ雲^泥一^ヲ、故^ニ曰^レ無^レ路^一。

深^ク嘆^ニ境^界之^異一^{ナル}也。從^容ハ閑^暇貌^一。反^ニ襯^ス趨^走一^ニ陪^ニ語^笑一^ニ應^レ入^ニ鴈^行一^ニ。言^下陪^ニ諸^公一^ニ待^レ朝^ヲ之^間、

言^談歡^笑上^セシ^ヲ。此^直ニ承^ニ正^ニ想^ノ句^一來^ル。顛^ニ倒^スハ衣^裳一^ヲ、承^ニ欲^レ知^{ント}句^一ヲ、言^ニ期^會奔^走之^急一^ヲ。詩^齊風^東

方^未明[、]顛^ニ倒^スハ衣^裳一^ヲ。蓋^恐レ失^ニ期^會一^ヲ、致^ス此^ニ狼^狽一^ヲ。吏^務周^章、動^スレハ輒^如レ是^ノ也。嗚^呼、省^官清^高、

儼^トシテ^ニ若^ニ神^仙一^ノ、眞^ニ在^ニ青^雲之^上一^ニ、與^下風^塵ノ俗^吏事^トスル^簿書^期會^一者^上、覓^然星^淵。追^ニ憶^スレハ去^年ノ茲^辰一^ヲ、

恍^惚如^ニ夢^幻一^ノ也。

(注28) 薛益『分類』に「官守懸隔して、両院の故人の歎に追陪することを得ず」と。宇都宮遷庵の増広本に挙げる。官守は、

職務。

(注29) 009 「宣政殿退朝、晩に左掖を出づ」詩に「侍臣緩歩して青瑣より帰り、退食從容として出づること毎に遅し」と。

(注30) この言い方、例えば、白居易の「友を傷む」詩(『白氏文集』卷二)に「昔年洛陽の社、貧賤相提携す。今日長安の道、対面雲泥を隔つ」と。下文の星淵も同義。

〔注31〕『史記』留侯世家に「張良嘗て間に從容として下邳の圯上を歩游す」とあり、唐・司馬貞の索隱に「間は、閑字なり。從容は間暇なり」と。

〔注32〕『詩經』齊風・東方未明。ちなみに、顧宸『註解』に「〈衣裳を顛倒す〉は、即ち詩の東方未明に衣裳を顛倒するなり」と注した後、「四句俱に是れ〈去歲茲の辰〉を憶ふ」とし、「趨走」を内廷でのそれと解する。また張遠『會粹』（卷六）にも「此れ追つて拾遺為りし時を憶つて作る」とし、「趨走」の句、俗解に俱に説きて華州の掾、上官に趨謁すると為し、「顛倒」の句、此に頂すと。非なり。昔日趨走の地、今は心を傷ましむるに足れり。下の〈無路〉二句の意を含む。〈顛倒〉の句、亦た是れ心に君を忘れず、恍として朝謁の時の態の若き耳」と説いている。『註解』は宇都宮遯庵の両著に、『會粹』は詳説に挙げる。

〔注33〕ちなみに、『夜航詩話』卷三に「按ずるに青雲は本と晴天を謂ふ。因つて人の顯著なるを謂ふに、徳を以て言ふ者有り、位を以て言ふ者有り、又た世外高志を言ふ有り」として、それぞれの用例を挙げる。

〔注34〕ちなみに、『夜航詩話』卷三に「風塵も亦た数義有り」として、「兵乱を言ふ」「物外に対して人寰を謂ふ」「俗累を謂ふ」「泛く宦途を指して言ふ」「俗吏の職を謂ふ」「京官に対して郡県を謂ふ」「妓坊を謂いて風塵と為す」と説いている。なお、詩語としての〈風塵〉を論じたものに、松本肇「杜甫『風塵』考」（『筑波中国文化論叢』四、一九八四）があり、後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ―唐詩を読むために』（東方書店、二〇〇〇年）の中に「風塵」の項目（谷口真由実執筆）が立てられている。

〈路無し〉は、職務がまるつきり隔たってしまったことを言う。公は前に「侍臣緩歩」「退食從容」といつていたのが、今そのことを憶うと、はるか雲泥を隔てたようで、それゆえ〈路無し〉という。境遇が異なるのを深く嘆いているのである。〈從容〉は、のんびりと暇なさま。〈趨走〉に對比して際立たせている。〈語笑に陪す〉は、〈鵲行に入る〉に対応している。諸公に陪して朝儀を待つ間に、言談歛笑したことを言う。これは直ちに〈正に想ふ〉の句を承けている。〈衣裳を顛倒す〉は、〈知らんと欲す〉の句を承け、會計処理に奔走することのあわただしきと言う。『詩經』齊風に「東方未だ明けず、衣裳を顛倒す」と。けだし會計処理の期日を失せんこ

とを恐れ、かかる狼狽ぶりを招いたのであろう。吏務にあたふたとして、とかくこのような具合であつたのである。ああ、省官の清貴なること、神仙のようであり、まことに青雲の上において、塵埃にまみれた俗吏で帳簿をつけたり会計処理を仕事とする者とは、はるか天淵の差がある。去年のこの日を追憶すると、ぼうっとして夢か幻のようである。

何人^(注35)錯^レ認^ム窮^ム愁^ム日^ト 日日愁^ハ隨^テ一線^ニ長^{カラ}ン

※窮愁日：メテタキヒカラ

六壬書^(注36)ニ至日^ヲ爲^ニ窮愁之日^ト。窮^ハ盡也。長至之日、陽長シ陰消ス、故^ニ謂^ニ之愁盡^ル日^ト。蓋言^ニ家家慶賀^{シテ}忘^レレ

憂^ヲ相歡^一也。此翻案^{シテ}用^レ之^ヲ。言茲ノ辰愁何^ソ曾^テ盡^シ、乃愁^ノ長^{スル}日耳。不^レ知何人錯^リ認^テ以爲^ニ愁盡^之

日^ト乎。蓋逢^ニ佳節^ニ乃倍^ク傷^ム心^ヲ、愁之甚^キ也。一線^ハ言^ニ至後暑始^テ長^一。公ノ詩又云、刺繡五紋添^ニ弱線^一、

指^ニ女工^一以驗^{コト}暑^ヲ、用^ニ時俗^ノ事^一。文昌雜錄^(注40)唐ノ宮中以^ニ女工^一揆^ル日之長短^一、冬至ノ後日暑漸^ク長^{コト}

增^ニ一線之功^一、是也。此言^下自^レ是日日隨^レ暑^ノ長^キニ、而吾愁亦應^ニ添^レ長^キヲ、逾^ク不^レ可^レ堪^也。古詩^(注41)ニ云、

愁人苦^ム夜^ノ長^一、今乃憂^ニ日^ノ長^一。甚^シ矣。公之愁之切^{ナル}也。此詩首二句言^下往^ニ爲^ニ拾遺^一之榮^ヲ。中二聯言^下

今爲^ニ掾吏^一之勞^ト與^中戀^レ闕^ヲ思^レ友^ヲ之切^{ナル}。結挽^テ到^ニ茲^一傷^ム心^一、嘆^ニ佳節^一卻添^レ愁^ヲ。二句無數ノ曲折。舊本^(注43)

認作^レ憶^ニ、日日作^ニ愁日^一、竝^ニ非^一。今從^ニ朱鶴齡^一輯^ニ註本^一改^レ之^ヲ。

(注35) 〈錯〉字、詳註は〈却〉に作り、「一に錯に作る」と。

(注36) 『唐詩貫珠』に見える。六壬は、占法の一。六壬書というのは一般的な言い方で、胡以梅の引くのが具体的にどういふものかは不明。

(注37) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「窮愁日とは、長至の日、陽長じ陰消す、故に之を愁尽きる日と爲す」と。長至は、冬至のこと。『分類』は字都宮遯庵の増広本に引く。

(注38) 王維の「九月九日山東の兄弟を憶ふ」詩(『唐詩選』卷七)に「佳節に逢ふ毎に倍ます親を思ふ」とあるのを踏まえた表現。

(注39) 「小至」詩(詳註卷十八、一〇四六)に、次のように見える。

天時人事日相催 天時人事 日に相催し

冬至陽生春又來 冬至 陽生じて春又た來たる

刺繡五紋添弱線 刺繡の五紋は弱線を添へ

吹葭六琯動飛灰 吹葭の六琯は飛灰を動かす

岸容待臘將舒柳 岸容は臘を待ちて將に柳を舒べんとし

山意衝寒欲放梅 山意は寒を衝きて梅を放たしめんと欲す

雲物不殊鄉國異 雲物殊ならず鄉國異なり

敎兒且覆掌中杯 兒をして且つ覆はしむ掌中の杯

(注40) 『唐詩貫珠』(卷五十一、冬至)に「小至」詩を載せ、「文昌雜錄に曰く、唐の宮中、女工を以て日の長短を揆る。冬至の日晷漸く長く、常日に比して一線の功を増す」と注する。但し、宋・龐元英『文昌雜錄』には見あたらない。『集千家注』

(卷四)の「至日遺興」詩の注に「唐雜錄」としてほぼ同様の記事が見え、「小至」詩の錢注(卷十六)や「至日遺興」詩の輯註も『唐雜錄』として挙げる。『集千家注』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。なお、『唐雜錄』のことは、胡仔『茗溪漁隱叢話』前集卷十、杜少陵五に引く黃庭堅の語に次のように見える。

至日に云ふ、「愁日愁は一綫に随つて長からん」と。積する者謂ふならく『歲時記』に云ふ、「宮中紅線を以て日影を量り、至日は日影一線を増す」と。而して『唐雜錄』に謂ふ、「宮中、女工を以て日の長短を揆る。冬至の後、日晷漸く長く、常日に比して一線の功を増す」と。

(注41) 晋・傅玄「雜詩」(『文選』卷二十九)に「志士は日の短きを惜しみ、愁人は夜の長きを知る」と。

(注42) 『唐詩貫珠』に「結びは挽きて茲辰傷心に到るなり」と。

(注43) 邵傳『集解』を指す。邵宝『集註』、薛益『分類』も同じ。

(注44) 錢注および輯註は、「認」を「憶」に作り、錢注に「一に認に作る」と注する。詳註も同じ。また(日晷)を「愁日」に

作り、ともに「刊は日日に作る」と注する。詳注は〈日日〉に作る。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも引く。

『六壬書』に「至日を窮愁の日と為す」と。〈窮〉は、尽である。冬至の日は、陽の気が生じ陰の気が極まり尽きる。されば、愁尽きる日という。けだし人々が慶賀し憂いを忘れて飲ぶことを言うのであろう。ここでは翻案して用い、〈茲の辰〉に〈愁〉がどうして尽きようか、かえってへ〈愁〉が〈長〉ずる〈日〉なのだ。〈何人〉が〈錯り認^{あやま}めて〈愁〉の尽きる〈日〉とするのかわからない、と言う。けだし佳節に逢うとかえってますます心を傷める、〈愁〉が甚だしいのである。

ある。〈一線〉は、冬至の後、日影がようやく〈長〉くなることを言う。公の詩に「刺繡五紋弱線を添ふ」と。女の針仕事が目長の長短で進み具合をはかることを指す。当時の風俗を用いている。『文昌雜錄』に「唐の宮中では女官の針仕事で日の長短をはかり、冬至の後は日影がしだいに長くなるので、それにつれ一線ぶん多くできる」とあるのが、それである。ここでは、これより〈日日〉日影が〈長〉くなるにつれ、わが〈愁〉もやはり〈長〉じてゆき、いよいよがまんならなくなるだろうと言うのである。古詩に「愁人は夜の長きに苦しむ」とあるが、今はかえって日の〈長〉くなるのを憂うのが甚だしい。公の〈愁〉が切実であるからだ。この詩の首二句は、さきに栄えある拾遺となったことを言う。中二聯は、今は下役となつて苦労していることと朝廷を慕い友を思う気持ちの切実なことを言う。結びは、〈茲の辰〉の〈傷心〉に到り、佳節に却つて〈愁〉を増加させるのを嘆く。二句は無数の曲折がある。旧本は〈認〉を〈憶〉に作り、〈日日〉を〈愁日〉に作るが、いずれもよくない。今、朱鶴齡の輯註本に従つてこれを改める。

023 (其二)

憶フ昨逍遙^{タリ} 供奉ノ班去年今日侍^{セシ} 龍顏^ニ

※昨：キノフマデハ 逍遙：ユツタリ 供奉班：オソバノレッツ

昨^ハ指^ニ今夏放黜以前^ヲ。雖^ニ已^ニ經^ニ半歲^ヲ、猶如^ハ昨日^ノ也。逍遙^ハ清閑優游之貌^也。追憶^ニ朝官之逍遙^ヲ、益傷^ニ郡掾之走趨^ヲ、所^ニ以特^ニ下^ニ此二字^ヲ也。供奉^ハ拾遺之職。唐^ノ六典^ニ拾遺掌^ニ供奉諷諫^ヲ。蓋近侍^{シテ}供^レ事^ニ、奉引導^レ幸^ヲ、有^レ所^ニ過失^{スル}、則拾^ニ而進^レ諫^也。班^ハ侍^レスル朝^ニ序列也。天顏^ヲ稱^ニ龍顏^ト、漢高祖故事。拾遺^ハ近臣咫尺^ニ天威^ニ、故^ニ曰^ニ侍^ニ龍顏^ニ。曰^レ昨日^ハ去年^ト、寓^ニ流年之感^ヲ。言^ニ事^ハ猶如^ハ昨日^ノ、年^ハ已一周^{スル}也。

(注1) 何か基づくところあるのか、不明。ちなみに、宇都宮遷庵の詳説には『莊子』林希逸注の「逍遙は、優游自在を言ふ」というのを挙げる。

(注2) 『大唐六典』卷八、門下省の条に「左補闕左拾遺は供奉諷諫、乘輿に扈從するを掌る。凡そ令を発して事を挙ぐるに、時に便ならず、道に合はざる者有れば、大なるは則ち廷議し、小なるは則ち上封す。若し賢良の下に遺滞し、忠孝の上に聞こえざれば、則ち其の事状を条して之を薦言す」と。こは、『唐詩貫珠』に挙げるのに拠る。

(注3) 『唐詩貫珠』に『唐六典』を挙げた後、「大約是れ朝廷に奉引近侍する者、過失する所有らば、則ち拾つて諫を進むるなり」と。

(注4) 『史記』卷八、高祖本紀に「高祖人と為り隆準にして龍顏」と。

(注5) 『左伝』僖公九年に「天威、顔を違^さること咫尺ならず」と。

《昨》は、今夏の放黜以前のことを指す。すでに半年を経ているけれども、なお昨日のこのようであるのだ。《逍遙》は、清閑優游のさま。朝官の《逍遙》たるを追憶し、ますます州の下役の身でかけずり回っているのを傷んでおり、特にこの二字を置くゆえんである。《供奉》は、拾遺の職。『唐六典』に「拾遺は供奉諷諫を掌る」と。けだし近侍して事に供し、行幸の先導をつかさどり、過失があれば、それを拾いあげて諫書を進めるのである。《班》は、朝廷に侍する序列である。天子の顔を《龍顏》と称するのは、漢・高祖の故事。拾遺は、天子のつい目と鼻の先、ごくお側近くにいたので、《龍顏に侍す》という。《昨》といい、《去年》というのは、年月の

流れに対する感慨を寓する。つい昨日の事のようにであるが、年はもう一回りしたことを言うのである。

麒麟不_レ動爐煙上_リ 孔雀徐_ク開_テ扇影還_ル

※不動…ドツシリトシテ 徐…ソロリト

拆_二用_ス麒麟爐孔雀扇_一。麒麟ハ瑞獸、御爐ノ所_レ鑄_{（注7）}、不動二字妙ナリ。見_二器之重大、鑄之巧妙_一。言_下其勢殆欲_二活動_一。而帖然_{（注8）}能不_レ動也。且未_レ言_レ爐ヲ、只曰_二麒麟_一。是活物、則當_レ動而不_レ動、語法尤工。又與_二上ノ字_一有_二開合_一亦妙。上ハ言_二風靜_一。裊裊_{（注9）}而揚_ル。孔雀ハ文禽、緝_二其尾_一爲_レ扇ト。天子升_レ殿_二、兩詔容_{（注10）}以扇擁障_ス、詳_二見_一于前_{（注11）}。舊用_二雉尾扇_一。開元ノ初、改_テ用_二繡孔雀_一。徐開_テ扇影ノ字見_二隨_一。步_{（注12）}光閃_{（注13）}金翠浮動_一。還ノ字亦見_二金蓮雍容曳_一裳而去_一。宛然如_レ觀。總_{（注14）}是八面玲瓏ノ活句、觀止_{（注15）}矣。此皆去年今日侍_レ朝_二所_一見_シ、追憶_{シテ}言_レ之ヲ。

(注6) ちなみに、『詩敵』卷五、句法に「用字有_二拆開之法_一。老壯、麒麟不_レ動爐煙上_リ、孔雀徐開_テ扇影還。麒麟ノ香爐・孔雀尾扇ヲ拆開シタリ。（中略）拆開ハ字ノ連綿スル間ヲ、佗字ヲ以テワルナリ」云々と。

(注7) 『唐詩貫珠』に「杜詩積義に曰く、麒麟は瑞獸、御爐の鑄る所なり」と。『杜詩積義』については、未詳。007「臘日」詩の(注1) 参照。

(注8) 『夜航詩話』卷三に「杜詩に『麒麟動かず爐煙の上』と。大明宮の朝儀を言ふ。爐は元と動かざるは、言を須_{（も）}ひず。而して特に〈動かず〉と曰ふ者は、其の勢ひ殆ど活動せんと欲して帖然として能く動かざるを言ふなり」と。

(注9) 開合は、詩字用語で展開、収束等の変化をいう。開闔とも表記する。

(注10) 010「紫宸殿退朝の口号」詩。

(注11) 『大唐六典』卷十一、殿中省、尚輦局の条に「孔雀扇一百五十有六。左右に分居す。旧と雉尾扇。開元の初め、改めて繡孔雀と爲す」と。輯註に挙げ、宇都宮逕庵の増広本にこれを引く。なお、詳説には『会粹』（卷六）に挙げるのを引く。

(注12) 金翠は、昭容が頭につけている金や翡翠の髪飾り。『文選』卷十九、曹植の「洛神の賦」に「金翠の首飾を戴き、明珠の耀軀を綴る」と。

〔注13〕 金蓮は、『南史』齊紀下、廢帝東昏侯に「金を鑿つて蓮華と爲し以て地に帖し、潘妃をして其の上を行かして曰く、此

れ歩歩金蓮を生ずるなり」と見える。ここでは、昭容の小さな足、もしくはその歩きぶりをいう。雍容は、ゆったりとしたさま。

〔注14〕 もとは、四方に窓が多く広々として明るいこと。転じて明々白々で完全無缺であること。八窓玲瓏ともいう。なお、活句は活発生動の句。もとは禪語。『滄浪詩話』詩評の荒井健訳注参照。

〔注15〕 『左伝』襄公二十九年に、呉の公子、季札が舜の樂たる韶箏を舞うのを見て感嘆していった言葉の中に、「觀止む矣。若し他樂有るも、吾れ敢へて請はざる已」と。

《麒麟爐》《孔雀扇》をそれぞれ二つに分けて用いる。《麒麟》は瑞獸で御爐に鑄造されたもの。《不動》の二字が絶妙である。器物の重く大きいことや鑄造の巧さが見て取れる。まるで今にも動き出しそうな勢いで、それがどつしりとして《動》かないことを言う。それにいまだ《爐》と言わないで、ただ《麒麟》というのだが、これは活物で、当然《動》くはずだが實際は《動》かず、語はとりわけ巧みである。また《上》の字と開合があるのも絶妙である。《上る》は、風が静かでゆらゆらと揚がることを言う。《孔雀》は、綾模様のあるきれいな鳥で、その尾をあつめて《扇》にする。天子が昇殿される際、二人の昭容が《扇》で覆いさえさる。詳しくは前に見える。もとは雉尾扇を用いたが、開元の初めに改めて繡孔雀を用いるようになった。《徐ろに開いて扇影還る》は、天子が着座されて、ようやく《徐ろ》に《開》き分かれ、そうしてともにそれを捧げて退き《還》つて内に入るのである。《影》の字は、歩むにつれ光きらめき金や翡翠の飾りがゆらめくのをあらわす。《還》の字も、ゆったりと裳裾を曳いて去るのをあらわす。あたかも目のあたりみるかのようだ。すべて八面玲瓏の活句で、これ以上のものはない。これはいずれも《去年》の《今日》、朝廷に侍つて見たものを追憶して言う。

玉几由來天ノ北極 発衣只在二殿ノ中間二

※玉几…オキヤウソク 北極…オクブカシ 朱衣只…オメツケバカリ

上ノ句言^三天子穆穆^(注16)之狀^一。下ノ句言^三朝儀嚴肅之勢^一。玉几^ハ天子所^レ憑^ル。尙書顧命^(注17)王憑^ル玉几^ニ。西京雜記^(注18)

漢ノ制天子玉几、冬^ハ則加^三綈錦^一。天ノ北極^ハ言^レ非^ニ復人間之境^一。曰^レ天曰^レ北^ト、以^三高仰^一與^ニ北^ニ面^一言^レ

之^ヲ。蓋御座肅穆深遠、如^レ處^ニ天之北極^一、而朝臣參謁、如^ニ衆星^一環拱^一也。朱衣指^ニ殿中侍御史^一。唐書

職官志^(注20)殿中侍御史六員、掌^ニ殿廷供奉之儀式^一。凡冬至元正ノ大朝會^ニハ、則具^レ服^ヲ升^レ殿^ニ、糾^ニ察^ス非違^一。又輿

服志^(注21)其公服^ハ緋衫^ト、是也。百官^ハ皆班^ニ於殿廷^一。御史獨升^レ殿^ニ、具瞻儼然^{タリ}。故^ニ曰^一只在^ニ殿^一中^ニ間^一。夫^レ

御史^ハ爲^ニ風霜之任^一、百僚所^ニ震恐^一。官之雄峻、莫^ニ之^一比^{スル}焉。其在^ニ殿上^一、儼然相臨^ム、緋衫炫曜、嚴威

稜稜、令^{コト}人^ヲ生^{シテ}肅^一。肅^一肅^一、在^ニ言外^一矣。二聯皆自^ニ前首^一正^ニ想^一生^シ來^ル。

(注16) 『礼記』曲礼上に「天子は穆穆たり、諸侯は皇皇たり」と。孔穎達の疏に「穆穆は威儀多き貌」。

(注17) 『尚書』顧命に「皇后玉几に憑る」と。皇后は大いなる君の意で、周の成王を指す。ここは、『唐詩貫珠』に挙げるのに

抱る。

(注18) 『西京雜記』巻上に「漢制、天子は玉几。冬は則ち綈錦を其の上に加ふ。之を綈几と謂ふ」と。綈錦は、厚く織つた錦。ここは、『唐詩貫珠』に挙げるのに拠る。

(注19) 『唐詩貫珠』に「玉几由来天の北極」は、一に由来天の北極の如くして而して朝臣衆星の如く環拱するを言ふ。一に御

座肅穆深遠、天の北極に処るが如きを言ふ」と。衆星は、『論語』為政篇の「政を爲すに徳を以てするは、譬へば北辰の其

の所に居て、衆星の之を共するが如し」を踏まえる。

(注20) 『唐詩貫珠』に挙げる。『旧唐書』卷四十四、職官志三に「殿中侍御史六人。従七品下。(中略)殿中侍御史は殿廷供奉の

儀式を掌る。凡そ冬至元正の大朝会は、則ち具服して殿に升る。郊祀巡幸の若きは則ち鹵簿中^ハに於いて非違を糾察し、具

服して旌門に従ひ、文物の虧闕する所有るを視れば、則ち之を糾す」と。元正は元旦。なお、(具服)を東陽は「服を具

す」と訓じているが、『旧唐書』卷四十五、輿服志に「朝服」の下に「亦名具服」と注することからすれば、具服のままでは

よからう。

(注21) 『唐詩貫珠』に挙げる。『旧唐書』輿服志にそのままの表現は見えないが、「六品已下、衫するに緋を以てす」とある。

(注22) 具瞻の語は、『詩経』小雅・節南山に「赫赫たる師尹、民具に爾を瞻る」とあるのに基づく。

(注23) 元・馬端臨(一二五四?)の『文獻通考』卷五十三、職官考七、御史台の条に「隋及び唐は皆な御史台と曰ふ。龍朔

二年(六六二)改めて憲台と為す。咸亨元年(六七〇)旧に復す。門北闢き、陰殺を主る。故に御史は風霜の任為り、不法を弾糾し、百寮の震恐す。官の雄峻、之に比する莫し焉」と。

上の句は、天子の威嚴ある様子を言い、下の句は朝儀の厳肅なありさまを言う。〈玉几〉は、天子が凭りかかるもの。『尚書』顧命に「王、玉几に憑る」、『西京雜記』に「漢の制度では、天子は玉几を用い、冬には綿をつける」と。〈天の北極〉は、ふつうの人間世界ではないことを言う。〈天〉といい、〈北〉というのは、群臣が高く仰ぎみるのと天子が北面するのだから言う。けだし御座は厳かに奥深く、〈天〉の〈北極〉にあるかのようにあり、朝臣が参調するのは、多くの星がこれを取りまき拱手の礼をしているかようである。〈朱衣〉は、殿中侍御史を指す。『唐書』職官志に「殿中侍御史は、六名。殿廷供奉の儀式を掌る。すべて冬至や元正の大朝会には、朝服を着て殿に昇り、非違を糾察する」、また輿服志に「その公服は緋衫」とあるのが、そうである。百官はみな殿廷に整列するが、御史だけは昇殿し、仰ぎ見るとおごそかである。されば〈只だ殿の中間に在り〉という。そもそも御史の職は風霜の任であって、百官の恐れ震え上がるもの。官の雄々しく峻厳なること、これに比肩するものはない。殿上にあつて、いかめしく睨みをきかせ、緋色の上衣がきらきらと耀き、おごそかでいつくしく、人を肅然とさせること、言外にあらわれている。この二聯はいずれも、前首の〈正に想ふ〉から生じて来たものである。

孤城此日堪^{タリ}腸斷^ル
愁^テ對^ス寒雲白^{シテ}滿^レ山^ニ

※白：サビレテ

山^ハ指^ス華山^ヲ。在^ニ州之西^ニ。愁對寒雲白滿山、與^ニ正想氤氲滿眼香^ニ正^ニ相反^ス。不^ニ翅傷心^ノミナラ、所^ニ以腸

斷^一。前六句追述^二去年至日之事^一、懷^二想^ス朝儀之盛^{ナリシヲ}。結乃述^二今日之傷感^一、言^二孤城寂寥^一、謫官無聊、空山白雲、寒景淒然、獨坐相對^{シテ}、愁腸欲^一斷^{スルヲ}也。一結淡然洗^二滌^ス鉛華^一、亦得^二停勻之妙^一、而無^レ限感慨、亦溢^二乎言表^一矣。白^一作^二雪^ニ、非^{ナリ}。

(注24)『分類』および錢注、輯註、詳註は〈雪〉に作り、輯註に「詩說雋永に云ふ、唐本杜詩、白に作ると」と注する。これは『集千家註』(卷四)に引く趙次公注に既に挙げる。『詩說雋永』は、南宋の詩話。著者不明。明・胡仔『茗溪漁隱叢話』後集卷八にも引く。

〈山〉は、華山を指す。州の西にある。〈愁ひて対す寒雲白くして山に満つ〉は、〈正に想ふ氤氳滿眼の香〉とまったく相反している。ただ〈傷心〉するのみならず、〈腸断ゆ〉るゆえんである。前の六句は〈去年〉の〈至日〉のことを追述し、朝儀の盛大であることを追懷回想している。結びでやっと〈今日〉の感傷を述べ、〈孤城〉の寂寥として、貶謫された身でやるせなく、冬枯れた景色が寒々とし、ぼつねんと独り向き合えば、〈愁い〉のあまり〈腸〉が〈断〉ちきれそうになるのを言うのである。結びはさっぱりと化粧を洗い落としていて、ここも均整の妙を得ており、無限の感慨が、やはり言表にあらわれている。〈白〉字、一に〈雪〉に作るの、よくない。

024 恨別^ラ

此在^二蜀作^ル。恨下別^レ家^ニ漂^二泊^シ遠方^ニ、諸第亦離散、不^レ知^レ在^二何處^ニ也。乾元二年十二月^(注1)、公入^レ蜀^ニ。按^{スルニ}詩中五六年老^二江邊^ニ語^上、當^レ在^二卜居之後^ニ也。虞註^ニ公初至^二成都^一、未^レ得^レ所^ヲ依、故^ニ以^レ別^ヲ爲^レ恨^ト。不^レ知^レ唐室板蕩、故園陷^レ虜^ニ、雖^レ得^レ所^ヲ依、豈不^ニ以^レ別^ヲ爲^レ恨^ト。公豈如^下估客胡商^(注2)到處^ニ爲^レ家^ト、一^タ得^レ醉飽^一、便不^レ思^レ鄉者^上乎。註家反^テ爲^二作者之累^一、何^ソ其憊^(注3)也。

(注1) 宇都宮遜庵の増広本に挙げる明・単復の年譜に見える。

(注2) 元・虞集(字は伯生、一二七二―一三四八)撰とされる『杜律虞註』のこと。但し、これは虞集に偽託したもので、実際は明・張伯成の撰になるもの(『四庫全書総目提要』集部、別集類存目)。寛文八年(一六六八)の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢詩集成唐詩第二輯』に影印を収む。そのなかに、「公、官を棄てて蜀に入る。未だ依る所を得ず。故に別れを以て恨みと為すなり」という。なお、邵傳『集解』も「公、蜀に入つて未だ依る所を得ず。故に別れを以て恨むことを賦す」と。

(注3) 世が乱れること。板も蕩も、もとは『詩経』大雅の篇名で、ともに周・厲王の無道な政治をそしめる歌。

(注4) 估客は、船を使つて移動し商いをする者。楽府題に「估客楽」がある。胡商はベルシャの商人。

なお、133「瀟瀟」詩に「估客胡商」の語が見え、東陽の詳解に「估は物価を論ずるなり。估客は時価を候つて以て利を射る者。江估・漕估・塩估等有り。皆物価の低昂に因つて、賤く買ひ貴く売るの徒。胡は本と西北夷の称。其の人貨を齎らして異邦に適き、留まつて肆を開いて交易す。唐の時、揚州常に波斯の胡店有り。想ふに亦た古へ既に之有り。後漢書馬援が伝に伏波は西域賈胡に類す。到る処輒ち止まる。是れを以て利を失ふ、と。是れなり。因つて遂に泛く賈を謂ひて胡と為す。辛延年が羽林郎の詩に將軍の威に依倚して、調笑す酒家の胡の如きに至つては、当壚の倡女を謂ひて胡と為す。故に胡姬の称有り。貨を鬻ぐを商と曰ふ。胡商は只だ是れ行賈、必ずしも眞の賈胡ならざるなり」と。なお、「胡商」には「タビアクインド」と左訓を施す。

(注5) 傾頤は、言葉がでたらめで正しくないこと。双声の語。例えば、『広韻』に「頤、傾頤。言語度無し」、『大広益会玉篇』に「傾は胡鉤の反。傾頤は、言正しからざるなり」と。

これは蜀での作。家郷に〈別〉れて遠方に漂泊し、弟たちも離散し、どこにいろのかわからないのを〈恨〉んだのである。乾元二年(七五九)十二月、公は蜀に入った。詩中の〈五六年〉〈江辺に老ゆ〉の二語を考えると、当然次の「卜居」詩の後でなければならぬ。『虞註』には、公が成都にやつて来た当初、身を寄せることなく、それで別れを恨みに思つたのだという。わからぬのだろうか、唐朝は乱れ、故郷は胡虜の手に落ちたの

に、身を寄せるところがあっても、どうして〈別れ〉を〈恨み〉に思わずにおられよう。公は、估客胡商の行く先々を家となし、存分に酔い腹一杯食うことさえできれば、それで故郷のことなどつゆも思わない連中となんで同じであろうか。注釈家が逆に作者のわざわいとなる、何とでたらめな言い草か。

洛城一別四千里 胡騎長驅五六年

公曾祖以來居^(注6)洛陽^ニ、有^ニ墳墓田園^一。故^ニ公雖^レ生^ニ于長安^一、然^{トモ}常^ニ指^レ洛^ヲ爲^ニ故郷^一。四^一二^ニ作^レ三^ニ。蜀^ノ成都距^ニ洛陽^ヲ三^ニ千幾百里^一。胡騎^ハ指^ニ安史之亂^一。自^ニ天寶十五歲^一安祿山反^{シテ}、其子慶緒及史思明父子繼^テ起^リ、至^ニ上元元年^一禍亂未^レ平、已^ニ六^ニ年^一矣。去年秋、思明陷^ニ洛陽^ヲ、故^ニ此詩哀^レ之^一也。

(注6) 杜依藝のこと。「杜文貞公伝」(注4) 参照。

(注7) 「杜文貞公伝」に「公、杜陵に生まる。其の田園は則ち洛陽に在り」と。なお、輯註(巻七)に宋・趙次公の注を引いて、「公田園有り洛陽に在り。故に洛陽を指して家と爲す」と。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注8) 錢注(巻十一)および輯註に指摘。輯註は宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注9) 何に基づいたか、不明。『元和郡県図志』巻三十一、劍南道、成都府の条には「東北のかた東都に至る二千八百七十里」と。

(注10) 薛益『分類』(巻一、紀行)に「胡騎は安祿山史思明の乱を指す」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

(注11) 安祿山が乱を起こしたのは、天寶十四載(七五五)十一月のことである。なお、『資治通鑑』巻二一五、天寶三載の条に「春正月、丙申朔、年を改めて載と曰ふ」とあり、この天寶三載(七四四)から肅宗の至徳三載(七五八)二月まで載を用いた(この年の二月、乾元と改元し、載を年に復する)。

(注12) 安祿山・安慶緒父子については、『旧唐書』巻二二〇上、『新唐書』巻二二五上に伝がある。天寶十四載十一月、范陽(北京)で反乱を起こした安祿山は、十二月に洛陽を奪い、十五載一月に大燕皇帝と僭称。六月には長安を陥れた。しかし翌年の至徳二載(七五七)一月、部下の嚴莊・李猪兒に殺された。安慶緒は、祿山の第二子で、嚴莊らに擁立されたが、乾元二年(七五九)三月、史思明によって縊殺された。

(注13) 史思明は、突厥系の雜胡。安祿山とは同郷で、生まれたのも一日違いであったという。至徳二載、いったん唐朝に降ったが、乾元元年(七五八)再び叛き、大聖燕王と僭称した。その年の九月に洛陽を占拠。上元二年(七六一)三月、子の史朝義に殺害された。史思明が末子の史朝清を溺愛して朝義を除こうとしたのに不安を抱いたためとされる。史朝義は、宝応二年(七六三)正月、李懷仙に追ひ詰められて縊死した。史思明・朝義の伝は、『旧唐書』卷二二〇上、『新唐書』卷二二五上に見える。

公は曾祖以来洛陽に居住し、その地に墳墓や莊園がある。されば公は長安で生まれたけれども、つねに洛陽を指して故郷としている。〈四〉は、一に〈三〉に作る。蜀の成都は、洛陽から三千幾百里のかなたにある。〈胡騎〉は、安史の乱を指す。天宝十五載(七五六)、安祿山が謀叛を起こしてから、その子の慶緒や史思明父子が相次いで起こり、上元元年(七六〇)になっても乱は平定されず、もう六年にもなる。去年は史思明が洛陽を陥れた。この詩は、そのことを哀しんでいるのである。

草木變衰^{シテ}行^ニ劒外^一 兵戈阻絶^{シテ}老^ニ江邊^一

※変衰：フユガレ 老：クチハテル 江辺：カタイナカ

宋玉九辨^ニ草木搖落^{シテ}兮變衰^ス。公去年冬入^レ蜀^ニ、故^ニ云。兼^テ喻^ニ人事ノ變遷^ニ也。劒外^ハ劒閣^ノ之外^ニ。入^レ蜀^ニ路甚艱難、有^ニ大劒山小劒山^一、兩崖險峻、鑿^レ石^ヲ架閣^{シテ}而爲^ニ棧道^一、故^ニ謂^ニ之^ヲ劒閣^一、蜀道第一ノ危險。自^ニ中原^一言^ハ蜀^ヲ、西在^ニ劒閣^ノ之外^一、故^ニ曰^ニ劒外^一。去歲當^ニ草木變衰^ノ之候^ニ、陵^ニ劒閣^ノ之險^一而來^ニ于蜀中^一、追嘆^ニ其艱難^一也。江^ハ謂^ニ錦江^一。浣花溪^ハ一名。上元元年、公^ト居^ヲ于此^ニ。公自^レ入^レ蜀^ニ、爲^ニ寇亂^ノ所^一阻、與^ニ家鄉^一絶^ス。遂^ニト^ニ浣花溪^一結^レ廬^ヲ居^ル之^ニ。故^ニ曰^ニ老^ニ江邊^一。時^ニ公年四十八^一矣。

(注14) 『楚辭』および『文選』卷三十三。宇都宮遯庵の増広本は、薛益『分類』に挙げるのを引く。

(注15) 邵傳『集解』に、劒外の下に「劒閣の外」と注する。『分類』にも見える。

(注16) 『大明一統志』卷六十八、保寧府、古蹟の条に劒閣の項あり、「劒州の北三十里に在り。兩崖峻拔、石を鑿つて閣を架し

て棧道を為り、連山絶險、故に之を劍閣と謂ふ」と。閣は、かけはし。宇都宮遯庵の増広本にこれを挙げる。

(注17) 邵傳『集解』に、江辺の下に「錦江の辺」と注する。邵宝『集註』および薛益『分類』にも見える。但し、宇都宮遯庵の増広本に「集註分類共に云ふ、浣花溪、一名は錦江と。一統志の浣花溪の註に是の説無し」という。

(注18) 宇都宮遯庵の増広本に挙げる明・単復の年譜に見える。

(注19) 上元元年当時、杜甫は四十九才である。東陽の勘違い。

宋玉の「九弁」に「草木揺落して変衰す」と。公は、去年の冬、蜀に入ったので、かくいう。同時に人の身の移ろいに喩えているのである。(劍外)は、劍閣の外。蜀に入る路はとても難儀で、大劍山・小劍山があり、両崖は険峻で、石を鑿ち架閣して棧道としたので、これを劍閣という。蜀道第一の難所で、中原から蜀を言えば、西のかた劍閣の外にあるので、(劍外)という。去年(草木変衰)する季節、劍閣の険を越えて蜀にやってきた。今、その難儀であつたことを追懷して嘆じているのである。(江)は、錦江のこと。浣花溪の別名。上元元年(七六〇)、公はこの地に居を卜した。公が蜀に入つて以来、外寇内乱に阻まれ、家郷との消息が絶えてしまつた。そのまま浣花溪の地を卜して草堂をかまえて住んだ。それゆえ(江辺に老ゆ)という。時に公年四十八(九)であつた。

思_レ家_ヲ歩_シ月_ニ清宵_ニ立_ニ 憶_レ弟_ヲ看_テ雲_ヲ白晝_ニ眠_ニ

家_ハ指_ニ洛陽_ヲ。哀_ニ其陷_ル賊_ニ、夜不_レ能_レ寐_{コト}、起_テ歩_シ月下_ニ、清宵獨立悵然_{タル}也。公有_ニ四第_一、曰_ニ穎觀豐

占_ト。唯占_{ノミ}從_テ公_ニ入_レ蜀_ニ、三第_ハ各散_{シテ}在_ニ他方_ニ、不_レ知_レ漂_ニ泊_{スル}何處_ニ。公憶_ニ諸第_ヲ詩_ニ有_レ弟皆分散_一、

無_ニ三家ノ問_ニ死生_ヲ、故_ニ依依悵望_一、泣_テ對_ニ浮雲_一。骨肉之情、尤不_レ勝_レ懷_ニ。無聊之極、蒙_レ被_ヲ而眠_ル。是顛_ニ

倒_ス晝夜之常_ヲ、恨_レ別_ヲ之切_{ナル}、無_レ可_ニ奈何_ス也。胡元瑞云、一聯太板、若以_ニ其易_一而學_ハ之_ヲ、誤_ニ後生_一

矣。沈歸愚云、若說_ハ若何_カ思若何_カ憶_ト、情事易_レ盡。歩_レ月_ニ看_レ雲_ヲ有_ニ不_レ言_{シテ}神傷_ム之妙_一。顧修遠云、曰_レ

歩^ト又曰^レ立^ト、曰^レ看^ト又曰^レ眠^ト、徘徊無聊、忽行忽止、忽起忽卧、顛倒錯亂、不^レ能^二自定^一^{コト}。二語寫^シ盡^ス恨狀^ヲ。

(注20) 顧宸『註解』に「公、四弟有り。穎・觀・豐、皆乱を他郡に避く。惟だ占のみ公に従つて蜀に入る」と。なお、錢注の「少陵先生年譜」には「甫の弟に穎・觀・豐・占有り。未だ行列を知らず」と。行列は、兄弟順。

ちなみに、杜甫が具体的に弟たちの名を挙げて詠じた詩として、広徳元年（七六三）作の「舍弟占、草堂に歸りて檢校す。聊か此の詩を示す」（詳註卷十二、〇六九六）広徳二年作の「舍弟穎の齊州に赴くを送る。三首」（卷十四、〇七八五〜七）、大暦元年（七六六）作の「第五弟豐、独り江左に在り、近三四載、寂として消息無し。使を覺^とめて此を寄す。二首」（卷十七、〇九七九・八〇）、大暦二年作の「舍弟觀が書を得るに、中都自^より江陵に達し、今茲暮春月末に行李合に夔州に到るべしと。悲喜相兼ね、团圞待つ可し、詩を賦して事に即す。情は詞に見^{あらは}る」（卷十八、一〇九三）、「觀が即ち到らんとするを喜び、復た短篇を題す、二首」（同上、一〇九四・五）、「舍弟觀、藍田に歸りて新婦を迎ふ、送りて示す。二首」（卷十九、一一四五・六）、「舍弟觀、藍田に赴き妻子を取り江陵に到ると、喜びて寄す三首」（卷二十一、一二七八〜八〇）大暦三年作の「遠く舍弟穎・觀等を懷ふ」（同上、一二九〇）、「続^つぎて觀が書を得、當陽の居止に迎へ就かしむ。正月中旬、定めて三峽を出でんとす」（同上、一二九一）等の諸作がある。さらに杜甫には、弟だけでなく、そのほかに韋氏に嫁いだ妹がおり、至徳二載（七五七）作の「元日韋氏の妹に寄す」詩（卷四、〇一四七）がある。なお、杜甫の弟について考証した論文に、周睿「杜甫舍弟行踪考略」（『杜甫研究學刊』二〇〇四年第一期）がある。

(注21) 乾元元年（七五八）、秦州（今の甘肅省天水県）での作「月夜に舍弟を憶ふ」詩（詳註卷七、〇三〇四）に、次のように見える。

| | | |
|-------|---------|--------------------|
| 戊鼓絶人行 | 戊鼓 | 人行絶ゆ |
| 邊秋一雁聲 | 辺秋 | 一雁声あり |
| 露從今夜白 | 露は今夜 | 從 ^よ り白し |
| 月是故鄉明 | 月は是れ故郷の | こと明らかなり |
| 有弟皆分散 | 弟有り皆分散し | |

無家問死生 家の死生を問ふ無し

寄書長不達 書を寄せるも長く達せず

況乃未休兵 況んや乃ち未だ兵を休せしめざるをや

(注22) 胡元瑞は、明・胡應麟(字は元瑞。一五五一―一六〇二)のこと。その著『詩藪』内篇卷五、近体中、七言に「杜の

《桃樹に題す》等の篇、往往にして解す可からず。然れども人多く之を知る、後生を誤るに足らず。惟だ中に太だ板なる者有り。《家を思ひ月に歩して清宵立ち、弟を懷ひて雲を見て白日眠る》の類の如し。太だ凡なる有り、《朝罷めて香煙滿袖を携へ、詩成り珠玉揮毫に在り》の類。若し其の易きを以て之を学ばば、患を為すこと斯に大にして、拈出せざるを得ざるなり」と見える。《板》は、平板。変化に乏しく生動性に缺ける意。なお、『詩藪』には、貞享三年(一六八六)刊の和刻本があり、汲古書院刊『和刻本漢籍隨筆集』第十九集に影印を収む。

(注23) 『杜詩偶評』(卷四)に「若し如何が思ふ如何が憶ふと説けば、情事尽くし易し。月に歩み雲を見る、言わずして神傷むの妙有り」と。

(注24) 顧宸『註解』に「夜立ち昼眠る、昼夜其の常を失ふ。歩と曰ひ又た立と曰ひ、着と曰ひ又た眠と曰ふ、徘徊無聊、忽ち行き忽ち止まり、忽ち起き忽ち臥す。顛倒錯乱、自ら定むること能はず。二語善く恨の状を写す」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

《家》は、洛陽を指す。賊の手に落ちたことを哀しんで、夜寝つかれず、起きて《月》光の下を《歩》き回り、《清宵》にひとりしょんぼり《立》っている。公には弟が四人いて、穎・觀・豊・占という。ただ占のみが公に従つて蜀に入つたが、他の三人は散り散りばらとなり、どこに漂泊しているのかわからない。公の「諸弟を憶ふ」詩に「弟有り皆分散し、家の死生を問ふ無し」とある。されば、弟たちのことが気懸かりで遠くを眺め、涙ながらに浮雲をみて、肉親を氣遣う情にたえきれない。やるせなさのあまり、布団をかぶつて眠ってしまう。これは昼夜さかさまになった状態である。《別れを恨む》ことが切実であつて、どうしようもないのだ。胡元瑞が云う、「この一聯は甚だ平板で、もしも平易であるからといってこれを真似すると、後進を誤ってしまう」。沈

歸愚が云う、「もし何々と思う、何々と憶うと言えば、心もちを言い尽くすのは容易だ。そうしないで、〈月に歩し〉〈雲を見る〉」というのは、言わず語らずして、心を傷めていることがわかるという妙味がある」。顧宸が云う、「歩」といつてから〈立〉といい、〈看〉といつてから〈眠〉という、やるせなくうろろとして、歩いたかと思うと立ち止まり、起きたかと思えば横になる。顛倒錯乱して、落ち着くことができない。二語は〈恨み〉のありさまをみごとに表現し尽くしている」と。

聞道^フ河陽近^{コロ}乗^レ勝^ニ 司徒急^ニ爲^ニ破^ニ幽燕^ニ

道^ハ言也。聞^ハ道^ヲ聞^ハ二人ノ傳説^ヲ也。河陽^ハ河南ノ地名^ニ。乘^ハ勝^ニ言^レ得^ニ破^ニ竹之勢^ヲ也。乾元二年十月、司徒李

光弼^ニ悉^シ軍^ヲ赴^ニ河陽^ニ、大^ニ破^ニ二史思明^ヲ。明年進^ニ圍^ニ懷州^ヲ。三月破^ニ二安太清^ヲ於^ニ城下^ニ。四月又破^ニ二史思明^ヲ於^ニ

河陽^ノ西渚^ニ。其勢將^ニ遂^ニ復^ニ二洛陽^ヲ。公之喜^シ可^レ知矣。幽燕^ハ河北ノ洲名、安史^ガ之巢穴也。公傳^ニ聞^テ河陽之

捷^ヲ、竊^ニ冀^フ司徒乘^シ勢^ニ不^レ失^レ機^ヲ、速^ニ進^テ兵^ヲ而北^シ、直^ニ搗^ハ賊^ノ窟穴^ヲ、則^チ胡騎^平テ而洛城復^{セン}矣。特^ニ

下^ニ一急^ノ字^ヲ、乘^レ勝^ニ破^ニ竹之勢^ヲ、萬萬不^レ容^ニ更^ニ緩^ム也。初祿山之反^{スル}、光弼與^ニ郭子儀^ヲ請^下引^テ兵^ヲ北取^ニ范

陽^ヲ、覆^中其巢穴^上、惜^ク玄宗不^レ用^ニ其策^ヲ、遂^ニ致^レ失^一天下^ヲ。公蓋思^レ之^ヲ、冀^ニ其行^ニ于今^ニ、所^ニ

以殷勤^ニ屬^{スル}望^ヲ也。

(注25)『夜航詩話』卷三にも「聞道は、人の其の事を道ふを聞くなり。聞^レ説・聽^レ説、並に同じ。見^レ説は、親しく其の之を

説くを見る。風声を伝聞するに非ざるを言ふなり。梅莊の詩語解に、道・説は並に助語と。謬れり」と説く。梅莊は、釈大典の字。但し、聞道の道は意味のない接尾語とするのが妥当。

ちなみに三浦梅園『詩轍』卷六、雜記に「見説聞説聞道ノ類、道モ説モイフノ意ニシテ、見モ聞モ同クキク也。見^レ説^ヲ

ハ俗語ニシテ、小説類ニ多ク見エタリ。見^ヲ聞^ト訓スル事、字書ニハ餘リ見エ子共、論衡、世見^ハ黄帝好^ニ二ト方術^ヲ、則謂^ニ帝

仙^一矣、又見^ニ鼎湖之名^ヲ、則言^ニ龍迎^ニ黄帝^ヲ矣、ナドアレバ、輓近ノ語ニハ非ズ。清^ノ李燧^ノ詩、鶯藏^ニ密柳^ニ聲難^レ見^キ、

花隱^ニ寒烟^ニ色不^レ分。世ニ是等ノ説道ノ類^ヲ、虚字ト見テ、ナラクトヨミ、又解道^ス説道^スナドヨムモアレドモ、聞^レ道^ヲ

聞レ説^マナド実シテ読ベシ。是唐ノ時ノ語也」云々と指摘する。王充『論衡』は道虚篇。寛延三年（二七五〇）刊の和刻本がある。李燧およびその詩については、不明。

『随園詩話』補遺卷七にその名が見える李燧（字は東生、号は青墅。一七五三―一八二五）は、梅園より三十一歳年下となる。

（注26） 邵傳『集解』に見える。河陽は、今の河南省孟県の南。

（注27） 『晋書』杜預伝に「今、兵威已に振ひ、譬へば破竹の如し。数節の後、皆刃を迎へて解く、復た手を著くる処無きなり」、『北史』周高祖紀に「軍を嚴にして待ち、以て之を撃たば、必ず剋^カたん。然る後に破竹の勢ひに乗じて、鼓行して東すれば、以て其の窟穴を窮むるに足らん」と。

（注28） 李光弼（七〇六―七六四）は、営州柳城の人。安史の乱を平定し、戦功第一とされる。『旧唐書』卷一一〇、『新唐書』卷一三六に伝がある。司空は、司徒・太尉とともに三公の一つで、人臣最高の名誉職。品階は正一品。至徳二載（七五六）、司空に任じられた。『輯註』に「李光弼が伝に、至徳二載、賊將留希徳を破り、檢校司徒を加へらる。乾元二年冬十月、軍を悉して河陽に赴き、大いに賊衆を破る。上元元年、進んで懷州を囲む、と。通鑑に上元元年三月に光弼、安太清を懷州城下に破る。四月又た史思明を河陽の西渚に破る」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。懷州は、今の河南省沁陽市。

（注29） 薛益『分類』に「幽燕は河北の州の名、史明が窟穴なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。

（注30） 郭子儀（六九七―七八一）は、華州の人。安史の乱を平定するのに功績があつた（『旧唐書』卷一二〇、『新唐書』卷一三七）。『資治通鑑』卷二一八、至徳元載六月の条に「郭子儀・李光弼が上言して、哥舒翰が潼関を固守して敵の進撃を阻んでいる間に「兵を引きて北のかた范陽を取り、其の巢穴を覆さんことを請ふ」たが、哥舒翰の力を恐れた楊国忠が関を出て戦うよう進言し、玄宗もこれに従つたという記事が見える。そのため哥舒翰は潼関の守りを失い、結局、玄宗は蜀に逃れることになった。

〈道〉は、言である。〈道^{ミチ}ふを聞く〉は、人が伝え言うのを聞く意である。〈河陽〉は、河南の地名。〈勝ちに乗る〉は、破竹の勢いを得たことをいう。乾元二年十月、〈司徒〉の李光弼が全軍を率いて河陽に赴き、大いに史

思明を撃破した。翌年、兵を進めて懷州を包囲し、三月、安太清を城下に撃破した。四月、さらに史思明を河陽の西渚に撃破した。その勢いは今にも洛陽を回復せんばかりである。公の喜びようがわかる。《幽燕》は、河北の州名。安史の巢穴である。公は河陽での戦捷を伝え聞いて、ひそかに願うよう、《司徒》がこのまま勢いに乗じて好機を失することなく速やかに兵を進めて北上し、直ちに賊の巢窟を突けば、《胡騎》は平定されて洛陽は回復されるだろう、と。特に《急》の一字を置いたのは、《勝ちに乘じ》た破竹の勢いを、どうあっても決して緩めてはならないという意からである。当初、安祿山が反した時、李光弼は郭子儀とともに兵を率いて北のかた敵の本拠地范陽を攻略し、その巢窟を覆さんことを請うた。残念ながら玄宗はその策を用いず、かくして天下を失うはめになってしまった。公は、けだしそのことを思い、今、実行されんことを願うのである。ねんごろに望みを託すゆえんである。

025 トス居^ラ

公入^レ蜀^ニ之明年、上^ニ元元年、結^ニ廬^ヲ於^ニ西郭^ノ浣花谿^ニ。今先往^テ相^シ地^ヲ、始^テ得^{タル}其所^ヲ也。楚辭^ニ屈原有^ニ卜居^篇、倚^テ以^レ爲^レ題^ト。時^ニ裴冕^ヲ尹^ニ成都^ニ、爲^レ公^ノ卜築^ス焉。或^ハ以^レ爲^ニ嚴武^ト、非^也也。

(注1) 『新唐書』杜甫伝に「劍南に流落し、廬を成都の西郭に結ぶ」と。なお、原文は谿字の下の「一」点と送り仮名「二」とを誤倒する。

(注2) 『集千家注』(巻七)の題注に趙次公の「楚辭に屈原卜居の一篇有り、公倚^よつて以て題と為す」というのを挙げる。宇都宮遯庵の増広本にも引く。

なお、清・崔述(一七四〇―一八一六)は、『考古統説』巻一、「觀書餘論」(『崔東壁遺書』所収)のなかで漁父篇とともに後人の偽託と断じており、現在では屈原の作でないとするのが定説。

(注3) 字は章甫。河東の人(？七七六九)。「杜文貞公伝」の(注37)参照。裴冕が成都尹を務めたのは、郁賢皓『唐刺史考』

に拠れば、乾元二年（七五九）～上元元年（七六〇）三月までの間。

（注4）『事文類聚』続集卷六、居処部、第宅の条に浣花草堂の項があり、「杜甫成都に在り、劍商節度使裴冕^{ため}為に西郭浣花溪をトし草堂を作りて焉に居す。或いは以て嚴武と為すは、非なり」と。『事文類聚』は、度会末茂『杜律評叢』（卷一）にも挙げる。また輯註に「鮑曰く、主人は裴冕なり。旧注に嚴武に作るは非なり」と。鮑は宋・鮑彪（字は文虎）のこと。『千家注』（卷七）に見える。なお、輯註は宇都宮遯庵の増広本に引く。

ちなみに、古川末喜「生業をうたう浣花草堂時代の杜甫」（林田愼之助博士古希記念論集編集委員会編『中国読書人の政治と文学』所収、創文社、二〇〇二年）に、「成都郊外の土地を新参者の杜甫に提供し、屋敷造りを援助してくれたのは、その地域の最高権力者であったと思われる」とし、また定説を見ないが「当時の成都尹・劍南節度使の裴冕（？～七六九）であつた可能性が高い」とする。この論考は浣花草堂での杜甫の暮らしぶりを知る上で大いに参考になる。

公は蜀に入つた翌年の上元元年に、草堂を成都城西郭の浣花溪に結んだ。今まず出向いてその土地を下見し、やつと格好の場所を得たのである。『楚辞』に屈原の「卜居」篇があり、それによつて詩題とした。当時、裴冕が成都の長官で、公のために土地を探し築いてくれた。ある説に嚴武のことだとするのは、よくない。

浣花草堂^{（注3）} 西頭 主人爲^{（注2）}トス林塘ノ幽

※ト…ミタテル

浣花草堂一名百花潭、在^{（注6）}成都府西南五里^{（注5）}。梁益州記^{（注4）}「谿上ノ居人多造^{（注3）}彩箋^{（注2）}」、故^{（注1）}號^{（注1）}浣花^{（注1）}。公之居在^{（注1）}浣花^{（注1）}、西岸^{（注1）}。主人ハ公自謂^{（注1）}。或ハ爲^{（注1）}指^{（注1）}ト裴冕^{（注1）}ヲ、非也。トハ者灼^{（注1）}レ龜^{（注1）}以視^{（注1）}ニ吉凶^{（注1）}ヲ也。此只謂^{（注1）}擇^{（注1）}ニ善地^{（注1）}一已^{（注1）}。猶^{（注1）}三舟人候^{（注1）}風^{（注1）}曰^{（注1）}占風^{（注1）}ト也。公來^{（注1）}ニ谿頭^{（注1）}ニ、尋^{（注1）}下置^{（注1）}ニ草堂^{（注1）}一地上^{（注1）}。既^{（注1）}ニ占^{（注1）}ムニ谿水之勝^{（注1）}ヲ、復喜^{（注1）}ニ林塘之幽^{（注1）}ヲ、遂^{（注1）}爲^{（注1）}ニ之^{（注1）}定^{（注1）}レ居^{（注1）}ヲ也。

（注5）〈谿〉字、錢注（卷十二）および輯註（卷七）は〈流〉に作り、輯註に「一に之に作り、一に溪に作る」と注する。

（注6）『大明一統志』卷六十七、成都府、浣花溪の項に「府城の西南五里に在り。一の名は百花潭」と。宇都宮遯庵の増広本に

も引く。

〔注7〕 何に見えるか、不明。059「将に成都の草堂に赴かんとして途中作有り。先づ嚴鄭公に寄す」詩五首其三（詳註卷十三）に於いて、仇兆鰲が引く『梁益記』に「溪水、湔江より出て、居人多く綵牋を造る。故に浣花谿と号す」とある。それと同じであろう。

〔注8〕 『詳註』（卷九）に見える。吉川幸次郎著興膳宏編『杜甫詩註』第九冊は「主人」は、杜詩の用例では、経済的な援助を与えて生活を支えてくれた人を意味する。パトロン」とし、「杜詩詳註が「主人」を杜甫の自称とするのは当たるまい」という。

〔注9〕 邵傳『集解』に「裴冕、蜀の節度事と為る、故に主人と称す」とあり、薛益『分類』（卷一、居室）にも「主人は裴冕なり」という。なお、輯註に「主人は裴冕なり。旧注に嚴武と作すは非なり」とする宋・鮑文虎の説を挙げた後、按語を加えて「史に上元元年三月、李若幽、裴冕に代はり成都の尹と為ると。此に主人と云ふは、恐らく只だ是れ地主ならん。并に冕に非ざるなり」という。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも引く。

もっとも、陳胎煥『杜甫評伝』第十三章第一節には、清・施鴻保『讀杜詩說』（卷十八）の「詩中の主人は、明らかに是れ裴を指す」とする説を挙げて、これに賛意を表する。

〈浣花谿〉は、別名を百花潭ともいい、成都府の西南五里にある。『梁益州記』に「溪沿いに住む人々は多くが彩箋づくりに従事している。それで浣花と号する」と。公の住まいは〈浣花〉の西岸にある。〈主人〉は、公自身のこと。或いは裴冕を指すとするのは、よくない。〈卜〉は、亀甲を灼いて吉凶を視ることである。ここではただ善い土地柄を択ぶというだけのことだ。舟人が風向きをみるのを占風というのと同様である。公は〈溪〉の〈頭〉^{はとり}にやって来て、草堂をこしらえる場所を探した。〈谿水〉に臨む景勝の地を占めている上に、〈林塘〉の〈幽〉なるを喜び、かくしてそれで〈居〉を定めたのである。

已ニ知出レハ郭少ニ塵事一 更ニ有ニ澄江ノ銷ニ客愁一

※塵事：ウルサキカ、リアヒ 銷客愁：タビノウサヲナグサム

上句言^ニ境之幽^{ナル}ヲ。出^ハ郭^ヲ言^レ離^ラ成都之市^ヲ。公今來^テ相^ス地^ヲ、未^三嘗^テ住^セ于此^ニ、便已^ニ知^下郊居景境清閑、不^レ似^ニ城市之喧囂^ニ、無^ニ復俗累ノ相擾^ル、宜^中優游^{シテ}以卒^上上^レ歲^ヲ也。下ノ句言^ニ地之勝^ヲ。浣花之水、湛湛^{タル}供流、而ト^レ居^ラ在^ニ江岸^ニ。勝槩幽致可^レ知^ル矣。謝眺^{（注12）}詩^ニ餘霞散成^レ綺^ヲ、澄江淨^{シテ}如^レ練^ノ。風景娛^レ人^ヲ、殊^ニ有^ニ若^{トキ}趣^一、足^下以慰^ニ旅懷^ヲ而暢^ルニ幽情^ヲ也。公ノ詩^ニ又云、百花潭水即滄浪、亦賞^ニ其澄清^ヲ也。

（注10）『左伝』襄公二十一年に晋の叔向（羊舌肸）の語として「詩に曰く、優なる哉游なる哉、聊か以て歳を卒へん、知なり」とあり、杜預の伝に「詩の小雅。言ふところは君子衰世に優游す、害を辟け其の寿を卒ふる所以なり。是れ亦た知なり」と注するが、これは逸詩。

（注11）宋玉「招魂」（「楚辞」、『文選』卷三十三）に「湛湛^{たんだ}たる江水、上に楓有り」と見え、王逸の注に「湛湛は、江水浸潤するなり」と。なお、楓はプラタナス。

（注12）「晩に三山に登つて京邑を還望す」詩（『文選』卷二十七）。

（注13）後出029「狂夫」詩。

上の句は、その他の幽静なるをいう。〈郭を出る〉は、成都の市内を離れることをいう。公は今やつて来て土地柄を下見した。これまでここに住んだことはないのだが、郊外の住まいは周囲が清閑（のどかで静か）で、城市^{まちなか}の喧騒とはまるで異なり、俗累にかきみだされることもなく、のんびりと生涯を終えるのにびったりだと、はやもうわかつたのである。下の句は、景勝の地であることを言う。〈浣花〉の〈水〉はゆったりと流れ、〈居〉を〈卜〉したのはその岸边である。景勝地の静かな趣がわかる。謝眺の詩に「餘霞散じて綺を成し、澄江淨くして練の如し」とある。風景が人を娛しませ、とりわけこのような趣があつて、旅懷を慰め幽情を暢べるに充分である。公の詩にさらに云う、「百花潭水即ち滄浪」と。これもやはりその澄みきつたありさまをめでているのである。

無數ノ蜻蜓齊^{シク}上下^シ

一雙ノ鵝鵝對^{シテ}沈浮^ス

※無数：アマタノ 齊：オナジャウニ 一 双：ツガヒノ 鵜瀾^(注11)：オシドリ 対：ツレグチテ

此直承^レ上^ヲ而下^ル。寫^二江上ノ開景^一。上下^ハ言^二低昂^一シテ 如^一春^{ツク}。沈浮^ハ言^二年沒^一シテ^テ施^一泛^ヲ。皆其自得之狀。

公逍遙優游、故^二得^一弄^{シテ}此開景、占^中觀物之樂^上。此亦因^レ物^ニ寓意^ヲ也。

(注14) 『文選』卷五、左思「呉都の賦」の劉涓子注に「鵜瀾は、水鳥なり。色黄赤、斑文有り。短狐虫を食ふ。水中に在り。毒

無し。江東の詣郡皆之有り」と。なお、正徳二年（一七二二）序、同五年跋の寺島良安『和漢三才図会』卷四十一、水鳥

の部には、「大おしどり」と和訓を施し、「本綱、鵜瀾、状、鴛鴦より大にして色紫多く、人家之を畜^{やしな}ふ。毛に五采有り。

首に纓有り、尾に毛有り船形の如し。性、邪を尋ねて害を逐ふ。此の鳥専ら短狐を食す。乃ち溪中物を害する者を勅逐す。

其の溪に遊ぶや、雄を左にし雌を右にし、隊伍乱れず、式度有る者に似たり」と、明・李時珍『本草綱目』（禽部第四十七

卷）の記述を挙げた後、「未だ之を見ず」という。『本草綱目』は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注15) 顧宸『註解』に「蜻蜒水に点して上下斉しく飛び、鵜瀾相親しみ浮沈して自得す。物を観るの楽しみ又た此の如し」と。

宇都宮遯庵の増広本にも引く。なお、〈観物之楽〉の語は、北宋・邵雍（字は堯夫、諡は康節。一〇一一―一〇七七）の

「伊川擊壤集の序」に見える。

これは直ちに上を承けて説き下しており、〈江〉辺の閑かな風景を描写している。〈上下〉は、あがったりさがつたりして白をつくような様子を言う。〈沈浮〉は、沈んだかと思えばすぐに浮かぶのを言う。いずれもその自得のありさま。公はのんびりぶらぶらと気ままに過ごしており、さればかかる閑かな風景をめで、観物の楽しみを独り占めできた。これもやはり物によって意を寓しているのである。

東行萬里堪^レ乘^{スルニ}興^ニ 須^下向^二山陰^一上^中小舟^ニ

※堪乗興：オモシロカラシ

萬里橋在^二成都ノ南八里浣花里之東^一。實^(注17)宇記^(注18)昔諸葛亮送^二費禕^一。吳^(注19)、至^二此橋^一嘆^{シテ}曰、萬里之行、始^二于此^一矣。橋因^レ是得^レ名^ヲ。山陰^ハ浙江ノ縣名^(注20)。世説^(注21)、王子猷居^二山陰^一、雪夜乘^レ興棹^レ舟^ニ訪^二剡谿ノ戴安

道^一ヲ。此暗^ニ合^ニ用^ス之^ヲ。應^ニ客愁^ニ爲^レ結^ヲ、融會^{シテ}入^レ妙^ニ。公蓋欲^レ遊^ニ吳越^ニ、暫且居^レ蜀^ニ耳。公初^テ至^レ蜀^ニ、便已^ニ有^レ言^ル曰^{（注22）}、此生那^ソ老^シ蜀^ニ、不^レレ死^ニ定^ニ歸^シ秦^ニ。必欲^レ首^{（注23）}邱^ニ所^ニ素^{（注24）}矢^フ也。今所^レトスル新居、東接^ス萬里橋^ニ、故^ニ因^テ此^ニ遂發^シ遠行之想^ヲ。冀他日世平^テ得^ニ乘^レ興^ニ自由^一ナルコトヲ、便萬里之行、直^ニ從^レ此發^シ舟^ヲ、順^テ流^ニ東下^{シテ}向^テ山陰^ニ去^ン、則^ト居^ヲ于此^ニ尤爲^レ便^ト也。堪^ノ字言^ニ其輕便^ヲ。須^ハ者預期^{スル}之辭^{（注25）}。小舟^ハ亦言^ニ其輕便^ヲ也。○山谷外集^ノ注^ニ節度使崔寧^ノ妻冀國夫人任氏崇^ニ奉^ス異僧^ヲ。爲^ニ就^レ谿^ニ浣^ニ其衣^一、蓮花隨^テ出^ニ潭中^一、因^テ號^ニ浣花谿^ト、又稱^ニ百花潭^ト。舊注^ニ引^レ之^ヲ。崔寧^ハ大曆中^ノ人、杜撰可^レ笑。

（注16）〈上〉字、詳註（卷九）は〈入〉に作る。

（注17）『元和郡県図志』卷三十一、成都府の条に「万里橋は（中略）県南八里に在り」と。錢注に見え、宇都宮遯庵の増広本は顧宸『註解』に挙げるのを引く。

（注18）『太平實手記』卷七十二、劍南西道、益州、成都県の条に、「万里橋は州の西南二里に在り。亦た篤泉橋と名づく。橋の南に篤泉有ればなり。漢、費禕をして呉に聘せしむ。諸葛亮、之を祖す。歎じて曰く、万里の道、此の橋より始まる、と。故に万里橋と曰ふ」と。なお、費禕の記事は（注16）に挙げた『元和郡県図志』にも見える。

（注19）薛益『分類』に「山陰は県の名。浙江の紹興府に属す」と。ついで、王子猷の故事を挙げる。宇都宮遯庵の増広本にこれを引く。

（注20）『世説新語』任誕篇。詛注稿四、017「鄭県の亭子に題す」詩の（注22）参照。

（注21）『詳註』及び『唐宋詩醇』（卷十五）に清・黄生の「暗に孔明・子猷の語を用ひ、融會して妙に入る」というのを引く。その著『杜工部詩説』（卷九）には「山陰乗興、又た暗に孔明・子猷の事を用ふ。其の融會の妙、亦た天衣無縫なり」とある。

（注22）「嚴公の入朝するを送り奉る十韻」詩（詳註卷十一、〇五五七）の第十七、十八句。

（注23）首丘は、故郷に帰ることをいう。『礼記』檀弓上に「太公、常丘に封ぜらる。五世に及ぶ比^{（注24）}まで、皆反りて周に葬れり。

君子曰く、樂は其の自りて生ずる所を樂しみ、礼は其の本を忘れず。古人の言へること有り、狐死するに正しく丘に首すと。仁なり」と。太公は、太公望呂尚のこと。管丘は、齊の地名。

(注24) 顧宸『註解』に「子猷が興、去かんと欲せば即ち去き、帰らんと欲せば即ち帰る。山陰の小舟、飄然として寄傲す。此の生那んぞ蜀に老いん、素より矢ふ所なり」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

(注25) ちなみに、釈大典の『詩語解』巻下に、杜甫のこの句を例に挙げて、「先料^レ之^ヲ也」という。また『詩家推敲』巻之上に「須ノ字又意^ノ所^ル欲^{スル}也ト訓ゼリ。古来スベカラクノ訳アリ。能アタレリ。スベカラクト先エ読トキハベシト返リ読ベカラズ。此ノ字人ニ対シテ言トキハ云々セヨトイフ意、吾事ニイフトキハ云々セントイフ意ナリ」とある。

(注26) 『黃山谷詩集』外集卷十六、「老杜浣花谿図引」詩の「百花潭水冠纓を洗ふ」句、史容の注に「杜詩に万屋橋西の宅、百花潭北の庄、と。百花潭の事、蓋し節度使崔寧の妻、冀国夫人、浣花溪の上に家す。夫人初め児童^タ為りしとき、異僧有り其の家に遇ふ。偏身瘡穢、夫人之を奉ずること甚だ謹なり。僧弊衣を持して謂ひて曰く、我が為に此れを濯へ、と。夫人即ち溪に就きて之を洗ふ。蓮花随つて潭中より出づ。貴と為るに及び俗に百花潭と呼ぶ」という。ここに引かれている杜詩は、「錦水の居止を懷ふ」二首其二（詳註卷十四、〇八四八）。

(注27) 宇都宮遯庵の増広本に「一統志六十七、成都府、浣花溪は府城の西南五里に在り。一名百花潭。按ずるに呉中復が国夫人任氏の碑に記す、夫人微時一僧の汚渠に墮つるを見る。為に其の衣を濯ふに、百花、潭に満つ。因つて其の潭を名づけて浣花と曰ふ。云々」と。一統志は、『大明一統志』のこと。

なお、029 「狂夫」詩の顧宸『註解』に「百花潭」について「旧註に冀国夫人の事を引く。即ち旼が妾任氏なり。宋人任正一が游浣花記に云ふ、百花潭は杜詩に見えたり。冀国に由つて名を得るに非ざるなり」云々と。宇都宮遯庵増広本「狂夫」詩に挙げる。任正一については、未詳。

〈万里〉橋は、成都の南八里、浣花里の東にある。『寰宇記』に「昔、諸葛亮は費禕が呉に使いするのを見送り、この橋までやってきて、万里の行は、ここから始まると嘆じた」という。橋はそこから名を得た。〈山陰〉は、浙江の県名。『世説』に「王子猷が山陰にいた時、雪の降った夜、興に乗じて舟に棹さし剡溪の戴安道を訪ねた」とある。ここでは暗にこの二つの故事を合わせ用いている。〈客愁〉に対応して結びとし、融合して妙境に達し

ている。公は、けだし呉越に遊ぼうとして、しばらく蜀にいたのだ。公が蜀にやってきた当初、すでに次のような言葉がある。「此の生那んぞ蜀に老いん、死せずんば定めて秦に帰らん」と。かならず故郷に帰ろうというのが、もとより立てた誓いである。今、〈卜〉した新〈居〉は、〈東〉は〈万里〉橋に接している。このため遠行の思いを発し、いつか世の中が平和になって〈興に乗じ〉て思い通りにできたなら、そのまま〈万里〉の行程を、すぐさまここから舟を発して、流れに従って〈東〉に下り、〈山陰〉に向って旅立とう。それならここに〈卜居〉するのがもつとも便利だと考えるのである。〈堪〉の字は、その軽便なるをいう。〈須〉は、あらかじめ期待する辞。〈小舟〉は、やはり軽便なるをいうのである。○

『山谷外集』の注に「節度使崔寧の妻、冀国夫人任氏が異国の僧を崇奉し、かの僧のために漢で衣を浣^あつたところ、次々に蓮華が潭中より浮かび出て、それで浣花溪と号した。また百花潭と称した」とあり、旧注にこれを引いている。崔寧は大暦中の人で、杜撰さは全くのお笑い草だ。

026 堂成

往^ニ所^ノト^{セシ} 郊居、今構^テ堂^ヲ落成^ス也。此卽所謂浣花ノ草堂也。

さきに下見した郊外の住まいに、今や堂をしつらえて出来上がったのである。これがいわゆる浣花の草堂である。

背^テ郭^ニ 堂成^テ 蔭^フ 白茆^ヲ ^(注1)
 縁^レ江^ニ 路熟^{シテ} 俯^ス 青郊^ニ ^(注2)

※背郭…シロノウラテ 縁江…カハヅタヒ 俯…ミオロス

背^ハ 猶^レ 負^ノ 也。 ^(注2) 浣花谿在^ニ 成都ノ西郭外^ニ、故^ニ 曰^レ 背^ト 郭^ニ。 ^(注3) 蔭^ハ 蓋^也。 ^(注4) 白茆覆^レ 屋^ヲ、所^レ 謂^ス 草堂也。江^ハ 卽^ス 浣花谿。俯^ハ 猶^レ 臨^ノ 也。俯^ニ 青郊^ニ 一^ニ 言^ス 野景在^ニ 眼下^ニ。 ^(注5) 蓋堂憑^レ 高^ニ 也。公自^ニ 去冬^ノ 入^レ 蜀^ニ、久寓^ニ 成都ノ市中^ニ。沿^レ 谿

江^ニ通^レク郊^ニ之路、往來經行已^{（注6）}熟ス。今始^テ成^ニ堂^ヲ于此^ニ。青郊之景、直^ニ在^ニ面前^ニ。江頭往來之路、可^ニ指點^シテ而辨^ス也。公好^テ用^ニ俯^ノ字^ヲ皆妙。加^下江檻俯^ニ鴛鴦^{（注7）}、杖藜俯^ニ沙渚^{（注8）}、遊目俯^ニ大江^{（注9）}、四顧俯^中層巔^{（注10）}。蓋自^下謝眺^カ窓中列^ニ遠岫^{（注11）}、庭際俯^中喬林^{（注12）}上來也。

〔注1〕〈茆〉字、錢注（卷十二）および輯註（卷七）は〈茅〉に作る。詳註（卷九）も同じ。音義ともに同じ。

〔注2〕『唐詩貫珠』（卷三十六、幽居）に「背は猶は負のごとし」と。

〔注3〕邵宝『集註』（卷二十二、宮室類）および薛益『分類』（卷一、居室）に「浣花谿は成都の城外に在り、故に郭に背くと曰ふ」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注4〕『唐詩貫珠』に見える。

〔注5〕青郊の語、謝朓の「徐都曹に和す」詩（『文選』卷三十）に「軫^{くろみ}を青郊の路に結びて、廻^{はるか}に蒼江の流れを瞰^みる」と。これは、輯註に挙げる。

〔注6〕邵宝『集註』および薛益『分類』に「公久しく成都の寺中に寓して、往來江路熟するなり」、顧宸『註解』に「公久しく寺中に寓す。往來経行、其の路已に熟す」と。『分類』『註解』ともに、宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

〔注7〕「王使君に陪して晦日江に泛^{うか}び黄家の亭子に就く」二首其二（詳註卷十三、〇七〇五）の第四句。

〔注8〕「暇日小園に病を散ず。時に秋葉を種^うゑんとして耕牛を督勸し兼ねて触目を書す」詩（詳註卷十九、一一三六）の第二十九句。

〔注9〕「閬州の東樓の筵にて十一舅が青城に往くを送り奉る」詩（詳註卷十二、〇六七四）の第七句。

〔注10〕「冬、金華山の観に到り、困つて故の拾遺陳公の学堂の遺跡を得たり」詩（詳註卷十一、〇五八七）の第七句。

〔注11〕「郡内の高齋に閑居して、呂法曹に答ふ」詩（『文選』卷二十六）。

〈背〉は、負とほぼ同じ。浣花溪は成都の西郭の外にあるので、それで〈郭に背く〉という。〈蔭〉は、蓋である。〈白茆〉が屋を覆うのは、いわゆる草堂である。〈江〉は、ほかならぬ浣花溪。〈俯〉は、臨とほぼ同じ。〈青郊に俯す〉は、野外の景色が眼下に広がっているのをいう。けれど〈堂〉は高いところによりそっているの

だろう。公は去年の冬に蜀に入ってから久しく成都の市中に仮寓していた。〈江〉に沿い郊外にゆく道筋は、幾度も往来し、すっかり熟知している。今やつと〈堂〉がここに〈成〉った。〈青郊〉の景色は、すぐ面前にある。〈江〉のほとりの往来する路は、指し示してそれとはつきりわかる。公は好んで〈俯〉の字を用いるが、どれも絶妙だ。例えば、「江檻鴛鴦に俯す」「杖藜沙渚に俯す」「遊目大江に俯す」「四顧層巒に俯す」というような句があり、けだし謝朓の「窓中遠岫に列し、庭際喬林に俯す」から出たものであろう。

檀林礙日吟風葉

籠竹和煙滴露梢

※檀林：ハンノキバヤシ 籠竹：オホダケヤブ 滴：ボタ／＼

檀音欹、或ハ讀テ如レ稽ノ、非ナリ。木名。唯蜀ノ有レ之。不材ニシテ易レ成、止可レ充レ薪ニ。蜀中記ニ玉壘ヨリ以東

多ニ檀木一、易シテ成而可レ薪ニス、美蔭ニシテ而不レ害アラ。益部方物記ニ檀木ハ蜀地ノ所レ宜、民家蒔レ之ヲ。不シテ三

年一可レ爲レ薪ト、疾ク種亟カニ取、里人以爲レ利。礙ハ日ヲ言ニ繁枝美蔭、可レ爲ニ夏堂ノ涼翳ト也。公有下憑テ何

少府一覓ニ檀木栽一詩上曰、飽聞檀木三年ニ大ナルヲ、與ニ致ス谿邊十畝陰。籠力鍾反。蜀人名ニ大竹一曰ニ籠竹ト。

益部方物記ニ竹有ニ數種一、節間容ニ八九尺ヲ者ヲ曰ニ籠竹ト。和煙ニ言レ拂ヲ煙霄一、極稱ニ梢之高一也。綠樹礙レ

日ヲ、風葉蕭颯、美竹和レシテ煙ニ、露梢滴瀝、斯ニ知夏堂爽涼、不ニ復知ニ炎熱一矣。是喜賞ニ園物一、預想ニ夏興一

也。唐書本傳ニ於ニ浣花谿ニ、種レ竹ヲ植レ樹ヲ、結レ廬枕江ニ、然トモ今所ノ詠 樹竹、即前首ノ所レ云林塘ノ幽、

非ニ新ニ植ルニ也。

(注12) 南宋・周密(字は公謹、一二三二―一二九八)撰『齊東野語』卷十一に「杜詩の檀木を乞ふ詩に音無し。或いは読みて

豈と作す。而れども韻書も亦た此の字無し。集中に又た「檀林日を礙ふ風に吟ずる葉」と有り。鄭氏の註に曰く、五来の

反。若し然らば、当に默字に作るべし。余嘗て陳休仁端明に見ゆるに云ふ、前輩を見るに讀みて歛韻の若くすと。頗る疑

はしと爲すも、後に劍南の詩を見るに、「書を著して木品を増し、句を搜して檀栽を覓む」と有り。又た荆公の詩に云ふ、

〈濯錦江辺に榿有り、小園封植して華滋を佇つ〉と。益ます歎音然りと為すを信ず。榿、惟だ蜀のみ之有り、不才の木なり。或いは謂ふ即ち榕なりと云ふ」と。

ちなみに、陳体仁は、端明殿學士の陳存（字は体仁）のこと。劍南の詩は、南宋・陸游の「園中の作」（『劍南詩稿』卷四十五）。但し、『劍南詩稿』は、〈木〉を〈水〉に、〈搜〉を〈披〉に作る。荆公の詩は、北宋・王安石（字は介甫、号は半山老人。一〇二一—一〇八六）の「薛肇明秀才に榿木を償ふ」詩（『臨川先生文集』卷二十七）。なお、『齊東野語』の記事は、錢注にこれを挙げ、顧宸『註解』には「讀みて豈と為す」までを引く。宇都宮遯庵の増広本は「註解」を引く。

また、明・楊慎『丹鉛總錄』卷四、花本類、榿木の条には、「姑蘇の守溪王公濟之、閨に在りし日に、杜詩の〈開きて知る榿木三年大なりと〉を論じて、因つて先父に問ふ、榿木は蜀の産、榿字何者ぞ、と。先父曰く、音は歎。守溪曰く、當に韻書に依つて楷と音すべし。先父曰く、音歎なるは則ち郷人農夫皆之を知る。若し楷の音と為さば、何の木なるかを知らざらん。因つて王荆公の榿木詩に〈濯錦江辺に榿有り、小園封植して華滋を佇つ。幸ひに桓魋の伐るを免れ、歳晩にして還た庚信の移すに同じうす〉と曰ふを挙げ。王乃ち悦服す。蓋し王公平昔極めて荆公の詩文を愛す。而れども此の詩、王公も亦た偶たま記憶せざるのみ」とある。王濟之は王鏊（一四五〇—一五二四）のことで、楊慎の父は、楊廷和（一四五九—一五二九）のこと。

〔注13〕 邵宝『集註』および薛益『分類』に「榿は、木の名。不材にして成り易し。止だ薪に充つ可し。蜀地の宜しき所なり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

〔注14〕 『蜀中記』は未詳。蔡夢弼『草堂詩箋』（卷十八）に見え、顧宸『註解』にも引く。『註解』は宇都宮遯庵の増広本にこれを挙げる。玉壘は、山名。今の四川省江堰市の西北。

〔注15〕 北宋・宋祁（字は子京、九九八—一〇六一）撰『益部方物略記』のこと。宇都宮遯庵の増広本には輯註に挙げるのを、また詳説には張遠『公粹』（卷八）に挙げるのを引く。

〔注16〕 「何十一少府邕に憑りて榿木栽を覓む」詩（詳註卷九、〇三八九）

草堂壘西無樹林 草堂壘西 樹林無し

非子誰復見幽心 子に非ざれば誰か復た幽心を見ん

飽聞榿木三年大 飽くまで聞く榿木三年大なるを

與致溪邊十畝陰 与に致せ溪辺十畝の陰

(注17) 輯註に見え、宇都宮遯庵の増広本にこれを引く。

(注18) 『旧唐書』 卷一九〇下、文苑伝の杜甫伝。

〈檀〉、字音は欵。あるいは楷のごとく読むのは、よくない。木の名。蜀地方だけにある。材木にはならないが成長がはやく、ただ薪になるばかりだ。『蜀中記』に「玉壘より東の地に檀木が多い。成長がはやく薪になる。美しい木陰をつくり邪魔にならない」、『益部方物記』に「檀木は蜀に適したもので、民家に植えられている。三年も経たないうちに薪にできる。さっと植えてすぐに取る。里人はこれを重宝している」と。〈日を礙ふ〉は、こもりと繁った枝が夏には涼しい木陰をなすことをいう。公に「何少府に憑りて檀木栽を覓む」詩があり、「飽くまで聞く檀木三年に大なるを、与に致せ溪辺十畝の陰」という。〈籠〉は、力鍾の反。蜀人は大竹を名づけて籠竹という。『益部方物記』に「竹に数種類あり、節のあいだが八九尺になるのを籠竹という」とある。〈煙に和す〉は、靄のかかった空を払うことをいい、梢の高いことを称するのである。緑の樹木が〈日〉を〈礙〉い〈風〉にそよぐ木の〈葉〉がさわさわと音をたて、美しい竹林が〈煙〉に〈和〉して、〈梢〉から〈露〉のしずくがぼたぼたと〈滴〉る、それこそ夏の草堂は爽快清涼で、炎熱知らずということがわかるというものである。これは園にある物をめで、あらかじめ夏の興趣を想像しているのである。『唐書』本伝に「竹や樹を植え、川を背にして仮の住まいをこしらえた」とあるが、今詠じられている樹や竹は、前首に云う〈林塘の幽〉で、新たに植えたものではないのだ。

暫^ク止^{マル} 飛^ル鳥^ヲ將^ヒ二數子^ヲ 頻^ニ來^ル 語^ム燕^ニ定^ム 新^ニ巢^ヲ

※將：ヒキツレ

將^ハ率^レ也。鳥將^ニ數子^ヲ、教^ニ雛^ヲ習^レ飛^ル也。^(注19)語^ハ燕^ハ言^ニ雌雄和鳴^{スルヲ}也。新堂纔^ニ成^ル、葺^{コト}レト^ヲ始^メ畢^ル。鳥則將^ヒ

雛來^テ、暫^ク止^テ屋上^ニ、習^テ飛^{コトヲ}翔去^ル。燕亦欲^{シテ}巢^{ント}、頻^ニ來^テ語^ル梁間^ニ、如^ニ雌雄相謀^カ、遂^ニ定^ニ其所^ヲ也。詩ノ小雅^(注20)瞻^ル鳥^ニ爰^ニ止^{ルヲ}、于^ニ誰^ニ之屋^ニ、古樂府^(注21)鳥生^ニ八九子^ヲ。上ノ句暗^ニ合^ニ用^ス之^ヲ。淮南子^(注22)大厦成^テ而燕雀賀^ス。下ノ句暗^ニ用^ヒ其事^ヲ、而換骨脫胎^(注23)。論語^(注24)翔^テ而後集^ル、亦暗^ニ合^ニ用^ス其意^ヲ。竝^ニ運用融化^{シテ}、渾然無^レ痕、妙入^ニ化境^ニ。西清詩話^(注25)云、作^レ詩^ヲ用^ル事^ヲ、要^ス如^ニ二水中著^ル鹽^ヲ。飲^テ水^ヲ乃知^ニ鹽味^ヲ、是也。暫止ノ二字拈^下出^ス不久居^ニ之意^ヲ、將^ニ數子^ヲ亦喻^レ率^ニ家累^ヲ、頻^ニ來定^ニ巢^ヲ、有^レ似^ニ三ト^レ居^ヲ之不^ルニ率易^{ナラ}、皆因^テ物^ニ寓^レ意^ヲ、感^ニ己^ニ之境界與^レ之相類^ニ也。暫止與^ニ頻來^ニ有^ニ開合^ニ、對法尤妙。

(注19) 『唐詩貫珠』に見える。

(注20) 『詩經』小雅・正月。

(注21) 宋・郭茂倩『樂府詩集』卷二十八、相和歌辭三、「鳥生」に見える。輯註および顧宸『註解』に古樂府「鳥八九子を生む、端坐す秦氏桂樹の間」として挙げ、宇都宮遯庵の増広本には『註解』を引く。

(注22) 『淮南子』說山訓。008「賈至舍人早に大明宮に朝すに奉和す」詩、(注8) 参照。

(注23) もとは道家の語。外見はそのままに中味をそっくりいれかえること。そこから、古人の表現をふまえ、それをすっかり斬新なものに作り変えることをいい、創作論として北宋の黃庭堅(山谷)が提唱した。釈惠洪(一〇七一―一二二八)の『冷齋詩話』卷一に「山谷云ふ、詩意は窮まり無く、而して人の才は限り有り。限り有るの才を以て、窮まり無きの意を追ふ、淵明・少陵と雖も、工を得ざるなり。然れども其の意を易へずして其の語を造る、之を換骨法と謂ふ。其の意を規模し、之を形容す、之を奪胎法と謂ふ」と。

(注24) 『論語』鄉党篇に「色斯^ニに挙がり、翔て後に集まる」とあり、朱子の集註に「言ふところは、鳥、人の顔色善からざるを見て、則ち飛び去る。回翔し審らかに視て後に下る」と。

(注25) もとは仏教語。靈妙で及びがたい境界をいう。例えば、清・王士禛(号は漁洋山人。一六三四―一七二二)の『香祖筆記』卷八に「筏を捨て岸に登る、禪家以て悟境と為し、詩家以て化境と為す。詩禪一致、等しく差別無し」と。

(注26) 北宋・蔡條(字は約之。一一二六)撰。この箇所、北宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集卷十および南宋・魏慶之『詩人

玉屑』 卷七、用事に引く。

〔注27〕顧宸「註解」に「嚴顥亭曰く、久居せざるの意を拈出して、最も醒たり最も確たり。〈飛鳥〉に〈暫止〉と曰ひ、〈語燕〉に〈頻来〉と曰ふ。隠然として三匝枝無し之感有り、且つ色斯に挙がり、翔けて後に集まる、鳥猶ほ此の如し。而して況んや人をや。乃ち知る少陵、字軽く下さざるを」という。宇都宮遯庵の増広本にも引く。ちなみに、嚴顥亭は、嚴沆（字は子餐。一六一七―一六七八）のこと。浙江餘杭の人で、順治十二年（一六五五）の進士。著に「皐園詩文集」四巻があるという。〈三匝枝無し〉は、魏・曹操「短歌行」（『文選』巻二十七）の「月明らかに星稀にして、烏鵲南に飛ぶ。樹を繞ること三匝、枝の依る可き無し」に基づき、依託するところなきをいう。

〔注28〕『唐詩貫珠』に見える。開合については、前出023の（注6）参照。

〈将〉は、率である。〈烏〉が〈数子〉を〈将〉い、雛に飛ぶことを習わせるのである。〈語燕〉は、雌雄が仲よく鳴き交わすのを言う。新しい〈堂〉がようやく〈成〉り、〈茆〉を葺くのがやとおわった。〈烏〉は雛を作ろうとして、ひっきりなしにやってきて、梁の間に鳴いている。まるで雌雄で相談しているみたいで、かくしてその場所を決めたのである。『詩経』の小雅に「烏の爰に止まるを瞻るに、誰の屋に于いてす」、古楽府に「烏八九子を生む」とあり、上の句は暗にこれを合わせ用いている。『淮南子』に「大厦成って燕雀賀す」とあり、下の句は暗にこの故事を用いて換骨脱胎している。『論語』の「翔けて後に集まる」も、やはり暗にその意を合わせ用いている。いずれもその用い方はうまく融合し、渾然一体となつて斧鑿の痕がなく、絶妙のものとなっている。『西清詩話』に「詩を作る場合、水の中に塩を入れるようにしなければならぬ。見た目ではわからないが、飲んでみてやつと塩味だとわかる」というのが、そうである。〈暫止〉の二字は、長居をしないという意味を言い出している。〈数子を將ふ〉というのも、やはり家族を引き連れているのに喩える。〈頻りに来る〉（〈巢を定む〉）のは、〈居を卜す〉のが容易でないと似たところがある。いずれも物によって意を寓し、己れの境遇

がこれと類似しているのに心感じたのである。《暫止》と《頻来》とは開合があり、对句の作り方がとりわけ絶妙だ。

傍人錯^{リテ}比^ス揚雄宅 懶惰無^レ心^ル作^ニ解嘲^一

※錯：トリチガヘテ 懶惰：ブシヤウ

揚雄ハ蜀人。因^ニ其地^一用^レ之^ヲ。漢書本傳^(注20)雄有^ニ田一廛宅一區^一。世^レ以^ニ農桑^一爲^レ業^ト。嘗^テ草^ニ大玄^一、有^レ

守^リ泊^{タリ}。或^{ヒト}嘲^{ルニ}以^ニ玄尙白^一、雄作^ニ解嘲^一文^ヲ。此翻案^(注30)シテ不^レシテ曰^レ欲^{スト}作^ニ解嘲^一、而曰^レ無^レ心^ル作^ニ謙^一

託^{シテ}懶惰^一、不^レ欲^セ争^{コトヲ}也。蓋公在^ニ蜀^一營^ニ宅一區、人或^ハ比^{センハ}揚雄^一村居^ニ、則錯^リ認^ル耳。雄能作^レ文^ヲ解嘲^ヲ、我ハ乃懶惰不^レ能^ル如^{コトヲ}彼、徒^ニ任^ニ人ノ呼^レ牛^一呼^レ馬^一而已。公嘗懷^ニ稷契之志^一、而今徒^ニ爲^ニ田夫野人^一、是其實^ハ自嘲^ル也。懶音嬾。嘲陟交反。惰^(注34)一^(注35)作^ニ漫^一。

田夫野人ト、是其實ハ自嘲^ル也。懶音嬾。嘲陟交反。惰^(注34)一^(注35)作^ニ漫^一。

(注29) 『漢書』卷八十七上。なお、「解嘲」は『文選』卷四十五にも収む。《大》は《太》の訛字。

(注30) 『唐詩貫珠』に「結は是れ翻案。解嘲を作らんと欲すと曰はずして作るに心無しと曰ふ、其れ高く人の頭地を超出す」と。

(注31) 『莊子』天道篇に「我を牛と呼べば、之を牛と謂はん、我を馬と呼べば、之を馬と謂はん」と。

(注32) 011「省中の院壁に題す」詩の詳解に「公平生自ら許すこと甚だ重し、窃に稷契の志を懷く」と。その(注31)参照。

(注33) 何に基づくか、不明。なお、『字彙』に拠れば、嬾は嬾と同じ。

(注34) 例えば、『字彙』に「嘲、陟交の切」と。字音はタウ。

(注35) 《惰》字、輯註に《墮》に作り、「一に慢に作る」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

《揚雄》は、蜀の人。その地にちなんでこれを用いる。『漢書』本伝に、「揚雄は、百畝の農地と一区画の住居とがあり、代々農桑に従事していた。かつて『太玄』を草したが、無欲恬淡とした生き方を守っていた。ある人が嘲って玄だといいいながらまだ白い《奥義を極めていない》のではないか（だから禄位が得られないのだ）、

と言ったのに対し、楊雄は解嘲の文を作った」とある。ここでは翻案して「解嘲を作らんと欲す」といわずに「作るに心無し」という。謙遜して「懶惰」にかこつけ言い争いたくないのである。けだし公は蜀の地にあつて一区画の住居を造営したが、人のなかには「楊雄」の村居に「比」べようとするものがあるのは、「錯」^{あやま}つてそう思うのだ。「楊雄」はうまく文章を作つて「嘲」を「解」いたが、わたしは却つて「懶惰」で、そのようにはできない。他人様^{ひと}が牛と呼べば牛だと思ふし、馬と呼べば馬なのだ。何と言われようとかまわない。公はかつて古代の稷や契のように偉大な天子を補佐したいという志を抱いていたが、今ではそれもかなわず空しく田舎親爺となりはてている。これはその実、自ら嘲っているのである。「懶」、字音は嬾^{あやま}。「嘲」は、陟交の反。「惰」は、一に「慢」に作る。

027 賓至^{注1}

賓^ハ、謂^ニ尊客^一ヲ。題稱^レ賓^ト、詩中曰^ニ再拜^一、曰^ニ車馬^一ト、蓋貴人也。

(注1) 錢注(卷十一) および輯註(卷七)は「有客」に作り、錢注に「草堂本は賓至に作る」と注する。輯註は、宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

「賓」は、尊客のこと。題に「賓」と称し、詩中に「再拜」といい、「車馬」という、けだし身分の尊い御方である。

幽栖地僻^{ニシテ} 經過少^シ 老病人^ニ扶^{ラレテ} 再拜難^シ

公既^ニ出^ニ成都^一、棲^ニ息^ス郊村^一。地僻路隔^リ、少^シ來過^{スル}者^一。身亦老病、拜跪待^レ人^ヲ、應接艱難、不欲^レ引^クコトヲ客^ヲ、閒居寂寥、悠悠銷^レ日^ヲ耳。蓋地僻非^ニ貴客經過之處^一、老病又非^ニ下^ニ迎^{スル}貴客^一之人^ニ。謙詞致^ス敬^ヲ、深^ク喜^テ謝^ス也。徐子能云、貴人來徒^ハ、只在^ニ通都大道^一、聞^ニ、公村居僻陋、非^ニ車馬所^一經之處^ニ。豈意^{シヤ}大賓

儼然臨^レ之^ニ、公老身衰病、懶^シ於接待^ニ、而見^ニハ賓客^ニ、必須^レ要^ス再拜^一、拜^ハ則必倩^テ人^ヲ扶^{ラル}、一拜猶不^レ易^{カラ}、所^ニ以再拜尤難^一也。按^ニ有^レ客詩^ニ云、患氣經^ヲ句久^シ、臨^レ江^ニト^{シテ}宅新^{ナリ}。又遣^ル興^{（注）}云、衰病那^ソ能久^{ラン}。疑^{クハ}當時患^レ痺腰脚不^ニ自由^一ナラ、後在^ニ湖南^一、半體偏枯^{スルハ}、蓋再發^{スル}也。

(注2) 徐子能『而庵說唐詩』(卷十八)に「貴客來往するは、只だ通都大道の間に在り、^{たれか}那个肯へて幽栖に到らん。所以^{ゆゑ}に經過する者無し。〈老病〉は、我又た老病、接待するに懶^{おろそ}し。へ人に扶けられて再拜難し」は、客に見ゆるに必ず須らく拝せんことを要すべし、拝すれば則ち必ず人を倩^{やと}うて扶けらる、又た只だ好く一拝するも、若し再拝を作^なさば、即ち人有りて扶くるも、亦た得る能はず。上の句、幽栖、貴客の経る所の処に非ざるを見^{あら}はす。此の句、老病、又た貴客を迎接するの人に非ざるを見はす」と。通都は、通邑大都の窓。また那个は、口語で何人の意。同じく只好も口語で、やむなくの意。

(注3) 「客有り」詩(詳註卷九、〇三九七)に次のように見える。

患氣經句久 氣を患つて句を経ること久しく

臨江卜宅新 江を臨みて宅を卜すること新たなり

喧卑方避俗 喧卑 方に俗を避け

疏快頗宜人 疏快 頗る人に宜し

有客過茅宇 客有り茅宇に過^{よぎ}り

呼兒正葛巾 兒を呼びて葛巾を正さしむ

自鋤稀菜甲 自ら鋤^かげば菜甲稀なり

少摘爲情親 少しく摘むは情親の爲なり

「患氣」は、肺疾があるのをいう。

(注4) 「興を遣る」詩(詳註卷九、〇四〇五)に次のように見える。

干戈猶未定 干戈猶ほ未だ定まらず

弟妹各何之 弟妹各おの何^{いづ}くにか之^ゆく

拭淚霑襟血 涙を拭^{ぬぐ}へば襟を霑す血

梳頭滿面絲

頭を梳れば面に満つる糸

地卑荒野大

地卑くして荒野大に

天遠暮江遲

天遠くして暮江遅し

衰病那能久

衰病那んぞ能く久しからん

應無見汝期

應に汝を見る期無かるべし

(注5)

「杜文貞公伝」に湘南で「舟居癖を病」んでいたことを言い、この「賓至る」詩を例に挙げて、「其の患ふこと年有り」と説いている。その(注95 参照)。

公はすでに成都の城内を出て、郊外の村にひきこもった。(地僻)し路隔たり、わざわざ訪う者も少ない。自らも(老病)の身で、おじぎしたりひざまずいたりとの挨拶には人の手助けがいる。応対や接待は困難で、客を招きたいとも思わない。わびずまいはひっそりとして、のんびりと日を過すばかりだ。けだし、(地僻)で貴客の(経過)するような場所ではないし、それに(老病)で貴客をお迎えできるような状態ではない。謙遜の言葉で敬意を表しており、深く喜んで感謝しているのである。徐子能が云う、「尊貴な御方が往来するのは、都大路の間である。公は片田舎に住んでいて、車馬の訪うような場所ではない。りっぱな身分の御方が厳かにおなりになるうとは思ひも寄らぬ。公は年老いた身に病氣持ちで、接待するのはおつくうであるのに、身分の貴い客人に会う場合はどうしても再拝せねばならず、拝礼の時は人に扶けられている。一度の礼拝でさえ容易でないのに、再拝となればとりわけ難儀なわけである」と。按ずるに「客有り」詩に「氣を思つて旬日久しく、江に臨んで宅をトして新たなり」といい、さらに「興を遣る」詩に「衰疾那んぞ能く久しからん」という。どうやら当時、中風を患っていて足腰が思いのままにならなかったのであらう。後年、湖南で半身不随になったのは、けだし再発したものであらう。

豈有文章驚海内

謾勞車馬駐江干

※謾勞：ムダニザウサヲカケル

言^(注7)己^下非^ニ文學ノ大先生^ニ、而辱^クス貴客車馬儼然^(注6)、雖^三深喜^ト殷勤^ヲ、亦自慙愧^上也。謙退中自命^{スルコト}

仍在^リ、氣象可^レ見。干^ハ水涯^也。駐^{ルハ}江干^ニ言^レ不^ラ厭^二郊居之陋^一也。

(注6) 光臨の意。『詩経』小雅・白駒に「賁然來思」(賁然として來たる、思は語助字)とあり、朱子の『詩集伝』に「賁然は、光采の貌」という。

(注7) 顧宸『註解』に「韓退之が詩に李杜文章在り、光焰万丈長し、と。公亦た自ら云ふ、人と為り性癖にして佳句に耽る、語人を驚かさずんば死すとも休まず、と。茲に曰く、豈に文章の海内を驚かす有らんや、と。更に一世を震動するの意を見る。僻處と雖も、光焰自ら掩ふ可からず。自ら謙するの中、未だ嘗て自負せずんばあらず。若し竟に謙詞と作さば、便ち老杜の本色に非ず矣」という。〈李杜〉云々は、韓愈(字は退之)の「張籍を調^{きけ}る」詩。「杜文貞公伝」(注83)参照。

〈人と為り性癖「僻」にして〉云々は、042「江上水海勢の如きに値ひ聊か短述す」詩の首聯。

(注8) 薛益『分類』(卷二、尋訪)に「干は、水涯なり」と。
自分は文学の大先生ではないのに、貴客の〈車馬〉がものものしくご來臨するのをかたじけなくした。懇ろな厚情を深く喜んでゐるものの、やはり自ら恥じ入っていることを言うのである。それでも謙遜した言い回しのなかに自負の念があり、氣概の程がわかる。〈干〉は、水涯である。〈江干に駐まる〉は、郊外の陋屋を厭わぬことを言うのである。

竟日淹留^{シテ} 佳客坐^ス 百年粗糲腐儒ノ餐

※淹留：ユルリトサテ 粗糲：クロゴメ、シ

淹^(注9)久^留也。客蓋文雅風流、公與^ニ語^テ相樂^ム。故^ニ曰^二佳客^ト。百年^ハ猶^レ云^カ終身^ト。糲^(注10)音^シ辣、又例頼^(注11)二音。糙米飯也。韓詩外傳^(注12)曾子糲米之食、未^ニ嘗^テ飽^一也。腐儒^ハ既^(注13)見^レ。應^ニ豈有^ノ句^ニ。此^レ公自嘆。腐儒貧窶、粗糲自甘^シ、以終^二百年^一、不^ニ亦哀^{カラ}乎。蓋佳賓偶^ニ至^ル、亦供^{スル}家常便飯^一耳。故^ニ慙^テ而謝^ス之^ヲ。幸^ニ其人

不^二之^ヲ嫌^一、竟日畱款^{シテ}盡^ス歡^ヲ、所^三以爲^ル佳客^一也。

(注9) 例えば、『字彙』に「淹は、衣炎の切。音闌。漬なり、久留なり、滞なり」と。

(注10) 顧宸『註解』に「百年は猶ほ終身と云ふがごとし」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注11) 輯註に見え、宇都宮遯庵の増広本にもこれを引く。

(注12) 『字彙』に見え、いずれも意味は同じとする。

(注13) 薛益『分類』に見える。宇都宮遯庵の両著に挙げ、そのうち詳説に「分類二糲^ハ、糙米ノ飯ト云。糙ハ去^レ穀^ヲ未^レ舂^ヲ云。

又米穀雜^ルヲ糙ト云ト字書ニアリ」と。《糙》は、玄米、黒米。

(注14) 『韓詩外伝』巻二に、子路の語として「曾子は褐衣縵緒、未だ嘗て完からざるなり、糲米の食、未だ嘗て飽かざるなり」と。

(注15) 011「省中の院壁に題す」詩。

(注16) 家庭でのありあわせの食事。『唐詩貫珠』(巻十六、雅事酬贈)に「粗糲の餐は、乃ち家常便飯」と。

《淹》は、久しく留まることである。客は、けだし文雅風流の人で、公はともに語らつて楽しんだのであろう。されば《佳客》という。《百年》は、終身というのとほぼ同じ。《糲》、字音は辣^ラ、ほかに例^レ・頼^ラの二音がある。糙米(玄米)の飯である。『韓詩外伝』に「曾子は糲米の飯さえ、これまで腹一杯食べたことがなかった」とある。《腐儒》は、既出。《豈に有らん》の句に呼応している。これは公が自ら嘆じたのである。《腐儒》たる己れは貧乏このうえなく、《粗糲》に甘んじて、そのまま《百年》を終えるというのだが、なんとも哀しいことではないか。けだしりっぱなお客がたまたま見えても、やはり有り合わせの粗末な食事しか出せないのだ。それゆえ羞じてわびている。さいわいその御方はこれを厭わず、終日逗留して存分に楽しんでくださった。《佳客》たるゆえんである。

不^レ嫌^三野外無^二供給^一

乗^{シテ}興^ニ還^タ來看^ヨ藥欄^ヲ

※供給：ゴチソウ 乗興：キガムキタルトキハ 藥欄：ハナバタケ

還^ハ復^ハ也。藥欄^ハ花藥之園欄^{（注17）}。此藉^レ看^ヲ花^ヲ、望^ニ其復來^{（注18）}。蓋城居饗^{スル}客^ヲ、咄嗟可^レ辨^ス。野居貧厨、殊^ニ

乏^シ供給^ニ。客幸^ニ不^ハ之^ヲ嫌^一、便須^レ乘^{シテ}興^ニ復來、看^テ庭前^ノ花卉^ヲ、以盡^中主人之歡^ヲ。聊以娛^レ賓^ヲ者^ハ、只是

而已矣。趙紫芝^{（注19）}詩^ニ一餅茶ノ外無^ニ祇待^一、同^ク上^テ西樓^ニ看^ニ晚山^一、李于鱗^{（注20）}詩^ニ不^ハ是南山ノ色^一、貧家一事^モ

無^シ、皆此意也。公ノ詩嘗^{（注21）}云、一飯^モ未^モ會^テ留^ニ俗客^一、今喜^ニ淹留^ニ竟日坐^{スル}、又望^ニ乘^{シテ}興^ニ還來^一、所^三以

特^ニ稱^{スル}佳客^一也。通篇以^ニ尋常ノ語^一、平平^ニ寫來^ル。一氣圓靈、眞^ニ大家數。讀^去似^ニ容易ノ作^一、翻^テ是難^レ

造^リ之^{（注22）}境。

（注17）邵宝『集注』（卷二十三、尋訪類）および薛益『分類』に「藥欄は、花藥の欄檻なり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広

本に、『集注』は詳説にそれぞれ挙げる。花藥といえは、一般に芍藥のことだが、邵傳『集解』に藥欄の下に「花藥の欄なり。専ら芍藥を指さず」と注する。

（注18）『世說新語』汰修篇および『晉書』石崇伝に「客の為に豆粥を作り、咄嗟^{すなは}に便ち辨ず」と。

（注19）南宋・羅大經（字は景綸）の『鶴林玉露』地集卷三、詩犯古人の条に「近時、趙紫芝の詩に云ふ、一瓶の茶外祇待無し、

同じく西樓に上つて晚山を見る、と。世以て佳と為す。然れども杜少陵云ふ、嫌ふ莫かれ野外供給無さを、興に乗じて還

た來たつて藥欄を看よ、と。即ち此の意なり」という。趙紫芝は、「永嘉の四靈」の一人、趙師秀（号は雪秀。一一七〇

（一一一九）のこと。祇待は、もてなしの意。この記事は度会末茂『杜律評叢』にも挙げる。なお、『鶴林玉露』には、慶

安元年（一六四八）刊の和刻本があり、現在、汲古書院刊『和刻本漢籍隨筆集』第八集に影印を収む。

（注20）明・李于鱗（名は攀龍、号は滄溟。一五一四（一五七〇）の「冬日」詩（『滄溟先生集』卷十二）に、次のように見える。

客來堪自見 客來たれば自ら見ゆるに堪え
酒盡且須酤 酒尽されば且つ須らく酤ふべし

不是南山色 是れ南山の色ならざれば

貧家一事無し 貧家に一事も無し

(注21)

顧宸『註解』に「遠來公を訪ふ者は定めて俗客に非ず。公の詩に一飯未だ嘗て俗客を留めず、と。今、佳客に遇ふ、則ち淹留して日を竟ふること殊に厭はざるなり」という。宇都宮遯庵の増広本にも引く。なお、ここに挙げる杜甫の詩は、

「解悶」十二首其五（詳註卷十七、一〇〇三）で、

李陵蘇武是吾師 李陵蘇武 是れ吾が師

孟子論文更不疑 孟子 文を論じて 更に疑はず

一飯未嘗留俗客 一飯も未だ嘗て俗客を留めず

數篇今見古人詩 數篇 今見る古人の詩

とあり、原注に「校書郎孟雲卿」という。孟雲卿のことは、元・辛文房『唐才子伝』卷二に見え、『全唐詩』卷一五七に詩十七首を収める。この詩は、すべて孟雲卿について詠じており、「一飯未だ嘗て俗客を留めず」というのも、杜甫自身のことと言ったものではない。

(注22)

『唐詩貫珠』に「対起して下句句更に窃窺、致有^{おもむき}。三四接し得て自然。四句は一氣円靈、大家数」と。円靈は、円滑靈妙。

(注23)

『唐詩貫珠』に「少陵此等の詩、最も老煉為り。爐を起こし灶「竈」を立つるを用ひず。一味真色、自づから風神賦致有り。塵滓に染まらず、翻つて是れ造り難^{いた}きの境」とある。風神は、氣品。賦致は、きめ細やかな味わい。

《還》は、復である。《葉欄》は、花畑の囲いの柵。ここでは花をみるのを口実に、もう一度やつてくるのを願っている。けだし城市に住んでいれば、客をもてなすのに、咄嗟に弁ずることができようが、田舎暮らしの貧しい台所では、ことのほか《供給》に乏しい。客がさいわい嫌わなければ、ただちに《興に乗じて》《還た》（ふたたび）やって《来》て、庭の花をゆると《看》て、主^{あるじ}のもてなしを心ゆくまで受けてほしい。とりあえず賓客を心楽しませるのはこれしかないのだ。趙紫芝の詩に「一瓶の茶外祇待無し、同じく西楼に上つて晚山を見る」、李于鱗の詩に「是れ南山の色ならざれば、貧家に一事も無し」とあり、いずれもこの意である。公の詩に

「一飯も未だ嘗て俗客を留めず」というが、今は〈竟日〉〈淹留〉して〈坐〉しているのを喜び、さらに〈興に乗じ〉て〈還た来る〉のを望んでおり、特に〈佳客〉と称するゆえんである。一篇全体は、ありふれた言葉で平易に書かれている。一気円霊で、真に大家の作だ。読むと容易な作のようだが、かえって実際は到達しがたい境地である。

028 蜀相

漢ノ丞相諸葛忠武侯ノ廟、在^(注1)成都府ノ西北二里、昭烈廟ノ西^(注2)。公參謁^(注3)懷^(注4)古ヲ、敬^(注5)識^(注6)仰止之私^(注7)。但稱^(注8)

蜀相^(注1)、非^(注2)是^(注3)。説詳^(注4)ニ于古跡詩ノ注^(注5)。

(注1) 諸葛亮(字は孔明、一八一―二三四)のこと。忠武侯は、その諡。『三国志』卷三十五、蜀書五に伝がある。

(注2) 『方輿勝覽』卷五十一、成都府、武侯廟の項に「府城の西北二里に在り」と。錢注(卷十一)に挙げ、輯註(卷七)にこれを引く。宇都宮遯庵の増広本には輯誌を引く。

(注3) 昭烈は、劉備(字は玄德、一六一―二三三)の諡。『三国志』卷三十二、蜀書先主伝。

(注4) 『詩経』小雅・車輦に「高山仰止、景行行止」とあるのに基づく語。止は、語助字。景は、毛伝は大、鄭箋は明の意に解する。上文の行は、おこない。下文の行は、おこなう。朱子の集伝では、景行を大道の意とし、下文の行は、ゆく意に解する。

(注5) 104 「詠懷古跡」五首其四、東陽の詳解に次のように云う。

昭烈を称して蜀主と為すは未だ正しからざるなり。蜀は地の名、国号に非ざるなり。昭烈、漢を以て名のる、未だ嘗て蜀を以て名のらざるなり。主は君に次ぐの称。本と古卿大夫を称して主と為るに妨まる、亦た之を貶するなり。顧炎武日知録に云ふ、陳寿三国志を作り、先主後主の名を創立す。晋、魏の統を受け、義、両帝無きを以てなり。今千載の後、曹氏司馬氏の臣に非ずして、猶ほ此の称に沿ふは、殊に当らずと為す。況んや漢を改めて蜀と為す、亦た寿が筆に出づ。当時魏既に漢を篡し昭烈を改称して蜀と為し、漢の統に附することを得ざらしむ。異代の文人史家阿枉の故を察せず、杜甫

詩中の若きも、便ち蜀主と称す。殊に人を知り世を論ずるの学に非ざるなり。朱子綱目亦た帝禪を書して後主と為す。姚燧深く以て非と為す。元史の伝に見ゆ。諸葛孔明の書中、先主と称する者有るは、本と当に是れ先帝なるべし。亦た魏晋の人改めて先主と為す耳、と。此れ千古の格論なり。苟も名義の正しからざるは、學者宜しく辨明すべき所、惜しむらくは公亦た世俗の慣呼する所に習いて、未だ之を深く考へざるなり。

漢の丞相諸葛忠武侯の廟は、成都府の西北二里、昭烈廟の西にある。公は参詣拜謁して古を懐い、つつしんで敬仰の私心をしるした。ただ、〈蜀相〉と称するのは、よくない。そのことについての説は、「古跡」詩の注に詳し。

丞相ノ祠堂何ノ處ニ尋

錦官城外柏森森

※柏…ヒノキ

錦官城ハ原浣花村之地。官家織錦ヲ之處、故ニ名ツク。如ニ銅官鹽官之類^(注6)。後世遂ニ通シテ爲ニ成都府城ノ名^(注1)。今公所^(注4)言即指ニ浣花里^(注7)。水經^(注7)註ニ成都萬里橋ノ南岸道西有^(注8)城、故ノ錦官也。明一統志^(注8)ニ錦官城在ニ萬里橋南^(注1)、因^(注3)其有ニ錦官^(注1)故ニ名ツク。猶ニ合浦之珠官^(注9)也。潘岳懷舊^(注10)賦ニ柏森森トシテ以攢植ス、森森ハ林木秀聳之貌。武侯ノ廟前有ニ大柏^(注11)圍數丈、乃其所ニ手植^(注12)。至^(注13)唐^(注14)歷^(注15)コト年^(注16)五百餘歲、蜀人敬愛比^(注17)ニ孔廟之檜^(注18)。公ノ古柏行^(注19)ニ云、孔明廟前有ニ古柏^(注20)、柯ハ^(注21)青銅ノ根^(注22)、如^(注23)石ノ。霜皮溜^(注24)雨^(注25)四十圍、黛色參^(注26)天^(注27)二千尺。君臣已^(注28)與^(注29)レ時際會^(注30)、樹木猶爲^(注31)レ人ノ愛惜^(注32)セラル。雲來^(注33)氣^(注34)接^(注35)ニ巫峽^(注36)長、月出^(注37)寒^(注38)通^(注39)ニ雪山^(注40)白^(注41)。蓋其高大巍聳、所^(注42)謂喬木如^(注43)山^(注44)也。故^(注45)起頭特ニ舉^(注46)ニ其所^(注47)ヲ觸^(注48)目^(注49)。言欲^(注50)レ謁^(注51)セント丞相之祠^(注52)ニ、而未^(注53)知^(注54)レ所^(注55)ヲ之^(注56)ク、出^(注57)ニ浣花里^(注58)西^(注59)望^(注60)ハ、則^(注61)看^(注62)ニ大柏之森森^(注63)、無^(注64)復^(注65)煩^(注66)レ問^(注67)コトヲ于人^(注68)、此乃係^(注69)ニ其手植^(注70)ニ、便先遙^(注71)望^(注72)テ而恭^(注73)敬^(注74)ス之^(注75)也。

(注6) 『文体明弁』卷十五に、この詩を載せ、金官城の下に「成都府城の名。官家錦を織るの処、故に名づく。銅官塩官の類の如し」と注する。また『集千家註』(巻七)に引く孫季昭の説に「趙云ふ、或いは其の錦官有るを以てなり。銅官塩官の如し」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。孫季昭は、南宋・孫奕(字は季昭、号は履齋)のこと。その『履齋

示兒篇』卷十、詩説、錦官城の条に見える。なお、地名としての塩官が登場するのは漢代、西河郡に塩官が置かれている（『漢書』地理志下）のがその早い例である。また銅官については、杜甫に「銅官渚に風を守る」と題する詩（詳註卷二十二、一三八八）があり、そこに見える銅官渚（今の湖南省長沙市の西北）が挙げられよう。

(注7) 『水経注』卷三十三、江水の条に「大域の南門を江橋と曰ふ。橋南を万里橋と曰ふ。西上を夷星橋と曰ふ。下を竿橋と曰ふ。南岸道東に文学有り。（中略）学、夷星橋の南岸道東に移る。道西の城、故の錦官なり。言ふところは錦工錦を織れば、則ち之を江流に濯ふ。而して錦鮮明に至る。濯ふに他の江を以てすれば、則ち錦色弱し矣。遂に之に命づけて錦里と為すなり」と。輯註に挙げ、宇都宮遯庵の増広本に引く。

(注8) 『大明一統志』卷六十七、成都府の条。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。珠官は、もと真珠を採取する役所。三国・呉の時、同名の郡が置かれた。合浦は、今の広西省合浦県の東北。

(注9) 西晋・潘岳「懷旧の賦」（『文選』卷十六）に「墳累累として以て隴に接せり、柏森森として以て攢植す」と。潘岳、字は安仁（二四七〜三〇〇）。『晋書』卷五十五に伝があり、興膳宏編『六朝詩人傳』に訳注がある（齋藤稀史執筆）。ちなみに、李善注に「仲長子が昌言に曰く、古の葬、松柏梧桐を植えて以て其の憤に識す」と。なお、寛文版では柏字にカエと訓を施す。「懷旧の賦」は、輯註に挙げる。宇都宮遯庵の増広本には輯註を、詳説には『会粹』（巻八）に挙げるのを引く。

(注10) 顧宸「註解」に「儒林広義に曰く、成都先主の廟側に諸葛武侯の祠有り。祠の前に大柏有り。孔明の手植に係る。困數十丈」云々という。『儒林広義』は、北宋・田況の撰。『註解』は、宇都宮遯庵の両署にも挙げる。

(注11) 孔廟の檜については、明・謝肇淛「五雜俎」卷十、物部二に「孔廟の中の檜、周秦漢晋を歴て数千年、懷帝の永嘉三年に至って枯る。枯れて三百有九年、子孫之を守って敢へて動かさず、隋の恭帝義寧元年復た生ず」云々という記事があり、寺島良安『和漢三才図会』の檜の条にも引く。

(注12) 詳註卷十五、〇九三八。大暦元年（永泰二年十一月改元、七六六）、夔州での作。その冒頭八句。但し第一句目、〈古柏〉を〈老柏〉に作る。

(注13) 『唐詩貫珠』（卷四十五、古迹）に「蓋し樹は高大巍聳、濃映陰森たり」と。

(注14) 『広群芳譜』卷七十一、木譜四、柏の条に、『蜀都雜抄』の「蜀都大抵雨多く風少なし。故に竹樹皆修く聳ゆ。少陵の古柏二千尺、人其の瘦長を譏る。詩に固より放言有るも、之を要するに蜀産、他と迥かに異なる。柏の森森と謂ふ者は、惟

だ蜀のみ然りと為す。所謂喬木山の如き者、亦た惟だ蜀のみ然りと為す」というのを引く。南宋・范成大（字は至能、号は石湖居士。一一二六―一九三）の「晩に宜華の旧苑を歩む」詩（『石湖居士詩集』卷十七）の起句に「喬木山の如し麋苑の西」と見える。宜華苑は、蜀の後主が建てた宮苑。

（注15）『唐詩貫珠』に「二一、祠に天に参はる古柏有るに因つて、所以に特に其の目に触るる者を挙ぐ。言ふところは丞相の祠を尋ねんと欲し、止だ看る森森たる古柏の処、便ち是れなるを」と。

〈錦官城〉は、もと浣花村の地。官衙で錦を織っていた場所であることから、名がついた。銅官・塩官の類である。後世、そのまま通用して成都府城の名称となった。今ここで公が言うのは、ほかならぬ浣花溪を指す。『水経注』に「成都万里橋南岸の道西に城あり、故の錦官である」と。『明一統志』に「錦官城は万屋橋の南にある。そこに錦官が置かれたのに因んで名づけられた。合浦の珠官と同様である」と。潘岳の「懷旧の賦」に「柏森森として以て攢植す」とあり、〈森森〉は、林の木々が高くそびえているさま。武侯の廟前に大きな〈柏〉があり、幹まわりは数丈、これぞ武侯が手ずから植えたものである。唐の時代まで五百餘歳を経ており、蜀の人々は敬愛して、孔子廟の檜に比している。公の「古柏行」に云う、「孔明廟前古柏有り、柯は青銅の如く根は石の如し。霜皮雨を溜る四十圍、黛色天に参ず二千尺。君臣已に時と際会す、樹木猶ほ人の為に愛惜せらる。雲来たりて気は巫峡と接して長し、月出でて寒は雪山に通じて白し」と。けだし、その高大でそびえたつありさまは、いわゆる「喬木山の如し」というようなものであつたろう。されば冒頭、目に触れたものを特にとりあげているのである。ここで言う意味は、〈丞相〉の〈祠〉に拝謁しようと思ひながら、どこへゆけばよいのか場所を知らずにいた。浣花里を出て西のかたを望むと、大きな〈柏〉が〈森森〉と茂っているのが見えた。もはや人に尋ねるまでもない。これぞ〈丞相〉が手ずから植えられたものなのだ。きつそく遙か拝して敬慕の念を捧げた、ということである。

映^{スル}階^ニ碧^ニ草^ニ自^ニ春色^ニ 隔^ル葉^ヲ黃^ニ鸝^ニ空^ニ好^ニ音^ニ

此^レ方^ニ造^テ廟^ニ庭^ニ、記^ス其^ノ所^ヲ見^ル聞^ル。階^ハ承^ラ堂^ヲ葉^ハ承^ラ柏^ヲ、階^前ノ春^ノ草^ヲ、萋^{トシテ}凝^シ碧^ニ色^ヲ、林^間ノ黃^ニ鸝^ニ、載^ハ好^ニ其^ノ音^ヲ。自^ノ字^ヲ寂^ニ寞^ニ意^ヲ、空^ノ字^ヲ有^下使^誰ニ聽^ニ之^一恨^上、竝^ニ嘆^{シテ}其^ノ無^ニ情^一、不^レ勝^ニ感^ニ愴^ニ也。蓋^特ニ來^テ瞻^ル拜^ス、平^昔所^ニ欽^慕スル、有^ニ親^見スル^一之^思、而^ニ廟^庭寂^寥、容^不レ可^レ見^ル。所^ニ以^ニ感^{シテ}物^ニ惆^悵スル^一也。

(注16) 〈階〉字、錢注および輯註は〈塔〉に作る。音義同じ。

(注17) 『唐詩貫珠』に「言ふころは陰階前に映じ、草碧色^タ爲^リ。鶯鸝葉に棲み、載^{すなは}ち其の音を好くす。自の字寂寞の意。空字好字に与いて更に探し」と。「載^オち其の音を好くす」は、『詩經』邶風・凱風の「睨^{けん}皖^{かん}たる黃鳥、載^オち其の音を好くす」とあるのに拠る。睨皖は、双声の語で、毛伝に「好き貌」、朱子の集伝に「清和円転の意」。

(注18) 邵傳『集解』に「祠に入るの感なり。草自づから春色、鳥空しく好音。侯の音容聞見することを得ず矣」と。

これはちようにど廟庭にいたつて、その見たり聞いたりしたことを記している。〈階〉は〈堂〉を承け、〈葉〉は〈柏〉を承け、〈階〉前の春〈草〉は、さかんに〈碧〉色を〈凝〉らし、林間の〈黃鸝〉は、その〈音〉を〈好〉くしている。〈自〉の字には寂寞の意が、〈空〉の字には誰に聴かせようとするのか、誰も聴く者はいないのである。恨みの気持ちが進められている。ともにその無情なるを嘆じ、感傷にたえないのである。けだし、わざわざやってきて仰ぎ拝するのは、平生欽慕しているものを、實際自分の目で見るという思いがあるのだが、されど廟庭は寂寥として、武侯の音容は見ることができない。物に感じて悲しむゆえんである。

三顧^頻繁^{ナリ}天下^ノ計 兩朝^開濟^ス老臣^ノ心

出^師表^ニ先^帝不^レレ以^セ臣^カ卑^鄙ヲ、猥^自枉^屈シテ、三^タ顧^ニ臣^ヲ於^ニ草^廬之中^ニ、問^ニ臣^ニ以^ニ當^ニ世^ノ之^事ヲ。頻^繁、屢也。蜀^志費^禕傳^ニ以^ニ奉^{シテ}使^ヲ稱^レ旨^ニ頻^繁至^レ呉^ニ。晉^書刑^法志^ニ詔^旨使^レ問^ニ頻^繁。山^濤傳^ニ手^詔頻^繁。文^選庾^亮讓^ニ中^書令^ヲ表^ニ類^ニ繁^省闡^ニ。陸^雲夏^府君^誄類^ニ繁^幃幄^ニ。答^ニ兄^ノ平^原書^ニ錫^{コト}命^ヲ頻^繁。是^當時^ノ語[、]皆

有^ニ殷勤ノ意^一。唯費^ニ裨山濤^一二傳作^レ煩^ニ。蓋後人減^{シテ}筆^ヲ書^{スル}爾^{（注26）}。天下ノ計ハ言^ハ恢^ニ復^{スル}天下^一之計^上ヲ、即在^テ草

廬^ニ所^一問答^{セシ}、語^ハ在^ニ本傳^一、是也。兩朝ハ謂^ニ先主後主^一ヲ。開濟謂^ニ開基濟^一レ業^ヲ。晉書桓宣^{（注27）}傳^ニ開濟

素^{ヨリ}篤、又劉琨^{（注28）}傳^ニ琨忠良開濟。蜀志本傳^ニ先主疾篤、召亮^ヲ囑^{シテ}曰、君^カ才^十倍^{曹丕}、必能定^ニ大事^一ヲ。

若嗣子可^ハ輔^ク則輔^ヨ、不^ハ然^レ君可^ニ日取^一。亮泣^曰、臣敢^テ不^シ竭^ニ股肱^一之力^ヲ、致^ニ忠貞^一之節^ヲ、繼^ニ之^一以上^レ

死^ヲ。老臣ノ心ハ正指^レ此^ヲ也。二句言^ニ君臣ノ際會^一ヲ。先主^三タヒ顧^ニ孔明^一於草廬^ニ、而不^レ憚^ニ頻繁^一之勞^ヲ者ハ、

爲^下討^ニ滅^{シテ}逆賊^一恢^ニ復^{スル}天下^一之計^上。孔明受^テ恩^ヲ感激^シ、奉^{シテ}先後兩主^ニ、以^ニ天下^一爲^ニ己^一任^一、欲^下

以開^ニ基濟^一レ業^ヲ而報^{セント}其殊遇^ニ。即出師表^ニ所^一云、先帝臨崩^{（注30）}帥^{シテ}三軍^一、北定^ニ中原^一ヲ。臣^ハ以^ニ大事^一、臣受^テ命^一以來、夙夜

憂歎^ス。恐^レ託付^不シテ效^{アラ}、以傷^ニ先帝^一之明^上。今當^下焚^ニ帥^一三軍^一、北定^ニ中原^一ヲ。庶^ハ竭^{シテ}驚鈍^一ヲ、攘^ニ除^一

姦凶^一、興^ニ復^{シテ}漢室^一、還^ニ于舊都^一、此臣^カ之所^一以報^ニ先帝^一、而忠^中陛下^ニ之職分也。嗚呼、天若祚^{シテ}漢^ニ、

使^ニ斯人^一不^レ死^セ、則平^レ賊^ヲ撥^テ亂^ヲ、興^ニ隆^{セン}コト漢室^一、必^ス矣。結局所^ニ以痛歎^一也。

（注19）『三国志』諸葛亮伝および『文選』卷三十七。また『古文真宝』後集にも収む。

（注20）『三国志』卷三十七、蜀書十四。顧宸『註解』に挙げる。

（注21）『晉書』卷三十。

（注22）『晉書』卷四十三。

（注23）『文選』卷三十八。輯註や顧宸『註解』に挙げ、輯註は、宇都宮遼庵の増広本に引く。ちなみに、唐亮、字は元規

（二八九―三四〇）。『晉書』卷七十三に伝がある。

（注24）陸雲（字は士龍、二六二―三〇三）の「晋の故の予章内史夏府君の誄」（明・張溥編『漢魏六朝羣臣名家集』所収『陸

清河集』卷一）。伝は『晉書』卷五十四に見え、『六朝詩人傳』に訳注がある（木津祐子執筆）。

（注25）『陸清河集』卷二。平原は、陸雲の兄、陸機（字は士衡、二六一―三〇三）のこと。伝は『晉書』卷五十四に見え、『六朝詩人傳』に訳注がある（木津祐子執筆）。

〔注26〕清・顧炎武『日知錄』卷二十七、杜子美詩注の条に、「頻繁」の語について、詳解に引く『蜀志』費禕伝以下の用例を挙げ、その原注に「唯だ費禕山濤二伝、頻に作る。蓋レ後人筆を減じて書する爾のみ」という。

〔注27〕『晋書』卷八十一。輯註や顧宸「註解」に挙げ、輯註は、宇都宮遯庵の増広本に引く。

〔注28〕『晋書』卷六十二。顧宸「註解」に挙げる。劉琨、字は越石（二七一―三二八）、その伝は『六朝詩人傳』に訳注がある（湯淺陽子執筆）。

〔注29〕邵傳『集解』に「侯、既に先主に事へ、又た後主に事ふ。兩朝開濟、天下を以て己が任と為す。其の言に曰く、股肱の力を竭くし、忠貞の節を効して、之を繼ぐに死を以てせんと、真に老臣の心なり」と。

〔注30〕《獎》は、獎の訛字。

「出師の表」に「先帝、臣が卑鄙を以てせずして、猥りに自ら枉屈して、三たび臣を草廬に顧み、臣に問ふに當世の事を以てす」と。《頻繁》は、屢である。『蜀志』費禕伝に「使を奉じて旨に称ふを以て頻繁に呉に至る」、『晋書』刑法志に「詔旨問はしむること頻繁」、山濤伝に「手詔頻繁」、『文選』の庾亮「中書令を讓る表」に「省闔に頻繁」、陸雲の「夏府君誄」に「幃幄に頻繁」、「兄平原に答ふる書」に「命を錫ふこと頻繁」とあり、當時習見の語で、いずれも殷勤の意がある。ただ費禕・山濤の二伝では、頻に作る。けだし後人が筆を減じて省略して書いたのであろう。《天下の計》は、《天下》を恢復する《計》を言う。とりもなおさず草廬で問答した内容で、語は本伝にみえるのが、そうである。《兩朝》は、先主と後主とのこと。《開濟》は、基を《開》き業を《濟な》すこと。『晋書』桓宣伝に「開濟素より篤し」、また劉琨伝に「琨、忠良にして開濟す」と。『蜀志』本伝に「先主疾篤し。亮を召して囑して曰く、君が才、曹丕に十倍す。必ず能く大事を定めん。若し嗣子輔く可くんば則ち輔けよ、然らずんば君自ら取る可し。亮泣きて曰く、臣敢へて股肱の力を竭くし、忠貞の節を致して、之に繼ぐに死を以てせざらんや」と。《老臣の心》は、まさにこれを指すのである。この二句は、君臣の際会を言う。先主が孔明を草廬に《三顧》し、《頻繁》の労を憚らなかつたのは、逆賊を討滅し《天下》を恢復する

〈計〉のためであつた。孔明は恩を受けて感激し、先後両主につかえ、天下平定を己が任とし、基を〈開〉き業を〈済〉して、その殊遇に報いんとした。とりもなおさず「出師表」に云う「先帝崩ずるに臨んで臣に寄するに大事を以てす。臣命を受けて以来、夙夜憂歎す。託付效あらずして、以て先帝の明を傷らんを恐る。今当に三軍を奨帥し、北、中原を定むべし。庶はくは驚鈍を竭くし、姦凶を攘除し、漢室を興復して、旧都に還らん、此れ臣が先帝に報いて、而して陛下に忠する所以の職分なり」である。ああ、天がもし漢に福を授けて命脈を永らえさせ、この人を死なせずにといたら、賊をたいらげ乱をおさめて、漢室を興隆させることは必定であつたらうに。結句で痛歎するゆえんである。

出師未捷身先死ス

長使英雄一淚滿襟ニ

出如^{シテ}字^{注31}、不^一必^三讀^二去聲^ニ。本傳^ニ亮悉^{シテ}大衆^ヲ由^リ斜谷^一出^テ、據^リ武功ノ五丈原^一、與^ニ司馬懿^一對^ニ壘^ス於渭南^ニ。相持^{スルコト}百餘日、以^レ疾^ヲ卒^ス于軍^ニ。未^一ノ字^二先^一ノ字、無^レ限遺恨。淚滿^ハ襟^ニ不^レ勝^ニ慷慨^ニ也。武侯上^ニ出師ノ表^一大舉^{シテ}討^レ魏^ヲ、司馬懿畏^レ侯^ヲ如^レ虎^一、恢復之形、宛然在^レ目^ニ。奈何^一師未^レ捷而身先死^シ、侯之忠誠^{ニシテ}而功業不^レ就、使^ニ萬世英雄之輩^{ヲシテ}皆爲^ニ之^一痛歎^{シテ}不^レ能^一自己^一也。宋^{注33}宗忠簡臨^レ終^ニ誦^ニ此二語^一、亦可^レ悲哉。

〔注31〕 字の如しとは、一字に複数の字音がある場合、その本来の字音に従うことをいう。出師は、ふつうスイシと訓ずる。例えば、林羅山原解・鶴飼石斎増述「古文真宝後集諺解大成」に「出師表」を収め、「出、去声。韻会、凡物自出^ミ則^チ入声。音しゅつ訓いづる、使^テ之^ヲ出^サ則^チ去声、音すい訓いだす」と注する。韻会は『古今韻会舉要』のこと。

〔注32〕 邵傳『集解』に「大衆を悉くして斜谷を出で、司馬懿と渭南に壘を對するに及び、懿、侯を畏るること虎の如く、恢復の形、宛然として目に在り。相持すること百餘日、軍に卒す。毎に天下後世の英雄をして之を泣き自ら已むこと能はざらしむ。何ぞ復た漢の忠誠にして功業就らざるや。一字一淚」と。

〔注33〕 沈德潛『杜詩偶評』（卷四）に「宗忠簡終はりに臨んで此の二語を誦す」と。宗忠簡は、榮・宗沢（字は汝霖、一〇五九

（一一二八）のこと。忠簡は諡。義烏（浙江省）の人。元祐六年（一〇九二）の進士。当時、北方から圧迫を強めていた金に対して主戦論を主張し、岳飛（一一〇三—一一四二）の才を見出した。宋室南渡の後、開封を守って力戦したが、建炎二年その他に歿した。『宗忠簡公集』八巻がある。『宋史』巻三六〇、宗沢伝に「沢、前後上に京に還らんことを請ふこと二十餘奏、毎に潜善等の抑する所と為り、憂憤疾を成し、疽背に発す。諸將入りて疾を問ふに、沢矍然として曰く、吾れ二帝蒙塵せるを以て、積憤して此に至る。汝等能く敵を殲くさば、則ち我死すとも恨み無し、と。衆流涕して曰く、敢へて力を尽くさざらんや、と。諸將出づ。沢歎じて曰く、出師未だ捷たずして身先づ死す、長く英雄をして涙襟に満たしむ、と。翌日、風雨昼晦し。沢、一語も家事に及ぶ無く、但だ河を過ぎよと連呼する者三たびにして薨す」と。潜善は、黄潜善（字は茂和、？—一一二九）。『宋史』巻四七三、姦臣伝三に伝がある。二帝は、徽宗および欽宗。靖康の変（一二二七）で、金に拉致された。欽宗の弟、康王は南に逃れ即位して臨安（杭州）に都した。

〈出〉は、文字どおりで、必ずしも去声に読まない。本伝に「亮、大衆を悉して斜谷由り出で、武功の五丈原に拠り、司馬懿と渭南に対壘す。相持すること百餘日、疾を以て軍に卒す」と。〈未〉の字〈先〉の字に限りなき遺恨が込められている。〈涙襟に満つ〉は、慷慨にたえぬのである。武侯は「出師の表」を奉って、大軍を起して魏を討つことにしたが、司馬懿は侯を畏れること虎のごとくであり、恢復の形勢は、さながら目前にあった。いかんせん〈師〉が〈未だ捷たず〉して〈身先づ死〉し、侯の真心は誠実そのものでありながら功業は成就せず、万世〈英雄〉の輩に痛嘆してやまずにはおられぬようにさせたのである。宋の宗忠簡は臨終の際にこの二句を誦したが、やはり悲しむべきことである。

029 狂夫

感慨自遣^ル之作。盧元昌^{（注一）}云、因^テ草堂^二而興^ス感^ヲ。詩成之後、用^ニ末句^ノ狂夫^一爲^レ題^ト。非^レ咏^{スル}狂夫^一也。

（注一）『唐宋詩醇』（卷五）に挙げる。盧元昌、字は文子、号は半林居士。江蘇華亭（今の上海市）の人。伝は『国朝詩人徵略』

初編卷五に見える。康熙二十五年（二六八六）刊の『杜詩闡』三十三卷（現在、台湾大通書局刊『杜詩叢刊』に影印を収む）があり、その巻十一にこの詩を載せるが、それには見えない。なお、仇兆鰲の詳註（巻九）に、盧注として「此の詩草堂に困って感を興す。詩成るの後、末句の狂夫を用ひて題と為す」と。

自らの感慨を吐露して気晴らしをした作。盧元昌が云う、「草堂にちなんで感慨をおこした。詩ができてから、末句の〈狂夫〉を用いて題とした」と。狂夫を詠じたものではない。

萬里橋西一草堂 百花潭水即滄浪

※即：スグサマ

地ハ接^二萬里橋^一、名亦壯ナリ矣。而^{（注2）}么麼^一一草堂、僅^二容^レ身^ヲ寓止ス。已^二有^二自笑^一ノ意、感慨在^二言外^一。下半首自^レ此生^ス也。百花潭ハ浣花溪ノ一名。楚辭^{（注3）}ニ滄浪之水清ハ兮可^三以濯^二我纓^一。滄浪ハ水ノ名、在^レ楚^ニ、漢水之下流。禹貢^{（注4）}ニ汭水東流シテ爲^レ漢ト、又東シテ爲^二滄浪之水^一ト、是也。此言水之清者何^ソ必^シモ楚之滄浪。堂前ノ潭水即比^レ之^{（注5）}滄浪、可^二以濯^レ纓^ヲ矣。蓋夏^ニ日之作、故^二先言^三其占^二清涼^一。ト居^{（注6）}ノ詩^ニ亦稱^三澄江銷^二客愁^一、其澄清可^レ知已。

（注2） 么麼は、微小、卑微の意。么は么に同じ。

（注3） 『楚辭』 漁父篇。纓は冠の紐。

（注4） 『尚書』 禹貢に「嶓冢より漾を導く、東流して漢と爲る。又た東して滄浪の水と爲る」と。孔伝に「泉は始めて山より出て漾水と爲る。東南流して汭水と爲り、漢中に至り東行して漢水と爲る」という。

（注5） 『集千家註』（巻七）に「今、公、潭の清くして之を滄浪に比す可きを言ふなり」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

（注6） 前出 025 「卜居」詩。

地は〈萬里橋〉に接しており、橋の名も壮大である。されどちっぽけな〈一草堂〉で、やっとこさ我が身を容れて仮住まいしている。もうすでに〈自ら笑ふ〉意があり、感慨が言外に表れている。後半の四句はこれより生

じたものである。《百花潭》は、浣花溪の一名。『楚辭』に「滄浪の水清まば、以て我が纓を濯ふ可し」と。《滄浪》は、川の名。楚にあり、漢水の下流。《禹貢》に「沔水東流して漢と為り、又た東して滄浪の水と為る」というのが、それである。ここで言う意味は、水の清らかなのは何も楚の《滄浪》にかぎったことではない。堂前の《潭水》をそのまま《滄浪》に比し、纓を濯うことができるとしている。けだし夏日の作であろう、さればまずその清涼を独占することを言う。「卜居」詩にも「澄江客愁を銷す」と称している。その澄みきったありさまがわからうというものだ。

風含^テ翠篠娟娟^{トシテ}淨^{（注）} 雨浥^テ紅蕖冉冉^{トシテ}香^シ

※娟娟…クツキリトシテ 冉冉…シナヤカニシテ

含^ト者將^レ生^{セント}風^ヲ之^レ状。娟娟^ハ妍好ノ貌。浥^{（注）}溼也。冉冉^ハ弱^キ貌。因^テ謂^ニ香細^{ナル}ヲ。上句竹林輕風滴^リ翠^ヲ、

爽氣鮮新。下句蓮渚細雨溼^シ花^ヲ、清香幽深。皆寫^ニ出^ス活精神^ヲ、涼景浮^ニ動^ス言表^ニ。羅景綸云、上句風中有^レ

雨、下句雨中有^レ風、謂^ニ之^ヲ互體^ト。黃維章云、含^ノ字寫^ニ風竹ノ逸致^ヲ。若用^ニ吹^ノ字^ヲ便淺^シ。浥^ノ字寫^ニ雨蓮幽

韻^一、若用^ニ灑^ノ字^ヲ便俗^{ナリ}。娟娟冉冉、尤見^ニ狀^{スル}物^ノ之^レ妙^ヲ。竟^ニ如^ニ兩幅美人ノ圖^ノ。浥^一ニ作^レ裏^{（注）}、訓^レ包^ト。

猶^レ言^レ凝^{スト}耳。然^{トモ}竟^ニ不^レ若^ニ浥^ノ字^ニ也。

（注7）《淨》字、錢注（卷十二）および輯註（卷七）は《靜》に作り、輯註に「一に淨に作る」と注す。輯註は宇都宮遯庵の増

広本に挙げる。

（注8）例えば、『古今韻會舉要』に「説文に濕なり」。

（注9）羅景綸については、前出 027「資至る」詩の（注16）参照。その『鶴林玉露』巻七に見える。

（注10）黃維章は、明・黃文煥（字は維章）のこと。天啓五年（一六二五）の進士。周采泉『杜集書録』に拠れば、『杜詩聖碧』六卷がある。顧宸『註解』に「黃維章が曰く、是の詩を解する者謂^ハへらく、風、翠篠を含んで其れ淨くして娟娟たり、雨の潤す所なり。雨、紅蕖を浥^{うるは}して其の香冉冉たり、風の送る所なり。風中雨有り、雨中風有り、と。此の解甚だ佳なり。

吾れ謂へらく、杜が旨是の如からず。凡そ淨は雨従り説き、香は風従り説く。此れ常景常意のみ。必ず風従り淨を説き、雨従り香を説けば、乃ち常景を翻して新景と為り、常意を翻して新意と為る。此れ老杜物を観るに精しき処、雨の塵を洗ふ、淨からしむること風の塵を去るの捷なるに如かず。洗ふを待たずして淨し。含の字最も妙なり。恒に含むときは則ち恒に淨し矣。若し吹の字を用ふれば便ち稚なり。風中の花味、風の驅るに因つて遠く香し。雨中の花味、雨の積むに因つて倍ます深香有るに如かず。浥の字最も妙なり。弥いよ浥するときは則ち弥いよ香し矣。若し酒の字を用ふれば便ち俗なり。娟娟冉冉、尤も風雨中の篠簜の状を写出す。竹葉本と輕し。風之を含めば則ち益ます輕くして逸なり。故に其の逸致娟娟として妍を生ず。蓮苞本と重し。雨之を浥せば則ち益ます重くして垂る。故に其の体勢冉冉として婉弱なり。物を状するの妙、竟に兩幅の美人の図の如し」と。宇都宮遷庵の兩署にも、これを引く。

(注11) 〈浥〉字、諸本は〈裏〉に作り、例えば薛益『分類』の慶安四年刊本には「ツ、ンテ」と訓じている。

〈含〉とは、まさに風が生じようとする状態。〈娟娟〉は、みめうるわしきさま。〈浥〉は、湿である。〈冉冉〉は、かよわきさま。そこから、香のかそけきこと。上の句は、竹林にそよぐ輕やかな〈風〉が〈翠〉を滴らせ、爽やかな気が新鮮である。下の句は、渚の蓮にふる細やかな〈雨〉が花をうるおして、清らかな〈香〉がほんのりと漂う。いずれも生き生きとした姿を写し出し、涼しげな景色が言表に浮かび出ている。羅景綸が云う、「上の句は風のなかに雨が降り、下の句は雨のなかに風がある。これを互体という」、黄維章が云う、「〈含〉の字は、風にそよぐ竹の逸致を写し出している。もし吹の字を用いたとしたら浅くなる。〈浥〉の字は、雨に濡れる蓮の幽趣を写している。もし灑の字を用いたとしたら俗になってしまう。〈娟娟〉〈冉冉〉の語に、とりわけ形容の妙があらわれており、兩幅の美人画のようだ」と。〈浥〉は、一に〈裏〉に作り、つつむと訓ずるが、凝とは同義。されど結局は〈浥〉字には及ばない。

厚祿、故人書斷絶 恒^ニ饑^ル稚子色淒涼

※断絶…ミカギラレ

淒涼…アラザメタリ

前聯ハ直ニ跟シテ第二句ニ、言「清涼之境」^一。此ハ則承ニ起句ヲ、轉シテ入ニ感慨ニ。世情輕薄、富貴ノ舊友、書且斷絶、誰カ^{（注12）}宵^{（注13）}周急^{（注14）}。客居貧窮、粗糲充^{（注15）}饑^{（注16）}。子女枵腹、菜色淒涼、則澄江即滄浪^{（注17）}、不^{（注18）}復足^{（注19）}銷^{（注20）}客愁^{（注21）}一。風竹雨荷、亦何ニ爲^{（注22）}哉。

（注12）『論語』雍也篇に「君子は急に周して富めるに繼がず」とあり、朱子の注に「急は窮迫なり。周は足らざるを補ふ。繼ぐは餘有るに続く」と。

（注13）前出027「賓至る」詩に「百年粗糲腐儒の餐」とあり、「クロゴメメシ」と左訓を施す。

（注14）邵宝『集註』（卷二十二、宮室類）に「色淒涼とは、卑幼菜色有るを言ふ」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。菜色の語、『礼記』王制篇に「凶旱水溢有りと雖も、民に菜色無し」とあり、鄭玄の注に「菜色は、菜を食ふの色」という。また『漢書』翼奉伝に「連年飢饉、之に如ふるに疾疫を以てし、百姓菜色、或いは相食むに至る」と見え、顔師古の注に「人専ら菜を食ふ。故に飢膚青黄、菜色を為すなり」と。ちなみに東陽の『薈瓊錄』卷上に「饑顔ヲ菜色ト称スルハ、嘉穀ノ飯ニ乏シクシテ、専ヲ野菜植物ノミ食スレバ顔瘦セテ光沢ヲ失フ、ヒモジキ顔色ト云フコトナリ」云々という。

（注15）前出025「居をトす」詩に「更に澄江の客愁を銷する有り」と。

前の一聯は、ただちに第二句につづいて、清涼の境を言う。ここは起句を承けて、一転して感慨に入っている。世間の人情は輕薄で、富貴となった旧友からは、《書》すら《断絶》し、誰が困窮を救ってくれようか。旅住まいの貧乏暮らし、粗糲で飢えを充たしている。幼い息子やむすめたちは腹をすかせ、精氣なくひもじい顔色をしている。されば眼前の澄んだ江がそのまま《滄浪》だとしても、客愁を消すには充分ではない。風にそよぐ竹や雨に濡れる蓮の花が、いったい何の役に立つというのか。

欲^{（注23）}填^{（注24）}溝壑^{（注25）}惟疎放 自笑^{（注26）}狂夫老^{（注27）}更^{（注28）}狂^{（注29）}

※填…ウメタサ 疎放…ヤリバナシ 自笑…ワレナガラモオカシ

欲ハ猶^{（注30）}將^{（注31）}ノ也。言^{（注32）}勢欲^{（注33）}スルヲ及^{（注34）}ント也。填^{（注35）}溝壑^{（注36）}見^{（注37）}史記范雎傳^{（注38）}。言^{（注39）}身死^{（注40）}シテ無^{（注41）}收葬^{（注42）}スル者^{（注43）}、如^{（注44）}犬馬之

斃^{一カ}、棄^中戸^ヲ於溝壑^{上ニ}。疎放^ハ不^ニ拘^レ檢^一也。向秀思舊^{注18}賦^ニ嵇康^ハ志遠^{シテ}而疎[、]呂安^ハ心曠^ニ而放^{。公}詩每^ニ用^二疎放^一、蓋本^ニツク于此^ニ。惟字極^無可^ニ奈何^一之^{注19}意。蓋公生理艱窘、殆填^ニトス于溝壑^一、無聊極^{リス}矣。此實^ニ疎放之所^レ致^{ス、}然^不可^ニ奈何^一。亦惟疎放自遣^ル而已。安^ソ能復區區^{トシテ}局促^{セシ}。吾本狂夫疎放、今老^テ矻^レ愼^{ム、}乃矻^レ益^ク狂^{。不}惟人笑^一之^{注20}矣。嗚呼、公^{ニシテ}而落魄、一^ニ至^ニ于此^一哉。

(注16) 基づく所があるのか、不明。

(注17) 『史記』卷七十九、范雎伝に「范雎既に相たり。三稽、范雎に謂ひて曰く、(中略)使臣卒然として溝壑に填む。是れ事の知る可からざることの三なり」と。ちなみに、溝壑の語、『孟子』滕文公下に「志士は溝壑に在るを忘れず」と見え、『蒼瓊録』卷下に「転^ニ於溝壑^一トハ行斃^レ者トナリ果テルコトナリ、但シ自ラ転陷^{シテ}死スルニハ非ズ、其屍ヲ葬リ収ムル者ナク、犬猫ノ死シタル如クニシテ溝壑ヘ転ジ棄テラルルヲ謂フナリ」云々という。

(注18) 錢注に「向秀思旧の賦に、嵇は志遠くして疎、呂は心曠にして放、と。替者唐仲曰く、杜詩毎に疎放を云ふ、蓋し此れに本づく」と。西晋・向秀(字は子期、二二七?—二七二)の「思旧の賦」は、『文選』卷十六。唐仲は、明・唐汝詢(字は仲買、一五六四—一六六〇)のこと。五歳にして失明した。著に『唐詩解』五十卷がある。澤田瑞穂「盲詩人唐汝詢生卒考」(『中国詩文論叢』第一集、一九八二年。後に『閑花零拾—中国詩詞隨筆』研文出版、一九八六年に収録)参照。ちなみに、杜甫が他に「疎放」の語を用いるのは、

- ・「尊榮地の絶ゆるを瞻、疎放途の窮するを憶ふ」(『河南の韋尹丈人に寄せ奉る』詩、詳註卷一、〇〇三三)
 - ・「客礼疎放を容れ、官曹接聯す可し」(『嚴八閤老に贈り奉る』詩、詳註卷五、〇一七七)
 - ・「酒を嗜みて益ます疎放、琴を弾じて天壤を視る」(『八哀詩』其六、故著作郎貶台州司戸榮陽鄭公虔、詳註卷十六、〇九五〇)
 - ・「中原未だ兵を解かず、吾終に疎放なることを得んや」(『晚州に次す』詩、詳註卷二十二、一三八二)
- の四例である。このうち「八哀詩」の場合は、鄭虔について言う。

(注19) 『集千家注』に第七句に注して「極めて奈何す可きこと無し之意」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

(注20) 邵傳『集解』に「老いて更に狂すること此の如し、惟だ人笑ふのみならず、吾れも亦た自ら笑ふなり」と。

〈欲〉は、将とほぼ同義。勢いが及ぼうとするのをいうのである。〈溝壑に填む〉は、『史記』范雎伝に見える。死んでも葬ってくれる人がなく、犬や馬同然に屍を〈溝壑〉に棄てることを言うのである。〈疎放〉は、拘束されぬこと。向秀「思旧の賦」に「嵇康は志遠くして疎、呂安は心曠にして放」と。公の詩に〈疎放〉の語を用いるときは、けだしこれに基づいているのであろう。〈惟〉字は、まったくどうしようもないという意。けだし公は生計に苦しみ難儀し、〈溝壑〉に〈填〉む寸前で、どうにもこうにもやるせなさが極まっている。これは実に〈疎放〉なる性格が招いた結果なのだが、さりとてどうにもならないのだ。やはり〈疎放〉のまま憂さ晴らしをするしかないのである。どうしてちまちまとちぢこまっておられようか。自分はもともと〈狂夫〉で〈疎放〉の質、今は年〈老〉いて慎むべきなのに、かえって〈更〉にますます〈狂〉してきた。他人様が物笑いにするばかりか、まことに〈自〉らそのことが〈笑〉えてくる。ああ、公ほどの方でも落魄して、こんなふうになでなられるのか。

030 江村

同前（前に同じ）

清江一曲抱^テ村^ヲ流^ル

長夏江村事事幽^{ナリ}

※幽…シツカ

綠水抱^テ村^ヲ而曲^ル。公ノ廬在^ニ其處^ニ、占^ム佳境幽趣^ヲ。而長夏悠悠、事事幽閑、聊亦足^ニ以自娛^ニ也。

みどりの水が〈村〉を〈抱〉いて湾曲している。公の草堂はそこにあり、景勝の地の静かなたずまいをひとり占めしている。〈長夏〉の一日はのどかで、〈事事〉ひっそりかんとしており、まずは自ら娛しむのに充分である。

自去^リ自來^ル堂上^ノ燕^{（注1）} 相親^ミ相近^{ツク}水中^ノ鷗

※自去自來…インダリキタリ 相親相近…ナレクシクヨリクル

燕^{（注2）}不^レ嫌^ニ貧家^ヲ一^{（注3）} 鷗忘^レ機^ヲ 相馴^ル、正^ニ是事事幽^{ナリ}。蓋亦賓朋斷絶、閒暇悠悠、惟鷗燕日^ニ與^ニ作^レ緣耳。曰自

去自來、曰相親相近、不^レ似^ニ世情^ノ炎涼^ニ、隱^ニ然^{タリ}言表^一矣。

（注1）〈堂〉字、輯註（卷七）および詳註（卷九）は〈梁〉に作る。薛益『分類』（卷一）、顧宸『注解』も同じ。

（注2）前出026「堂成る」詩に「頻りに来る語燕新巢を定む」と。

（注3）鷗は機心のない人へのみ馴れるという。001「張氏の隱居に題す」詩の（注27）（注28）参照。

（注4）顧宸『註解』に「黃漢臣が曰く、〈自去自來〉の二句を味はふに、隱然として賓朋斷絶、車馬寂寥の感有り」云々と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〈燕〉は、貧家を厭わず巢をつくり、〈鷗〉は、機心を忘れ馴れている。まさしく〈事事幽〉なることである。けだしやはり賓客朋友とはさっぱり行き来が途絶えているが、暇な時をのんびりとすごし、ただ〈鷗〉や〈燕〉と日々縁をなすばかりだ。〈自ら去り自ら来る〉といい、〈相親しみ相近づく〉というのは、貧賤をうとんじ勢利になびく世間の人情とはまるつきり異なっていることが、隱然として言外にあらわれている。

老妻畫^レ紙^ニ爲^ニ棋局^ヲ 稚子敲^テ針^ヲ作^ニ釣鉤^ヲ

亦言^ニ事事幽^{ナルヲ}。是村家之態。然^{トモ}貧陋寒酸、多少ノ感愴。往日儼然^{タル}拾遺公ノ夫人郎君、今^ハ則眞^ニ是村婦

野兒。公愍然傍觀、情何^ヲ以堪^シ。抑^{／＼}亦隨^レ分^ニ爲^レ娛^ヲ、安^ニ其^所ニ^レ遇、聊自慰^{スル}已。公ノ夫人楊氏、司農

少卿怡^{（注5）}ノ女也。子二人、宗文宗武。為^ニ一作^レ成^ニ。

（注5）元稹の「唐檢校杜工部員外郎墓係銘並びに序」に「夫人は、弘農楊氏の女、父を司農少卿怡と曰ふ。四十九年にして終はる」と。司農少卿は、穀物倉庫の管理を掌る司農寺の次官で、品階は從四品上。

なお、陳貽焮『杜甫評伝』下巻の第二十章第九節には、開元二十九年（七四二）杜甫が三十歳、楊氏が十九歳前後の時

に結婚したと推定し、楊氏は杜甫より後に卒したとする。その結婚を開元二十九年に繫年するのは、四川省文史研究館編『杜甫年譜』、馮至『杜甫伝』（人民文学出版社、一九五二年）、郭沫若『李白与杜甫』（人民文学出版社、一九七一年）の「李白杜甫年表」や莫励鋒『杜甫評伝』（『中国思想家評伝叢書』、南京大学出版社、一九九三年）に附された「杜甫簡譜」なども同じで、これが通説となっている。それに対して、王輝斌「杜甫妻室問題索隱」（『大慶師專學報』一九九一年第一期）後に『唐代詩人婚姻研究』収録、群言出版社、二〇〇四年）では、楊氏は開元五年（七一一）頃に生まれ、開元二十二年（七三四）杜甫が二十三歳、楊氏が十九歳の時に結婚したとするほか、楊氏は大暦元年（七六六）頃に卒し、大暦二年に杜甫は夔州の卓氏と再婚したという新説を提示している。

〔注6〕「詩聖杜文貞公伝」の〔注36〕に挙げた陳文華『杜甫傳記唐宋資料考辨』第一篇〈家族資料之考訂〉には、宗文は天宝九載（七五〇）、宗文は天宝十二載（七五三）生まれと推定されており、それに従えば、この詩が作られた上元元年（七六〇）当時の子供たちの年齢は十一歳と九歳とになる。

〔注7〕 錢注（卷十一）および輯註に「一に成に作る」と注する。詳註（卷九）も同じ。輯註は、宇都宮遯庵の増広本に挙げる。やはり『事幽』なるを言う。これは村家の様子。されど貧乏でわびしく、少なからず感慨や悲哀がある。そのかみは押しも押されぬ拾遺殿のお内儀と若様が、今ではすっかり田舎婆さんと山家育ち。公は憐れんで傍からみているのだが、その心持ちどうやって堪えられよう。そもそもやはり分にしたがって娛しみを見いだし、境遇に甘んじて、なんとか自らを慰めるばかりだ。公の夫人楊氏は、司農少卿怡の女である。子は二人、宗武と宗文。〔為〕字、一に〔成〕に作る。

多病所^レ須^ル惟^ル藥物 微軀此外復何^ヲ求^{メン}

※所須…ナクテナラスハ 何求…ナニモイラス

須待也、用也。猶^{（注8）}云^レ仰^レ給^ヲ也。公既^ニ爲^ル隱士^ト、無^ニ復求^ニ於世^ニ。但以^ニ身多病^{ナルヲ}、憑^ニ杖^ス藥物^ニ、故^ニ獨此一種未^レ能^レ無^{コト}求耳。言^ニ遺^テ世^ヲ無欲澹然自安^{スルヲ}也。文苑英華^{（注9）}第七句作^四但有^ニ故人^ノ供^ニ祿米^{一ヲ}。蓋言^ニ

嚴武之惠^ヲ。或^ハ初臺乃然^{リシ}歟。

(注8) 例えば、『字彙』の須字の条に「又た待なり、資なり、用なり」と。

(注9) 輯註に「英華、但だ故人の禄米を供する有りに作る」と。宇都宮遯庵の増広本もこれを挙げる。英華は、『文苑英華』。

北宋の李昉・宋白らの奉勅撰による六朝梁から晩唐五代までの詩文の総集。全千卷。その卷三一九に見え、「集は多病須^{もち}ふる所は唯だ薬物に作る」と注する。詳註は英華に従う。但し、詳註に拠る鈴木虎雄注は、諸本に従いこれを改める。

〈須〉は、待である。用である。給を仰ぐというのとほぼ同じ。公はすっかり隠士となつてしまつており、もう世に〈求〉めるものはない。ただ〈多病〉の身であるので、〈薬物〉にやつかいになつており、されば、こいつだけは〈求〉めないわけにはいかぬのだ。世間のことなど忘れはて、まったく無欲で自ら安んじていることを言うのである。『文苑英華』では、第七句を「但だ故人の禄米を供する有り」に作る。けだし嚴武からの恵みを言うのであろう。ひよつとすると初稿ではそうなつていたのであろうか。

この本は二宮俊博が生前執筆し相山大学の研究誌に発表した「津阪東陽『杜律詳解』」を本人が加筆修正したものを基にしています。

1頁の「はじめに」から105頁の「006」の終わりまでは、二宮俊博本人が一度校正をして修正したのですが再校正はなされておらず、106頁から始まる「007」以降は二宮俊博からの校正が返ってくることはありませんでした。

掲載されていない「031」以降（手許に残る資料では「138」まで）は加筆修正された原稿は少なく、これ以上の編集は断念いたしました。

以上により著者が意図しない間違いが多くあるものと思われるだけでなく、中途半端な形で終わっていることをご理解ください。

二宮 俊博（にのみや・としひろ）

1953年、愛媛県北宇和郡広見町（現、鬼北町）生まれ。
大阪市立大学文学部中文卒、九州大学大学院博士課程中退。
椙山女学園大学短期大学部講師，同助教授を経て、
椙山女学園大学文化情報学部教授就任。
〔論文〕「白居易の恋愛体験とその文学」（岡村繁教授退官
記念論集『中国詩人論』所収。汲古書院、1986年）、「詩
人の墓 ― 中晩唐期における前代の詩人評価に関して」（林
田愼之助博士古稀記念論集編集委員会『中国読書人の政
治と文学』所収。創文社、2002年）、「明治の漢詩人中野
逍遙とその周辺 ― 『逍遙遺稿』札記」（知泉書館、2009年）
ほか。

| | |
|-----|---------|
| 著 者 | 二 宮 俊 博 |
| 発行者 | 二 宮 幸 夫 |
| 印 刷 | 二宮印刷工房 |
